笛」(名) くさかりわらはなどの吹く笛。 ――わらは〔ワラハ〕[草刈童](名) 草を刈る童子。

くさ-がれ[草枯](名) ㊀草の枯るゝを。「―の蹤に殘る」。㊁草の枯るゝ時節即ち秋季。「―の頃」。

くさ-かんむり[草冠](名) 漢字の冠の名、花・草などの字の上にある艹の字。さうかう。

くさ-ぎ[臭木](名) 【植】馬鞭草科に屬する草、山野に生ず、葉は卵形にして尖り短毛を有す、聚繖花序は枝の上部に位して散在せる花より成り、萼は膨大し、花冠は白色にして紅色を帶ぶ、嫩葉は食用に供せらる。(海州常山)。

くさ-ぎり[臭桐](名) 【植】「くさぎ」の一名。

くさ-ぎる〔らりるるれれ〕[耘](他、ら四) 田畑に生(オ)ふる雜草を除き去る。

〜**くさ-くさ**(名、副) 倦み厭きたるさまにいふ語。「厭きて、―する」。

くさ-ぐさ[種種](名、副) 物事の品數の多きさまにいふ語。いろいろ。さまざま。「―の品」。「―供へて」。

＋**くさ-くだもの**[草果物](名) 草に生じたる果實の食ふべきもの、胡瓜(キウリ)又は南瓜(ボウブラ)の如きこれなり。「其―を奉りて踊らましかば」。(蔵)。

くさ-けづり[草刪](名) ㊀くさをけづり去ること。又、其人。㊁草をけづるに用ふる具、ワの字形をなす鐵器にして、これに柄をつく。

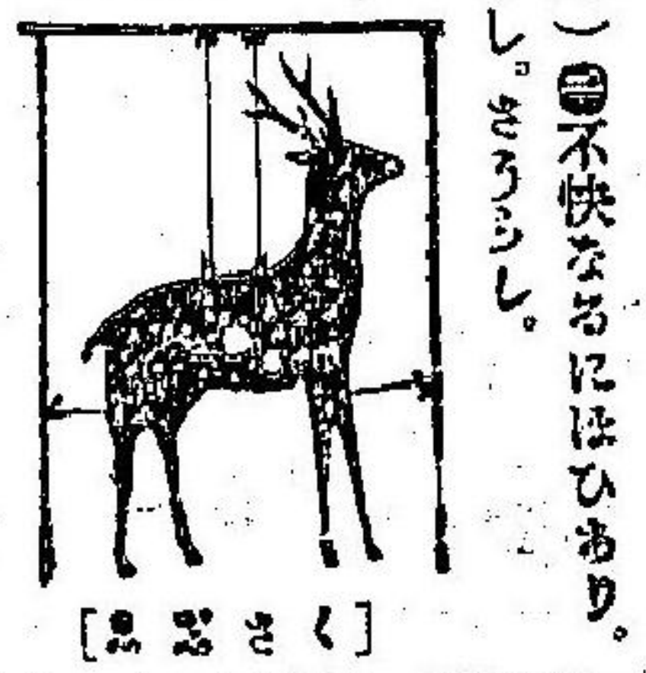
くさ-ごえ[草肥](名) 植物を田圃に鋤(ス)き込みて肥料となすもの、綠肥又は苗肥といふ、豆科に屬する植物最も適當なりといふ。

くさ-さ[臭](名) 臭くある度合。

くさ-ざうし〔ザウ―シ〕[草雙紙](名) (初めの印刷は極めて粗惡にして、あさくさ紙を用ひ、一種の惡臭ありしため、臭草紙といひしより轉ずともいひ、又、草假名にて書きしよりの名なりともいふ)德川時代に行はれし一種の短篇小說、多くは平假名のみにて書き、中に挿畫(サシヱ)あり。

くさ-し〔くしきけれ〕[臭](形、二) ㊀不快なるにほひあり。㊁其如くに見ゆ。然るらし。さうらし。

くさ-じし[草鹿](名) 草にて鹿の形をつくりたるもの、古昔、武士がこれを獸類に擬し、的(マト)となして射術を學ぶに用ひたり。


[くさじし]

くさ-す〔さしすせせ〕[腐](他、さ四) あしざまにいひなす。けなす。そしる。(誹)。

くさ-ずり[草摺](名) (裾にて草を摺る故にいふ)鎧の腰より以下を覆ふ部分の稱、數枚に分る。

くさ-だか[草高](名) 大小名の領地内の米の收穫の總高、其内より現石(ゲンコク)と稱して領主に納め、其殘餘は人民の所得としたり。

くさ-だち[草立](名) 草の生(オ)ふること。

くさ-だち[草質](名) 木草類にて、灌木などの草の性質を有せるものゝ稱。(草本)。

くさ-だんご[草團子](名) あんこに餅草を搗(ツ)き混(マ)ぜてこしらへたるだんご。

〜**ぐ-さつ**[愚察](名) 自分の推察の謙稱。

＋**くさ-づき**[草津月](名) 陰曆八月の異稱。

くさ-とり[草取](名) ㊀草を取り去ること。又、草を取る人。「田の―」。㊁草を取るに用ふる具、形はくまでに似る。

くさなぎ-の-つるぎ[草薙劍](名) 三種の神器の一、素戔嗚尊がきり殺したまひしやまたをろちの尾より出でたりといふ劍にて、もと叢雲劍(ムラクモノツルギ)といひしが、日本武尊これを佩(オ)びて東征したまひ、途中にて賊の詭計に陷り火攻にあひたまひしとき、これを以て草を薙(ナ)ぎたまひしより草薙劍といふ、其後熱田の神宮に奉祀す。

くさ-の-いほ〔イホ〕[草庵](名) ㊀くさぶきのいほり。㊁いぶせきいほり。 ――り[草庵](名) 前條に同じ。「料」。

＋**くさ-の-かう**〔カウ〕[草香](名) 草より取りたる香料。

くさ-の-かげ[草陰](名) ㊀草の生ふるかげ。㊁くさばのかげ。

くさ-の-しる[草汁](名) 一種の顏料、雌黃と藍蠟とを混じたるもの。

＋**くさ-の-て**[草手](名) 平假名の古稱。

＋**くさ-の-とざし**[草扃](名) くさを編みてつくりたるとざし。轉じて、いぶせきすまひ。「原」。

くさ-の-はら[草原](名) 草の生(ハ)えわたる野。

くさ-の-まくら[草枕](名) 「くさまくら」に同じ。

くさ-の-み[草實](名) 「くさだもの」に同じ。

くさ-の-むしろ[草筵](名) ㊀＋草のよくはえそろひたるを筵にたとへいふ語。㊁草を筵のかはりに布きて坐すること。

くさ-の-や[草屋](名) くさぶきの家。

くさ-の-わう〔ワウ〕(名) 【植】罌粟科に屬する草、葉は羽狀複葉にして小葉は缺裂す、花は繖形花序に排列し四個の瓣を有す、花柱短し、有毒植物なれど藥用に供せらる。(白屈菜)。

くさ-ば[草葉](名) 草の葉。 ――の-かげ[草葉陰](名) 墓所の下。「親は―で泣く」。

くさ-ばうき〔ハウキ〕[草帚](名) 帚草又はさびがらなどにて造りたるはうき。

くさ-ばな[草花](名) ㊀草に咲く花。㊁花の開くべき草。

＋**くさ-はひ**〔ハヒ〕(名) 物の種となるべきもの。「物定まらん―なるべき」。

くさ-はら〔ハラ〕[草原](名) 草の生じたる野。

くさ-び[楔](名) ㊀V字形の木片又は金屬片にして、木石を裂き又は重き物を押し上ぐるに用ふるもの、薄き程力少くしてよく其用をなす。又、物と物との合せめの離れぬために、兩方へ跨らせて打ち込むにも用ふ。㊁車輪の脫落を防ぐために、軸の端の穴に挿(サ)すもの。(轄)。㊂物と物とをつなぎとむるもの「あひの―」。

くさ-び[草火](名) くさをもやす火。

くさ-びえ[草稗](名) 【植】「いのびえ」の一名。

(名)「はぐさ」の一名。

くさ-ひとがた[草人形](名) 古昔、祭事などに用ひし藁人形。わらにんぎやう。(芻靈)。

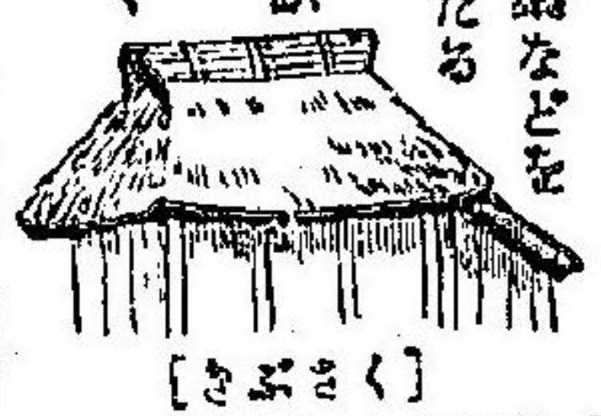
くさ-ひば(名) 【植】「いはひば」の一名。

くさ-びら[草片](名) ㊀＋あをもの。やさい。蔬菜。㊁きのこ。たけ。(菌)。 ――いし[草片石](名) 【動】珊瑚の類、海中の石に生ず、形きのこを積み重ねたるがごときもの。(石芝)。

くさ-ぶえ[草笛](名) 「くさかりぶえ」に同じ。

くさ-ぶか-し〔くしきけれ〕[草深](形、二) ㊀くさだち茂げし。くさしげし。㊁ひなびたり。ゐなかなり。米閑なり。「くさぶかきこの在處」。

くさ-ぶき[草葺](名) 茅又は麥藁などを以て屋根を葺(フ)くこと。又、其葺きたる屋根。


[くさぶき]

＋**くさ-ぶし**[草臥](名) 野山に臥すこと。「小野の―ふしわびて」。

くさ-まくら[草枕](名) たびまくら。たびね。

くさ-まくら[草枕](枕) 「旅」に冠する詞。

くさ-み[臭](名) くさきこと。くさき氣。

くさ-むすび[草結](名) ㊀山野の路案內などをなすに、草を結びて路を記すこと。㊁轉じて、先導して事を創(ハジ)むること。さきだち。

くさ-むら[叢](名) (草群の義)草の生(オ)ひ繁(シゲ)りたるところ。

くさ-め[嚏](名) 鼻の神經が、急に刺戟を受けて俄かに聲を發すること。くしやみ。

くさ-もち[草餅](名) 餅米によもぎの葉を混(マ)ぜて搗きたるもち、中にはおほばがらし又はつばきの葉などにて色を付けたるもあり。よもぎもち。

＋**くさ-もちひ**〔チイ〕[草餅](名) 前條に同じ。

くさ-や[草屋](名) ㊀まぐさを貯藏する所。㊁草葺(クサブキ)の家屋。かやゝ。わらや。かやぶき。

くさら-かし[腐](名) ㊀腐らすこと。㊁ものを腐らすに用ふる藥劑。

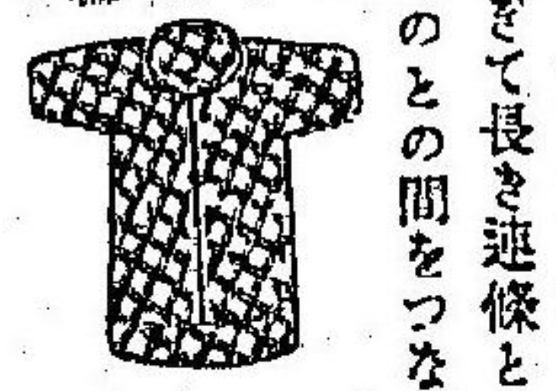
くさら-か-す〔さしすせせ〕[腐](他、さ四) くさらす。

くさら-す〔さしすせせ〕[腐](他、さ四) くさるやうにす。くされしむ。

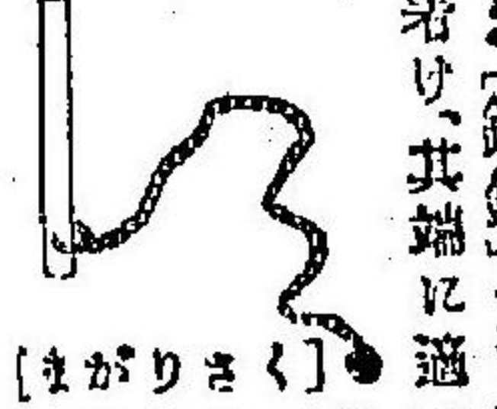
くさり[腐](名) ㊀くさること。「―が早い」。㊁くさりたる部分、くさりたる度合。

くさり[齣](名) 音曲・遊藝又は講談などの段落。きり。「淨瑠璃一―」。

くさり[鏈、鎖](名) ㊀環と環とを貫き繫ぎたるもの。又、環と環とを數多く貫き繫ぎて長き連條となせるもの。(鏁、瑣瑠)。㊁ものとものとの間をつなぎつゞくること。又、ものとものとの間をつなぎつゞくるに用ふるもの。きづな。 ――かたびら[鏈帷子](名) 小さき鏈を編みつらねてつくりたるかたびら、


[くさりかたびら]

昔時の戰爭又は斬合などのときに、上着の下に着用せしもの。(鎖子鎧)。 ――がま[鏈鎌](名) 昔時の一種の武器、鎌に長き鏈を着け、其端に適當なる鐵丸を着けたるもの、其鐵丸を投げかけて敵の武器を卷き取り、鎌を以て敵の首をかき切るなどに用ふ。 ――だい[鏈題](名) 一人の詠みたる歌の末の句をとりて、これを始めの句として次の人が歌を詠むこと。又、前の歌の末の句をとり、これを始めの句として次の歌を詠むこと。 ――ばかま[鏈袴](名) くさりかたびらの如くに造りたる袴にて、昔時、戰爭又は斬合などのときに用ひしもの。 ――れんが[鏈聯歌](名) 多人數にてよく聯絡するやうに詠む聯歌。


[くさりがま]

くさり-[腐](接頭) 或語に冠し、よからぬ意又はさげしみの意を表はす語。「―女」。「―男」。

＋**くさ-る**〔らりるるれれ〕[繼](他、ら四) つなぐ。つゞく。

くさ-る〔らりるるれれ〕[腐](自、ら四) ㊀たゞれうむ。あざれやぶる。「溫氣で―」。㊁金屬銹蝕せられて全く用をなさず。「鐵が―」。㊂すべて物の化學的變化によりやぶれくづるゝにいふ。「材木が―」。㊃用に堪へず。又、くづれやぶる。「性根が―」。

くされ[腐](名) ㊀くさり。㊁物をうちすてゝ、其成り行きに任すること。「ふて―」。「いつその―」。

くされ-[腐](接頭) 或語に冠し、よからぬ意又はさげしみの意を表はす語。「―儒者」。「―文章」。「―緣」。

くされ-だま[草連玉](名) 【植】「ゆわうさう」の一名。

〜**くされる**[腐](自) 「くさる」の訛。

くさ-わけ[草分](名) ㊀草のある所を分け行く

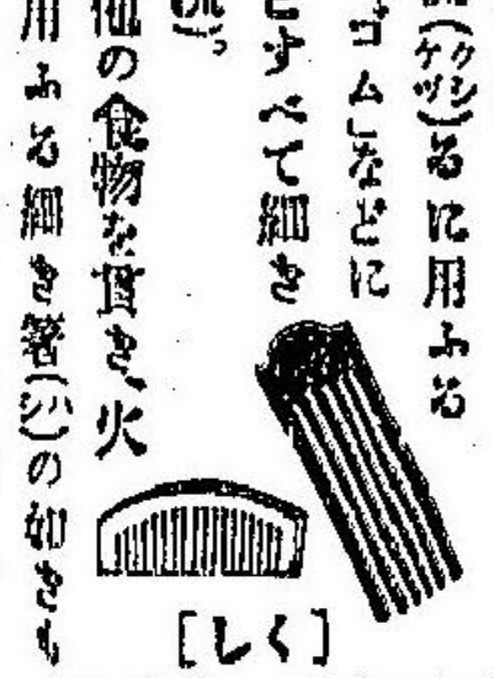
と、「一衣」。㊁草の生じたる地を切り開くこと。荒地の開拓。㊂事を創(ハジ)め行ふこと。(首唱)。――どろも[草分衣](名) 草の生じたる所を分け行くに着用する衣服。

十くさゐ-なき[草居鳴](名)【動】「ゐの出居」の一名。

十くし[首](名) かしら。かうべ。「佛の御―」。

くし[髮](名) かみ。頭髮。「御―のかゝりば」。

くし[櫛](名) 毛髮を梳(ケヅ)るに用ふる具。黄楊(ツゲ)・竹・骨・鼈甲・「ゴム」などにて造る、其形種々あれどすべて細き齒の櫛(ナラ)びあるもの。(梳)。



[くし]

くし[串](名) ㊀魚肉其他の食物を貫き、火に炙り又は日に晒すに用ふる細き箸(ハシ)の如きもの。「爪―」、「蒲燒―」。㊁すべて細長くして物を貫くに用ふるものゝ稱。「―を刺す」。

（**く-し**[驅使](名) おひつかふこと。

（**く-し**[苦使](名) むごきおひつかひ。

（**く-し**[苦思](名) いろ〳〵と心を苦しめおもふこと。くるしきおもひ。

くし-し（しく・しき・しけれ）[奇](形、二) ㊀不思議なり。靈妙なり。たへなり。㊁あやしむべし。あやし。㊂珍奇なり。めづらし。

くじ[鬮](名) 木片・紙片其他何によらず數ある細片をあつめ、これに標記をつけおきて、人に其中の一を抽(ヌ)きとらしめ、其標記によりて、吉凶勝敗其他物事を判定するもの。(籤)。

（**く-じ**[九時](名) 一時より數へて、九番目に當る時の稱。午前と午後とにあり。昔時の時刻にては、巳の上刻と亥の上刻と。

（**く-じ**[九字](名) 臨兵鬪者皆陣列在前の九箇の字の稱。もと陰陽道にて用ひ、後に兵家及修驗道に移り、唱へて神秘の威力を有する護身の秘語となす。――きる 九字を唱へつゝ、指にて空中をたてよこに切るが如くしてまじなひをなすをいふ。斯くすれば強敵も惡魔も恐るゝに足らずといひ傳へり。

（**く-じ**[公事](名) ㊀おほやけの儀式。朝廷にて行はるゝ事柄。㊁訴訟。㊂表立ちたる事柄。

くじ-あたり[鬮中](名) くじをひきて、定めのくじにあたること。

くし-あはび（ワビ‐アワビ）[串鮑](名) 串にさして干(ホ)したるあはび。

十**くし-うら**[櫛占](名) 古昔、くしにて行ひしうらなひ。

くじ-か[麝](名)【動】偶蹄類中麝鹿科に屬する獸、鹿より小さく角無し、毛は黑く、皮極めて柔かにして種々の用に供せらる。(麝)。

くし-がき[串柿](名) 串に貫きて乾したる柿の稱。(乾柿)。

くし-がた[櫛形](名) ㊀古代の櫛の背の形。㊁壁にくしがたにあけたる出入口。くわとうぐち。

くじ-かた[公事方](名) 徳川時代の訴訟吟味の役。

くじ-く（け・け・く・くる・くれ・けよ）[挫、折](自、か下二) ㊀折れいたむ。まがり碎(ク)く。㊁勢ぬく。よわる。はゞむ。㊂つまづく。たふる。

くじ-く（か・き・く・く・け・け）[挫、折](他、か四) ㊀折り傷つく。まげ碎く。「骨を―」。㊁勢を抑ふ。おさふ。よわむ。㊂うちつけて其人の罪過を詰責す。なじる。「まのあたりこれを―」。㊃つまづかす。たふす。

くし-げ[櫛笥](名) 櫛を入れおく筥。くしばこ。

くし-けづる（ら・り・る・る・れ・れ）[梳](他、ら四) ㊀櫛にかけて毛髮をとゝのへをさむ。すく。㊁けづり除く。「兇を發り發を―」。

〔**くじ-ける**[挫](自) 「くじく」の訛。

くし-こ[串海鼠](名) 串にさし貫きたるいりこ。

くし-ざし[串刺](名) ㊀梟首すること。獄門。㊁串に刺し貫くこと。「―の魚」。㊂すべて魚を刺し貫くが如くに、物を刺し貫くこと。

くし-ざ-す（さ・し・す・す・せ・せ）[串刺](他、さ四) くしざしにす。

くじ-し[公事師](名) 他人の代理となりて、其訴訟をあつかふ人。辯護士。代言人。

くし-だうぐ（ダウ‐ドウ）[櫛道具](名) 髮を結ぶに入用なる道具。

（**ぐ-しつ**[愚室](名) 自分の妻の謙稱。

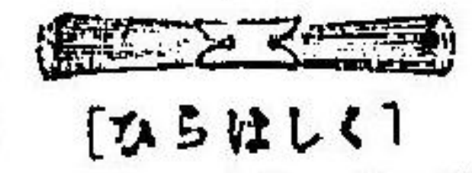
〔**くじ-づよ-し**（く・し・き・けれ）[鬮强](形、二) くじをひくたびに、よく利益あるくじをひくにいふ。

くじ-どり[鬮取](名) くじをひくこと。くじをひきて事を決すること。

くじ-ば[公事場](名) 訴訟を裁判する所。

くし-ばこ[櫛匣](名) 櫛を入れおくはこ。くしげ。

くし-はらひ（ハラヒ‐ハライ）[櫛拂](名) 櫛の垢を去る刷毛(ハケ)。



[くしはらひ]

十**くし-び**[靈](名) たへなること。靈妙。

くし-びき[櫛挽](名) 櫛をつくる職人。

くじ-びき[鬮引](名) くじとり。

くじ-ぶぎやう（ギヤウ‐ギョウ）[公事奉行](名) 鎌倉時代に、訴訟の裁判にあづかりし奉行の總稱。

くじ-ふだ[鬮札](名) くじびきの札。

くじふ-の-しゆんくわう（シユンクワウ‐シュンコウ）[九十春光](名) 春季三個月間の稱。

クシヤ[倶舍](名)【佛】(い)(梵語Abhidharma-kosaの上略、藏と譯す)一切所應の知識を包持すること。(ろ)「クシヤしゆう」の略言。

（**ぐ-しや**[愚者](名) 痴鈍なるもの。ばか。あはう。

（**く-じやう**（ジヤウ‐ジョウ）[苦情](名) ㊀難儀なる事情。㊁やかましく不平などを陳べ立つること。「―を訴へる」。

（**ぐ-じやう**（ジヤウ‐ジョウ）[具狀](名) つぶさに文書に書きしたゝめて上申すること。又、其文書。

（**く-じやく**[孔雀](名)【動】鶉鷄類に屬する鳥、おもに熱帶地方に産す、雌雄淘汰甚しく、雄は形大にして頭に三四寸の長毛直立し、羽毛麗(ウル)はしくして尾長く、尾端に金色の綠を帶びたる玉の如き模樣あれど、雌は形小にして斑なく、頭上に直立せる毛もまた短し。(鳳友)。――がひ（イ‐ガイ）[孔雀貝](名)【動】「うぐひすがひ」に同じ。――せき[孔雀石](名)【礦】銅の酸化物よりなる鑛物、色は美麗なる青綠色を呈し、結晶稀にして多くは瘤狀をなす、堅美なるものは裝飾品に供せられ、粗惡なるものは溶解して種々の製作用に供せらる。(石綠)。

〔**くしや-くしや**(名、副) ㊀入り亂れて秩序なきさまにいふ語。㊁操(モ)みあらされたるさまにいふ語。㊂心のみだれわづらふさまにいふ語。

〔**ぐしや-ぐしや**(名、副) ㊀前條に同じ。㊁水分多くして固からざるさまにいふ語。「泥が―する」。

クシヤ-しゆう[倶舍宗](名)【佛】八宗の一、天親菩薩の倶舍論を所依とする小乘教なり、おもに奈良に行はる。

〔**くしやみ**[嚔](名) 「くさめ」の訛。

（**く-しゆ**[酗酒](名) 酒に醉ひて狂ふこと。

くじ-よわ-し（く・し・き・けれ）[鬮弱](形、二) 利益ならぬ籤を引きがちなるにいふ。

くじり[抉](名) ㊀くじること。㊁物の結び目をくじりて解く用に供する具、さき尖りて錐の如き狀をなすもの。(觿)。

くじ-る（ら・り・る・る・れ・れ）[抉](他、ら四) ㊀穴を穿ちてかきまはす。穴の中に物を入れてかきまはす。ゑぐる。㊁ゑぐりて中にあるものを出す。「吾眼をくじりて東門に懸けよ」。

十**くしろ**[釧](名) 古昔、臂(ヒヂ)に纒(マト)ひ付けし一種の裝飾品、今時のうでわの類、たまき、ひぢまき。

くしろ[鉏](名) 土をかきならすに用ふる具、形くまでの如し。

（**く-しん**[苦心](名) 心をくるしむること。ちゞにかんがへなやむこと。あんつう。あんばい。

（**ぐ-しん**[具臣](名) 員にそなはるだけにて、役にたゝぬ臣下。

（**ぐ-しん**[具申](名) 物狀を上申すること。

（**ぐ-じん**[愚人](名) ばかもの。あはう。

くす[藥](名) 「くすり」の略言。「―師」。「―玉」。

くす[樟](名)【植】「くすのき」に同じ。

十**くす-す**（せ・し・す・する・すれ・せよ）[屈](自、さ變) かゞむ。ふさぐ。

〔**くす-す**（さ・し・す・す・せ・せ）[致](他、さ四) いたす。おこす。「―か、くさぬか、こりやどうぢや」。

十**く-ず**[國栖](名) 古昔、大和國吉野郡國栖の邊に居りし人民、應神天皇の時より、宮中の節會に參上し、贄(ニヘ)を獻じ、音樂などを奏したり、其音樂をくずの奏といへり。

くず[葛](名) ㊀(國栖葛の略言)【植】荳科に屬する蔓草、多く山野に生ず、葉は圓狀にして尖頭を有し、花は小形にして紫赤色なり、根よりくず粉を製し、又、莖の纖維を採りてくず布の料に供す。㊁「くずこ」、「くずだまり」、「くずふ」の略言。

ぐ-す-す（せ・し・す・する・すれ・せよ）[具](自、さ變) そなはる。そろふ。

ぐ-す-す（せ・し・す・する・すれ・せよ）[具](他、さ變) ㊀そなふ。そろふ。㊁伴なふ。つれだつ。「共にぐして參りける」。(倶)。

くず-かけ[葛掛](名) 料理にくずだまりをかくること。又、其料理。

十**くず-かづら**(名)【植】「くず」(葛)(一)に同じ。

くず-きり[葛切](名) 一種の食品、葛粉を水にて溶(ト)き、砂糖を加へ凝固めて、饂飩(ウドン)の如くこまかく切りたるもの。

グスク(名) (琉球の語Gusiku) 琉球にて、城の稱。

〔**くす-くす**(名、副) ひそかに笑ふさまにいふ語。

〔**くすぐつ-たい**(形) 身に觸れられて、一種異樣の感起る。こそばゆし。

くすぐ-る（ら・り・る・る・れ・れ）(他、ら四) こそぐる。

くず-こ[葛粉](名) 葛の根の液汁を採りて製したる粉、澱粉質に富み、種々の食用に供せらる、大和國吉野地方の産最も有名なり。

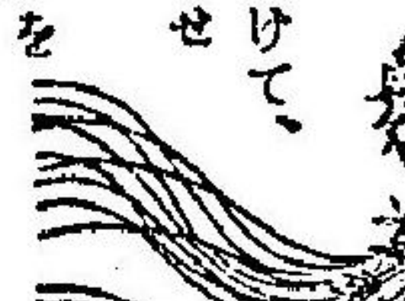
くず-ざうめん（ザウ‐ゾウ）[葛索麪](名) 葛粉にて製したる索麪。

十**くす-し**[醫師](名) いしや。醫師。

十**くす-し**（しく・しき・しけれ）[奇](形、二) ㊀あやし。めづらし。不思議なり。くし。「―き習慣」。㊁窮屈なり。こゝろよからず。

十**くす-す**（さ・し・す・す・せ・せ）[藥](他、さ四) 藥用して疾病を治療す。いやす。

くす-だま[藥玉](名) ㊀種々の香料を入れたる袋を集めて玉となし、造花などを用ひてこれを裝飾し、其下に五色の絲を七八尺ばかり垂れたるもの、昔時、これを簾又は柱などに掛けて、不淨を拂ひ臭氣を避くる具となせり。(續命縷)。㊁かけかう。



[くすだま]

くず-だまり[葛溜](名) 葛粉を煮(ニ)て製したる餡(アン)。

くず-に[葛煮](名) 葛粉を加へて煮ること。又、其煮たるもの。

くず-ぬの[葛布](名) 「くずふ」に同じ。

くす-ね[藥煉](名) 油を混じて煉(ネ)りたる松脂(マツヤニ)、弓弦などに塗るもの。

くず-ねり[葛煉](名) 葛の粉を水に溶(ト)き、砂糖を加へて凝固めたるもの。くずもち。

〔**くす-ねる**（ね・ね・ぬ・ぬる・ぬれ・ねよ）(他、な下二) ひそかに掠(カス)

め取る。「蹴出して錢を—」。

⌒くすねもの（名） くすねたる物。贓物。

くすのき[樟]（名）【植】樟科に屬する喬木、葉は革質にして羽狀脈を有し、花は小形にして黄白色なり。材は堅くして文理麗（ウルハ）しく且一種の香氣を有し、種々の用に供せられ、又、樟腦を製する料となる。（楠）。

卄くすは・し（クス ワシ）（しくしくしき しけれ）[奇]（形、二） くすし。

くずびき[葛引]（名） くずを塗りたる紙、婦人の髮飾にするもの。

くずふ[葛布]（名） 葛の莖の纖維を採りて織りたる布、質強くしてよく水に堪ふ、雨具・袴を造り又は襖（フスマ）などを貼（ハ）るに用ふ、遠江國掛川の名產。

くす・ぶ（ばびぶぶべべ）[燻]（自、は四） くすぶる。

くす・ぶ・る（べべぶぶるぶれべよ）[燻]（他、は下二） くすぶらしむ。

くすぶり[燻]（名） くすぶること。

くすぶ・る（らりるるれれ）[燻]（自、ら四） ㊀燃（モ）えずしてけむる。㊁室內にかゞみこみて外出せず。

⌒くすべる[燻]（他） 「くすぶ」の訛。

⌒くすぼる[燻]（自） 「くすぶる」の訛。

くずまんぢゆう[葛饅頭]（名） かはを葛粉にて製したる饅頭。

くす・む（まみむむめめ）（自、ま四） ㊀老人めく。大人（オトナ）めく。㊁質朴に見ゆ。虛飾なく見ゆ。「くすんだ人間」。㊂衣服又は携帶品の色・柄若しくは模樣などが、はでやかならず、ぢみにてあり。「くすんだ縞柄」。

くずもち[葛餅]（名） 葛ねり。（稱過餅）。

くずや[葛家]（名） くさや。かやや。

くずゆ[葛湯]（名） 葛の粉に砂糖を加へ、熱湯を注ぎて薄く澄（ト）きたるもの。

くすり[藥]（名） ㊀疾病又は傷損部を治癒するために、飲用又は塗抹して使用するもの、稱。やくざい。やくひん。㊁陶器に注（カ）けて、光澤を生ぜしむる料のもの。（釉）。㊂火藥の稱。㊃すべて、身體又は性狀に益を與ふるもの、稱。「運動が何よりの—」。卄—がり[藥獵]（名） 古昔、五月五日に野山に出で、鹿を狩りしこと、鹿の若角（ワカヅノ）を採りて藥用となしゝより此名あり。卄—ご[藥子]（名） 古昔、正月元日供御（クゴ）に添る屠蘇酒の味を試みし童女。 —し[藥師]（名） ㊀いしや。（醫師）。㊁やくざいし。 —なべ[藥鍋]（名） 藥を煎ずるための鍋。 卄—のかみ[典藥頭]（名） くすりのつかさの長官、相當は、從五位の下。卄—のつかさ[典藥寮]（名） 古昔、官內省の被官に屬し、醫藥一切の事を掌りし所。 —ばこ[藥箱]（名） ㊀藥を入るゝ箱。㊁醫者が患者を見舞ふときに藥品を入れて携帶する箱。藥籠。（藥匣）。卄—び[藥日]（名） 五月五日の異稱。此日は[illegible]をなし又は藥玉（クスダマ）を掛けなどせしより此名あり。 —みづ[藥水]（名） 藥を混ぜたる水。又、藥の調劑などに使用する水。 —や[藥屋]（名） くすりを賣る家、又、其人。やくしゆや。 —ゆ[藥湯]（名） 中に藥劑を入れたる洗湯。 —ゆび[藥指]（名） 拇指（オヤユビ）より數へて四番目の指、即ち、小指の隣にある指、此指先にて藥などを溶（ト）くによりて此名あり。べにさしゆび。（無名指）。

卄くす・る（らりるるれれ）[藥]（他、ら四） 「くすす」に同じ。

くせ[癖]（名） 偏頗なる一種の嗜好又は習慣若しくは性質。「惡い—」。（性癖）。

くせ—[曲]（接頭） 或語に冠して、正しからざる意を表はす語。「—事」。「—者」。

︵ぐせい[愚生]（代） 自分の謙稱。せつしや。

︵ぐぜい[弘誓]（名）【佛】弘く衆生を濟度して證果を得しめんとの、佛陀の大慈悲なるちかひ。 —のうみ[弘誓海]（名）【佛】佛陀の弘誓の慈悲の深大なるを海にたとへいふ語。 —のふね[弘誓船]（名） 佛陀の濟度を船にたとへいふ語。「—に帆をあげて」。

︵くせう（クーシ ヨウ）[苦笑]（名） にがわらひ。

くせぐせ・し（しくしくしき しけれ）[癖癖]（形、二） ひがみてあり。すなほならず。「心樣—」。

くせごと[曲事]（名） まがりたる事。條理にそむきたる事。

︵くぜち[口舌]（名） いさかひ。いひあひ。

︵くぜつ[口說]（名） 親密なるもの、言ひ爭ふこと。いひあひ。いさかひ。「痴話が高じて—の種よ」。

︵ぐせつ[愚說]（名） 自分の說の謙稱。

くせもの[曲者]（名） わるもの、又、あやしきやつ。

︵くせん[苦戰]（名） 苦しきたゝかひ。

卄くせん[口宣]（名） 古昔、頭辨（トウベン）が敕命を帶びて、直に五位以上の官位を授くること。 —あん[口宣案]（名） 古昔、頭辨より上卿に達せし口宣を其家に納めて、別に寫して大外記に遺しゝを。

⌒くぜん[瞿然]（名、副） ぎよっとしておそるゝさまにいふ語。

くそ[屎]（名） ㊀動物が、消化器內に於て、營養に變ぜしめたる食物の殘滓不用物を、肛門を經て體外に排泄したるもの。ふん。（糞）。㊁垢又は滓などにもいふ稱。「眼—」。「齒—」。

卄くそ[屎]（名） 古昔、童子を呼びたる稱。「けふ—遠のま給はんとは」。

くそ—[屎]（接頭） 或語に冠して、よからぬ意又はいやしむ意を表はす語。「—藏」。

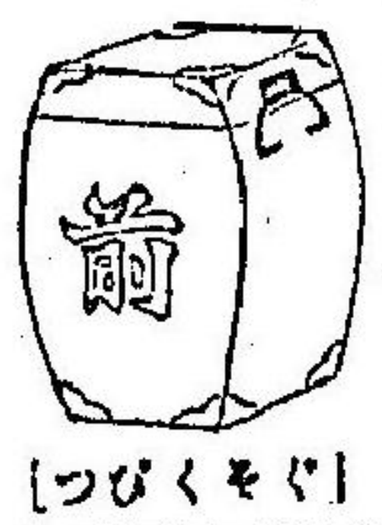
︵ぐそう[愚僧]（代） 僧侶の自分の謙稱。

くそかづら[紃子草]（名）【植】「へくそかづら」に同じ。

くそがへる[屎蛙]（名）【動】「いぼがへる」の一名。

︵ぐそく[愚息]（名） 我子の謙稱。

︵ぐそく[具足]（名） ㊀そなはり足りてあること。缺陷なきこと。㊁きぐ。だうぐ。「調度—ども取り持ちて」。㊂よろひ。甲冑。 —し[具足師]（名） 甲冑を製造する職人。（鎧匠）。 —に[具足煮]（名） 一種の料理、伊勢蝦を殼のまゝ輪切にして煮たるもの。 —びつ[具足櫃]（名） 甲冑を入るゝ櫃。 —もち[具足餅]（名） 昔時、正月に甲冑に供へしかゞみもち。



［ぐそくびつ］

くそとび[屎鳶]（名）【動】鳶の一種、形みにくけれど益鳥なり。

⌒くそばひ（イーハ）[屎蠅]（名）【動】「くそばへ」の訛。

くそばへ（ホーハ）[屎蠅]（名）【動】蠅の一種、大形にして青綠色をなし、最もよく不淨物にあつまる。

⌒くそばつた（名）【動】「つちばつた」の一名。

卄くそひり（名） 「りびやう」（痢病）に同じ。

卄くそぶくろ[屎袋]（名） 胃の古名。

くそむし[屎蟲]（名）【動】「こがねむし」の一名。

卄くそわたぶくろ[屎腸袋]（名） 「くそぶくろ」に同じ。

︵ぐぞん[愚存]（名） 自分の所存の謙稱。ぐい。

⌒くた（名） くたくたして役に立たぬこと。

くだ[管]（名） ㊀圓くして細長く中の空虛なるもの即ち小さき筒。「烟管の—」。㊁機の緯（ヨコ）絲を卷きて杼（ヒ）に入るゝもの。㊂絲車のつむにさして絲を卷くもの。（筆）。㊃餘計なることば。むだぐち。 —いと[管絲]（名） 管に卷きたる絲。 —をまく 酒に醉ひなどしてむだくちを言ひたつ。 —をもっててんをうかがふ[以管闚天] 瑣細なる識見を以て、廣大なる物事をうかゞひはかるにいふ。

︵くだい[句題]（名） 歌の題の一種、三代集の歌より拔き出したる一句か、若しくは或漢詩の一句かを題とせるもの。

︵ぐたい[具體]（名） 「ぐさう」（具象）に同じ。 —てき[具體的]（形） 「ぐさうてき」（具象的）に同じ。 —めいし[具體名詞]（名） 「ぐさうめいし」（具象名詞）に同じ。

︵くたう（ウート）[狗盜]（名） こぬすびと。草賊。

︵ぐだう（ウード）[求道]（名） 宗教上の正しき道をもとむるを。

卄くだかけ[鷄]（名）（東國の方言にて、家なくたといふより此名ありといひ、或は百濟鷄の義なりといひ又は梵語なりともいふ）【動】「にはとり」の古名。（家雞）。 —どり[鷄鳥]（名）【動】[illegible]に同じ。「—の、まだきに鳴きて、せなをやりつる」。

くだ・く（かきくくけけ）[碎]（他、か四） ㊀打破りて細片となす。「氷を—」。（摧）。㊁やぶる。くじく。「敵を—」。㊂よわむ。やはらぐ。㊃千々にくるしむ。「心を—」。㊄細かに分けて說く。ひらたく打ちあけて話す。㊅はした金に分く。「壹圓札を—」。

くだ・く（けけくくるくれけよ）[碎]（自、か下二） ㊀こはれて細片となる。こはる。（摧）。㊁やぶる。くじく。「敵勢—」。㊂よわる。やはらぐ。「心—」。㊃はした金に分たる。㊄意義わかる。理解せらる。

⌒くたくた（名、副） 力拔けて弱くなりたるさま又は勢乏しくて堅固ならざるさまにいふ語。「—した布」。

⌒ぐたぐた（名、副） 前條に同じ。

くだくだ・し（しくしくしき しけれ）（形、二） ㊀厭（イト）はし。煩（ワヅラ）はし。ねつこし。くどし。㊁繁雜に過ぎたり。こまかすぎたり。ねげし。おほし。「—き辯」。（煩瑣）。

くだけ[碎]（名） くだくること、又、くだけたる細片。

⌒—る[碎]（自） 「くだく」の訛。

くださ・る（らりるるれれ）[被下]（他、ら四） 長上より物を賜はる。下し賜はる。たまはる。

くだし[下]（名） ㊀くだすこと。㊁「くだしぐすり」の略言。 —ぐすり[下藥]（名） 便通をよくするために飲用する藥劑。つうじぐすり。げざい。 —ぶみ[下文]（名） ㊀古昔、官府の命令書。㊁鎌倉時代又は室町時代に、所領を與ふるときなどに、政所（マンドコロ）より與へし文書。

卄くた・す（さしすすせせ）[腐]（他、さ四） ㊀腐敗せしむ。くさらす。㊁惡しきさまにいひなす。けなす。そしる。

くだ・す（さしすすせせ）[下、降]（他、さ四） ㊀上より下へ行（ヤ）る。高きより低きへ移す。おとす。おろす。㊁ふらす。「天雨を—」。㊂敵の城壘を拔く。せめおとす。㊃おさへ鎭む。「氣をくだし心を平かにす」。㊄まうしわたす。さげわたす。「議をくだして其是非をいはしむ」。㊅下賜す。たまはる。㊆ひくゝす。さぐ。おとす。「品を—」。「價を—」。㊇京地より地方へ遣（ハツ）す。㊈大便を通ぜしむ。

くだだま[管玉]（名） 圓柱體にして、心に管のごとき孔を穿ちたる玉、古代これに紐を通し帶びて飾とせり。（管石）。

卄くだ・つ（たちつつてて）[降]（自、た四） すゑとなる。かたむく。「く。

⌒ぐだつ・く（かきくくけけ）（自、か四） ぐたぐたす。

くだに[九谷]（名） 「くたにやき」の略言。 —やき[九谷燒]（名） 加賀國江沼郡九谷村より出す磁器、伊萬里燒より分派したるものにて、赤繪・金襴手等多し。

くだのふえ[小角]（名） 管の形につくりたる小さき笛、古昔、戰場などにて用ひしもの。

くだばり[管鍼]（名）鍼術に用ふる一種の鍼、鍼を其進退自由なる程の孔ある金屬製の管に入れて用ふるもの、鍼を皮膚に刺し入るゝに、普通のものより時間を要すること少しといふ。

⌒くたば・る（らりるるれれ）（自、ら四）死ぬ。

くたび・る（れれるるれれよ）[草臥]（自、ら下二）疲勞す。つかる。よわる。

くたびれ[草臥]（名）くたびれたること。つかれ。（勞）。

⌒―る[草臥]（自）「くたびる」の訛。

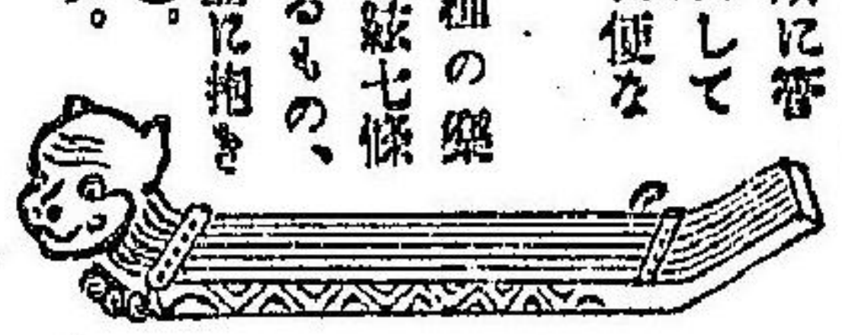
くだまき[管卷]（名）【動】きりぎりすに似たる小蟲、頭小さく羽大きく、絲狀の長き觸角あり、絲車を廻すごとき聲にて鳴く。すいと。くだむし。（絡緯）。

くだむし[管蟲]（名）【動】前條に同じ。

くだもの[菓物]（名）㊀菓子の古稱。㊁草木に生ずる果實。（果實）。

くだやり[管槍]（名）一種の槍、柄に貫きたる手頃の金屬製の管ありて、刃に近き所に管を留むる鐔あり、管の進退は自由にして左手にてこれをにぎり、槍の操縱に便ならしむるもの。

クダラ-ごと[百濟琴]（名）一種の樂器、二樣あり、一は琴に似て小さく絃七條あり、撥にて琵琶の如くに彈ずるもの、一は端曲がりて二十三絃あり、豎に抱きて兩手にてかきならすもの。（箜篌）。


［クダラごと］

⌒くだらない（形）㊀とるに足らず。㊁不粹なり。

くだり[下]（名）㊀くだること。さがること。㊁時の移りゆくこと。さがり。㊂都より田舍へ行くこと。㊃文書の縱行。ぎやう。「三―半」。㊄「くだりさか」の略言。㊅「くだりあゆ」の略言。㊆「くだりはら」の略言。

くだり[件]（名）㊀前の個條にありし事を指していふ語。「其―のこと」。㊁個條又は種類。㊂裝束などのそろひ。「おんぞ一―例の事なり」。

⌒くだり（名、副）「くたくた」に同じ。

くだり-あめ[瀉飴]（名）地黃煎（ヂワウセン）を加へたる固飴。

くだり-きしや[下汽車]（名）都より田舍へ行く汽車。

くだり-さか[下阪]（名）㊀下りみちとなる阪。㊁物事のおとろへかゝること。

くだり-ざけ[下酒]（名）上方より輸送せる酒。

くだり-はら[瀉腹]（名）便通のはげしきこと。はらくだり。げり。「おぶり腹に―」。

くだり-ばら[瀉腹]（名）前條に同じ。

くだり-ぶね[下船]（名）㊀上方より來たる船。㊁上流より來たる船。

くだり-むね[下棟]（名）棟の端より折れて穩（キ）のかど迄下れるもの。

くだり-やな[下梁]（名）上流より來る魚を抑ふるための綛。

くだり-やみ[下闇]（名）月の下旬の闇の夜。「二十三日なれば、―にて」。

くだ・る（らりるるれれ）[下、降]（自、ら四）㊀上より下へ行く。高きより低きへ移る。おりる。おちる。㊁ふる。「雨―」。㊂時移り行く。㊃世移りて末となる。「くだりたる世の習慣」。㊄まうしわたさる。さげわたさる。㊅下賜せらる。たまはる。㊆おとる。さがる。ひくゝなる。㊇大便はげしく通ず。げりを催す。（瀉）。㊈降伏す。かうさんす。㊉抑遜す。へりくだる。「人に―」。(十一)都より田舍へ行く。(十二)通じて讀み又は解せらる。「讀みが―」。

くだん[件]（名）「くだり」に同じ。「―の如し」。

くち[口]（名）㊀動物が外界より攝取する食物を直接に受くる腔、これより食物は消化器内に導かる、高等動物のには、脣・齒・舌等の口器ありて、又、音聲を發する機關なり。（玉池）。㊁人の出入すべき所。又、物を出入さすべき穴。「壺の―」、「瓶の―」。㊂ことば。ぞろん。「―を出す」。㊃いふこと。くらふこと。「―を志める」。㊄人別。人數。「―を減す」。㊅はし。こぐち。端緒。㊆てづる。たより。奇緣。「昇進の―」。㊇はいりこむべき地位、又、いれこむべき場所。「奉公の―」、「仕官の―」。㊈すきま。ひま。あな。「腫物の―」。㊉栓又は蓋などの如く、器物のくちをふさぐもの。(十一)たぐひ。種類。　―にあふる[溢口]食ふもの、味が口にみつるばかりに、いと甘美なるにいふ。又、言語などのよどみなくすら〳〵と出づるにいふ。　―にかく　ものをいふ。　―にたつ[絕口]其物を飲食せず。又、其事を語らず。　―にのす　欺く。　―にのる　欺かる。　―にみつありはらにけんあり[口有蜜腹有劍]小人などの、口さきでは巧言を吐きて心のうちには害謀を持つにいふ。　―をきく　ものをいふ。又、人のためにとりなしなどす。人のためにいふてやる。　―をきる　はじむ。　―をけす[滅口]其事をいはぬやうにす。又、其證言をなくす。　―をたたく　多くものをいふ。しやべる。　―をつぐむ[噤口]ものをいはぬ。　―をとざす[箝口]いはぬやうにす。又、言論の自由を束縛す。　―をぬぐふ　或事をなして知らぬ顏にて居る。　―をふさぐ[塞口]「くちをとざす」に同じ。　―をまもる[守口]輕々しくものをいはぬやうにす。

くち[鮸]（名）【動】「いしもち」の一名。

++ぐち（名）（古韓語なりといふ）鷹の異稱又は鷹狩にて、始めてつかふ鷹なりともいふ。

⌒ぐ-ち[愚痴]（名）㊀おろかなること。㊁言ひて甲斐なき事をいひて歎くこと、「あゝ又―列べて」。

くち-あけ[口開]（名）㊀物の口を開くこと。㊁物事のはじめ。「―故に負けて置かう」。

++くち-あそび[口遊]（名）くちずさみ。あだくち。「かゝる―はさらにうけたまはらじ」。

くち-あたり[口當]（名）㊀口の飲食に於ける感じ。㊁いひまへ。いふいみ。

くち-あひ（イ―ア）[口合]（名）㊀話すこと。㊁互の話がよくあひて衝突なきこと。㊂地口又は語呂などの趣向。「―が旨い」。

くち-あ・ふ（はひふふへへ）[口合]（自、は四）互の話がよくあふ。同じ意にて語りあふ。

⌒くちい（形）食物の腹にみち足りたるさまにいふ語。（東京の方言）。

くち-い・る（れれるるれれよ）[口入]（自、ら下二）口出をなす。又、口入をなす。

くち-いれ[口入]（名）㊀此方のいふ所を先方へいひ入るゝこと。又其人。㊁奉公人の周旋をなすこと。又、其業の人。けいあん。「雇人―宿」。　―にん[口入人]（名）口入をする人。しうせんにん。

くち-うつし[口移]（名）㊀物を我口に含みて他の口に移し入るゝこと。（小兒などに對してなす）。㊁言語にていひ傳ふること。（口授）。

くち-うら[口占]（名）其語に由りて其心の程を推り知ること。「―を引いて見る」。

くち-おも[口重]（名）㊀口のするどからぬこと。言語の判然せぬこと。㊁はっきりしたる返答なきこと。　―し（くしきけれ）[口重]（形、二）くちおもなり。

くち-かうしや（ウ-コ）[口巧者]（名）口前の巧なること。

くち-がき[口書]（名）㊀人の供述を書き留めたる文書。（口供）。㊁筆を口にくはへて書又は畫をかくこと。

くち-がしこ[口賢]（名）くちがしこきこと。　―し（くしきけれ）[口賢]（形、一）ものいひさかし。口前うまし。「―き小兒」。

くち-かず[口數]（名）㊀いふこと。しやべること。㊁人數。

くち-かた[口堅]（名）㊀くちごはきこと。㊁いふ事確かにて間違なきこと。㊂みだりに他言せざること。　―し（くしきけれ）[口堅]（形、二）くちかたにてあり。

くち-がた・む（めめむむむれめよ）[口固]（他、ま下二）くちがためをなす。

くち-がため[口固]（名）㊀他言せざるやうにとめおくこと。くちどめ。㊁かたく約束すること。

++くち-がな・し（しくしくしき）[口悲]（形、二）くちをし。

くち-がる[口輕]（名）㊀さら〳〵と輕く口を利（キ）くこと。㊁よく考へずして、輕率に口をきくこと。「―にしやべる」。㊂秘密なる事をもよく他言すること。　―し（くしきけれ）[口輕]（形、二）くちがるにてあり。

++くち-き[朽木]（名）朽ちたる木。腐れたる木。　―がき[朽木書]（名）古昔、燒筆にて繪を書きしこと。　―がた[朽木形]（名）くち木のさまを描（ヱガ）きたる模樣。

［くちきがた］

くち-きき[口利]（名）㊀ものをよくいふ人、巧に辯ずる人。㊁談判又は相談などに立入りて、巧に振舞ふ人。

くち-ぎたな[口穢]（名）くちぎたなきこと。　―し（くしきけれ）[口穢]（形、二）いひやう惡しきさまなり。いやしげにいひなす。

くち-きり[口切]（名）㊀事の始め。てはじめ。「其の第一の―は」。㊁秋の始めに、茶つぼの口をきりて新茶を用ふること。

⌒く-ちく[苦竹]（名）【植】「まだけ」に同じ。

く-ちく[驅逐]（名）㊀おひはらふこと、おひしりぞくること。㊁おひかくること。おひうつこと。㊂はしりくらべをなすこと、はせかくること。　―かん[驅逐艦]（名）海軍艦船の一、形體は水雷艇に似て大きく、且速力も遙かに水雷艇より迅し、艦內に備付せる速射砲を以て水雷艇を驅除又は破壞し、時によりては敵艦の攻擊に使用せらる。水雷驅逐艦。　―かんたい[驅逐艦隊]（名）二隻以上の水雷驅逐艦の編制の名。

くち-ぐすり[口藥]（名）㊀火繩銃の火蓋（ヒブタ）に用ふる火藥。㊁やかましく言はぬやう又は他言せぬやうに、くらはしおく金錢などの稱。

くち-くせ[口癖]（名）いひ慣れて癖（セ）となりたること。つねにいふことば。「―にしやべる」。

くち-ぐち[口口]（名）みなの口。めい〳〵の口。　―に[口口]（副）めい〳〵に聲をあげて、ひとり〳〵にものいひて。

⌒くち-ぐるま[口車]（名）巧にいひ廻はして、たぶらかし誘ふこと。口先の辯。「水車のやうな―に迷って」。　―にのす　欺く。たぶらかす。　―にのる　欺かる。だまさる。

くち-ごたへ（タイ-コ）[口答]（名）尊長に向ひ、ことばを返して抗論すること。さからふ言葉の返辯。（反口）。

くち-ごは（ワ-コ）[口強]（名）くちごはきこと。　―し（くしきけれ）[口強]（形、二）よくいひ張りて抗辯す。

くち-ごもり[口籠]（名）くちごもること。

くち-ごも・る（らりるるれれ）[口籠]（自、ら四）㊀言語口中に籠りて分明ならず。くごもる。（口遮）。㊁明了なる應答をなすを能はず。

くち-ざ[口座]（名）㊀簿記にて、原簿に仕譯して設けたる各區。㊁區別したるもの〳〵の場所。

くだ-ばり[管鍼]（名） 鍼術に用ふる一種の鍼、鍼を其進退自由なる程の孔ある金屬製の管に入れて用ふるもの、鍼を皮膚に刺し入るゝに、普通のものより時間を要すると少しといふ。

〔**くたば・る**（らりるるれれ）（自、ら四） 死ぬ。

くたび・る（れれるるるれれよ）[草臥]（自、ら下二） 疲勞す。つかる。よわる。

くたびれ[草臥]（名） くたびれたると。つかれ。（勞）。

〔**―る**[草臥]（自） 「くたびる」の訛。

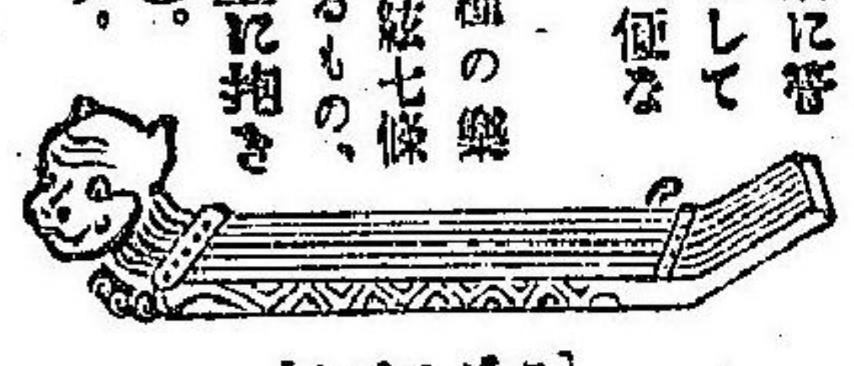
くだ-まき[管卷]（名） 【動】きりぎりすに似たる小蟲、頭小さく羽大きく、絲狀の長き觸角あり、絲車を廻すごとき聲にて鳴く。すいと。くだむし。（絡緯）。

くだ-むし[管蟲]（名） 【動】前條に同じ。

くだ-もの[菓物]（名） ㊀菓子の古稱。 ㊁草木に生ずる果實。（果實）。

くだ-やり[管槍]（名） 一種の槍、柄に貫きたる手頃の金屬製の管ありて、刃に近き所に管を留むる鍔あり、管の進退は自由にして左手にてこれをにぎり、槍の繰縱に便ならしむるもの。

クダラ-ごと[百濟琴]（名） 一種の樂器、二樣あり、一は箏に似て小さく絃七條あり、撥にて琵琶の如くに彈ずるもの、一は體曲がりて二十三絃あり、豎に抱きて兩手にてかきならすもの。（箜篌）。


[とごラダク]

〔**くだらな・い**（形） ㊀とるに足らず。 ㊁不粹なり。

くだり[下]（名） ㊀くだると。さがると。 ㊁時の移りゆくと。さがり。 ㊂都より田舍へ行くと。 ㊃文書の縱行。ぎやう。「三―半」。 ㊄「くだりあめ」の略言。 ㊅「くだりさか」の略言。 ㊆「くだりはら」の略言。

くだり[件]（名） ㊀前の個條にありし事を指していふ語。「其―のと」。 ㊁個條又は種類。 ㊂裝束などのそろひ。「おんぞ一―例の事なり」。

〔**ぐだり**（名、副） 「くたくた」に同じ。

くだり-あめ[瀉飴]（名） 地黄煎（ヂワウセン）を加へたる國飴。

くだり-きしや[下汽車]（名） 都より田舍へ行く汽車。

くだり-さか[下阪]（名） ㊀下りみちとなる阪。 ㊁物事のおとろへかゝると。

くだり-ざけ[下酒]（名） 上方より輸送せる酒。

くだり-はら[瀉腹]（名） 便通のはげしきと。はらくだり。げり。「去ぶり腹に―」。

くだり-ばら[瀉腹]（名） 前條に同じ。

くだり-ぶね[下船]（名） ㊀上方より來たる船。 ㊁上流より來たる船。

くだり-むね[下棟]（名） 棟の端より折れて檐（ノキ）のかど迄下れるもの。

くだり-やな[下梁]（名） 上流よりもり來る魚を捕ふるための梁。

くだり-やみ[下闇]（名） 月の下旬の闇の夜。「二十三日なれば、―にて」。

くだ・る（らりるるれれ）[下、降]（自、ら四） ㊀上より下へ行く。高きより低きへ移る。おりる。おちる。 ㊁ふる。「雨―」。 ㊂時移り行く。 ㊃世移りて末となる。「くだりたる世の習慣」。 ㊄まうしわたさる。さげわたさる。 ㊅下賜せらる。たまはる。 ㊆おとる。さがる。ひくゝなる。 ㊇大便はげしく通ず。げりを催す。（瀉）。 ㊈降伏す。かうさんす。 ㊉抑遜す。へりくだる。「人に―」。 （十一）都より田舍へ行く。 （十二）通じて讀み又は解せらる。「讀みが―」。

くだん[件]（名） 「くだり」に同じ。「―の如し」。

くち[口]（名） ㊀動物が外界より攝取する食物を直接に受くる腔、これより食物は消化器内に過かる、高等動物のには、脣・齒・舌等の口器ありて、又、音聲を發する機關なり。（玉池）。 ㊁人の出入すべき所。又、物を出入さすべき穴。「窓の―」。「瓶の―」。 ㊂ことば。ぎろん。「―を出す」。 ㊃いふと。くらふと。「―を求める」。 ㊄人別。人數。「―を減す」。 ㊅はし。こぐち。端緒。 ㊆てづる。たより。術線。「昇進の―」。 ㊇はいりこむべき地位。又、いれこむべき場所。「奉公の―」。「仕官の―」。 ㊈すきま。ひま。あな。「腫物の―」。 （十）栓又は蓋などの如く、器物のくちをふさぐもの。 （十一）たぐひ。種類。 ―に**あふる**[溢口] 食ふもの、味が口にみつるばかりに、いと甘美なるにいふ。又、言語などのよどみなくすら〳〵と出づるにいふ。 ―に**かく** ものをいふ。 ―に**たつ**[絶口] 其物を飲食せず。又、其事を語らず。 ―に**のす** 欺く。 ―に**のる** 欺かる。 ―に**みつありはらにけんあり**[口有蜜腹有劍] 小人などの、口さきでは巧言を吐きて心のうちには害毒を持つにいふ。 ―を**きく** ものをいふ。又、人のためにとりなしなどす。人のためにいふてやる。 ―を**きる** はじむ。 ―を**けす**[滅口] 其事をいはさぬやうにす。又、其證言をなくす。 ―を**たたく** 多くものをいふ。しやべる。 ―を**つぐむ**[噤口] ものをいはぬ。 ―を**とざす**[杜口] いはさぬやうにす。又、言論の自由を束縛す。 ―を**ぬぐふ** 或事をなして知らぬ顏にて居る。 ―を**ふさぐ**[塞口] 「くちをとざす」に同じ。 ―を**まもる**[守口] 輕々しくものをいはぬやうにす。

くち[鯱]（名） 【動】「いしもち」の一名。

卄**ぐち**（名） （古韓語なりといふ）鷹の異稱又は鷹狩にて、始めてつかふ鷹なりともいふ。

（**ぐ-ち**[愚痴]（名） ㊀言ひて甲斐なき事をいひて歎くと。「あゝ又―列べて」。

くち-あけ[口開]（名） ㊀物の口を開くと。 ㊁物事のはじめ。「―故に負けて置かう」。

卄**くち-あそび**[口遊]（名） くちずさみ。あだくち。「かゝる―はさらにうけたまはらじ」。

くち-あたり[口當]（名） ㊀口の飲食に於ける感じ。 ㊁いひまへ。いふいみ。

くち-あひ[口合]（名） ㊀卄話すと。 ㊁互の話がよくあひて衝突なきと。 ㊂地口又は語呂などの趣向。「―が旨い」。

くち-あ・ふ（はひふふへへ）[口合]（自、は四） 互の話がよくあふ。同じ樣にて語りあふ。

〔**くち-い**（形） 食物の腹にみち足りたるさまにいふ語。（東京の方言）。

くち-い・る（れれるるるれれよ）[口入]（自、ら下二） 口出をなす。又、口入をなす。

くち-いれ[口入]（名） ㊀此方のいふ所を先方へいひ入るゝと。又其人。 ㊁奉公人の周旋をなすと。又、其業の人。けいあん。「雇人―宿」。 ―**にん**[口入人]（名） 口入をする人。あうせんにん。

くち-うつし[口移]（名） ㊀物を我口に含みて他の口に移し入るゝと。（小兒などに對してなす）。 ㊁音語にていひ傳ふると。（口授）。

くち-うら[口占]（名） 其語に由りて其心の程を推り知ると。「―を引いて見る」。

くち-おも[口重]（名） ㊀口のするどからぬと。言語の判然せぬと。 ㊁はっきりしたる返答なきと。 ―・**し**（くしきけれ）[口重]（形、二） くちおもなり。

くち-がうしや[口巧者]（名） 口前の巧なると。

くち-がき[口書]（名） ㊀人の供述を書き留めたる文書。（口供）。 ㊁筆を口にくはへて書又は畫をかくと。

くち-がしこ[口賢]（名） くちがしこきと。 ―・**し**（くしきけれ）[口賢]（形、二） ものいひさかし。口前うまし。「―き小兒」。

くち-かず[口數]（名） ㊀いふと。おしやべると。 ㊁人數。

くち-がた[口堅]（名） ㊀くちごはきと。 ㊁いふ事確かにて間違なきと。 ㊂みだりに他言せざると。 ―・**し**（くしきけれ）[口堅]（形、二） くちがたにてあり。

くち-がた・む（めめむむむめめよ）[口固]（他、ま下二） くちがためをなす。

くち-がため[口固]（名） ㊀他言せざるやうにとめおくと。くちどめ。 ㊁かたく約束すると。

卄**くち-がな・し**（しくしきけれ）[口悲]（形、二） くちを「し」。

くち-がる[口輕]（名） ㊀さら〳〵と輕く口を利くと。 ㊁よく考へずして、輕率に口をきくと。「―にしやべる」。 ㊂秘密なる事をもよく他言すると。 ―・**し**（くしきけれ）[口輕]（形、二） くちがるにてあり。

卄**くち-き**[朽木]（名） 朽ちたる木。腐れたる木。 卄―**がき**[朽木書]（名） 古昔、燒筆にて繪を書きしと。 ―**がた**[朽木形]（名） くち木のさまを描きたる模樣。

[たがきちく]

くち-きき[口利]（名） ㊀もののよくいふ人、巧に辯ずる人。 ㊁談判又は相談などに立入りて、巧に振舞ふ人。

くち-ぎたな[口穢]（名） くちぎたなきと。 ―・**し**（くしきけれ）[口穢]（形、二） いひやう惡しざまなり。いやしげにいひなす。

くち-ぎり[口切]（名） ㊀事の始め。てはじめ。「其の第一の―は」。 ㊁秋の始めに、茶つぼの口をきりて新茶を用ふると。

〔**く-ちく**[苦竹]（名） 【植】「まだけ」に同じ。

（**く-ちく**[驅逐]（名） ㊀おひはらふと。おひまりぞくると。 ㊁おひかくると。おひうつと。 ㊂はしりくらべをなすと。はせかくると。 ―**かん**[驅逐艦]（名） 海軍艦船の一、形體は水雷艇に似て大きく、且速力も遙かに水雷艇より速し、艦内に備付せる速射砲を以て水雷艇を驅除又は破壞し、時によりては敵艦の襲擊に使用せらる。水雷驅逐艦。 ―**かんたい**[驅逐艦隊]（名） 二隻以上の水雷驅逐艦の編制の名。

くち-ぐすり[口藥]（名） ㊀火繩銃の火蓋（ヒブタ）に用ふる火藥。 ㊁やかましく言はぬやう又は他言せぬやうに、くらはしおく金錢などの稱。

くち-ぐせ[口癖]（名） いひ慣れて癖（セク）となりたると。つねにいふことば。「―にしやべる」。

くち-ぐち[口口]（名） みなの口。めい〳〵の口。 ―**に**[口口]（副） めい〳〵に聲をあげて。ひとり〳〵にものいひて。

〔**くち-ぐるま**[口車]（名） 巧にいひ廻はして、たぶらかし誘ふと。口先の辯。「水車のやうな―に迷って」。 ―に**のす** 欺く。たぶらかす。 ―に**のる** 欺かる。だまさる。

くち-ごたへ[口答]（名） 尊長に向ひ、ことばを返して抗論すると。さからふ言葉の返事。（反口）。

くち-ごは[口強]（名） くちごはきと。 ―・**し**（くしきけれ）[口強]（形、二） よくいひ張りて抗辯す。

くち-ごもり[口籠]（名） くちごもると。

くち-ごも・る（らりるるれれ）[口籠]（自、ら四） ㊀言語口中に籠りて分明ならず。くごもる。（口澁）。 ㊁明了なる應答をなすと能はず。

くち-ざ[口座]（名） ㊀區別したるもの〳〵の場所。 ㊁簿記にて、原簿に仕譯して設けたる各座。

くちざか·し（しく しき しけれ）[口賢](形、二) 口前かしこし。口巧者なり。

くちさがな·し（くしき けれ）[口性無](形、二) 惡しざまにいひなす。くちぎたなし。「―き世間」。

くちさき[口先](名) ㊀口の端。(吻)。㊁實際は然らざるに、言語のみかざりていふを。口前ばかり。(口角)。㊂ことば。ものいひ。「人の―を眞似て」。

‡**くちさきら**[先口](名) 前條に同じ。

くちさみせん[口三味線](名) 口にて三味線の音をまぬるを。

くちしほ（ーシ）[口鹽](名) 瓜の切身の切口などに鹽をふりかくるを。

くちじやうず（ージヨウ）[口上手](名) くちかうしや。

くちすぎ[口過](名) 生活を凌ぐるを。くらし。よすぎ。すぎはひ。(糊口)。

くちずさび[口號](名) 口ずさぶを。(口吟)。

くちずさ·ぶ（ぶばびぶべべ）[口號](他、は四) ㊀心に浮びたるまゝの詩歌などを吟ず。ぎんず。「義郎、少しも騒がず聲細くくちずさびて出づれば」。㊁心に浮びたるまゝを詩歌にのべいふ。

くちずさみ[口號](名) くちずさび。

くちずさ·む（むまみむめめ）[口號](他、ま四) くちずさふ。

くちすす·ぐ（ぐがぎぐげげ）[口漱](自、か四) 口中をあらひきよむ。うがひなす。(嗽)。

くちそそ·ぐ（ぐがぎぐげげ）(自、か四)「くちすゝぐ」に同じ。

くちだし[口出](名) ㊀他人の談話の間に、よこあひよりいひ出すを。㊁他人の談判などに、よこあひよりいひ出すを。

くちづから[口](副) 自身の口よりして、親しく談じて。

くちつき[口付](名) ㊀口のすがた。口の樣子。「―愛敬あり」。㊁ものをいふ樣子。「巧みなる―」。㊂卷煙草に吸口のつけてあるを。又、其卷煙草。

くちつき[口附](名) 牛馬などの口を取りて率(ひ)く者。くちとり。

くちづき[口付](名) くちなるゝを。

くちづ·く（くかきくけけ）[口付](自、か四) ㊀言ひ慣る。慣れて言ふ。㊁食ひ得られざりし物の、次第に食ひ得らるゝに至る。

⌐**くちづけ**[口付](名) くちくせ。くちなれ。

くちづたへ（ーツタエ）[口傳](名) 口づからつたふるを。人より人へいひつたふるを。(傳言)。

‡**くちづつ**(名) 物をいふ體の拙なるを。

くちつづみ[口鼓](名) ㊀舌たうち。(鼓舌)。㊁くちびやうし。

くちど[口疾](名) 物のいひ方の疾きを。はやくち。「―に宣ふ」。――**し**（くしき けれ）[口疾](形、二) くちどにあり。

くちどめ[口止](名) ㊀他言せざるやう禁じ置くを。くちふさぎ。くちがため。㊁他言を禁ずるために與ふる金錢などの稱。

くちとり[口取](名) ㊀牛馬の口を取りて率(ひ)き行く者。くちつき。馬丁。御者。別當。㊁「くちとりざかな」の略言。――**ざかな**[口取肴](名) ㊀一種の料理。味を甘く濃厚に製したる肴を取合はせたるものにして、多くは、きんとん·かまぼこ等と、他の魚鳥の類とを取合はすを常とす。㊁茶などに茶受として用ふべきもの。(茶食、點心)。

くちなぐさみ[口慰](名) 退屈のときなどに、雑談をなし又は間食などするを。

くちなし[山梔](名) ㊀【植】(果實熟すれども口を開かざるより名づく) 茜草科に屬する灌木、幹莖は直立す、花は白色大形にして香氣あり、果實は黄色の染料に供せらる。(梔子)。㊁くちなしの果實にて、

染めたる色。又、黄色、(緗桃、鮮支)。――**いろ**[山梔色](名)「くちなし」(二)に同じ。

くちなは（ーナワ）[蛇](名) 【動】(口のある繩の義ともいひ、又、朽繩の義ともいふ)「へび」の一名。――**いちご**[蛇苺](名) 【植】「へびいちご」の一名。

⌐**くちなほし**（ーナオシ）[口直](名) にがきもの又は味なきものなどを食ひしあとに、甘きもの又は味好きものなどを食ふを。

くちならし[口馴](名) くちならすを。

くちなら·す（すさしすせせ）[口馴](他、さ四) 口になるゝやうにす。

くちな·る（るれれるるるれれよ）[口慣](自、ら下二) ㊀くちづく。㊁口あたりよくなる。

くちなれ[口慣](名) くちなるゝを。――**る**[口慣](自)「くちなる」の訛。

くちのは[口端](名) ことばのはし。はなしのたね。うはさ。ひやうばん。――**にかかる** ひやうばんせらる。いひつたへらる。――**にかく** ひやうばんす。いひつたふ。

‡**くちのとら**[口虎](名) ことばの恐ろしきに譬へいふ語。

くちは[口端](名) くちのは。「人の―に掛かり」。

くちば[朽葉](名) ㊀朽ちたる落葉。㊁「くちばいろ」の略言。――**いろ**[朽葉色](名) 朽ちたる落葉の色。黄に赤を帶びたる色。

くちばし[喙](名) (口端の義) ㊀鳥類の口の端、即ち、上下の顎の延長したるものにして、角質の鞘を被る。くちさき。はし。くちさきら。(嘴)。㊁ことば。ものいひ。

くちばし·る（るらりるるれれ）[口走](自、ら四) 秘密なる事を誤りて言ひ洩(も)らす。(逸口)。

⌐**くちはば**[口幅](名) ㊀口の廣狹。㊁ものゝいひやう。思ひ切りたるいひやう。「―ひろき言分」。

---

‡**くちばみ**[蝮]【動】「まむし」の稱。

くちばや[口迅](名) もの、いひやうの急速なるを。はやくち。――**し**（くしき けれ）[口迅](形、二) くちばやにてあり。

くちび[口火](名) ㊀鐵砲の火口に用ふる火。㊁物事の導きとなるべきもの。てびき。「―を點ける」。

くちひび[口胼](名) 唇の邊にてくる胼(ひ)又、唇の邊にてくる腫物。(胗)。

‡**くちひび·く**（くかきくけけ）(自、か四) 口ひりひりして痛む。

くちびやうし（ービヨウシ）[口拍子](名) 口にて拍子をとるを。又、其拍子。

くちびる[唇](名) (口縁の義) 上下より口腔の門戸を鎖して、高くなりたる肉色の所。「ものいへば、―寒し秋の風」(唇)。――**ほろびてはさむし**[唇亡齒寒] 互に相より相たすけあふもの、一方ほろびて、他の一方孤立し勢弱ふるにいふ。――**をかへす**[反唇] あしざまにいふ。惡口す。

くちぶえ[口笛](名) 唇を蹙(ツグ)み息を強く吹き出して音を出すを。又、指を口中に入れ吹きて音を出すを。

くちふさぎ[口塞](名) くちどめ。

‡**くちふで**[朽筆](名) やき筆。

くちべに[口紅](名) ㊀婦人が唇に紅を塗るを。又、其紅。㊁物の周圍に紅を付くるを。又、周圍の紅なるもの。「―の花」「―の紙」。㊂磁器のふちに赤みがゝりたる彩色をなすを。

くちへん[口偏](名) 漢字の偏の名、吐·鳴などの字の左方にある口の字。

くちまかせ[口任](名) 口に任せてものをいふを。口のまゝに言ふを。でたらめにいふを。

くちまね[口眞似](名) ㊀人のものいふ眞似(マネ)

をするを。(學舌)。㊁徒に古人の訓戒などをまねびたて、これを自家の實行に現ぜざるを。

くちまへ（ーマエ）[口前](名) いひぶり。はなしぶり。いひまはし。「―のいゝ男」。

くちまめ[口忠](名) よく多言するを。巧にいふを。(饒舌)。

くちもと[口許](名) ㊀口の邊。㊁口の樣子。くちつき。㊂はいり口。

⌒**くちやう**（ーチヨウ）[區長](名) ㊀北海道又は沖繩縣に於ける區の單獨の行政機關、區に於ける行政事務を掌るもの。㊁市又は町村に於ける區の吏員、市にては市參事會の機關となり町村にては町村長の機關となり、區內の行政事務の執行を補助するもの。

くちやかま·し（しくしきしけれ）[口喧](形、二) ㊀ことば喧しくいふ。ことば煩(ワヅラ)はし。㊁すこしの事にもとがめ立をなす。

⌒**ぐちゆう**[愚衷](名) 自家の心中の謙稱。

⌒**くぢよ**[驅除](名) かりのぞくを。おひたつるを。

⌒**ぐちよく**[愚直](名) ばかしやうぢき。

くちよごし[口汚](名) 飲食物の、少量にして腹に足らず又は味なくして心持よからぬ義にいふ語。

くちよせ[口寄](名) 巫女(ミコ)などが、死人の靈魂を招き寄せ、自分の口を藉(カ)りて、其意を陳べさするを。かみおろし。(邪鬼術)。

くぢら[鯨](名) ㊀【動】遊水類に屬する哺乳動物にして、まつかうくぢら·いわしくぢら·ざとうくぢら·ながすくぢら·せみくぢら·こくぢら等の總稱、海洋中に棲息し魚形をなす、體軀は稍や紡錘形をなし、巨大にして長き概ね五六間乃至十間、皮膚は平滑にして厚く其下に脂肪層あり、後肢なく前肢は全く鰭狀をなし、尾も水平に擴がりて尾鰭狀をなす、鼻孔は頭の頂上にあり、時々水面に浮びて空氣

を呼出するとき、其量多きものは霧の如くに噴出す、皮膚·脂肪及鮮肉は食用に供すべく、特に脂肪層よりは工藝又は器械用に用ふる多量の油を搾(シボ)るべし、鬚もまた工藝用に供せらる。㊁いわしくぢら·ざとうくぢら·ながすくぢら·せみくぢら·こくぢら等の上顎に櫛の齒の如くに列生したる纖維性の角質板の稱、これを鬚といひ又は「をさ」ともいひ若しくは「ひれ」ともいひ、何れも工藝用に供せらる、殊にこくぢらの鬚は「しろくぢら」と稱し、色白くして麗(ウルハ)しく、籠目などに編みて汗衫などとす。㊂「くぢらざし」の略言。――**ざし**[鯨差](名) ものさしの一種、布帛の長さを計るに用ひられ、其一尺は曲尺の一尺二寸に當る、始めはくぢらの鬚を以て造りたるより此名ありしが、今日は多く竹を以て造る。――**じやく**[鯨尺](名)「くぢらざし」に同じ。――**じる**[鯨汁](名) 鯨の白肉即ち白き脂肪層を實としたる味噌汁。――**とり**[鯨取](名) 鯨を捕るを。又、其漁師。――**ぶね**[鯨船](名) 鯨を捕る船。

⌐**くちる**[朽](自)「くつ」の訛。

くちわき[吻](名) (口脇の義) 口の左右の邊。――**きばむ** いまだ幼稚にして經驗少なく才能足らざるをあざけりていふ語。

くちわけ[口分](名) ㊀類に由りて物を區別すると、類別。㊁分前(ワケマヘ)を與ふること。分配。

⌐**くちわる**[口惡](名) よく物事を惡さまにいふと、又其人。

くちゑ[口繪](名) 書物の始めに挿入する繪。

くちを·し（しくしきしけれ）[口惜](形、二) 滿足ならずして歎(ナゲ)かはし、仕遂げ得ずしてうらみ多し。殘念なり。のこりをし。くやし。「―き振舞」。(遺憾)。

くつ［沓、靴、鞜、履］(名) ㊀足に履(ハ)きて歩行する具、足首を殘らず掩(オホ)ひ穿つもの。㊁衣冠束帶のときに用ふる、一種の履物、桐にて作り中に紙を貼(ハ)り外を漆にて塗る。㊂今時はおもに西洋傳來の履物の稱、西洋製又は「ズック」製等あれど、多くは革製にて、ながぐつ・ふかぐつ・はんぐつ等の種類あり。――**をへだててかゆきをかく**［隔靴搔痒］くつの上からかゆき處をかくが如く、思ふやうに手が屆かずして、物事の徹底せざるにいふ。

くつ-つ（ちちつつつる、つれ、ちよ）［朽］(自、た上二) ㊀枯れ腐る。腐れ損ず。（おもに、草木にいふ）。㊁すたる。おとろふ。

くづ［屑］(名) ㊀物の切れ又は砕(クダ)けなどして不用となりたる細片。「紙の―」。㊁よき部分を選び取りたる後に殘れる惡しきもの。かす。すたれもの。

〔**ぐづ**［愚圖］(名) 因循姑息なること。活潑ならぬ性質。又、其性質の者。

くつ-いし［履石］(名) 椽の束柱の下などに用ふる礎石。

くづ-いと［屑絲］(名) 屑となりたる絲。――**おり**［屑絲織］(名) 屑の絹絲にておりたる絹織物。

（**く-つう**［苦痛］(名) ㊀くるしみ。なやみ。㊁［心］精力の減退又は要求の不滿足等より生ずる感情。

（**ぐ-づう**［弘通］(名) 教法のあまねく世上にひろまりわたること。

くつ-がた［履楦］(名) 靴(クツ)を拵(コシラ)ふる型(カタ)。

くつ-がた［沓形］(名) 宮殿の棟(ムネ)の兩端に付くる飾、古昔は沓(クツ)の形につくりしより此名あり、火よけのまじなひといふ。(鴟尾)。

くつ-かぶり［沓冠］(名) 折句の一種、短歌の題の假名を、每句の首と尾とによみこむこと。

くつ-がへ-す（さしすせ）［覆］(他、さ四)（くつしかへす轉）㊀ひっくりかへす。うらがへす。㊁たふす。こかす。㊂ほろぼす。やぶる。「國を―」。

くつ-がへ-る（らりるるれれ）［覆］(自、ら四)（くつれかへる轉）㊀ひっくりかへる。うらがへる。㊁倒(タフ)る。㊂やぶる。ほろぶ。「三軍―」。㊃動詞に添へて、其意味を強むるに用ふ。「醒て―」。

くづ-かみ［屑紙］(名) かみのくづ。

（**くっ-き**［崛起］(名) 山などの高く起ること。又、にはかに起りたつこと。

（**くっ-きやう**（ーキヨウ）［屈強］(名) 心ねぢけて強くはりあふこと。

（**くっ-きやう**（ーキヨウ）［究竟］(名)（究竟の音便）㊀つめ。けっきよく。おゆうきよく。㊁最もすぐれたること。最もよきこと。「―の武士」。

（**くっ-きよく**［屈曲］(名) をれまがること。かゞみまがること。(屈折)。

〔**くっ-きり**(名、副) きは立ちて見ゆるさまにいふ語。きはやか。くきやか。(分明)。

〔**くつ-くつ**(副) 笑ふさまの、くす〳〵より稍や意味強く且うは〴〵に現れたるさまにいふ語。

〔**くっ-くっ**(副) ㊀こみあげて、殆ど呼吸のつまる程に笑ふさまにいふ語。㊁精を出すさまにいふ語。

〔**ぐづ-ぐづ**［愚圖愚圖］(名、副) 活潑ならぬさま又は姑息なるさまにいふ語。又、其性質の人。

くつくつ-ぼうし［寒蟬］(名)［動］（くつ〳〵は鳴き聲）「つくつくぼうし」に同じ。(蛁蟟)。

廿**くつ-こ**［口籠］(名) 牛馬の人を噛(カ)まぬやうに、其口に篏(ハ)むる籠。

くつ-し［沓師］(名) 沓(クツ)を造る職人。くつや。

（**くっ-し**［屈指］(名) ㊀指を屈して數ふること。㊁多きものゝ中より、數へ立つるばかりにすぐれてあること。「―の勇士」。

くづし［崩］(名) くづすこと。又、くづしたるもの。――**がき**［崩書］(名) ㊀字畫を省略して書くこと。又、其文字。㊁草書にてかくこと。又、其文書。――**もん**［崩紋］(名) 普通の紋を略したるもの。

くつ-じき［沓敷］(名) くつの中に敷くもの。

くつ-した［沓下］(名) たびの一種、沓を穿(ハ)くに著くるもの。くつたび。(靴下、韈)。

（**くつ-じゆう**［屈從］(名) をれしたがふこと。

（**くつ-じよく**［屈辱］(名) はづかしめを受けて面目を失すること。おさへつけられて恥辱を受くること。

（**くっ-しん**［屈伸］(名) かゞむとのびると。又、かゞめるとのばすと。

くっ-す（せしすずるすれせよ）［屈］(自、さ變) ㊀まがる。かゞむ。折る。㊁縮(チヂ)む。又、むすぼる。「心氣―」。㊂撓(タワ)む。又、つまる。「議論窮に―」。㊃服從す。したがふ。㊄下位に沈む。㊅理ありて非とせらる。

くっ-す（せしすずるすれせよ）［屈］(他、さ變) ㊀まぐ。かゞむ。をる。㊁おさへつく。おしとむ。くじく。「威武も―ること能はず」。㊂服從せしむ。したがふ。㊃下位に置きてのぼらしめず。㊄理あるも非として之へたぐ。

くづ-す（さしすせ）［崩］(他、さ四) ㊀砕(クダ)きこぼつ。「土手を―」。㊁破り散らす。「敵陣を攻め―」。㊂さまを亂す。あしくす。㊃省略す。はぶく。㊄くづしがきをなす。

くつ-ずみ［沓墨］(名) 革沓(カハグツ)に塗りて光澤を出すもの。(靴墨)。

くつ-ずれ［沓摩］(名) はく沓(クツ)のために足の皮膚のすれやぶるゝこと。

（**くっ-せつ**［屈折］(名) ㊀かゞまりをること。㊁【理】波動が異なる媒體内に入るとき、其方向を變ずること、音又は光等の屈折これなり。――**せん**［屈折線］(名)【理】波動が異なる媒體内に入りて後に進む方向。――**りつ**［屈折率］(名)【理】入射線及屈折線が法線となす二つの角の正弦の比。

くつ-ぞこ［沓底］(名) ㊀沓の底。㊁【動】「したびらめ」の一名。

（**くっ-たく**［屈託］(名) ㊀おもひ屈すること。其事をのみ心配すること。(懊惱)。㊁くたびれあくこと。つかれていやになること。

くつ-たび［沓足袋］(名) くつした。(靴下)。

〔**くっ-つき**(名) ㊀くっつくこと。㊁くっつきあひ。――**あひ**（ーアイ）(名) 男女私に通ずること。又、できあひの夫婦。

〔**くっ-つく**（かきくくけけ）(自、か四) ㊀接合す。つく。㊁隨從す。したがふ。㊂男女ひそかに通ず。又、媒者なしに夫婦となる。

くつ-づくり［沓造］(名) くつをつくること。又、其職工。

くつ-なほし（ーナオシ）［沓直］(名) くつの破損をつくろふこと。又、其業の人。

〔**ぐっ-と**(副) ㊀一心に。ひといきに。「―飲み込む」。㊁物にゆきつまるさまにいふ語。「―差し詰まりて、返辭が出ぬ」。㊂一際(キハ)すぐれて。「―よい品」。

くつ-ぬぎ［沓脫］(名) 履物(ハキモノ)を脫(ヌ)ぐところ。――**いし**［沓脫石］(名) 戸口又は椽側(エンガハ)のあがり口に、くつぬぎのためにすゑある石。

くつ-ぬぐひ（ーグイ）［沓拭］(名) 室に入る人の靴につきたる土を拭ふために、玄關先などに設くるもの、棕櫚の皮などにて編みてつくる。

くつ-ばけ［沓刷毛］(名) くつを拭(ヌグ)ひ又はくつ墨の上をこすりて光澤を出すに用ふる刷毛(ハケ)。

廿**くつ-ばみ**(名)（口食の義）「くつわ」の古名。

くつ-びき［沓引］(名) 織機の附屬具、麻繩にてつくり、其一端を織る人の足にかけ、これを引きてあぜを操(アヤツ)るもの。くつを。(臥機)。

（**くっ-ぷく**［屈伏］(名) おそれしたがふこと。服從すること。(屈服)。

くつ-べら［沓箆］(名) 半沓を穿つに用ふる箆(ヘラ)、これを踵(カカト)にあてゝ穿ては、足容易に靴に入る。

廿**くつ-ぼ-る**（ーオル）（らりるるれれ）［頽］(自、ら四)（崩墜の義）くづる。

くつ-まき［沓卷］(名) 箭の篦(ノ)に鏃(ヤジリ)をつけたる所。

くつ-みがき［沓磨］(名) くつをみがき光澤を出すこと。又、其業のもの。

〔**くつ-づめ**［苦爪］(名) 苦勞すれば爪の長じ方早しといふこと。

くつ-や［沓屋］(名) くつをつくり又は賣る職業の人。又は其職業の家。

くづ-や［屑屋］(名) 紙屑を買ひ集め又は賣買する商人。かみくづかひ。

くづ-る（れれるるるれれよ）［崩、頽］(自、ら下二) ㊀砕(クダ)けこはる。「山―」。㊁破れみだる。「敵陣―」。㊂わるくなる。やぶる。「行儀―」。

くづれ［崩、頽］(名) ㊀くづるゝこと。くづれたるもの。㊁集會などの解散、おしまひ。「とむらひの―」。

廿**くつろ-か**［寬］(名) くつろぎたるさまにいふ語。

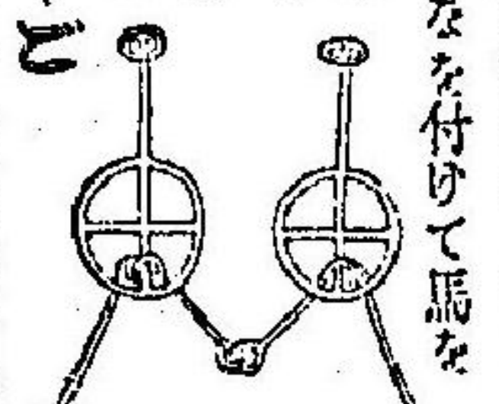
くつろぎ［寬］(名) くつろぐこと。又、餘地。

くつろ-ぐ（がぎぐぐげげ）［寬］(自、か四) ㊀ゆるやかになる。ひろくなる。㊁こゝろもちのび〳〵する。こゝろよくなる。㊂悠然としてあり。ゆったりとしてあり。

くつろ-ぐ（げげぐぐるぐれげよ）［寬］(他、か下二) くつろがしむ。ゆるやかにす。ゆるむ。ひろぐ。

〔**くつろげる**［寬］(他)「くつろぐ」の訛。

くつ-わ［轡］(名) ㊀（口輪の義）馬の口に含ませる具、金屬にてつくり、これにたづなを付けて馬を御するに用ふ、古昔のは、多く環の中に十文字を置きたる形のものなり。くつばみ。(銜)。㊁紋所の名、圓の中に十文字を置きたる形を描(カ)きたるもの。――**どころ**［轡心］(名) 馬を御するたづなのあやつりの工合。――**だすけ**［轡助］(名) 轡に添ふる飾、先端は房(フサ)になりて馬の口の兩脇に垂る、おもに組絲にて作る。たすけ。廿――**づら**［轡］(名) ㊀「たづな」の古言。㊁くつわのさき。――**むし**［轡蟲］(名)【動】直翅類中螽蟖(キリギリス)科に屬する蟲、長形の脚を有しよく跳躍す、綠色と褐色との二種あり、鳴く聲高く喧(カマビス)し、がちゃ〳〵。(絡々兒)。



［くつわ］

〔**くつわ**［忘八］(名)（古昔、伏見の遊里撞木町（一に江戸の遊里ともいふ）の町筋を十字形に割りて、其形轡に似たるより此名起るといふ）㊀遊女屋の主人。(孤老)。㊁遊女屋又は遊里の異稱。――**や**［忘八屋］(名) 遊女屋の異稱。

廿**くつ-わら**［沓藁］(名) くつしき。

廿**くづ-を-る**（るれれるるるれれよ）［頽］(自、ら下二) よわる。ひるむ。おづ。「われ亡くなりぬとて、口惜しう思ひ―な」。

くて［湫］(名) 低くして沼などの如くになりたる土地。

（**ぐ-てい**［愚弟］(名) 自分の弟の謙稱。

（**く-てう**（ーチヨウ）［口調］(名) ことばのいひまはし。文句の調子。「―の善い文」。

（**く-でう**（ーヂヨウ）［九條］(名) 九布(ココノノ)に製したる袈裟。

（**く-でま**［工手間］(名) 工人の賃銀。(作料)。

（**く-てん**［句點］(名) 句の切目に志るす點。

廿**く-でん**［功田］(名) 古昔、功績ある者に賜はりし田地。

（**く-でん**［口傳］(名) ㊀言語にて傳ふること。くちづたへ。㊁奥義などの秘密を口授すること。

〔**ぐでん-ぐでん**(名) 酒に醉ひて、ぐたぐたとなりたるさまにいふ語。「―に醉っぱらふ」。

く-ど［曲突］(名) ㊀竈(カマド)の後口の孔、けむりだし、㊁轉じて、かまど。

く-ど［苦土］(名)【化】白色の粉末、即ち、酸化「マグネシウム」の稱。

（く-ぜり［句讀］(名) 文章の中の一小區分の稱。讀は切りて讀む所にして、句は文章中の一段なり。——てん［句讀點］(名) 句點と讀點と。——をきる 句讀點をほどこす。

く-どき［口說］(名) 一くどくと。くどく言。二芝居狂言にて、口說の文句のときに行ふふり。——うた［口說歌］(名) そゝりぶしの一種、なげぶしに謠ふもの、昔時、吉原返りの遊客など、よく鼻唄にて謠へり。

（く-どく［功德］(名) 【佛】善行のめぐみ他に及ぶを。行己に足りて德外に及ぶと。又、積善の力。——え［功德衣］(名) 【佛】袈裟の異稱。

く-ど・く（かきくけけ）［口說］(自、か四) 一くど〳〵しく繰り返していふ。二えきりに還(マヽ)り說く。うるさく言ふ。三意に從はしめんといろ〳〵に說きつく。

くど-くど・し（しく しき しけれ）(形、三) いとくどし。くだ〳〵し。

く-ど・し（く し き けれ）［諄］(形、一) わづらはし。しつこし。

（ぐ-どん［愚鈍］(名) ばか。のろま。

く-どん-の-をしへ［瞿曇敎］(名) 釋迦牟尼の說きし敎、卽ち佛敎。

（く-ない［區內］(名) 其區の中。

（く-ない-くわん［宮內官］(名) 宮內省に出仕する高等官。

（く-ない-しやう［宮內省］(名) 一古昔の八省の一、宮中の御料調度の整理などを掌りしところ。二宮內大臣の統轄の下に屬し、其監督を受けて帝室に關する一切の事務をとりあつかふ所。又、宮內大臣が處理する事務の全體の稱。

（く-ない-だいじん［宮內大臣］(名) 帝室に關する一切の事務を統轄し、所部各官を統轄し、かねて華族を監督する親任官。

（く-なう［苦惱］(名) くるしみなやむと。なやみ。くるしみ。「娑婆の—」。

卄く-など-の-かみ (名) 道のちまたの神。

く-に［國］(名) 一國家。二國土。三君主又は諸侯の政權の全體の稱。「—亡山河在」。四古昔の行政區劃の一、卽ち、郡を綜合したる名稱。「山城—」。「大和—」。五封土。知行所。六ふるさと。故鄕。七京地以外の地。ゐなか。地方。「—もの」。

卄く-に-うど［國人］(名) くにびと。

卄く-に-が［陸］(名) くが。

く-に-がた［國形］(名) 國人の狀態又は國土の形勢。

く-に-がた［國方］(名) 地方。「—の武士」。

く-に-がへ［國替］(名) 昔時、大小名の領地をかへ移されしと。(移封)。

く-に-がら［國柄］(名) 一國の成立せる狀態。國體。

（く-に-く［苦肉］(名) 自分の身を苦しめて、敵をあざむくと。例へば故意に刑罰を受けて、敵にいつはり降りて、あざむくなどの類。「—の計」。

く-に-ぐに［國國］(名) それ〴〵の國。かくこく。

く-に-ことば［國言葉］(名) 地方の方言。ゐなかことば。くになまり。

く-に-ざかひ［國境］(名) 國の境界。くにのきり。くにのはて。

卄く-に-じやうらふ［國上﨟］(名) 國方の貴婦人の稱。

く-に-たみ［國人］(名) （もと「くにびと」といひしを、後嵯峨天皇のとき、御諱の邦仁と音似通ふためにいひかへたるなりといふ）一國の人民。こくみん。

卄く-に-つ-かみ［地祇］(名) 國土を守護したまふ神。あまつかみの對。(地神、國神)。

卄く-に-つ-こ［國造］(名) 「くにのみやつこ」に同じ。

く-に-づめ［國詰］(名) 昔時、大小名及武士の江戶に詰め居るを江戶詰といひしに對して、大小名は己の領地に武士は其主君の領地に居りしとの稱。

卄く-に-つ-もの［國津物］(名) 土地に作りたる產物。(土毛、土物)。

卄く-に-つ-やしろ［國津社］(名) くにつかみを祀(マツ)りたる社。(國社)。

く-に-なまり［國訛］(名) 一地方言語の正しからぬ習慣。又、其習慣ある言語。ゐなかなまり。ゐなかことば。二我領地又は鄕里の言語。

卄く-に-の-おや［國親］(名) 天皇の御親を申し奉る語。

卄く-に-の-かみ［國守］(名) こくしゆ。

卄く-に-の-ちぶさ［國乳房］(名) 國の恩をたとへいふ語。「—の賴もしきかな」。

卄く-に-の-はは［國母］(名) 皇后又は皇太后などを申し奉る語。こくぼ。こくも。

卄く-に-の-はしら［國柱］(名) 大臣の異稱。

卄く-に-の-みやつこ［國造］(名) 上古、國といふ一の行政區劃を主宰せし御臣(ミヤツコ)。みやつこ。

卄く-に-の-をさ［國長］(名) 國の守宰者卽ちくにのみやつこ・こくしゆ等の稱。

卄く-に-はら［國原］(名) 國を廣く見ていふ語。「國見をすれば—は」。

く-に-ばら［國腹］(名) 大名などの子の其領地にある婦人の腹に產まれたると。又、其子。「—の男子」。

く-に-ばらひ［國拂］(名) 其國を追放せらるゝと。

く-に-びと［國人］(名) くにもの。又、くにたみ。

く-にふ［口入］(名) 一くちいれ。二訴訟。

く-に-ぶぎやう［國奉行］(名) 國々の治績を視察しまた其地方に於ける訴訟を判斷せし職名。

卄く-に-ぶみ［國文］(名) 古昔、諸國より貢物に添へて奉りし文書。

卄く-に-み［國見］(名) 國の形を高き處より見ると。

卄く-に-みたま［國御魂］(名) 國を草創したる德のある神。

く-に-めぐり［國廻］(名) 國々をめぐりあるくと。

く-に-もち［國持］(名) 一昔時、大名の一ケ國以上を領有せしと。二國持大名の略言。——だいみやう［國持大名］(名) 昔時、一ケ國以上を領有せし大名の稱。(國守)。

く-に-もの［國者］(名) 一地方の人。ゐなかもの。二同鄕の人。ところのもの。

（ぐにや-ぐにや (名、副) 軟(ヤハ)かく力なきさまにいふ語。ぐだ〳〵。

卄く-に-わかれ［國別］(名) 他國へ旅立すると。

く-に-わけ［國別］(名) 一國の區別。二國々によりて事を區別すると。

く-にん［公人］(名) 一古昔、公文所に仕へし小役人。二古昔、禁中の地下の小役人。——ぶぎやう［公人奉行］(名) 鎌倉時代に、政所又は問注所にて奉行の進退をつかさどりし役名。

卄く-にん［宮人］(名) 官仕(ミヤツカヘ)の人。

卄く-ぬ-が［陸］(名) くが。

卄く-ぬが-の-みち (名) 北陸道の古名。

く-ぬ-ぎ［櫟］(名) 【植】殼斗科に屬する木、高さ二三丈に達す、葉は栗に似て形細長く周邊に刺あり、花もまた栗に似る、雌雄異株にして果實はどんぐりと名づけ、材木はおもに薪炭用に供せらる。くのぎ。(櫪、橡、櫟)。

卄く-ぬ-ち［國中］(名) 國內。

（く-ねつ［苦熱］(名) くるしきほどの暑氣。ひどいあつさ。

く-ね-くね［曲曲］(名、副) 折れまがりて直からざるさまにいふ語。「—したる坂」。——・し（しく しき しけれ）［曲曲］(形、三) 一心直からず。根性わるし。(執拗)。二くねくねとしてあり。直からず。

くねり［曲］(名) くね〳〵すると。——みち［曲路］(名) くね〳〵したる路。(羊腸)。

くね・る（ら り る る れ れ）［曲］(自、ら四) 一折れまがる。くね〳〵す。二性質ねぢけまがる。ひがむ。三うらみかこつ。不平に思ふ。「—涙の手枕」。

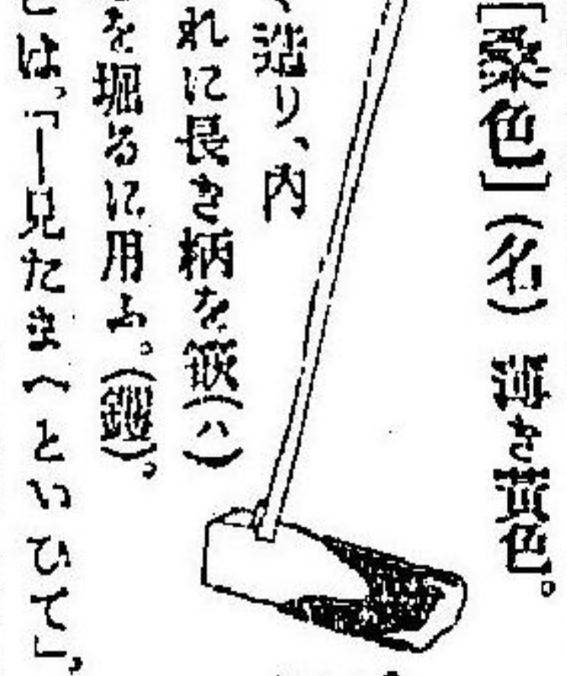
くねんぼ［九年母］(名) 【植】芸香科に屬する木、橘に同じくして刺少なく葉長し、果實は蜜柑に似て酸甘く、皮も食用に供せらる。(香橙、香橘)。

卄くの-え-かう［薰衣香］(名) 衣に薰(クユ)らする一種の香。

くの-ぎ［櫟］(名) 【植】「くぬぎ」に同じ。

くは［桑］(名) 一【植】桑科に屬する木、葉にて蠶を飼養す、葉より先に花を着け、小さき苺(イチゴ)の如き實を結ぶ、材木は木質堅固にして木理麗(ウルハ)しく諸種の用に供せられ、樹皮の纖維は製紙の料に供せらる。二紋所の名。三「くはいろ」の略言。——いちご［桑苺］(名) 桑の實、其形苺に似たるより名づく。(椹)。——いろ［桑色］(名) 薄き黃色。

くは［鍬］(名) 一種の農具、頭は一枚の鐵にて扁(ヒラ)く造り、內部に向ひて曲がり、これに長き柄を嵌(ハ)めたるものにして、地を堀るに用ふ。(钁)。

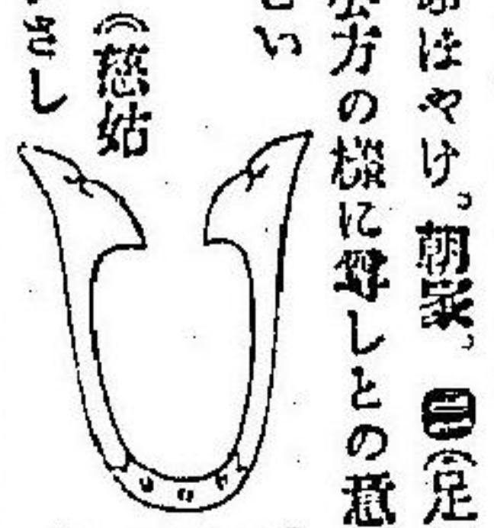


［くは］

卄くは (感) これは。さは。「—見たまへといひて」。

卄く-ばう［公方］(名) 一おほやけ。朝家。二（足利義滿の頃より始まる、もと公方の樣に尊しとの意にて公方樣と呼びしに起るといふ）征夷大將軍の稱。

くは-がた［鍬形］(名) （慈姑形の略言）兜の附屬具、まびさしの上より角の如く二本聳え立てるものゝ稱にして、端は外へ反(ソ)り中に曲がりて凹(クボ)み、恰もくわゐの葉を橫の方より見たる樣に似るより此名あり。「—打ったる兜」。(九方形)。



［くはがた］

（く-ばく［瞿麥］(名) 【植】「なでしこ」の異稱。——たう［瞿麥湯］(名) 古昔、えなの出ぬを治するに用ひし煎藥。

卄くは-ご［桑兒］(名) （桑を食ふ子の義）【動】蠶(カヒコ)の異稱。

くは-こぶ［桑瘤］(名) 桑の木に生ずるさるのこしかけの類。

くは-ざけ［桑酒］(名) 桑の實を材料として製したる酒、味は味醂に似て稍や酒精分強し、丹波國八木の名產。

くは・し（しく しき しけれ）［精］(形、二) 一つまびらかなり。つぶさなり。明細なり。(委)。二明知せり。通達せり。熟練せり。たくみなり。「藝に—」「道に—」。

くは・し（しく しき しけれ）［細］(形、二) 一こまかし。ちひさし。二卄うるはし。たへなり。よし。「—き妹」「—き女」「名—」。(美)。卄——ほこちたる-の-くに［細矛千足國］(名) （細矛は「ち」の枕詞にて、萬事不足なき國の義。一說に、よき兵器の數多き國の義ともいふ）上古、日本國の美稱。卄——め［細女］(名) うるはしき婦人。(美女)。

くはした-ねんき［鍬下年期］(名) 十年以內に成功し能はざる開墾に對し、官廳が願出により、地目變換まで、原地價により地租を徵收する三十年以內の年期。又、官有地を開拓して民有に歸したる土地に對し、官廳が願出により、其素地相當と認むる地價を定め、これによりて地租を徵收する十年以內の年限。

（くは・す（さ し す す せ せ）［食］(他、さ四) 一くらはす。二あ

ざむく。だしぬく。㊂仕向く。「饑饉を—」。

くはずいも（クワズイモ）「不食芋」(名)〔植〕「いしいも」の一名。

くはずぎらひ（クワズギライ）「不食嫌」(名)㊀其物を食ひしこともなく其味を知らずして、たゞ其物を食ふをきらふこと。㊁其物事の妙味を經驗せしこともなくして、たゞ其物事を嫌ふこと。

〔**くはせる**「食」(他)「くはす」の訛。

〔**くはせもの**（クワセモノ）「食物」(名)にせもの。がんぶつ。

くはぞめ（クワゾメ）「桑染」(名)桑色にそめたるもの。

くはた（クワタ）「桑田」(名)桑を植ゑつくりたる田圃。

くはだつ（クワダツ）〔てゝつ、つる、つれ、てよ〕「企」(他、た下二)思ひ立つ。營み始む。しはじむ。もよほす。「事を—」。

くはだて（クワダテ）「企」(名)くはだつること。いとなみ。もよほし。「謀反の—」。〔—る「企」(他)「くはだつ」の訛。

くはちや（クワチヤ）「桑茶」(名)桑の葉を茶の如くに製したるもの。

くはつみ（クワツミ）「桑摘」(名)桑の葉を摘みとること。又、其人。

くははら（クワハラ）「桑原」(名)雷鳴のとき、落雷を避くるために唱ふる咒語。

くははる（クワワル）〔ら、り、る、る、れ、れ〕「加」(自、ら四)㊀添はる。かさなる。㊁多くなる。ふゆ。ます。㊂其列に入る。「御相に—」。㊃およぶ。いたる。「威四海に—」。

〔**くはふ**（クワホウ）「句法」(名)詩文などの句をつゞる方法。

くはふ（クワウ）〔へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ〕「加」(他、は下二)㊀添ふ。かさぬ。㊁多くす。ふやす。ます。㊂高くす。のぼす。あぐ。「位を—」。㊃著く。當つ。置く。「手を其上に—」。㊄仕向をなす。為むく。㊅加算をなす。

くはふ（クワウ）〔へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ〕「銜」(他、は下二)口に入れ輕く嚙みて持ち支ふ。「筆を口にくはへて」。

くはへ（クワエ）「加」(名)㊀くはふること。ましふやすこと。㊁酒を盛る器、銚子に酒を差し加ふるためのものにして、形水さしに似る。

くはへぎせる（クワエギセル）「銜煙管」(名)煙管を口にくはへながら煙草を吸(ス)ふこと。

〔**くはへる**(他)「くはふ」の訛。

〔**くはまゆ**（クワマユ）「桑繭」(名)自然生の蠶(カヒコ)が桑の木にかけたる繭。

くはむし（クワムシ）「桑蟲」(名)【動】「かひこ」の異稱。

〔**くはや**（クワヤ）(感)これよ。されば。

〔**くはゆき**（クワユキ）「烏頭」(名)馬の後足のそと節。からすがしら。

〔**くはゆる**(他)「くはふ」の訛。

くばり「配」(名)㊀くばること。㊁括花にて、木の叉(マタ)などを割り裂き筒の中に入れ、それにて花を支ふること。又、其木の叉。「花—」。—**つ・く**〔け、け、く、くる、くれ、けよ〕「配付」(他、か下二)㊀くばり渡す。くばり當つ。㊁それ〴〵適當なる位地に置く。—**つけ**「配付」(名)くばりつくること。くばりつけたるありさま。「—の工合」。

くばる〔ら、り、る、る、れ、れ〕「配」(他、ら四)㊀分けて與ふ。割り付けておくる。「金を—」。(頒)。㊁行き渡らす。普く届かす。「目を—」。㊂それ〴〵適當なる所に置く。㊃つれあひとなす。めあはす。

くばる〔ら、り、る、る、れ、れ〕「燒」(自、ら四)(「くべらる」の轉)火に入りて燒く。「衣服が—」。

くひ（クイ）「杙」(名)㊀地に打ち込み又は埋め立てたる長き材木。「柵の—」。「榜示—」。(杭、橛)。㊁古昔、禁中にて、時をしらするためにたてし長き材木。ときのくひ。「四つの—」。「申の—」。

くひ（クイ）「株」(名)木のきりかぶ。(杌)。—**をまもる**「守株」(支那の宋の人が、一たび兎が田の中の株に觸れ死にて、手を勞せずにこれを獵しより、鋤をすてて耕を已め、更に兎を獲んことを思ひて其株をまもりしとの故事に出づ)變に通せず理に暗く、徒に以前の物事を頑守するにいふ。—**をまもりうさぎをまつ**「守株待兎」(「守株」と同一の故事に出づ)さきの幸福は偶然の遭遇なるにも關(カカハ)らず、再び斯かる事あらんかと思ひ、自家のなすべき事をすてゝ、空しく心待ちに待ち居ることの愚かなるにたとへいふ。

くび「頸」(名)㊀頭部と體部とを連ぬる細き部分の稱。㊁若物の頸にあたる部分の稱。(領、襟)。「衣の—」。㊂凡て頸の形したる所の稱。「手—」。「足—」。—**をくくる** 頸に紐又は繩などをまとふ。又、くびをつるして死ぬ。—**をつる** 紐又は繩などを高き處にかけ、これを以て頸をしめ體を宙に吊りて死ぬ。又、頸に紐又は繩をかけてつるしあぐ。

くび「首」(名)かしら。かうべ。あたま。しるし。首級。〔—**にする** 首を切る。又、免職・解雇又は除名するにいふ。〔—**になる** 首を切らる。又、免職・解雇又は除名せらるゝにいふ。

（**ぐび**「具備」(名)㊀たりとゝのふること。そなはること。㊁十分にとゝのふること。そなふること。

くひあはせ（クイアワセ）「食合」(名)㊀併せて食へば、害となる物を併せて食ふこと。㊁器具の隅などに材と材との相交はらすこと。又、其所。

くひあひ（クイアイ）「食合」(名)㊀かみあひ。㊁器具の隅などに、材と材との相交はること。

くひあまり（クイアマリ）「食餘」(名)食うてのこりたるもの。

〔**くひいぢ**（クイイジ）「食意地」(名)物をくひたがる慾情。

廿**くびいれ**「首入」(名)斬りたる首を入るゝ器。「くびかけ」。

くびかし「頸枷」(名)頸に掛くるかし。(鉗枷)。

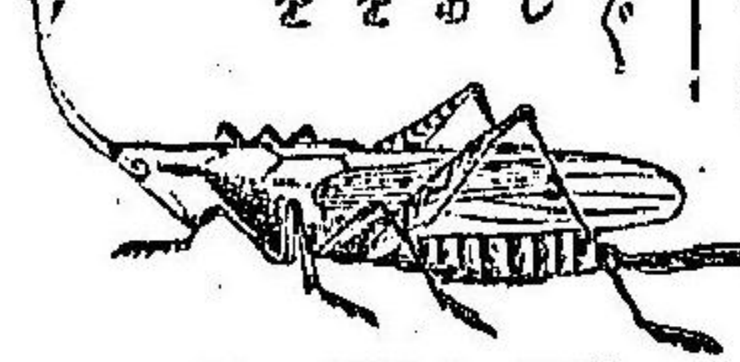
くびかせ「頸枷」(名)前條に同じ。

廿**くびかみ**(名)袍又は狩衣(カリギヌ)などの襟(エリ)の稱。ばんりやう。(盤領)。

くびき「頸木」(名)車の轅の先につくる横木、其車を挽く牛の頸に掛くるもの。(軛、衡)。—**をあらそふ**「爭衡」互に拮抗して相下らざるにいふ。

くひきり（クイキリ）「食切」(名)食ひ切ること。

くびきり「首斬」(名)㊀死罪にあたる人の首を斬ること。ざんざい。㊁ざんざいに處せらるゝ人の首を斬る人。たちとり。(劊手)。—**だい**「首斬臺」(名)首斬の刑に處せらるゝ人をあがらせて首を斬る臺。(斷頭臺)。—**ちやう**「首切疔」(名)頸の周圍に發する癰。—**ば**「首斬場」(名)首斬の刑を行ふ場所。—**ばった**(名)【動】直翅類中きりぎりす科に屬する蟲、圓錐形の頭を有し鳴聲高し、綠色と淡褐色との二種あり、物などを嚙ませて體の一部分を引けば、頸切るれど嚙みたるものを放さずといふより此名あり。



[くびきりばった]

くひきる（クイキル）〔ら、り、る、る、れ、れ〕「食切」(他、ら四)㊀齒にて嚙み切る。㊁食ひ終はる。くらひつくす。㊂全く手切となす。無關係となす。

くびきる〔ら、り、る、る、れ、れ〕「首斬」(他、ら四)㊀首を斬る。㊁斬罪の刑に處す。㊂免職す。解雇す。除名す。

くびくくり「首縊」(名)首をくゝりて死ぬること。又、其死人。

〔**ぐびぐび**(名、副)酒などを味ひ飲むさま又は少しづゝ飲みて多量を飲むさまにいふ語。

くひこみ（クイコミ）「食込」(名)くひこむこと。

くひこむ（クイコム）〔ま、み、む、む、め、め〕「食込」(自、ま四)㊀食ひ入る。㊁蝕す。侵入す。「他人の選擧區に—」。㊂商業などに損耗多くして、資本を次第に失ふ。㊃罪狀發覺して捕へらる(博徒仲間などにいふ)。

くひごろ（クイゴロ）「食頃」(名)其物を食するに最も味よき時期。

くひさし（クイサシ）「食止」(名)食ひ盡くさずして止むること。又、其食物。くひのこし。

くひさす（クイサス）〔さ、し、す、す、せ、せ〕「食止」(他、さ四)くひ盡くさずして止む。くひのこす。

くびじつけん「首實檢」(名)㊀古昔の戰爭にて、味方の得たる敵首の眞否をあらたむること。㊁すべて首級の眞否を檢査すること。「松王丸の—」。

くひしばる（クイシバル）〔ら、り、る、る、れ、れ〕「喰締」(自、ら四)齒と齒と強く合はせて、口を閉づ。

くひしろ（クイシロ）「食代」(名)くひれう。

（**ぐびじんさう**（グビジンソウ）「虞美人草」(名)【植】「ひなげし」の一名。

〔**くひしんばう**（クイシンボウ）(名)くひいぢの張りたるもの。

くびす「踵」(名)足蹠の後方の地に著する部分の圓かなる所。かゝと。あくと。(跟)。—**をせっす**「接踵」往復するものゝ前後相續(ツヅ)くにいふ。—**をかへす**「返踵」後へかへり行く。

くひすぎ（クイスギ）「食過」(名)過度に物を食ふこと。又、其ために胃腸などをいたむること。過食。

くびすぢ「頸筋」(名)頸の後部。えりくび。(首筋)。

くひぜ（クイゼ）「株」(名)木の切りかぶ。くひ。

くびせん「首錢」(名)首になる所を助かるために出す料。

くひぞめ（クイゾメ）「食初」(名)小兒の生れて百二十日目に、始めて飯を食せしむること。又、其儀式。—**もやう**（モヨウ）「食初模樣」(名)食初に供ふる椀にある模樣、多くは蒔繪にて鶴・龜・松・竹・梅などを畫く。

くびだい「首代」(名)くびせん。

くひだうらく（クイドウラク）「食道樂」(名)いろ〳〵食物を吟味して食ふ道樂。

〔**くひたふし**（クイタオシ）「食倒」(名)㊀たゞ食ひて價を拂はぬこと。又、其人。㊁あそびぐひ。くひつぶし。

〔**くひたふす**（クイタオス）〔さ、し、す、す、せ、せ〕「食倒」(他、さ四)㊀食ひて其代を拂はず。無報酬にて他人の物を食す。㊁くひつぶす。

〔**くひだふれ**（クイダオレ）「食倒」(名)㊀飲食をおごりて、生活費の多くをこれにつかふこと。又、其ために貧困に陷ること。㊁くひつぶす。

くびだま「頸玉」(名)㊀上古、頸にかけし玉の飾、即ち、瓔珞(ヤウラク)の類。㊁猫・犬などの頸に掛くる環。(頸線)。㊂くび。頸部。

廿**くひぢ**（クイヂ）「蹊」(名)(杙路の義といふ)古昔、獸を捕る裝置、即ちわなの類。

くひちがひ（クイチガイ）「喰違」(名)くひちがふこと。又、くひちがふ所。

くひちがふ（クイチガウ）〔は、ひ、ふ、ふ、へ、へ〕「喰違」(自、は四)㊀物事相合はず。ゆきちがふ。(齟齬)。㊁犬牙の如くに彼此出入して相交はる。(交錯)。

（**ぐひつ**「愚筆」(名)自分の手蹟の謙稱。

くひつく（クイツク）〔か、き、く、く、け、け〕「食付」(自、か四)㊀くらひつく。㊁ひっしとりつきて離れず。

〔**くびったけ**「頸丈」(名)㊀地上より頸までの高さほど。「水が—ある」。㊁身の程を忘るゝまで、色香に迷ひゐること。

〔**くびったま**「頸玉」(名)くび。頸部。

くびづな「頸綱」(名)犬の頸に掛くる綱。又、囚人などの頸に絡(マト)ふ繩。くびなは。

〜**くびっぴき**［頸引］（名）「くびひき」の訛。

〜**くひ‐つぶし**（クイ）［食潰］（名）くひつぶすを。又、其人。

〜**くひ‐つぶ・す**（クイ）（さしすすせせ）［食潰］（他、さ四）㊀報酬又は代價を拂はずして徒に食事す。㊁かせがずに生活して資産を傾く。

廿**くひ‐つみ**（クイ）［食摘］（名）蓬萊かざり。（蓬盤）。

くひ‐つ・む（クイ）（めめむむむるむれめよ）［食詰］（自、ま下二）糊口の道を失す。もはや活計を立つる能はず。

くひ‐つめ（クイ）［食詰］（名）食ひつむるを。又、其人。

——**もの**［食詰者］（名）糊口の路を失ひたる人。

廿——**る**［食詰］（自）「くひつむ」の訛。

〜**くひ‐て**（クイ）［食人］（名）食ふ人。又、よく食ふ人。

くひ‐とめ（クイ）［食止］（名）くひとむるを。防ぐを。

くひ‐と・む（クイ）（めめむむむるむれめよ）［食止］（他、ま下二）押しとゞむ。ふせぎとゞむ。

〜**くひとめる**［食止］（他）「くひとむ」の訛。

〜**くひな**（クイナ）［水鷄］（名）【動】涉禽類に屬する鳥、嘴長く其末部に軟皮を被る、足は長くして趾は自在なり、水邊に棲息し小魚蟲類などを食す、鳴く聲恰も戸を叩くに似たるより、歌などに其鳴くをたゝくと詠めり。（秧鷄）。

〜**くひ‐にげ**（クイ）［食逃］（名）物を食ひ代價を拂はずして、其まゝ逃ぐるを。又、其人。

くひ‐のき（クイ）［食退］（名）くひのくを。

くひ‐の・く（クイ）（かきくくけけ）［食退］（自、か四）㊀食ひ終りて其座を退く。㊁食ふを止む。

くひ‐のこし（クイ）［食殘］（名）くひのこすを。くひのこしたるもの。

くひ‐のこ・す（クイ）（さしすすせせ）［食殘］（他、さ四）くひかけてやむ。くひさす。

くび‐のざ［首座］（名）くびきらるゝときにすわる席。「——になほる」。

〜**くひ‐はぐれ**（クイ）［食外］（名）くひはづすを。又、其人。

〜**くひ‐はづし**（クイ）［食外］（名）くひはづすを。

〜**くひ‐はづ・す**（クイ）（さしすすせせ）［食外］（名）㊀食ふべき時を失す。㊁生活すべき道を失す。㊂利を取得すべき機を失す。

くび‐は・ぬ（ねねぬぬぬるぬれねよ）［首撥］（他、な下二）首を斬る。（刎）。

くび‐ひき［首引］（名）㊀一種の遊戲、兩人首に紐を懸け、雙方の首の力にて其紐を引き合ひて勝負するを。くびっぴき。㊁雙方互角に力を出して、競ひあふを。㊂或ものを相手とし、力を出して勉むるを。「字引と——」。

くび‐ほそ［頸細］（名）くびほそきを。——**し**（くしきき／けれ）［頸細］（形、二）㊀頸部ほそやかなり。㊁せゝろぼそし。

くび‐まがり［首曲］（名）㊀病によりて首の曲がりたるを。又、其病人。㊁家運の傾きたるを。

くび‐まき［頸卷］（名）頸部に卷くもの。えりまき。

くひ‐もの（クイ）［食物］（名）㊀食すべきもの。たよくもつ。飲物の對。（饌）。㊁だまされて他人の生活の資用をむさぼりとらるゝ人。「隱居は彼女の——」。——**あたり**［食物中］（名）食物にあたりて病をかもすを。

〜**ぐびり**（名、副）「ぐびぐび」に同じ。

くび・る（るれれるるるれよ）［縊］（自、ら下二）自ら頸をくゝりて死ぬ。くびをくゝる。

くび・る（らりるるれれ）［縊］（他、ら四）㊀紐などをもて、頸をくゝりて命を害す。絞(シ)め殺す。㊁絞罪に行ふ。

くび・る（るれれるるるれよ）［括］（自、ら下二）兩邊ふくれて其中窄まり細まる。

くび・る（らりるるれれ）［括］（他、ら四）中ほどをまめくゝる。

くびれ［括］（名）中のくびれてあるを。

くひ‐れう（クイリョウ）［食料］（名）㊀食用に供するもの。㊁食したる物の報酬。

〜**くびれる**（自）「くびる」の訛。

くび‐わ［頸輪］（名）猫又は犬などの頸にまとふもの。

くひ‐わ・く（クイ）（けけくくるくれけよ）［食分］（他、か下二）食ひて味をかみ分く。食味の良否を知る。

くひ‐わけ（クイ）［食分］（名）㊀食ひ分くるを。㊁くひのこし。

〜——**る**［食分］（他）「くひわく」の訛。

くび‐をけ［首桶］（名）首級を入るゝ桶。くびいれ。

(**ぐ‐ひん**［狗賓］（名）天狗の異稱。

く・ふ（クウ）（はひふふへへ）［食］（他、は四）㊀はむ。くらふ。たぶ。「米を——」。「餅を——」。（喰、喫）。㊁かじる。かむ。㊂くはふ。ふくむ。㊃侵入す。おかす。くひこむ。「他人の勢力範圍内にくひ入る」。㊄殘蝕す。むしくふ。そこなふ。「白魚のくひたる書物」。㊅かじりつく。くみつく。「ふところにくひさがりて」。㊆受く。かうむる。「謀を——」。㊇生計を立つ。「筆で——」。

〜**く・ふ**（クウ）（はひふふへへ）［食］（自、は四）あざむかる。たばかるゝ。「一ぱい——」。

く・ぶ（ぶびぶぶべべ）［構］（他、は四）造り營む。かまふ。「鳥が巣を——」。

く・ぶ（べべぶぶぶるぶれべよ）［燒］（他、ば下二）火に入れて燒く。もやす。もす。「柴折り——る冬の山里」。

(**ぐ‐ふ**［愚父］（名）自分の父の謙稱。

(**ぐ‐ぶ**［供奉］（名）行列に加はりて御供(オトモ)するを。又、其ものども。「御幸の——」。

(**く‐ふう**［工夫］（名）㊀思案して方法を立つるを。思ひめぐらすを。（心機、手段）。㊁品性の修養又は意志の鍛錬に、心を用ふるを。

(**ぐ‐ふう**［颶風］（名）【地】蝸旋狀に旋轉する急激なる風、廻轉甚だ急激なるを以て、其中心に一時眞空を生じ、ために其中心にある物體を捲き上げ、災害を及ぼすものなり。つむじかぜ。

(**ぐ‐ふ‐たい‐てん**［俱不戴天］（名）（共に天をいたゞかず、即ち、共に此世に存在せざる義）仇讎とする念の深くして、必ずこれが報いをなさずば已まざる意にいふ語。「——の親の仇」。

(**ぐ‐ふ‐ぐ‐ふ**［愚夫愚婦］（名）おろかなる男女。無教育なるものども。

(**ぐ‐ぶつ**［愚物］（名）おろかもの。あはう。ばかもの。

廿**くぶん‐でん**［口分田］（名）古代、班田收授の法によりて、六才以上の男子には各二段女子には其三分の二を給與せられしもの。

(**く‐べつ**［區別］（名）わかち。しやべつ。けぢめ。

〜**くべる**［燒］（他）「くぶ」の訛。

廿**くべ**［墻］（名）墻(カキ)の古言。

廿**くぼ**［踵］（名）「くびす」の古名。

(**く‐ほ**［矩步］（名）規律正しきあるきかた。

〜**くぼ**［凹］（名）くぼき所。「大——」「小——」。（窪、窟）。

〜**くぼ**（名）かははぼう。ゐた。

(**ぐ‐ぼ**［愚母］（名）自分の母の謙稱。

廿**くぼ‐か**［凹］（名）くぼきを。

くぼ・し（くしきき／けれ）［凹］（形、二）周圍高く中央低し。おちこみてあり。「くぼき顏」。

くぼ‐たまり［凹溜］（名）くぼくなりてゐる部分。

廿**くぼ‐て**［葉椀］（名）古代、柏の葉を十枚重ねて綴ぢてつくりたる盤の中凹(ボク)きもの、食物をもるに用ひたり。

(**ぐ‐ほふ**（ホウ）［求法］（名）【佛】法の道を體得せんとねがひもとむるを。

(**ぐ‐ほふ**（ホウ）［弘法］（名）【佛】法の道を世に弘むると。（布教）。

くぼまり［凹］（名）くぼまるを。くぼみ。（窪、窟）。

くぼま・る（らりるるれれ）［凹］（自、ら四）㊀中低くなる。おちこみて深くなる。くぼくなる。「くぼまりたる土地」。㊁うづくまり居る。「くぼまり居たる五郎丸」。（蹲踞）。

くぼみ［凹］（名）凹(ボク)みたる部分。へこみ。「——のある土地」。（窟、窪）。

くぼ・む（まみむむめめ）［凹］（自、ま四）くぼまる。へこむ。

くぼ・む（めめむむむるむれめよ）［凹］（他、ま下二）中を低くす。おちこます。へこます。

くぼ‐め［凹目］（名）中へ落込みたる目。（瞘）。

〜**くぼめる**［凹］（他）「くぼむ」の訛。

くぼ‐やか［凹］（名）くぼきを。

く‐ほん［九品］（名）【佛】(い)極樂往生の等級、上中下の三品あり、又、其おの〳〵に上中下の別ありて、都合九つに分る。(ろ)九品淨土又は九品蓮臺の略言。

——**じやうど**（ジョウ）［九品淨土］（名）【佛】西方淨土即ち極樂淨土の異稱。——**ねんぶつ**［九品念佛］（名）【佛】念佛の異稱、念佛を唱ふれば極樂往生すといふより此名あり。——**れんだい**［九品蓮臺］（名）【佛】極樂淨土の蓮のうてな。

くま［熊］（名）㊀【動】食肉類に屬する獸、大形にして雜食す、齒爪共に強く、四肢共に太く逞(タク)ましく、指趾おの〳〵五つあり、全蹠地を踏み又よく物を攫り木に登る、深山に棲み冬季は洞穴に籠(コモ)る、毛皮は敷物にし肉は食用に供せられ、膽は健胃劑として珍重せらる、種類少からずして、本邦普通見る所は、全身黑く、喉の下に新月の形に似たる白き差毛あり、これを月の輪といふ。㊁芝居にて立見するものゝ稱、其鐵の格子によりつきて見るさまの檻中の熊に似たればいふ。（東京地方の俚言）。

くま［曲、阿］（名）㊀內部へ灣曲して入り込みたる部分。すみ。「山の——」。（隈）。㊁奧まり隱れたる所。かげ。㊂色と色と相接する所。光と影と相接する所。「彩色の——を取る」「月の——」。㊃秘密なる事又は發表せざる思。「心の——」。㊄役者の顏の彩色。

廿**くま**［奠］（名）神に奉る精米。くましね。

〜**くま‐**［熊］（接頭）或語に冠して、強く恐しき意を表はす語。「——蜂」「——鷹」。

(**く‐まい**［供米］（名）神に供する米。

(**く‐まい**［口米］（名）古昔、本租以外に徵收せし年貢米。

(**ぐ‐まい**［愚昧］（名）理に暗きを。おろかなるを。

くまがい‐さう［熊谷草］（名）【植】（花の形が畫にある熊谷直實の背負ひし母衣に似たりといふより此名あり）蘭科に屬する草、莖は濶くして莖の上端に二個對生す、花梗は其間より生じ一個の大なる花を著く、花は二個の萼を有す、觀賞用として栽培せらる。

くまがい‐ざくら［熊谷櫻］（名）【植】さくらの變種、彼岸櫻に次ぎて早く咲く、始めは赤くして後に白色となる、花瓣に尖頭あり。

くま‐ぐま［曲曲］（名）こゝかしこのくま。すみずみ。

廿**くまぐま・し**（しくしきしけれ）［曲曲］（形、二）心にくまありて明かならず。へだてがまし。へだてあり。

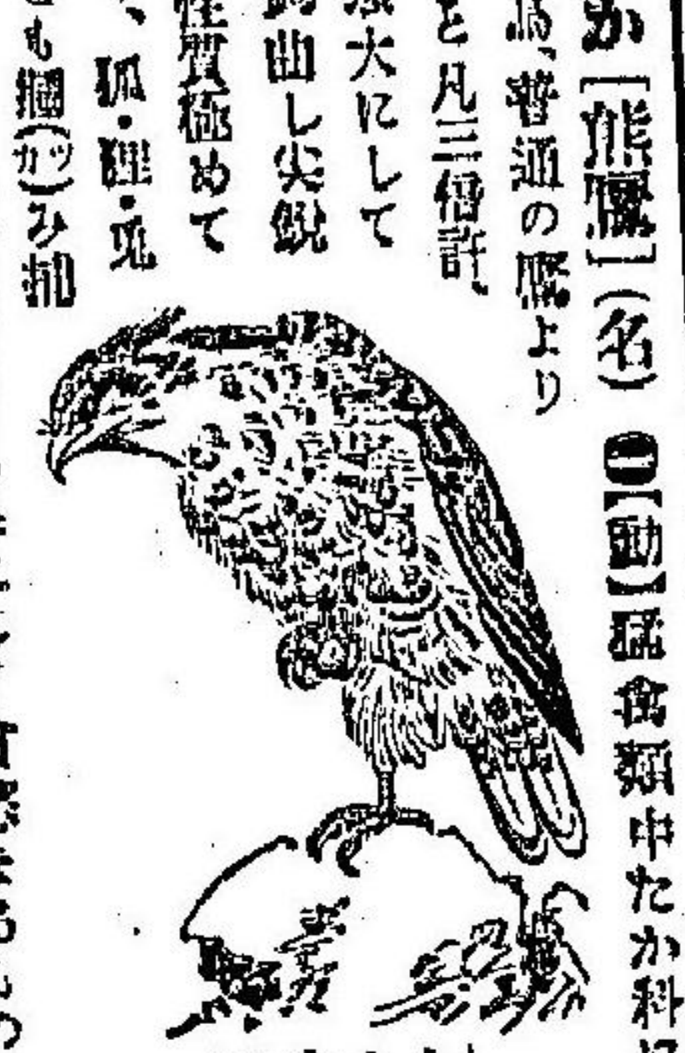
くま‐ざさ［隈笹］（名）【植】笹の一種、長さ五六尺許に及ぶ、細き莖と廣き葉とを有す。（山白竹）。

廿**くま‐しね**［神稻］（名）神に奉る精米。あらひよね。かしよね。洗米。（精）。

くま‐ぜみ［熊蟬］（名）【動】蟬の一種、全身黑色、羽は透明にして中に綠色の筋あり、形も聲もあきせみより大なり。やませみ。うませみ。（馬蜩）。

くま‐そ［熊襲］（名）古代、今の日向・大隅・薩摩の一帶を根據とせし一種の民族、天孫と同種のものにあらず、もと朝鮮地方より渡來したるものならんといふ。

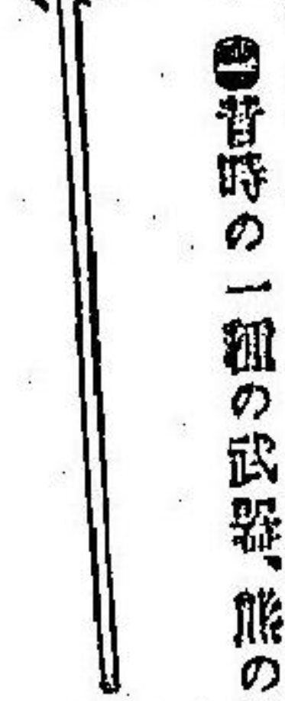
くま-たか【熊鷹】(名) ㊀【動】猛禽類中たか科に屬する鳥、普通の鷹より大なること凡三倍許、嘴は強大にして上嘴鉤曲し尖鋭なり、性質極めて烈しく、狐・狸・兎などをも攫(ツカ)み捕ふ。(角鷹)。 ㊁性質の兇暴にして貪慾なるものゝ稱。「―ばゝあ」。



［くまたか］

†くま-ぢ【隈路】(名) 隈に同じ。

くま-で【熊手】(名) ㊀昔時の一種の武器、熊の爪の如き鐵の爪を數個並べ附け、これに長き柄をすげたるもの、敵をひっかけ捕ふるに用ひたり。 ㊁武器のくまでと同じ形にて、多くは竹を曲げて造りたる具、落葉又は穀物などを掻き寄するに用ふるもの。 ㊂東京の酉の市に賣る竹製のくまで、これにおかめの面又は模造したる枡若しくは小判などを付けたるもの、一年中の福德を掻(カキ)き寄する緣起なりといふ。



［くまで］

くま-どり【暈取】(名) ㊀暈(クマ)を取ること、ぼかし、さいしき。「繪の―」。(渲染)。 ㊁役者の顔の彩色。

くま-ど-る【暈取る】(他、ら四) くまどりをなす。

くま-な-し【隈無し】(形、一) ㊀心にへだてなし。 ㊁くもりなし、かげなし。

くま-の-い【熊膽】(名) 熊の膽囊、味苦し、健胃劑として甚だ珍重せらる、ゆうたん。

†くま-の-つづら(名) 【植】ばべんさう。(馬鞭草)の古名。

くま-ばち【熊蜂】(名) 【動】膜翅類中胡蜂科に屬

する蟲、我國に於ける蜂類中の最大なるものにて、全身黑褐色を帶び、頭部及腹帶は黃色なり、樹液を吸收するもの多し、其毒烈し。(大黃蜂・大胡蜂)。

くま-びき【九萬疋】(名) 【動】「しいら」の一名。

くま-まつり【熊祭】(名) 北海道土人の行ふ一種の祭、熊の子を捕へ、婦人の乳もてこれを養ひ、三年目に殺してこれを神に供へ祭ると。

†くま-る【配】(他、ら四) 「くばる」の轉。

†くま-わ【隈回】(名) くま。「水の―にさすらへば」。

くま-わし【熊鷲】(名) 【動】鷲の一種、性質最も猛烈なり、尾は基部白く末端黑し、多く年數を經たるものは、頭より尾まで鼠色の斑點を生ず。

〜くまん-ばち(名) 【動】「くまばち」の訛。

〜くみ【胡頹子】(名) 【植】「ぐみ」に同じ。

くみ【組】(名) ㊀絲を組むこと。「あら―」。 ㊁絲を組みてつくりたるもの。ひも。 ㊂ふさ。(綬)。 ㊃合體して共に事を行ふ者ども。とも。なかま。 ㊄つゐ。そろひ。 ㊅たい。群列。 ㊆同一なる旬調の短きものを、くみあはせたる琴の曲。

⌒く-み【苦味】(名) にがきあぢ。にがみ。

ぐみ【胡頹子】(名) ㊀【植】胡頹子科に屬する植物の總稱、溫帶に產する木本にして、概ね高さ六七尺、此類の植物は、通常食用に供すべき果實を生ず、あきぐみ・なつぐみ・まるばぐみ・なはしろぐみ・つるぐみ等の種類あり。くみ。もろなり。(茱萸)。 ㊁鎧のわたかみにある飾の紐。

くみ-あ-ぐ【組上ぐ】(他、か下二) ㊀組みて積みあぐ。 ㊁組みて仕上ぐ。組み了る。

くみ-あ-ぐ【汲上ぐ】(他、か下二) 水などをくみてつりあぐ。又、水などを汲みほす。

くみ-あげ【組上】(名) 組み上ぐること。 〜―る

【組上】(他) 「くみあぐ」の訛。

くみ-あげ【汲上】(名) 水など汲みあぐること。 〜―る【汲上】(他) 「くみあぐ」の訛。

くみ-あは-す【組合す】(他、さ四) 組みあふやうにす。くむやうにす。

くみ-あはせ【組合】(名) ㊀組みあはすこと。組みあはしたるもの。 ㊁【數】數個のもの、中、或數だけのものを順序に拘(カカハ)らずに採りたる群、n 個のものをr 個宛採りたる組合の數は、

$$\frac{n(n-1)(n-2)\cdots\cdots(n-r+1)}{1\cdot 2\cdot 3\cdots\cdots r}$$

なり。

くみ-あひ【組合】(名) ㊀互に組みあふこと。 ㊁組みあふ人々。組みあひて成りたる群族。なかま。つれ。むれ。だんたい。 ㊂【法】行政法上の人格を有し、國家及地方團體と並びて、特殊の行政組織を有する一種の團體、即ち、公共組合、「郡―」、「水害豫防―」。 ㊃【法】二人以上のものが出資して、共同の事業を營むもの、即ち、組合契約によりて成立する團體の稱、會社の如く法人たる資格なきものとす、勞働組合・消費組合・技藝組合・同業組合等種類多し。 ㊄くみうち。とっくみあひ。げんくわ。 ―けいやく【組合契約】(名) 【法】各當事者が出資して、共同の事業をなすとの契約。 ―しやうひん【組合商品】(名) 簿記にて、二人以上のものが組合をなして、互に損益を分擔する契約を以て販賣する商品の稱、帳簿への記入は、全擔式・分擔式及代理式の三種あり。 ―ゐん【組合員】(名) 組合を組織する各當事者の稱。

くみ-あ-ふ【組合ふ】(自、は四) ㊀互に組む。 ㊁一群となる。くみをつくる。なかまとなる。くみす。 ㊂公法上又は私法上の組合を組成す。 ㊃

互に取りくむ。互にくみつく。又、つかみあふ。

くみ-いと【組絲】(名) 組みあはせたる絲。

くみ-い-る【組入る】(他、ら下二) 其中に組みて入る。

くみ-い-る【汲入る】(他、ら下二) 汲(ク)みて中に入る。

くみ-いれ【組入】(名) ㊀天井の古名。くみれ。「―の上に暇降るなり」。 ㊁白木にて造りたる小さき一種の角盆、多くは三個位を、いれこみにせらるゝやうに造り、供物を入れて神に供ふるに用ふるもの。 ㊂すべて中に組み入るゝやうに造ること。又、其つくりの器物。

〜くみいれる(他) 「くみいる」の訛。

くみ-うち【組討】(名) 取り組みて互に打ち合ふこと。組みつきて互に爭ふこと。(格鬪)。

くみ-がき【組垣】(名) くみあはしてつくりたる垣。

くみ-がしら【組頭】(名) 一組又は一團の長。

くみ-かは-す【酌交す】(他、さ四) 互に酒を酌みあふ。杯のとりやりして酒を飲む。(獻酬)。

†くみ-かみ(名) 「くびかみ」に同じ。

くみ-かみ【組髮】(名) 組みて結(ユ)ひたる髮。

くみ-こ【組子】(名) 組の手下。くみした。「一度に掛かる―ども」。

くみ-こみ【組込】(名) くみこむこと。

くみ-こみ【汲込】(名) くみこむこと。

くみ-こ-む【組込む】(他、ま四) ㊀くみいる。 ㊁とりつきくむ。ひきくむ。

くみ-こ-む【汲込む】(他、ま四) くみいる。

くみ-し-く【組敷く】(他、か四) 敵と引組みて、これを下に押へ敷く。

くみ-した【組下】(名) 組頭の下に支配せらるゝ者ども。くみこ。部下。配下。

くみ-す【與す】(自、さ變) ㊀共同して黨す。 ㊁つれ立ちて行く。 ㊂なかまとなる。ひとくみとなる。(黨)。 ㊃可として從ふ。「人言に―」。 ㊄助勢となる。力をかす。「勝者にくみせず」。 ㊅親密にす。志たしむ。「禮を以て相―」。 ㊆關係す。かゝはる。「歲月吾にくみせず」。

くみ-だし【汲出】(名) ㊀くみだすこと。又、くみだしたるもの。 ㊁「かたてなげ」の異稱。

くみ-だ-す【汲出す】(他、さ四) ㊀汲(ク)みて外へうつす。 ㊁くみはじむ。

くみ-た-つ【組立つ】(自、た四) 組みて出來上がる。かまへなる。なりたつ。

くみ-た-つ【組立つ】(他、た下二) ㊀組みてこしらへ上ぐ。かまへつくる。 ㊁くみはじむ。

くみ-たて【組立】(名) ㊀組み立つること。 ㊁組み立つる規模又は方法。かまへ。(構成)。 ㊂くみはじむること。くみはじめ。

くみ-たて【汲立】(名) 汲(ク)みてより時間をへぬこと。汲みて間の無きこと。

〜くみたてる(他) 「くみたつ」の訛。

くみ-チンキ【苦味丁幾】(名) 橙皮などを以て製造したる「チンキ」、味苦し、健胃劑として用ひらる。

くみ-てがた【組手形】(名) 紛失若しくは延着等を慮りて作成したる二通若しくは三通の連續せる同番號又は同日附の手形。

くみ-とり【汲取】(名) 汲(ク)みとること。

くみ-と-る【汲取る】(他、ら四) ㊀汲(ク)みて上ぐ。汲みて分く。 ㊁推察す。酌量す。おしはかる。おもひやる。「人の心を―」。

†くみ-の-を【組緒】(名) 太刀(タチ)などに付くるさげを、組絲にて編みたるもの。

くみ-ひも【組紐】(名) 絲にて組みたる紐。くみを。

くみ-やしき【組屋敷】(名) 昔時、同一の階級なる武士が一組になりて住みし屋敷の稱。

†くみ-れ【組入】(名) 「くみいれ」に同じ。

くみ-わ-く【汲分く】(他、か下二) ㊀汲(ク)みて分く。 ㊁酌(ク)みとる。おもひやる。

くみ-わけ【汲分】(名) 汲みて分くること。 〜―る【汲分】(他) 「くみわく」の訛。

くみ-を【組緒】(名) 組みたる紐。くみひも。

⌒く-みん【區民】(名) 其區に住む人民。

⌒ぐ-みん【愚民】(名) おろかなる人民。無智の民。

く-む【組む】(自、ま四) ㊀仲間になる。くみになる。くみす。 ㊁己の體を寄せ手を敵の體にかく。くみうちをなす。とりくむ。「敵と―」。

く-む【組む】(他、ま四) ㊀細長き物を絡(マト)ひ又は織る。あむ。あざなふ。「繩を―」。「紐を―」。 ㊁かれこれ相交叉せしむ。うちちがひにす。(交)。

く-む【汲む】(他、ま四) ㊀水などを分け取る。 ㊁推量す。おもひやる。おしはかる。「其心をくんでやる」。 ㊂杯に入れて飲む。酒を飲む。「酒を―」。(酌、斟)。

⌒く-めい【軀命】(名) からだといのちと。「―を國家に捧ぐ」。

⌒く-めい【苦茗】(名) わるき茶又はにがき茶。

†くめ-べ【久米部】(名) 上古の武人の一家の名。(來目部)。

⌒く-めん【工面】(名) ㊀算段。工夫(クフウ)。さいかく。 ㊁しんだい。しんしやう。「―が惡い」。

くも【雲】(名) ㊀大氣の上層に浮遊せる細微の水滴。 ㊁行衛の定めなく又は形跡の分けがたき物事にいふ語。「はかなくも―となりぬる物ならば」。 ㊂高き場所又は高き階級。「―つくばかりの大漢」。 ㊃

—となりあめとなる［爲雲爲雨］男女夫婦の情愛の甚に極めて睦じきにいひ、又、人物の輕薄にして變り易きにもいふ。——をしのぐ［凌雲］雲の上に出づる義にして、高く聳ゆるさまにいふ。——をつかむ あてどの極めて空漠なるにいふ。——をつく 高くして雲をつくほどなる意にいふ。

くも［蜘蛛］(名)［動］蜘蛛類に屬する節足動物、體軀は頭胸部と腹部とより成りて殆ど瓢狀をなす、口に二對の顎ありて、上顎は二節より成り、其末節鈎狀をなし、尖頭に毒腺の孔を開く、胸部に四對の步脚を有す、腹部の後端に肛門あり、其前にある數個の疣(イボ)の微細なる孔より、蜘蛛絲を出し、かけ渡して網を造り、これによりて昆蟲をかけ捕へて其血液を吸ふ、あしたかぐも・女郎ぐも・ひらぐも・まるぐも・つちぐも等種類多し。さゝがに。(杜公、蟏蛸)。

くも-あし［雲脚］(名) ㊀雲の浮遊するありさま。㊁雨を含める雲の垂れて見ゆるもの。「—が下がる」。㊂屈曲して雲の形をなす脚のある案(ツクヱ)。

⌒**ぐ-もう**［愚蒙］(名) おろか。(愚昧)。

くも-がく・る（れ・れ・る・るる・るれ・れよ）［雲隱］(自、ら下二) ㊀雲に隱る。㊁去りて見えなくなる。㊂貴人の死去にいふ。

くも-がくれ［雲隱］(名) くもがくるゝと。「—ふ」。

くも-がた［雲形］(名) 雲のたな引きたる形を描(ヱガ)きたる模樣又は彫刻。

くも-がみ［雲紙］(名) とりのこ紙の一種、雲の模樣を現したるものにして、多くは連歌又は俳諧の懷紙などに用ふ。

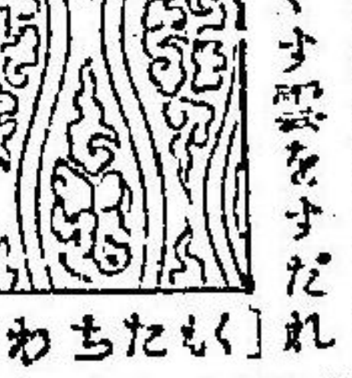
くも-ぎれ［雲切］(名) くものたえ間。

〜**く-もじ**［莖文字］(名) つけ菜。(婦人の語)。

くも-すけ［雲助］(名) 昔時、驛路に徘徊して、駕籠(カゴ)を舁(カ)き又は賤役に從ひたる住所不定の者。

くも-すだれ［雲簾］(名) 月をかくす雲をすだれにたとへいふ語。

くも-たちわき［雲立涌］(名) 雲のさまを描(ヱガ)きたる模樣。



［くもたちわき］

くも-ぢ［雲路］(名) ㊀鳥などの翔(カケ)り行く空中の路。㊁くものゆくへ。

⌒**く-もつ**［供物］(名) 神佛に奉る供へ物。そなへもの。

くも-で［蜘手］(名) ㊀蜘蛛(モク)の足の如くに、物の交叉したる狀態。「水—に流れて」。㊁材木を交叉してつくりたるもの。㊂種々にうち亂れたるさまにいふ語。「—にものを思ふ」。㊃擊劍にて、刀を八方にうちちがへに使ふを。㊄やり遊びに十文字に組みたる油皿又は手水(テウ)鉢などの蓋。——のはし［蜘手橋］(名) 池の上などに縱横左右さまざまに架(カ)けたる橋、三河國の八つ橋の類。

十**くも-とり**［雲鳥］(名) 雲と鳥との模樣ある綾の布。「—の、綾の色をも思はえず」。

くも-の-あし［雲脚］(名) 雲の動き行くさま。

くも-の-い［蜘蛛網］(名) 蜘蛛(モク)のかけわたしたる絲の巢。(蛛絲)。

くも-の-いと［蜘蛛絲］(名) 蜘蛛の肛門の前にある疣(ボイ)の孔より出づる粘液、大氣に觸るれば忽ち固體となりて絲狀をなす、これをかけ渡して蜘蛛網(クモノイ)をつくる。

くも-の-うへ（ウエ）［雲上］(名) ㊀浮遊せる雲の上。又、最も高き所。㊁禁中。——びと［雲上人］(名) 禁中の人。うんかく。殿上人。

くも-の-かけはし［雲梯］(名) ㊀深山などに雲を凌(シノ)ぐばかりに掛け渡したる橋「木曾の—」。㊁

大内にあるかけ橋。㊂敵の城壁などへのりこむための大いなるかけ橋。

くも-の-す［蜘巢］(名) くものい。(蜘蛛網)。

くも-の-なみ［雲波］(名) 波の如きさまをなす雲。

十**くも-の-はたで**［雲旗手］(名) ㊀雲の形の旗のなびくが如く見ゆるもの。㊁雲のさはみ、雲のはて。「—までひゞきのぼるこゝちするに」。

くも-の-はら［雲原］(名) 雲のひろくたな引きわたりたるさまにいふ語。

くも-の-まがき［雲籬］(名) たな引く雲を籬(マガキ)にたとへいふ語。

十**くも-の-みなと**［雲湊］(名) 雲のあつまり寄りたる所。

くも-の-みね［雲峯］(名) 夏の空に雲立ちて、峯の如くに見ゆるもの。

くも-はく［雲箔］(名) たな引く雲の如くにおきたる箔。

くも-はなれ［雲離］(名) ㊀遠く離るゝを。㊁くもぎれ。

くも-びたひ（ビタイ）［雲額］(名) 芝居にて用ふる一種の鬘(カツラ)。

くも-ま［雲間］(名) ㊀雲の切れたるあひだ。㊁晴れ間。

くも-みづ［雲水］(名) ㊀雲と水と。㊁行く方の定まらざるを。うんすゐ。

十**くもらは・し**（しく・しく・し・しき・しけれ）［曇］(形、二) ㊀曇(モク)りたる樣なり。くもりあり。「望月の影も—くなるまでに」。㊁おぼろなり。不分明なり。

くもり［曇］(名) ㊀雲の出づると、くもると。「雨ぐもり」。(陰)。㊁色又は光などのおぼろとなると。「鏡の—」。㊂うたがひ。嫌疑。「身の—がはれぬ」。㊃はれぐしからざると。又、うれひふさぐと。「空の—」。——び［曇日］(名) 空のくもれる日。——よ［曇夜］(名) 空のくもれる夜。

くも・る（ら・り・る・る・れ・れ）［曇］(自、ら四) ㊀雲空を立塞(フサ)ぐ。空にかげ生ず。「空が—」。(陰)。㊁色又は光などおぼろとなる。くらむ。「鏡が—」。㊂はればれせず。うれひふさぐ。「聲—」「心—」。

くも-ゐ［雲居］(名) (普通には雲井と書く) ㊀雲の在る場所。そら。「—を渡る雁の聲」。㊁遠き場所。「—の家」。㊂こゝのへ。くものうへ。(禁裏)。——ぢ［雲居路］(名) くもぢ。

⌒**く-もん**［苦悶］(名) なやみもがくと。うれひまどふと。くるしみもだゆると。

⌒**く-もん**［公文］(名) ㊀官府より發する文書。布達。㊁公文所の役人。——じよ［公文所］(名) 鎌倉幕府の政令を出し、役所、後に政所(マンドコロ)と改稱したり。

⌒**く-やう**（ヨウ）［供養］(名) 死人の靈又は佛などに、物などを供へて回向(ヱカウ)すると。

⌒**く-やく**［公役］(名) 官府より人民に課する役、軍役、夫役。

⌒**く-やくしよ**［區役所］(名) ㊀北海道又は沖繩縣の區にて、其區長が行政事務をとりあつかふ所。㊁市又は町村の區にて、其區に於て委託せられたる事務をとりあつかふ處。

くや・し（しく・しく・し・しき・しけれ）［悔］(形、二) うらみ多し、ざんねんなり。くちをし。——が・る（ら・り・る・る・れ・れ）［悔］(他、ら四) くやしくおもふ。ざんねんがる。——・む（ま・み・む・む・め・め）［悔］(他、ま四) くやむ。

十**くや・す**（さ・し・す・す・せ・せ）［崩］(他、さ四) 崩(クヅ)しおとす。こはす。くづす。

くやみ［悔］(名) ㊀くやむと。後悔。㊁死を弔(トム)ふと。又、其弔ふことば。(弔)。

くや・む（ま・み・む・む・め・め）［悔］(自、ま四) ㊀くゆ。㊁人の死を惆みて弔ふ。

⌒**く-ゆ**［苦窳］(名) 器物のゆがみ又はきず。

十**く・ゆ**（え・え・ゆ・ゆる・ゆれ・えよ）［崩］(自、や下二) くづる。

く・ゆ（い・い・ゆ・ゆる・ゆれ・いよ）［悔］(自、や上二) 自ら既往の過を悟る、自ら前日の行を恨(ウラ)む。後悔す。くやむ。

くゆらか・す（さ・し・す・す・せ・せ）［薰］(他、さ四) くゆらす。

くゆら・す（さ・し・す・す・せ・せ）［薰］(他、さ四) けぶりをたゝす。ふすぼらす。ふすぶ。「烟草を—」。

くゆ・る（ら・り・る・る・れ・れ）［薰］(自、ら四) 燃(モ)えて烟立つ。ふすぼる。

〜**くよ-くよ**(名、副) 絶間(タエマ)なく思案に沈むさまにいふ語。「つまらぬ事を—思って」。

くら［倉］(名) 財物を納めおくための建設物。(倉庫)。

くら［鞍］(名) 人又は荷を乘(ノ)するために、馬又は牛などの脊の上におく具、其種類多し。

くら［座］(名) ㊀物を藏する處、又、物を藏する臺。㊁すわる場所。席。「かみ—」「み—」。

〜**くら**［樂］(名) (樂の字をさかさに讀める語) 千秋樂。「興行が—になる」。

〜**—くら**［競］(接尾) (競(ベツ)の略音) あらそふと。きそふと。「あるき—」。

くら-いり［藏入］(名) くらの中に入るゝと。(庫入)。

くら-いれ［藏入］(名) 貨物をくらの中へ納めこむと。(庫入)。

⌒**く-らう**（ロウ）［苦勞］(名) ㊀身を苦しめ骨を折ると。あんく。㊁こゝろづかひ。心配。「親に—を掛けまいため」。(劬勞)。——しやう（シヨウ）［苦勞性］(名) 些細の事をも氣にかけて心配する性質。——にん［苦勞人］(名) あんくを經過してよく人情に通じたる人。

⌒**ぐ-らう**（ロウ）［愚老］(代) 老人自らの謙稱。

十**くら-うづ**（クロー）［藏人］(名) 「くらうど」の轉。

くら-うつし［藏移］(名) 一の倉庫に入れおきし貨物を、他の倉庫へうつしかふると。

十**くら-うど**（クロード）［藏人］(名) (藏人(クラヒト)の音便) 古

昔、校書殿(キヤウシヨデン)の書籍を掌りたる職名、後には天子の御前に侍して政治にもあづかりたり。くらんど。——とう［藏人頭］(名) 藏人所にありし職名、二人ありて頭中將(トウノチユウジヤウ)・頭辨(トウノベン)といひたり。——どころ［藏人所］(名) 藏人の事務を行ふところ。——のごゐ［藏人五位］(名) 藏人を四年務めて五位となりたるもの。

クラウン［Crown］(名) 西洋にて冠又は戴冠頭の印象ある錢貨の名。「イギリス」國の「クラウン」は銀貨にして五「シリング」相當なり。

クラウン-ガラス［Crown glass］(名)［化］「カルシウム」と「ナトリウム」との酸鹽より成る「ガラス」、板「ガラス」其他普通の器具を製するに用ふ。「ソーダ、ガラス」。

くらおき-うま［鞍置馬］(名) 背に鞍をおきたる馬。

くらおき-どころ［鞍置所］(名) 馬の背に鞍を置くべきところ。

十**くら-おほひ**（オーイ）［鞍覆］(名) 馬におく鞍をおほふに用ふるもの。馬氈(バセン)。

〜**くら-がへ**（ガエ）［鞍替］(名) 藝妓又は娼妓などのかせぐ場所を轉ずると。

くら-かけ［鞍掛］(名) 鞍を懸けて置く臺。——まめ［鞍掛豆］(名)［植］えんどうまめの一種、其形恰も馬に鞍を置きたる狀に似たるより此名あり。(扁眼黄)。

くら-がり［暗］(名) くらくなると、くらき部分。くらやみ。(闇)。

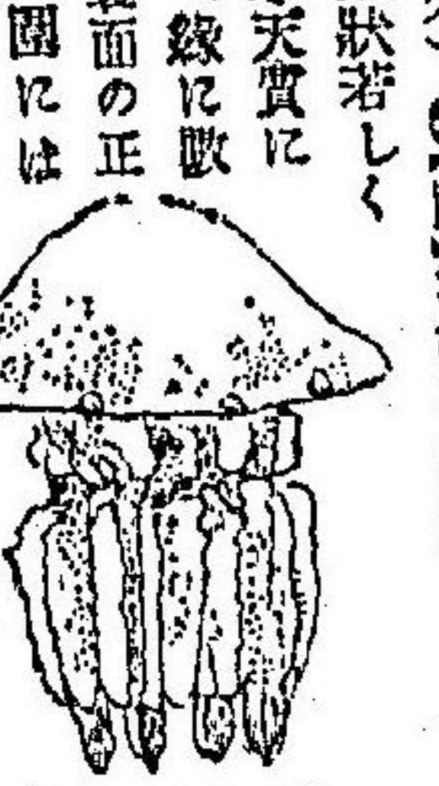
くらが・る（ら・り・る・る・れ・れ）［暗］(自、ら四) くらげにあり。闇(ヤミ)になる。

⌒**く-らく**［苦樂］(名) くるしみとたのしみと、苦と樂と。——をともにす［共苦樂］同心共力して事をなし行ふ。

⌒**くら‐くら**(名、副)㊀眼のまはるさまにいふ語。「目が―す」。㊁流動體の沸き立つさまにいふ語。「湯が―煮える」。

⌒**ぐら‐ぐら**(名、副)㊀物事の堅固ならずしてよく動搖するさまにいふ語。「机が―動く」。㊁「くらくら」に同じ。

くらげ[水母](名)㊀【動】海面に浮游する一種の腔腸動物、形は鐘狀若しくは傘狀をなし、寒天質にして強直ならず、緣に數多の觸手あり、裏面の正中に口ありて周圍には美麗なる總房あり、種類多し。(海月)。㊁筋肉發達せずして自ら體軀を支(サヽ)ふるを能はざる人。


〔くらげ(一)〕

くら‐さ[暗](名)くらき度合。

くらし[暮](名)㊀時をすごすを。くらすを。㊁すぎはひ。なりはひ。くちすぎ。活計。

くら‐し(くしきけれ)[暗](形、二)㊀光無し。あきらかならず。やみなり。㊁智識乏し。熟練せず。おろかなり。つたなし。「くらき心」。

くらし‐かた[暮方](名)活計のありさま。

くら‐しき[鞍敷](名)鞍の上に敷く布。うはしき。

くら‐しき[倉敷](名)「くらしきれうの」略言。

―れう(リヨウ)[倉敷料](名)他人の倉庫に荷物を寄託するために支拂ふ報酬。

くら‐しし[鞍鹿](名)「かもしし」の一名、其皮を馬のくらしきとして用ふるにより此名あり。

くら‐した[鞍下](名)牛馬などの背の鞍の下になる所。又、其所の肉の稱にして、食用として賞美す。

くらし‐むき[暮向](名)活計のありさま。

くら‐じり[座尻](名)しもざ。末座。

くら‐じり[鞍尻](名)牛馬の鞍のうしろ。

くら‐しろ[倉代](名)「くらしき」(倉敷)に同じ。

くら‐す(さしすせせ)[暮](他、さ四)㊀日の暮るゝまでの時間を過ごす。「日を―」。㊁年月を送る。

くら‐す(さしすせせ)[暮](自、さ四)生計を營む。くらしを立つ。

くら‐す(さしすせせ)[暗](他、さ四)くらくす。

くら‐ずれ[鞍擦](名)牛馬などの背の、上におく鞍のためにすれやぶれたるあと。

卄**くら‐づかさ**[藏司](名)古昔、中務省の所屬にして、禁中の調度寶物等に關する一切の事をとりあつかひし役所。

ぐら‐つ‐く(かきくけけ)(自、か四)㊀動搖す。うごく。ゆるぐ。㊁くるめく。

くら‐つぼ[鞍坪](名)鞍のまへわとしづわとの間、即ち人の乘る所。又、馬術にて身を鞍の前か又は後かに少しくよりてもたるゝを。(鞍局)。

くら‐に[倉荷](名)倉庫にいれおきたる物品。

―しょうけん[倉荷證券](名)倉庫業者が物品寄託者の請求により、其寄託物に對して發する證券、預證券と質入證券との二あり、共に一定の法式に從うて作成するものにして、其寄託物處分はすべて此證券によりてこれをなし、其返還の請求もまたこれと引換にあらざればなすを得ず、此證券により現品を動かさずして自由に讓渡又は質入等をなし得、又、此證券は裏書によりてこれが讓渡をなすを得。**―しょうしょ**[倉荷證書](名)前條に同じ。

くら‐の‐かみ[内藏頭](名)㊀卄古昔のくらづかさの長官。㊁内藏寮の長官。

くら‐の‐すけ[内藏助](名)内藏寮の次官。

卄**くら‐の‐つかさ**[藏司](名)「くらづかさ」に同じ。

くら‐は‐す(さしすせせ)[食](他、さ四)㊀食せしむ。くはす。㊁誘(イザ)ふためにに利益をあたふ。(啗)。㊂與ふ。加ふ。「げんこを―」。㊃打擲す。なぐる。

くら‐ばん[藏番](名)藏(クラ)の番をつとむる人。

⌒**くら‐ひ‐と‐む**(まみむむめ)[喰込](自、ま四)捕へらる。からめらる。牢に入る。(博徒などにいふ)。

くら‐びらき[藏開](名)新年に吉日を選み、始めて倉庫を開くを。「質屋の―」。

くら‐ふ(クラウ)(はひふふへ)[食](他、は四)㊀くふ。食す。㊁くひ物となす。「子を易へてこれを―」。㊂生活をなす。くらす。「遊んで―」。㊃飮む。「酒を―」。㊄被る。受く。「げんつくを―」。

クラブ[Club](名)㊀西洋骨牌(カルタ)の札の名、三裂せる葉の形を黑く描(ヱガ)きたるもの。㊁共同して組織せる會。「自由黨―」。「球突―」。(倶樂部)。

くら‐ぶ(べべぶぶるぶれべよ)[比、較](他、は下二)㊀合はせ見てちがひをはかる。てらし合はせて相違を見る。㊁きそふ。はりあふ。(競爭)。㊂てらしあはす。ひきあはす。(引照)。㊃ならぶ。「自ら古の高士に―」。(比擬)。

くら‐ぶね[藏船](名)つなぎおきて、中に物ををさめおく船。

くらべ[比較](名)㊀くらぶるを。ひかく。㊁きそひ。きやうそう。(競)。㊂てらしあはせ。ひきあはせ。㊃ならび。なみ。卄**―うま**[比馬](名)古昔、五月の節句に行はれし加茂の競馬。**―ぐるし**(しくしくしきしけれ)[比苦](形、二)詐想の思案に迷(マヨ)ふ。

⌒**―る**[比](他)「くらぶ」の訛。

くら‐ぼね[鞍骨](名)鞍のまへわ及しづわの稱。

くら‐まい[藏米](名)藏(ザウ)にある米。廩米。**―どり**[藏米取](名)徳川時代に、幕府の倉庫より扶持米を受取りし旗下(ハタモト)御家人(ゴケニン)などの稱。

くら‐まぎれ[暗紛](名)やみに紛(マギ)るゝを。

くら‐ま‐す(さしすせせ)[暗](他、さ四)認(ミト)め得ざるやうにす。くらくす「跡を―」。(晦)。

くら‐む(まみむむめ)[暗](自、ま四)㊀くらくなる。くらがる。(晦)。㊁目がまはる。くるめく。(眩)。

グラム[瓦=Gramme](名)重量の單位、我國の二分六厘十七毛弱に當る。**―ぶんし**[瓦分子](名)【化】物質の一分子量を瓦(グラム)にて表したるもの、酸素の三十二瓦は其一瓦分子にして、水の十八瓦は其一瓦分子なるが如し。**―カロリー**[瓦=Gram caloric](名)【理】熱量の單位、一瓦の淸水が、攝氏の零度より一度まで昇るに要する熱量。

くら‐め[暗目](名)くらがり。やみ。

くら‐めつけ[藏目附](名)倉庫のめつけ役。

くら‐やく[藏役](名)㊀倉庫の役人。㊁倉庫の租稅。

くら‐やしき[藏屋敷](名)㊀米ぐらのあつまりある處。㊁徳川時代に、諸國の大名が、大阪に設けおきし倉庫の稱、領内の米穀の賣捌に附するものを、廻送してこれに入れおけり、後には他の國産の賣捌をも、此處にて扱はしめたり。

くら‐やど[藏宿](名)㊀倉代をとりて貨物を倉に納れおかする所。㊁「ふださし」の一名。

くら‐やみ[暗闇](名)㊀くらきを。くらきところ。㊁亂れて理(ヲサ)まらざるを。「旦那が死にて内は―」。

くらら[苦參](名)【植】荳科に屬する草、葉は羽狀複葉にして花は聚繖狀花序に排列し、白黃綠色なり、根は醫用に供し、莖葉の蒸汁は藥用の驅蟲劑に用ひられ、又、葉の皮より纖維を採る。

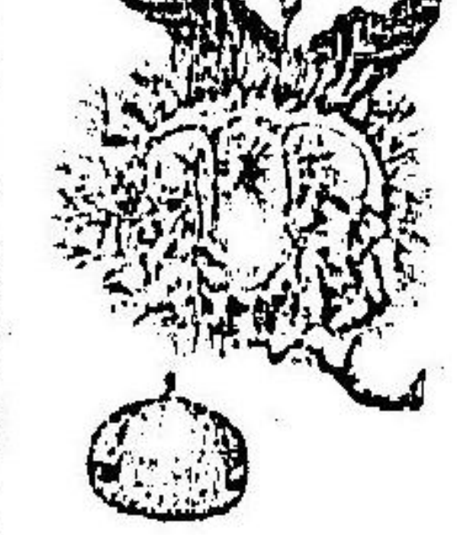
くら‐れう(リヨウ)[内藏寮](名)㊀卄「くらづかさ」に同じ。㊁宮内省の一部局、皇室の經費及其主帑に屬する財產會計を管理するところ。

くら‐ゐ[位](名)(座居の義)㊀至尊のおはします處。㊁國家を統治する地位、君位「―をうばふ」。㊂昔時、朝廷に於ける著座の高下の標示、親王は品(ホン)といふ(品の條を見よ)、諸臣のは一位より八位・初位まで各正と從とあり、四位以下は別に上と下とありて(例へば從五位上又は從五位下などといふが如し)總數三十階ありたり。㊃現今、華族及勅・奏任官又は國家に勳功若しくは表彰すべき功績あるものを叙せらるゝ表章、一位より八位に至るまで、各正と從とありて、都合十六階あり、從四位以上は宮内大臣これを奉じ、正五位以下は宮内大臣これを宣す。㊄官職の地位「其―にあり其祿をはむ」。㊅【數】數を表はすため十倍毎に附する名稱、即ち、一・十・百及分・厘・毛等これなり、一より九までを一の位といひ、十より十九までを十の位といひ、百より九百までを百の位といふ、これ以上類推すべし、又、九分より一分までを分の位といひ、九厘より一厘までを厘の位といひ、九毛より一毛までを毛の位といふ、以下類推すべし。㊆すべて物事の品等又は優劣の稱。⌒**―だふれ**(オレ)[位倒](名)位階の徒に高くして、實利のこれに伴はざるを。**―どり**[位取](名)㊀數の位をとり定むるを。㊁轉じて、品等又は優劣。「彼と此とは―がちがふ」。

―くらゐ[位](接尾)ほど。だけ。「あの―」。「この―」。

卄**くり**[涅](名)(黑の古言)㊀水中の黑き土。黑き色を染むるに用ふるもの。㊁くろ。黑色。

くり[栗](名)㊀【植】殼斗科に屬する木、長橢圓狀披針形にして緣に鋸齒あり、花は單性雌雄同株にして、花蕊は穗狀なり、果實は堅果にして長き刺の密生せる殼斗に包まれ、熟すれば殼斗裂開して内より果實を出だす、果實は食用に、木材は種々の用に供せられ、又、樹皮及殼斗は染料に供せらる。㊁「くりいろ」の略言「―毛」。


〔くり〕

⌒**くり**[庫裏](名)寺院のだいどころ「今は―までも覗くほどに心を許され」(寺廚)。

ぐり[屈輪](名)堆朱(ツヰシユ)の模樣の渦(ウヅ)の如く又は唐草の如きもの。

くり‐あ‐ぐ(げげぐぐる)[繰上](他、か下二)㊀次第に送り上ぐ「細を―」。㊁繰りをはる。

くり‐あげ[繰上](名)くりあぐるを。⌒**―る**[繰上](他)「くりあぐ」の訛。

くり‐あは‐す(ワス)(せせすする)[繰合](他、さ下二)㊀綜などをくりて合はす。㊁さしくる。やりくる。

くり‐あはせ[繰合](名)くりあはすを。⌒**―る**[繰合](他)「くりあはす」の訛。

くり‐アン[栗餡](名)栗の實にてこしらへたる餡(アン)、餡の上品なるもの。

くり‐いだし[繰出](名)くりいだすを。

くり‐いだ‐す(さしすせせ)[繰出](他、さ四)㊀細長きものを次第に引き出す。㊁順に出す。次第に行(ヤ)る。「軍兵を―」。㊂槍などを手許へ引きてまた突き出す。㊃たびたび支出す。「資本を―」。

くり‐いも[栗芋](名)㊀栗の如く味のよきさつまいも。㊁【植】「はすいも」の一名。(栗薯)。

くりい・る（れれ・るる・れれよ）［繰入］（他、ら下二） 漸次に入る。「綿を―」。

くりいれ［繰入］（名） くりいるゝこと。 〜**―る**［繰入］（他） 「くりいる」の訛。

くりいろ［栗色］（名） 栗の果實の皮の如き黒ばみたる茶色。赭黒なる色。

くりうめ［栗梅］（名） 濃（コ）き栗色。

くりかた［栗形］（名） ㊀刀の鞘（サヤ）の鍔許（ツバモト）近き所に著くるもの、孔ありてこれに下緒（サゲヲ）を通す、其形半圓狀にして栗の實に似たるより此名あり。㊁栗の實の形。

くりかは（ーカワ）［栗皮］（名） ㊀赤黒色の革。㊁「くりかはちや」の略言。 **――ちや**［栗皮茶］（名） 赤黒色を帶びたる茶色。

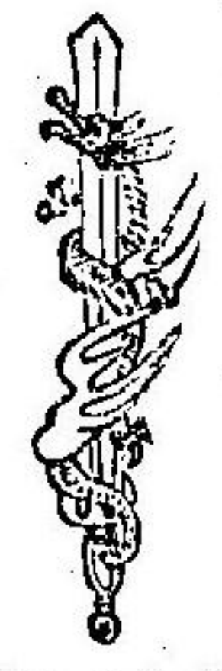
くりか・ふ（ーカウ）（へへ・ふふる・ふれへよ）［繰替］（他、は下二） さし繰（ク）りて都合をつく。都合によりて換（カ）へ用ふ。「―金」。

くりかへ（ーカエ）［繰替］（名） くりかふること。

くりかへ・す（ーカエス）（さしす・すせせ）［繰返］（他、さ四） 同じ事を數度なす。反復す。

〜**くりかへる**［繰替］（他） 「くりかふ」の訛。

クリカラ［倶梨迦羅］（名） 梵語、劍を黑龍の纏（マト）ふ圖、劍は不動尊が右の手に持つもの、龍は其左の手に持つ繩の變體としたるものにして、不動尊の三摩耶形をあらはしたるもの。 **――もんもん**［倶梨迦羅紋紋］（名） 博徒などが背部に背彫（ホリモノ）したる倶梨伽羅などの圖の稱。



［クリカラ］

くりがんな［刳鉋］（名） 孔を彫（ホ）るに用ふるかんな。（曲鉋）。

〜**くりき**［功力］（名） ちから。いきを。あるし。

〜**くりき**［苦力］（名） 「クーリー」（Coolie）の轉訛。賤しき勞働に從事するもの。人夫（ニンプ）。

〜**くりくり**（名、副） ㊀よく廻轉するさまにいふ語。「―まはる」。㊁まろやかなるさまにいふ語。「―と肥えてゐる」。 〜**――ばうず**（ーボウズ）（名） きれいに頭髮を剃（ソ）り去りたるを、又、其頭顱。（圓顱）。

ぐりぐり［凮輪］（名） 「ぐり」に同じ。

〜**ぐりぐり**（名） 病氣により身體の關節の皮膚内に生ずる凝（コ）り固まりたるもの。

〜**ぐりぐり**（名、副） ㊀肱（ヒヂ）などの先にて、他の身をもむさまなどにいふ語。㊁「くりくり」に同じ。

くりげ［栗毛］（名） 馬の毛色、栗色にて鬣（タテガミ）の黒きもの。（騮）。

くりこし［繰越］（名） くりこすこと。「―の決算」。 **――だか**［繰越高］（名） 前よりくりこしたる高。

くりこ・す（さしす・すせせ）［繰越］（他、さ四） 次第を追ひて次へ送りやる。

くりごと［繰言］（名） くりかへして同じ事をいふこと。又、其言。

くりこみ［繰込］（名） くりこむこと。

くりこ・む（まみむ・むめめ）［繰込］（他、ま四） ㊀細長きものを次第に引き入る。㊁つぎつぎに入る。だんだんにいる。

くりさ・ぐ（げげぐ・ぐるぐれげよ）［繰下］（他、か下二） 次第に下へ送りやる。

くりさげ［繰下］（名） くりさぐること。 〜**――る**［繰下］（他） 「くりさぐ」の訛。

クリスト・けう（ーキョウ）［基督教＝Christianity］（名） 「キリストけう」に同じ。

クリスマス［Christmas］（名） 耶蘇の降誕を祝するための祭、每年十二月廿五日に行ふ。（耶蘇降誕祭）。

グリスリン［Glycerine］（名）【化】「グリセリン」に同じ。

グリセリン［Glycerine］（名）【化】脂肪又は脂油より製出する無色の結晶體、普通吸收するものは、水其他の雜物を含み無色の粘液をなし甘味を有す、藥用又は工業用に廣く用ひらる。

グリセロル［Glycerol］（名）【化】「グリセリン」に同じ。

くりそめ［涅染］（名） 黑く染めたる色。（皂）。

くりたけ［栗茸］（名） 一種の菌類、山野に生ず、其高さ一寸許、傘は四五分許にして、形圓く色白く、栗の實の肉に似る。

くりだし［繰出］（名） くりだすこと。

くりだ・す（さしす・すせせ）［繰出］（他、さ四） くりいだす。

クリケット［Cricket］（名） 一種の遊戲、木の球を長き柄の撞木（シユモク）樣のものにて打ち、鐵線を曲げてつくりたる小さき門をくゞらせて、勝負を爭ふもの。

くりのべ［繰延］（名） ひのべ。延期。

くりバチ［刳鉢］（名） 木を刳（ク）りてつくりたる鉢。

くりびき［繰引］（名） ㊀長き繩などを次第にたぐり引くこと。㊁軍勢を次第に引き上ぐること。

くりまはし（ーマワシ）［繰廻］（名） くりまはすこと。さしくり。

くりまは・す（ーマワス）（さしす・すせせ）［繰廻］（他、さ四） 順序よく運轉す。都合よく運轉す。

くりめし［栗飯］（名） 皮をむきたる栗の實を入れてたきたる飯。

くりもどし［繰戻］（名） くりもどすこと。

くりもど・す（さしす・すせせ）［繰戻］（他、さ四） ㊀順を追ひて返却す。㊁くりかへす。

くりや［厨］（名） （厨（クリ）屋の義といふ）食物を料理する所。みづしどころ。臺所。（庖厨）。 **――びと**［厨人］（名） くりやの事をつかさどる人。れうりにん。

++**――め**［厨女］（名） みづしめ。下女。

くりやうかん（ーヨウカン）［栗羊羹］（名） 栗の實をすりつぶしてこしらへたる羊羹。

くりわた［繰綿］（名） 木綿（キワタ）の實を車に掛け、核を取り去りたるのみにて、未だ精製せざるもの。

〜**くりん**［九輪］（名） 塔の屋根の上に輪の形の九層かさなりたるもの。

ぐりんだま［凮輪玉］（名） 玉の如くまろきもの。

++**くる**［樞］（名） 「くるゝ」の略言。「むらたまの、―にくぎさしかためてし」。

〜**くる**［痀瘻］（名） せむし。

く・る（らりる・るれれ）［繰］（他、ら四） ㊀順次に引き出だす。㊁次第に送りやる。㊂細長きものを、物にまきつけて引き出す。「綿を―」。㊃わたくりにかけて綿花の種子を去る。「綿を―」。㊄順に數へて行く。

く・る（らりる・るれれ）［刳］（他、ら四） 器械をまはして物を穿（ウガ）つ。ゑぐる。ほる。「穴を―」。（刳）。

く・る（れれる・るるるれれよ）［暮］（自、ら下二） ㊀日沒してあたり暗くなる。夜になる。㊁をはる。はつ。㊂心迷ふ。眼明かならず。「途方に―」。「涙に―」。

く・る（れれる・るるるれれよ）［眩］（自、ら下二） 眼くらむ。

く・る（れれる・るるるれれよ）［呉］（他、ら下二） あたふ。遣（ヤ）る。つかはす。「物を―」。（與）。

くる［來］（自） きたる。く（來）の轉訛。

〜**ぐる**（名） あひぼう。なかま。惡だくみなどにいふ。「―て、だまかす」。

クルークス・くわん［―管＝Crookes' tube］（名）【理】硝子の管に白金線を入れ管内の空氣を排出したるもの、其白金線に感應起電機の第二「コイル」の導線を絡（カラ）ぎて電流を通ずれば、陰極より放射線を發し螢光を放つ。

++**くるくき**［大靑］（名） 藍棚の藍藍の類。

〜**くるくる**（名、副） ㊀物事のとゞこほりなきさまにいふ語。㊁よく回轉するさまにいふ語。「―まはる」。㊂ものに幾重にも卷きつくさまにいふ語。

〜**ぐるぐる**（名、副） くるくるを稍や強めていふ語。「―廻る」。

くる・し（しく・し・しき・しけれ）［苦］（形、二） ㊀身體なやまし。心中なやまし。いたまし。つらし。㊁忍びがたし。あつかひむづかし。㊂こゝろづかひなり。きがねなり。「―からずば御通下さい」。 **――さ**［苦］（名） くるしき度合。 **――まぎれ**［苦紛］（名） くるしさのあまりになすこと。

くるしみ［苦］（名） くるしむこと。なやみ。なんぎ。（苦惱）。

くるし・む（まみむ・むめめ）［苦］（自、ま四） ㊀痛み惱（ナヤ）む。悶（モダ）へ煩（ワヅラ）ふ。なやむ。いたむ。㊁こゝろづかひす。きがねす。㊂處理に窮す。こまる。㊃心力を盡くして盡す。ほねをる。

くるし・む（めめむ・むるむれめよ）［苦］（他、ま下二） 苦しましむ。いためる。こまらす。たしなめる。（窘）。

〜**くるしめる**［苦］（他） 「くるしむ」の訛。

クルップ・はう（ーホウ）［―砲＝Krupp gun］（名） ドイツ國「クルップ」會社にて製造する後裝砲、千八百六十年頃に「ドイツ」人「クルップ」が鋼鐵を以て砲身を製造せしに起因し、爾來幾多の改良を經て今日の製となる、砲身を鋼鐵製となすは、これに創まれり。

グルテン［Gluten］（名）【化】小麥粉を綿布の袋に入れ、水中に於て揉（モ）み澱粉を流出せしめたる跡に殘留せる粘質物、燒麩（ヤキフ）の原料なり。

くるはか・す（クルワカス）（さしす・すせせ）［狂］（他、さ四） くるはす。

くるはし（クルワシ）［狂］（名） くるはすこと。

くるは・し（クルワシ）（しく・し・しき・しけれ）［狂］（形、二） くるひたるさまに見ゆ。

くるは・す（クルワス）（せせす・するすれせよ）［狂］（他、さ下二） くるふやうにす。常にたがはす。「時計を―」。

〜**くるはせる**［狂］（他） 「くるはす」の訛。

くるひ（クルイ）［狂］（名） くるふこと。みだれ。たがひ。「土臺に―生ず」。 **――ざき**［狂咲］（名） 花の時ならぬ節に開くこと。又、くるひ花。 **――ばな**［狂花］（名） 狂咲の花。

くる・ふ（クルウ）（はひふ・ふへへ）［狂］（自、は四） ㊀正しきもの亂る。常を失す。㊁烈しく運動す。秩序なく行動す。㊂病氣により精神錯亂す。發狂す。きちがひとなる。㊃ねらひ外（ハヅ）る。まとを誤る。「手許くるひて」。

くるぶし［踝］（名） 脛と足首と相聯がる處に高くなりたる骨。

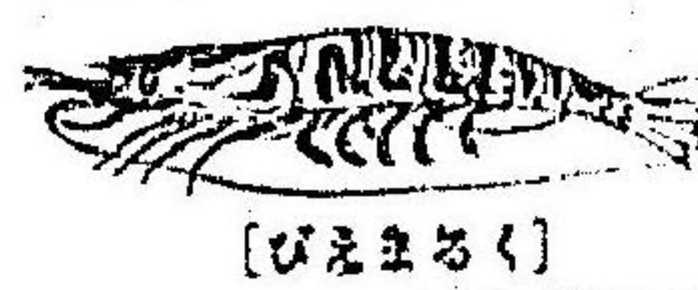
++**くるべか・す**（さしす・すせせ）（他、さ四） 物をくるくる回轉せしむ。（廻轉）。

++**くるべき**（名） 絲をくる道具。

++**くるべ・く**（かきく・くけけ）（自、か四） くるくる廻轉す。（廻轉）。

++**くるほ・し**（クルオシ）（しく・し・しき・しけれ）［狂］（形、二） 心の狂へるさまに見ゆ。狂氣じみてゐる。

くるま［車］（名） ㊀輪に由りて運轉せしむる裝置の器械の總稱、牛車・馬車・荷車・自轉車・汽車・電車など其種類甚だ多し。㊁軸につらぬきて廻轉する裝置の輪。わ。㊂人力車の特稱。「―屋」。「―挽」。㊃わなり。輪狀。「―になつて酒を飲む」。 **――えび**［車蝦］（名）【動】えびの一種、殼は平滑にして毛なく硬し、袖狀の突起は頭胸部の二分一を超え僅に彎曲す、其上緣に八個乃至十個其下緣に一個の鋸齒を有す、體色は帶黑紅色若しくは淡褐色にして、體長大なるは八寸許に達す、我國諸方の沿海に產す、ゆでて又は煮れば全身濃紅色となる。（斑節蝦）。 **――がかり**［車掛］（名） 昔時の陣立、新手・二番手・三番手と順次に手を分けて、前者疲れれば



［くるまえび］

役者これに代り、循環して敵に攻め掛かること。――がへし(エシ)[車返](名)【植】「きりがやつ」の一名。――ざ[車座](名) 多人數が輪の如くに圓形をつくり中を圍みて座すること。まとゐ。(團欒)。――ざき[車裂](名) 支那の古昔に行はれし刑罰、車を罪人の四肢に束縛し、車を驅(カ)りて罪人を引き裂き殺しゝこと。(轘罪)。――じかけ[車仕掛](名) 器械に車の裝置あること。――せん[車錢](名) 人力車に乘りたるときに拂ふ賃錢。++――ぞひ(イーツ)[車添](名) 昔時、公家の牛車につきて歩きし人。(徒從)。――だて[車楯](名) 下に車を裝置して廻轉自由なるやうにつくりたる大いなる楯。――ちん[車賃](名)「くるません」に同じ。――どめ[車止](名) 車の通行を禁ずること。――ながもち[車長持](名) ながもちの一種、運轉を自由にするため、下に車輪を添へたるもの。――ひき[車引](名) 車を挽(ヒ)きて物又は人を送ることを業とする人、くるまや。車夫。――へん[車偏](名) 漢字の偏の名、軒・轉・輻などの字の左方にある車の字。――や[車屋](名) ㊀くるまを製造する家。又、其人。㊁くるまひき。㊂くるまひきをかかへ置きて人力車をまたつる家。――やど[車宿](名) 前條㊂に同じ。――やどり[車舍](名) 貴族の邸の門内に車をいれおくために建てたる小さき建物。――ゆり[車百合](名)【植】ゆりの一種、葉濶く對生し、花瓣は大いに反捲せり。――よせ[車寄](名) 車を寄せて昇降すべき口。――ゐど[車井戸](名) 轆轤(ロク)の裝置により、釣瓶(ベ)繩を掛けて水を汲(ク)むべき井戸。

くる-まき[轆轤](名)(轉卷の義)「ろくろ」の一名。

くる-み[胡桃](名)【植】胡桃科に屬する木、葉は

漆に似て大きく、夏の頃、紅白色の細花を開く、果實は桃に似て核堅し、仁は料理又は菓子などに用ふ。(羌桃)。――いろ[胡桃色](名) ㊀胡桃の核に似たる色。㊁かさねの色目、表は香色にして裏は青なるもの。(括)。――やき[胡桃燒](名) 處々に凹(クボ)をつくりたる金屬の板に油を引き、其凹に溶(ト)かしたる饂飩(ウド)粉を注ぎ入れ、又、其中に餡(アン)を入れて包み、ひき返して燒きたるもの、形胡桃に似たればいふ。

くるみ[包](名) くるむこと、つゝむこと。

～**ぐるみ**[包](接尾) 悉皆、ひきくるめて、のこらず。「骨―」。

くる・む(め、め、む、むる、むれ、めよ)[包](他、ま下二) ㊀卷きつゝむ、包みまく。㊁一つに括(クク)る。とりまとむ、「くるめて言へば」。㊂巧にいひなす、巧に欺く。

くるめか・す(さ、し、す、せ、せ)[轉](他、さ四) くる〳〵まはす、くるべかす。

くるめ-がすり[久留米絣](名) 筑後國久留米地方より出だす木綿織の絣(カスリ)。

++**くるめ・く**(か、き、く、け、け)[轉](自、か四) ㊀くる〳〵回る、回轉す。㊁目まはる、目くらむ、めまひす。(眩、暈)。

⌒**くるめる**[包](他)「くるむ」の訛。

くるり[鏑](名) 輕くして水に浮くやうにつくりたる矢、古昔、水鳥を射るに用ひしもの。

⌒**くるり**[轉](名)「くるりぼう」の略音。――ぼう[轉棒](名)「からざを」の一名、くるりくるり廻轉するより此名あり。

⌒**くるり**[轉](名、副) ㊀廻轉するさまにいふ語。(旋然)。㊁變化するさまにいふ語、「―かはりて」。

⌒**ぐるり**[周](名) めぐり、まはり、周圍。――おとし[周落](名) 女の髮の結(ユ)ひ方、鬢(ビン)と髱(タボ)

とを一つに出だしたるもの。

～**ぐるり**[轉](名、副)「くるり」に同じ。

++**くるる**[樞](名) ㊀戸を開閉するために裝置したる機、即ち「とぼそ」と「とまら」との總稱。㊁戸の棧(サン)におとし、さる。――ど[樞戸](名) くるゝを裝置しある戸。

くる-わ[郭](名)(轉曲の義) ㊀城市又は城砦などの周圍に廻らす土石のかこひ。又、周圍に土石のかこひを設けある地、「二の―」。㊁區域、又、かこひ、「さむらひ屋敷の―」。㊂いろざと、遊里、「通ひ―の大門を」。――がよひ(カヨヒ)[郭通](名) 遊里へたび〳〵あそびにゆくこと。――ことば[郭詞](名) 昔時、遊里にて遊女の特に使用せし僻語。

くれ[暮](名) ㊀日の入らんとして、邊(アタ)りの暗くなる時、ひのいり、ゆふべ。㊁歳月又は時期のすゑ、「年の―」、「春の―」。㊂餘命少なき時、末路。

++**くれ**[榑](名) ㊀木材、「檜の―」、「槇の―」。㊁壁のなかの柱。(櫨)。

くれ[塊](名) かたまり、「土―」。

クレ―[吳](接頭) 古昔、支那より渡來の物事に冠らせし語、「―藍」、「―竹」。

++**くれ**(代)(誰の轉) 物事を確かに指定せざるときに用ふる語、「何―となく」。

グレーシャム の はふそく[―の法則=Gresham's law](經)「イギリス」國人「グレーシャム」が主張したる惡貨は良貨を驅逐すといふ原則、即ち、品位量目を異にする貨幣に、同一の價格を付して流通せしむるときは、其實價の如何に係らず同一に流通するが故に、實價の低きもの多く市場に流通し、實價高きものは、或は外に輸出せられ或は地金となして他に使用せらるといふ。

⌒**くれら**[苦蔘](名)【植】「みづたで」の一名。

グレイン[Grain](名)「アヴォイルヂュポイス」衡の單位、〇・〇六四瓦(グラ)に當り、又、〇・〇〇一七二八匁に當る。

++**くれ-がし**[某](代) なにがし。

くれ-がた[暮方](名) 日の暮るゝ時、ゆふべ、ゆふぐれ。たそがれ。(薄暮、黄昏)。

++**くれ-くさ**[錯](名)「きりくさ」の古名。

くれ-ぐれ(名、副) ㊀何となく心のこりするさまにいふ語。㊁念に念を入るゝさまにいふ語、「―も頼む」。(諄諄)。

グレゴリー-れき[―曆=Gregorian calendar](名)「ローマ」法皇「グレゴリー」十三世の制定せる曆、我國現時使用する太陽曆これなり。

クレ-たけ[吳竹](名)【植】(古昔、吳の國より渡來せしものといふ) 竹の一種、葉細かく節多し、枝又は籠細工・格子などを造る料に供せらる。――の[吳竹](枕)「よ」「ふし」に冠する詞。「―、ふし見の里の、假の夜に」。

++**クレ-つづみ**[吳鼓](名) 吳樂に用ふるつゝみ。

クレ-なゐ[紅](名)(吳の藍の轉) ㊀++【植】「べにばな」の古名。㊁べにばなの汁をもて染めたる赤き色、鮮明なる赤き色、「血しほの―」。――ぞめ[紅染](名) クレなゐにて染めたる色、又、其そめ物。――の[紅](枕) いろといふ緣語より「あさし」に冠する詞。

++**クレ-の-あゐ**[吳藍](名)【植】「クレなゐ」の古名。

++**クレ-の-おも**[吳母](名)【植】「ウ井きやう」の古名。

++**くれ-はし**[榑階](名) 材木を横にしたるあがりだん、阪路などに設く。

++**クレ-はし**[吳橋](名) そりはし。

++**クレ-はとり**[吳織](名)(吳機織の略言) ㊀古昔、吳の國より渡來せし織物師。㊁吳の法を傳へて織りたる布帛、(吳服)。

++**クレ-はとり**[吳織](枕)「あや」に冠する詞、「―あやに戀しく、ありしかば」。

⌒**ぐれ-はま**(名) 物事の齟齬(ソゴ)、くひちがひ。

くれ-ばらひ(ライハ)[暮拂](名) かけ代金などを節季に支拂ふこと。

⌒**くれる**[暮](自)「くるゝ」の訛。

⌒**くれる**[吳](他)「くる」の訛。

くろ[黑](名) 光澤なき暗き色。

くろ[畔](名) 田の中の堺。あぜ。

クローズ[Cloth](名) 背廣の服裝に用ふる舶來の羅布。

くろ-あしげ[黑葦毛](名) 馬の毛色、黑味をおびたる葦毛。

くろ-あづき[黑小豆](名)【植】あづきの一種、あかあづきよりは質小さくして色黑し。

くろ-いし[黑石](名) ㊀色黑き岩石。㊁色黑き碁石。

くろ-いろ[黑色](名) くろきいろ。

⌒**ぐ-ろう**[愚弄](名) 人をあなどりて弄(モテアソ)ぶこと、ひやかし。嘲弄。

⌒**くろ-うと**[黑人](名) ㊀藝術などに深く熟練せる人。㊁其物事を職業とせる人。㊂藝者又は遊女などの稱。

くろえ-ぬり[黑江塗](名) 紀伊國名草郡黑江より出づる漆器。

くろ-がき[黑柿](名) 柿の木の中心にある黑き部分、質固く色黑く麗(ウル)しきより、諸種の器具又は室内裝飾品などをつくるに用ふ。(濁柳木)。

くろ-かげ[黑鹿毛](名) 馬の毛色、黑みある鹿毛。

++**くろ-がね**[黑金](名) 鐵の古稱、色の黑きより名づく。(鐵)。――の-はだ[鐵肌](名) ㊀古か

なくその古稱。㊁色黑く[illegible]肌。――もち[黑鐵黐](名)【植】「もちのき」の一名。

くろ-かみ[黑髮](名) 色黑く艶麗(ウル)しき髮。(鬒)。――の[黑髮](枕) 髮の亂るゝより「みだる」に冠する詞。

くろかは-をどし(ワーカ)[黑革緘](名) 黑革にて鎧をおどしたるを、又、其鎧。

くろ-かはらげ(ワーカ)[黑川原毛](名) 馬の毛色、かはらげ色に、黑味を帶びたるもの。

++**くろ-き**[黑酒](名) ㊀古昔、新嘗祭又は大嘗祭などに奉りし酒、醴酒にくさぎの灰を入れて色を黑くしたるもの。㊁後世は黑胡麻の粉を入れて黑くしたる酒の稱。

くろ-き[黑木](名) ㊀皮を削らぬ材木、「―の御所」。㊁木を一尺許に切り、窯に入れて黑く蒸(ム)したるもの、京都の八瀬・大原の婦女などが薪とし、頭にのせて京都市中に賣りありく。㊂「こくたん」の一名。――うり[黑木賣](名) くろきをうりありくを、又、其人。

くろき-きぬ[黑衣](名) 色黑き衣服、又、喪中に着くる衣服。

++**くろ-くさ**[皯](名)(黑瘡の義) 人の顏などにできる黑きかさ。

くろ-くさ[白微](名)【植】よもぎの一種、花は黄色なり、質は藥種として癬・疽・痔及疣などを治するに用ひらる。(茨蒿)。

くろ-くちなは(ナハ)[黑蛇](名)【動】「からすへび」に同じ。

くろ-くは(ワーク)[畔鍬](名) ㊀畑を耕し又は地を掘るなどを業とするもの、どかた。㊁徳川時代に、卑き役のもの、稱。

くろく-ひやく[九六百](名) 徳川時代に、錢九十六文を以て、百文に當てし稱。

くろ-くりげ［黑栗毛］（名） 馬の毛色、栗毛に黑味のあるもの。

くろ-ぐろ［黑黑］（名、副） 甚だ黑きさまにいふ語。

くろ-ぐわゐ［黑慈姑］（名） 【植】莎草科に屬する草、水澤に生ず、帶狀をなせる圓き莖を有し、球狀の地下莖あり、地下莖は食用に供せらる。（烏芋）。

くろ-げ［黑毛］（名） 馬の毛色、眞黑なるもの。

くろ-けぶり［黑烟］（名） くろ〴〵と立ちのぼる烟。

くろ-こはく［黑琥珀］（名） 【鑛】こはくの一種、黑き光澤ありて、質極めて固し。

くろ-ごま［黑胡麻］（名） 【植】胡麻科に屬する草、もと東「インド」より渡來したるものにして、莖は長楕圓形又は卵形をなし、花は葉腋に一箇又は數箇づゝ生じ、花冠は多くは白色にして、往々紅色又は黃色の暈を具す、種子は食用に供せられ又これより油を搾（シボ）る。

くろ-ごめ［黑米］（名） つかぬこめ。玄米。

くろ-さ［黑］（名） 色のくろき度合。

くろ-ざたう（トウ）［黑砂糖］（名） 砂糖の未だ精製せざる色黑きもの。

くろ-ザン［黑棧］（名） 黑色のサントメ皮。

くろ・し（く、し、き、けれ）［黑］（形、二） 黑色なり。

くろ-しほ（シオ）［黑鹽］（名） 鴉の骨に鹽を加へこれを黑燒にしたるもの、きりきず又はめまひなどの藥用に供せらる。

くろ-しほ（シオ）［黑潮］（名） 日本南海の海流、赤道流の一にして、臺灣邊より東北に向ひ、薩摩の南方を經て伊豆七島の近海を過ぎ、東北に向ひて後、偏東の方向を取り亞米利加の方に流るゝもの、黑潮川又は日本海流とも稱す。

くろ-しぼり-の-あぶら［黑絞油］（名） 胡麻油の一種、黑胡麻の種子よりしぼりとりたるもの。

くろ-しゆす［黑繻子］（名） 黑色の繻子。

くろ-しろ［黑白］（名） ㊀くろとしろと。㊁邪の善惡。よしあし。

くろ-ずみ-けう（キヨウ）［黑住敎］（名） 神道の一派、備前國御野郡中野村の人黑住宗忠の始めたるもの。

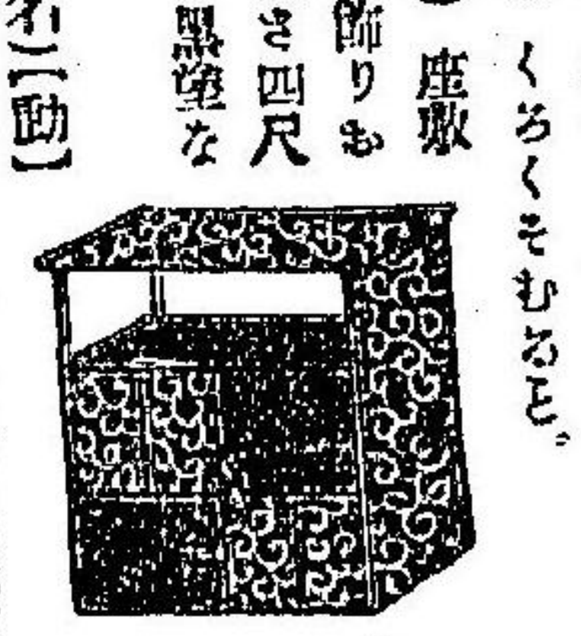
くろ-ずむ（まみむむめめ）［黑］（自、ま四） 黑色を帶ぶ。

くろ-ずゐしやう（シヨウ）［黑水晶］（名） 黑色なる水晶。

くろ-せがは（ガワ）［黑瀨川］（名） 「くろしほ」（黑潮）に同じ。

くろ-ぞめ［黑染］（名） くろくそむること。

くろ-だな［黑棚］（名） 座敷などに据（ス）ゑて物を飾りおく棚、高さ三尺五寸長さ四尺二寸幅一尺三寸にして黑塗なるを古來の法とす。


［くろだな］

くろ-だひ（ダイ）［黑鯛］（名）【動】 硬鰭類たひ科に屬する魚、形はまだひに似、體肥えて圓く目太し、全身黑味を帶ぶ、體長大いなるは二尺餘に達す。ちぬだひ。（烏魚）。

くろ-だま［黑玉］（名） ㊀黑き色を帶びたる玉。㊁くろぼし。こくてん。㊂くろめ。ひとみ。㊃うちあげたる花火の球の、發火せざるもの、稱。

くろ-ち［黑血］（名） 惡症の腫物などより出づる黑みを帶びたる血。わるち。

†**くろ-つか**［呼塚］（名） くろ。畔。

くろ-つぐみ［黑鶫］（名）【動】つぐみの一種、色黑きもの。

くろ-つち［黑土］（名） ㊀色の黑き土。㊁火災にかゝりて焦（コ）げて黑くなりたる土。（焦土）。

くろ-づる［黑鶴］（名）【動】つるの一種、形はまなづるに似、嘴長くして基部は紅、皮を以て被はる、頸長くして趾自在なり。（陽鳥）。

⌒**くろ-ど**［黑人］（名） 「くろうと」の略音。

†**くろ-ど**［黑戸］（名） 古昔、禁中にて、淸涼殿の北、瀧口の戸の西にありたる所、御薪にすゝけて黑ければいひしとぞ、又、近世は、禁中の佛をまつられしところの稱。 ——**ごしよ**［黑戸御所］（名） 前條に同じ。

†**くろ-どり**［黑鳥］（名） ㊀【動】くひなの小さきもの、稱。㊁羽毛の色黑き鳥の稱。 ——**げ**［黑鳥毛］（名） 黑色の鳥の羽、昔時、鎗の鞘（サヤ）などを飾るに用ひられたり。

⌒**くろ-ねずみ**［黑鼠］（名） 主家の金錢を掠め又は主家に不利益なる事をたくむ番頭又は手代の稱。

クロノグラフ［Chronograph］（名） 時刻を自記する器械、時計仕掛にて廻轉する圓筒あり、これに煤を塗りたる紙を捲き付け、且これに觸るゝ二個の針あり、其一は煤上に二線を劃して、「クロノメートル」及電磁石に連なり、秒針の打音に應じ、電流閉ぢ第一線に横突起を生じて秒時を記す、其一は電磁石及電鍵に連なり、これを押せば第二線に横突起を生ず、よりて二線を比較して、觀測したる時刻を精密に定むるを得。

クロノメートル［Chronometer］（名） 携帶用の最も精密なる時計、溫度變化の影響を受けざる二つの異なる金屬を合せたる擺輪を用ひ、又、重力の影響を受けざるため、擺子を用ひずして擺條を用ひたるものなり、航海用のものは、軸の正に直角なる輪にて支へ、常に水平の位置を保たしむ、經度測定の主要器械なるが故に經線儀の名あり。

くろ-は［黑羽］（名） くろきはね。「—の矢」。

†**くろ-はう**（ボウ）［黑方］（名） たき物の一種。「—や、年は經れども臘月」。

⌒**くろ-はえ**（名） 六月梅雨に入りて吹く南風（伊勢・鳥羽又は伊豆の船人の語）。

⌒**くろ-はち**［黑八］（名） 「くろはちぢやう」の略言。 ——**ぢやう**（ジヨウ）［黑八丈］（名） 織物の名、黑色無地の絹布、織目を高く現はしたるもの、おもに男子の衣服の襟又は袖口などに用ふ。

くろ-ばむ（まみむむめめ）［黑］（自、ま四） 黑色を帶ぶ。くろくなる。

くろ-び［黑日］（名） 太陰曆にて、萬事につけて忌むべしといふ日、強ひて犯せば命にかゝはる事ありといふ。（受死日）。

くろ-ひえ［黑稗］（名） 【植】ひえの一種、形狀種子共にいぬひえに似る。

くろ-ふ［黑斑］（名） ㊀黑き斑（フ）。㊁黑き斑のある鷹の羽、矢の羽に用ふ。

†**くろ-ふ**［黑生］（名） 野などを燒きたる跡に生ずる草。

くろ-ふね［黑船］（名） 昔時、歐米諸國より來れる大いなる船艦の稱。（西洋船）。

くろ-ぼ［黑穗］（名） 黴菌寄生して全穗の穀粒が黑粉となりたる麥の穗。

くろ-ぼう［黑保］（名） 「あさくさがみ」に同じ。

くろ-ぼく［黑木］（名） ㊀皮を取らぬ材木。くろき。㊁色黑き土。

くろ-ぼし［黑星］（名） ㊀黑く圓きしるし、黑き點。㊁的（マト）の正中にある黑き點、轉じて、的の正中。

⌒**くろ-ぼし**［踝］（名） 「くるぶし」の訛。

くろ-ぼたん［黑牡丹］（名） 【植】ぼたんの一種、花は紫色にして稍々黑色を帶ぶ。

くろ-ほん［黑本］（名） 表紙の黑き草紙。昔時、天保・文化の頃、盛に行はれたり。

くろ-まく［黑幕］（名） ㊀芝居の舞臺などに用ふる色黑き幕。㊁かげにありて指圖するもの。

くろ-ます（さしすすせせ）［黑］（他、さ四） 黑くす。

くろ-まなこ［黑眼］（名） くろめ。くろめだま。（烏珠）。

くろ-まつ［黑松］（名） 【植】松の一種、多く海邊に生ず、樹皮は黑褐色を帶び、葉は赤松に比すれば剛し、材木もまた保存期永く種々の用に供せられ、薪としても火力大なり、樹脂より松香油を製す。

くろ-まめ［黑豆］（名） 【植】大豆の一種、種子色黑くして長く太し。

くろ-まゆ［黑眉］（名） 古昔、奧女中などが黛さし色黑き眉。

くろ-まる（らりるるれれ）［黑］（自、ら四） くろくそまる。黑くなる。くろむ。

くろ-み［黑味］（名） 黑きこと。黑き色。「—を帶ぶ」。 ——**ばしる**（らりるるれれ）［黑味走］（自、ら四） くろみを帶ぶ。くろくなる。

クロミウム［Chromium］（名） 【化】「クロム」に同じ。

くろ-みどり［黑綠］（名） 馬の毛色、黑色に稍々靑味を帶びたるもの。（鐵驄馬）。

クロム［Chromium］（名） 【化】灰白色の金屬、大氣に觸れて錆（サビ）を生ぜず、鹽酸及硫酸には溶解すれど、白金に比し更に融解し難し、又、甚だ硬くして殆ど鋼玉石に匹敵す。

くろ・む（まみむむめめ）［黑］（自、ま四） 黑くなる。

くろ・む（めめむむるれめ）［黑］（他、ま下二） ㊀黑くす。㊁紛（マギ）らす。欺く。「いひ—」。

†**くろ-むぎ**［黑麥］（名） 【植】蕎麥（ソバ）の古名。

くろ-め［黑目］（名） 眼球の中心の黑き部分、くろまなこ。くろだま。（瞳孔）。 ——**がち**［黑目勝］（名） 眼の黑玉の大きなること、又、其目。

⌒**くろめる**［黑］（他） 「くろむ」の訛。

くろ-もじ［黑文字］（名） ㊀小楊枝（コヤウジ）の一名。㊁「くろもじのき」の略言。 ——**の-き**［黑文字木］（名） 【植】樟科に屬する木、枝の樹皮は平滑にして綠色及帶黑色の二部を有し、葉は絹絲狀の毛を具し、花序は短き柄を有するか若しくは無柄なり、木材は一種の香氣を有し、多く小楊枝又は箸を製する料に供せらる。（野官欄）。

くろ-やき［黑燒］（名） 燒きて黑くすること。又、其物。（おもに古風の藥にいふ）「いもりの—」。

くろ-やけ［黑燒］（名） 燒けて黑くなること。又、其黑くなりたる物。

くろ-やま［黑山］（名） 人だち多きをにいふ語。「—の人」。

くろ-ゆり［黑百合］（名） 【植】ゆりの一種、莖は心形にして長き葉柄を有し、花序は總狀にして小數の花より成り、花蓋は淡灰色なり、鱗莖は食用に供せらる。

くろ-らか［黑］（名） 黑きさま。

クロロフォルム［Chloroform］（名） 無色揮發性にして多少甘味を有する液體、漂白粉を以て「アルコホル」を處理して製す、有機化合物の溶劑又は外科手術の痲醉劑として用ひらる。

くろん-ばう（ボウ）［黑坊］（名） ㊀（「セイロン」島の地名 Colombo に起るといふ說あり）熱帶地方に住める黑人種の稱、黑奴、黑人。㊁芝居の舞臺に、黑き衣服黑き頭巾を着けて出て、役者に從屬して臺詞（セリフ）などを陰より讀みきかせなどする人。㊂皮膚の色黑き人。㊃「くろぼ」（黑穗）に同じ。

くろん-ぼ［黑坊］（名） 前條に同じ。

（**くわ**［窠］（名） 紋所の名、瓜を輪狀に切りたるやうの形を描（カ）きたるもの。もつかう。

（**くわ**［火］（名） ㊀ひ。㊁古昔、軍隊の一部曲、「五人を伍とし、伍二を—とす」。㊂くみあひ。なかま。

（**くわ**［科］（名） ㊀程度又は制限。ほど。かぎり。㊁

品等又は區別。しな。わかち。㊂條目又は典格。きまり。さだめ。㊃刑律又は罪貫。おきて。つみ。㊄あな。うつろ。「—に盈ちて而して後進む」。㊅植物の分類の名目、屬を概括したるもの。「薔薇—」。「毛莨—」。㊆動物の分類の名目、目を細別したるもの。「すゞめ—」。「あざらし—」。㊇役者の爲ぐさ。

（くわ[戈]（名） ㊀ほこ。「室に入り—を揮ふ」。㊁淸國にて長さの單位、一丈三尺に當る。

（くわ[貨]（名） たから。よきもの。かね。「—を贈る」。

（くわ[訛]（名） なまり。又、あやまり。

（くわ[寡]（名） ㊀數少なきこと。㊁孤立者又は少數者。「—を以て衆に敵す」。㊂やもめ。又、やもを。

（くわ[和]（名） 「わ」に同じ。

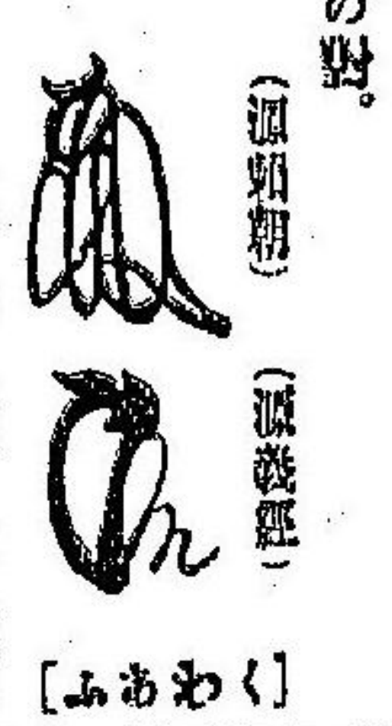
（くわ[課]（名） ㊀考科又は試驗。こゝろみ。ためし。㊁程限又は次序。ほど。ついで。㊂負擔又は貢賦。かかり。わりあて。㊃官省の中に於ける事務の小部分。「記錄—」。

（くわ[化]（名） ㊀生死又は見滅。進歩又は變遷。うつりかはり。㊁異種類のものに形を變ずること。㊂循教又は訓諭。をしへ。さとし。㊃風俗又は習慣。ならはせ。ならひ。㊄化學の略言。「理—學」。

（—くわ[顆]接尾） 果實又は玉石などの個數をかぞふるにいふ語。「玉一—」。「印五—」。

（ぐわ[畫]（名） ゑ。書の對。

（くわ-あふ（オウ）[花押]（名） 「かきはん」に同じ。



[くわあふ]

（くわい[晦]（名） ㊀陰曆の月末。つごもり。みそか。㊁月無くして空の暗きこと。やみ。くらがり。

（くわい[塊]（名） ㊀つちくれ。㊁かたまり。

（くわい[快]（名） ㊀こゝろよきこと。おもしろきこと。「人を屑り以て自ら—となす」。㊁【心】心の活動が微弱なる狀態より盛大なる狀態に上昇するか、若しくは精力に適應せる刺激を受くるかのときに起る感情。

（くわい[會]（名） ㊀對面又は接見。であひ。まみえ。㊁集會又は團結。よりあひ。あつまり。㊂會盟又は會議。ちかひ。ひやうぎ。「塗山の—」。㊃をり。とき。機期。「風雲の—」。㊄かなめ。おも。要所。㊅物事のあつまりある所。㊆物事をあはせたる所。あはせめ。㊇一歲の計算又は其帳簿。そうじめ。そうじめのちやうめん。

（くわい[魁]（名） ㊀かしら。をさ。「賊徒の—」。㊁さきがけ。「百花の—」。

（くわい[懷]（名） ㊀ふところ。㊁おもひ。「—を遣る」。

（くわい[回]（名） ㊀まはり。めぐり。㊁たび。度數。㊂よこしま。邪曲。「福を求むるに—ならず」。

（ぐわい[外]（名） そと。ほか。

（くわい-い[怪異]（名） ㊀あやしきこと。常ならざること。㊁ばけもの。もの、け。へんげ。

（くわい-い[會意]（名） ㊀こゝろにかなふこと。又、こゝろになっとくすること。㊁支那の文字にて所謂六書の一、二個以上の字の形若しくは意を合して、一個の字の形若しくは意となすもの、例へば人と言とを合して信となし、止と戈とを合して武となすが如し。

（ぐわい-い[外夷]（名） 外國人をいやしめていふ語。

（くわい-いう（ユウ）[回遊]（名） 方々をめぐりあそぶこと。——れっしゃ[回遊列車]（名） 方々を見物する客をのするため、特にし立つる鐵道列車。

（ぐわい-いう（ユウ）[外遊]（名） 外國に遊ぶこと。

（ぐわいいう-せい（ユウ）[外遊星]（名） 木星・土星・天王星・海王星の四遊星の稱。

（ぐわ-いう[臥遊]（名） 山水の畫幅などを見て樂しむこと。

（ぐわい-えき[外役]（名） ㊀國外への出兵。㊁構外にての使役。「囚徒の—」。

（ぐわい-えん[外延＝Umfang]（名） 【論】名詞が、別々に離れて存在するもの即ち個體を包含して指すこと、例へば生物といふ名詞の中には、動物あり植物あるが如し。

（くわい-が[怪訝]（名） あやしみいぶかること、不思議に思ふこと。

（ぐわい-かい[外界]（名） ㊀心に對する一切の現象。㊁其物の周圍。「—の狀態」。

（くわい-かう（コウ）[廻航]（名） 方々をへめぐる航海。又、方々をへめぐりてかへる航海。——ゐゐん[廻航委員]（名） 外國に註文して落成したる軍艦を、我國に廻航するために、任命派遣せられたる委員。

（ぐわい-かう（コウ）[外項]（名） 【數】一つの比例に於て、其兩端に立つ二つの量。

（ぐわい-かう（コウ）[外交]（名） ㊀國と國との交際又は交涉即ち國家相互の關係、又、其處理の手段。「—問題」。㊁內部の事務取扱に對して、外方の運動周旋などをいふ。——か[外交家]（名） 外交の局にあたる人。又、外交に巧なる人。——きくわん[外交機關]（名） 外交上のために設置せる國家の機關の總稱、外務大臣・公使なども其一なり。——くわん[外交官]（名） 外務大臣の監督の下に屬し、外國に駐在して外交の事に從ふ官職、全權公使・辨理公使又は公使館書記官等の稱。——ぶんしよ[外交文書]（名） 使臣の信任狀・委任狀又は談判書・覺書其他條約以外の外交上に關する

一切の文書の稱。

（ぐわい-かく[外角]（名） 【數】二つの直線が一つの直線と會するとき、二線の外側にある四つの角。又、多角形の一片とこれに隣（トナ）れる邊の延長との夾（ハサ）む角。

（ぐわい-かく[外殼]（名） 外面にある殼（カラ）。

（くわい-がふ（ゴウ）[會合]（名） よりあひ。あつまり。集會。

（ぐわい-がふ（ゴウ）[外合]（名） 【天】「じやうがふ」（上合）に同じ。

（くわい-かん[快感]（名） こゝちよき感じ。快の感情。

（くわい-がん[魁岸]（名） 人並すぐれて體のりっぱなること。

（ぐわい-かん[外感]（名） 【心】外界の刺戟によりて起る感覺。

（くわい-き[回忌]（名） 人の死したる後、年毎にまはりくる其月の其日、其一年目を一くわいき又は一周忌といひ、二年目を三くわいき又は三周忌といふ類。（年回、年忌）。

（くわい-き[快氣]（名） ㊀こゝろもちのさわやかなること。㊁病氣のこゝろよきこと。

（くわい-ぎ[會議]（名） ㊀會合して評議すること。「—の席」。㊁事を評議する機關。「砲兵—」。「工兵—」。

（くわい-ぎ[懷疑]（名） ㊀うたがふこと。あやぶむこと。㊁認識を否定し眞理を疑ふこと。

（ぐわい-き[外氣]（名） 室外の空氣。外部の空氣。

（くわい-ぎあん[回議案]（名） 役所などにて、關係ある掛員へ順次に廻送して、其意見を問ふ議案。

（くわい-きう[懷舊]（名） 昔時の事柄を思ひ出だすこと。「—の涙にむせぶ」。——だん[懷舊談]（名） 自分の昔時遭遇したる事柄のものがたり。

（くわいき-せん[回歸線]（名） 【天】天球上赤道

より南北各約二十三度半を通過する小圈、北なるを北回歸線といひ、南なるを南回歸線といふ、太陽最北に來るときは即ち北回歸線に達するときなり、故に一に夏至線といふ、太陽最南に來るときは即ち南回歸線に達するときなり、故に一に冬至線といふ。又、地球上赤道より南北約二十三度半の緯線を回歸線といふ、これもまた南北の別あり。

（くわいき-ねん[回歸年]（名） 【天】「たいやうねん」（太陽年）に同じ。

（くわいき-むふうたい[回歸無風帶]（名） 【地】貿易風及反對貿易風の相會して無風となる地方、緯度凡そ三十度の所なり、北半球にあるを北回歸無風帶といひ、南半球にあるを南回歸無風帶といふ。

（くわい-きよ[快擧]（名） こゝちよきふるまひ、いさましき行動。

（ぐわい-きよ[外虛]（名） 【天】半影の稱、又、太陽の黑心の中の周圍の稍や闇（クラ）き部分の稱。

（くわいぎ-ろん[懷疑論＝Scepticism]（名） 【哲】吾人の認識を不確實なるものとし、一切の知識を否認し眞理を疑ふ哲學論。

（ぐわい-きん[外勤]（名） 外部の勤務。「—の巡査」。

（くわ-いく[化育]（名） 萬物の互に生死見滅しつつおひそだちて其性を遂げ、以て變遷進歩すること。「天地の—に參す」。

（くわい-ぐわ[繪畫]（名） 物の形象を平面に描（エガ）き出すこと。又、其描き出したる物の形象。ゑ。ぐわ。

（ぐわい-くわ[外科]（名） 「げか」に同じ。

（ぐわい-くわく[外郭]（名） そとのくるわ。

（くわい-くわつ[快濶]（名） ㊀氣象さわやかにして度量ひろきこと。物事を苦にせず心のひろき性質。㊁こゝちよくむねのひろきこと。心にくるしみなくう

ちとけてあること。

（くわい-くわつ[快活]（名） 氣象さわやかにして勢よきこと。こゝろもちよくいさましきこと。

（ぐわい-くわひ[外果皮]（名） 【植】果實の最も外部にある薄き皮、熟するときは或は彩色を現はし或は軟毛を生ず。

（ぐわい-くわん[外患]（名） 外國と難を構ふること。又、外國に對するうれひ。「敵國—なきものは國つねに亡ぶ」。

（ぐわい-くわん[外觀]（名） おもてむき。うはべ。みえ。

（くわい-けい[塊莖]（名） 【植】地下莖の一種、地中にある莖の末端が肥大して塊狀をなすもの、ヂヤガタラいも等の類これなり。

（くわい-けい[會計]（名） ㊀金錢物品の出納を計算すること。㊁金錢又は物品の出納に關する事務の稱。㊂代金の支拂。しはらひ。「—を人に持たす」。——くわんり[會計官吏]（名） 會計の事務にあづかる官吏。——けんさくわん[會計檢査官]（名） 會計檢査院を組織し、其職務を執行する高等官。——けんさゐん[會計檢査院]（名） 官金の收支・官有物及國債に關する計算を檢査確定して、國家の會計を監督する官廳、天皇に直隸し、國務大臣に對し特立の地位を有す。——けんさゐんちやう（チヨウ）[會計檢査院長]（名） 會計檢査院の長官、院務を總理す、親任官の待遇なり。——ねんど[會計年度]（名） 會計上の便宜によりて設定したる一定の期間、我國現時の制度にては、四月一日より翌年三月三十一日迄の規定なり。

（くわい-けう（キヨウ）[回教]（名） 「フヰフヰけう」の稱。

（ぐわい-けう（キヨウ）[外教]（名） 其國固有のものにあらざる外國傳來の宗教、昔時、我國にては「キリス

ト」數をさしていへり、「―の鑿」。

(ぐわい-けい[外形](名) うはべのかたち。そとのみゑ。

くわいけい-の-はぢ[會稽恥](名) (支那の越王句踐が呉王夫差のために敗られて、會稽山に圍まれし故事に出づ)深く心に銘して忘るゝ能はざる恥辱にいふ語。

(くわい-けつ[怪傑](名) 一種異樣の力量あるすぐれびと。

(くわいけつ-びやう[壞血病](名) 身體衰弱して出血し易き病、齒齦(ハグキ)は腫れたゞれ皮膚は土色となり、遂に貧血病となる。

(くわい-けん[懷劍](名) 懷中に携ふる小刀。「―逆手に持ち」。

(くわい-けん[會見](名) 互に一處にあつまりて面會すると。「春帆樓の―」。

(ぐわい-けん[外見](名) みえ。うはべ。

(くわい-こ[懷古](名) むかしを思ふと。「―の情」。

(くわい-こ[回顧](名) ㊀あとにふりむくと。㊁むかしを思ふと。

(くわい-ご[魁梧](名) 身體のすぐれて逞(タクマ)しきと。

(くわい-ご[悔悟](名) 前非をくいさとると。

(ぐわい-こう[外寇](名) 攻め來れる外國のあだ。

(くわい-こく[廻國](名) ㊀國々を經めぐると。㊁順禮となりて、諸國の札所をめぐると。「―修行」。又、其順禮。

(ぐわい-こく[外國](名) 我が主權の統治に屬せざる他の國家又は國土。よそのくに。とつくに。

――いうびん[外國郵便](名) 外國へ發送する郵便又は外國より到着する郵便の稱、外國へ發送する郵書は、書狀十五「グラム」迄十錢、葉書四錢、印刷物及商品見本は五十「グラム」迄二錢、書留料十錢の規定なり。

――かはせ[外國爲替](名) 正貨を送付する浪費・危險其他不便等なくして、外國に於ける貸借を完了する方法、即ち外國にて金錢を受取るべき權利を利用し、外國にて金錢を支拂ふべき義務を辨濟するをなり、例へば、在「パリー」の甲は、在神戸の乙に對して五千圓の負債ありて、在「パリー」の丁は在神戸の丙に五千圓の債權ありと假定せよ、乙は甲に宛て丁は丙に宛てゝ各爲替手形を作成し、丙は乙の振出したる手形を甲は丁の振出したる手形を買ふときは、丙は甲に對し五千圓の債權を得、甲も丙に對して五千圓の債權を得るとなるを以て、甲丙互に交互計算をなすときは、甲乙丙丁間の貸借關係は一文をも輸送せずして完了するなり。

――かはせ-さうば[外國爲替相場](名) 爲替相場に同じ。其條を見よ。

――かはせ-てがた[外國爲替手形](名) 外國爲替に用ふるために振出したる手形。

――ご[外國語](名) 外國の國語、即ち我國にては朝鮮語・支那語・英語等すべて日本語以外の國語の稱。

――こうし[外國公使](名) 我國に駐在せる外國の公使。

――さい[外國債](名) 其債主の全部若しくは大部分が、外國政府若しくは外國人なる公債、普通外國に於て募集せらる。

――じん[外國人](名) 其國籍が外國に屬する人民、外國の民。異國の人。

――せいふ[外國政府](名) 外國の中央官府、即ち、其國の政務をつかさどる中央機關。

――せん[外國船](名) 外國政府又は外國人の所有せる船舶。

――ひん[外國品](名) 外國にて製造せられ又は外國より輸入せられたる物品。

――ぼうえき[外國貿易](名) ㊀内國と外國との間に行はるゝ財の交換、其起る原因は、甲國のみに産し他國には産せざる財ありて、他國人のこれを需要するに起るは勿論、一國に於ける各種の財の交換の比例が、他國に於ける同種の財の交換の比例と相異なるときにも起る、方今これに對する文明諸國の政策は、自由貿易と保護貿易との二主義あれど、各長短得失ありて一概に判定すべからず、要するに國民の程度又は國家の地位及産業の種類の如何により取捨すべきものなり。㊁外國人との取引。

(くわい-こん[塊根](名) 【植】地上を佈匐する莖より生じたる肥大なる塊狀の根、さつまいもの類。

(くわい-さい[快哉](名) こゝろよきと。「―を呼ぶ」。

(ぐわい-さい[外債](名) 外國債の略言。

(くわい-さう[回想](名) むかしの事を思ひまはすと。

(くわい-さう[會葬](名) 葬送の人數に加はると。

(くわい-さう[廻漕](名) 船舶にて旅客又は物品を運送すると。――てん[廻漕店](名) 廻漕の取扱を業とする家。(廻漕問屋)。

(くわい-し[懷紙](名) 歌又は連歌を正式に認むる時に用ふる紙、多くは檀紙又は引合紙(ヒキアハセガミ)を使用す、官位姓名など併せ記するものとす。

(ぐわい-し[外資](名) 外國人の有する資金。――ゆにふ[外資輸入](名) 外資を内國に移し入るゝと、即ち、外債により又は外人を資本主として、内國に於て企業するなどをいふ。

(ぐわい-じ[外事](名) ㊀うちわの事にあらざる事。そとの事。㊁外國に關する事、又、外國の事情。

(くわい-しう[回收](名) もとへかへしをさむると。とりもどし。「資金の―」。

(くわい-じう[懷柔](名) なつけてしたがはすると。「遠人の―」。

(くわい-しゃ[會社](名) 商行爲を目的として二人以上のものが協同して設立したる社團法人、合名會社・合資會社・株式會社・株式合資會社の種類あり。

(くわい-しゃ[膾炙](名) なますとあぶりものとが、普通一般人の口にかなふが如く、物事の普く人々の口の端にかゝると。「人口に―す」。

(くわい-しゃう[會商](名) よりあひて商議すると。

(くわい-じゃう[廻狀](名) 名宛を連記し、それよりそれへとまはして事を通ずる書狀。まはしぶみ。くわいぶん。(廻文、移文)。

(ぐわい-しゃう[外相](名) 外務大臣の異稱。

(くわいじゃう-くわざん[塊狀火山](名) 【地】地下の岩漿噴出するとき、水蒸氣又は瓦斯を伴はずして全體均一の岩塊を堆積したるによりて成りたる火山。

(くわい-しゃ-ゐん[會社員](名) 會社の事務員。

(くわい-しゅ[會主](名) 會を開く主人。

(くわい-しゅん[懷春](名) 年ごろとなりていろけづくと。色情催すと。

(くわい-しょ[會所](名) ㊀人々のよりあひする所。「碁―」。㊁もと商業の取引又は町内の取締等に就きて、其事に關係ある人のよりあひをなしゝ所の稱。「米―」「綿―」。

(くわい-じん[灰燼](名) はいともえさしと。轉じて、火に燃えて形なくなると。

(ぐわい-しん[外臣](名) 其國の君主に對して、外國の臣民の稱。

(ぐわい-しん[外信](名) 外國よりのたより。

(ぐわい-しん[外心](名) 【數】外接圓の中心。

(ぐわい-じん[外人](名) 外國の人。

くわい-す(せしすするすれせよ)[會](自、さ變) ㊀集合す。よりあふ。あつまる。㊁接見す。みる。まみゆ。㊂遭遇す。であふ。「千歳一遇の好機に―」。㊃一致す。ひとつになる。

くわい-す(せしすするすれせよ)[會](他、さ變) ㊀あつむ、あはす。㊁理解す。しる、さとる。「意義不明にして―る能はず」。

(くわい-すう[回數](名) たびかず。どすう。――ぎつぷ[回數切符](名) 幾回數分を一つにまとめて發賣する切符。

(くわい-せい[快晴](名) 空のこゝろよく晴れわたると。「天氣―」。

(ぐわい-せい[外征](名) 外國へ出征すると。

(くわい-せき[懷石](名) (溫石にて腹部を温たむる代はりに出すもの、義なりともいひ、或は蘇東坡の佛印禪師に溫石を供せし故事に出づともいふ) 茶湯にて、茶を供する前に先づ出す饗膳。

(くわい-せき[會席](名) ㊀よりあひの座敷。よりあひの場所。會の席。㊁會席料理又は會席茶屋の略言。――ちゃや[會席茶屋](名) 茶湯の懷石風の饗膳を出す料理屋。――れうり[會席料理](名) 會席茶屋にて、茶湯の懷石風に出す饗膳、又、集會せる人に個々にもりわけて出す饗膳。

(ぐわい-せき[外戚](名) 母方のしんるゐ。

(くわい-せつ[怪說](名) あやしきはなし。いぶかしきとりざた。

(くわい-せつ[廻折](名) ㊀をれまがると。㊁[Diffraction]【理】光が甚だ狹き空隙を通過するとき、其進む方向以外にも達すると、此現象の起るは、光線の通過する空隙甚だ狹きが故に、映像部以外に達する光波は相干渉すといへども、全く消滅するに至らざるのみならず、却て或部分に於ては光波の山と山と相重なりて、ために擴部を生ずるが故なり、故に單色光を用ふるときは、映像部以外に明暗こもごも生じ、白光を用ふるときは「スペクトル」數個順次に現はる。――かうし[廻折格子=Diffraction grating](名)【理】硝子板又はよく磨きたる金屬板に無數の平行線を密接して刻したるものゝ稱にして、光(硝子板にては通過の光、金屬板にては反射の光)の廻折の現象を檢するに用ふ、刻線の部分は光を通過せず或は正しく反射せず、故に格子の後方(金屬板なれば前方)の一點には、距離の少しづゝ異なる點より光達するが故に、相干渉して特別の色を呈するにより、こゝに衝立(ツイタテ)をおくか又は望遠鏡にて望むかすれば、「スペクトル」現はる、其「スペクトル」は各平行線の間隔狹きほど明瞭なり。

(ぐわいせつ-きう[外切球](名)【數】一つの球の外にありて且これとたゞ一點に於て切する球。

(ぐわいせつ-ちよくせんけい[外接直線形](名)【數】一つの圓を圍み且各邊が此圓に會する直線形。

(ぐわいせつ-ゑん[外接圓](名)【數】一つの直線形を圍み且其各頂點が周上にある圓。

(ぐわいせつ-ゑん[外切圓](名)【數】一つの圓の外にありて且これとたゞ一點に於て會する圓。

(ぐわい-せふ[外妾](名) ㊀外へかこひおけるめかけ。㊁外國人のめかけ。

(くわい-せん[快戰](名) いさましきたゝかひ。こゝちよきいくさ。

(くわい-せん[廻船](名) 廻漕に用ふる船。――どひや[廻船問屋](名)「くわいさうてん」(廻漕店)に同じ。

(くわい-そう[回送](名) おくりもどすと。

(ぐわい-そう[外層](名) 外部のかさなり。

(ぐわい-そふ[外祖父](名) 母方の祖父。

（ぐわい-そぼ[外祖母](名) 母方の祖母。

（ぐわい-そん[外孫](名) 自分の娘の他家へ嫁して生みたる孫。

（くわい-たい[懐胎](名) 子をはらむこと。みもち。くわいにん。(懐妊)。

（ぐわい-たい[外帶](名)【地】彎曲せる山脈の凸面。「—山脈」。

（ぐわい-たう[外套](名) 洋服にて、寒を防ぎ雨を凌(シノ)ぐためなどに、上衣の上に着する衣。

——まく[外套膜](名)【動】軟體動物の體壁上の一部の擴張して膜狀をなすもの。

（くわい-たつ[廻達](名) 次第にめぐりとゞくること。

（くわい-たふ[回答](名) へんたふ。へんじよ。

（くわい-だん[怪談](名) ㊀あやしきうはさ。㊁ばけもの、はなし。

（くわい-ちやう[會長](名) 會員を統率し會を代表するもの。會のをさ。會の頭。(會頭)。

（くわい-ちゆう[蛔蟲](名)【動】圓蟲類の一、人體の小腸に寄生し腹痛を起す、形狀みゝずに似る。はらのむし。「蚘蟲」。

（くわい-ちゆう[懐中](名) ㊀ふところのうち。㊁ふところのうちに入るゝこと。㊂かみいれ。かねいれ。

——かがみ[懐中鏡](名) 懐中して持ち歩く小形のかゞみ、婦人などの攜ふるもの。——じるこ[懐中汁粉](名) 一種の菓子、側は煎餅の類にて、これに乾餡を包みたるもの、湯を注ぎかきまずれば汁粉となる。——すずり[懐中硯](名) 懐中すべき小形の硯、筆墨などをも併せ入れるやうにつくりたるもの。——どけい[懐中時計](名) 懐中する小さき時計。たもとどけい。——もの[懐中物](名) 懐中に入れてある品物、即ち、かみいれなどの類。「—御用心」。

（ぐわい-てい[外廷](名) 次條に同じ。

（ぐわい-てう[外朝](名) ㊀君王の國政を聽きたまふ所。㊁外國の朝廷。

（くわい-てん[回天](名) (天をめぐらす義) ㊀時勢を一變すること。又、至大なる努力を要すること。「—の事業」。㊁至大なる力量あること。

（くわい-てん[廻轉](名) ㊀くるくるとめぐること。まはること。㊁【理】物體が一線の周圍に運動すること。角運動。

——うんどう[廻轉運動](名) ㊀くるくるめぐる運動。㊁【植】さうりなどの卷鬚の他物にくるくるとまきつくこと。——せん[廻轉線](名)【數】平面上にて、一定點の周圍に廻轉する直線。——へんくわう[廻轉偏光](名)【理】偏光の偏平面が廻轉すること、偏光が水晶・砂糖溶液若しくは磁場を通過するときに起る。

（ぐわい-てん[外典](名) 「げてん」に同じ。

（ぐわい-でん[外電](名) 外國よりの電報。

（くわい-ど[灰土](名) ㊀はひつち。㊁昔時の形跡を存せざる敗殘物、「金殿玉樓忽に—に歸す」。

（くわい-とう[會頭](名) 會のをさ、くわいちやう。

（くわい-どう[會同](名) ㊀一つ處によりあつまること、㊁諸侯又は使臣などの集會。

（くわい-どく[會讀](名) 數人集(ツド)まり、書を讀みて互に其意味を解き論ずること。

（くわい-にん[懐妊](名) はらむこと。みもち。にんしん。(懐胎)。

（くわい-ねん[懐念](名) おもひ。こゝろ。

（ぐわい-はい-そう[外胚層](名)【動】卵の發生する際、二重壁より成る胚囊の外層の稱。

（くわい-はう[廻報](名) ㊀くわいぶん。くわいじやう。㊁へんじ、返信。

（くわい-はう[會報](名) 或會に關する事柄の報知。

（くわい-はう[懐抱](名) ふところにいだくこと。又心におもふこと。

（くわい-はう[快報](名) おもしろきしらせ。こゝちよきおとづれ。

（くわい-はう[快方](名) 疾病又は創傷のこゝろよきかた、快氣、「病氣—に趣く」。

（ぐわい-はう[外方](名) そとがは。又、よそ。

（ぐわい-はう[外邦](名) ぐわいこく。

（ぐわい-ばう[外貌](名) うはべのありさま。見たところのやうす。

（ぐわい-ばう[外防](名) 外國に對する防禦。

（ぐわい-はん[外藩](名) 附屬せる國。ぞくこく。

（くわい-ひ[回避](名) ㊀よけさくること。㊁【法】訴訟事件にて、判事又は書記が嫌疑を招く事情ある場合に、さけて其辨理に關係せざること。

（くわい-ひ[會費](名) 或會の開設又は維持に要する規定の費用。又、會員の負擔する一定の費用。

（ぐわい-ひ[外皮](名) 外部のかは。

（ぐわい-ひん[外賓](名) 内國に來遊せる外國人。

（ぐわい-ぶ[外部](名) そとがは、ぐわいめん。ぐわいへう。

（ぐわい-ぶ[外侮](名) 外國のあなどり。又、他人のさげしみ。

（くわい-ふく[回復](名) もとへとり戻(モド)すこと。もとのさまにかへすこと。「天下を—す」。(恢復)。——こうげき[回復攻擊](名) 占領せられたる陣地などをとり戻すために、敵に攻擊を加ふること。

（くわい-ぶつ[怪物](名) ㊀あやしきもの。ばけもの。へんげ。(變化)。㊁行動又は性狀の測り難く力量のすぐれたる人の稱。

（ぐわい-ぶつ[外物](名) ㊀ほかのもの。他のもの。㊁心に接觸する一切の對象。「—に惑はず」。

（くわい-ぶん[廻文](名) まはしぶみ。廻狀。——か[廻文歌](名) 和歌の一體、初めより順に讀み下すとも、末より逆に讀み返すとも、同じ語になるやうに作りたる歌。——し[廻文詩](名) 漢詩の一體、初めより讀み下すとも、末より逆に讀み返すとも、平仄も韻も相かなふやうに作りたる詩。

（くわい-ぶん[怪聞](名) あやしき評判、をかしきうはさ。

（ぐわい-ぶん[外聞](名) よそのきこえ、世間の評判。「—惡し」。

（ぐわい-へき[外壁](名) 外部の隔壁。

（くわい-べん[快辯](名) よどみなく巧に陳(ノ)べいふこと。辯舌の巧にさわやかなること。

（ぐわい-へん[外邊](名) そとがは。

（くわい-ぼ[懐慕](名) なつきしたふこと。

（くわい-ほん[快奔](名) はやくはしること。とくかけること。

（くわい-み[快味](名) こゝろよき感じ。こゝちよきおもむき。

（くわい-みん[快眠](名) こゝちよくねむること。

（くわい-む[槐夢](名) (異聞錄に、淳于棼といふもの自己の宅南にある古き槐樹の下に醉臥して、槐安國に遊び南柯郡の守となり功名を擅して歸りたりといふ夢を見たりと、ある故事に出づ)ゆめみ。ゆめ、又、功名のはかなきをにいふ語。

（ぐわい-む-きやう[外務卿](名) 明治十八年官制改革以前に於ける外務大臣の稱。

（ぐわい-む-ぎやうせい[外務行政](名) 外國に關する一切の政務の稱、其機關は外務大臣及外交官・領事官等なり、されど宣戰媾和又は條約締結等は、天皇の大權に屬し行政機關の權限以外なり。

（ぐわい-む-しやう[外務省](名) 外務大臣の統轄の下に屬し、其意思を受け外務行政の事務を扱ふ中央官廳。又、外務大臣の處理する事務全體の稱。

（ぐわい-む-だいじん[外務大臣](名) 各省大臣の一にして外務行政の單獨官府、政府の外交を統轄し、外國に於ける帝國商事の保護及外國在留帝國臣民に關する事務を管理し、外交官及領事官を指揮監督するもの。

（くわい-めい[會盟](名) 諸侯又は使臣などが、相あつまりてちかひをなすこと。

（くわい-めい[晦明](名) くらきとあかるきと。よるとひると。やみとあかりと。

（くわい-めい[晦冥](名) まっくらがり、くらやみ。

（くわい-めつ[壞滅](名) やぶれほろぶること。

（ぐわい-めん[外面](名) そとがは。うはべ。

（くわい-もん[槐門](名) 大臣の異稱。

（くわい-もん[廻文](名) 「くわいぶん」に同じ。

——か[廻文歌](名) 「くわいぶんか」に同じ。

（ぐわい-やう[外洋](名) 内海に對して、大洋の稱。そとうみ。

（くわい-ゆ[快愈](名) いゆること。なほること。

（ぐわい-よう[外用](名) 外部に用ふること。——やく[外用藥](名) 膏藥又はぬり藥等の如く、皮膚に貼(ハ)り又はぬる藥劑。

（くわい-らい[磈磊](名) ㊀石多くして平かならざること。㊁心の平かならざること。「胸中の—」。

（くわい-らい[傀儡](名) くゞつ。——し[傀儡師](名) ㊀くゞつまはし。㊁人をあやつりて種々の行動をなさしむる人。さくし。

（ぐわい-らい[外來](名) ㊀ほかより來ること。㊁外國より渡り來ること。——くわんじや[外來患者](名) 病院にて、診察治療をうけに來る入院患者外の患者。

（くわい-らう[廻廊](名) 長く曲折せる廊下。

（くわい-らく[壞落](名) やぶれおつること。くづるゝこと。

（くわい-らく[快樂](名) ㊀こゝちよくたのしきこと。心はればれしておもしろきこと。㊁【心】精力の增進又は要求の滿足によりて生ずる感情。——せつ[快樂說=Hedonism](名)【倫】人生の目的は感情の幸福即ち快樂にありとし、快樂を增進し苦痛を減退する傾向の多少によりて、道德上の價値を定むる一派の說、分って自己的快樂說と公衆的快樂說の二とす、前者は自己の快樂を增進するを主とし、後者は公衆の快樂を增進するを主とす。

（くわい-らん[廻鑾](名) 天子の行幸先よりかへりたまふこと。

（くわい-らん[廻覽](名) ㊀方々をへめぐり見物すること、㊁廻し傳へて見ること。

（くわい-り[快利](名) はやきこと、すばやきこと。

（くわい-りき[怪力](名) 「くわいりよく」に同じ。

（ぐわい-りつ[外率](名)【數】外項に同じ。

（くわい-りよく[怪力](名) ㊀非常にすぐれたる力量。㊁不思議なる現象をなすはたらき、常識にて知るべからざるあやしきわざ、「—亂神を語らず」。

（ぐわい-りん[外輪](名) ㊀そとがはのわ。そとわ。㊁そとのまはり。——ざん[外輪山](名)【地】複成火山に於ける舊時の噴火口の壁。

（くわい-りん[悔吝](名) ㊀くやむこと、くゆること。㊁しくじり。やりそこなひ。

（くわい-るゐ[魁壘](名) 「くわいゐ」(魁偉)に同じ。

（くわい-れい[瑰麗](名) めづらしくうつくしきこと、すぐれてうるはしきこと。

（ぐわい-れう[外療](名) 外部の療治。

（くわい-れき［回暦］（名）一年の循環してめぐりくること、年立返り改まること。

（くわい-ろ［懷爐］（名）胸腹などを溫むる具、銅又は錫葉にて製したる小さき箱にして、くわいろ灰を入れ、火を付け密閉して懷中するもの。——ばひ［懷爐灰］（名）懷爐に入るゝ灰、なすのへたなどを黑燒にして製したるもの。

（くわい-ろく［回祿］（名）㊀支那にて、火の神の名。（祝融）。㊁火事にて燒けたること。

（くわい-わ［會話］（名）㊀相會して話すこと。㊁外國語にてする談話。

（ぐわい-わうふ［外王父］（名）母方の祖父。

（ぐわい-わうぼ［外王母］（名）母方の祖母。

（くわい-ゐ［魁偉］（名）からだの人なみすぐれてたくましきこと。

（くわい-ゐん［會員］（名）會を組織する人。會に加はれる人。

（ぐわい-ゑん［外援］（名）ほかよりのたすけ。他よりのかせい。

（くわい-を［穢汚］（名）㊀よごれ、けがれ。㊁恥辱又は邪曲。

（くわう［皇］（名）㊀天子、君王、きみ、かみ。㊁上帝又は造化、かみ。あめ。㊂支那の上代に用ひし一種の冠、上部に翟を描（ヱガ）き鳥の羽を飾となしゝもの。㊃支那の古代に、五采の羽を持ちて行ひし舞。㊄はかばのもん。又、みたまやのもん。

（くわう—［皇］（接頭）至尊又は帝室の事物に冠らせてあがめ申す語、「—帝」、「—族」。

（くわう—［光］（接頭）㊀或語に冠して、廣大なる意を表はす語、「天下に—被す」。㊁或語に冠して、尊敬の意を表はす語、「—來」、「—臨」。

（くわう-いう［荒遊］（名）酒色などにおぼれすさむこと。心を奪はれおこたること。

（くわう-いつ［荒逸］（名）前條に同じ。

（くわう-いん［光陰］（名）㊀ひま、とき、「一寸の—輕んずべからず」。㊁（日を光といひ、夜を陰といふ）つきひ。としつき。（歳月）。

（くわう-いん［皇胤］（名）天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。

（くわう-うん［黄雲］（名）㊀黄色の雲。㊁ひろき稻田のみのりを雲にたとへいふ語。

（くわう-えい［光榮］（名）はえ、さかえ。

（くわう-えう［光耀］（名）ひかり。かゞやき。

（くわう-えき［廣益］（名）あまねく益すること。

（くわう-えふ［黄葉］（名）葉綠素分解して黄色を呈する葉。

（くわう-えん［光焰］（名）㊀ひかりとほのほと。㊁きはだちたるいきほひ。

（くわう-えん［光艶］（名）うるはしきつや。

（くわう-おん［皇恩］（名）天子の御恩。

（くわう-が［光駕］（名）人の訪ひ來ることの敬語。

（くわう-か［遑暇］（名）いとま。ひま。

（くわう-か［皇家］（名）天子。又、帝室。

（くわう-かう［皇考］（名）先代の天子を申し奉る語。

（くわう-かう［鑛坑］（名）鑛物を掘り出すために、山又は地に穿つ坑（アナ）。

（くわう-かく［光覺］（名）眼に光線の刺激を受け、これを視神經より腦に傳へて、光あるを感覺するはたらき。

（くわう-がく［皇學］（名）「こくがく」「國學」に同じ。

（くわう-き［皇基］（名）天子の國家を志ろしめしたまふ事業又は基礎。

（くわう-き［光輝］（名）㊀ひかり、かゞやき、㊁いきほひ、ちから「國家の—」。

（くわう-き［廣軌］（名）鐵道の軌道の幅が、歐米普通の標準たる四「フィート」八「インチ」半以上なるもの、稱。——てつだう［廣軌鐵道］（名）軌道の幅が廣軌なる鐵道。

（くわう-きう［光球］（名）【天】太陽の光輝を放てる表面即ち外形の稱。

（くわう-きよう［荒凶］（名）ききん、きようねん。

（くわう-きゆう［皇宮］（名）帝王の住み給へる御宮。ごてん。きゆうぢやう。（宸宮）。——けいさつ［皇宮警察］（名）宮殿又は離宮に關する警察、宮內省主殿寮の管轄に屬す。

（くわう-きよ［皇居］（名）皇宮に同じ。

（くわう-きよく［皇極］（名）天子の御位。又、天子のにぎりたまふ國家の綱紀。

（くわう-ぎよく-せき［黄玉石］（名）無色透明の結晶をなす鑛物、甚だ水晶に似て水晶より重く且堅し、彫琢して指環・鈕釦などとす。

（くわう-く［鑛區］（名）行政廳の許可を得て鑛物の採掘採取をなす特定の區域。——ぜい［鑛區稅］（名）鑛區の地積に應じて賦課する租稅。

（くわう-ぐう［皇后］（名）「くわうごう」に同じ。

（くわう-ぐう［皇宮］（名）「くわうきゆう」に同じ。——けいさつ［皇宮警察］（名）「くわうきゆうけいさつ」に同じ。

（くわう-くわ［黄花］（名）㊀黄色なる花。㊁【植】菊の異稱。

（くわう-くわ［黄化］（名）【植】葉の葉綠素が次第に變じて遂に黄白色となること。

（くわう-くわ［皇化］（名）天皇の御政治。

（くわう-くわ［黄禍＝Yellow peril］（名）黄色人種が他人種を侵害すといふ、黄色人種の勢力に對する恐怖心より起りたる想像說、黄人禍。

（くわう-くわ［光華］（名）ひかり。かゞやき。

（くわう-くわう［煌煌］（名、副）きら〳〵光るさまにいふ語、ぴか〳〵。

（くわう-くわう［廣廣］（名、副）ひろ〴〵してあるさまにいふ語。

（くわう-くわう［皇皇］（名、副）㊀おごそかなるさま又はさかんなるさまにいふ語。㊁光華あるさまにいふ語。㊂定まらざるさまにいふ語。

（くわう-くわう［轟轟］（名、副）とゞろきひゞく音又はさまにいふ語。

（くわう-くわつ［廣闊］（名）ひろ〴〵して眺望のひらけてあること。

（くわう-くわん［黄卷］（名）（支那の昔時、書籍の蠹（ムシクヒ）を防ぐために黄蘗の葉にて紙を染めしよりいふ）書籍の異稱。

（くわう-けい［皇繼］（名）天子の御よつぎ。

（くわう-けい［光景］（名）㊀ひかり。かげ。㊁ありさま。やうす。

（くわう-けい［黄經］（名）【天】春分點より黄道に沿ひて測りたる天體の角距離。

（くわう-けつ［曠缺］（名）官職の久しくかけてあること。

（くわう-けつ［壙穴］（名）屍をうづむる穴。

（くわう-けふ［廣狹］（名）ひろきとせまきと。又、物のはゞ。

（くわう-げふ［宏業］（名）大いなる事業。

（くわう-げふ［鑛業］（名）鑛物の採掘採取其他これに附屬する一切の事業。——けいさつ［鑛業警察］（名）鑛坑又は鑛業に關する建築場及坑夫又は鑛區の保護等に關する警察。——けん［鑛業權］（名）特定の人が特定の場所に於て、特定の鑛物を採掘採取することを得る特權。——ざいだん［鑛業財團］（名）【法】鑛業の採掘權者が、抵當權の目的のため、其鑛業に附屬する權利及物件の全部若しくは一部に就き設定したる財團、其設定は所有權保存の登記によりてなす、一個の不動產と看做され、所有權及抵當權以外の物權又は賃借の目的たることを得ず、又、一の財團に屬するものは、同時に他の財團に屬することを得ず。——ぜい［鑛業稅］（名）鑛業の製產物の價格に應じて、鑛業をなす人に賦課する租稅。

（くわう-げん［廣言］（名）口にまかせて憚らずいふこと。物事を大きくいふこと。大言。放言。（漫語）。

（くわう-けん-えうふ［黄絹幼婦］（名）（黄絹は絶の字の隱語にして幼婦は妙の字の隱語）字句の絶妙なること。

（くわう-こう［黄耇］（名）七八十の老年者。としより。

（くわう-こう［黄口］（名）㊀鳥の雛の口の黄なること、轉じて、人の年齡尚は少（ワカ）く經驗未だ足らざるにいふ語、「—の小兒」。——じ［黄口兒］（名）幼年者又は無經驗者をのゝしりていふ語。

（くわう-ごう［皇后］（名）皇族の御一人にして、至尊の御配。きさき。きさい。

（くわう-ごう-ぐう［皇后宮］（名）皇后のおはします宮殿、又、皇后を申し奉る語。——しき［皇后宮職］（名）宮中及內廷に關する事務を管理し、主管に屬する會計を掌る所。——しよく［皇后宮職］（名）前條に同じ。——たいふ［皇后宮大夫］（名）皇后宮職の長官、職務を總理し職員を監督するものにして、親任官待遇なり。

（くわう-こく［皇國］（名）天皇の志ろしめす國の意にして、我國の尊稱。すめらみくに。

（くわう-こく［廣告］（名）㊀廣く世上に告げしらすること。ひろめ。㊁特定の人に告げ志らせんとすれども、其所在不明なるときなどに、新聞又は官報などに其旨を掲ぐること。㊂ちらし又はひきふだの類の稱。——や［廣告屋］（名）傭（ヤト）はれて廣告にありく人。廣告の請負を業とする家。

（くわう-こつ［恍惚］（名）物事に心をとられてうっとりとすること。ほるゝこと。

（くわう-こん［黄昏］（名）夕ぐれ、たそがれ。

（くわう-さい［光彩］（名）㊀あざやかなるひかり。きはだちたるつや。㊁他にすぐれたるけしきのあらはるゝこと。

（くわう-さう［宏莊］（名）大いにしてりつぱなること。「結構—」。

（くわう-ざん［鑛山］（名）㊀鑛物を採掘する山、鑛物のある山。かなやま。㊁鑛山の事業經營にあたる事務を掌る所。「廣島—」。——がく［鑛山學］（名）鑛山より鑛物を採掘採取することに關して、學理上の研究を爲す學。採鑛冶金學。——かんとくしよ［鑛山監督署］（名）農商務大臣の管理に屬し、鑛山の監督に關する事務をつかさどる所、現今は、東京・仙臺・大阪・福岡・札幌に置かる。——きよく［鑛山局］（名）農商務大臣の意思を受け鑛業に關する事務を掌る農商務省の一局。

（くわう-し［皇子］（名）天子の御子の男子にましますかた。わうじ。

（くわう-し［皇嗣］（名）天皇の御よつぎ。

（くわう-しつ［皇室］（名）天子の御家、天皇の御一門、皇族。——ざいさん［皇室財產］（名）皇室の御所有に屬する財產。——てんぱん［皇室典範］（名）皇位の繼承其他皇室御事に關して制定せられたる成典、憲法と相並びて國家法令の

上に立つもの。――**ひ**[皇室費](名) 國家の歳出の中、皇室の費用にあつる額の稱。

(**くわう-じつ**[曠日](名) 物事の延引して空しく日を過ごすを。――**びきう**[曠日彌久](名) 物事のながびきひまどるを。

(**くわう-じやう**[皇上](名) 時の天皇を申し奉る語。

(**くわう-じやう**[皇城](名) 天子のまします御城。きゆうじやう。

(**くわう-じゆくかう**[黄熟香](名) 熱帶地方より舶來する一種の香料。伽羅(きやら)の類。

(**くわう-じゆ-はうしやう**[黄綬褒章](名) 私財を獻納して海防の事業を賛するものに賜はる褒章。

(**くわう-しよく**[黄色](名) きいろ。――**くわやく**[黄色火藥](名) 一種の火藥、破壞力大いにして、抛射力強きもの。――**しよくじん**[黄色人種](名) 世界の人種の一、皮膚は黄色若しくは濃褐色にして、毛髮黑く且硬直なり、顴骨高くして顏面の下部は黑色人種の如く突出せず、東洋諸國の人民は多くこれに屬す。

(**くわう-じん**[黄人](名) 黄色人種の略言。――**くわ**[黄人禍](名) 「くわうくわ」(黄禍)に同じ。――**しゆ**[黄人種](名) 黄色人種に同じ。――**どうめい**[黄人同盟](名) 黄人種に屬する民族の建設せる國家卽ち我國及清・韓などが、同盟を結びて他人種に屬する民族に對抗するをいふ。

(**くわう-じん**[荒神](名) 三寶荒神の略言、俗に竈(かま)の神として家々に祭る。(灶神、竈神)。――**だな**[荒神棚](名) 荒神を祭る棚、臺所の竈の上に据うるもの。――**ばうき**[荒神帚](名) かまどを掃(は)くに用ふるはうき、かまどは荒神に守らる、とて、他の不淨のはうきと區別して名づく。――**まつ**[荒神松](名) 荒神に奉る松の枝、米の粉などを塗りたるもの。

(**くわう-せん**[黄泉](名) (支那にて、天は玄、地は黄といふより出づ) ㊀地の最下層。㊁よみぢ。よみ。(冥府)。

(**くわう-せん**[光線](名) ㊀あかり。ひかり。㊁[理]光の等質媒體を通過するときは、一直線上に進行するものにして、其進行する直線の稱。

(**くわう-せん**[鑛泉](名) 鑛物の質を含む泉。

(**くわう-そ**[皇祖](名) 天皇の御先祖。

(**くわう-そ**[皇祚](名) 天皇の御位。皇位。

(**くわう-そう**[皇宗](名) 天皇の代々の御祖。

(**くわう-ぞく**[皇族](名) 天皇の御一族、皇室典範第三十條の規定により、太皇太后・皇太后・皇后・皇太子・皇太子妃・皇太孫・皇太孫妃・親王・親王妃・内親王・王・王妃・女王をいふ。――**くわいぎ**[皇族會議](名) 成年以上の皇族の男子を以て組織せられ、内大臣・樞密院議長・宮内大臣・司法大臣・大審院長の參列の上にて、諮詢せられたる事項を議決する機關。

(**くわう-そん**[皇孫](名) ㊀天皇の御孫。㊁皇統の義にもいふ。

(**くわう-たい**[光體](名) 光を發射する物體。

(**くわう-だい**[廣大](名) ㊀ひろく大きくあること。㊁すぐれてたふときこと。――**むへん**[廣大無邊](名) ひろくしてかぎりなきこと。

(**くわう-たいこう**[皇太后](名) 皇族の御一人にして、天皇の御嫡母。

(**くわう-たいこう-ぐう**[皇太后宮](名) 皇太后のまします御殿を申す語。――**しき**[皇太后宮職](名) 皇太后宮に關する事務を司り、主管の會計を掌る所。――**しよく**[皇太后宮職](名) 前條に同じ。――**たいふ**[皇太后宮大夫](名) 皇太后宮職の長、職務を總理し職員を監督するものにして、親任官待遇なり。

(**くわう-たいし**[皇太子](名) 現代の天皇につぎて皇位を繼承したまふ方と定まれる皇子。

(**くわう-たいそん**[皇太孫](名) 皇位を繼承したまふ御方と定まりたる皇孫。

(**くわう-たう**[荒唐](名) 言說のよりどころなくとりつゞめなきこと。――**ふけい**[荒唐不稽](名) より所もなくかんがへなしに說くこと。

(**くわう-だう**[黄道](名) ㊀[天]太陽の視軌道、赤道に對して二十三度半の傾斜をなす。㊁よきひがら。吉日。――**きちにち**[黄道吉日](名) 事を擧行するに吉なる日。よきひがら。――**くわう**[黄道光](名) [天]春季日沒後又は秋季日出前に東天に見ゆる光、熱帶地方にては、每夕これを見ることを得れど、高緯度の地方にては容易に見えず。――**たい**[黄道帶](名) [天]天球上黄道を圍める部分、古來これを十二分して十二宮といふ。

(**くわう-たく**[光澤](名) つや。ひかり。

(**くわう-たん**[荒誕](名) 言說のよりどころなきこと。うそ。いつはり。

(**くわう-だん**[光彈](名) 暗夜を照らすために發射する砲彈、強大なる光輝を有し、敵の近接の警戒などに用ひらる。

(**くわう-だん**[謊談](名) ねなしごと。うそ。

(**くわう-ち**[隍池](名) 城下のからほり。

(**くわう-ぢく**[光軸](名) [理]複屈折體に於て光の複屈折をなさゞる方向。

(**くわう-ちよ**[皇儲](名) 天子の御よつぎ。

(**くわう-ぢよ**[皇女](名) 天皇の御女。(内親王)。

(**くわう-ちん**[轟沈](名) 艦船を砲擊して打沈むるを。又、艦船が爆發にかゝりて沈むを。

(**くわう-ぢん**[黄塵](名) ㊀黄なるつちけむり。㊁厭(いと)はしき世間の俗塵。

(**くわう-てい**[皇帝](名) 天子の尊稱。

(**くわう-てう**[皇朝](名) 我國の朝廷。又、我國。

(**くわう-てつくわう**[黄鐵鑛](名) [鑛]鐵と硫黄(いわう)とより成りて眞鍮(しんちゆう)の如き色を帶びたる鑛物、諸岩石中に分布し、普通結晶面上に條線を具す、質硬(かた)けれど脆く分解し易し。

(**くわう-てん**[皇天](名) 天のかみ。上帝。

(**くわう-てん**[光點](名) ㊀[理]光の發する點。㊁[天]太陽の黑點附近にあらはるゝ、特に光輝の強き部分。

(**くわう-ど**[荒土](名) 不毛の地。

(**くわう-ど**[黄土](名) ㊀黄色を帶びたる土。㊁よみぢ。めいど。「美人は―」。

(**くわう-ど**[光度](名) [理]發光體より單位の距離に於て、光の方向に直角なる衝立(ついたて)上の單位の面積に受くる光の強さ、光度の單位は一燭光なり、一燭光とは、鯨蠟の一時間に百二十「グラム」宛燃燒するときの光度をいふ。――**けい**[光度計](名) [理]光度を比較するに用ふる具、「ブンゼン」氏の光度計は、目盛(めもり)したる臺に、中央に油脂を點したる衝立(ついたて)をのせ、其左右に蠟燭及計らんとする發光體を置けるものにして、其おの〳〵を適宜に動かし、衝立の油脂の色が、何れの側よりも同じに見ゆる位置を求めば、發光體及蠟燭より衝立までの距離の平方の比が、卽ち發光體の光度なり。

(**くわう-とう**[皇統](名) 天皇の御血統。「―連綿」。――**ふ**[皇統譜](名) 皇統の順序を記しある譜、皇室の御系圖。

(**くわう-どうくわう**[黄銅鑛](名) [鑛]銅鑛中須要なる鑛物、色は黄金に似る結晶は微小、概ね樹狀又は毛髮狀の集合をなして鑛脈を成す。

(**くわう-どく**[鑛毒](名) 鑛物の含有する毒、又、其毒のために害を被むるを。「―事件」。

(**くわう-ねつ**[黄熱=Yellow fever](名) 「マラリア」性の一種の熱病、患者は黑色のものを嘔吐する特徴あり、中央「アメリカ」及「メキシコ」等に流行す、氷點以下の時候にては發生せずといふ。

(**くわう-ねん**[光年](名) [天]光が一年間に達する距離、恒星の距離は甚だ大いにして、里の如き單位にては測り難きを以て、光年にて測る。

(**くわう-は**[光波](名) 光の波動。

(**くわう-はい**[荒廢](名) ㊀あれすたるを。くづれはつるを。「田園―す」。㊁自家の修業又は職務のなほざりになるを。又、自家の修業又は職務をうちすてゝつとめざるを。

(**くわう-はく**[黄白](名) (黄は金をいひ白は銀をいふ)金錢の異稱。「―を散ず」。

(**くわう-ばく**[廣漠](名) ひろ〴〵としてかぎりなきを。

(**くわう-はつ**[黄髮](名) 老人の髮の黄色なるを、轉じて、七八十の老人。

(**くわう-ひ**[皇妣](名) 崩御ましませし皇太后。

(**くわう-ひ**[皇妃](名) きさき。

(**くわう-ふ**[鑛夫](名) 鑛山にやとはれて鑛物を掘り出す人夫。かねほり。

(**くわう-ぶ**[荒蕪](名) 田畝などのあれはつるを。

(**くわう-ふ**[曠夫](名) 妻なき獨身者。やもを。

(**くわう-ふう**[光風](名) 雨後の晴天に吹くこゝちよき風。――**せいげつ**[光風霽月](名) 物事に執着(しふぢやく)せずして胸中に煩悶苦痛を止めず、灑々落々として快活なる狀態にいふ語。

(**くわう-ぶつ**[鑛物](名) [鑛]地殼岩石を形成する天產の無機物、卽ち、金・石・玉・土・砂・化石・氷・圓などの類、動物又は植物などの對。(礦物)。――**がく**[鑛物學](名) 鑛物の性質種類などを研究する科學。金石學。

(**くわう-べつ**[皇別](名) 皇族より出でし氏族の稱。

(**くわう-ぼう**[皇謨](名) 天子の國家をしろしめすはかりごと。

(**くわう-ぼう**[廣袤](名) よこと長さと、ひろさ。

(**くわう-みやう**[光明](名) ㊀發射する光輝、ひかり、かゞやき。㊁慈悲・博愛、其他すべて心上又は世上の煩惱・罪惡・愚昧等の暗黑を照らして、信仰・道德又は智識の力を與ふるものゝ稱。㊂はえあるを。いきほひよきを。――**じだい**[光明時代](名) 文物道德の興起せる時代、世態の安寧なる時代。――**めん**[光明面](名) 光榮又は善德の存在せる方面。

(**くわう-みやく**[鑛脈](名) 鑛物の岩石間に塡充したる脈絡、地下の鑛物を含有する水が、岩石の裂隙の兩壁に物質を沈澱せしむるより生ず。

(**くわう-めい**[光明](名) 「くわうみやう」に同じ。

(**くわう-もん**[黄門](名) 中納言の唐名。

(**くわう-や**[曠野](名) ひろ〴〵としたる野原。

(**くわう-らい**[光來](名) 人の訪ひくることの敬語。「御―被下度候」。

(**くわう-らう**[黄老](名) 黄帝と老子とを祖としたる學、卽ち、生を養ひ無爲を貴ぶ學。

(**くわう-りやう**[荒涼](名) 景色の荒れすさびて物淋しきを。

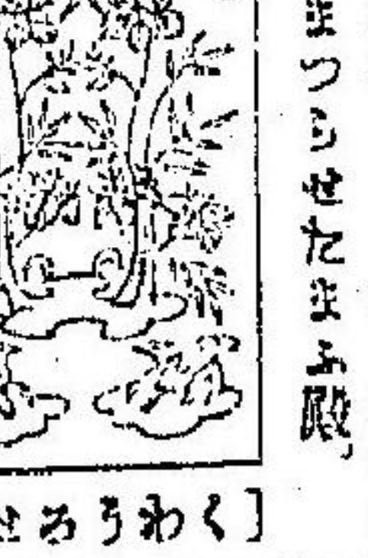
（**くわう-りやう**[黄粱]（名）「おほあは」の異稱。——**いつすゐ**[黄粱一炊]（邯鄲の枕の故事に出づ）富貴功名の極めて短きにたとへいふ語。

（**くわう-りん**[光臨]（名）人の訪ひくるをの敬語。

（**くわう-りよう**[皇陵]（名）みさゝぎ。[陵]。

（**くわう-れい**[皇靈]（名）代々の天皇のみたま。——**さい**[皇靈祭]（名）春秋二度彼岸の中日に行はせらるゝ皇靈の大祭。——**でん**[皇靈殿]（名）宮中にて皇靈をまつらせたまふ殿。

（**くわう-ろ-せん**[黄櫨染]（名）天皇の着させらるゝ御袍の染色、色は茶色に似、御紋は桐・竹・鳳凰などにして、はじ・すはう及米・酢・灰などを合はせて染むるもの。


[くわうせん]

（**くわう-わう**[皇王]（名）天子。君王。

（**くわう-ゐ**[皇位]（名）天皇の御位即ち帝國の元首にして且皇室の嫡宗にましまする地位、標識として神器を相傳せらるゝ定めなり、男系の卑屬に傳へらるゝを原則とし、嫡長子孫に傳へらるゝを正順とす、皇位は國法の原則として間斷あるを許さず、先帝崩御の發表と同時に新帝の踐祚あるものとす。

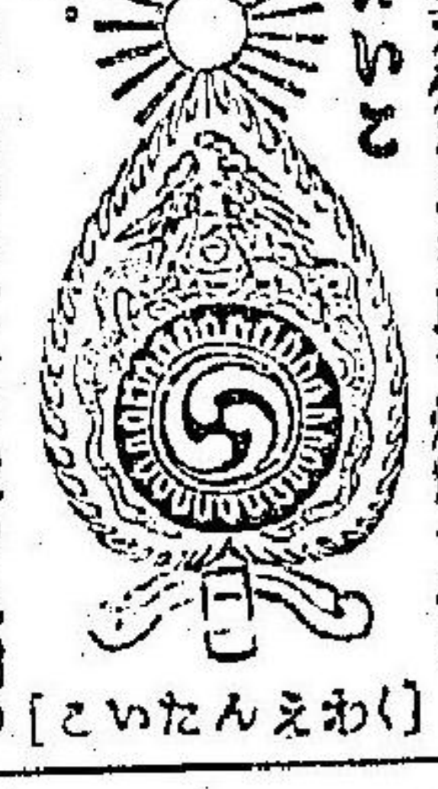
（**くわう-ゐ**[皇威]（名）天皇の御威光。みいづ。

（**くわう-ゐ**[黄緯]（名）【天】黄道より天體に至る角距離、北に測りたるを北緯といひ、南に測りたるを南緯といふ。

（**くわ-えい**[花英]（名）はな。はなぶさ。

（**くわ-えう**[火曜]（名）月曜の翌日。

（**くわ-えん**[火焰]（名）【化】流出する瓦斯の燃燒して熱及光輝を放つもの、其中心部は、燃燒物の氣體に變ぜる部分にして殆ど無色なり、其外部は、空氣の供給不充分にして固形物遊離し、燃燒熱により熱せられて光輝部をなす、又、其外部の空氣に觸るゝ所は、酸素の供給充分なるを以て燃燒十分にして光輝なし。——**だいこ**[火焰太鼓]（名）周圍に火焰の飾ある太鼓、舞樂に用ふるもの。


[くわえんたいこ]

（**ぐわ-えん**[臥煙]（名）㊀昔時、江戸城の見附の警衛に附屬せし賤役者。㊁無頓にして品性卑しき人をあざけりていふ語。

（**ぐわ-か**[畫家]（名）ゑかき。ゑし。

（**くわ-かい**[禍階]（名）それより次第に禍(ワザハヒ)の及ぶべき物事。

（**くわ-がい**[花蓋]（名）【植】花の萼及瓣の總稱。

（**くわ-がい**[禍害]（名）わざはひ。さいなん。

（**くわ-がい**[花街]（名）遊里の異稱。はなのちまた。いろまち。いろざと。くるわ。

（**ぐわ-かい**[瓦解]（名）㊀物事の瓦の如く碎け散ること。㊁東京にて、德川幕府顚覆して武士の離散せしときにいふ「—後」。

（**くわ-かう**[花梗]（名）【植】花をつくる柄。

（**くわ-かう**[花香]（名）花のにほひ。

（**くわ-かう-がん**[花崗岩]（名）【鑛】石英・長石及雲母の三鑛物より成りたる岩石、我國に多く產し、中國地方にては嘩餘に進亙するもあり、銀白色の鱗片と鱗狀の裂け易き黑點とを併有するもあれど、多くは其何れかに偏するものなり。

（**くわ-かう-せき**[花崗石]（名）花崗岩のきりいし。みかげいし。

（**くわ-がく**[化學＝Chemistry]（名）【化】物質の元素及其化合の分量定則等を研究する科學。「セイミ」。——**さよう**[化學作用]（名）【化】化學的作用に同じ。——**しき**[化學式]（名）【化】元素の符號に其原子の數を表はす數字を添へたるものを組み合せ、化合物の分子の組成を示す式、例へば、H_2Oは水の分子の化學式なり。——**しや**[化學者]（名）化學を學ぶ者。又、化學に通達せる人。——**せん**[化學線]（名）【理】「スペクトル」の紫及其外部はよく化學的作用を起すものにして、硝酸銀を塗りたる紙を此部に置けば、これを黑變せしむ、此作用ある輻射線を化學線といふ、紫部より外に於て、赤より紫に至る長さと殆ど等しき距離に達す。——**てき-さよう**[化學的作用]（名）【化】化合又は分解せんとすること。——**てき-はんおう**[化學的反應]（名）【化】二種又は二種以上の物質の間に、化學變化を生ずること。——**てき-へんくわ**[化學的變化]（名）【化】物質の性質が全く異なる物質に變ずること。——**はうていしき**[化學方程式]（名）【化】化學的反應を表はす方程式にして、或化合物を表はす符號又は元素化合式を數個加へ、新規の數個の元素又は化合物に等しきことを示すもの、例へば、銅に硫酸を加ふれば硫酸銅と水素とを生ずるを示す化學方程式は、Cu(銅)$+H_2SO_4$(硫酸)$=CuSO_4$(硫酸銅)$+H_2$(水素)なるが如し。——**ふがう**[化學符號]（名）【化】元素及其原子量を表はす符號、例へば、水素の一原子量をH、酸素の一原子量を○にて表はすが如し。——**へんくわ**[化學變化]（名）【化】化學的變化に同じ。

（**くわ-がく**[科學＝Science]（名）假定の上に立ちて、特殊なる現象の原理に闡し、概括して系統的に論述し證明せる學、これを研究事項によりて、自然科學・精神科學の二とす、理學・化學・動物學・植物學等は前者に屬し、倫理學・心理學・法律學等は後者に屬す、又、これを研究方法によりて說明學・規範學の二とす、前者は理學・化學・心理學等の如く說明するものをいひ、後者は倫理學・法律學の如く說明の外に規則を立つるものをいふ。——**てき**[科學的]（名）個々の事實に就き、秩序なき想像又は意見にあらずして、概括して系統を立て論述し證明するさまにいふ。

（**ぐわ-がく**[畫學]（名）畫をゑがく技術。——**し**[畫學紙]（名）鉛筆畫をかくに使用する洋紙、質粗にして脆し。

くわかく-の-あらそひ[蝸角爭]（名）（莊子に、蝸牛の角の上に兩國ありて互に攻伐すといふ寓言に出づ）見識の小さき輩が、互に役に立たぬ些細の事に爭ふにいふ。

（**くわ-かつ**[瓜葛]（名）（うりのつるの如くまとひつゞく意）血緣のつゞき。えんるゐ。「—の親」。

（**くわ-かふ**[華甲]（名）六十一の本卦がへり。

（**くわ-がふ**[和合]（名）まぜあはすこと。

（**くわ-がふ**[化合]（名）【化】二種又は二種以上の物質が、相結合してもとの全く異なる性質を有する物質となること、例へば、酸素と水素と化合して水となるが如し。——**ねつ**[化合熱]（名）【化】化合の際に發生する熱。——**ぶつ**[化合物]（名）化合によりて生じたる物質。

（**ぐわ-がふ**[瓦合]（名）破れたる瓦の合するが如く、全からざるもの、あつまるにいふ。

（**くわ-かん**[果敢]（名）けつだんよく、物事をおしきりてなすこと。「—の氣」。

（**くわ-き**[果毅]（名）けつだんよく、意志のしつかりしてあること。

（**くわ-き**[花卉]（名）花のさく木と花のさく草と。

（**くわ-き**[花器]（名）花を活(イ)くる器。はないけ。

（**くわ-き**[火氣]（名）火の氣。火の勢。

（**くわ-き**[火器]（名）㊀火をいるゝうつは、即ち、火鉢の類。㊁大砲又は小銃の稱。

（**くわ-き**[禍機]（名）わざはひのよりて發する所。

（**くわ-ぎう**[蝸牛]（名）【動】「かたつむり」の一名。

（**くわ-きふ**[火急]（名）火の付くが如くに急なること。極めて急なること。（火速）。

（**くわ-きやう**[過境]（名）境界を超越すること。

（**くわ-きよ**[寡居]（名）やもめぐらし。

（**くわく**[畫]（名）字を書くに一筆に行(ヤ)るべき程の稱、例へば「一」は一畫「小」は三畫なるが如し。

（**くわく**[郭]（名）くるわ。「城—」。

（**くわく**[槨]（名）棺を入るゝ箱。

（**くわ-ぐ**[火具]（名）暗夜を照らし又は物を燒夷し若しくは爆發する等に用ふるもの。

（**ぐわ-ぐ**[臥具]（名）ねるだうぐ、即ち、ふとんの類。

（**くわく-いつ**[畫一]（名）とゝのひてたゞしきこと。又、物事の明かにして曲がりなきこと。

（**くわく-かう**[藿香]（名）【植】唇形科に屬する草、莖は薄荷(ハッカ)に似て細長く、藥用又は香料とす。

（**くわく-ぐわい**[郭外]（名）くるわのそと。

（**くわく-こう**[郭公]（名）【動】（い）「ほとゝぎす」の一種、「ほとゝぎす」に似て、體の稍や大形なると胸腹の黑線の細きとを異なりとす、毛蟲の類を食ひ、養樹上益鳥なり。（ろ）「ほとゝぎす」の誤稱。

（**くわく-さく**[畫策]（名）はかりごとを立つること。

（**くわく-さん**[擴散]（名）㊀ひろがりちること。㊁【理】一の液體に他の液體を注ぐとき又は一の氣體に他の氣體を注ぐとき、其二つの液體又は氣體が漸次相混和すること、例へば、水の上に「アルコホル」を注(ソヽ)ぐに暫時にして均等に混じ、又、水素瓦斯を充(ミ)せる瓶口を倒にし、酸素瓦斯を充せる瓶口を其下方に置くに、暫時にして上下二瓶の瓦斯は均等に混和するが如きこれなり。

（**くわく-しやく**[矍鑠]（名）老年なれども壯健にして元氣よきこと。

（**くわく-じゆう**[擴充]（名）おしひろめて缺陷なきやうになすこと。「惻隱の心を—し」。

くわく-する[畫する]（他、さ變）（せ・し・する・すれ・せよ）㊀字を書く、又、線を描(ヱガ)く。㊁截止す。區分す。かぎる。わかつ。きまる。㊂謀計を立つ。はかる。

（**くわく-せい**[廓淸]（名）害物をはらひのぞくこと。

（**くわく-せい-き**[擴聲器]（名）ものいふ聲を高くして遠方に聞えしむるため、口にあて用ふる器。

（**くわく-ぜん**[畫然]（名、副）はっきりとして亂れざるさまにいふ語。

（**くわく-だい**[廓大]（名）㊀ひろくふときこと。㊁ひろくすること。ひろぐること。——**りつ**[廓大率]（名）【理】「レンズ」其他光線の研究用器械の物體の見ゆる大きさを廓大する割合、即ち其器械にて見ゆる直線と肉眼にて見ゆる直線との比なり。

（**くわく-だく**[畫諾]（名）物事につけて自家の意見なく、たゞ下官の文案通に許可すること。

（**くわく-ちやう**[擴張]（名）範圍又は勢力を張りて大ならしむること、おしひろむること。「海軍—」。

（**くわく-ちゆう**[郭中]（名）くるわうち。

（**くわく-とく**[獲得]（名）手にいるゝこと。うること。

（**くわく-ない**[郭内]（名）くるわうち。

（**くわく-ばつ**[劃伐]（名）區劃をたてゝ、林木を採伐すること。

くわく-ひき[畫引]（名）漢字の字書を字の點畫數

によりて索引するやうに編纂すると。又、其字書、

(くわくらん[霍亂](名)「コレラ」病の一種、吐瀉はげし、多くは夏日飲食より起る。

(くわぐわい-みつさう[花外蜜槽](名)【植】花の外部にある蜜槽、槲の葉柄にある蜜槽の類。

(くわくわく[花廓](名) いろざと。遊里。

(くわくわん[花冠](名)【植】花瓣の總稱。

(くわくわん-ぷ[火浣布](名) ㊀支那の南荒の外の火山に棲める鼠の毛を取りて織りたるといふ布、火に入れて燒けず却つて白くなるといへり。㊁いしわたを以て織りたる布、よく火に堪ふ。

(くわくん[寡君](名)（寡德の君の義）諸侯の臣下が、他の諸侯に對して自分の主君の謙稱。

くわけ[區分](名) くぶん。わかち。

(くわけい[花畦](名) 花の植ゑてあるうね。

(くわげき[過激](名) 度に過ぎてはげしきこと。甚だあら〳〵しきこと。

(くわけふ[和協](名) 中よくむつまじきこと、又、中よくむつまじくさすること。

(くわげん[寡言](名) ことばすくなきこと、多辯ならざること、

(くわげん[禍源](名) わざはひの起るもと。

(くわげん[訛言](名) ㊀うそのひやうばん。あやまりのいひふらし。㊁なまり。方言。

(くわげん[過言](名) いひすごし。

(くわこ[過去](名) ㊀過ぎ去りたる時日又は境遇、むかし。「―を回想す」。㊁まへのよ。前身。前世。「如何なる―の報にて」。㊂【哲】時間の三區別の一、現在の前。㊃【文】動詞及助動詞の過ぎ去りし動作を表はすもの。

(くわご[訛語](名)「くわげん」(訛言)に同じ。

(くわご[過誤](名) あやまち。あやまり。

(くわこう[火口](名)【地】火山の噴火口。 ―げん[火口原](名)【地】火山の中央なる火口と外輪山との間の低地。 ―げんこ[火口原湖](名)【地】火口原の一部に水湛(たた)へて成りたる湖。 ―こ[火口湖](名)【地】火山の燒火口に水湛へて成りたる湖。 ―らい[火口瀨](名)【地】火山の外輪山以内の溜水相集まりて、外輪山の一部を破り出で、成りたる溪川。

(ぐわこう[畫工](名) 繪をかく人。ゑかき。繪師。

(くわこく[過刻](名) さきほど。せんこく。

(くわこく-るゐ[禾穀類](名) 稻・麥・粟・稗・黍・蜀黍(もろこし)・玉蜀黍(たうもろこし)・薏苡(はとむぎ)等の總稱。

(くわこ-ちやう[過去帳](名) 死人の法名を記し置く帳面。(鬼籍、點鬼簿)。

(くわこん[禍根](名) わざはひの起るもと。

(くわごん[過言](名)「くわげん」に同じ。

†くわざ[冠者](名) 古昔、元服したる少年の稱。

(ぐわさ[畫叉](名) かけぢかけ。

(くわさい[果菜](名) ㊀くだものとやさいと。㊁おもに其果實を需要する疏菜、西瓜(すいくわ)・甜瓜(まくわうり)等の類これなり。

(くわさい[火災](名) 火のわざはひ。くわじ。火難。 ―ほけん[火災保險](名) 火災によりて生ずる損害を塡補するを目的となす保險。

(くわさう[火葬](名) 屍(しかばね)を燒き骨のみ取りて葬(はうむ)ること。土葬又は水葬などの對。

(ぐわざう[畫像](名) 畫きたる像。ゑすがた。

(くわさう-るゐ[禾草類](名) 家畜の飼料として栽培する草の禾穀類に似たるものゝ稱、かるかや・かやつりぐさ等の類これなり。

(くわざん[火山](名)【地】地中の水蒸氣又は融

融なる岩漿が、地殼の脆弱部を破りて噴出する山。やけやま。噴火山。 ―がん[火山岩](名) 火成岩の一種、地下の岩漿が迸發し地表に流出して成りたるもの、多量の氣孔を有す。 ―くわい[火山灰](名)【地】火山より噴出する灰、即ち熔岩の碎片細小なるもの。 ―しや[火山砂](名)【地】火山灰より稍や大いなる熔岩の碎片。 ―たう[火山島](名)【地】海中火山の噴出によりて生ずる島。 ―だん[火山彈](名)【地】熔岩の碎片の大いにして彈狀をなせるもの。 ―ぢしん[火山地震](名)【地】火山破裂の際に起る地震。 ―みやく[火山脈](名) 火山の線狀をなして排列するものゝ稱。 ―れき[火山礫](名)【地】熔岩の碎片の礫大なるもの。

(ぐわさん[畫讃](名) 畫の上に題する讃。

(くわさんくわ-ちつそ[過酸化窒素](名)【化】二酸化窒素の稱。

(くわさんくわ-すゐそ[過酸化水素](名)【化】無色の液體、容易に酸素を放出するを以て酸化の作用強く、其溶液は絹・木綿等を晒(さら)すに用ふ、過酸化「バリウム」に稀硫酸を注げばこれを得。

(くわさんくわ-バリウム[過酸化―＝Barum peroxide](名) 化灰色の粉末、強き熱度を加ふれば酸化「バリウム」を生ず。

(くわし[花絲](名)【植】雄蕊の葯をつくる柄。

(くわし[菓子](名) 一種の食品、食膳の外に供ふるものにして、古昔は果實なりしより轉じて名づく、小麥の粉米の粉又は餅などに、砂糖・餡の類を加へて種々の形に製す、もちぐわし・ひぐわし等の名稱あり、(糕餅、菜餅)。 ―いれ[菓子入](名) 菓子を入れおくための器。 ―がた[菓子型]

(名) 落雁などを製するに、粉を打ち込むべき型。(花饅子、脫子)。 ―き[菓子器](名) 菓子を盛り客に供(すす)ふる器。 ―ざら[菓子皿](名) 菓子を盛りて客に供ふる皿。 ―ぢゆう[菓子重](名) 菓子を入るゝ小さき重箱。 ―ばこ[菓子箱](名) 菓子を入れて音物などにする箱。 ―パン[菓子麵麭](名) 中に餡(あん)を入れ菓子の如く製したる麵麭。 ―ぼん[菓子盆](名) 菓子を入れて客に供ふる盆。 ―や[菓子屋](名) 菓子を製し賣る家又は人。(餅餌匠)。

(くわじ[火事](名) 火のわざはひに罹(かか)りて家屋などの燒くること。(火災、火難)。 ―しやうぞく[火事裝束](名) 消防夫などが火事場に赴く定めのよそほひ。 †―どろ[火事泥](名)「くわじばどろばう」の略言。 ―ばおり[火事羽織](名) 昔時、武士などが火事場に赴くときに着せし羽織、形は陣羽織に似てぶつさきにし背に定紋などを着けたり。

くわじ-ば[火事場](名) 火事のあるところ。 ―どろばう[火事場泥坊](名) ㊀火事場の紛擾に乘じて盜をはたらくもの。㊁他人の紛擾に乘じて利益を攫取する人をのゝしりていふ語。

(くわしつ[過失](名) ㊀あやまち。しくじり。やりそこなひ。㊁【法】法を犯さんとする故意なくして法を犯す行爲あること。規則習慣を遵守せず又は疎虞・懈怠等により、故意なくして法に觸(ふ)るゝこと。 ―さつしやう[過失殺傷](名)【法】故意なくして過(あやま)ちて人を殺し若しくは傷つけたる罪、例へば、塡裝せる銃を弄び、過ちて引金に觸れて傍人を殺傷したる如きをいふ。

(くわじつ[過日](名) 過ぎし日。先日。

(くわじつ[果實](名) ㊀【植】植物の子房の成熟したるもの。くだもの。み。みづぐわし。㊁【法】或基本の物件より生殖する利益の稱、元金に對する利息又は家畜の產する子などの類これなり。

(くわしや[火車](名) ㊀惡心の老婆。おにばゞ。㊁汽車。火輪車。

(くわしや[華奢](名) 花やかによそほふこと。はなやかに飾ること。

(くわしや[火舍](名) 香爐。又、火入。

(くわしや[花車](名)（花をまはすもの、轜なりといふ）やりて。(老妓)。

(くわしや[貨車](名) 鐵道列車の貨物を積むもの。荷物汽車。

(くわじや[冠者](名)「くわんじや」に同じ。

(くわしやう[過賞](名) ほめすごし。「―難當」。

(くわしやう[火傷](名) やけど。

(くわしやう[和尚](名)「をしやう」に同じ。(おもに天台宗などにていふ)。

(ぐわしやう[臥床](名) ㊀ねどこ。ふしど。㊁とこについてゐること。ねてゐること。

(くわしゆ[火酒](名) せうちう。

(くわじゆ[花樹](名) 花のさく樹木。

(くわしよ[華胥](名)（支那の黃帝が午睡に華胥といふ國に遊びたりといふ故事に出づ）ひるね。午睡。「―の夢」。

(くわしよ[過所](名) 關所(せきしよ)通行の切手。くわそ。

(くわじよ[花序](名)【植】發生する花の排列の稱、分つて無限花序と有限花序との二とす、前者は其下部の花先づ開き順次上部へ開き行く、一に上昇花序といふ、後者は莖の頂端に花先づ開き順次下部に開き行く、一に下降花序といふ。

(くわじよう[過剩](名) 定數よりありあまること。のこりあること。あまり。

(くわしよく[貨殖](名) 財產をふやすこと。商賈をさかんにすること。

(くわしよく[華燭](名) はなやかなる光のともしび(婚禮の儀式などに用ふる語)。 ―のてん[華燭典](名) 婚禮。

(くわしよく[過食](名) 過分に食ふこと。くひすぎ。(暴食)。

(くわしよく[火食](名) 物を煮たきして食ふこと。

(くわしん[禍心](名) わざはひをなさんとたくらむこゝろ。「―を包藏す」。

(くわしん[化身](名)「けしん」に同じ。

(くわしん[花神](名) 花のたましひ。

(くわしん[花脣](名) 花の開くを人のものいふにたとへ、花の瓣をくちびるにたとへていふ語。

(くわしん[花心](名) ㊀【植】花の中心即ち雌蕊・雄蕊の稱。㊁美人のこゝろ。

(くわしん[花信](名) 花の開きたりといふしらせ。花のおとづれ。 ―ふう[花信風](名) 初春より初夏までの風の稱、五日に一番、梅花風より楝花風に及び都合二十四番あり。(二十四番花信風の條を見よ)。

(くわじん[寡人](代)（寡德の人の義）王侯などの謙稱。

くわ-す[化](自、さ變) ㊀うつりかはる。かはる。㊁かはりて異類のものとなる。ばく。「鷹くわして鳩となる」。㊂導かれ移る。感じ效(なら)ふ。從ひ變ず。「德に―」。

くわ-す[化](他、さ變) ㊀うつりかはらしむ。かはらす。かふ。㊁かはりて異類のものとなす。㊂教へ導く。導き移す。從ひ傚(なら)はしむ。「民を―」。

くわ-す[和](自、さ變) ㊀やはらぐ。とゝのふ。㊁したしむ。むつぶ。㊂讎をとき好(よしみ)を結ぶ。㊃ほどにかなふ。宜しきに當る。㊄まじ

ゐ。混ず。㊅従ひ爲す。つきて行ふ。「天下これに—」。㊆他の聲に應じて聲を發す。他の歌ふにつきて歌ふ。「汝先歌へ我これにくわせん」。㊇他の詩作の韻によりて詩作す。又、他の詩意に答へて作詩す。

くわ・す（せし・すする・すれ・せよ）「和」（他、さ變）㊀やはらぐ。とゝのふ。㊁したしみむつばしむ。㊂まぜあはす。混合す。

くわ・す（せし・すする・すれ・せよ）「課」（他、さ變）わりあつ。おほす。

くわ・す（せし・すする・すれ・せよ）「科」（他、さ變）刑罰をおはす。

ぐわ・す（せし・すする・すれ・せよ）「臥」（自、さ變）ふす。ねる。

くわ・ずゐ「花蕊」（名）【植】花の雌蕊・雄蕊の總稱。

くわ・せい「火星」（名）上遊星の中にて最も地球に近きもの、太陽よりの平均距離五千七百萬里にして、六百八十七日にて太陽を一周す、直徑は一千七百里にして、二個の衞星あり、色はおもに赤し、中に脊綠の見ゆるは水陸の分布ならんといひ、又、南北兩極に白色の見ゆるは雪國ならんといひ、表面無數の線狀の見ゆるは運河ならんといひ、雰圍氣ありて生物存在するならんともいへり。〔熒惑星〕。

くわ・せい「化生」（名）㊀そだつこと。生ずること。㊁生物の形を變ずること、ぼうふりの蚊となるが如きをいふ。

くわ・せい「化成」（名）㊀そだて、其生を遂げしむること。「天地の萬物を—するや」。㊁前形を變じて現形となること。㊂化合して一の物となること。

くわ・せい「和聲」（名）㊀やはらぎたる聲。又、和して同時に響くこと。又、或旋律に或聲を調和すること。㊁「Harmony」數個の旋律相合してうたふ聲。

くわ・せい「課稅」（名）租稅を人民にわりあつること。又、わりあつる租稅。——**へうぢゆん**「課稅標準」（名）租稅を賦課するに就き法律にて定めたる標準、地租の地價又は酒造稅の石數の如きものにて、これに稅率を乘ずれば其稅額を算出し得。

くわせい・がん「火成岩」（名）【地】岩石の二大別の一、地下の熔解せる岩漿が迸發して、地表又は其附近に於て凝結せしもの、火山岩と深造岩とあり、おもに石英・長石・雲母・輝石・角閃石などより成り、普通塊狀にして層をなさず。

くわ・せき「化石」（名）死せる生物の遺骸又は痕跡が化して石となること、又、其石に化したる生物の遺骸又は痕跡の稱、化石はおもに水中に起る現象にして、水成岩中には多く前世界に於ける生物の化石を包藏す。

くわ・せん「火戰」（名）火兵戰の略言。

くわ・ぜん「果然」（副）はたして。

ぐわ・ぜん「瓦全」（名）徒らに生存すること。何事をもなし得ずしてながらふること。「玉碎—」。

ぐわせん・し「畫仙紙」（名）支那產の紙、白紙より厚く判も大いなり、書畫の用とす。

†**くわ・そ**「過所」（名）關所（セキシヨ）通行のてがた。

くわ・ぞく「火賊」（名）朝鮮に於ける一種の匪徒。

くわ・ぞく「華族」（名）㊀貴族又は淸華（セイクワ）の稱。㊁明治二年六月、公家及諸大名に賜はりたる稱號にして、皇室の藩屏たる一種の階級、これを公・侯・伯・子・男の五等に分ち、國家に功勞ありし者は特旨を以てこの階級に列せらる。——**くわいくわん**「華族會館」（名）華族の集會所、同族中の貴族議員の互選も此處にて行ふ。——**ぢよがくかう**（ガツコウ）「華族女學校」（名）皇后陛下の令旨に依り、華族のために建てられたる女學校、宮內省の管轄にして、宮內大臣の命を受け校長これを總理す。

くわ・た「過多」（名）おほすぎること。

くわ・た「夥多」（名）おびたゞしきこと。おほきこと。

くわ・たい「禍胎」（名）わざはひのよりて起る所。

くわ・たい「過怠」（名）㊀あやまち。おこたり。ぬかり。㊁「くわたいきん」の略言。——**きん**「過怠金」（名）過怠の所爲に對して負擔せしむる金。くわれう。

くわ・だい「過大」（名）大きに過ぐること。なみにはづれてふときこと。

くわ・だい「科第」（名）進士の試驗。

くわ・だい「課題」（名）課して爲さしむる題。

くわ・だい「花臺」（名）花瓶をおく臺。

ぐわ・だい「畫題」（名）畫に描（ゑが）き出す形象の標題。

ぐわ・だい「臥內」（名）ねどこ。ふしど。

くわ・たう（トー）「過當」（名）程（ホド）に過ぎてゐること。普通にはづれてゐること。分不相當。

くわ・たう（トー）「果糖」（名）甘味を有し、還元性の水に溶（ト）け易き物體、醱酵すればアルコホルを發生す。

ぐわ・だう（ドー）「畫道」（名）繪畫のみち。

くわ・たく「火宅」（名）【佛】（煩惱の苦を火に、宅を三界にたとへていふ）現世の稱。「五塵の—」。

くわ・たく「花托」（名）【植】花柄の花を着する所の膨（フク）れてゐる部分。

ぐわ・たふ（トー）「臥榻」（名）㊀ねどこ。ねだい。㊁安息せる領地の義にかりいふ語。「—の側、豈に他人の鼾睡を容れんや」。

くわ・だん「花壇」（名）其花を植うるため、高く土を盛りて壇の如くこしらへたるもの。（花塢、花畦）。

くわ・だん「果斷」（名）物事をおもひきって行ふこと。決斷よくして實行の意志強き性質。

くわ・ちう「華冑」（名）門閥高き家がら。

くわ・ぢく「花軸」（名）【植】花梗を出せる莖の部分。

くわ・ちやう（チヨー）「課長」（名）一課の事務を總當し課員を統率するもの。

くわ・ぢやう（ジヨー）「火定」（名）行者（ギヤウジヤ）などが、

火中にみづから身を投げ入れて死すること。

くわ・ちゆう「花柱」（名）【植】雌蕊の長き柄。

くわ・ちゆう「火中」（名）㊀火のなか。㊁火の中に入れて燒き捨つること。

くわ・ちゆう「渦中」（名）㊀水などのうづまく中。㊁紛擾せる事件のうち。

くわ・ぢゆう「過重」（名）㊀過度に大事にすること。㊁過度におもきこと。

くわつ「活」（名）㊀いきてゐること。又、たすかること。「—を求む」。㊁氣絕したる人を、其急所を突き又は蹴（ケ）みなどして蘇生せしむること。

くわつ・えふ・じゆ「濶葉樹」（名）【植】葉のひろき樹木、即ち、なら・くぬぎ・かし・くり等の類。

くわつ・がん「活眼」（名）明かなる眼識。

くわつ・がん「刮眼」（名）「くわつもく」に同じ。

くわっ・き「活氣」（名）㊀よく活動する身心の元氣。㊁はたらき動く勢。

くわっ・き「火氣」（名）ひのけ。

ぐわっ・き「月忌」（名）まいつきのめいにち。

くわっ・くわざん「活火山」（名）【地】現在噴火しつゝある火山。

くわつ・くわつ「聒聒」（名、副）かまびすしきさまにいふ語。

くわっ・けい「活計」（名）くちすぎ。なりはひ。くらし。生計。

くわつ・げき「活劇」（名）演劇の狀態を實際に行ふこと。

くわっ・こ「括弧」（名）數字又は文字の前後に挿（ハサ）みて、他との區別を明かにするために用ゐる記號、其中間に挾まるゝものは、一群に總括せらるゝものとす、〔〕（）「」等種々あり。

くわつ・ご「活語」（名）【文法】動詞に同じ。

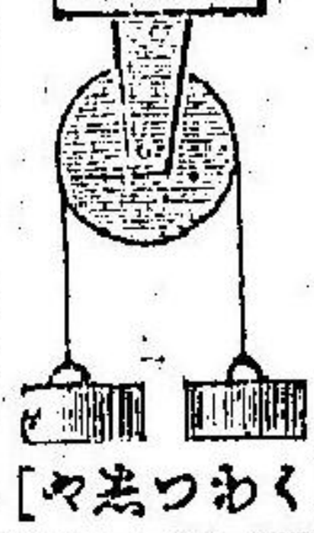
くわっ・さう（ソウ）「聒噪」（名）かまびすしきこと。

くわっ・さつ「活殺」（名）いかすところすこと。活動をなさしむるとなさしめざること。——**じざい**「活殺自在」（名）思ふまゝにとりあつかふこと。

くわつ・じ「活字」（名）活字金にて個々に鑄造したる文字、これを組み列べて活字版を作成するもの、大小種々あり、日本にては最も大なるものを初號と稱し、以下順を逐ひて一號・二號等の名あり、もとは木製なりき。——**きん**「活字金」（名）活字を鑄るに用ゐる合金、即ち、百分中に十七八分の「アンチモニー」を含める鉛。——**はん**「活字版」（名）活字を組みてつくりたる印刷版。——**ぼん**「活字本」（名）活字版を印刷したる本。

天……初號
地……一號
玄……二號
黃……三號
宇……四號
宙……五號
荒……六號
洪……七號

くわっ・しや「滑車」（名）【理】水平軸の周圍に廻轉し得る圓板にして、周圍に溝を穿ち、これに綱をかけて、物體を扛擧するに用ふるもの、其水平軸を支ふる框（ワク）の固定せるものを固定滑車といひ、上下し得るものを動滑車といふ。



〔くわつしや〕

ぐわっ・しよく「月蝕」（名）「げっしよく」に同じ。

くわつ・じん「活人」（名）生きてゐる人。命ある人。——**ぐわ**「活人畫」（名）集會などの餘興として衆人の覽に供するため、活人が恰も畫中の人の如く或さまに扮してゐること。

くわっ・せき「滑石」（名）一種の礦物、上品なるは色白く下品なるは色黃なり、これを細粉となし、紙などに塗抹す。

くわっ・せん「括線」（名）數字又は文字の或部分を一括して、他と區別するために其側につくる線。

くわつ・ぜん「豁然」（名、副）㊀ひろ〴〵とうちひらけたるさまにいふ語。㊁疑惑又は迷妄の忽ち開け散ずるさまにいふ語。「—大悟す」。

くわっ・そく「活塞」（名）圓筒內に密に嵌入し、且自由に出入し得るやうに裝置しあるもの、「蒸汽機關」又は「ポンプ」等に設けあるもの之れなり。

くわっ・たい「活體」（名）生活しある物體。「—の解剖」。

ぐわったい・しよく「月帶蝕」（名）「げっしよく」（月蝕）に同じ。

くわっ・たつ「闊達」（名）度量寬大にして、物事に凝滯せざること。

くわっ・ち「猾智」（名）狡猾なる智慧、わるがしこきこと。わるぢゑ。

ぐわっ・てん「月天」（名）【佛】月天子の略言。——**し**「月天子」（名）【佛】月の神、一に月宮天子ともいふ、四天王に屬し四天下を照らすといふ。

くわっ・と（副）にはかに怒り立つさまにいふ語。「—と急き立つ若狹介」。

くわつ・どう「活動」（名）㊀はたらき動くこと。㊁勢力ある行動をなすこと。——**しやしん**「活動寫眞」（名）映像の活動する狀態を映（ウツ）し出す幻燈。——**りやう**（リヨウ）「活動量」（名）【化】氣體又は液體の單位の容積中にある分子量の數。

くわつ・なう（ノウ）「括囊」（名）（易經に出づ、囊の口をしめくゝる義）多言せざること。放縱ならざること。物事をしめくゝること。

(ぐわっ-ぱい[月牌](名) 位牌に毎月なす供養。

(くわっ-ぱつ[活潑](名) ㊀魚の勢よく水上にはぬる音。㊁精神又は擧動の勢よきこと。いき〳〵とせるを。——はっち[活潑潑地](名) 精神の勢氣みち〳〵して煩悶又は澁滯なき狀態。

(くわっ-ぱふ[活法](名) 巧に應用せらるゝ方法。活用するによろしき方法。

(くわっ-ぱん[活版](名) 活字を以て組み立てつくりたる印刷版。——ずり[活版刷](名) 文書を活版にくみて印刷するを。又、其印刷したる文書。——や[活版屋](名) 活版を組み立つるを又は其印刷を職業となす人。又、其家。

(ぐわっ-ぴ[月日](名) 月と日と。

(くわつ-ぶつ[活物](名) 活動するもの。生活せるもの。——きせい[活物寄生](名)【植】菌類などの生活せる動植物に寄生して、これより營養分を吸收するを。

(くわっ-ぽ[濶步](名) ㊀濶揚(クワツヤウ)なるあるきかた。氣位高きあるきかた。おほまた。㊁他を眼下に見て行動する狀態。「文壇に——す」。

(くわつ-めい[活命](名) いのちあるを。

(くわつ-もく[刮目](名) 目をぬぐひて見開くを。注意して見るを。

(くわつ-やく[括約](名) ㊀くゝりちゞむるを。㊁よせあつめて一つにするを。まとめつかぬるを。——きん[活約筋](名)【生】肛門・口若しくは膀胱等の孔端をまとめつゞむるための筋。一は濶大作用をなし一は收縮作用をなす二種の纖維より成る。

(くわつ-ゆ[蛞蝓](名)【動】「なめくぢ」に同じ。

(くわつ-よう[活用](名) ㊀活(イ)かして用ふるを。利用するを。はたらかすを。㊁【文法】語尾の變

化、はたらき。——げん[活用言](名)【文法】語尾の變化する用語、即ち、動詞・形容詞・助動詞の稱。

(くわつ-りょく[活力](名) 活動の力。生活の力。

(くわつ-ろ[活路](名) まぬかれ出づる路。いのちのたすかる路。「一條の——を求む」。

(くわ-てい[課丁](名) 公用に役使せらるゝ成年者。よぼろ。にんぷ。(丁)。

(くわ-てい[禍梯](名) それより次第に禍にすゝみ及ぶべき物事。

(くわ-てい[科程](名) ほど、しな。

(くわ-てい[過程](名) 物事の經過せるみち。

(くわ-てい[課程](名) 課して爲さしむる仕事のほど、

(くわ-てう[花朝](名) 陰曆二月十五日の異稱。

(くわ-てう[花鳥](名) 花と鳥と。——の-つかひ[花鳥使](名) 艶書を持たせてやるつかひ。こひのなかだち。

(くわ-てつ[瓜瓞](名) (うりと小さきうりとの義)本家と末家との關係。ちつゞき。血族。

(ぐわ-でふ[畫帖](名) 繪を集めたる折本又は冊子。

(くわ-でん[訛傳](名) あやまりの風說。

(くわ-でん[瓜田](名) うりの生(オ)ふるはたけ。——の-くつ[瓜田履](名) 瓜田に履をいれてふみこめば、瓜をぬすみはせぬかと他の疑を受くるより、嫌疑の起り易き行爲にいふ。「——李下冠」。

(くわてん-げっち[花天月地](名) 花開きて月明かなる風景。春の月夜の景。

(くわ-と[蝌蚪](名) ㊀【動】おたまじゃくし。㊁篆字の稱、形おたまじゃくしに似たるより名づく。

(くわ-と[過渡](名) ㊀わたるを。わたる所。わたり。㊁已に舊態を脫して未だ新態を成さざる途中

の狀態。——じだい[過渡時代](名) 物事が過渡の狀態にある時代。

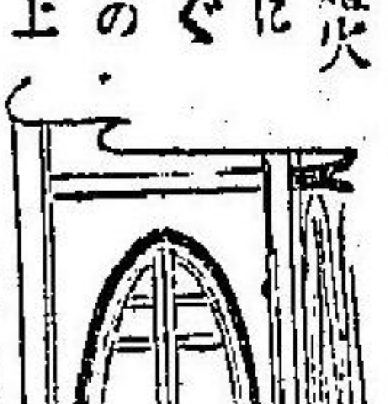
(くわ-ど[過度](名) 度にすぐるを。程をこゆるを。

(ぐわ-と[畫圖](名) くわいぐわ。ゑ。

(くわ-とう[科頭](名) 頭に何物をもかぶらぬを。

(くわ-とう[裹頭](名) 頭を袈裟(ケサ)にてつゝむを。——しゅう[裹頭衆](名)【佛】五條袈裟を著して頭をつゝみてある僧侶。

(ぐわ-とう[瓦燈](名) 燈火を點ずる陶製の具、四角形にして上狹く下廣し。——ぐち[瓦燈口](名) ㊀家の壁などに設くる出入口の上を弓狀につくりたるもの。㊁芝居にて、舞臺に設けたる家の正面の出入口。



[ぐわとうぐち(一)]

(くわとう-せいぢ[寡頭政治=Oligachy](名) 共和政治の一、或少數の人員が協同して政治を行ふと、貴族政治の如きこれなり。

(くわ-とん[火遁](名) 火中に入りてまぬかれ出るといふ幻術。「——の術」。

(くわ-なん[火難](名) くわさい。火災。

(くわ-にふ[火入](名) 陶器の釉(ウハグスリ)の面に波文の如きわれめをなせるもの。

(くわ-ねつ[火熱](名) 火のあつさ。

(くわねつ-じようき[過熱蒸汽](名)【理】飽和してあらざる蒸汽、此蒸汽は其飽和の狀態に於ける溫度より高き溫度にあるを以て過熱といふ。

‡(くわ-の-くつ[靴沓](名) 獸皮にてつくれるくつ、古昔、蹴鞠などに用ひしもの。

(くわ-はう[花苞](名)【植】花梗の下部にある鱗狀の片。

(くわ-はう[果報](名) ㊀因果の應報、むくい。㊁仕合よきを。うんつよきを。——もの[果報者](名) しあはせもの。

(くわ-はう[火砲](名) 使用し運搬するに少なくとも數人を要する發火の兵器。大砲。

(ぐわ-はう[畫報](名) 狀態を繪畫に描(エガ)きて報知するを。又、其繪畫。

(ぐわ-ばう[臥房](名) ねや。ふしど。

(くわはうわ-ようえき[過飽和溶液](名)【化】或溫度に於ける飽和溶液を靜かに冷却したるもの、下りたる溫度に於ける飽和溶液よりも割合に多量の溶質を含む。

(ぐわ-はく[畫伯](名) 繪畫の道に長じたる人。

(くわ-はん[過半](名、副) 半數以上。おほかた。——すう[過半數](名) 半數以上の數。

(くわ-ひ[果皮](名)【植】果實の皮部の稱、外果皮・中果皮・內果皮の三部より成る。

(くわ-ひ[花被](名)【植】萼と花冠との總稱、其花蕊を包むを恰も衣服の人身を被ふが如きよりいふ。

(くわ-び[華美](名) はなやかに美(ウツク)しきを。又、かざりのきはだちて見事なるを。

(ぐわ-びやう[臥病](名) 病みて床につくを。

(くわ-ひん[華品](名) うつくしきしな。

(くわ-びん[過敏](名) 神經などの普通よりもすゝどくなりて、刺戟感受のはげしきを。

(くわ-ビン[花瓶](名) 花莖を挿(サ)し入るゝ瓶、はないけ。

(くわ-ふ[寡婦](名) かゝるところなき獨身のをんな。夫にはなれたる獨身の婦人。やもめ。

(くわ-ふ[花譜](名) 花を其開く時節の順序によりて記錄したるもの。

(ぐわ-ふ[畫譜](名) 花鳥山水などを時節の順序

によりて描(ヱガ)きわけたるもの。

(くわ-ふうびやう[花風病](名) 色きちがひ。

(くわ-ふきふ[過不及](名) すぎたると及ばざると、度に適合せざるを。

(くわ-ふく[禍福](名) わざはひとさいはひと。「——門なし、たゞ人の招く所」。——をほしいまゝにす[擅禍福] 權威を弄して、勝手に人の賞罰又は黜陟を行ふにいふ。

(くわ-ふそく[過不足](名) すぎたるとたらざると。

(くわ-ぶつ[貨物](名) ㊀有形の財貨。㊁荷物。——れっしゃ[貨物列車](名)「くわしゃ」(貨車)に同じ。

(くわ-ぶつ[菓物](名) くだもの。

(くわ-ふん[花粉](名)【植】雄蕊の葯裂開して中より出だす黃色の粉末、風又は蟲の媒介により、雌蕊これを受粉して生殖作用を營む。

(くわ-ぶん[瓜分](名) 無造作(ムザウサ)に土地などを分割するを。「天下を——して功臣を封ず」。

(くわ-ぶん[過分](名) 分限を過ぎてあるを。

(くわ-へい[貨幣](名) 社會に流通して、交換の媒介・支拂の方便及價格の標準・蓄積の用に供せらるゝ物件にして、通常鑄造の金錢及兌換券不換紙幣を總稱す、從來其信用を堅固にして流通を圓滑ならしむるために、國家これが證明をなし、本位貨幣と補助貨幣とに分つ。——けいざい-じだい[貨幣經濟時代](名) 社會が貨物經濟時代より一段の進步をなし、貨幣を交易の媒介物として、經濟界の事業を經營する時代、これより更に進步して、信用經濟時代となる。

(くわ-へい[花瓶](名)「くわビン」に同じ。

(くわ-へい[火兵](名) 小銃又は大砲等の總稱。——せん[火兵戰](名) 敵と味方と相隔てゝ、

互に彈丸を發射しあふ戰鬪。

(ぐわ-べい[畫餅](名)(畫に書きたる餅の食ふを得ざる義)物事其用をなさずして無效なるを。むだ。

(くわ-へう[華表](名) ㊀とりゐ。㊁家屋の外部の飾。

(くわ-へん[火片](名) ひのこ。

(くわ-へん[花片](名) はなびら。

(くわ-べん[花瓣](名)【植】花の美麗なる部分、即ち、花冠の各片、はなびら。

(くわ-ぼく[花木](名) ㊀はなときと。㊁美しき花のさく木。

(ぐわ-ほん[畫本](名) ゑをあつめたる本。ゑを挿入してある本。ゑほん。

(くわほん-くわ[禾本科](名)【植】草本又は木本のものあり、葉は二列をなし、下部は管狀の鞘をなし前面にて分裂す、完全果葉にして並行脈なり、花は穎を有する蕊花にして穗狀又は複穗狀に排列す、果實は穎果なり。

(くわ-みつ[花蜜](名) 花の蜜槽より分泌する甘味のもの。

(くわ-めん[火綿](名)【化】「セリュローズ」を強き硝酸及強き硫酸を以て處理して得たる爆發藥、無煙火藥の原料なり。

(くわ-もく[科目](名) 物事の區分。しな。わかち。科の小わけ。

(くわ-もく[寡默](名) ことばすくなきを、又、多辯ならざる性質。

(くわ-もつ[貨物](名) にもつ。くわぶつ。

(くわ-もん[火門](名) 銃砲の發火する處。

(くわ-もん[花紋](名) 花の模樣(モヤウ)。

(くわ-やう[花樣](名) ㊀前條に同じ。㊁花のかたち。

(くわ-やく[課役](名) わりあてられたる夫役。

(くわ-やく[火藥](名) 硝石・木炭・硫黃等を混合して製したる爆裂藥にして、黑色火藥・褐色火藥・綿火藥・無煙火藥・黃色火藥等の種類あり。がふやく。

あはせぐすり。てつぱうぐすり。えんせう。――こ[火藥庫](名) 火藥をおさめおくくら。

(くわよ[過譽](名) ほめすぎ。

(くわよく[寡欲](名) 慾望の少きこと。食欲ならざる性質。

(くわらく[和樂](名) やはらぎたのしむこと。うちとけてたのしむこと。

(くわらく[華洛](名) みやこ。京都。

(ぐわら-ぐわら(名、副) 積みたる物の崩るゝ音。

(ぐわらり(名、副) 開けたるさまにいふ語。

(ぐわらり(名、副) ㊀積みたる物の崩るゝ音。㊁俄に戸を引き明くるなどのさまにいふ語。

(くわらん[禍亂](名) わざはひ。みだれ。

(くわりう[花柳](名) ㊀花と柳と。㊁遊女・藝妓などの稱。――かい[花柳界](名) いろざと。くるわ。遊里。藝者社會。――びやう[花柳病](名) かさ。黴毒。

(くわりふ[顆粒](名) つぶ。

(くわりよ[過慮](名) おもひすごし。かんがへすごし。

(くわりよう[火龍](名) くわえんのほのほの盛なるありさまにいふ語「―天に沖す」。

(ぐわりよう[畫龍](名) 畫にかきたる龍。――てんせい[畫龍點睛](名) (龍を畫きて其睛をかきこむ義にして、それにて龍の活動する樣を表はし得るをいふ)或言句又は或行爲によりて、擧(テ)て施設せる物事の大いに活動するをいふ。

(ぐわりよう[臥龍](名) ㊀ふしわだかまれる龍。㊁野にかくれたる大人物。――ばい[臥龍梅](名) [植]梅の一種、花は淡紅にして枝幹地上に蟠(ワダカマ)り延びて、枝の地に着く所に根を生ず。

(くわりよく[火力](名) 火のちから。火のいきほひ。

(くわりん[花梨](名) 熱帶地方より舶來する材

木、木理こまかにして紫檀に似たり、諸種の器具の料に供せらる。(花櫚)。

(くわりん(名) [植]薔薇科に屬する木、樹皮の外層は次第に剝離す、花は淡紅色にして枝の頂端に生じ、蕚の外面は平滑なり、觀賞用として栽培せられ、果實は食用又は藥用に供せらる。(榠樝)。

(くわりん[火輪](名) ㊀太陽の異稱。㊁「くわりんしや」又は「くわりんせん」の略言。――しや[火輪車](名) 汽車の異稱。――せん[火輪船](名) 汽船の異稱。

(くわりんさん-せきくわい[過燐酸石灰](名) [化]燐酸鹽と硫酸「カルシウム」との混合物、肥料に用ふ。

(くわりん-たう[花林糖](名) 一種の菓子、饂飩(ウドン)粉に砂糖を和し、油にてあげたるもの。

(くわ-れう[過料](名) ㊀德川時代に、過失のつぐのひに金錢を出さしめしこと、罪人の閏刑とせり。㊁[法]法令に違反せる行爲者より、國家が強制的徵收をなす金錢。

(くわ-れう[科料](名) [法]違警罪の刑罰、五錢以上一圓九十五錢以下の範圍により、其輕重に應じて犯人より徵收す。

(くわ-ろ[蝸廬](名) ㊀自己の住家の謙稱。㊁小さき家。

(くわ-ろ[火爐](名) ゐろり。こたつ。又「ストーヴ」。

(くわ-わう[花王](名) [植]牡丹(ボタン)の異稱。

くわゐ[慈姑](名) [植]澤瀉科に屬する草、水田などに生ず、葉は戟形又は箭形にして、地下莖は球狀の塊をなし食用に供せらる。

(くわん[官](名) ㊀朝廷又は政府。おかみ。㊁くに。國家。㊂行政事務を分擔する機關。「太政―」。「神祇―」。㊃行政事務を扱ふ場所。やくば。やくしよ。

㊄吏員が擔當せる職務。やく。つとめ。㊅吏員が或職務を行ふ地位、例へば、判事の如し、職に就きて何裁判所判事といふ、職の對。㊆吏員又は司僚。やくにん。つかさびと。「百―扈從す」。㊇動植物の具有する機能。「心の―はよく思ふ」。

(くわん[棺](名) ひつぎ。(柩)。――をおほひてことさだまる[蓋棺事定] 斯世を去りたる後、生前の事業又は性行の眞價の定まるにいふ。

(くわん[管](名) ㊀くだ。つゝ。㊁筆のぢく。轉じて、筆。㊂笛又は笙などの稱。管樂器。「一―」。㊃雷管の略稱、殊に、前裝銃に用ふる雷管の稱。

(くわん[環](名) ㊀金屬の輪。わ。㊁器具の引出などに付くる把手(トツテ)の輪の形をなせるもの。㊂すべて輪狀をなすものゝ稱。たまき。

(くわん[卷](名) ㊀まきもの。卷軸。㊁しよもつ。書籍。

(くわん[貫](名) ㊀錢の名目、古昔は一千文をいひ、後世は九百六十文をいふ。㊁現今の制にては、重量の單位、一瓩の四分五なり、千分一を匁といふ。

(くわん[歡](名) よろこび。たのしみ。(驩)。

(くわん[冠](名) ㊀かんむり。㊁最もすぐれたるもの。第一。首位。「文人の―」。

(くわん[鰥](名) 老いて妻なき獨身の男子。やもを。

(くわん[罐](名) ㊀つるべの類、液體を汲(ク)むに用ふるもの。㊁金屬(多くはブリキ)製の箱、中に食品などを入れ腐敗を防ぐに用ふ。

(くわん[關](名) ㊀くわんのき。とざし。㊁せき。せきしよ。「―を出づ」。㊂うまつぎ。しゆくば。㊃出入の要處。㊄くゝり。要會。㊅からくり。戾機。「施―」。㊆臍のまはり三寸程の間の稱、古來呼吸する氣の腹中にをさまる處といへり。㊇腕の中程の折れ曲がる所。

(くわん[欵](名) ㊀たのしみ。よろこび。「―を盡す」。㊁まごゝろ。忠誠。㊂なさけ。情愛。㊃うらぎり。內應。「―を通ず」。㊄かでうがき。ひとつがき。㊅區別してある條件又は事項。㊆文字を凹(クボ)く刻(キザ)みこむこと。又、其刻みこみたる凹き字。

(くわん[館](名) ㊀やかた。たち。㊁やどや。はたごや。「旅―」。㊂一棟の大屋。「書籍―」。――をすつ[捐館] 貴人の死去せるにいふ。

(くわん[觀](名) ㊀みえ。外見。「徒に―を飾る」。㊁かたちづくり。儀容。㊂ながめ。眺望。㊃ありさま。狀態。㊄あそび。遊覽。㊅たかどの。樓臺。㊆みかた。見解。「樂天―」。「厭世―」。㊇見るに足るべきもの。みもの。㊈道士の居處。道官。㊉物事を分別思惟する能力。

(くわん[浣](名) 一ヶ月を三分したるもの、即ち十日間の稱、始めの十日を上浣といひ、中の十日を中浣といひ、其以後を下浣といふ。(澣)。

(くわん[寬](名) ㊀ゆるやか。ゆたか。㊁廣きこと。

(くわん[卷](名) まき。

(―くわん[卷](接尾) 卷物又は書籍の數をかぞふるにいふ語。

(―くわん[管](接尾) 笛又は筆などの個數をかぞふるにいふ語。

(ぐわん[丸](名) たま。又、圓きもの。「―藥」。「彈―」。

(ぐわん[頑](名) ㊀かたくな。㊁動搖せざるさまにいふ語。「―として聽かず」。

(ぐわん[願](名) ねがふこと。ねがひ。特に、神佛にかくるねがひ。――い[願意](名) ねがひの主意。

(くわん-いう[官有](名) 國家の所有。

(くわん-いう[官遊](名) 官吏となりて遠地に行くこと。

(くわん-いう[勸誘](名) すゝめさそふこと。

(くわん-いん[官印](名) ㊀官署又は官職の印章。㊁太政官の印の特稱。

(くわん-えい[卷纓](名) 「けんえい」に同じ。

(くわん-えい[官營](名) 政府にての營業。

(くわんえい-せん[寬永錢](名) 寬永十三年に鑄造せし銅錢、表に寬永通寶の四字ありて、一枚は一文に當り、今日一厘に通用す。又、明和五年に鑄造せし靑銅錢、形は前者に比すれば稍や大きく、裏に波の形あり、一枚は四文に當り、今日二厘に通用す。

(くわん-おん[觀音](名) [佛]「くわんぜおん」の略言。――さう[觀音草](名) [植]吉祥草の一名。――ちく[觀音竹](名) [植]竹の一種、高さ一尺許、琉球の觀音山に產す、盆栽などに栽培せらる。りうきうゐろちく。(鳳尾竹)。――びらき[觀音開](名) 左右より閉(ト)ぢ中央にて合するやうに作れる二枚扉、倉・廚子(ヅシ)などにあるとびら。

(くわん-か[官家](名) 朝廷。

(くわん-か[換價](名) 代價につもること。

(くわん-が[官衙](名) くわんちやう。やくば。

(くわん-かい[勸解](名) 裁判官が原被兩造に對し、さとして和解せしむること。

(くわん-かい[官海](名) 官吏の社會。

(くわん-かい[官階](名) 官等。

(くわん-がい[灌漑](名) 水をそゝぎて土地を潤はすこと。

(くわん-かう[還幸](名) 主上の行幸先より還りたまふこと。(還御)。

(くわん-かう[慣行](名) ㊀從來のならはしとして行はるゝこと。㊁其事を常に行ふこと、其事をつゞけて行ふこと。――はん[慣行犯](名) [法]數回同一の所爲をなすによりて成立する犯罪、例へば、私に醫業をなすが如きをいふ。

(くわん-かう[勸降](名) 降伏をすゝむること。

(くわん-かく[丱角](名) あげまき。つのがみ。轉じて、こども。兒童。

(くわん-がく[勸學](名) 學問の道を勸め勵ますこと、又、自ら學問の道にはげみすゝむこと。――ゐん[勸學院](名) 天長三年藤原冬嗣の創立せし學校にして、藤原氏の子弟を教育せし所。

(くわん-がく-き[管樂器](名) 笙・笛・篳篥などの如く、管を以てつくりたる樂器の總稱。

ぐわん-がけ[願掛](名) 神佛にぐわんをかくること。

(くわん-かつ[管轄](名) 權限を以て支配すること。又、權限の及ぶ範圍。――くわんちやう[管轄官廳](名) 其物事を管轄する權限を有する官廳。――くゐき[管轄區域](名) 權限の及ぶ範圍。――さいばんしよ[管轄裁判所](名) [法]訴訟の性質又は土地の區域によりて、其事件を管轄すべく定められたる裁判所、例へば、訴訟の性質に就きては、違警罪又は價格百圓以下の訴訟は區裁判所を其管轄裁判所とし、重罪又は價格百圓以上の訴訟は地方裁判所を其管轄裁判所とするが如し、又、土地の區域に就きては、違警罪は犯罪地の區裁判所を其管轄裁判所とし、價格百圓以上の訴訟は被告人の現住所の地方裁判所を其管轄裁判所とするが如し、訴訟の性質に就きての管轄裁判所は、裁判所構成法に列擧しあり、土地の區域に就きての管轄裁判所は、刑事にては犯罪地、民事にては被告人の所在地の裁判所なるを普通とす。

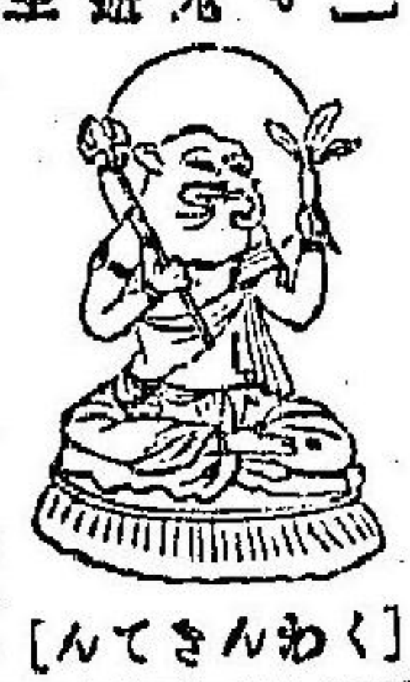
(くわん-かふ[擐甲](名) 甲(ヨロヒ)を身體に着くること。

(くわんかん-しき[觀艦式](名) 軍艦を一所に集め、天皇親臨して、各艦隊の行列の間を通御して檢閱したまふ儀式。

(くわん-き[官紀](名) 官府の規律。官吏のとりしまり。「―振肅問題」。

(くわん-き)[喚起](名) ㊀呼びおこすこと。㊁唱へはじむること。

(くわん-き)[歡喜](名) よろこぶこと。よろこび。
——だん[歡喜團](名) 古昔の菓子の一種、歡喜天に供するもの、戯にして、一名を團喜ともいひ、麪粳・五穀などをつゝみて油にてあげたるもの。
——てん[歡喜天](名) [佛]一に聖天ともいふ、九千八百の諸大鬼王を將領し三千世界を遊行し、三寶をまもり衆生を利し、祈願するものは、ことごとく滿足を得しめんと誓へりとぞ、呪法は、牛の蘇を以て圓き壇をつくり、胡麻油を盛りたる銅器を載せ、像を油の中に安置して油を灌ぐこと一日乃至七日すべしといふ。


[くわんきてん]

(くわん-ぎ)[官妓](名) 朝鮮などにて、伎樂を奏することを以て宮廷に事ふる女。

くわん-ぎく[鐶菊](名) (鐶は環の俗字)紋所の名、菊花の形を座とし、これに鐶を添へたる形。

(くわん-きふ)[還給](名) 物件をもどしあたふること、所有者へかへすこと。

(くわん-きふ)[官給](名) 官よりの給與。

(くわん-きふ)[緩急](名) ㊀ゆるきときびしきと。おそきとはやきと。「—其宜しきを得」。㊁事變の起ること「一旦—あれば義勇公に奉じ」。
——れっしや[緩急列車](名) 走行の緩急が自由に出來得るやうの機關を具する鐵道列車。

(くわん-きやう)[環境](名) 四圍の外界。

(くわん-きやう)[還鄕](名) くにもとにかへること、きこく。

(ぐわん-きやう)[頑強](名) 意地づよきこと、手強きこと。

(くわん-きやく)[還却](名) もどすこと。かへすこと。

(くわん-きよ)[官許](名) 政府より特定の人に特定の行爲をゆるすこと、官のゆるし。(免許)。

(くわん-ぎよ)[還御](名) 陛下の御かへり。(回鑾)。

(くわん-きよく)[款曲](名) ㊀つゝみかくしなき心のたけ。まこと。㊁入り組みたる內密の事情。

(くわん-きん)[官金](名) 官府の所有に屬する金錢。
——せうひ[官金消費](名) 官吏が其取扱に屬する官金を私につかひこむこと。

(ぐわん-きん)[元金](名) もときん。
——すゑおき[元金据置](名) 公債などの元金を償還せずにおくこと、「—年限」。

(くわん-く)[管區](名) くわんかつの區域。

(くわん-ぐ)[驩娛](名) よろこびたのしむこと。

(ぐわん-ぐ)[頑愚](名) かたくなにして道理の分らぬこと。

(ぐわん-ぐ)[玩具](名) もてあそびもの。おもちや。

(ぐわん-くう)[頑空](名) かたくなにして知識なきこと。

(くわん-くわい)[歡會](名) たのしき會合。おもしろきよりあひ。

(くわん-ぐわい)[管外](名) 管轄區域のほか。

(くわん-くわう)[觀光](名) ㊀ながめ。やうす。「—形を改む」。㊁他國の土地の狀態又は人民の風俗などを視察すること。

(くわん-くわ-こどく)[鰥寡孤獨](名) たよりなき人民、無告の民。

(くわん-くわつ)[寬濶](名) ㊀度量のひろきこと。むねゆるきこと。㊁おほまかなること、氣象のはでやかなること。

(くわん-くわん)[桓桓](名、副) 虎又は武士のたけきさまにいふ語。

(くわん-くわん)[款款](名、副) まことと多きさま又はゆるやかなるさまにいふ語。

(くわん-ぐわん)[宦官](名) 支那朝鮮にて、生殖器を切斷して宮中に事ふる男子。君側にはんべる人。

(くわん-ぐわん)[還願](名) 神佛にかけたる願をとくこと。ぐわんほどき。

(くわん-ぐん)[官軍](名) 政府方の軍勢、賊軍の對。(王師)。

(くわん-げ)[勸化](名) 寄附金などをつのること。(抄化、募化)。
——ちやう[勸化帳](名) 勸化の趣意を書きて寄附金を募(ツノ)るに用ふる帳面。

(くわん-けい)[關係](名) ㊀一のものと他のものとが互に繫(カカ)りつながること。かゝりあひ。㊁一のものと他のものと相對する狀態、遠近・大小・可否・異同などはこれを表はすものなり。㊂えんびき。つゞきあひ。㊃てづる。つて。㊄男女間の情交。

(くわん-けい)[還啓](名) 皇太后・皇后・皇太子等の行啓さきよりの御かへり。

(くわん-けい)[換刑](名) [法]罰金又は科料を納むる能はざるものを、一圓を一日に宛て、禁錮又は拘留に處すること。

(くわん-げい)[歡迎](名) 好意を表してむかふること、よろこびむかふること。
——くわい[歡迎會](名) 歡迎の意を表するために催(モヨホ)す會合。

(くわん-けつ)[完結](名) まったく結了すること。

(くわん-げふ)[官業](名) 官府の營業。

(くわん-げふ)[勸業](名) 農工などの業を勸め勵ますこと。
——ぎんかう[勸業銀行](名) 農工業の改良發達のため、其資本を貸附することを以て目的とする株式組織の銀行。
——さいけん[勸業債券](名) 勸業銀行が日本勸業銀行法により發行することを許されたる債券、券面二十圓以上にして無記名(應募者の請求により記名となすことを得)利札附なり、少なくとも每年二回以上抽籤にて償還せられ、其場合に割增金の附與あることあり。

(くわん-けん)[關鍵](名) くわんのきとかぎと。轉じて、物事の內に入りこむために要用なるもの。

(くわん-けん)[官憲](名) ㊀國家又は政府ののり。㊁つかさびと、やくにん、官吏。

(くわん-けん)[管見](名) (管(クダ)より伺ひ見る義)狹き意見。

(くわん-けん)[官權](名) 官府の權力、政府の權限。
——たう[官權黨](名) 官權を維持又は擴張せんとする黨派、政府に盲從する黨派。

(くわん-げん)[換言](名) 言ひやうをかふること。

(くわん-げん)[管絃](名) ㊀笛又は笙などと琴又は琵琶などと。㊁いとたけ。㊂音樂を奏すること。
——がく[管絃樂](名) ㊀舞臺と看客との間の側傍に設けたる樂師又は樂隊の場所。㊁笛笙などと琴瑟などとの合奏。

(くわん-げん)[還元](名) ㊀根原のものに復歸すること。㊁[化]酸素を含む化合物より、酸素の總量又は其幾分の去ること。
——ざい[還元劑](名) [化]酸素を含む化合物を還元せしむるために用ふる原料。
——さよう[還元作用](名) 還元するはたらき。

(くわん-こ)[讙呼](名) 多人數かまびすしくさけぶこと。

(くわん-こ)[歡呼](名) よろこびて呼び叫ぶこと。

(くわん-ご)[歡娛](名) よろこびたのしむこと。

(くわん-ご)[歡語](名) おもしろくはなしあふこと。うちとけてかたること。(款語)

(ぐわん-こ)[頑固](名) 氣質かたよりて事理に通ぜざること、かたくな。かたいぢ。

(ぐわん-こ)[紈袴](名) ㊀しろねりの絹にて仕立てたるはかま、古昔、支那の貴公子の着せしものといふ、轉じて、富貴の家の子弟。又、柔弱なる貴公子。

(くわん-こう)[寬厚](名) むねひろくして性質篤實なること、「—の長者」。

(くわん-こうば)[勸工場](名) 數多の商人が、規約を結びて、一つの建物の中に、常に商品を陳列して販賣する場所。

(くわん-こく)[勸告](名) 或事をなさしむるやうすゝめとくこと、「辭職—」。

(くわん-こつ-だつたい)[換骨奪胎](名) (骨をとりかへ胎をとる義)詩文などを作るに、他人の作の主意をとりて其組立を異にすること。

‡**(くわん-ざ)**[冠者](名) 「くわんじや」に同じ。

(くわん-ざ)[環坐](名) くるまざ。まどゐ。

(くわん-さい)[完濟](名) 「くわんせい」に同じ。

(くわん-さい)[關西](名) 古昔、近江國逢阪山に關所ありしより、それより以西の國々の稱。

(ぐわん-ざい)[丸劑](名) ぐわんやく。

(くわんざい-にん)[管財人](名) 財產を管理する人。

(くわん-さう)[觀相](名) 人の容貌骨格等をみて、其性質又は運命を判斷すること。にんさうみ。

(ぐわん-さく)[玩索](名) いろいろと考へて意味をもとむること。

(くわん-さつ)[觀察](名) ㊀物事によく注意してみあきらむること。㊁事物の現象に就き、自然の狀態のまゝに研究し觀察すること。實驗の對。
——がん[觀察眼](名) 觀察する才能。
——し[觀察使](名) 古昔、畿內七道へ遣はして政治の可否又は官吏の善惡などを觀察せしめたる使者。

(くわん-さん)[換算](名) 單位の異なる數量に計算しかふること、「百弗を圓に—すれば」。

(ぐわん-さん)[元三](名) (歲と月と日とのはじめの義)元日の稱。三元。
——にち[元三日](名) 前條に同じ。

(くわん-し)[環視](名) 四方をとりまきてみること。又、多くのものが其狀態に對し注意してあること、「列國—の中にありて」。(圍視)。

(くわん-し)[官司](名) つかさびと、又、やくば。

(くわん-し)[冠詞](名) 或詞に冠する詞、英語の「a」又は「the」の如きをいふ。

(くわん-じ)[冠辭](名) [文法]まくらことば。

(くわん-じ)[莞爾](名) にっこり笑ふさまにいふ語、「—而笑」。

(くわん-しう)[還收](名) 他人の手にわたりてあるものをとりもどすこと。

(くわん-しき)[款識](名) 鐘鼎などに刻みたる文字。

(くわん-じ-ざい)[觀自在](名) ㊀成覺して障礙煩惱なく、觀ずる所自由自在なること。㊁[佛]觀世音菩薩の異稱。

(くわん-しつ)[灌室](名) [佛]灌頂を行ふ室。

(ぐわん-じつ)[元日](名) 年の始めの第一日、第一月の第一日。ぐわんにち。

(くわん-しふ)[慣習](名) ㊀社會の全部若しくは一部が、永く行ふところの行爲。㊁個人のくせ。
——はふ[慣習法](名) [法]法律上効力を有する慣習、不文法。

(くわん-しや)[官舍](名) 官より吏員の住居にたてたる屋舍。

(くわん-じや)[冠者](名) ㊀元服して冠したる少年。くわんざや。くわんざ。㊁無冠にて六位の人の稱。

(くわん-じや)[患者](名) 病氣にかゝりてゐる人。びやうにん。
——しつ[患者室](名) 病院などにて、患者のために定められたる室。

(くわん-しやう)[官省](名) ㊀中央の官廳。㊁やくば。やくしよ。

(くわん-しやう)[勸獎](名) すゝめはげますこと。ほめすゝむること。

(くわん-しやう [管掌] (名) つかさどること。とりあつかふこと。

(くわん-しやう [勸賞] (名) 褒(ほ)めはげますこと、はげましたゝふること。「殿の―に預かる」。

(くわん-しやう [觀賞] (名) みてほむること。みてたのしむこと。

(くわん-しやう [觀象] (名) 氣象を觀測すること。―**だい** [觀象臺] (名) 氣象を觀測するための臺。

(くわん-じやう [勸請] (名) 離れたる土地の神佛の靈を移して祭ること。

(ぐわん-じやう [願狀] (名) ねがひの主意を認めたる文書。願を立つる趣を記したる手紙。

(くわん-じやう-し [管城子] (名) 筆の異稱。

(くわん-しやく [官爵] (名) やくめとくらゐと。「―を削る」。

(くわん-しゆ [卷首] (名) まきもの又は書籍のはじめ。

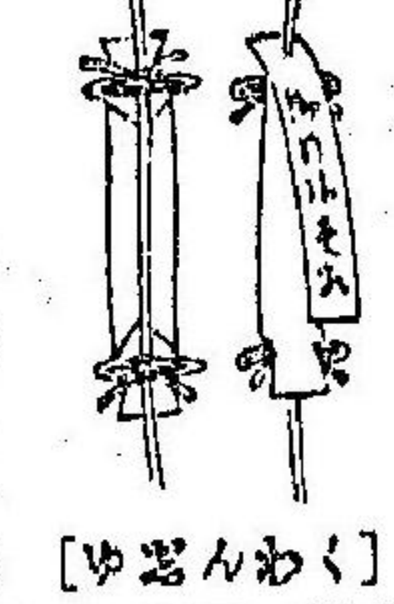
(くわん-しゆ [觀取] (名) みて其眞相を知ること。

(くわん-しゆ [官守] (名) やくめ。つとめ。「―あるもの其事を得ざれば去る」。

(くわん-しゆ [管守] (名) つかさどり守ること。又、ばんにん、つかさ。

(くわん-じゆ [貫首] (名) ㊀かしらだつ人。㊁藏人の頭の異稱。㊂天台の座主の異稱。(貫主)。

(くわん-じゆ [卷數] 【佛】讀誦せし經卷又は呪文等の名目度數を一紙に合せて記しゝもの。


［くわんじゆ］

(ぐわん-しゆ [願主] (名) 願を立つる人。ねがひを掛くる人。ねがひぬし。

(くわん-じゆく [慣熟] (名) なれて巧なること。

(くわん-しゆだん [慣手段] (名) いつもきまりたるてだて。

(くわん-しよ [官署] (名) やくば。やくしよ。

(くわん-しよ [患所] (名) 病又は創ある所。

(くわん-しよ [灌所] (名) 手を洗ふ所。

(くわん-じよ [寬恕] (名) ㊀度量ひろくして、おもひやり深きこと。㊁不問に附すること。ゆるすこと。

(ぐわん-しよ [願書] (名) 願のおもむきを記したる書面。申請書。

(くわん-しよう [換稱] (名) ことなるとなへ。

(くわん-しよう [還昇] (名) 地下(ぢげ)となりたる殿上人が、再び昇殿を許さるゝこと。

(くわん-しよく [官職] (名) ㊀官制によりて定められたる事務取扱の地位。㊁かみのつとめ、やくめ。㊂官と職と。

(くわん-しん [歡心] (名) よろこぶこゝろ。―**をかふ** [買歡心] 人の機嫌をとる。

(くわん-しん [關心] (名) 心にかゝりて忘れられざること。

(くわん-じん [官人] (名) つかさびと。やくにん。

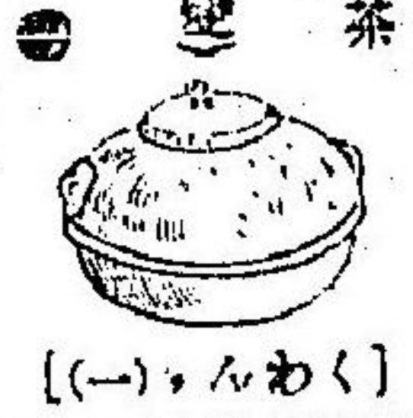
(くわん-じん [寬仁] (名) 度量ゆるやかにして、なさけ心の深きこと。「―大度」。

(くわん-じん [勸進] (名) ㊀勸め奉ること。㊁僧徒などが、佛道に關したる事につき、俗人を勸めて寄附をなさしむること。(勸化)。―**ずまふ** [勸進相撲] (名) ㊀勸進の錢を集むるために催(もよほ)すすまふ。㊁木戸錢をとりて興行するすまふ。―**ちやう** [勸進帳] (名) 勸進の主意を記して寄附をあつむるに用ふる帳面。―**のう** [勸進能] (名) 見料にて見物をなさしめし能樂。―**もと** [勸進元] (名) 勸進相撲興行の發起人。

くわん-す [鑵子] (名) ㊀茶道にて湯を沸(わ)かす器、眞鍮(しんちゆう)・銅などをもて造る。(茶鑵)。㊁ちやがま(關西地方の方言)。

くわん-す（せしすするすれせよ） [關す] (自、さ變) かゝはる。かゝる。たづさはる。

くわん-す（せしすするすれせよ） [冠す] (他、さ變) ㊀冠を着く。㊁ものを頭上にす。㊂元服す。


［くわん(一)］

くわん-す（せしすするすれせよ） [管す] (他、さ變) 管轄をなす。とりしまる。つかさどる。

くわん-ず（ぜじずずるずれぜよ） [觀ず] (他、さ變) よくよく注意して見る。こまかに識別す。

(くわん-せい [慣性] (名) 【理】物體が外力の作用を受けざれば、靜止してあるか若しくは一定の速度にて一定の方向に進むかするを、「ニウトン」の創說にして即ち運動の第一律なり。(運動の條參照)。

(くわん-せい [官制] (名) 政務の分配の規定、即ち、官廳の組織權限又は官吏の配置職權等を規定せるもの。「―改革」。

(くわん-せい [關西] (名) 「くわんさい」に同じ。

(くわん-せい [欵誠] (名) まこと。まごゝろ。

(くわん-せい [完成] (名) まったく出來上がること。又、完全に出來上がること。

(くわん-せい [完濟] (名) まったくとゝのへすますこと。かいせい。

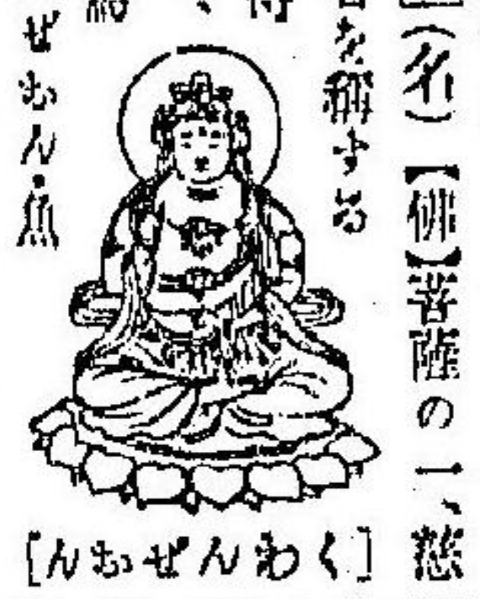
(くわん-ぜい [關稅] (名) 內國より外國へ輸出する貨物又は外國より內國へ輸入する貨物に對して課する稅。稅關なる機關を設けてこれを徵收す。國定稅率・協定稅率又は從價稅・從量稅の區別あり。―**どうめい** [關稅同盟] (名) 二國若しくは二國以上が同盟して、相互間の輸出入貨物には關稅を課せず、同盟外の諸國間の輸出入貨物に課稅して、其收入を分配すること。

(くわん-せう [歡笑] (名) おもしろげにわらふこと、たのしみわらふこと。

(くわん-せう [環礁] (名) 【地】海上に現出し中央に水を湛(たた)へて環狀をなせる珊瑚礁。

(くわん-せう [觀照] (名) 觀じて明かに知ること。

(くわん-ぜ-おん [觀世音] (名) 【佛】菩薩の一、慈悲の大德を行ひ、世人の其名を稱する音聲を觀じて皆な解脫を得しむ、忍辱柔和の相を有し、種々に形相を變ずといふ、馬頭くわんぜおん・千手くわんぜおん・准胝くわんぜおん等種々あり。くわんじざい。


［くわんぜおん］

(くわん-ぜき [貫籍] (名) にんべつ。こせき。

くわん-ぜ-こより [觀世小縒] (名) 「くわんぜより」に同じ。「又次郎といへる男―を始めて今重寶となれり」。(紙索、紙縷子)。

(くわん-せつ [關節] (名) ㊀骨と骨との互に相接する所即ち骨のつがひめ、其運動の自在なる部には、靭帶ありて兩骨を接合し、軟骨ありて兩骨の衝突を避け、滑液ありて兩骨の摩擦を減ず。㊁物と物との相接合する所。

(くわん-せつ [官設] (名) 官府の直接に設くること。「―鐵道」。

(くわん-せつ [環節] (名) 【動】動物の體軀が許多同一なる環狀の節に分たるゝもの。―**どうぶつ** [環節動物] (名) 【動】體軀柔軟にして長圓筒狀をなし、許多の環節の連續より成る動物、かひこ・みゝず等これなり。

(くわん-ぜつ [冠絕] (名) すぐれて第一なること。

ぐわん-ぜ-な-し（くしきけれ） [頑是無] (形、二) (頑も是も無しとの義) 小兒などの、是非善惡の區別を未だ知らずして、何となくあどけ無くあり。

(くわん-ぜ-ぶ [觀世麩] (名) 燒麩の一種。

(くわん-ぜ-りう [觀世流] (名) 能樂の一派、足利義滿頃の人にして能を創始せし觀世阿彌の嫡傳なるもの、其子孫これが座をつかさどれり。

(くわん-せん [官撰] (名) ㊀官にて選ぶこと。「―辯護士」。(官選)。㊁官にて文書などを編纂すること。

(くわん-せん [官線] (名) 鐵道又は電信線の官有なるもの。

(くわん-ぜん [完全] (名) 不足なきこと。缺點なきこと。まったきこと。―**へんたい** [完全變態] (名) 【動】昆蟲が仔蟲及蛹の二期を順次經過して、更に成蟲となること。―**むけつ** [完全無缺] (名) 十分にとゝのひて少しも不足なきこと。

(くわん-せん-きよく [管船局] (名) 遞信大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて、航路標識・航路・船舶・海員・水運又は保護海事會社の監督に關する事項を扱ふ遞信省の一局。

(くわん-ぜん-ちようあく [勸善懲惡] (名) 善事を勸め惡事を懲(こ)らすこと。

くわん-ぜ-より [觀世縒] (名) 紙を細長く切りてよりたるもの。かんぜこより。

(ぐわん-そ [元祖] (名) ㊀其家系の第一番の人。先祖。㊁或物事を創始したる人。創業者。

(くわん-そく [管足] (名) 【動】棘皮動物の水管系より出す柔軟なる管狀物の稱、其根基に收縮性の小胞を具し、收縮毎に水液をこの中に送り、以てこれを伸長して體の移動を營む。

(くわん-そく [觀測] (名) 或もの、現象を觀察して、其變化運行等を測度すること。「天體の―」。

(くわん-ぞく [貫屬] (名) 戶籍の存在する土地、例へば、東京府華族といへば、東京府の貫屬なり。―**がへ** [貫屬替] (名) 貫屬をかへて他の土地へ移ること。

(くわん-たい [寬待] (名) ゆるやかなるもてなし。

(くわん-たい [緩怠] (名) をこたり。なほざり。

(くわん-たい [欵待] (名) 親切にもてなすこと。

(くわん-たい [冠帶] (名) (かむりとおほおびとの義) 禮儀あつき風俗。「―變じて左衽となる」。

(くわん-たい [緩帶] (名) ㊀衣をくつろげ帶をゆるく結ぶこと。「長袖―都人を學ぶ」。㊁なまけたる衣のきかた、戒心せざる身なり。

(くわん-だい [寬大] (名) きびしからざること。ゆるやかなること。

(くわん-だう [官道] (名) 官の開鑿又は營繕に係る道路。

(くわん-たく [官宅] (名) 「くわんしや」(官舍)に同じ。

(ぐわん-だて [願立] (名) 神佛に誓(ちか)ひて願(ぐわん)をかくること。

(ぐわん-たん [元旦] (名) 年の第一番目の日。ぐわんじつ。

(くわん-ち [官治] (名) 【法】國家が官廳をして直接に行政をなさしむること。自治の對。

(くわん-ち [官地] (名) 官有の土地。

(くわん-ぢく [卷軸] (名) ㊀卷物又は書物のをはりの稱。㊁其中にて秀拔なるもの(おもに詩歌にいふ)。

(くわん-ちやう [管長] (名) 宗門を管理する長。

(くわん-ちやう [官長] (名) やくにんの長。

(くわん-ちやう [官廳] (名) 「くわんぷ」(官府)に同じ。

(くわん-ちやう [灌腸] (名) 肛門より藥劑を注入すること、大便の通じをよくするために行ふ。

(くわん-ちやう [灌頂] (名) ㊀【佛】密教にて頂に香水を灌(そゝ)ぐ儀式、結緣傳法のときなどに行ふもの。㊁頭に水をかけそゝぐこと。

(くわん-ちゆう[灌注](名) そゝぎかくること。

(くわん-ぢよ[官女](名) 宮中に奉仕する女中。

(くわん-ちよう[勸懲](名) 善をすゝめ惡をこらすこと。——しゆぎ[勸懲主義](名) 善をすゝめ惡をこらすことを目的となす主義。

(くわん-つう[貫通](名) ㊀一の側(ガハ)より他の側へぬきとほること。㊁始めより終りまで、つゞけをふること。「—して讀む」。㊂條理よく通じてあること。㊃博(ヒロ)く物事に通ずること。——じゆうさう[貫通銃創](名) 銃丸にて受けたる創の其銃丸が體をぬきとほりたるもの。

(くわん-づめ[罐詰](名) 食品を罐につめいること、又、其食品。

(くわん-てい[官廷](名) ㊀朝廷。政府。㊁役所。

(くわん-てい[官邸](名) 官舍に同じ。

廿(くわん-てい[官廷](名) 太政官の事務所。又、其官衙。

(くわん-てつ[貫徹](名) つらぬき徹(トホ)ること。

(くわん-てん[寛典](名) きびしからぬおきて。

(くわん-と[官途](名) ㊀官吏の勤務又は地位。㊁やくにんむき。公邊。「—の事に暗し」。

(くわん-と[環堵](名) ㊀まはりのかき。㊁いへのうち。

(くわん-とう[官等](名) 官職の等級。

(くわん-とう[卷頭](名) ㊀卷物又は書物などの始め。㊁其卷の中の最も秀拔なる詩歌。

(くわん-とう[關東](名) ㊀古昔、近江國逢阪山の關所より東にあたる國々の總稱。後世は關東八州の特稱。㊁支那の遼東半島一帶の總稱。——くわんりやう[關東管領](名) 足利時代に關東の政事を委任して鎌倉に置きし管領。——くわんれい[關東管領](名) 前條に同じ。——しう[關東洲](名) 「くわんとう」(二)に同じ。——ととく[關東都督](名) 關東洲を管轄し、南滿洲に於ける鐵道線路の保護・取締り及南滿洲鐵道會社の業務監督を掌り、部下軍隊を統率し、外務大臣の監督を受けて諸般の政務を行ふ官職。親任にして陸軍大將又は中將を以てこれに充つ。——ととくふ[關東都督府](名) 關東都督が事務を取扱ふ所。民政部と陸軍部とを置く。——はつしう[關東八州](名) 箱根山以東に位する相模・武藏・安房・上總・下總・常陸・上野・下野八個國の稱。

クワントン-ぢま[廣東縞](名) 支那の廣東より出す一種の縞織の絹布。(廣緞)

(くわん-ない[管內](名) 管轄區域の內。

(くわん-なふ[完納](名) 殘らずをさめいること。

(くわん-なふ[還納](名) かへしをさむること。

(くわん-なん[患難](名) うれひ。なんぎ。

廿ぐわん-にち[元日](名) ぐわんじつ。元旦。——さう[元日草](名) 【植】福壽草の異稱。

(くわん-にゆう[貫乳](名) 貫入或は譯入などとも書く。陶器にひゞ燒の如く割目に似たる細かき模樣(モヤウ)の現れたるもの。

(くわん-によ[官女](名) 官づかへの女。くわんぢよ。

(くわん-にん[官人](名) やくにん。つかさびと。

(ぐわん-にん[願人](名) ㊀願書を差出したる名前主。ねがひぬし。㊁「ぐわんにんばうず」の略言。——ばう[願人坊](名) 「ぐわんにんばうず」の略言。——ばうず[願人坊主](名) ㊀昔時、江戸にて人に代はりて願がけの修行。水垢離(ゴリ)などせし乞食の僧。㊁轉じて、乞食の僧又は蓬々と頭髮のはえたる僧。

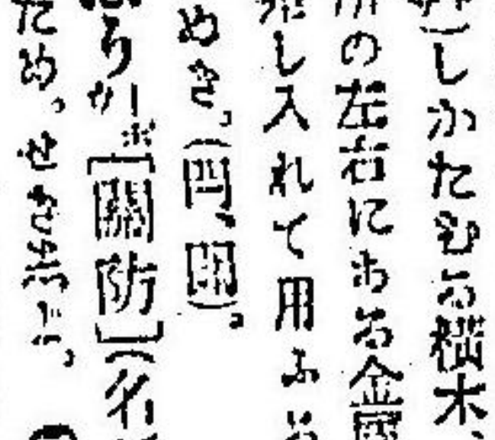
くわん-ぬき[閂](名) ㊀「くわんのき」の轉。㊁物をくわんのきの如く備にかまへたる狀態。㊂相撲の手、敵の諸差(モロザシ)したる腕を上より抱きしめしぼり上ぐること。

(くわん-ねん[觀念](名) ㊀【佛】觀じて念じ思ふこと。㊁目を閉ぢ氣を鎭(シヅ)めて、心に考へ思ふこと。㊂[Idea]【心】意識の內に把住せられたる寫象。㊃かくご。あきらめ。「—せよと切り付けたり」。——ろん[觀念論=Idealism](名) 【哲】認識論の一派。吾人の認識する外物は、主觀的觀察たるに止まりて必ずしも正當のものにあらず、吾人の認識する世界は、單に吾人の觀念に外ならずといふ說。實在論の對。

(ぐわん-ねん[元年](名) ㊀帝王卽位の第一年。㊁年號の改りたる初の年。はじめのとし。

(くわん-のう[官能](名) 動物の器官のはたらき。

くわん-の-き[貫木](名) 門戶などを鎖(トザ)しかたむる橫木。鎖し合はす所の左右にある金屬の鈨の中に差し入れて用ふるもの。くわんぬき。(閂、關)。



[くわんのき]

(くわん-ばう[關防](名) ㊀國境のかため。せきもり。㊁昔、書を書き、其全幅又は端部なることを證するために、普通其右肩に押す印形。

(くわん-ばう[官房](名) 各省及其他特殊の官廳にて、其長官に直屬し特別の事務を取扱ふ所。省にて大臣官房といひ、機密事務・官吏の進退身分又は大臣の官印及省印の管守等を掌り、警視廳にては總監官房といひ、高等警察及外國人に關する事項其他部署の監査制規、官吏の進退身分・文書記錄・廳印官印の管守、金錢物品の出納等を掌る。北海道廳にては長官官房といひ、官吏の進退身分及賞罰、文書の往復・記錄の編纂及官印廳印の管守等を掌る。府縣廳にては知事官房といひ、官吏の進退身分及賞罰、文書の往復、官印府縣印の管守等を掌る。統監府・關東都督府・臺灣總督府にては、共に機密に關する事務を掌る。

(くわん-ばう[官帽](名) 官吏の制帽。

(くわん-ばう[官報](名) ㊀法令・詔勅・告示・敍任・辭令其他官より一般人民に周知せしむべき新事項を編纂記載して、內閣印刷局より日曜日・大祭日等の外、日々刊行する文書。公文式は官報を以て布告することに定まれり。㊁官廳又は官吏が、公務上に關して發する電報。

ぐわん-ばう[願望](名) ㊀ねがひのぞむこと。ねがひ。こゝろざし。㊁【心】或目的を心中におもひ浮べて、これを得んと欲求する感情と意志との結合。

(くわん-ばく[關白](名) 次條に同じ。

(くわん-ばく[關白](名) ㊀萬機巨細となく其人にあづかりまうすこと。㊁古昔、天子を輔佐して天下の政務を行ひし大臣。我國にては光孝天皇のとき藤原基經の任ぜられしに始まる。

(くわん-ばつ[煥發](名) あきらかに天下に發布せられたること。「大詔—」。

(くわん-ばつしう[關八州](名) 關東八州に同じ。

(くわん-ばふ[觀法](名) 【佛】眞理を觀念すること。「坐禪—」。

(くわん-ぱん[官版](名) 官府にて製作し又は發行する印版又は書物。

(くわん-び[完備](名) 全くそなはること。不足なきこと。

(くわん-ぴ[官費](名) 官府より出す費用。——せい[官費生](名) 官費にて學問修業する生徒。

(くわん-ぷ[官府](名) ㊀朝廷又は政府。おほやけ。㊁つかさ。役所。役場。㊂【法】官制によりて範圍定まりたる行政事務を扱ふ一人又は衆人によりて組織せらるゝ國家の機關。

(くわん-ぷ[完膚](名) きずなきはだへ。轉じて、きずなき箇所。「百孔千創—なし」。

(くわん-ぷ[還附](名) 或ものをもと領有し又は所有せしものへもどすこと。

(くわん-ぷう[觀風](名) 他國の風俗を觀察すること。

(くわん-ぷく[官服](名) 官吏の制服。

(くわん-ぶつ[官物](名) 官の所有物。

(くわん-ブツ[灌佛](名) ㊀佛の像に香水などをそゝぎかくること。㊁「くわんぶつゑ」の略言。——ゑ[灌佛會](名) 【佛】陰曆四月八日卽ち釋迦如來の降誕當日に、其像に甘茶を灑(ソヽ)ぎかくる儀式。種々の草花にて美(ウツク)しく屋根を飾りたる小さき家をつくり、其中に釋迦の像を安置してこれを行ふ。我國にては推古天皇の朝より始まれりといふ。

(ぐわん-ぶつ[玩物](名) おもちや。もてあそびもの。玩弄物。(玩具)。

(ぐわん-ぶつ[頑物](名) かたくななるもの。ぐわんこなる人物。

(くわん-ぶんしよ[官文書](名) 官府の文書。

(くわん-ぺい[官兵](名) くわんぐん。

(くわん-ぺい[官幣](名) 古昔は神祇官にて、祈年祭又は月次祭などに神々に幣帛を捧げて祭りしこと。又、今時は官幣社の祭事に幣帛を捧ぐること、宮內省式部職にてこれを取扱ふ。——し[官幣使](名) 官幣を捧ぐるために差遣せらるゝ使者。——しや[官幣社](名) 格式高く官の幣物にて祭る神社。中に大社・中社・小社及別格の區別あり。

(くわん-ぺい[觀兵](名) ㊀軍兵を列してこれを閱すること。㊁兵の威勢をかゞやかすこと。——しき[觀兵式](名) 天長節・陸軍始其他特別の祝日又は賓客の歡待等に擧行せられ、天皇親ら兵を閱し給ふ式。終りて分列式を行はるゝものとす。

(くわん-ぺき[完璧](名) (きずなきたまの轉) 缺陷なきすぐれてよきものにいふ語。

(くわん-べん[冠冕](名) ㊀かんむり。かむり。㊁上位にあるもの。

(くわん-ぺん[官邊](名) おもてむき。やくばむき。

(くわん-ぽ[緩步](名) ゆるやかにありくこと。

(くわん-ぼく[灌木](名) 【植】木本類なれど丈低き植物の稱。幹は判然たらず、地に近き部分より數多の枝を生ずるもの、薔薇・山吹・牡丹などの類これなり。——たい[灌木帶](名) 【植】高山植物帶の一部、灌木漸く短小となり、風雪を凌(シノ)ぐの必要より、幹根屈曲して地上に蟠(ワダカマ)れるもの。

(くわん-ぼつ[官沒](名) 官府に取りあぐること。

(くわん-ぼつ[還沒](名) 分れ出たる個體が、もとにかへり入ること。「大我に—す」。

ぐわん-ほどき[願解](名) 神佛に立願せし後に、其證として參詣すること。かへりまうし。

(くわん-ぼん[官本](名) ㊀官版の書籍。㊁官府の藏書。

(くわん-ぽん[完本](名) 全部そろひてある書籍。缺本の對。

(ぐわん-ぽん[元本](名) ㊀もと。ねもと。㊁利益收入を生ずるもとゝなる物件又は權利。貸家・貸地・公債・株式等をいふ。㊂【經】生產物の總收入より、諸種の費用を引去りたる剩餘。使用如何によりて、資本ともなり浪費ともなるもの。

(ぐわん-まう[願望](名) 「ぐわんばう」に同じ。

(くわん-まん[緩漫](名) ㊀きびしからざること。せまらざること。ゆるやか。㊁のろきこと。にぶきこと。

(ぐわん-み「玩味」(名) ㊀食物をよくかみわけて味ふこと。㊁物の意義を能く味ひわきまふること。

(くわん-みやう「官名」(名) 官職の名稱。

(くわん-みん「官民」(名) 官府又は官吏と人民と。「―懇親會。」

(ぐわん-みん「頑民」(名) かたくなゝる民。知識劣れる民。

(くわん-む「官務」(名) ㊀官府の扱（アツカ）ふ事務。又、官吏の負擔せる職務。㊁古昔、太政官の左大史・右大史などの稱。又、世々これを勤めし小槻（ヲツキ）家の稱。

くわん-め「貫目」(名) ㊀めかた。かけめ。㊁衡（ハカリ）の單位、即ち、千匁。くわん。㊂人を服從せしむる威望。「あの人は―がある」。

(くわん-めい「官名」(名) 官職の名稱。

(ぐわん-めい「頑冥」(名) かたくなにして知識なきこと。

(ぐわん-めい「頑迷」(名) かたくなにしてまよひのとけ難きこと。

(ぐわん-めん「願面」(名) 願書に書き立てゝある主意又は文面。

(ぐわん-めん「願免」(名) (依願免官の略言)願によりて免官となること。

(くわん-もう「冠毛」(名) ㊀冠上の毛。㊁【植】瘦果の上にある白色の長毛。

(ぐわん-もう「頑蒙」(名) かたくなにして物事を知らざること。

(くわん-もん「喚問」(名) 官署などに呼び出してとひたゞすこと。

(くわん-もん「關門」(名) ㊀關の門。㊁せき。關所。

(ぐわん-もん「願文」(名) 願意を記したる文、多くは神佛への願がけにいふ。

(くわん-やく「關鑰」(名) ㊀くわんのきとぢやうと。又、門戸の締まり。㊁內部に入りこむ要所。

(ぐわん-やく「丸藥」(名) 煉（ネ）り合はせ、丸めて小さき球の狀にしたる藥。

(くわん-よ「關與」(名) あづかること。かゝはること。

(くわん-よう「慣用」(名) つねに用ふること。

(ぐわん-らい「元來」(副) もとより。はじめから。

(くわん-らく「歡樂」(名) ㊀よろこびたのしむこと。「―極りて哀情多し」。㊁‡古昔、病氣の忌詞。

(くわん-らん「觀覽」(名) ながめみること。みること、

(くわん-り「冠履」(名) かんむりとくつと。又、上と下と。 ――てんだう「冠履顚倒」 上下の順序がさかさまなること。

(くわん-り「管理」(名) 物件の保存改良をはかること。事務の整理執行をなすこと。又、人員の指揮監督をなすこと。あはい。とりまはり。 ――かうゐ「管理行爲」(名)【法】物件を保存し又はその移轉毀失せざる範圍に於て、これが改良利用をはかる等の行爲。 ――のうりよく「管理能力」(名)【法】管理行爲をなし得る能力、私權行使の能力ある普通一般の人がこれを有するは勿論、禁治産者及有夫の婦もまたこれを有す。處分能力の對。

(くわん-り「官吏」(名) 任官の手續により官制上に定められたる公務を扱ふ地位。又、其地位にある人。やくにん。くわんゐん。 ――しうわい「官吏收賄」(名)【法】官吏が其職務上に就き、人の囑託を受け賄賂を收受し若しくは聽許したる罪。 ――とくしよく「官吏瀆職」(名)【法】官吏が、當然なすべき職務に反して公金を害し、若しくは職權を濫用して人民の權利を侵害し又は官金を消費する等の罪。 ――ぶじよく「官吏侮辱」(名)【法】官吏の職務に對し、形容又は言語を以てこれを侮辱したる罪。

(ぐわん-り「元利」(名) 元金と利子と。(母子)。

(ぐわん-りき「願力」(名) 願がけして目的を貫かんとする意氣又は念慮の勢力。ねんりき。

(くわん-りつ「官立」(名) 官府の設立又は維持にかゝること。私立又は公立の對。

(くわん-りやう「管領」(名) 室町幕府にて、一切の政事にあづかりし重要の職名、斯波・細川・畠山の三家これに任ずるの定めにして、別に關東管領を置けり。

(くわん-りん「官林」(名) 官有の森林。

(くわん-れい「管領」(名) 「くわんりやう」に同じ。

(くわん-れい「關棙」(名) とざし。ねぢ。

(くわん-れう「官僚」(名) ㊀同官のもの。どうれう。㊁やくにん。くわんり。(有司)。 ――せいぢ「官僚政治」(名) 君主は官僚に左右せられ、諸般の政治一に官僚の手によりて行はるゝこと。

(くわん-れき「還曆」(名) とし六十一歲の稱、陰曆にては、干支が六十にて一周して元に復する故に、曆が回（カヘ）り返る義よりいふ。ほんけがへり。

(くわん-れん「關聯」(名) かゝりつゞくこと。かゝはりつながること。

(ぐわん-ろう「頑陋」(名) 事理にくらきこと。心ねぢけて智少きこと。

(ぐわん-ろう「玩弄」(名) ㊀もてあそぶこと。㊁なぶりものにすること。(愚弄)。 ――しへい「玩弄紙幣」(名) 紙幣の形に似せてつくりたるおもちや。 ――ぶつ「玩弄物」(名) ㊀もてあそぶ具。おもちや。㊁他人のなぶりもの。

(くわん-ろく「官祿」(名) 官府よりたまはる祿。官職あるによりて受くる祿。

(くわん-ゐ「官威」(名) 官府の威力。又、官吏の職權。

(くわん-ゐき「灌域」(名) 河水の灌漑する區域。

(くわん-ゐん「官員」(名) 官位にある人。官職ある人。やくにん。

くわん-をけ「棺桶」(名) 棺に用ふる桶。はやをけ。

(くゐ-き「區域」(名) 區劃したる境界。區劃したる範圍。かぎり。きり。さかひ。

(ぐゐ-いつしよ「俱會一處」(名)【佛】佛も衆生（シユジヤウ）も共に淨土に生れあつまるといふこと。

くゐ-そく「花足」(名) ㊀机などの足に花などの形刻あるもの。㊁佛に供（クウ）ふる食物。

‡くゐ-ち「闕」(名) たらぬこと。かけ。

くゐ-にち「凶會日」(名) 陰陽相剋して、百事に凶なりといふ日。

‡くゐ-まり「蹴鞠」(名) けまり。

(くん「訓」(名) ㊀をしへ。さとし。いましめ。㊁字句の意義の解釋。わけ。㊂漢字を國語にあてゝよむこと。よみ。

(くん「君」(名) ㊀國家の元首又は封土の領者。㊁鬼神又は祖先。「湘―は何の神ぞ」。㊂すべて他人の敬稱にいふ語。

(くん「勳」(名) ㊀國家又は君主に盡したる功勞。てがら。いさを。㊁勳章下賜の等級。

(くん「葷」(名) ねぎ又はにんにくなどの如き一種の臭氣ある蔬菜の總名。

(ぐん「群」(名) むれ。むらがり。一團。

(ぐん「軍」(名) ㊀つはもの。軍勢。兵隊。㊁たゝかひ。いくさ。戰爭。㊂戰時の出征に際し、數個の師團又は軍團を以て編制せられたるものゝ名稱、我國にては、普通二個乃至四個師團を以て編制せられ、これに騎兵砲兵工兵其他適應の諸隊を附屬せらるゝの規定なり。

(ぐん「郡」(名) ㊀一國を區別したるものゝ稱、鄕又は町村等を包括す。こほり。㊁【法】地方團體の一にして且行政區劃の一、町村を包括し、法人として第一次に府縣知事第二次に內務大臣の監督を受け、法令により事務を處理するもの、機關は郡會・郡參事會及郡長とす。㊂支那にて、周以後宋以前までの行政區劃の一、周にては縣の下に屬せしが、秦以後には縣を包括しての稱となれり。

(ぐん-い「軍醫」(名) 陸軍又は海軍に附屬して、醫務に從事する高等官。 ――かん「軍醫監」(名) 將官相當の軍醫。 ――そうかん「軍醫總監」(名) 陸軍又は海軍の醫務を總理し軍醫を統督するもの。 ――せい「軍醫正」(名) 佐官相當の軍醫。

(くん-いう「薰蕕」(名) ㊀よきにほひとあしきにほひと。㊁德行と非行と。又、君子と小人と。「―器を同じくせず」。

(くん-いく「訓育」(名) をしへそだつること。

(ぐん-えい「軍營」(名) 軍隊の營所。

(ぐん-えい「群英」(名) おほくの秀才。

(ぐん-えき「軍役」(名) ㊀軍あるときの夫役。㊁戰爭又は征伐。

(くん-おん「君恩」(名) 君のめぐみ。「―海の如し」。

(ぐん-か「軍歌」(名) 軍隊の士氣を鼓舞するため又は軍事の思想を盛んにする等の目的を以て製作せられたる歌、おもに軍事上の壯烈なる事柄を詠じたるもの。

(くん-かい「訓戒」(名) さとしいましむること。さとし。いましめ。

(くん-かい「訓解」(名) 文章字句のときあかし。

(ぐん-かう「軍港」(名) 鎭守府のある港。其海軍區方面の海軍の根據地。

(ぐん-が「郡衙」(名) ぐんやくしよ。

(ぐん-がう「群豪」(名) 多くのすぐれたるもの。

(ぐん-がく「軍學」(名) 兵法。兵學。

(ぐん-がく「軍樂」(名) 陸軍又は海軍に使用する音樂。 ――たい「軍樂隊」(名) 軍樂を奏するための一隊。

(ぐん-かん「軍艦」(名) 戰鬪の用に供するため特に製造したる國家の兵船、即ち、海軍艦船の第一種第二種の總稱。 ――き「軍艦旗」(名) 軍艦の表彰として最も貴重なる旗、其昇降は甚だ鄭重嚴肅に行はるゝものとす、我國のは旭日の狀を描（カ）かる。 ――ていけいしよ「軍艦碇繫所」(名) 軍港の所在地。

(ぐん-かん「軍監」(名) ㊀古昔、鎭守府の判官。㊁軍事の監督をなす職名。

(くん-き「勳記」(名) 武勳等に敍せらるゝ證として、勳章と共に賜はる文書。

(ぐん-き「軍紀」(名) 軍隊の規律。

(ぐん-き「軍旗」(名) 聯隊の表彰として最も貴重なる旗、該聯隊設立のとき、天皇陛下より下し賜はる、旭日の狀を描（カ）きたるもの、れんたいき。 ――さい「軍旗祭」(名) 聯隊にて、軍旗を天皇陛下より賜はりたる日又は戰勝の紀念日などに行ふ祝典。

(ぐん-き「軍機」(名) 軍事上の機密。 ――ろうえい「軍機漏洩」 軍事上の秘密世間又は敵國へもれきこゆるにいひ、又、軍事上の秘密を世間又は敵國へ知らすにもいふ語。

(ぐん-き「軍記」(名) 戰爭の事跡をかきたるもの。

(ぐん-ぎ「軍議」(名) 軍事上の評議。

(ぐん-ぎ「群議」(名) ㊀おほくの人のそしり。㊁おほくの人の議論。

(ぐん-きよ「群居」(名) あつまりゐること。むらがりすむこと。

ぐん-くみあひ「郡組合」(名)【法】二郡又は二郡以上が、共同して特定の事務を處理するために設置する組合、府縣知事が郡參事會の意見と府縣會の議決とにより、內務大臣の許可を得てこれを設置するものとす。

(くん-くわ「訓化」(名) をしへみちびくこと。

（くん-くわい）[訓誨]（名） をしへ、さとし。

（ぐん-くわい）[郡會]（名） 郡內の町村より選出したる議員を以て組織せる郡の機關、郡の歲入出豫算其他重要の事件を議決するものにして、又、地方官廳の諮問に應じ意見を述べ又は建議をなすを得、郡長これを招集す。――ぎゐん[郡會議員]（名） 郡會を組織する議員、郡內の町村公民にして町村會議員の選擧權を有し、且其郡內にて、一年以來直接國稅年額三圓以上を納むるものは、これが選擧權を有し、又これと同一の資格にして直接國稅年額五圓以上を納むるものは、これが被選擧權を有するの規定なり。

（くん-げん）[訓言]（名） をしへのことば。いましめのことば。

（ぐん-けん）[郡縣]（名） ㊀こほりとあがたと。――せいど ㊁「ぐんけんせいど」の略言。封建の對。[郡縣制度]（名） 中央政府より、全國にひとしき政令を布き、地方官を選任してこれを執行せしむる制度。封建制度の對。

（くん-こ）[訓詁]（名） 古言の意義の說明。わけ。ときあかし。

（ぐん-こ）[軍鼓]（名） いくさに用ふるたいこ。

（くん-こう）[勳功]（名） 國家又は君主に盡したる功勞。いさを。てがら。いさをし。

（くん-こう）[君公]（名） きみ。ダンナ。

（くん-こう）[君侯]（名） 諸侯の敬稱。

（ぐん-こう）[軍功]（名） いくさのてがら。戰爭にての功績。

（ぐん-こう）[群口]（名） 多くの人のことば。

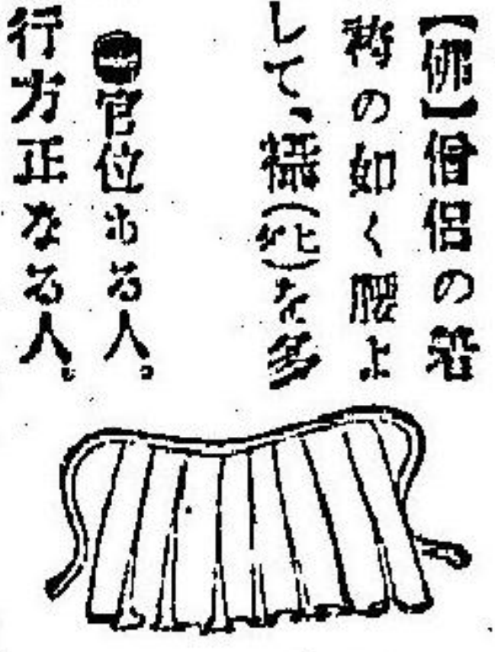
（ぐん-こく）[軍國]（名） ㊀軍隊と國家と。又、軍を治むると國を治むると。「―の事一に卿に任ず」。㊁軍事上の大事ある國。戰爭をなしつゝある國家。

（ぐん-さう）[軍曹]（名） ㊀古昔、鎭守府に附屬せしさくわん。㊁陸軍の下士官の一、二等と一等との階級あり、地位は曹長の下なり。

（ぐん-さう）[軍裝]（名） 軍隊のよそほひ。出征のよそほひ。

（ぐん-さんじくわい）[郡參事會]（名） 郡に於ける合議の機關、郡長及名譽職參事會員五名を以て組織し、郡長を以て會長とす、郡會より委任せられたる事件及其他權限に屬する事項を議決し、又、臨時緊急の事件ありて、郡會を招集する暇なきときは、郡會に代はりて議決をなす、又郡長が郡會に提出する議案につき、意見を述ぶるを得。――ゐん[郡參事會員]（名） 郡參事會を組織する名譽職、郡會議員中より互選す。

（くん-し）[裙子]（名） 【佛】僧侶の着(ツ)くる一種の服、形は袴の如く腰より以下を蔽ふものにして、襞(ヒダ)を多く設けて仕立つ。



[くんし]

（くん-し）[君子]（名） ㊀官位ある人。㊁心術善良にして品行方正なる人。「―は盛德あつて、容貌愚なるが如し」。――こく[君子國]（名） 日本國の美稱。

（くん-じ）[訓示]（名） ㊀ときしめすこと。をしへしめすこと。㊁上官が下官に對し、執務上の心得などに關してなす陳述。

（ぐん-し）[軍師]（名） ㊀主將に附屬し、軍機を參り謀計を運(メグ)らす人。㊁巧に手段を運らす人。

（ぐん-し）[軍使]（名） 戰爭の繼續中に、一方の軍隊より或使命を齎(モタラ)して敵の軍隊に赴く人。

（ぐん-じ）[郡司]（名） ㊀古昔、郡を治めたる職名、これに大領(カミ)・少領(スケ)・主政(ジョウ)・主帳(サクワン)の四職ありき。㊁郡の大領の特稱。

（ぐん-じ）[軍事]（名） 兵備又は軍隊若しくは戰爭に關する事柄。――いうびん[軍事郵便]（名）

出征せる軍隊・軍艦又は軍人・軍屬等より發する郵便物、若しくはこれに對して發する郵便物の取扱の稱にして、前者は免稅なるものとす。――ぎやうせい[軍事行政]（名） 國家に必要なる兵力の設備・編制若しくは保有に關する行政、即ち、陸海軍に關する一切の行政をいふ、其中陸海軍の統率編制及常備兵額の決定は、天皇の大權に屬すれど、他は一切陸海軍大臣これを管理す。――けいさつ[軍事警察]（名） ㊀戰時其他事變に際し、其地の司令官が、通常の警察法によらずして行ふ警察行政、人民の居住・移轉・集會・出版・言論等の自由を制限することを許さる。ひじやうけいさつ。㊁軍事上に關する警察。――こうさい[軍事公債]（名） 明治廿八年に軍費支辨のため募集せられし五分利付の公債。――さいばん[軍事裁判]（名） 軍法會議に同じ。――さんぎくわん[軍事參議官]（名） 天皇の帷幄に參し軍事の機務に預る高官、即ち、陸海軍兩大臣・參謀總長・海軍々令部長・教育總監部長及親補せられたる陸海軍將校より成る。――せんりやう[軍事占領]（名） 攻擊又は防禦の必要より、敵國又は他國の領土を占領すること。――たんてい[軍事探偵]（名） 敵國に入りこみなどして、軍事上に關する探偵をなすもの。――つう[軍事通]（名） 軍人にあらずして軍事にあかるきを。又、其人。――ひ[軍事費]（名） 軍事のために支出する費用。――ふたん[軍事負擔]（名） 【法】直接に軍事の需用のために、財產の制限又は給付をなす法律上の負擔、勞力の徵發等も金錢上の價格に見積られ、兵役と同一にあらざるが故に、また軍事負擔なり。

（ぐん-しう）[群醜]（名） 群集せる盜賊又は反賊。

（くん-じつ）[曛日]（名） いりひ。

（ぐん-しふ）[群集]（名） むらがりあつまること。又、其あつまりたるもの。むれ。

（くん-しやう）[勳章]（名） 國家に盡し、功勞を表彰して下賜せらるゝ記章、菊花章・寶冠章・旭日章・瑞寶章・金鵄章等の種類ありて、菊花章を除くの外は皆な等級あり、佩用の次第は、種類により等級によりてこれを異にす。――ねんきん[勳賞年金]（名） 勳章の等級に應じて、終身の間每年下賜せらるゝ一定の金。

（くん-じやう）[勳狀]（名） いさをを賞(ホ)めて、大將などより賜はる感狀。

（ぐん-じやう）[群靑]（名） 靑色を有する一種の顏料、人工と天然との二樣あり。（白靑）。

（くん-しゆ）[葷酒]（名） ねぎ又はにら等と酒と。又、葷を食ひ酒を飮むこと、「不レ許二―入一山門一」。

（くん-しゆ）[君主]（名） 國家主權の本體たる特定の一人、即ち國家の元首。きみ。――こく[君主國]（名） 君主國體の國、即ち君主が國家の元首たる國。――こくたい[君主國體]（名） 國體が特定の一人を以て主權者となすもの、即ち君主が自己固有の權力を以て君臨する國體。――しゆけんせつ[君主主權說]（名） 一國の主權が特定の一人なる君主にありといふ說、國家主權說の對。――せいぢ[君主政治]（名） 君主が其國の政治を總攬すること。――せいど[君主制度]（名） 君主が元首として其國の主權を有する制度の稱。――せんせい[君主專制]（名） 君主が自己の意思によりて其國の政治を行ふこと。――どくさい[君主獨裁]（名） 前條に同じ。

（ぐん-しゆ）[群集]（名） 多人數むらがり集まること。

又、其人々。

（ぐん-じゆ）[軍需]（名） 軍事に需用あること、又其品。

（ぐん-しよ）[軍書]（名） 軍事に關係の事を記したる書物、軍記。――よみ[軍書讀]（名） 軍談師。「講談師」。

（ぐん-しよ）[群書]（名） 多くの書籍。

（ぐん-しよく）[軍職]（名） 陸海軍に從屬する官職。

（ぐん-しれいくわん）[軍司令官]（名） 一軍の統率指揮をつかさどるもの、大將若しくは中將を以てこれに補す。

（くん-しん）[君臣]（名） きみとおみと。君主と臣下と。

（ぐん-しん）[群臣]（名） 許多の臣下。

（ぐん-しん）[軍神]（名） ㊀武運を守る神。いくさがみ。㊁生前最も壯烈なる武功ありし將士。

（ぐん-じん）[軍人]（名） 軍籍にありて、戰時に戰鬪に從事する將校下士卒の總稱。いくさびと。

＋くん-ず[屈]（自、さ變）（ぜじずずるずれぜよ） 屈す。餒(ウ)く。

くん-ず[薰]（自、さ變）（ぜじずずるずれぜよ） かをる。にほふ。

くん-ず[曛]（自、さ變）（ぜじずずるずれぜよ） 日沒す。くる。

ぐん-ず[軍]（自、さ變）（ぜじずずるずれぜよ） 陣を取る。

（ぐん-せい）[軍制]（名） 軍の編制經理等に關する規定。

（ぐん-せい）[軍勢]（名） 軍のいきほひ。

（ぐん-せい）[軍政]（名） ㊀「ぐんじぎやうせい」に同じ。㊁戰時又は事變に際し、或地域內に其地の司令官が委任によりて軍事警察を行ふこと。――しよ[軍政署]（名） 占領の土地などにて、軍政上の事務を取扱ふやくしよ。

（ぐん-ぜい）[軍勢]（名） ぐんたい、ぐんびやう。

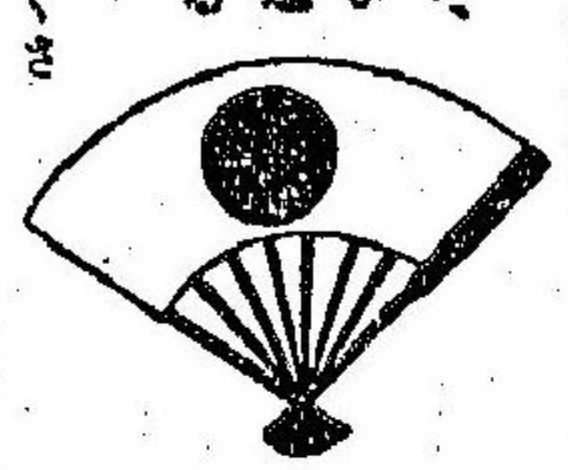
（くん-せき）[勳績]（名） いさを、てがら。

（ぐん-せき）[軍籍]（名） 軍人たるべき地位分限。

（くん-せん）[薰染]（名） 感化を受くること、うつりそむこと、又、感化を與ふること、うつりそますこと。

（くん-ぜん）[醺然]（名、副） 酒に醉ひたるさまにいふ語。

（ぐん-せん）[軍扇]（名） 古昔、大將が軍勢を指揮するに用ひし扇、多くは鐵をもて骨を造り、漆紙に日月を描(エガ)きたるもの。



[ぐんせん]

（ぐん-せん）[軍船]（名） いくさぶね。

（くん-せんし）[君仙子]（名） うつぎの實の稱。（楓屬の語）。

（くん-そく）[君側]（名） 主君のおそば。――をきよむ[淸二君側一] おそばの姦臣を除くにいふ。

（ぐん-ぞく）[軍屬]（名） 陸海軍に從屬する文官其他雇員などの稱、軍人の對。

（ぐん-そつ）[軍卒]（名） ぐんびやう、兵卒。

（ぐん-そん）[郡村]（名） 郡と村と、轉じて、ゐなか。――たくち[郡村宅地]（名） 市街宅地以外の宅地の稱。

（くん-たい）[裙帶]（名） 「くたい」に同じ。

（ぐん-たい）[軍隊]（名） ㊀軍の編制又は隊伍。㊁陸上の兵備に當る將校及下士卒の總稱。へいたい。「―の强弱」。

（ぐん-だい）[郡代]（名） 武家の職名、代官の上に位せしもの。

（ぐん-だい）[軍代]（名） 大名の陣屋を守る重役、ぢんだい。

（くん-たう）[薰陶]（名） 德をもて人を感化すること。

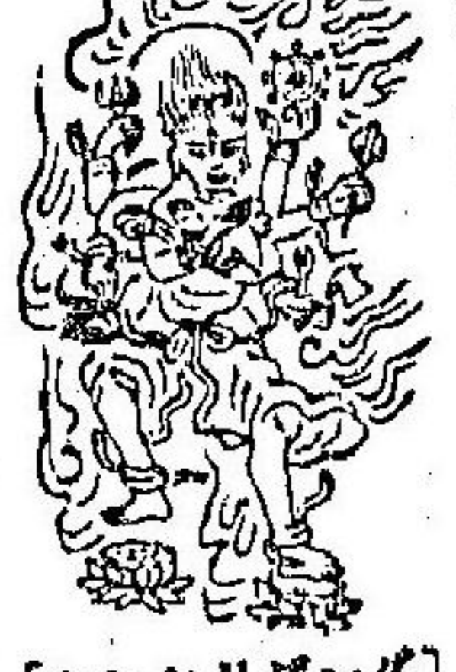
（くん-だう）[訓導]（名） ㊀敎へ導くこと。㊁免狀を有する小學校敎師。㊂神道敎會の職名。

（ぐん-たう）[群盜]（名） あつまりてむれをなす盜賊。

（ぐん-たう）[軍刀]（名） 戰鬪に用ふる刀。

（**ぐん-たう**〔群島〕（名）むらがりて一群をなす島々。

グンダリ〔軍荼利〕（名）【佛】「グンダリヤシヤ」の略言。——**ヤシヤ**〔軍荼利夜叉〕（名）【佛】明王の一、南方を守る、一面八臂にして忿怒の相をなす、一切の阿修羅惡鬼を推伏すといふ。


〔グンダリヤシヤ〕

（**ぐん-だん**〔軍團〕（名）㊀古昔、諸國に備へ置きし兵隊、國中の二十一歳より六十一歳までの男子より募集し、軍事を習はしゝもの。㊁普通歩兵二個師團及これに適應せる各種の兵より成立せるもの、我國現時の軍制にはなし。

（**ぐん-だん**〔軍談〕（名）軍書を節(フシ)おもしろく讀み聞かせ又は戰爭に關係したる話をなすこと。——**し**〔軍談師〕（名）軍談を營業とする人。(講釋師)。

（**ぐん-ちやう**〔郡長〕（名）規定の職權又は特別の委任により、府縣知事の指揮監督の下に、郡に關する行政事務を處理し、兼ねて郡會及郡參事會の議決を執行し、郡を代表する官職。

（**ぐん-ちゆう**〔軍中〕（名）㊀軍隊又は軍營のなか。㊁戰爭又は征役の間。

（**くん-ちよう**〔君寵〕（名）きみのきに入り。又、きみのめぐみ。

（**ぐん-ぢん**〔軍陣〕（名）軍營、軍隊。

（**くん-てん**〔訓點〕（名）漢文を和讀するために付くるかへり點、すてがな。

（**くん-とう**〔勳等〕（名）勳章の等級、一等より八等まであり、一等の上を大勳位とす。

（**くん-どく**〔訓讀〕（名）漢字に日本語を當て、讀むこと、晉讀の對。

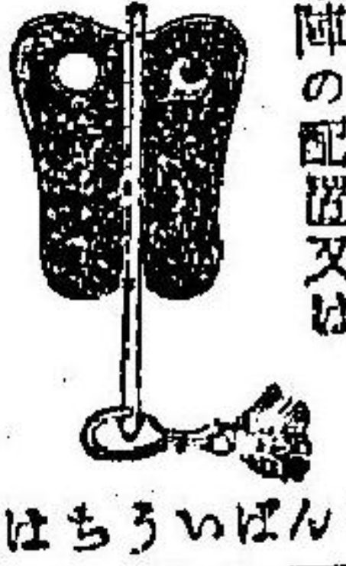
（**ぐん-ない**〔郡內〕（名）㊀一郡の區域內。㊁「ぐんないじま」の略言。——**じま**〔郡內縞〕（名）甲斐國、郡內地方より織り出す絹織物、かいき織の一種。

（**ぐん-にやり**（名、副）力ぬけ去りたるさまにいふ語。

（**くん-のう**〔君王〕（名）「くんわう」の轉訛。

（**ぐん-ば**〔軍馬〕（名）軍事に用ふる馬匹。

（**ぐん-ばい**〔軍配〕（名）㊀軍陣の配置又は進退などの指圖(サシヅ)。㊁「ぐんばいうちは」の略言。——**うちは**〔軍配團扇〕（名）古昔、大將が軍配をなすときに用ひし具、鐵又は板をもて、扁(ヒラ)たき團扇形に造り、これを漆塗などにして柄をすげたるもの。(軍扇、麾扇)。


〔ぐんばいうちは〕

（**ぐん-ばう**〔軍帽〕（名）軍人の制帽。

（**ぐん-ぱう**〔群邦〕（名）おほくのくに。あまたのくに。

（**ぐん-ぱう**〔群芳〕（名）おほくの花又は花さく草木。

（**ぐん-ぱふ**〔軍法〕（名）㊀軍隊の配置又は縱橫の方法。戰爭の法。㊁軍中の法律。軍隊の刑法。——**くわいぎ**〔軍法會議〕（名）陸海軍に於て、軍人の犯したる重輕罪の審判及違警罪の正式裁判又は軍衙・軍人の損害に係る本案附帶の訴訟を審判し、又、合圍地境及臨戰地境には、何人たりとも軍の刑法を以て論ずべき犯罪を審判する裁判所、判士長・判士・理事若しくは理事補及錄事を以てこれを組織す、被告の身分に應じ、判士長は佐官以上中將迄の武官を以てこれに充て、判士は尉官以上少將迄の武官を以てこれに充つ。

（**ぐん-び**〔軍備〕（名）軍事に關する諸種の設備。いくさのそなへ。

（**ぐん-び**〔軍費〕（名）軍事費に同じ。

（**ぐん-びやう**〔軍兵〕（名）㊀つはもの。へいたい。㊁ざふひやう。ぐんそつ。(兵甲、甲士)。

（**くん-ぷ**〔君父〕（名）きみとちゝと。

（**ぐん-ぷ**〔軍夫〕（名）軍隊に屬從する人夫。

（**ぐん-ぶ**〔郡部〕（名）郡に屬する部分。市部の對。

（**くん-ぷう**〔薰風〕（名）南方より吹く風。又、夏季の風。

（**ぐん-ぷく**〔軍服〕（名）軍人の着用する規定の服。

（**ぐん-ぺう**〔軍票〕（名）ぐんようてがた。

（**ぐん-ぽう**〔軍鋒〕（名）軍のいきほひ。軍のほさき。

（**ぐん-ぼく**〔群牧〕（名）おほくの諸侯。又、おほくの地方長官。

（**ぐん-む**〔軍務〕（名）軍に關する事務又は勤務。——**きよく**〔軍務局〕（名）陸軍省及海軍省の主要なる事務を扱ふ一局。

（**くん-めい**〔君命〕（名）君のおほせ。君の命令。——**をはづかしめず**〔不㆑辱㆓君命㆒〕君命をうけ他國に使して、よく面目を維持するにいふ。

（**くん-もう**〔訓蒙〕（名）こどもに教へさとすこと。初學者にをしへさとすこと。「—の文」。

（**くん-もく**〔薰沐〕（名）身體に香をぬり又は湯あみすること。からだをきよむること。

（**くん-もつ**〔薰物〕（名）たきもの。にほひもの。

（**ぐん-もん**〔軍門〕（名）軍營の出入口。「—に降る」。

（**ぐん-やく**〔軍役〕（名）軍のときの課役。

（**ぐん-やくしよ**〔郡役所〕（名）郡長の事務を扱(アツカ)ふ所。又、郡長の取扱ふ事務の全體。

（**くん-ゆ**〔訓諭〕（名）をしへ。さとし。

（**ぐん-ゆう**〔群雄〕（名）おほくの一方に長たる人。

（**ぐん-よう**〔軍容〕（名）軍隊のいでたちのさま。

（**ぐん-よう**〔軍用〕（名）軍事に用ふること。——**きん**〔軍用金〕（名）軍の費用につかふ金錢。——**きゆうへう**〔軍用手票〕（名）「ぐんようてがた」に同じ。——**てがた**〔軍用手形〕（名）軍隊が戰地などに於て、物品購買の便利のために使用する特殊の手形、現金と引換へらるゝもの。——**てつだう**〔軍用鐵道〕（名）軍事に關する輸送のために特に布設せる鐵道。——**でんしん**〔軍用電信〕（名）軍事に關する通信のために特に設備したる電信、固定せる設備のものと處々に移動する設備のものとあり。——**りよしや**〔軍用旅舍〕（名）徵發せられたる遠方の軍人などが、一時止宿するためのやどや。

（**ぐん-らく**〔群落〕（名）相集まりたる團體。あつまり。むれ。

（**ぐん-り**〔軍吏〕（名）陸軍の會計事務を扱ふ官吏、特に其尉官相當官の稱。

（**ぐん-り**〔郡吏〕（名）郡長の統率に屬し、其意思を受けて事務を扱(アツカ)ふ人。

（**ぐん-りつ**〔軍律〕（名）軍中の刑律。軍人に關する法律。

（**ぐん-りつ**〔郡立〕（名）郡の經費にて設立維持せらるゝこと。「—中學校」。

廿**ぐん-りやう**〔郡領〕（名）古昔、郡の大領と少領との稱。

（**ぐん-りやく**〔軍略〕（名）㊀軍事上の才智又ははかりごと。㊁「せんりやく」に同じ。

（**ぐん-りよ**〔軍虜〕（名）降服し又は捕獲せられたる敵兵。とらはれ。ほりよ。

（**ぐん-りよ**〔軍旅〕（名）㊀ぐんたい。軍勢。㊁いくさ。戰爭。

（**くん-りん**〔君臨〕（名）君主として其國土人民ををさめすぶること。

（**くん-れい**〔訓令〕（名）㊀上級官が下級官に對して、法令の解釋又は事務の方針に關して下す命令。㊁軍隊にて、目的のみを命令し、其施行の手段は命令を受けたるものに一任するもの。

（**ぐん-れい**〔郡令〕（名）郡長が法令又は委任せられたる範圍內に於て發する行政命令。

（**ぐん-れい**〔群黎〕（名）ひやくせう。ばんみん。

（**ぐん-れい**〔軍令〕（名）軍事に關する命令。——**ぶ**〔軍令部〕（名）海軍軍令部に同じ。

（**くん-れん**〔訓練〕（名）をしへみちびきて實務に熟練せさすること。

（**くん-ろく**〔薰陸〕（名）㊀凝固して石の如き狀をなす木のやに、藥劑又は香料に供す。㊁陸中國の山中より出す一種の香料、松脂(ヤニ)の化したるものにして、形は琥珀に似て色黑し、夏時は溶解す。

（**くん-わう**〔君王〕（名）きみ。くんしゆ。元首。

（**くん-ゐ**〔勳位〕（名）㊀勳功と位階と。「—共に高し」。㊁勳功によりて賜はる位階。㊂勳等と位階と。㊃勳章下賜の等級。

くん-ゐ〔君位〕（名）君王のくらゐ。

け　げ

け 喉的破裂音k、即ち舌の後部を軟口蓋に接して破裂せしむる音と、母音「エ」との綴音。

げ 「け」の濁音、凡て「け」と同じく、たゞ破裂音に聲帶の振動の伴ふを異なりとす。

け〔氣〕（名）㊀いきほひ。き。いき。「火の—」。㊁やまひ。「時の—」。㊂たゝり。「物の—」。(怪)。㊃けしき。けはひ。やうす。㊄あぢはひ。にほひ。又、痕跡。「酒の—」「鹽の—」「—も無い」。

け〔毛〕（名）㊀動物の皮膚に生ずる細き絲狀のもの、即ち、表皮の變形物。㊁髮の毛。㊂すべて物の表面に生ずる細き絲の如きもの。㊃地上に生ずる草木。「—なし山」。㊄稻の穗のみいり。作毛。——**をふきてきずをもとむ**〔吹㆑毛求㆑疵〕人の陰事などをあばき出して追及するにいふ。又、餘計な事をして却つて禍にかゝるにもいふ。——**をみてむまをさうす**〔見㆑毛相㆑馬〕毛のよしあしを以て馬の駿駑を見るが如く、たゞ外形の如何を以て人物の賢愚をはかるにいふ。

廿**け**〔褻〕（名）㊀つね。ふだん。「いやひに—にきませ」。㊁晴れがましからざること。公ならぬこと。

廿**け**〔食〕（名）くひもの。およくお。「朝—」「夕—」。

廿**け**〔笥〕（名）物を入るゝ器。うつは。「櫛—」「苧—」。

廿**け**〔故〕（名）「ゆゑ」に同じ。「願どもたてさせ給ふ—にや、平かに事なり果てぬ」。

廿**け**〔蹴〕（名）蹴(ケ)ること。「一—」「二—」。

（**け**〔罫〕（名）㊀物書かんときのため、紙上に引きたるしきりの線。(界)。㊁碁盤などの面の縱橫の線。㊂拾(ヒロ)ひ上げたる活字の行の間に插(サシハサ)むもの、厚さは薄く高さは活字にひとし。

（**け**〔卦〕（名）易にて、筮(メドギ)をかぞへて施(シ)きたる六畫の算木の面に現るゝ象、これに由りて、吉凶善惡を判斷す、乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤の八つを本として八卦と稱し、更に參伍錯綜して六十四卦の變化を生ず。

廿**け**〔消〕（自）「きえ」の約言。「おく露の—なば—ぬべし」。

廿**け—**（接頭）動詞又は形容詞に冠して、稍や其意を強むる語。「—壓さる」「—近し」。

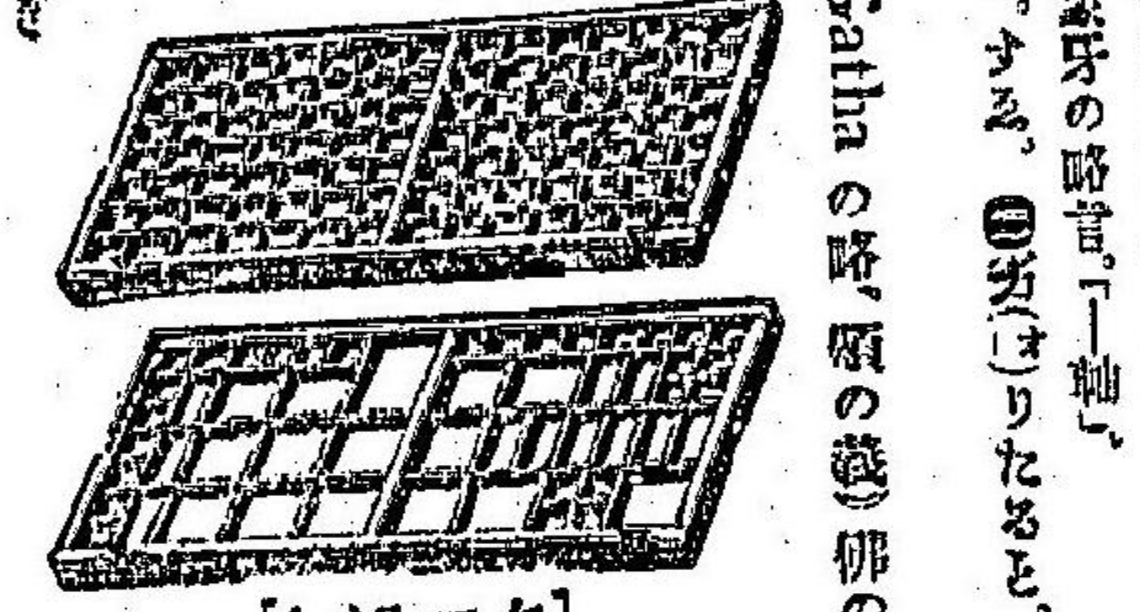
（**—け**〔家〕（接尾）いへ。いへすぢ。いへがら。「源—」「平—」「武—」。

(げ)[牙](名) ㊀きば。㊁象牙の略言。「—軸」。

(げ)[下](名) ㊀しも。した。すゑ。㊁劣(オト)りたること。いやしきこと。

ゲ[偈](名) 【佛】(梵語 Gatha の略、頌の義)佛の功德を讃美する謠ふ一種の詩。

ケース[Case](名) ㊀活字を入れおく木製の箱、中に數多の小區劃を設け、區劃ごとに同種の活字を入る。㊁「やくけふ」(藥莢)に同じ。



[ケース(一)]

げ-あがり[氣上](名) ぎやくぎやう。のぼせ。

げ-あが・る[氣上](自、ら四) ぎやくぎやうす。のぼす。

げ-あ・ぐる[蹴上](他、か下二) ㊀けりて上ぐ。㊁下より上のものをける。

げ-あげ[蹴上](名) ㊀踏(フ)みて上がるところ。㊁船の閘(ケハシ)の稱。

げ-あし[毛脚](名) ㊀毛ののびゆくさま。「—が早い」。㊁毛の多く生(ハ)えたる足。

げ-あな[毛孔](名) 毛を生ずる皮膚の小孔。

げ-あは[毛粟](名) 【植】「おほあは」の一名。

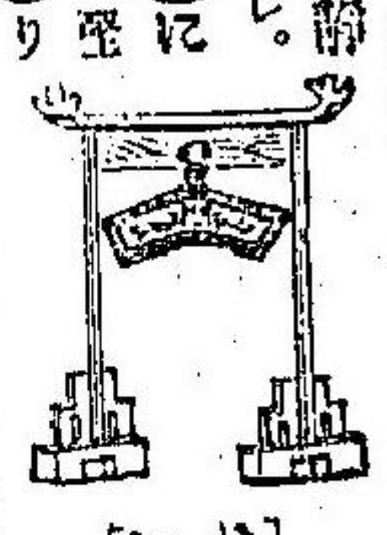
げ-あひ[蹴合](名) 互に蹴(ケ)あふこと。「雞の—」。

げ-あ・ふ[蹴合](自、は四) 互に蹴る。

げ-あんご[夏安居](名) 【佛】僧侶が夏季一定の日數間出遊を廢して一室に靜座すること。

(げい)[羿](名) 「げ」(界)(一)に同じ。

(げい)[磬](名) 一種の樂器。堅き石を曲形に刻(キ)み、吊(ツ)り下げて拍(ウ)ち鳴らすもの、後世には銅を以てつくりたるもあり。



[けい]

(げい)[景](名) ㊀「けいしよく」の略言。「—が好い」。㊁「けいぶつ」の略言。「俄—呈上」。

(げい)[啓](名) ㊀みちむかへ。さきばらひ。㊁せんぼう。軍前。㊂漢文にて事狀を陳述する手簡、おもに儷語を用ひたるもの、稱。

(げい)[刑](名) ㊀のり。常法。㊁犯罪行爲に關する制裁の規定。㊂【法】「けいばつ」(刑罰)に同じ。

(げい)[系](名) ㊀いとぐち。端緒。㊁ちつゞき。血統。㊂つゞき。聯屬。㊃いとすぢ。細縷。「斷えざること—の如し」。㊄【數】定理より直に推定し得べき命題。

(げい)[慶](名) よろこび。いはひ。

(げい)[桂](名) ㊀【植】かつら。㊁將棊の駒の「けいま」の略言。

(げい)[圭](名) ㊀支那の古代に、天子より封侯の志るしとして、諸侯に賜ひし玉、上部尖りて下部は方形なり。㊁くゞりど。くゞり。㊂かど。とがり。

(げい)[奎](名) 星の名、二十八宿の一。

(げい)[徑](名) 直徑の略言。さしわたし。

(げい)[兄](名) あに。「—部」。

(げい)[京](名) みやこ。

(げい)[敬](名) ㊀うやまふこと。たふとぶこと。㊁おろそかにせざること。ていねいなること。㊂つゝしみ守りて、妄に心を動かさゞること。「—以て內を直くす」。

(げい)[經](名) ㊀たて。又、たていと。㊁すぢ。みちすぢ。㊂のり。つね。㊃さかひ。けいかい。㊄聖人の述作にかゝる書、聖人の言を記載したる書。(聖典)。

(げい)[計](名) かんぢやう。志めだか。

(げ-い)[怪異](名) あやしく不思議なる物事。もの、け。「よな〳〵姬君御惱の—」。

(げい)[卿](名) 執政の大臣。朝廷の高官。

(げい)[兄](代) 同輩に用ふる敬意の代名詞。「—以て如何となす」。

(げい)[卿](代) ㊀君主の臣下を指して呼びたまふ語。なんぢ。㊁同輩若しくは同輩以下に用ふる敬意の代名詞。きみ。

(げい)[京](數) 數の名、兆の千倍。

(げい)[藝](名) ㊀わざ。たくみ。㊁身に學び得たるわざ。「—が身を助くる不仕合」。㊂遊藝の特稱。「かくし—」。

(げい-あい)[敬愛](名) うやまふと愛すると。又、うやまひ且愛すること。

(げい-あん)[慶安](名) (もと江戶の醫者の名といふ) ㊀奉公又は緣談などの媒介をなすもの。㊁雇人の周旋人又は請宿。(桂庵、慶庵)。

(げい-い)[敬意](名) うやまふこゝろ。「—を表す」。

(げい-い)[輕易](名) ㊀てがるきこと。たやすきこと。㊁たやすしとすること。あなどること。

(げい-いう)[經由](名) へよること。とほること。

(げい-いん)[契印](名) 文書の相分離したる紙面に、其相關連する證として、雙方へかけて捺す印。

(げい-いん)[鯨飲](名) 多量に酒を飲むこと。

(げい-うん)[景雲](名) めでたき志るしの雲。(卿雲)。

(げい-えい)[經營](名) ㊀なはばりをしもとをたて、建築すること。㊁規模を定め基礎を立て、物事をさめいとなむこと。「—慘憺」。

(げい-えい)[輕銳](名) 身輕によそほひたるするどき兵士。

(げい-えい)[形影](名) かたちとかげと。——**あひとむらふ[形影相弔]** 孤立してたよる人もなくさびしきくらしをなすにいふ。

(げい-えん)[瓊筵](名) 詩歌の會などの敬稱。「—に陪す」。

(げい-おん)[鯨音](名) 梵鐘の聲。

(げい-か)[輕舸](名) はやふね。てんま。

(げい-が)[慶賀](名) いはひよろこび。「新年の—」。

(げい-か)[猊下](名) 高貴なる僧侶のおそば又はおもとの義、轉じて、貴き僧侶の敬稱。(書狀などに用ふ)「謹んで書を某僧正の—に呈す」。

(げい-かい)[境界](名) さかひ。志きり。(經界)。

(げい-かい)[警戒](名) ㊀注意して戒(イマ)めまもること。ぬかりなく所要の準備をなすこと。㊁注意を與へて戒めまもらすること。ぬかりなく所要の準備をなさしむること。——**かうぐん[警戒行軍]**(名) 敵に近き行軍。——**しよく[警戒色]**(名) 【動】動物が自己をなるべく顯著ならしめ、他の動物に認知せられ易からしめんための特殊なる體色。

(げい-がい)[傾蓋](名) (途中にて、出あひきぬがさをかたむけて立談する義) 一寸(チヨツ)と面會したることにいふ語。——**きうのごとし[傾蓋如舊]** 一寸と面會して意氣相投じ、忽ちむかしなじみの樣に親しくなるにいふ。

(げい-がい)[謦咳](名) ㊀志はぶき。せきばらひ。㊁笑ひつ語りつすること。「其前に—す」。——**にせつす[接謦咳]** 面會を得るにいふ。

(げい-かう)[經行](名) ㊀へめぐりゆくこと。へめぐり。㊁月やく。つきのめぐり。

(げい-かう)[景仰](名) 其人の德を志たひあふぐこと。

(げい-かう)[啓行](名) 志ゆつたつ。かどで。

(げい-かう)[傾向](名) かたむきむかふこと。かたよりおもむくこと。かたむき。かたより。

(げい-かく)[圭角](名) ㊀かど。とがり。㊁才氣又は見識の發露して他ときはだちて見ゆる狀態。㊂言語又は擧動の他と和合せざる狀態。

(げい-かく)[傾角](名) 【地】磁針が水平と成す角、北半球にありては磁針の北極は水平より下に向ふものとす。

(げい-がく)[經學](名) 經書の意義を研究する學。

(げい-がく)[谿壑](名) (大いなるたにの義) 慾望の深くして足ることを知らざるにたとへいふ詞。「—の慾」。

(げい-がく)[驚愕](名) おどろくこと。

(げい-かふ)[閨閤](名) ㊀ねや。ふしど。㊁おそば。ごきんじよ。「—の臣」。

(げい-がふ)[契合](名) ㊀わりふを合せたるが如く、兩者の言行などのよく一致すること。㊁種々の現象を比較して、其共通の事情を以て其現象の原因又は結果なりと推定すること。

(げい-がふ)[迎合](名) 他人の機嫌を察しおもねりへつらひてこれに從ふこと。

(げい-かみ)[罫紙](名) 罫(ケ)を引きたる紙。(界紙)。

(げい-かん)[鷄姦](名) なんしよく。だんしよく。

(げい-がん)[炯眼](名) さかしく鋭き眼力。

(げい-き)[刑期](名) 刑罰を受けてゐる期間。

(げい-き)[京畿](名) ㊀宮城のある近傍の稱。㊁畿內の稱。「—八道」。

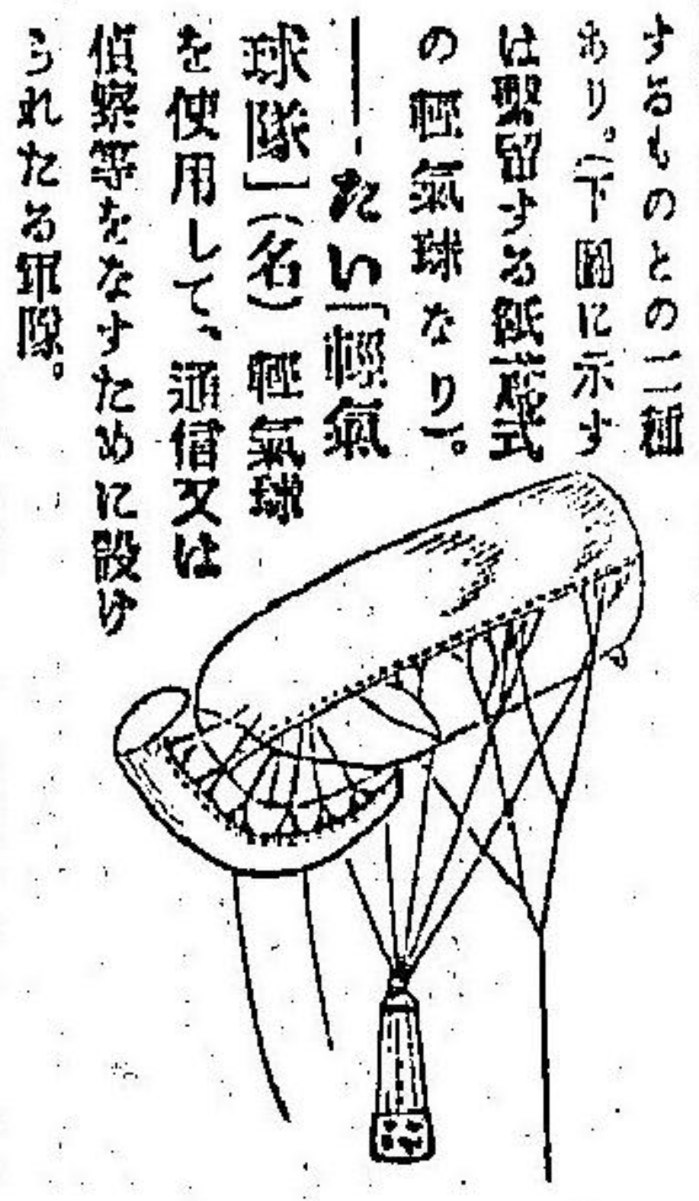
(げい-き)[輕騎](名) 身がるによそほひたる騎兵。

(げい-き)[景氣](名) ㊀けしき。けはひ。ありさま。「—を見定む」。㊁賣買又は取引のありさま。「—のよい店」。

(げい-ぎ)[經義](名) 經書の意義。

(げい-ぎ)[藝妓](名) 宴席などに招かれ、歌舞音曲をなすを業とする女。うたひめ。げいしや。げいこ。

(げい-ききう)[輕氣球](名) 空氣に比して輕き瓦斯體(例へば水素又は石炭瓦斯等)を絹張の袋に入れて空中に上下せしむる裝置のもの、袋の下部に籠ありて、これに人を乘せ又は物を容(イ)る、索をつけて地上に繫留するものと、自由に空中に浮遊行動するものとの二種あり。(下圖に示すは繫留する輕氣球なり)。——**たい[輕氣球隊]**(名) 輕氣球を使用して、通信又は偵察等をなすために設けられたる軍隊。



[けいききう]

(げい-きふ)[警急](名) 急變に對して用意をなすこと。——**しやえい[警急舍營]**(名) 軍隊が服裝をとゝのへ、背囊を身邊に置き、嚴しき防備を以て舍營すること。

(げい-きやう)[景況](名) けいき。ありさま。

(げい-きゆう)[勁弓](名) がうきゆう。つよき弓。

(げい-きよ)[輕擧](名) かる〴〵しきおこなひ。

(げい-きよ)[瓊琚](名) うつくしき玉。

(げい-きよく)[荊棘](名) ㊀いばら。㊁戰亂又は饑民。「—を拔く」。

(げい-きんこ)[輕禁錮](名) 【法】輕罪に科する主刑の一、一定の場所に留置して定役に服せしめざるもの、現行法にて十一日以上五年以下の刑期なり。

(げい-きんごく)[輕禁獄](名) 【法】重罪に科する主刑の一、內地の獄に入れ定役に服せしめざるもの、現行法にて六年以上八年以下の刑期なり。

(げい-きんぞく)[輕金屬](名) 【化】比重四以下の金屬。

(げい-く)[警句](名) よく眞情をいひあらはしたる句、すぐれてするどき意義ある句。

(げい-ぐ)[刑具](名) 罪人などをいましむるために、其身體に加ふる具。かいぐ。

(げい-ぐ)[敬具](名) つゝしみて申上ぐといふ意、

書狀の末に記する語。

(けい-くわ)[經過](名) ㊀とほりこすこと、すぎゆくこと。へゆくこと。㊁時日をへゆく狀態。「病氣の―」。

(けい-くわ)[京華](名) みやこ。

(けい-くわ)[螢火](名) ほたるび。

(けい-くわい)[輕快](名) ㊀重量少なくして速力はやきこと。「―なる小艇」。㊁重々しからずしてすばやきこと。「―なる辯說」。㊂病氣稍やよくなりたること。

(けい-くわう)[螢光](名) ㊀ほたるび。ほたるのひかり。㊁[理]透明體によりこれを照らすときは、普通光に見たる色と異なる色の光を反射する特種の光。

(けい-くわく)[計畫](名) はからひ。もくろみ。くはだて。

(けい-くわん)[警官](名) 警察官の略言。

(けい-くわん)[挂冠](名) かんむりをかくること、即ち官を辭すること。おゑよく。

(けい-くわん)[桂冠](名) 月桂冠の略言。

(けい-くわん)[鷄冠](名) にはとりのとさか。

――くわ[鷄冠花](名)[植]「けいとう」に同じ。

――せき[鷄冠石](名) 砒と硫黃との化合物、柱狀又は粒狀をなす、麗(ウル)はしき橙黃色を有して透明なり、永く大氣中に置けば雄黃となる、融解し易し、繪具又は烟火(ハナビ)の材料に供せらる。

(けい-けい)[輕輕](名、副) かろ〲しきさまにいふ語。

(けい-けい)[熒熒](名、副) 暗中にて小さきもののひか〱ひかるさまにいふ語。

(けい-げい)[鯨鯢](名) 大奸賊又は惡徒の首領などの稱。「惡所」劍有聲」。

(けい-けん)[敬虔](名) ㊀つゝしみ正しくすること。つゝしみかしこむこと。㊁神佛に忠實なること。

(けい-けん)[經驗](名) ㊀實際にためしこゝろみたること。こゝろみ。ためし。㊁こゝろみ又はためしによりて得たる智識又は技術。㊂感官を通じて得たる知覺。又、知覺によりて結合せられたる知識。

――ろん[經驗論](名) ㊀[Empiricism][哲] 知識は總く經驗により收得したる結果にして、經驗以外に知識の根源なしといふ一派の認識論。純理論の對。㊁經驗上より立てたる議論。

(けい-げん)[輕減](名) 減じて輕くすること。「地租―」。

(けい-こ)[稽古](名) ㊀古昔の事を考ふること。㊁學び習ふこと。くりかへして習ふこと。(講習、溫習)。㊂音曲などをならふこと。――ぎ[稽古着](名) 柔術擊劍などを稽古する時の衣服。――じよ[稽古所](名) 物事を學習する所。又、音曲などを敎ふる家。――ばかま[稽古袴](名) 稽古する時にはく袴。――ぼん[稽古本](名) 音曲などの稽古に用ふる大字の書物。

(けい-ご)[警固](名) 非常を警(イマシ)めて防備すること。又、其設備。かため。(護衛)。

(けい-ご)[警護](名) 危害あらせじといましめまもること。「―の武士」。

(けい-ご)[敬語](名) 敬意を表するために使用する言語。うやまひのことば。

(けい-ご)[警語](名) すぐれてさとき意義の語。よく適切をいひあらはしたる語。

(けい-こ)[藝子](名) 藝者の稱。(京阪地方の方言)。

(けい-こう)[雞口](名) (にはとりの口の義)小なる團體のかしら。「いふこと。」

(けい-こく)[警告](名) 注意戒心するやうにつげ

(けい-こく)[傾國](名) (一顧傾人城、再顧傾人國といふ語より出づ)美人の稱。けいせい。

(けい-こく)[頃刻](名) ざんじ。しばらく。

(けい-こつ)[頸骨](名) くびのほね。

(けい-こつ)[脛骨](名) 脛部の骨。

(けい-こつ)[輕忽](名) かろ〲しきこと。おろそか。そこつ。

(けい-さ)[稽査](名) かんがへとりしらぶること。

(けい-さ)[繫鎖](名) ㊀つなぎとゞめて自由を得しめざること。㊁つなぎとむるに用ふるくさり。

(けい-さい)[繼妻](名) のちぞひ。後妻。

(けい-さい)[荊妻](名) 自分の妻の謙稱。

(けい-さい)[揭載](名) かゝげ載すること。

(けい-ざい)[輕罪](名)[法] 禁錮又は罰金に處せらるゝ犯罪。

(けい-ざい)[經濟](名) ㊀國ををさめ民をすくふこと。政事を行ふこと。「―の才」。㊁[經]人類が財貨を獲得し使用し以て其慾望を滿足せしめんとする各種の行爲又は狀態。㊂儉約になること。利益になること。とく。――か[經濟家](名) 經濟の事に明かなる人。又、巧に費用を節する人。――かい[經濟界](名) 人類社會の經濟的活動の範圍。交換賣買等の行はるゝ社會。――がく[經濟學](名)[經] 人類及國家の財貨に對する關係を研究する科學。――せいさく[經濟政策](名)[經] 國家及其機關が、國民の經濟上の利益增進を保護增進する方法手段の稱。信用・交通・貨幣・保險・銀行其他殖產工・商業等、其目的の異なるに從ひて區別を付し、交通政策・銀行政策・農業政策・工業政策等それ〲の名目あり。――てき[經濟的](形) ㊀財を獲得し使用し以て慾望を滿足せしめんとするさまにいふ語。㊁とく又は儉約になるさまにいふ語。

(けい-さう)[輕躁](名) 沈着せざること。輕々しくさわぐこと。

(けい-さう)[輕裝](名) 身輕に出たくすること。又、あっさりとよそほふこと。

(けい-さう)[競爭](名) 「きやうさう」に同じ。

(けい-さう)[珪藻](名)[植] 海中に生ずる下等植物、其形狀種々なれど、外部は必ず硅酸より成りて美麗なる殼膜を有し、內部は葉綠體なるが故に常に綠色を呈せり。――せき[珪藻石](名) 上古の硅藻の化石となりて存在せるものゝ稱、我國にては北海道に多く產す。――ど[硅藻土](名) 硅藻の堆積によりて成りたる土。

(けい-さう)[係爭](名) 二人以上の人の間のあらそひとなること。――じじつ[係爭事實](名)[法] 係爭となりたる事實、例へば甲乙の間に契約を結びたる事實の有無のあらそひの如し。――ぶつ[係爭物](名)[法] 係爭の目的となれる物件、例へば甲乙の間にあらそひとなりたる土地の如し。

(けい-さつ)[警察](名) ㊀[法]國家及人民の安寧幸福に對する危害を排除するため、直接に人民の自由を制限する國家の命令權の行爲。警察官廳の權限によりてなす所の行爲。㊁警察署の略言。「―につれて行かれた」。――い[警察醫](名) 警察に關する醫務を掌る職名。――ぎやうせい[警察行政](名)[法]「けいさつ」(一)に同じ。――くわん[警察官](名) 警察處分の執行をつかさどる職名。又、其職にある官吏、即ち警視・警部・巡査等なり。――くわんちやう[警察官廳](名) ㊀[法]警察上の命令又は處分をなすべき權限を有する官廳・各省大臣・北海道長官・警視總監・府縣知事・警察署長等なり。㊁俗に警視廳又は警察署などの稱。――けん[警察權](名)[法] 警察を行ふ權力又は權限。――しよ[警察署](名) 各府縣及北海道にて、一定の區域內の警察事務を扱ふ役所、警視又は警部を以て其長とし、警視總監又は府縣知事又は北海道長官の下に屬す。――しよぶん[警察處分](名)[法] 警察上の行政處分、交通の遮斷・集會の解散等の類これなり。――めいれい[警察命令](名)[法] 警察上の行政命令。――れい[警察令](名)[法] 前條に同じ。

(けい-さん)[卦算](名) 文鎭の類にして、易の算木の狀をなすもの。けさん。(壓尺)。

(けい-さん)[硅酸](名)[化] 硅素と酸素と水との化合物、硅酸「アルカリ」の溶液に強き酸を加へて析出する膠狀の沈澱物にして、これを乾燥すれば無水硅酸となる、無水硅酸は、弗化水素の外すべての酸類に溶解せず、應用極めて廣く硝子又は磁器の製造に用ひらる、天然には水晶・石英・燧石・瑪瑙等となりて存在す。――アルカリ[硅酸――=Silicic alkali](名)[化] 無水硅酸を炭酸「アルカリ」と共に融解して生ずる硝子狀のもの、水に溶解すれば水飴の如き粘液を生ず、これを器具の表面に塗りて防火用とし、又、種々の工業に用ふ。――えん[硅酸鹽](名) 硅素と酸素と「アルミニウム」「カルシウム」等との化合物。

(けい-さん)[計算](名) 計りかぞふること。勘定。「る。」――じけん[計算事件](名)[法] 計算の當否を目的とする訴訟。

(けい-し)[桂枝](名) 桂の枝の皮、藥用に供せらる。

(けい-し)[京師](名) みやこ。きやうと。

(けい-し)[繼子](名) 自己の配偶者の子にして、自己の嫡子若しくは庶子にあらざるもの。まゝこ。

(けい-し)[罫紙](名) けいがみ。

(けい-し)[警視](名) 高等官の警察官。

(けい-し)[輕視](名) 輕んじ見さぐること。「ずゐ。」

(けい-し)[磬子](名) 瓦器(ヲガハ)などを敲する磬、ま

(けい-し)[刑死](名) 死刑に處せられて死ぬること。

(けい-し)[經始](名) いとなみつくること。「砲壘の―」。

(けい-し)[經史](名) 經書と歷史と。

(けい-し)[揭示](名) 揭げて示すこと。又、其文書。

(けい-し)[啓示](名) あらはししめすこと。をしへさとすること。「天の―」。

†(けい-し)[家司](名) 「けし」に同じ。

†(けい-し)[屐子](名) 古昔、行はれしはきもの、しだの類。「高き―をさへ履きたればゆゝしく高し」。

(けい-じ)[繫辭](名) ㊀或物事又は言說に關する說明のことば。「易の―」。㊁[論]命題の主辭と賓辭とを結びつけて、否定若しくは肯定をいひあらはすもの、例へば「人の性は善なり」といふ命題に於ける「なり」の如きこれなり。

(けい-じ)[揭示](名) 「けいし」の轉。

(けい-じ)[慶事](名) よろこびごと。いはひごと。

(けい-じ)[刑事](名) ㊀刑罰に關する事件。民事の對。㊁「けいじじゆんさ」の略言。

(けい-しう)[輕舟](名) かろき小舟。

(けい-しう)[閨秀](名) すぐれたる婦人。

(けい-じか)[形而下](名) 形體を具有すること。知覺せらるゝ現象の境界。有形。形而上の對。――がく[形而下學](名) 有形のものに關する學問、即ち理化學・動植物學等をいふ。

(けい-しき)[形式](名) ㊀外形。外觀。㊁一定の狀態。固有の性質。㊂かた。模型。㊃「けいき」。けしき。――しゆぎ[形式主義](名)[Formalistic view][倫] ㊀善惡は行爲又は意志の傾向に屬する性質にして、直接に感知せらるといふ倫理說。㊁何事によらず內容より形式に重きを置くこと。――てき[形式的](形) 形式をもととするさまにいふ語。

(けい-じさいばん)[刑事裁判](名)[法] 犯罪に

就き、刑罰の適用を定むること。――しよ[刑事裁判所](名)【法】刑事裁判をなす權限ある裁判所、即ち司法裁判所が刑事裁判をなす場合にいふ。

（けいじ-じけん）[刑事事件](名) 刑事訴訟に關する事件。

（けいじ-じやう）[形而上](名) 形體の知覺すべからざること。知覺せらるゝ現象を超越する境界。無形。形而下の對。――がく[形而上學](名) 有形を超越したる境界に關する學問、即ち、哲學。

（けいじ-じゆんさ）[刑事巡査](名) 刑事上の犯罪人を逮捕する職務を帶びたる巡査。

（けいじ-せいさい）[刑事制裁](名)【法】國家が刑法上の犯罪者に科する制裁。

（けいし-そうかん）[警視總監](名) 各省大臣(直接には内務大臣)の指揮監督を受け、東京府下の警察行政及消防・監獄の事務を總理する官職、高等警察は總理大臣の指揮を受け、又、檢事と同じく犯罪搜索の權限を有す。

（けいじ-そしよう）[刑事訴訟](名)【法】檢事が刑事被告人に就き、司法裁判所に公訴を提起し刑罰の適用を求むる手續。又、刑事被告人と司法裁判所との間に於ける其事件上の手續。

（けいし-ちやう）[警視廳](名) 警視總監が事務を處理する官署。又、警視總監が處理する事務の全體。――れい[警視廳令](名) 警視總監が職權又は委任によりて發する行政命令。

（けいしつ）[繼室](名) のちぞひ。後妻。

（けいしつ）[形質](名) 形體と質と。

（けいじ-ひこくにん）[刑事被告人](名)【法】刑罰法の犯罪人として告訴又は告發せられ、未だ裁判確定せざるもの。

（けいしや）[傾斜](名) ㊀かたむきたること。かたむきたる程度。㊁【地】地層面と水平面との角度。

（げいしや）[藝者](名) ㊀音曲・歌舞などを以て、酒宴の興をたすくるを業とする女。げいこ。うたひめ。(藝妓)。㊁すべて遊藝に巧なるもの。

（けいしやう）[輕傷](名) かるきず。かるきておひ。

（けいしやう）[卿相](名) 朝政に預かる高官。

（けいしやう）[形象](名) かたち。さま。

（けいしやう）[啓上](名) 申上ぐること。「一筆―」。

（けいじやう）[形狀](名) さま。かたち。ありさま。やうす。「地球の―」。――げん[形狀言](名)【文法】「けいようし」(形容詞)に同じ。

（けいじやう）[經常](名) 繼續して絶えざること。一定してかはらざること。つね。――さいしゆつ[經常歳出](名) 毎年繼續して支出する國家の歳出、例へば諸官廳の費用の如し。――さいにふ[經常歳入](名) 毎年繼續して收入する國家の收額、例へば、租税・手數料又は財産營業等より生ずる利益等の如し。――ひ[經常費](名) 毎年繼續して支出する經費。

（けいしや-ぎ）[傾斜儀](名) 土地の傾斜を測定する器械。

（けいしゆ）[稽首](名) 頸(くび)の地に付くまで、體を屈して拜すること。「―再拜」。

（けいしゆ）[擎手](名) 手をさゝぐること。

（けいじゆ）[繼受](名) うけつぐこと。――はふ[繼受法](名)【法】他國の法律を採用し又はこれに則(のつと)りて制定せる法律。

（けいしゆく）[奎宿](名) 二十八宿の一。

（げいじゆつ）[藝術](名) ㊀たくみなるわざ。わざ。技術。㊁美を形象に表現すること。又、其手段。美術。――び[藝術美](名)【哲】藝術によりて表現せられたる美。模倣する習慣を離れ、美を唯一の目的となすもの。

（けいしよ）[經書](名) 儒教又は經學にて、最も尊崇せる易經・書經・詩經・春秋・禮記・大學・論語・孟子・中庸などの稱。

（けいしよう）[形勝](名) 地勢又は風景のすぐれたる土地。

（けいしよう）[敬稱](名) 敬ひていふとなへ、人の妻を指して令閨など、いふ類。

（けいしよう）[敬承](名) つゝしみてうけたまはること。

（けいしよう）[警鐘](名) 火事などに鳴らす鐘。

（けいしよう）[繼承](名) あとをうけつぐこと。

（けいしよく）[景色](名) けしき。ふうけい。

（けいしん）[敬神](名) 神をうやまふこと。「―愛國」。

（けいじん）[鷄人](名) 古昔、宮禁にて夜明を知らすることを掌(つかさど)りし人。

（けい-す）（せ・し・す・する・すれ・せよ）[刑](他、さ變) 刑罰に處す。つみす。

（けい-す）（せ・し・す・する・すれ・せよ）[敬](他、さ變) うやまふ。

（けい-す）（せ・し・す・する・すれ・せよ）[慶](他、さ變) いはふ。よろこぶ。

（けい-す）（せ・し・す・する・すれ・せよ）[啓](他、さ變) 言上す。

（けいすう）[係數](名)【數】(い)積の因數の中、前方にある因數の其後方にある因數に對する稱、例へば $6x, abx^2, pqxyz$ に於て $6, ab, pq$ は x, x^2, xyz の係數なり。(ろ)數係數の略言。

（けいすう）[計數](名) かずを計算すること。さんよう。――き[計數器](名) 計數に使用する器械、算盤(ばんろ)もまた其一なれど、普通は歐米より渡來せる一種の器械の稱にして、該器械は巧妙なる裝置にして、使用上大いに勞力を省く。

（げいすう）[鯨鬚](名) 「くぢら」(鯨)(二)を見よ。

（けいず-かひ）[-買](名) ひそかにぬすみ物を賣買すること、又、其商人。(窩主)

（けいすゐ）[經水](名) つきのさはり。つきやく。月經。(月水)。

（けいせい）[形勢](名) ありさま。なりゆき。「熟ら世の―を觀る」。

（けいせい）[形聲](名) 漢字の六書の一、半聲半義のものにて、例へば江の字は、水にして工(コウ)の聲をなすとの義より、氵に工を合はして成るが如し。

（けいせい）[傾城](名) ㊀「一顧傾人城、再顧傾人國」の語に出づ。㊁美人の稱。㊂轉じて、遊女の稱。

（けいせい）[警醒](名) ㊀睡眠をいましめさますこと。㊁迷妄をいましめ悟らすること。

（けいせい）[警世](名) 世人をさとしいましむること。

（けいせい）[經世](名) 世ををさむること。――か[經世家](名) 世ををさむる人。政治家。

（けいせい）[形成](名) 形を成すこと。かたちづくること。――そう[形成層](名)【植】木幹の靭皮と木質との中間にある肉眼にては不分明なる程薄き層、幹の發達のためには最も緊要なる部分にして、冬期の外常に外方に向ひては靭皮を生じ内方に向ひては木質を生ず。

（けいせう）[輕少](名) いさゝか。すこしばかり。(輕微)。

（けいせき）[形跡](名) あとかた。

（けいせき）[經籍](名) けいしよ。

（けいせき）[螢石](名)【鑛】一種の鑛物、透明若しくは半透明にして玻璃光を有し、熱すれば燐光を發す、鍍銅の熔劑又は玻璃の腐蝕劑に供せられ、美麗なるものは裝飾品に用ひらる。

（けいせき）[硅石](名)【鑛】硅素の化合物なる水晶・瑪瑙(めなう)又は燧石等の稱。石英。――ど[硅石土](名) 「けいさうど」(硅藻土)に同じ。

（けいせち）[磬折](名) 次條に同じ。

（けいせつ）[磬折](名) (磬の如き形に曲ぐる義)立ちながら腰を前方に曲ぐること。

（けいせつ）[螢雪](名) (晉の車胤が螢をあつめ其光にて書を讀み、孫康が雪をあつめ其影にて書を讀みしといふ故事に出づ)辛苦して學問すること。「―の功空しからず」。

（けいせつ）[勁節](名) 剛強なるきしやう。又、妄に屈せざるみさを。

（げいせつ）[迎接](名) 來るものをむかふること。

（けいせん）[頸腺](名) 頸部の腺。

（けいせん）[經線](名)【地】地球の表面上に緯線と直交して兩極を連結したる想像上の大圈、即ち同經度の地點を連結したる想像線。しごせん。

（けいそ）[硅素](名)【化】非金屬の一、製法により或は無定形褐色の粉末となり或は板狀の結晶となり或は鋼色の光澤を有する針狀結晶となる、天然に遊離しては存在せざれど、化合物となりては多量に存在す、其酸化物の稍や不純なるは石英にして往々火山脈をなす。又、硅酸鹽類となり岩石土砂等を構成す。

（けいそ）[鼷鼠](名)【動】はつかねずみ。

（けいそう）[輕鬆](名) めかたかるくして質あらきこと。「―土壤」。

（けいそう）[敬崇](名) うやまひあがむること。たふとぶこと。

（げいそう）[迎送](名) おくりむかへ。

（けいぞく）[繫屬](名) つながりつくこと。かゝりつくこと。又、つなぎつくること。かけつゞくること。

（けいぞく）[繼續](名) ㊀つぎつゞくること。つぐこと。㊁あとをうけつぐこと。あとにつゞくこと。――ちえきけん[繼續地役權](名)【法】地役權の一種、他人の土地に間斷なく繼續して或便益を受くべきもの。――はん[繼續犯](名)【法】犯罪たるべき所爲が、比較的長き時間を要する性質のもの、例へば、監禁罪の如きこれなり。――ひ[繼續費](名) 毎年繼續して支出する費用。

（けいそつ）[輕率](名) かるはずみ。

（けいたい）[携帶](名) たづさへ持つこと。

（けいたい）[形體](名) かたち。ありさま。(形態)。

（けいたい）[繼體](名) あとつぎ。よつぎ。「―の君」。

（けいだい）[境内](名) ㊀さかひうち。區域内。㊁神社又は佛閣などの構内。

（けいたう）[傾倒](名) ㊀かたむきたふるゝこと、又、かたむけたふすこと。㊁さかさにし内にあるものを盡く出すこと。㊂心をよせしたふこと。

（げいだう）[藝道](名) 藝術の法、技藝の道、わざのみち。わざ。げい。「ころみ。

（けいたん）[鷄蛋](名) にはとりのたまご。又、其

（けいちつ）[啓蟄](名) (蟄したるもの、啓(ひら)く義)二十四氣の一、春の節にして、陽曆三月五日にあたる。

（けいちやう）[敬聽](名) つゝしみてきくこと。

（けいちやう）[傾聽](名) 耳をかたむけてきくこと。心をかたむけてきくこと。

（けいぢやう）[刑場](名) しおきば。

（けいちやう-きん）[慶長金](名) 後陽成天皇の慶長年中に鑄造せられし大判・小判等の總稱、昔時の金貨幣中品位最も高きもの。

（けいちやう-ぎん）[慶長銀](名) 後陽成天皇の慶長年中に鑄造せられし豆銀・丁銀等の稱。

（けいちゆう）[傾注](名) かたむけそゝぐこと、又、かたむけ致すこと。

（けいちゆう）[閨中](名) ねやのうち。

（けいちゆう）[輕重](名) 輕きと重きと。

（けいちよう）[輕重](名) 「けいちゆう」に同じ。

(けい-ちようえき)【輕懲役】(名)【法】重罪の主刑の一、內地の懲役場に入れ定役に服せしむる刑罰、現行法にて六年以上八年以下の刑期なり。

(けい-づ)【系圖】(名) ㊀先祖より代々の血統を記したる一家の表。系譜。㊁物事の來歷。

げい-づくし【藝盡】(名) 身に得たる藝のかぎりをあらはすこと。

(けい-てい)【逕庭】(名) かけへだゝり。かけはなれ。

(けい-てい)【兄弟】(名) きやうだい。 ―かきにせめぐ【兄弟鬩墻】(名) 兄弟がうちわげんくわをなすにいふ。

(けい-てう)【輕佻】(名) かろ〲しきこと。けいはく。

(けい-てう)【京兆】(名) ㊀左京職及右京職の唐名。㊁轉じて、府知事の異稱。

(けい-てん)【經典】(名) ㊀變せざる道理。つねのみち。㊁違ふべからざる法式。さだまりたるのり。㊂聖人の述作にかゝる書。又、聖人の言を記したる書。

(けい-でん-き)【繼電器】(名)【理】一個の電磁石にして、電信又は電話の線電に通ずる弱き(距離遠きために)電流の作用により、受信部の電路を開閉し、以て受信機を動かす用をなすもの。

けい-と【毛絲】(名) 毛を絲によりたるもの、用ひて種々の編物をつくる。

(けい-と)【計都】(名) 計都星の略言。

(けい-ど)【塋土】(名) はかば。

(けい-ど)【經度】(名)【地】地球上一定の地點より東又は西に向って測りたる角距離、即ち經線により測る距離、赤道に於ける地球の圓周を三百六十度に分つ、明治十八年米國「ワシントン」府に開きたる萬國子午線會議にて、「イギリス」國「グリニッチ」の司天臺を通過する線を基點とするとなれり、西に測

るを西經といひ、東に測るを東經といふ。

(けい-とう)【惠投】(名) 他より物を惠まれたること。

(けい-とう)【系統】(名) ㊀次第順序を追ひ、つゞきつながりて統一してあること。すぢ。みち。㊁一の原理又は法則の下に、個々の事物の間に存する一般の關係を順序を立て、列ぬること。

(けいとう-てき)【系統的】(形) 系統あるさまにいふ語。 ―はっせい【系統的發生】(名) 單純なる原始の狀態より、順序を追ひて次第に複雜なる狀態に進化すること。

(けい-とう)【鷄頭】(名)【植】莧科に屬する草、莖は互生して長き尖頭を有す、夏秋の交、赤色黃色若しくは白色の花を開く、花序は鷄冠狀なり、觀賞用として栽培し、又、葉は食用に供せらる。 ―げ【鷄頭花】(名) 前條に同じ。

(けい-どく)【煢獨】(名) ひとりもの。

(けいと-せい)【計都星】(名) 九曜の一、其神の像は忿怒の相を具へ兩手に日月を捧げ青龍に乘る。

(けい-にく)【鷄肉】(名) にはとりの肉。

(けい-にん)【繼任】(名) 任務をうけつぐこと。

(げい-にん)【藝人】(名) 遊藝を以て渡世する人。即ち、俳優・落語家などの類。

(げい-のう)【藝能】(名) 身に得たる藝。又、藝に長じたる才。

(けい-ば)【競馬】(名) 乘りたる馬を驅(カ)けて、其に遲速を爭ひ勝敗を競ふこと。くらべうま。うまかけ。

(けい-はい)【輕輩】(名) ㊀身分低きもの。㊁特に、足輕のともがら。

(けい-はう)【警報】(名) ㊀警戒すべき由を告ぐる報知。㊁風雨などの來るを豫(アラカジ)め示すこと。

(けい-はう)【輕砲】(名) 口徑十二珊以下の火砲の稱、重砲の對。

(けい-ばう)【閨房】(名) 「けいもん」(閨門)に同じ。

(けい-はく)【輕薄】(名) ㊀思慮のあさきこと。うはすべり。「―なる考へ」。㊁篤實ならざること。親切ならざること。「―極まる人」。㊂おせじ。

(けい-はく)【敬白】(名) 敬ひて申すこと。

(けい-ばく)【繫縛】(名) ほだし。なはめ。

(けいはち-かぜ)【警八風】(名) 密淫賣の取締を嚴重にすること。警視廳令第八號を以て布告せられしによりいふ。(東京の俚語)。

(けい-はつ)【啓發】(名) 知識をひらくこと。迷ひをとくこと。

(けい-ばつ)【刑罰】(名) ㊀【法】國家が正義に反し社會に害惡をなすものに對して加ふる懲報、國家が有罪の確定判決を經たるものに加ふる苦痛。主刑と附加刑とあり。㊁おとがめ。ばつ。「天の―」。 ―けん【刑罰權】(名)【法】國家の主權が犯罪者に對して刑罰を加ふる一作用。 ―はふ【刑罰法】(名)【法】刑法に同じ。

(けい-はふ)【刑法】(名)【法】刑事に係(カカ)はる法律、即ち、犯罪及刑罰に關する國家の規定。

(けい-ばん)【罫版】(名) 紙に罫(ケ)を印するための版木。

(けい-ひ)【經費】(名) 經營に要する費用。つひえ。

(けい-ひ)【輕肥】(名) かろき美衣を著て肥えふとりたる馬にのること。轉じて、ぜいたくなる生活をなすにいふ語。

(けい-び)【輕微】(名) すこし。わづか。輕少。(微小)。

(けい-び)【警備】(名) 豫(アラカジ)め警戒すること。豫め防備すること。 ―かん【警備艦】(名) 警備のためにそなへてある軍艦。 ―たい【警備隊】(名) 要地警備のために屯在する軍隊、現時對馬に置かる。

(けい-びき)【罫引】(名) 罫を引くこと、又、其用具。

(けい-ひち)【警蹕】(名) 次條に同じ。

(けい-ひつ)【警蹕】(名) 主上又は貴顯の出入し給ふ時、聲をかけ先排して、人を警(イマシ)むること、其掛聲は下を向きて、或は「をゝ」或は「しゝ」或は「をし」或は「をし〱」などといふ。

(けい-びやく)【啓白】(名) 言上すること。

(けい-びん)【警敏】(名) 才智するどきこと。さときこと。

(けい-ふ)【輕浮】(名) 心のかろ〲しくうはだつこと。親切の情に乏(トボ)しきこと。

(けい-ふ)【系譜】(名) けいづ。

(けい-ふ)【繼父】(名) 自己の母の夫にして自己の實父・養父にあらざるもの。まゝちゝ。

(けい-ふ)【荊婦】(名) 自分の妻の謙稱。

(けい-ふ)【繼夫】(名) のちぞひの夫。

(けい-ぶ)【輕侮】(名) かろんじあなどること。

(けい-ぶ)【警部】(名) 判任官の警察官。 ―ちやう【警部長】(名) 警務長の前稱。

(けい-ふう)【輕風】(名) かるく吹く風。

(けい-ふく)【敬服】(名) 感じて服從すること。

(けい-ふく)【景福】(名) おほいなるさいはひ。

(けい-ふく)【慶福】(名) よろこび。さいはひ。

(けい-ふく)【敬復】(名) つゝしみて返事すること。

(けい-ぶつ)【景物】(名) ㊀時々のながめ。をり〱の景色。㊁賣る品物に添へて顧客に與ふる品物。㊂主なるものに添へて與ふるもの。

(けい-ふん)【輕粉】(名) 「はらや」に同じ。

(けい-ふん)【塋墳】(名) はか。つか。

(けい-ぶん)【奎文】(名) (奎は二十八宿の一にして文章の事を掌るといふ支那の傳說に出づ)學問文物の盛にいふ語。「―大に興る」。

(げい-へい)【迎聘】(名) 禮物を送りて呼びむかふること。

(けい-へう)【輕剽】(名) かろ〲しきこと。又、か

ろ〲しくてあらきこと。

(けい-へき)【刑辟】(名) つみ。とが。おしおき。

(けい-べつ)【輕蔑】(名) あなどりてないがしろにすること。さげしみ。あなどり。

(けい-べん)【輕便】(名) てがる。「―御料理」。 ―てつだう【輕便鐵道】(名) 通常のものより軌道又は列車の規模小なる鐵道。

(けい-ぼ)【繼母】(名) 父の妻にして、實母又は養母にあらざるもの。まゝはゝ。

(けい-ぼ)【景慕】(名) あふぎしたふこと。

(けい-ぼ)【傾慕】(名) 心をよせしたふこと。

(けい-ぼ)【敬慕】(名) うやまひしたふこと。

(けいほ-きよく)【警保局】(名) 內務大臣の統轄に屬し、其意思を受けて行政警察・高等警察・圖書出版及著作權に關する事項を扱ふ內務省の一局。

(けい-ま)【桂馬】(名) ㊀將棋の駒の名、縱の目を斜に前の右又は左へ一罫だけ、飛び進むことを得るもの、なりては金將と同一のはたらきをなす。㊁圍碁にて、一つの石より一間又は二間隔て一罫ずらせて石を打つこと、一間なるを小桂馬といひ、二間なるを大桂馬といふ。

(けい-みやく)【經脈】(名) みち。すぢ。

(けい-む)【警務】(名) 警察上の事務。 ―ちやう【警務長】(名) 北海道及各府縣(東京府を除く)の事務官、警務の執行に關し、長官又は知事の命を受け、警視・警部及巡査を指揮監督するもの。

(けい-めい)【鷄鳴】(名) ㊀曉に鷄の鳴くこと。㊁昔時の丑の時、今の午前二時。

(けい-めい)【啓明】(名) よあけの明星。あけのみやうじやう。

†(けい-めい)【經營】(名) 「けいえい」の訛。

(けい-めい)【敬命】(名) 謹み敬ふこと。

(けい-めい)【刑名】(名) ㊀【法】刑罰の名稱、死刑・徒刑・流刑・懲役・禁獄・禁錮・拘留・科料又は剝奪公權・停止公權・監視・罰金・沒收これなり。㊁名義と實際と相背かざるやう、法律を以て嚴重にとりしまること。「―の學」。

(げい-めい)【藝名】(名) 藝人などが藝道上にて、本名の外に附くる名。

(けい-めう)【輕妙】(名) かろらかにして巧なること。圓滑にして妙なること。「文章―」。

げ-いも【毛薯】(名)【植】かしゆう芋。

(けい-もう)【啓蒙】(名) 蒙昧なるものを啓發すること。兒童に教訓すること。

(けい-もん)【閨門】(名) ㊀ねや。ふしど。㊁轉じて、一家內の男女の品行。「―修まらず」。

(けい-やく)【契約】(名) ㊀ちぎり。やくそく。約定。㊁【法】法律上の效果を生ずることを目的とする二人以上の意思の合致の稱、一方がこれが申込をなし相手方がこれを承諾するによりて成立す、贈與・賣買・交換・貸借・請負・雇傭・委任・寄託等はすべて契約なり。 ―くわんけい【契約關係】(名) 契約によりて當事者間に生じたる權利義務の關係。 ―しよ【契約書】(名) 契約の證明のため當事者間に於て作成する書面。 ―せつ【契約說】(名) 國家及法律は人民の契約によりて成るといふ說、此說によれば、人民の君主を弑する權は君主が人民を罰する權と對立すといひ、又は人民は各自主權の一部として支配せるものにして、他人に支配せらるゝものにあらずといふ如き、暴慢なる論結を生ず。

(けい-ゆ)【經由】(名) へゆくこと。とほること。

(けい-よ)【刑餘】(名) 嘗(カツ)て刑罰をうけたること。「―の人」。

(けい-よ)【惠與】(名) めぐみたまはること。

(けい-よう)【形容】(名) ㊀すがた。かたち。ていさ

い。ありさま。形狀。㊀物事の形狀をかたどりていひあらはすこと。——し[形容詞](名)【文法】物事の形狀を示す語、これに「しき」の活用と「しゝき」の活用とあり、前者にては「く・し・き・けれ」と活用し、後者にては「しく・し・しき・しけれ」と活用す。

(けいよく[啓沃](名) 啓より智をひらくこと。さとして迷をとくこと。

(けいら[警邏](名) みまはりて非常をいましむること。又、其人。

(けいら[輕羅](名) うすき綢布。うすもの。

(けいらく[經絡](名) ㊀すぢみち。㊁體内の筋肉のみち。

(けいらく[京洛](名) みやこ。

(けいらん[鷄卵](名) にはとりのたまご。

(けいり[警吏](名) 警察官。

(けいり[經理](名) ㊀をさめとゝのふること。㊁會計及給與に關する事務の處理。——きよく[經理局](名) 陸軍省及海軍省の一局、當該大臣の管理に屬する行政上の會計及給與の事務を扱(アツカ)ふ所。

(けいりう[繫留](名) つなぎとむること。

(けいりう[稽留](名) とゞまること。とゞこほること、

(けいりく[刑戮](名) 刑罰に處せらるゝこと。

(けいりやく[計略](名) はかりごと。

(けいりん[經綸](名) 國家ををさめとゝのふること。

(けいりん[鷄林](名) 朝鮮國の異稱。

(けいりん[桂林](名) 文士のなかま。——のいつし[桂林一枝](名) 文士のなかまの一人。

(げいりん[藝林](名) 藝道者なかま。文學者社會。

(けいるゐ[係累](名) わづらひ。かゝはり。ほだし。(繫累)。

(けいれい[敬禮](名) 敬意を表する禮。

(けいれい[刑例](名) 刑罰に關する規定。

(けいれき[經歷](名) へきたりたること。へめぐること、又、其すぢみち又は狀態。

(げいれふ[鯨獵](名) 鯨を捕ふること。

(けいれん[痙攣](名) 筋肉の引きつること。

けいろ[毛色](名) ㊀毛の色。㊁やうす。「——のかはった奴」。

(けいろ[徑路](名) すぢ。みち。

(けいろく[鷄肋](名) (魏の曹操の故事に出づ) にはとりの肋骨をねぶれば一種の味ありて、何となく捨てがたき心地せらるゝが如く、さほど役に立つにはあらねど捨てがたき物事にいふ語。

(けいわく[熒惑](名) 火星の一名。

(けいゐ[經緯](名) ㊀たてとぬきと。㊁をさめとゝのふること。「天下を——す」。㊂經線と緯線と。又、經度と緯度と。——ぎ[經緯儀=Theodolite](名) 天體又は地物の方位角及仰角を測るに用ふる一種の器械。直立せる軸によりて水平に廻轉する板あり、これに二つの支柱ありて望遠鏡の水平軸を支ふ、支柱の一つに目盛したる垂直なる圓板附着し、廻轉板の下に目盛ある水平板あり、水平板によりて方位角を知り、垂直板によりて仰角を知る。

(けいゐき[塋域](名) はかば。むしよ。

(けいゑい[警衞](名) いましめ守ること。けいご。

(けいゑん[閨怨](名) 婦人が其夫若しくは情人にすてられ又はこれと訣(ワカ)れて、ねやのさびしきをうらみかこつこと。

(けいゑん[敬遠](名) 敬ひて近づきけがさざるやうにすること。又、おもてむきは敬ふやうの態度を取りて、實際は親しくせざるやうにすること。

(げいゑん[藝苑](名) 「げいりん」(藝林)に同じ。

けう[希有](名) ㊀まれに有ること。㊁珍しく不思議なること。

十けう[孝](名) 「かう」に同じ。

十けう[興](名) 「きよう」に同じ。

(けう[嬌](名) たをやかなること。あだめきたること。

(けう[橇](名) かんじき。そり。

(けう[僑](名) わびずまひ。かりずまひ。

(けう[驕](名) おごりたかぶること。

(けう[梟](名) ㊀【動】ふくろ。㊁ごくもん。さらしくび。㊂たけきもの。すぐれたるもの。

(げう[驍](名) たけきこと。すこやかなること。又、たけきもの。すこやかなるもの。「天下の——なり」。

(けうあ[嬌娃](名) なまめきてうつくしきこと。又、其女。美人。

(げうあ[曉鴉](名) よあけになくからす。

(けうあく[梟惡](名) 惡徒のかしら。又、すぐれたるわるもの。

(けういく[教育](名) ㊀誘ひて善德にすゝますること。敎へて知識を啓發せしむること。をしへそだつること。㊁【敎】未だ成熟せざる人を個人として又は國家社會の一員として、完全なる生活をなす準備をなさしむるを目的とし、比較的成熟せる人が、これに對して諸種の材料及方法によりて、或時期の間繼續してなす行動。——か[敎育家](名) 敎育の事業にあたる人。——がく[敎育學](名)【敎】人心の作用現象を說明する心理學を基礎とし、倫理學又は社會學等を參酌して、敎育に關する諸般の事を研究する學。

(けういくそうかん[教育總監](名) 敎育總監部の長官、陸軍大將若しくは中將を以てこれに親補せられ、天皇に直隸す。——そうかんぶ[敎育總監部](名) 陸軍全般の敎育の齊一進步を規畫する所、步・騎・砲・工・輜重の各兵種の兵監部を置く。

(けうか[嬌歌](名) なまめきたるうた。

(けうかい[敎誡](名) をしへいましめ。

(げうかう[僥倖](名) ㊀さいはひをもとむること、しあはせをねがふこと。㊁おもひがけぬしあはせ。こぼれざいはひ。

(けうがふ[校合](名) 讀み合せて調(シラ)ぶること。照し合せて正すこと。——ずり[校合刷](名) 校合のための印刷。

(けうぎ[教義](名) 宗教の旨義。をしへのむね。

(げうき[曉起](名) あさおき。はやおき。

(けうき[澆季](名) ㊀一般の道德信仰の腐敗したること。世上の風俗人情の浮薄となりたること。世のすゑ。㊁末の世。まつせ。

(げうき[驍騎](名) つよき騎兵。

(けうきよ[僑居](名) かりずまひ。たびずまひ。

(けうくわ[教化](名) みちびきて智をひらき善にすゝますること。をしへみちびくこと。をしへ。

(けうくわ[教科](名) 教授する科目。——しよ[教科書](名) 學校にて教科に用ふる書物。

(けうくわい[教會](名) ㊀宗教上の集會又は團體。㊁信徒の集會し又は說教などする場合。

(けうくわい[教誨](名) をしへさとすこと。をしへ。——し[教誨師](名) 監獄にて、定時に囚徒に對し勸善の說敎をなす人。

(けうぐわいべつでん[教外別傳](名)【佛】「けうげべつでん」に同じ。

(げうくわう[曉光](名) ㊀夜のあけむとする光。㊁暗晦なりし物事のあらはれそむる狀態。

(けうくわん[教官](名) 教授の職務にある官吏。

(けうくわん[叫喚](名) をめきさけぶこと。——ぢごく[叫喚地獄](名)【佛】八熱地獄の第四、罪業深き者獄卒の苛責にあひ、常に苦痛に堪へずして叫喚すといふ。

(けうくん[教訓](名) 教へさとすこと、意見を加ふること。

けうげ[毛受](名) 月代(サカヤキ)を剃(ソ)る時、剃りたる毛を受くるために持つ板。(撥毛板)。

(けうげ[教化](名) 「けうくわ」に同じ。

(けうげき[矯激](名) 強ひて普通と異なる擧動をなすこと。又、わざと正直なるさまを裝ふこと。

(けうげべつでん[教外別傳](名)【佛】經論にあらはれたる文字言說の敎の外に、釋迦牟尼が以心傳心にて、別に深遠の奧義を傳へしといふこと。又、其深遠の奧義。(禪宗の宗旨にいふ)。

(けうけん[教權](名) ㊀教授上の威嚴。㊁宗敎上の權力。㊂證權。

(けうご[嬌語](名) なまめきたることば。

(げうご[曉悟](名) さとること。

(けうこう[嬌喉](名) うるはしくつや多きよき音聲の出づるのど。——をろうす[弄嬌喉] うるはしきよき音聲を出して歌ふ。

(けうさ[教唆](名) ㊀いざなひ煽動すること。そそのかし。㊁【法】他人をして犯罪行爲をなす故意を生ぜしめんとすゝめみちびくこと。——ざい[敎唆罪](名)【法】他人を敎唆して一定の犯罪を構成せしめたる犯罪。

(けうざい[教材](名) 教授するに要する諸種の材料。

(けうざい[絞罪](名) 「かうざい」に同じ。

(けうし[教師](名) ㊀學術又は技藝を敎授する人。㊁宗敎の旨を說きて傳道する人。せんけうし。

(けうし[喬梓](名) 父子の尊卑。又、父子。

(けうし[驕侈](名) おごりたかぶること。ほしいまゝ。わがまゝ。

(けうし[教旨](名) をしへのむね。

(けうしつ[教室](名) 「けうぢやう」に同じ。

(けうしふ[教習](名) をしへならはすこと。

(けうしや[驕奢](名) おごり。ぜいたく。

(けうしゆ[梟首](名) 斷罪に處したる人の首を木に架けさらすこと。又、其首。さらしくび。獄門。

(けうしゆ[教主](名) 宗敎を創始せし人。をしへのぬし。「三界の——」。(宗祖)。

(けうじゆ[教授](名) ㊀學術又は技藝などを敎へ授くること。㊁官立の高等又は專門の學校にて生徒を敎授する職名。

(けうしよ[教書](名) 諸侯の發する命令書。又、大統領の發する諭告書。

(けうしよく[教職](名) 生徒に敎授する職務。又、衆人を敎導する職務。

十けうしよでん[校書殿](名) 古昔、禁中に累代の御書籍を藏(ヲサ)め置かれし處。ふみどの。

けうす[梟]（せしすするすれせよ）(他、さ變) 首を獄門にかく。さらす。

(けうせい[矯正](名) ためなほすこと。——じゆつ[矯正術](名) (身體成育の不正を矯正する術の義)徒手體操の稱。

(げうせい[曉星](名) よあけの空に、まばらに見ゆる星。

(けうせう[嬌笑](名) なまめきたるわらひ。あいきやうあるわらひ。

(けうそ[翹楚](名) 衆に抽(ヌキ)でたること。拔群なること。又、其もの。

(けうそく[教則](名) 教授に關しての規則。

(けうたい[嬌態](名) なまめきこぶるさま。

(けうだう[教導](名) ㊀敎へ導くこと。㊁善を勸め惡をいましむること。——しよく[敎導職](名) 神官又は僧侶などの人を敎へ導くことを職とする人。——だん[敎導團](名) 一時陸軍省の

管理に屬し、下士官を養成せし所。

(げうだつ)[曉達](名) 奥義まできはめさとりてあるヿ。

(げうち)[曉智](名) 物事にさとき智能。

(けうぢやう)[教場](名) 學校などにて教授をなす室。

(げうつう)[曉通](名) 其物事にあかるく通じてあるヿ。

(けうてい)[轎丁](名) かごかき。こしかき。

(けうてい)[教程](名) をしへさづくる程度。又、をしへさづくるのり。

(けうてん)[教典](名) 宗教上の經文又は法式。

(げうてん)[曉天](名) よあけのそら。——のほし[曉天星](名) よあけのそらの星の如くに、稀なる物事にいふ語。

けうと[氣疎](名) けうときヿ。

(けうと)[教徒](名) 或宗教を信奉するともがら。

(けうとう)[教頭](名) 學校の教師の首座。又、其地位に在る人。

けうと・し[氣疎](形、二) ㊀うとまし。きらはし。不愉快なり。㊁おそろし。こはし。恐るべし。

(けうは)[教派](名) 宗教の分派。をしへのわかれ。

(けうばう)[教坊](名) 遊藝ををしふる所。

(けうばう)[翹望](名) 首をのばしてのぞみまつヿ。

(けうばく)[蕎麥](名) そば。又、そばきり。

(けうはふ)[教法](名) をしへ。宗教。宗旨。

(けうはん)[教範](名) 教ふるのり。

(けうふう)[矯風](名) 惡風俗をためなほすヿ。

(けうぶしやう)[教部省](名) 明治五年に設置せられたる神道佛教に關する事務を管理せし官廳、十年一月に廢し事務を內務省に屬せらる。

(けうべん)[教鞭](名) 昔時、教師の生徒を訓へいましむるために持ちしむち。——をとる[執教鞭] 生徒を教授するにいふ。教師となりて居るにいふ。

(けうぼく)[梟木](名) 首を梟する木。獄門臺。

(けうぼく)[喬木](名) 【植】高く直立する木、松・杉・樅(モミ)等の如きこれなり。——たい[喬木帶](名) 【植】高山植物分布上の一帶、山麓帶の次にして、もみ・つが等の喬木繁茂して森林をなす所。

(けうまん)[驕慢](名) ほこるヿ。たかぶるヿ。

卄けうみやう[交名](名) 古昔、上奏などに人の名を連ねて記しヿ。

(けうむ)[教務](名) 教授上の事務。又、宗門上の事務。

(げうめい)[驍名](名) 武勇のきこえ。

(けうもん)[教門](名) しゆうし。しゆうは。

卄けうやう[孝養](名) 親によくつかふるヿ。

(けうやう)[教養](名) をしへそだつるヿ。

(けうやう)[驕陽](名) 夏の日光。

(けうやく)[交易](名) 「かうえき」に同じ。

(けうゆ)[教諭](名) ㊀をしへさとすヿ。をしへ、さとし。㊁中學程度の學校などの教師の職名。

(けうゆう)[梟雄](名) ㊀すぐれたるもの。をさ。㊁すぐれてたけきもの。

(げうゆう)[驍勇](名) たけきヿ。つよきヿ。又、其兵士。

(けうよ)[轎輿](名) 人をのせて舁(カ)き行く小さき輿。あげこし。かご。

(けうよく)[矯抑](名) ためおさふるヿ。しひておさへつくるヿ。

けうら[毛裏](名) 裏に毛あるもの。「—のシャツ」。

卄けうら[淸](名) きよら。淸潔。

(けうり)[教理](名) 宗教上の道理又は理論。

(けうりやう)[橋梁](名) 交通路を連絡するために、河川又は谿谷に跨りて架設する構造物。かけわたしたるはし。かけはし。はし。

(けうりん)[喬林](名) ㊀喬木の森林。㊁稚子又は苗木より成りたる森。

(けうゐん)[教員](名) 教師たる人。——めんきよじやう[教員免許狀](名) 中學校・師範學校・高等女學校又は小學校の教員たる資格あるを證明したる免狀、前者は文部大臣これを下附し、後者は府縣知事これを下附す。

卄けおさる[氣壓](自、ら下二) いきほひにおさる。壓倒せらる。

卄けおそろ・し[氣恐](形、二) いきほひおそろし。

卄けおと・る[氣劣](自、ら四) おせいまけす。おとる。

けおり[毛織](名) ㊀鳥獸などの毛を以て織りたるもの。けおりもの。——もの[毛織物](名) 前條(一)に同じ。

けが[怪我](名) ㊀きず。かけ。瑕瑾。㊁過失によりてうけたる負傷。㊂あやまち。そさう。——にん[怪我人](名) 傷を受けたる人。負傷者。

(げかい)[下界](名) 天上に對し、この世界の稱。

(げかう)[下向](名) ㊀高き方より低き方へ下るヿ。㊁都より田舍へ向て行くヿ。

卄けが・し[穢](形、二) 「けがらはし」の古言。

けが・す[穢](他、さ四) ㊀きたなくす。よごす。㊁はづかしむ。㊂醜辱にす。「心を—」。

けがは[毛皮](名) 未だ毛を去らぬ獸類の皮。

けがはり[毛更](名) 毛のはえかはるヿ。

けかへし[蹴返](名) ㊀蹴返すヿ。㊁相撲(スマフ)の手、四つに組み敵の足を蹴(ケ)りてこれを倒すヿ。

けかへ・す[蹴返](他、さ四) ㊀蹴りて

もとの地位へ戾す。㊁他人に蹴られたるに報いて蹴る。㊂度々足にて蹴る。㊃けかへしを試む。

けがみ[罫紙](名) 罫を引きたる紙。けいがみ。

けがらは・し[穢](形、二) ㊀潔白ならず。不淨なり。きたなし。㊁さげしむべし。きらはし。にくむべし。

卄けがらひ[穢](名) 「けがれ」の延言。

卄けがら・ふ[穢](自、は四) 「けがる」の延言。

けが・る[穢](自、ら下二) ㊀きよらかならず。きたなくなる。よごる。(不潔)。㊁はづかしめを受く。あなどりに會ふ。㊂醜辱となる。「心—」。

けがれ[穢](名) ㊀けがるゝヿ。(不潔、不淨)。㊁はづかしめ。あなどり。㊂醜辱となるヿ。

(げかん)[下疳](名) 「かんさう(疳瘡)」に同じ。

卄げき[外記](名) 古昔、太政官に附屬せし大外記・少外記の稱、詔勅及上奏文を起草し、又、其事に關する記錄を掌りたるもの、今の書記官の類。

(げき)[劇](名) ㊀俳優が戲曲中の人に扮裝して、一定の脚色(シク)に關する所作をなすヿ。えんげき。しばゐ。㊁はげしきヿ。はなはだしきヿ。㊂いそがしきヿ。わづらはしきヿ。

(げき)[隙](名) ㊀すき。あひだ。㊁なかたがひ。あらそひ。不和。㊂乘ずべき機會。をり。「—を伺ふ」。

(げき)[檄](名) ㊀支那の古昔、一尺二寸の木簡に事由を書して人を呼び出すに用ひしもの。㊁人を催促し若しくは勸めなどするために飛ばす書狀。げきぶん。「—を作りて、罪を天下に鳴らす」。

(げき)[激](名) ㊀はげしきヿ。たけきヿ。㊁言論の直に過ぐるヿ。㊂ことさらに世俗にたがふヿ。

(げき)[逆](名) 「ぎやく」に同じ。

(げき)[下機](名) 「げこん(下根)」に同じ。

(げきかい)[劇界](名) 演劇の範圍。又、俳優の社會。

(げきかう)[激昂](名) 激して意氣のたかぶりふるふヿ。

(げきく)[隙駒](名) 「くげき(隙駒)」に同じ。

(げきけん)[擊劍](名) 刀劍を持ちて己れを防禦し敵を刺擊するヿ。竹刀(シナヒ)又は木劍を以て互に打ちあふヿ。けんじゆつ。——か[擊劍家](名) けんじゆつつかひ。

(げきご)[激語](名) はらたち紛(マギ)れにいひ過ぎたることば。過度にはげしきことば。

(げきこん)[屐痕](名) 下駄の歯のあと。

(げきさい)[擊碎](名) うちくだくヿ。

(げきざい)[劇劑](名) 「げきやく(劇藥)」に同じ。

(げきさう)[鬩爭](名) あらそひ。うちわもめ。

(げきさつ)[擊殺](名) うちころすヿ。

(げきし)[劇詩=Drama](名) 演劇にうたふ韻文。

(げきしふ)[逆襲](名) 「ぎやくしふ」に同じ。

(げきしやう)[激獎](名) はげましすゝむるヿ。

(げきしやう)[激賞](名) 極めてほめたゝふるヿ。

(げきじやう)[擊攘](名) 敵を擊ちておひはらふヿ。うちはらひ。

(げきじやう)[擊壤](名) 支那の上代に行はれし一種の遊戲、つちくれを投げて行ひしもの。

(げきしゆ)[鷁首](名) 古昔、水中の龍を恐れしむる意にて、鷁といふ水鳥の首を刻(キザ)みて船のへさきに附けしもの。鷁の首をつけたる船。

(げきしよく)[劇職](名) いそがしき職務。

(げきしん)[逆臣](名) 「ぎやくしん」に同じ。

(げきしん)[激震](名) はげしくふるふ地震。「劇震」。

(げきじん)[劇甚](名) はげしきヿ。甚しきヿ。

げき・す[激](自、さ變) ㊀はげしくなる。

あらくなる。㊁衝突す。つきあたる。㊂逆(サカ)ひてはげしくおこる。

げき・す[檄](自、さ變) 檄文を送る。

(げきせき)[闃寂](名) ひっそりしてさびしきヿ。

(げきせつ)[激切](名) はげしくせまるヿ。

(げきぜつ)[鴂舌](名) (もずの囀(サヘヅリ)の如きの義) 外國人の言語をいやしめていふ語。

(げきせん)[劇戰](名) はげしきたゝかひ。(激戰)。

(げきぜん)[闃然](名、副) ひっそりとしてしづかなるさまにいふ語。

(げきだう)[劇道](名) 演劇のみち。

(げきたく)[擊柝](名) ㊀拍子木(ヒヤウシギ)を打ち叩くヿ。㊁拍子木を打ち叩きて夜を警むる人。よまはり。

(げきたい)[擊退](名) 敵をうちしりぞくるヿ。

(げきたん)[激湍](名) 溪川(タニガハ)などの水の岩石にあたりなどして流るゝ早瀨。

(げきだん)[劇談](名) ㊀演劇に關するはなし。㊁はげしき談判。

(げきぢやう)[劇場](名) 劇を演ずる場所。しばゐ。

(げきちん)[擊沈](名) 彈丸を放ちて船艦をうちしづむるヿ。

(げきつう)[劇通](名) 演劇に關する事柄によく通じたるヿ。又、其人。

(げきつう)[劇痛](名) はげしくいたむヿ。

(げきと)[逆徒](名) 反逆をなしたるともがら。むほんにん。むほんのなかま。

(げきど)[激怒](名) はげしく怒るヿ。

(げきどう)[激動](名) はげしくふるひうごくヿ。

げきは[毛際](名) 毛の生(ハ)えぎは。

(げきは)[擊破](名) うちやぶるヿ。

(げきはつ)[激發](名) はげしくおこりたつヿ。又、激しておこらするヿ。

⌒げき-はん［劇繁］(名) いそがしきこと。多忙なること。

⌒げき-ひやう［劇評］(名) 演劇に關する事柄の批評。

⌒げき-ぶん［檄文］(名) 「げき［檄］」に同じ。

⌒げき-へん［劇變］(名) 急劇なる變化。(激變)。

⌒げき-む［劇務］(名) 多忙なる事務。

⌒げき-めつ［擊滅］(名) うちほろぼすこと。

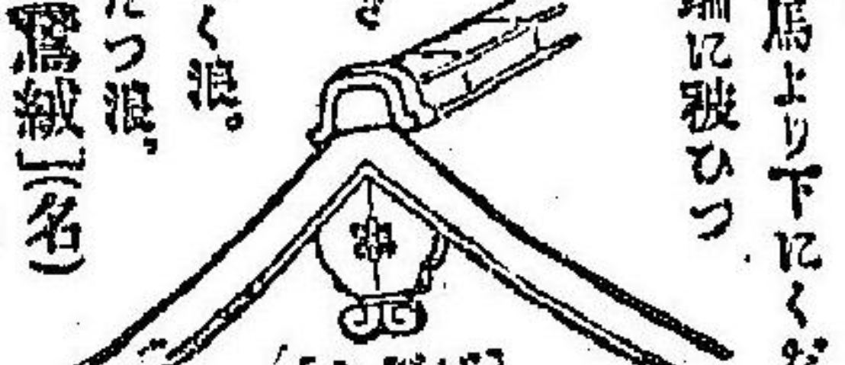
艹げき-やう［顯形］(名) 神佛の形を現はしたまふこと。

⌒げき-やう［下行］(名) たまもの。

⌒げき-やく［劇藥］(名) ㊀使用少しく度に過ぐれば忽ち身體に異常の結果ある藥劑。はげしきくすり。㊁爆發する火藥。——わうじやう［劇藥往生］(名) 劇藥を服用して死ぬること。

⌒げ-ぎよ［下御］(名) 貴人などの車馬より下にくだること。

⌒げ-ぎよ［懸魚］(名) 棟木(ムナギ)の端に被ひつくるもの、魚の尾の形に刻(キザ)む、水の縁によりて火災を防ぐ意なりといふ。



［げぎよ］

艹げ-きよ-し(くしきけれ)［淸］(形、二) 「きよし」に同じ。

⌒げき-らう［逆浪］(名) さかまく浪。

⌒げき-らう［激浪］(名) あらだつ浪。

げきらず-ビロード［毛不切天鵞絨］(名) 織りたるまゝにて毛を切らざる「ビロード」。

げき-らひ［氣嫌］(名) 何となく好まぬこと。

⌒げき-らん［劇亂］(名) はげしくるひ亂るゝこと。

⌒げき-りよ［逆旅］(名) たび。やどや。はたごや。

⌒げき-りん［逆鱗］(名) (韓非子に出づ)天子の御いきどほり。ふんど。(震怒)。

け-ぎれ［毛切］(名) 毛にこすられて、けがすること。

⌒げき-れい［激勵］(名) はげましいさますること。

又はげみいさむこと。

⌒げき-れつ［激烈］(名) 極めてはげしきこと。

⌒げき-ろん［激論］(名) はげしきいひあひ。

⌒げ-く［希求］(名) ねがひもとむること。——げん［希求言］(名) 【文法】願望・命令の意を表はす語。

⌒げ-くう［外宮］(名) 伊勢國豐受(トヨケ)大神宮を申し奉る宮。內宮の對。

艹げ-ぐくり［下括］(名) 指貫(サシヌキ)のすそをしめくくること。

げ-ぐつ［毛沓］(名) 獸類の毛皮を以て造りたるくつ、古昔、將軍の着用せしもの。つらぬき。

艹げくにものまうすまちぎみ［中食國政大夫］(名) 上古、執政の大臣を稱したる語、をすくにと訓ずべきを誤りたるもの。

艹げ-ぐるま［毛車］(名) いとげのくるま。

⌒げ-くわ［外科］(名) 身體の外部の創傷又は皮膚病などの類を治療する科。內科の對。——いしや［外科醫者］(名) 外科のれうぢを專門とする醫者。

⌒げ-くわん［下官］(名) 身分卑(ヒク)き官吏。

艹げ-くわん［外官］(名) 地方官の稱。內官又は京官の對。

艹げ-くわん［解官］(名) 官を免ぜしこと。「ー停任」。

⌒げ-くわん［下浣］(名) 月の末十日の間即ち二十一日以後の稱。げじゆん。

⌒げ-くわん［下官］(代) 上官に對し、官吏の自稱。

⌒げ-げ［下下］(名) ㊀しも〴〵。した〴〵。㊁最も劣(オト)れること。最下等。

⌒げ-げつ［下血］(名) 血のくだること。

艹げ-げれ［心］(名) 「こころ」の訛(古昔、甲斐の方言)。

⌒げ-げん(名) 不思議にて合點(ガテン)の行かぬ容貌。「ーな顏をして怪しむ」。

⌒け-げん［化現］(名) 神佛などの姿を變へて此世に現はるゝこと。

⌒げ-げん［下弦］(名) 「かげん」に同じ。

艹け-ご［華筥］(名) 佛事に花を盛るに用ふる器、はなざら。

艹け-ご［餉子］(名) (笥籠の義)古昔、食物を盛(モ)るに用ひし器。

艹け-ご［家子］(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人。けんぞく。

⌒げ-こ［下戶］(名) 酒量の少なき人。

⌒げ-ご［解悟］(名) 【佛】心の無性無住なるをさとること。

⌒げ-こく［下國］(名) ㊀都より地方へ赴くこと。㊁格のひくき國。上國の對。

艹げ-こく［外國］(名) 都のありし國の外。

⌒げ-こく［下刻］(名) 昔時、時刻を三分したるものゝ一。上刻又は中刻の對。「子のー」。

⌒げ-こく-じやう［下尅上］(名) しものものが上のものをたしなむること。

艹け-ごと［食事］(名) しよくじ。

艹け-ごと［褻事］(名) なれてある事。つねの事。

け-こみ［蹴込］(名) ㊀家の入口にある沓脫(クツヌギ)の下。㊁人力車などに乘りて、足を休(ヤス)め置く所。

け-こ-む(まみむめ)［蹴込］(他、ま四) 蹴りて內へ入る。

け-ごも［毛薦］(名) 毛にて織りたるこも。

け-ころばし［蹴轉］(名) ㊀けころばすこと。㊁天明の末頃まで、江戸の下谷淺草邊にありし一種の遊女。

け-ころば-す(さしすせ)［蹴轉］(他、さ四) 蹴(ケ)りて顛倒せしむ。けたふす。(婆)。

け-ごろも［毛衣］(名) 毛皮にてつくりたる衣服。

艹け-ごろも［褻衣］(名) つねに着用する衣服。

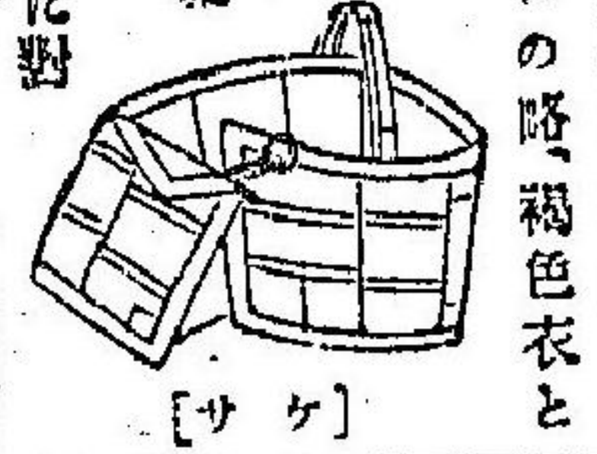
⌒け-ごん［華嚴］(名) 【佛】(い)萬行を修習して德果を莊嚴にすること。(ろ)「けごんしゆう」の略言。——しゆう［華嚴宗］(名) 【佛】佛敎の一派、專ら華嚴經を所依とし[illegible]

天平七年唐僧道璿といふもの來りてこれを傳へたり。

⌒げ-こん［下根］(名) 拙劣なる根性。

げ-さ［今朝］(名) (此朝の轉)今日のあさ。こんてう。

ケサ［袈裟］(名) (梵語 Kasaya の略、褐色衣と譯す)僧侶の服、貪・瞋・痴の三毒を捨離したる表章として、肩にかけて衣の上を被ふもの、木蘭色に染むるを正しとすといふ。(無垢衣、功德衣、忍辱鎧)。



［ケサ］

⌒げ-ざ［下座］(名) ㊀昔時、貴人に對して行ひし禮、座を下りてうづくまりしこと。㊁芝居の舞臺の右に當たる所。「ーの樂」。

艹げ-さい［潔齋］(名) 身をきよめてものいみすること。げつさい。

艹げ-さい［解齋］(名) ものいみをふること。

⌒げ-ざい［下劑］(名) 便通をよくするために服用する藥劑。くだしぐすり。

艹げ-さう［假粧］(名) 「けしやう」に同じ。「頭洗ひ、ーして」。

⌒げ-さう［懸想］(名) 想(オモ)ひを懸(カ)くること。戀(コ)ひ慕(シタ)ふこと。れんぼ。

げさう-ぶみ［懸想文］(名) ㊀懸想の意をのべつゞりて贈る艶書。㊁昔時、懸想文賣の賣りあるきし、艶紙の中に白米二三粒入れありしもの、男女ものく良緣を得る緣起として買ひたり。——うり［懸想文賣］(名) 昔時、京都にて、毎年正月元日より十五日迄の間に、祇園の犬神人(ツルメソ)といふもの、赤き布の衣に高く褶を着け編笠(アミガサ)をかぶり覆面して、懸想文を賣りあるきしもの。

⌒げ-さく［下策］(名) 最もよからぬはかりごと。

艹げ-さく［外戚］(名) 母方の親戚。ぐわいせき。

⌒げ-さく［戲作］(名) ㊀たはむれの著作。㊁なぐさみの讀物。稗史。小說。——しや［戲作者］(名) 戲作をする人。小說家。

艹げざ-げざ(名、副) さやかなるさまにいふ語。

艹げ-ざやか(名) さやかに著(シルシ)しきさまにいふ語。

艹げ-ざや-ぐ(がぎぐげ)(自、か四) げざやかにてあり。あざやかにてあり。きはだつ。

⌒げ-さん［卦算］(名) ㊀けいさん。(壓尺)。㊁「くさずり」の一名。

⌒げ-ざん［下山］(名) 山を下ること。登山の對。

艹げ-ざん［見參］(名) ㊀(見在參仕の義)古昔、節會又は宴會などに伺候したる人の名を記し、其主人たる人の御前へ差出せし名刺。㊁「げんざん」に同じ。

げ-し［芥子］(名) ㊀【植】罌粟科に屬する草、莖は平滑、葉は白綠色にして莖を抱きて互生す、花冠は四瓣にして下垂す、種子は食用に供せられ、乳液より阿片を製す。(罌粟)。㊁模樣の名、芥子玉の略言。

艹げ-し［家司］(名) 家事一切の取扱をなすもの。家のつかさ。今日の家令に同じ。

げ-し［消］(名) 消すこと。又、消したるもの。

げ-し(しくしきけれ)［怪］(形、二) ㊀異なり。常ならず。㊁惡しからず。異樣ならず。——からず［不怪］㊀(げしくあらずの義)不當なり。理にあるまじ。——からぬ［不怪］(げしくあらぬの義)前條に同じ。

艹げ-し［下司］(名) しもづかさ。

⌒げ-し［夏至］(名) 【天】二十四氣の一、太陽が夏至點に達し北半球の晝最も長く夜最も短き時、即ち毎年六月廿一日頃なり、此時北寒帶にては太陽地下に沒することなく、南寒帶にては太陽地上に出づることなし。冬至の對。

げし-あざみ［罌粟薊］(名) 【植】罌粟科に屬する草、花瓣は黃色なり、葉・莖及果實等に刺あり、觀賞用として栽培せらる。(苦菜)。

げし-いん［消印］(名) 消すしるしに押(オ)す印、郵便局にて郵便切手の通用したる證據に押す印の類。

げしか-く(けくくれけよ)［嗾］(他、か下二) 煽動して敵に向はす。おだてゝ仕向く。

⌒げしかける［嗾］(他) 「げしかく」の訛。

げしかり(らりりれれ)［怪有］(自、ら變) ㊀當然なり。道理なり。㊁げしくあり。異樣なり。不思議なり。

⌒げ-しき［景色］(名) 山水風物などのおもむき、けいしよく。けいい。ふうけい。(風景)。

⌒げ-しき［氣色］(名) ㊀みえ。きざし。けはひ。ありさま。樣子。㊁顏のさま。心のおもむき。——だつ(たちつてて)［氣色立］(自、た四) ㊀心に思ふ樣子顏面に現はる。㊁樣子外にあらはる。けしき見ゆ。㊂活氣生ず。いきほひあらはる。——づく(かきくけけ)［氣色付］(自、か四) 前條に同じ。——ばかり［氣色許］(名、副) ㊀わづかばかり。すこしばかり。㊁外面の勢のみにて、實際のこれに副(ソ)はざるさまにいふ語。——ば-む(まみむめめ)［氣色食］(自、ま四) 「けしきだつ」に同じ。

艹げし-ぐくり［芥子括］(名) 古昔、行はれし袖口の括(クク)り方、俠者風流の仕立方なりといふ。

げし-くち［消口］(名) 火事など消したる方の口、——をとる 消防組などが、他の消防組に先んじて其消口の火を消し止めたるにいふ、其處に其組の名を記したる札を立つるを例とす。

げし-ずみ［消炭］(名) ㊀薪の火を消してこしらへたる炭、急に火を起す時などに用ふ。㊁吉原の遊廓にて、風呂の番などをする男。

⌒げし-せん［夏至線］(名) 【天】北回歸線の一名、「くわいきせん」(回歸線)の條を見よ。

げし-だま［芥子玉］(名) ㊀けし粒の如き細かき模樣を置きたるもの、多く手拭などの染模樣にあ

り。㊁臍の異稱。

げし-つぶ[芥子粒]（名）㊀けしの實の小さき粒。㊁最も小さきものをたとへいふ語。

げし-つぼ[消壺]（名）ひけしつぼ。

（**げし-てん**[夏至點]（名）【天】黄道上赤道より最も北の點、太陽の此點に至れるとき夏至なり。

げし-なる（らりるるれれ）[御擬成]（自、ら四）ぎよしんなる。いぬる。（就寢）。「訛」。

（**げし-にん**[解死人]（名）「げしゆにん」（下手人）の訛。

げし-にんぎやう（ギヤウ）[芥子人形]（名）最も小さき人形。まめにんぎやう。「―の加賀紋」。

卄**げし-の-か**[芥子香]（名）僧侶の調伏の祈禱にたく護摩（ゴマ）のけしやきのにほひ。

げし-ばうず（バウズ）[芥子坊主]（名）子供の頭の周圍を剃り、頂上のみに毛を殘したるもの。すゞしろ。

（**げし-やう**（ヤウ）[化生]（名）㊀形を變へて現はるゝこと。㊁へんげ。ばけもの。妖怪。―**のもの**[化生物]（名）前條（二）に同じ。

（**げし-やう**（シヤウ）[假粧]（名）㊀紅又は白粉をもて顏を粧ひ飾ること。けさう。けはひ。みじまひ。（化粧、粉飾）。㊁繡又は模樣などを麗（ウル）はしく彩色すること。―**いくさ**[假粧軍]（名）おもてむきばかりのいくさ。かさうのいくさ。―**かがみ**[假粧鏡]（名）みじまひに使用する大いなる鏡。―**がは**[假粧革]（名）うつくしき繡模樣を施せる革。―**がみ**[假粧紙]（名）相撲（スマフ）にて、力士の用ひて身體を淸むる切紙、通常土俵（ドヘウ）の柱につるしおく。―**キセル**[假粧烟管]（名）うつくしき繡模樣を施せる烟管。―**だうぐ**（ダウグ）[假粧道具]（名）みじまひに使用する道具。―**だち**[假粧立]（名）相撲にて、力士の一方が相手を促して取組まんと立上ること、相手のこれに應じて立たざるときにいふ。―**だな**[假粧棚]（名）四十八棚の一、棚の板の數四枚ふくろどつきにして、化粧の品などを置くに適したるもの。―**べや**[假粧部屋]（名）假粧するための部屋。―**まはし**（マハシ）[假粧廻]（名）力士が土俵入などに用ふるまはし、前面に前垂樣のものありて、これにいろいろのうるはしき繡模樣などを施す。―**もとゆひ**（モトユヒ）[假粧元結]（名）「ゑもとゆひ」の一名。―**ゆひ**（ユヒ）[假粧結]（名）德川時代に、奥女中の長かもじの上に結びしもとゆひ。

卄**げし-やき**[芥子燒]（名）護摩を焚（タ）くに、芥子を用ふるより、護摩を焚くことにいひし語。「―すること」。

（**げし-やく**[掛錫]（名）僧侶が一定の場所に安住すること。

（**げし-やく**[外戚]（名）「ぐわいせき」に同じ。

げし-やく-ばら[外借腹]（名）本腹ならで、妾の生みたること。又、其生まれたる人。（庶生、庶流）。

（**げし-ゆく**[下宿]（名）㊀やどさがり。やどおり。㊁期限を定めて長く宿泊すること。㊂「げしゆくや」の略言。―**や**[下宿屋]（名）下宿の料を取りて、人を寄宿せしむるを業とする家。

げし-ゆす[毛繻子]（名）舶來の毛織物、繻子（シユス）より下品なるもの、滑（ナメ）らかにして光澤あり、衣服の襟又は袖口などに用ふ。

（**げし-ゆにん**[下手人]（名）自身に手を下して人を殺したるもの。

（**げし-ゆん**[下旬]（名）月の二十日より末日までの間の稱。（下浣）。

（**げし-よ**[下書]（名）したがき（公邊に奉る文書などにいふ）。

卄**げし-よう**[顯證]（名）明かなること。

（**げし-よう**[下乘]（名）㊀乘物より下ること。㊁乘打を禁ずること。げば。

げし-よく[下職]（名）㊀重立ちたる職業者の下に附きて働く者。したしよく。㊁下等なる職業。

げし-らみ[毛蝨]（名）【動】灰色又は灰白色なる蟲、細小にして扁形なり、陰部又は腋部の毛などに寄生す。

（**げし-ん**[化身]（名）【佛】神佛の形を變へて此世に生れ現はること。うまれかはり。「紫式部は、觀音の―なり」。（後身）。

卄**げ・す**（さしすすせせ）[着]（他、さ四）「きす」に同じ。

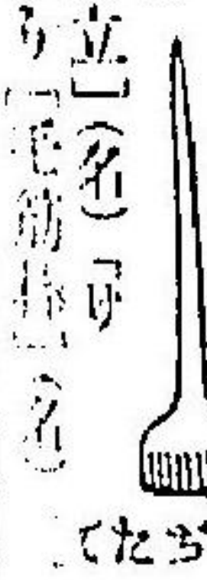
卄**げ・す**（さしすすせせ）[消]（他、さ四）（「きやす」の約言）㊀燃（モ）ゆるを止む。火を滅す。「火を―」。㊁除く。去る。「罪を―」。㊂形跡の見えぬやうにす。「字を―」。㊃なくす。ほろぼす。「噂を―」。

卄**げ-す**[下司]（名）卑（ヒ）しき官吏。したづかさ。

げ-す[下種]（名）身分卑しき者。又、根性（コンジヤウ）賤しき者。（下衆）。卄―**げす・し**（しくしくしきしけれ）[下種下種]（形、二）極めて下賤なり。げすばりてあり。―**こんじやう**（ジヤウ）[下種根性]（名）根性の甚だ卑賤なること。―**ばる**（らりるるれれ）[下種張]（自、ら四）いやしき心にてあり。下種根性なり。卄―**をみな**[下種女]（名）身分の賤しき女。―**をんな**[下種女]（名）㊀前條に同じ。㊁（根性のいやしき女の義）女をいやしめていふ語。

げ・す（せしするするすれせよ）[解]（他、さ變）㊀消滅す。けす。「罪を―」。㊁理解し得、會得（エトク）す。「其意味を―」。

げ-すぢ[毛筋]（名）㊀毛髮。㊁髮を梳（クシケヅ）りたる痕（アト）。くしあと。「―が立つ」。㊂極めて小さき物事にいふ語。「―ほどの事を、棒ほどにいふ」。（毫末、細末）㊃「げすぢぼう」の略言。―**たて**[毛筋立]（名）「げすぢぼう」に同じ。―**ぼう**[毛筋棒]（名）



[けすぢたて]

櫛の一種、髮の毛筋を正すに用ふるもの、柄細長くして、末端は鋭く尖（トガ）りたるもの。けすぢたて。

（**げ-すゐ**[下水]（名）物など洗ひたる汚水を流す溝。―**いた**[下水板]（名）下水の上にわたしおく板。―**だう**（ダウ）[下水道]（名）汚水又は雨水等を流通せしむる排水路。

（**げ-せつ**[下拙]（代）自分の謙稱。やつがれ。「ぼ。

げ-せわ[下世話]（名）しもざまのうはさ又はこと

（**げ-せん**[下賤]（名）身分の低きこと。いやしきこと。

（**げ-せん**[牙錢]（名）象牙にてこしらへたる小さき札。

卄**げ-そう**[顯證]（名）「げしよう」に同じ。

（**げ-そく**[華足]（名）机又は臺などの脚に花などの彫刻を施したるもの。くゐそく。

（**げ-そく**[下足]（名）㊀脫（ヌ）ぎたる履物（ハキモノ）。㊁脫ぎたる履物の番人。㊂脫ぎたる履物の番のために拂ふ金錢。―**ばん**[下足番]（名）下足の番人。―**れう**（リヨウ）[下足料]（名）下足番に拂ふ代。

げ-た[方]（名）四角形。

げ-た[桁]（名）㊀橋又は家などの外邊の柱の上に亙（ワタ）す材木。梁の對。㊁十露盤（ソロバン）の球を貫くための串（クシ）、又、其串を貫きたる横木、これに位取を記し、その上段なる一箇（便利のために二箇あるもあり）の珠を五とし、下段の五箇の珠の各を一として算用す。㊂轉じて、位取。「―のみこみが出來ぬ」。

げ-た[下駄]（名）材をくりぬき、齒を共儘造付にしたる履物。（上踏）。―**いん**[下駄印]（名）一つの材の中を凹（ボク）くして、恰も下駄の齒の如くにこしらへたる印。

（**げ-たい**[懈怠]（名）なまけること。おこたること。

（**げ-だい**[外題]（名）㊀書物の表紙に記する名目。內題の對。（外簽）。㊁標題。題號。「芝居の―」。

〔**げ-たう**（タウ）[毛唐]（名）「げたうじん」の略言。

（**げ-だう**（ダウ）[化導]（名）をしへみちびくこと。

（**げ-だう**（ダウ）[外道]（名）㊀【佛】佛敎以外の宗敎の稱。㊁眞理に乖（ソム）き妄惘に從ふこと。心外に法を求むること。㊂邪心あるもの。惡意ふかきもの。㊃（極めて醜惡なる男性の假面。

げ-たう-じん（タウ）[毛唐人]（名）（鬚の多きよりいふ）外國人を卑（イヤ）しめていふ語。

げ-た-うち（名）一種の遊戲、二枚の羽子板の如きものを持ち、先づ其一方を投げ、次に他の一方を投げて、それに當つるもの。

げ-だか・し（しくしくしきしけれ）[氣高]（形、一）品格高し。上品なり。「人品―」。

げ-たくり[蹴手繰]（名）相撲（スマフ）の手、敵の脚を蹴（ケ）ると同時に、敵の體を手繰（タグ）りて倒すこと。

〔**げた-けた**（名、副）笑ふさまにいふ語。

〔**げた-げた**（名、副）前條に同じ。

げ-だし[蹴出]（名）㊀けだすこと。㊁女の腰より足にかけて纏（マト）ふ布。こしまき。

げ-だし[蓋]（副）㊀推量するに。想像するに。おほかた。多分。㊁決定するところは。終極するところは。つまり。ひつきやう。卄―**くも**（副）前條に同じ。「―人のなかごと聞けるかも」。

げ-だ・す（さしすすせせ）[蹴出]（他、さ四）㊀蹴（ケ）りて出す。㊁會計などに、豫定よりも節減して其金高を取りのこす。

げ-たたま・し（しくしくしきしけれ）（形、二）あはただし。さわがし。

げた-だん[下駄段]（名）下駄を脫（ヌ）ぎおくために設けたる段。

げ-た・つ（てちつつてて）[蹴立]（他、た下二）㊀蹴（ケ）りて立つ。蹴りて起す。㊁荒々しくふむ。

（**げ-だつ**[解脫]（名）【佛】煩惱（ボンナウ）の緊縛を解きて三界の業苦を脫すること、迷を離れ道を悟りて自由自在となること。「―得道」。

げ-たで[毛蓼]（名）【植】たでの一種、いぬたでに似て、葉裏に白き毛あり、淡紅色の花を開く。

〔**げた-てる**[蹴立]（他）「けたつ」の訛。

げた-ばこ[下駄箱]（名）下駄を入れおく箱。

げた-ばん[下駄番]（名）下駄の番人。

げた-ばん[下駄判]（名）「げたいん」に同じ。

げ-たふし（タフシ）[蹴倒]（名）けたふすこと。

げ-たふ・す（さしすすせせ）（タフス）[蹴倒]（他、さ四）㊀蹴（ケ）て倒す。㊁壓倒す。おしたふす。「大地にはたとけたふして」。

〔**げた-め**[下駄目]（名）（下駄の目は三つあるよりいふ）露助又は車夫の仲間にて、三の數の隱語。

げだ-もの[獸]（名）（毛之物の轉といふ）㊀全身に毛を被り、四足にて這（ハ）ひ歩く動物の總稱。獸類。㊁人をのゝしり呼ぶ稱。

げた-や[下駄屋]（名）下駄をつくり又は賣る人。又、其店。

げた-ゆき[桁行]（名）一棟の家の長さ。梁間の對。

（**げ-だん**[下段]（名）㊀下のだん。下のきだ。㊁劍術又は槍術などにて、手を低く下げて刀又は槍を構ふること、流派によりて其樣を異にす。

（**げ-ち**[結]（名）㊀むすび。をはり。㊁二人つがひになりて弓を射ること。「右の大殿の弓の―に」。㊂【佛】まどひ。わづらひ。煩惱（ボンナウ）。「―を斷ち成佛す」。

（**げ-ち**[闕]（名）㊀かけ。かけめ。㊁闕官。くゐち。㊂闕國。闕替にて、ための稱。

〔**げ-ち**[怪事]（名）㊀あやしきこと。不思議。㊁禍の來るべき緣起。凶惡の及ぶべき原因。「―がつく」。

〔**げ-ち**（名）㊀しわきこと。やぶさか。吝嗇。㊁いやしきこと。卑賤。㊂ひけふ。臆病。

(げ-ぢ[下知](名) いひつけ。さしづ。命令。指揮。

(げ-ぢ(名)【動】「げぢげぢ」の略言。

(けち-えん[血緣](名) 「けつえん」に同じ。

(けち-えん[結緣](名)【佛】佛道に緣を結ぶこと。

艹けち-えん[掲焉](名) あきらか。あらは。きはやか。「今少しーなるはかげに」。

げ-ぢか-し（くしきけれ）[氣近](形、二) ちかし。「げぢかく寄り給ふ」。

(げ-ぢがひ ガイ-ゲチ[蹴遊](名) あやまち。つまづき。失くじり。失敗。失策。「ーが起る」。

(げ-ぢき[下直](名) 價の安きこと。廉價。かうぢきの對。

(げ-ぢく[牙軸](名) 卷物又は幅物などの軸若しくは軸の左右の小口の象牙なるもの。ざうげのぢく。

⌒けち-くさ-し（くしきけれ）[吝嗇臭](形、二) 吝嗇なり。けちなり。

(けち-ぐわん[結願](名)【佛】願を掛けたる日數の果つること。

⌒けち-けち(名、副) けちなるさまにいふ語。

げぢ-げぢ[蚰蜒](名) ㊀【動】多く人家の床下などに見る小さき蟲、形狀はむかでに似て、前後脚等(ラ)しき環節に一對づゝの步脚を有す、巧に快行して食物を求む。㊁忌み嫌はるゝ人。㊂(非の字が「げぢげぢ」の形に似るよりいふ)非職官吏の稱。

艹げぢ-め[別目](名) ㊀區別。わかち。わいだめ。㊁しな。くらゐ。だん。

(けち-みやく[血脈](名) 「けつみやく」に同じ。

(げ-ぢやく[下着](名) 都より田舍などへ到着すること。

(げ-ぢよ[下女](名) みづしめ。はしため。ぢよちゆう。下婢。

げ-ちら-す（さしすせ）[蹴散](他、さ四) ㊀蹴(ケ)りて亂(ミ)し散らす。㊁敵を追ひ散らす。

⌒けちん-ばう ケチン-ボウ[吝嗇坊](名) 吝嗇なる人をあざけっていふ語。

(げつ[橛](名) 門のとびらを止むるために門の中央に打つ杭(クヒ)。

(けつ[闕](名) ㊀欠くること。たらぬこと。かけ。㊁支那の宮城の門外の左右にある兩個の臺、上に樓觀を設く。㊂轉じて、宮城の門。又、宮城。「ーを犯す」。

(けつ[穴](名) ㊀あな。「墓ー」。㊁鍼術にて、人體に鍼(ハリ)を打つべき箇所の稱。㊂尻。

(けつ[結](名) ㊀むすび。をはり。㊁をはりの句。けつく。

(けつ[決](名) ㊀さだまり。きまり。㊁けっしん。かくご。㊂わかれ。訣別。㊃ゆがけ。(弓懸)。㊄勇敢なること。果斷なること。㊅可否の決定。「ーを採る」。

艹け-つ（たちつつてて）[消](他、た四) ㊀消す。㊁けなす。「いかばかりなんてまつ人か宮をばけちらん」。

(げつ[月](名) つき。

(けつ-あつ[血壓](名) 血液の壓力、其差によりて血行生ず。

(けつ-い[決意](名) 選擇して決定したる意志。

(けつ-うん[血暈](名) ちぶるひ。

(げつ-えう ゲツ-ヨウ[月曜](名) 七曜の第二日、火曜日の前日。

(けつ-えき[血液](名) 動物の身體の內部に充滿して營養をつかさどる液、高等動物のは紅色の不透明體にして、血漿と血球とより成る。ちしほ。

艹けつ-えき[闕腋](名) けってき。わきあけ。

(けつ-えん[訣宴](名) わかれのさかもり。

(げつ-えん[月掩](名)【天】太陰が遊星又は恒星を蔽(オホ)ふこと。

(けつ-えん[結緣](名)【佛】佛門に入る緣を結ぶこと。けちえん。

(けつ-えん[血緣](名) ㊀血すぢ。㊁血すぢをひくもの。同族。

(けっ-か[結跏](名) 兩足を打違(ウチチガ)ひにしてあぐらかくこと。

(けっ-か[闕下](名) 宮門のもと。又、御殿のもと。

⌒げっ-か ゲツ-カ[月下](名) 月の光のさすところ。

(けっ-かい[結界](名)【佛】法力を以て界を結び、外道惡魔などを防禦して其中に入れずといふこと。

(けっ-かい[結改](名) 陰曆五月及九月の二十五日に、楊弓を射る人相集まりて、的中の勝負の競點をすること。

(けっ-かう ケツ-コウ[決行](名) 決定して行ふこと。實際に行ふこと。

(けっ-かう ケツ-コウ[血行](名) 體內に於ける血液の循環。——き[血行器](名) 心臟と血管との稱。

(けっ-かく[結核](名) 結核症の患部の硬(カタ)くなりてこり結ぼるゝこと。——きん[結核菌](名) 結核症を起す菌、「ドイツ」人「コッホ」の發見に係る、其傳播の媒介多きが中に、肺結核患者のはき出したる痰(タン)の中に含まれたるものが、痰の乾燥によりて空氣中に飛揚混交するによるを最とすといふ。——しやう ーシヨウ[結核症](名) 結核菌の寄生によりて起る疾患、人類死亡の一割半はこれによるといふ、呼吸器は結核菌の侵入に最も便なるが故に、此症の起るは肺を最とす、此症は感染すれども遺傳するものにあらず。

(げっ-かく-さ[月角差](名)【天】太陽の太陰に至る距離の遠近により其相互作用の異なるため、太陰の運動に起る變差、卽ち上弦の起る時刻は早く下弦の起る時刻は遲(オソ)れんとすること。

(げっ-か-ひよう-じん[月下氷人](名) 男女の緣をとりもつ神。むすぶのかみ。

(けつ-がふ ケツ-ゴウ[結合](名) 結び合ふこと。結び合はすこと。連結。同體。——たい[結合體](名) 個體が相連結して成りたる一體。

(げっ-か-らう-じん ゲッカ-ロウ-[月下老人](名) むすぶのかみ。

(けっ-かん[缺陷](名) かけ。不足。不備。

⌒げっ-かん ゲッ-カン[月刊](名) 月々刊行すること。

(けっ-き[蹶起](名) はね起くること。飛び立つこと。

(けっ-き[血氣](名) 激し易き盛んなる意氣。はやりごゝろ。客氣。——の-ゆう[血氣勇](名) たゞ血氣にまかせて勇みたつこと。

(けつ-ぎ[決議](名) 論議を決定すること、又、其決定したる條項。——あん[決議案](名) 議會にて、或事件に就きて議會の意思を表明するために、決議にかくる議案。

(げっ-き[月氣](名) 月の光のさすさま。

(けっ-きう[血球](名) 血液の一成分、赤血球と白血球とあり、前者は無核細胞にして圓盤狀なり、三千五百個を連ぬとも大さ一「インチ」に達せず、後者は前者より大にして核を有し、表面には數多の突起ありて恰も桑實の如く、「アミーバ」蟲の運動をなす特性を有す。

(げっ-きう[月球](名) 月の稱。

(げっ-きふ[月給](名) 月每に定めたる給料。月俸。——とり[月給取](名) 月給を取る人。つとめにん。

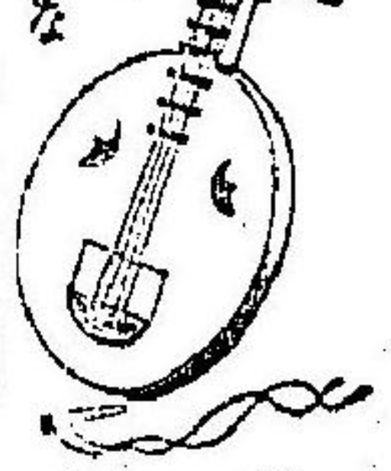
(げっ-きゆう-でん[月宮殿](名) 月の中にありといふみや。

(けっ-きよ[穴居](名) 穴の中のすまひ。開けぬ世に行はれしすまひ。あなずまひ。

(けっ-きよく[結局](名) をはり。つまり。はて。

(けっ-きん[闕勤](名) つとめを缺くこと。やすみて出勤せざること。

(げっ-きん[月琴](名) 支那より傳來の樂器、琵琶に似て小さく、胴は圓形にして扁(ヒラ)く、四絃十二柱なるもの、哀れなる淋(サビ)しき音を發す。(要琵琶)。



[げつきん]

(けっ-く[結句](名) 詩歌の終末の句。(落句、斷句)。

けっ-く[結句](副) ㊀とゞのつまりに。つひに。とう〳〵。㊁却て。むしろ。いっそ。

(けっ-くわ[結果](名) ㊀或原因が或所緣に備されて、發生若しくは到達したる狀態又は終極。なりあがり。はて。でき。㊁【倫】吾人が動作によりて來したる外物の變動。

(げっ-くわ[月華](名) ㊀つきのひかり。㊁げっけい。

(けっ-くわい[決潰](名) きれくづるゝこと。又、きりくづすこと。

(けっ-くわい[血塊](名) 血のかたまり。

(げっ-くわう ゲツ-コウ[月光](名) 月のひかり。

(けっ-くわく[闕畫](名) ㊀漢字の中の畫を省(ハブ)くこと。㊁天子其他貴き人の御名に當る字を書くとき、憚り諱(イ)みて其字の最終の畫を欠(カ)くこと、例へば、統を統と玄を玄と書くが如し。(名文)。

(けっ-くわん[血管](名) 心臟より出でゝ體內に分布せる血のかよふ脈管、動脈管と靜脈管とあり。

(けつ-げ[結夏](名)【佛】僧侶が、陰曆四月十五日より七月十五日まで卽ち一夏九旬の間、外遊せずして家に籠(コモ)り居ること。あんご。

げ-づけ[毛付](名) ㊀馬の毛色。㊁馬の毛色を帳面などに書き付くること。

(げっ-けい[月卿](名) 三位以上の人。公卿。

(げっ-けい[月桂](名) ㊀「つきのかつら」に同じ。㊁【植】「げつけいじゆ」の略言。——くわん[月桂冠](名) ㊀古代「ギリシア」にて月桂樹を「アポロー」神の靈樹とし、其枝頭を以て冠をつくり、賞讚の表章としての競技の優勝者などの頭に冠らせしもの。㊁轉じて、最も名譽ある地位の稱。「ーは遂に其手に歸せり」。——じゆ[月桂樹=Laurel](名)【植】樟科に屬する木、高さ三丈乃至五丈に達し、枝葉互生す、葉は長大にして尖頭を有し、披針狀をなし暗綠色なり、花は黃白色にして密聚せる繖狀花序をなし葉腋に生ず、實は卵形にして漿實に似る、葉實共に香料に供せらる。「ロウレル」。

(げっ-けい[月經](名) 生殖器の成熟せる婦人(十四歲乃至四十五歲許の婦人)の姙娠又は授乳期の外、子宮より出づる生理的定期性の血液、殆ど二十七八日目に反復し、四五日持續す、つきやく。つきのさはり。つきのめぐり。つきのもの。さはり。めぐり。げいすゐ。(經行、經水)。——へいし[月經閉止](名) 定期の月經が、疾病のためにとまりて出でざること。

(げつ-げき[穴隙](名) あな。すきま。——をきる[鑽穴隙](孟子に出づ)男女私(ヒソ)かに相通ずるにいふ。

(けつ-げつ[孑孑](名、副) 孤立するさま又は他と和合せざるさまにいふ語。

(けっ-こう[結構](名) ㊀結び構ふること、組み立つること。㊁かまへ。かたち。つくりかた。くみたて。「ー莊麗なり」。㊂よきこと。美(ビ)しきこと。すぐれたること。——じん[結構人](名) ㊀心がらのよき人。人のよき人。㊁愚直なる人を嘲りいふ語。

(けっ-こう-そ[血紅素](名) 血液の赤血球中に含有せる色素、赤血球の淡黃色なるはこれあるによる、一定量の酸素を含み極めて酸素と化合し易く又離れ易き性あり、生活上最も緊要なるもの。

(けっ-こく[缺刻](名) かけ。きざみ。

(けっ-こん[血痕](名) 血のあと。

(けっ-こん[結婚](名)【法】一男一女の間に於て、夫婦の關係を發生する法律行爲をなすこと。一男一女が婚姻を結ぶこと。

(げっ-とん［月痕］(名)　つきかげ。

(けっ-さい［潔齋］(名)　ものいみ。きよまはり。「精進―」。

(けっ-さう ウ―ソ［結裝］(名)　身ぢたくをなすこと。

(けっ-さう ウ―ソ［血相］(名)　かほのやうす。かほいろ。

(けっ-さく［傑作］(名)　詩歌文章其他製作物などの勝れてよく出來たるもの。(名作)。

(げっ-さく［月朔］(名)　ついたち。

(けっ-さん［決算］(名)　㊀勘定の仕上。㊁毎年度に於ける收支の總計算。―あん［決算案］(名)　未だ確定の手續を經ざる決算。―はうこく ウ―ホ［決算報告］(名)　年度の總決算の報告。

(けっ-し［血嗣］(名)　血統のあとつぎ。

(けっ-し［楔子］(名)　㊀くさび。㊁事件の所緣。

(けっ-し［決死］(名)　死をいとはずしてすゝむこと。死を念頭にかけずして爲すこと。―たい［決死隊］(名)　死を賭(ト)して敵に突撃する部隊。

(けつ-し［闕字］(名)　㊀語句文章中にて、天皇又は貴人の御名などの上に、敬意を表して一字若しくは二字のあきを設くること。㊁語句文章の中にて、あるべき筈の字の挿入してなきこと。

(けつ-し［訣辭］(名)　いとまごひのことば。

けっ-して［決］(副)　どうしても。かならず。きっと。「―無い」。(必然、必定)。

(けっ-しふ ウ―シ［結集］(名)　【佛】散亂せる法文を結び集めて編輯すること。

(けっ-しや［結社］(名)　多人數が共同の目的を遂せんがために、相合して團體を結ぶこと。「―の自由」。

(げっ-しや［月謝］(名)　月ごとに報酬として差出す謝禮の金。特に、生徒の毎月出す授業料。

(けっ-しやう コウ―シ［血漿］(名)　血液の成分をなす液質、血清と纖維素とより成る、稍〻濃厚透明にして、凝結の際は血清のみ遊離す。

(けっ-しやう ヨウ―シ［結晶］(名)　鑛物などが天然一定の法則に從ひ面・稜及隅角を有する形體を成すこと。四個以上の平面を以て圍まれたる形體をなすこと。―すゐ［結晶水］(名)　【化】結晶體の必ず含有する水、硫酸銅は五分子の水を、炭酸「ナトリウム」は十分子の水を含むが如し。―ソーダ［結晶曹達］(名)　【化】炭酸曹達の異稱。―たい［結晶體］(名)　結晶して一定の形體をなすもの。

(けっ-しゆつ［傑出］(名)　すぐれたること。ぬけいでたること。

(けっ-しよ［闕所］(名)　㊀領主が罪によりて亡び、次の領主の未だ定まらざる莊園。㊁德川時代の附加刑、追放以上の刑に處せられたるもの、領地又は財産を官に沒收せしこと。もっしゆ。(官沒、籍沒)

けっ-しよ［血書］(名)　自分の身體の血を以て文字を書くこと。又、其書きたる文書。

(けつ-じよ［缺如］(名)　かけてあること。(闕如)。

けつ-じよう［結繩］(名)　支那の太古に、人々物事を記憶し又は互の意思を通ずるために、繩を結びてこれがしるしとなしゝこと。「―の政」。

(けっ-しよう-てん［決勝點］(名)　勝負のきまる箇所。

(けっ-しよく［血色］(名)　㊀血の色。㊁皮膚のいろつや。「―わるし」。㊂あかき色。「―の羅裙」。

(けっ-しよく［血食］(名)　子孫相續ぎて、先祖の祭の絶えざること。

(げっ-しよく［月蝕］(名)　【天】滿月の時に、地球が太陰と太陽との間に來り太陽の光を遮(サヘギ)るによりて、太陰の一部若しくは全部が、地球上より見えざること。白道若し黄道に一致せば、滿月の際は必ず月蝕起るべきに、其然らざるは、白道の黄道に對して傾くが故にして、太陰が其交點に來るとき恰も滿月となる場合にのみ起る。ぐわっそく。

(げっ-しよく［月色］(名)　月の色。月の光。つきかげ。

(けっ-しよく-そ［血色素］(名)　血紅素に同じ。

(げっ-しるゐ［齧齒類］(名)　【動】哺乳類の一目、草食する小獸にして、門齒は鑿狀をなし物をかじる性あり、好みて群棲し、生産力極めて大なり、うさぎ・ねずみ等これに屬す。

(けっ-しん［決心］(名)　心をきめ定むること。念慮を一途に定めて動かざること。かくご。

(けっ-しん［結親］(名)　緣組すること。親族となること。

げっ-す せしすするすれせよ［決］(自、さ變)　㊀堤防きれて水流れ出づ。㊁さだまる。きまる。㊂判斷つく。㊃決別す。わかる。㊄さけひらく。やぶれわかる。

けっ-す せしすするすれせよ［決］(他、さ變)　㊀堤防を破りて水を流し出す。㊁齒にて嚙(カ)み斷(タ)つ。㊂判斷をつく。㊃きむ、さだむ。㊄さきひらく。やぶりわかつ。

けっ-す せしすするすれせよ［結］(自、さ變)　大便通ぜず。ひけつす。べんぴす。

(けっ-すゐ［決水］(名)　㊀堤防又は水閘の決潰して水の氾濫したること。又、其水。㊁堤防又は水閘を決潰して、水を氾濫せしめたること。又、其水。

(けっ-せい［血清］(名)　凝結せる血液より析出せる帶黄色にして清澄なる一種の液。―ちれう リョウ［血清治療］(名)　傳染病者の身體に、該傳染病の不感受性となりたる動物の血清を注射して、病毒を中和無害となすこと。―れうはふ リョウハウ［血清療法］(名)　前條に同じ。

(けつ-ぜい［血税］(名)　國民の兵役義務。

(げっ-せい-きより［月星距離］(名)　【天】太陰と其軌道の近く見ゆる大なる恒星又は遊星との距離。

(けっ-せき［血石＝Hæmatite］(名)　【鑛】方六面形の結晶をなす鑛物、通常塊狀をなす。

(けっ-せき［闕席］(名)　出づべき筈の處へ出でぬこと。―さいばん［闕席裁判］(名)　【法】「けつせきはんけつ」に同じ。―はんけつ［闕席判決］(名)　【法】(い)民事訴訟上にては、原告又は被告が口頭辯論の當日裁判廷に出頭せざる場合に、出頭せる相手方の申立によりてなす判決、原告が闕席の場合には、訴訟却下の言渡をなし、被告が闕席の場合には、原告の陳述を被告の自白と看做し、その正當なるときは被告敗訴の言渡をなし、然らざるときは訴訟却下の言渡をなす、闕席したるものは、該判決送達より十四日以內に故障の申立をなすことを得、其申立適法なるときは、裁判所は原被兩造を呼び出して、新に口頭辯論を開くものとす。(ろ)刑事訴訟上にては、呼出を受けたる被告人又は代人(罰金以下にあたるべき事件)の裁判廷に出頭せざる場合に、檢事の請求に基きて下す判決、該判決は、檢事其他訴訟關係人の請求により送達をなす、判決送達を受けたる被告人は、三日間に故障の申立をなすことを得、其申立適法なるときは、裁判所は更に辯理を開き裁判をなす。

(げっ-せき［月石＝Moon-stone］(名)　長石の一種、透明にして氷の如き色をなす。

(げっ-せき［月夕］(名)　月かげ明かなる夕。

(けっ-せん［血戰］(名)　血まびれになりてたゝかふこと。力のたけを盡くしてたゝかふこと。

(けっ-せん［決戰］(名)　決死のたゝかひ。いよいよ勝敗を定むるたゝかひ。

(けっ-せん［血腺］(名)　【生】血液の新成又は崩解に關することをつかさどる腺、例へば脾・髓等の如し。

(けっせん-とうへう ウ―ヒ［決選投票］(名)　選擧の投票に、適應の投票數を得たるもののなき場合か、若しくは何れを當選者と認め難き投票數の二名以上ある場合かに、其中の高點者二名以上に就きて、當選者を決定するために行ふ投票。

(けっ-そく［結束］(名)　㊀むすびつかぬること。たばぬること。㊁衣服又は甲冑を身に着け仕度すること。

(けつ-ぞく［血族］(名)　同始祖より出で血統のつゞきたる親族。血統を分けたるもの。―けっこん［血族結婚］(名)　近き血族の男女が結婚すること。―こっか［血族國家］(名)　血統上の關係を以て社會の秩序を立て、これによりて組織したる國家、即ち上代に於ける我國の如きこれなり。―しん［血族親］(名)　六親等內の血族。―だんたい［血族團體］(名)　血族のみを以て組成したる團體。

(けっ-そん［缺損］(名)　かけ。そんじ。不足。

(けっ-たい［結隊］(名)　隊を結ぶこと。

(けっ-たい［結體］(名)　結合したる體形。

(けっ-たう ウ―ト［結黨］(名)　㊀黨派を結ぶこと。仲間をつくること。―しき［結黨式］(名)　結黨に就きて擧行する儀式。

(けっ-たく［結託］(名)　互に心を通じて助けあふこと。くみあふこと。

(けっ-たふ ッ―ト［決答］(名)　しかときまりたる返答。

(けっ-たるい(形)　「かひだるし」の轉訛。

(けっ-たん［血痰］(名)　はき出したる痰の中に血の混じてあること。

(けつ-だん［決斷］(名)　㊀意志の向ふ所を定むること。㊁物事の善惡邪正を裁判すること。―しよ［決斷所］(名)　建武中興の時、訴訟の裁判をつかさどりし役所。「雜訴―」。

(げっ-たん［月旦］(名)　㊀月のついたち。㊁月旦評の略言。―ひやう ヒョウ［月旦評］(名)　後漢のとき、汝南に毎月品題を定めて郷黨の人物を批評せし故事に出づ、人物の批評。しなさだめ。

(けっ-ちやう コウ―チ［結腸］(名)　大腸の大部の稱、右の下腹より起り胃の下部に至るもの、水分の外吸收せず。

(けっ-ぢやう ョウ―ヂ［決定］(名)　「けってい」に同じ。「往生―」。

(けっ-ちやく［決着］(名)　きまりのつくこと。(落着)。

(げっ-ちゆう［月中］(名)　㊀月のなか。㊁月影のさす所。

(けつ-ぢよ［闕除］(名)　かきのぞくこと。

(けっ-てい［闕廷］(名)　きんり。きゆうちゆう。

(けっ-てい［挈提］(名)　㊀ひっさぐること。さげもつこと。携帶すること。㊁かたはらより力をそふること。たすけあふこと。

(けっ-てい［決定］(名)　㊀意志の向ふ所をさだむること。選擇して執る所をさだむること。㊁物事の定まること。きまり。さだまり。㊂【法】裁判所がなす判決以外の裁判、訴訟手續に關する裁判。

(けっ-てい［結締］(名)　むすびつくること。むすびしむること。―そしき［結締組織］(名)　普(アマ)ネく體內に存して各部の機關の位置を締着する組織、例へば皮膚と筋肉とを締着する白色網狀の組織の如きこれなり。

廿げっ-てき［闕腋］(名)　「けつてき」の轉、わきあけ。

(けつ-てん［蹶顛］(名)　つまづきたふるゝこと。

(けっ-てん［缺點］(名)　㊀足らざる所、不十分なる所。㊁指摘すべき事、そしり又は責むべき所。㊂あやまち。やりそこなひ。

(けっ-てん［缺典］(名)　規定の不十分なる所。(闕典)

〔ケット〔Blanket〕（名）「ブランケット」の略言。

〔ケットー（名）「ケット」の訛。

（げっ-とう〔血統〕（名）血すぢ。（血脈）。

（げっ-とう〔決闘〕（名）雙方の間に解け難き遺恨又は決し難き爭論等の高じたるがため、互に相約して何れかの死するまで闘ひて勝負を決すると。はたしあひ。——ざい〔決闘罪〕（名）〔法〕決闘を行ふ當事者又は立會人若しくは其場所を貸與したるもの等の罪。——じやう〔決闘状〕（名）決闘申込の書状。はたしじやう。

（げっ-ぱい〔蹶敗〕（名）あやまり。やりそこなひ。

（げっ-ぱい〔結界〕（名）「けっかい」の訛。

（げつ-ばう〔缺望〕（名）不滿足に思ふと。

（げっ-ぱう〔月報〕（名）月々の報告を月々に刊行するもの。

（げっ-ぱく〔潔白〕（名）㊀よごれ無きと。潔（イサギヨ）きと。まっしろ。純白。㊁不正なる慾望なきと。貪慾ならざると。廉潔。（淸廉、淸潔）。㊂うしろぐらさきなきと。罪惡なきと。やましからざると。

（げっ-ぱく〔月迫〕（名）月の末の差迫りたる頃。特に、十二月の末。（月末）。

（げっ-ぱつ〔結髪〕（名）㊀髪を結（ユ）ふと。又、結びたる髪。㊁元服すると。「—事に從ふ」。

（げつ-ぱふ〔缺乏〕（名）不足すると。乏しきと。

（げっ-ぱん〔血判〕（名）神文又は誓文などの記名の下に、信實を表するため、指の血を出して捺すと。

（げつ-び〔結尾〕（名）をはり。すゑ。結末。「文の—」。

（げつ-び〔月尾〕（名）月のをはり。

（げっ-ぴやう〔月評〕（名）月々の出來事の批評。

（げっ-ぷ〔月賦〕（名）月々に割りあて、拂ふ金子。

〔げっ-ぷ（名）おくび。

（げつ-ぶつ〔傑物〕（名）すぐれ出でたるもの。

（げつ-ぶん〔闕文〕（名）脱落したる文句。脱落ある文書。（脱文）。

（げつ-ぶん〔結文〕（名）文章の結末、又、其文句。

（げっ-ぺう〔月表〕（名）月々につくる表。

（げっ-ぺき〔潔癖〕（名）すこしの不潔をもいとふ性質。きれいなる事を好むくせ。きれいずき。

（げつ-べつ〔訣別〕（名）わかれ。いとまごひ。

（げつ-べつ〔月鼈〕（名）（月とすっぽんとの義）彼此の優劣相違の甚しきにいふ語。

（げつ-べん〔血便〕（名）表面に血液の附着して出る糞便。

（げっ-ぽう〔月俸〕（名）㊀月給。㊁月々の賄料。

（げっ-ぽん〔闕本〕（名）巻數の不足してある書物。

（げつ-まく〔結膜〕（名）「きやうまく」（鞏膜）に同じ。

（げつ-まつ〔結末〕（名）くゝり。をはり。

（げつ-まつ〔月末〕（名）月の末。つきずゑ。

げつ-まづき〔蹶躓〕（名）けつまづくと。

げつ-まづ・く〔蹶躓〕（自、か四）㊀物に蹴（ケ）あたりてつまづく。㊁中途にて失敗す。しくじる。

〔げ-づまり〔毛詰〕（名）狆（チン）の毛の短きと。

（げつ-みやく〔血脈〕（名）㊀體内の血液のかよふ脈管。㊁ちつゞき。ちすぢ。血統。㊂師統。

げ-づめ〔蹴爪〕（名）雉子又は雞などの脛の後にある爪。かけづめ。（距）。

（げつ-めい〔月明〕（名）月影のあきらかなると。又、月のあかるき影。

（げつ-めい〔決明〕（名）〔植〕「えびすぐさ」の一名。

（げつ-や〔月夜〕（名）つきよ。

（げつ-やく〔結約〕（名）約束を結ぶと。ちぎると。やくそく。やくぢやう。

〔げつ-よ〔月餘〕（名）一月あまり。

（げつ-よ〔子餘〕（名）㊀はした。のこり。㊁殘黨。餘類。

（げつ-らい〔月來〕（副）つきごろ。

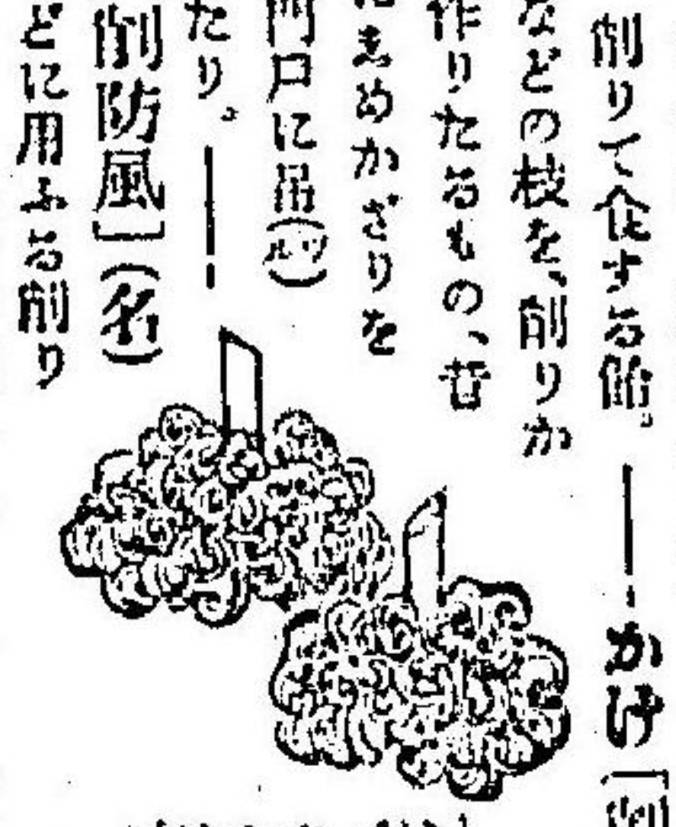
（げつ-らう〔月老〕（名）月下老人の略言。むすぶのかみ。

（げつ-らく〔缺落〕（名）かけておつると。かけて不足すると。

（げつ-り〔血痢〕（名）「りびやう」に同じ。

（げつ-り〔結縭〕（名）えんぐみ。けっこん。

げづり〔削〕（名）けづると。又、けづる方。——あめ〔削飴〕（名）削りて食する飴。——かけ〔削掛〕（名）柳・楡などの枝を、削りかけて茅花の如く作りたるもの、昔時、正月十五日にまめかざりを除きたるあとの門戸に吊（ツル）して呪（マジナヒ）としたり。——ばうふう〔削防風〕（名）さしみのつまなどに用ふる削りたる防風。┼——ばな〔削花〕（名）「けづりかけ」に同じ。┼——ひ〔削氷〕（名）削りたる氷。——もち〔削餅〕（名）かきもち（越後地方の方言）。



〔けづりかけ〕

げづり-と・る〔削取〕（他、ら四）㊀削りて容積を減す。㊁取りて減（ヘ）す。そぐ。

（げつ-りやく〔闕略〕（名）缺きて加へざると。はぶくと。

（げつ-りん〔血淋〕（名）血の混じて出づる淋病。

（げつ-りん〔月輪〕（名）月影の稱。形圓くして輪狀に見ゆるよりいへる名。

げづ・る〔削〕（他、ら四）㊀少々づゝ省（ハブ）きて取る。薄く殺（ソ）ぎて取る。へぐ。そぐ。㊁減少す。へす。かく。㊂拂ふ。除く。「領地を—」。（削）。

げづ・る〔梳〕（他、ら四）梳（シ）をもて髪を理む。くしけづる。

〔げつ-るゐ〔血涙〕（名）[illegible]

即ち甚しき悲歎又は苦痛のあまり流す涙。

（げつ-れい〔厥冷〕（名）血のめぐり絶えて體の冷かになると。

（げつ-れい〔缺禮〕（名）禮をつくさゞると。

（げつ-れい〔月令〕（名）定め行ふべき政事又は儀式を、月々に區別し順序を立てゝ記錄したるもの。

（げつ-れう〔結了〕（名）をはりたると。をはり。しまひ。（終結）。

〔げづ・れる〔削〕（自、ら下二）㊀削られて少なくなる。㊁削るを得。

（げつ-ろ〔血路〕（名）㊀圍みたる敵を切り開きてにぐる一方の道。㊁困難なる場合を切りぬくる路。

（げつ-ろう〔缺漏〕（名）不足なると。ぬけ。もれ。

（げつ-ろん〔結論〕（名）㊀論じつめたる結局。結局の議論。㊁〔論〕三段論法の結末の命題、即ち、前提又は大前提と後提又は小前提とによりて得たる判斷。

（げつ-ゐ〔子遺〕（名）「げつよ」（子餘）に同じ。

（げつ-ゐん〔闕員〕（名）人數の缺けたると。定員の足らざると。

（げつ-をん〔血溫〕（名）血の溫度。

（げ-てう〔怪鳥〕（名）怪しき鳥。

〔げ-てん〔怪顚〕（名）怪しみ驚くと。——がほ〔怪顚顏〕（名）怪顚なる顏のさま。をかしきさまの顏。

（げ-でん〔怪顚〕（名）前條に同じ。

（げ-てん〔外典〕（名）〔佛〕佛經以外の書籍。ないてんの對。

（げ-でん〔下田〕（名）地味あしき田。

（げ-とう〔下等〕（名）「かとう」に同じ。

〔げ-どく〔解毒〕（名）體内に入りたる毒物を解き消すと。藥を用ひて毒物を稀薄にし又は中和無害にすると。——ざい〔解毒劑〕（名）解毒に用ふる藥劑。どくけし。——やく〔解毒藥〕（名）前條に同じ。

┼げ-どころ〔褻所〕（名）ふだんの居間。

げ-とば・す〔蹴飛〕（他、さ四）蹴（ケ）て飛ばす。

┼げ-どほ・し〔氣遠〕（形、一）とほし。うとし。

げ-どり〔氣取〕（名）けどると。

げ-ど・る〔氣取〕（自、ら四）氣色を見てさとり知る。

┼げ-なが・し〔來經長〕（形、一）時間長し。

げ-なげ〔健氣〕（名）㊀かひ〴〵しきと。いさましきと。㊁心がけよきと。殊勝なると。——もの〔健氣者〕（名）けなげなるふるまひの人。

げ-なし〔貶〕（名）そしり。わるくち。（誹謗）。

げ-なし〔毛無〕（名）毛の無きと。又、其もの。

げ-な・す〔貶〕（他、さ四）あしざまにいふ。おとしめくさす。そしる。

げ-なみ〔毛並〕（名）㊀毛のありさま。「—のよい犬」。㊁生まれ。素姓。「—の變った男」。

げ-なもの〔健者〕（名）「けなげもの」に同じ。

┼げ-なら・ぶ〔日並〕（自、ば下二）日數を積む。

（げ-なん〔下男〕（名）つかひをとこ。しもべ。

┼げ-に〔故〕（副）ゆゑに。

┼げ-に〔異〕（副）なほさら。ことさら。

げ-に〔實〕（副）㊀其如く。まことに。まつたに。㊁すぐれて。

┼げ-にく・し〔氣惡〕（形、一）にくし。

┼げ-に-げに・し〔實實〕（形、二）（「げ」は發語）もっともらし。まことらし。

（げ-にん〔家人〕（名）㊀いへのこ。けらい。㊁德川時代に、德川氏の旗下の小祿のものゝ稱。

（げ-にん〔化人〕（名）あやしき人。ばけもの。妖怪。

（げ-にん〔下人〕（名）身分の卑（ヒク）きもの。げす。

（げ-にん〔解任〕（名）任務をとかるゝと。

┼げ-にん〔外任〕（名）國司の任即ち地方官。京官の對。

げ-ぬき〔毛拔〕（名）髮又は髭などを挾みて拔き取る具。鐵にてつくり、形ははさみの如く、頭のくひあふやうにつくりたるもの。（鑷）。——あはせ〔毛拔合〕（名）㊀雙方のきれをそろへて、縫ひあはすと。㊁外（ハヅ）るゝばかりに辛じて合ふと。

┼げ-ぬる・し〔溫〕（形、一）稍や溫（アタタ）かし。寒くなし。

（げ-ねつ〔解熱〕（名）亢進せる體溫を減ずると。——ざい〔解熱劑〕（名）解熱に用ひて効力ある藥劑。例へば、かざ藥の如きこれなり。——やく〔解熱藥〕（名）前條に同じ。

（げ-ねん〔懸念〕（名）氣がゝり。こゝろがゝり。

┼げ-の-あらもの〔毛麁物〕（名）大いなる獸類。

┼げ-の-くつ〔靴沓〕（名）「くわのくつ」に同じ。

┼げ-の-こり〔消殘〕（名）けのこると。「—の雪」。

┼げ-の-こ・る〔消殘〕（自、ら四）消えのこる。

┼げ-の-ところ（名）日のほど經ると。「—は、經ひつゝもあらん」。

┼げ-の-にこもの〔毛柔物〕（名）小さき獸類。

げ-ば〔毳〕（名）細き毛。

（げ-ば〔下馬〕（名）㊀馬より下（オ）るゝと。（下乘）。㊁乘打を禁ずると。

（げ-はい〔下輩〕（名）㊀卑（イヤ）しきともがら。しもざまの者。㊁目下のもの。

げ-ばう-き〔毛箒〕（名）鳥の羽などを束（ツカ）ねてつくりたる箒（ハハキ）。

げ-ばう-す〔毛帽子〕（名）毛を飾りうゑたる帽子。又、毛の織（ケシ）きものにてつくりたる帽子。

けはえ-ぎはワイギ「毛生際」(名) 「けぎは」(毛際)に同じ。

けはえ-ぐすり「毛生藥」(名) 皮膚の局部に毛を生ぜしむるために塗抹する藥。

(げ-はく「下白」(名) 下等の白米。上白の對。

(げばげばだち「毳毳立」(名) いとけばたちたること。

(げばげばだ・つたちつつてて「毳毳立」(自、た四) いとけばだつ。

けは・しケハシ（しくしくしけれ）「險」(形、二) ㊀勾配(コウバイ)急にして行くに危し。道路平かならずして歩むに惡し。けんそなり。さかし。(嶮)。㊁氣質あら〳〵しくして激し易し。

けば-だち「毳立」(名) けばだつこと。

けば-だ・つたちつつてて「毳立」(自、た四) 細毛起り立つ。「紙がー」。

け-はなし「蹴放」(名) ㊀門の内外の區域をわかつ溝のなき敷居。㊁けはなすこと。

け-はな・すさしすすせせ「蹴放」(他、さ四) 蹴(ケ)て開く。

け-はひイーワ「氣色」(名) おもてに現はれたる樣子。けしき。そぶり。

け-はひイーワ「假粧」(名) 「けしやう」に同じ。

げば-ふだ「下馬札」(名) 乘打を禁ずる旨を記したる制札。

け-はらひハラヒイハ「毛拂」(名) 衣服の塵などを拂ふために用ふる刷毛(ハケ)、こは毛にて造りたるもの。ブラシ。

(げ-ひ「下卑」(名) 品劣(オト)れること。いやしきこと。——**-ざう**ゾーウ「下卑藏」(名) 意地根性のきたなきものをのゝしりていふ語。

け-びき「罫引」(名) ㊀罫(ケ)を引くこと。又、其引きたるもの。㊁罫を引くに用ふる道具。——**-がみ**「罫引紙」(名) けいがみ。けがみ。

けびき-おどし「毛引緘」(名) 毛緒にておどしたる鎧。

艹け-びと「食人」(名) 古昔、死者の靈前に食物を供ふることをつかさどりし人。

(げ-びやうヨウ「假病」(名) 詐(イツハ)りてよそほふ病氣。にせびやうき。「ーをつかふ」。(詐病)。

(げ・びる「下卑」(自、は上二) いやしく見ゆ。いやしくなる。

艹け-びゐ-し「撿非違使」(名) 古昔、非法違法の事をとりたゞし、職名、追捕・糺彈・裁判・訴訟などの事をつかさどり、今の裁判官と警察官とを兼ねたるが如きもの。

(げ-ひん「下品」(名) 品格の下りたること。上品の對。

け-ふウキヨ「今日」(名) (此日(ヒ)の轉といふ) 現在の日。このひ。いまのひ。こんにち。(今日)。——**-あす**「今日明日」(名) 今日か明日かの中、間もなき程。

(け-ふウキヨ「怯」(名) おそるゝこと。おくびやう。

(け-ふウキヨ「俠」(名) をとこぎ。をとこだて。

(げ-ぶ「燻」(名) 「けぶり」の略言。㊀物事の形跡のうせたること。——**-にまかる** 茫然として判斷のつかなくなるにいふ。

(げ-ふウギヨ「業」(名) ㊀學問。藝術。㊁よすぎ。なりはひ。㊂わざ。しわざ。㊃つとめ。勤務。㊄てだて。しかた。㊅いさを。てがら。㊆もとゐ。もとだて。「ーを創め統を垂れ」。

(げ-ぶ「下部」(名) 下の方。

(けふ-あいウーキヨ「狹隘」(名) ㊀極めて狹(セマ)きこと。「ーなる部屋」。㊁度量小なること。

け-ぶか「毛深」(名) 毛ぶかきこと。——**-し**（くしきけれ）「毛深」(形、二) 毛多く生(ハ)えてあり。

(けふ-かうキヨウコウ「俠行」(名) をとこだてのおこなひ。

(けふ-かうギヨウコウ「狹巷」(名) せまきちまた。ろぢ。

(けふ-かくウーキヨ「俠客」(名) をとこだて。

(けふ-がふガフキヨウ「協合」(名) やはらぎあふこと。またしくむつまじきこと。

(けふ-かんキヨウ「峽間」(名) たにあひ。はざま。

(けふ-きウーキヨ「俠氣」(名) をとこだての心。をとこぎ。

(けふ-きウーキヨ「狹軌」(名) 鐵道の「レール」の間が、三「フイート」六「インチ」以內なること、廣軌の對。——**てつだう**「狹軌鐵道」(名) 「レール」が狹軌なる鐵道。廣軌鐵道の對。

(けふ-ぎウーキヨ「狹義」(名) 範圍を制限して狹くしたる意義。せまきいみ。廣義の對。

(けふ-ぎウーキヨ「協議」(名) ㊀はなしあひ。さうだん。㊁二人以上のものが、或事項を討議して決定すること。——**くわい**「協議會」(名) 協議するために設くる會。「兩院のー」。

(けふ-くわいウーキヨ「協會」(名) 會員相協力して設立維持する會(多くは會の名稱に用ふ)。

(けふ-げきウーキヨ「挾擊」(名) はさみうち。

(けふ-こうウーキヨ「挾攻」(名) 前條に同じ。

(けふ-こくウーキヨ「峽谷」(名) 【地】峻絕なる兩崖の相迫りたるたに。はざま。

(けふ-こつウーキヨ「俠骨」(名) 俠氣ある精神。

けふ-このごろウーキヨ「今日此頃」(名) 極めて近き頃。ちかごろ。

(けふ-さくウーキヨ「狹窄」(名) 口のすぼまりてせまきこと。

(けふ-ざつウーキヨ「夾雜」(名) まぎれいること。まじること。——**ぶつ**「夾雜物」(名) まじり入りたる不純物。

(けふ-さんウーキヨ「夾算」(名) 書物又は卷物などよみさし又はみさしたるところに、はさみおく、[illegible]き竹片の頭を割(サ)きて挾むやうに作れり。しをり。

(けふ-さんウーキヨ「協贊」(名) ㊀力をそへてたすくること。㊁【法】帝國議會が、法律案又は豫算案に就き議決すること、法律は必ず此手續を經べきものとす。——**けん**「協贊權」(名) 憲法によりて、帝國議會に附與せられたる協贊の權限。

(けふ-じウーキヨ「夾侍」(名) ㊀左右にはんべること。又、其人。(挾侍)。㊁【佛】佛像の左右に侍してゐるもの、不動の制吒迦・昆羯羅又は彌陀の觀音・勢至などの類。わきだち。(脇士)。——**ボサツ**「夾侍菩薩」(名) 觀音菩薩と勢至菩薩との稱。わきだち。

げぶ・し（くしきけれ）「煙」(形、二) けぶたくあり。

(けふ-しやウーキヨ「狹斜」(名) いろざと。いろまち。遊里。

(けふ-しやうシヤウキヨウ「協商」(名) 協議してとりはからふこと。はなしあひ。さうだん。

(けふ-しようウーキヨ「夾鐘」(名) ㊀十二律の一。二月に當る。㊁陰曆二月の異稱。

(けふ-しようウーキヨ「脅從」(名) ㊀おびやかされて從ふこと。心ならずも恐しさに屈服すること。㊁おびやかして從はすること。おしつけてまげて屈服せさすること。

(けふ-しんウーキヨ「俠心」(名) をとこぎ。「と。

(けふ-しんウーキヨ「協心」(名) 心をあはすること。たすけあふこと。「同力ー」。

(けふ-せうシヨウキヨウ「狹小」(名) せまくちひさきこと。

(けふ-そくウーキヨ「脇息」(名) 座傍に置き臂(ヒヂ)を掛け體を支(サヽ)ふる具、小さき机の如き形をなすもの。ひぢかけ。おきへ。おしまづき。

(けふ-だウーキヨ「怯懦」(名) 物事によくおぢおそるゝこと。決行する意力弱きこと。おくびやう。

(げふ-たいウーキヨ「業體」(名) 「げふてい」に同じ。

げぶ-た・し（くしきけれ）「煙」(形、二) ㊀煙を受けて、苦しく感ず。㊁きゆうくつなり。きまづし。

げぶ-だし「煙出」(名) けむりだし。(煙突)。

(けふ-ぢウーキヨ「挾持」(名) そばよりさゝへそふること、たすくること。

(けふ-つうウーキヨ「浹通」(名) あまねく通ずること。

(けふ-ていウーキヨ「篋底」(名) はこのそこ。匣底。

(けふ-ていウーキヨ「協定」(名) 協議して決定すること。——**ぜいりつ**「協定稅率」(名) 國家が或貨物に課する關稅に就き、特に或國と協定したる稅率、關稅は通常の關稅稅率によるべきものなれど、協定稅率を定めたる貨物に就きては、協定稅率によるべきものとす。

(げふ-ていウーギヨ「業體」(名) ㊀營業のすぢ。家業。㊁おこなひ。ふるまひ。

(けふ-どうウーキヨ「協同」(名) 心を合はし共同して事をなすこと。

(けふ-にんウーキヨ「俠任」(名) をとこだて。をとこぎ。

(けふ-はくウーキヨ「脅迫」(名) ㊀おびやかしせまること。おどしつくること。㊁【法】畏怖せしむる目的を以て、人に不法の害惡を加ふることを示す行爲。——**ざい**「脅迫罪」(名) 【法】人を脅迫したる犯罪、脅迫を受けたる本人又は其親屬の告訴を待って成立す。

(けふ-ほウーキヨ「頰輔」(名) ㊀左右よりたすくること。㊁つらがまち。ほゝ。

(げふ-むウーギヨ「業務」(名) なすべきわざ。つとめ。

(けふ-ゆうウーキヨ「俠勇」(名) 俠氣ありて且勇氣あること。又、其人。

げぶり「煙」(名) ㊀物の火に燒けて起る朦朧たる氣。けぶ。けむ。けむり。㊁煙に似て、朦朧たる色をなし立ちのぼるもの。「水ー」。——**ぐさ**「煙草」(名) 「タバコ」の一名。——**だし**「煙出」(名) 「けむりだし」に同じ。

げ-ぶり「氣振」(名) そぶり。けはひ。ふるまひ。

(けふ-りきウーキヨ「協力」(名) 「けふりよく」に同じ。

(けふ-りやうリヤウキヨウ「狹量」(名) 度量のせまきこと。

(けふ-りやくウーキヨ「劫略」(名) おびやかして奪ふこと。かすむること。

(けふ-りよくウーキヨ「協力」(名) ㊀力を合はすこと。一致すること。(戮力、合力)。㊁【經】人類が合同して一つの仕事をなし若しくは分業によりて經濟界を組織すること。

げぶ・るらりるるれれ「煙」(自、ら四) ㊀煙立つ。㊁霞(カス)みて見ゆ。煙の立つが如くに見ゆ。

ケプレルのはふそく「ーの法則」＝Kepler's laws【天】遊星の運行に關する法則「デンマーク」國人「ケプレル」の發見にかゝるものにして三則あり。(第一)遊星の軌道は楕圓にして、太陽其焦點の一にあり。(第二)太陽より遊星に至る直線は、等時間に等しき面積を畫く。(第三)遊星の太陽を一週する時間の平方は、其太陽に至る平均距離の三乘に比例す。

(けふ-ろウーキヨ「狹路」(名) せまきみち。

(けふ-わウーキヨ「協和」(名) 心をあはして仲よくすること。親密にして互に隔心なきこと。

(げ-ほくめん「下北面」(名) 古昔、院の御所を守衛せし武士。

(げ-ほふウーホ「外法」(名) 妖術。魔法。艹——**がしら**「外法頭」(名) 人の禍福をもて行ひし妖術。——**つかひ**カイツ「外法遣」(名) 外法をつかひ、あやしき事をなす人。

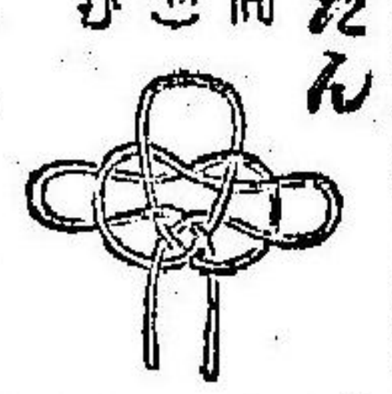
げ-ぼり「毛彫」(名) 模樣を細(コマ)かく毛筋の如く彫ること。又、其彫刻物。

艹げ-まうウーモ「希望」(名) 「きばう」に同じ。

げ-まはしワシー「蹴廻」(名) 袴又はうちかけの裾の足にかゝるところ。

けまり[蹴鞠](名) ㊀革にて製したるまり、しうきくに用ふるもの。㊁まりを靴にて蹴上(ケア)ぐる遊戲。しうきく。(蹴鞠)。

(げまん[華鬘](名) 佛像又は堂塔の頂に付くる飾、金銀の造花にて拵へたる花かづら、まゝ生花をも用ふ。**――さう**(ソウ)[華鬘草](名)【植】罌粟科に屬する草、莖は複莖にして芹に類し、小葉は缺刻を具す、花は紅紫色にして總狀花序に排列す、(荷包牡丹、魚兒牡丹)。**――ぼたん**[華鬘牡丹](名)【植】前條に同じ。**――むすび**[華鬘結](名) 紐の結び方、いれひも。どうまんむすび。



[けまんむすび]

けみ[毛見](名) (稻の毛を見る義)けんみ。(檢見)。

けみ・す（せ　し　す　する　すれ　せよ）[閱](他、さ變) たゞしみる。あらたむ。しらぶ。「書を―」。(點檢、査閲)。

けみち[頸道](名) 馬のなみあし。

(げみやう(ミヨウ)[假名](名) 實名の外に假に附けたる名。かりのとなへ。(假冒)。

(けみやう(ミヨウ)[家名](名) 家のとなへ。みやうぶ。

(げみん[下民](名) しもざまの民。しもざまのもの。かみん。

けむ[煙](名) 「けむり」の略言。

けむ（むむめ）(助動)【文法】過去を推量していふに用ふる語。

けむ(助動) (「からん」の約言)形容詞の語根に添ひて、未來を推測する意を表はす語。「なー」「べー」。

⌒けむくだち(名) 「けばけばだち」に同じ。

⌒けむくだ・つ（たちつつてて）(自、た四) 毛立つ。けばだつ。

⌒けむくぢやら(名) ㊀毛のむくむくして手ざはりの滑(ナメ)かならぬを。㊁毛の多く生(ハ)えたるさまにいふ語。

廿けむし[枲](名) 「をあさ」に同じ。

けむし[毛蟲](名) ㊀【動】昆蟲類鱗翅類に屬する蝶蛾類の仔蟲の稱、褐色若しくは黑色にして、長さ三寸許、羽化して蝶となる。(蛅蟖、蛓蟖)。㊁群(ムラ)り寄りて害となるもの又は少しく氣に障れば害をなすものをのゝしりいふ語。**――まゆ**[毛蟲眉](名) 太く濃(コ)くして、けむしのさまに似たる眉毛。

けむ・し（く　し　き　けれ）[煙](形、二) 「けぶし」に同じ。

けむしろ[毛席](名) 毛にて織りたるむしろ。毛織物の敷物。(毛氈、氍毹)。

けむた・し（く　し　き　けれ）[煙](形、二) ㊀煙のために苦しく感ず。煙に咽(ムセ)ぶ。㊁きゆうくつなり。氣まづし。

けむだし[煙出](名) 「けむりだし」に同じ。

廿けむつか・し（しく　しく　し　しき　しけれ）(形、二) 希有(ケウ)なり。むさくるし。むくつけし。

けむり[煙](名) けぶ。けむ。**――だし**[煙出](名) 屋内にて物を焚(タ)く煙を屋外に出だすために、屋上に設けたる窓又は竈の上に煉瓦などにて高く積み上げたる筒。けむだし。けぶだし。えんとう。(煙突、煙窓、煙筒)。

けむ・る（ら　り　る　る　れ　れ）[煙](自、ら四) けむりたつ。けぶる。

(げめん[外面](名) ㊀顏面のさま。かほいろ。かほだち。おもて。ぐわいめん。**――によボサツないしんによヤシヤ**[外面如菩薩內心如夜叉] 婦人の顏のいと美(ウツク)しく柔和に見ゆれど、其心根のいと險惡にして恐るべきにいふ。

けもの[獸](名) ㊀家に飼(カ)ふ畜類、家畜。㊁轉じて、けだもの。**――へん**[獸偏](名) 漢字の偏の名、狗・猫などの左方にある犭の字の稱。

けもも[毛桃](名)【植】もゝの一種、實大きくして果皮に毛あり、花もまた普通のものより大きくして色淡(アハ)し。(山桃)。

(けもんりよう[花文綾](名) 花の模樣ある綾。

げや[下屋](名) 母屋(オモヤ)にさしかけてつくりたる小屋。

廿けやか[異](名) きはだちてあること。きはやかなること。

けやき[欅](名)【植】楡科に屬する喬木、葉は櫻に似て鋸齒多し、材は黃色を帶びて堅く、建築・器具其他種々の料に供せらる。

けやき[毛燒](名) 鳥の毛を毟(ムシ)りたるあと、肌膚にある細小なる毛を火にて燒くこと。

廿けやけ・し（く　しく　し　き　けれ）[異](形、二) きはだちてあり。異樣なり。ことなり。

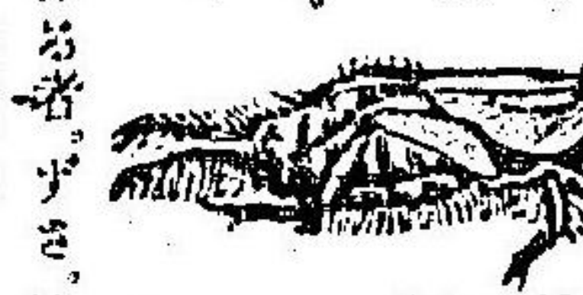
廿けやし（しく　しく　し　しき　しけれ）[異](形、二) 前條に同じ。

廿げゆ[解由](名) 古昔、任期はてたる國司が、後任者より事務・租稅などの滯(トドコホ)りなき旨の文書を請取ること。**――じやう**(ジョウ)[解由狀] 前任の國司などが、後任者より解由に請取る文書。

けら[螻蛄](名)【動】直翅類中蟋蟀科に屬する昆蟲、夏秋の頃、土中に穴居して鳴く、形いなごに似て頸圓く長し、前肢は長くして地を開掘するに適す、頗る農家に有害なるものにして、殊に小麥・甘藷等の根を害す。しやうらいむし。むけら。(土狗蛄)。

けら[啄木鳥](名)【動】「けらつゝき」の略言。

けら[鉧](名) よくきたへたる鐵。



[けら]

(けらい[家來](名) 家にめし使ふ者。ずさ。けにん。いへのこ。(隷從、家隸、家僕、家臣、家職)。

(げらう(ロウ)[下郎](名) 人に使はるゝ賤しき身分のもの。しもべ。

(けらく[快樂](名) 「くわいらく」に同じ。

(げらく[下落](名) 價の下(サ)がること、等のくだること。

⌒げらげい[螻蛄藝](名) 諸種の藝あれど、皆な巧ならざること。

⌒けらけら(名、副) 笑ふさまにいふ語。

⌒げらげら(名、副) 聲を出だして、さはやかに笑ふさまにいふ語。(咲咲)。

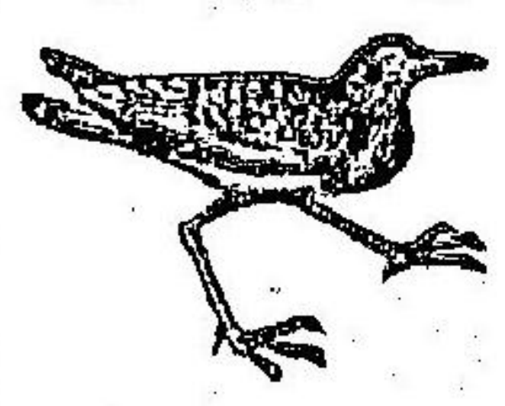
廿けらし(助動) (過去の助動詞「けり」と推量の助動詞「らし」とよりなる「けるらし」の約言)過去を推測する意を表はす語。「櫻花さきに―な」。

⌒けらつゝき[啄木鳥](名)【動】「てらつゝき」の訛。

けらば[螻蛄羽](名) ㊀のきさき。のきば。㊁土藏の鉢卷の上にあるつま。

廿げらふ(ロウ)[下臈](名) つとめの年月尚ほ淺くして地位低きものゝ稱。上臈の對。

けり[鳧](名)【動】涉禽類に屬する鳥、鳩大なり、頭背は灰色にして胸腹は白色なり、足長く嘴短し、常に水邊に棲息す。(桃鳧)。



[けり]

け・り（ら　り　り　る　れ　れ）(助動) (來(キ)有(アリ)の約言)㊀過去の義を表はす語。つ・ぬ・たり等よりは、現在に遠き場合に用ふるもの。㊁詠嘆の意を表はす語、「心なりー」。

(げり[外吏](名) 古昔の外任の官吏の稱、即ち、國司などをいふ。

(げり[下痢](名) くだりはら。腹くだり。(痢病)。

⌒けりかも[鳧鴨](名) 歌又は歌人をのゝしりていふ語。

けりかもめ[鳧鷗](名)【動】游水類中長翼類に屬する鳥、形はかもめより小さく、腹部白色にして背部淡黑色なり、嘴と脚とは赤し。

(げりやく[下略](名) 下の方の文言を略すること。上略の對。

け・る（け　け　ける　ける　けれ　けよ）[蹴](他、か下一) 足をもて突きやる、足にかけて飛ばす。

ゲレイン[Grain](名) 「グレイン」に同じ。

ケレオソート[Creosote](名)【化】無色油狀の液體、するどき一種の臭氣を有し、腐敗又は醱酵を防ぐ効あり、多く齒痛を止むる藥劑として使用せらる。

(げれつ[下劣](名) いやしく劣(オト)りたること。

⌒けれど(接) 「けれども」の略言。**――も**(接) であるが。しかれども。しかしながら。

⌒げれん(名) ごまかすこと。ごまかし。

⌒けろけろ(名、副) ㊀病氣などの思ひの外早く治(ナホ)りて全く跡方なきさまにいふ語。㊁平然として何事にも關せざるさまにいふ語。

⌒げろげろ(名、副) ㊀へどを吐(ハ)くさまにいふ語。㊁へど。

⌒けろり(名、副) 「けろけろ」に同じ。

(げろん[戲論](名) たはむれの議論。やくにたゝぬ言、「自性即ち無性にて、すでに―を離れたり」。

廿げゐ[外位](名) 古昔、從五位と正六位との間に設けられてありし外從五位の位、姓の賤しきもの先づこれに叙せられたる後に、從五位下となる。

廿げゑ[外衞](名) 古昔、禁中の御垣の外をまもりし衞府の稱。

(けん[拳](名) ㊀こぶし、にぎりこぶし。㊁一種の遊戲、二人若しくは二人以上のものが、互に手又は指にて種々の狀をなして、勝負をあらそふもの、はんげん・とうはちげん・きつねけん等種々あり。**――をうつ** 拳の遊戲をなす。

(けん[權](名) ㊀はかりのおもり。(錘)。㊁物の輕重をはかる器。はかり。㊂手段は正しき道に合はざれど、目的は正しき道にかなふを、「―を行ふ」。㊃はかりごと。たくらみ。術數。謀略。㊄臨機應變の才あること。(機智)。㊅かり。假設。㊆いきほひ。ちから。㊇けんりよく。けんげん。けんり。

(けん[劵](名) わりふ。てがた。きつて。

(けん[乾](名) ㊀易の八卦の一、☰の形をなすもの、天・天子又は世にあらはれさかゆる運若しくは剛健にして強(ツト)めて息(ヤ)まざる徳を表はす。㊁戌と亥との間即ち西北間の方位、いぬゐ。㊂あめ、そら。㊃かみ、きみ、天子。「―德廣大」。

(けん[間](名) ㊀柱と柱とのあひだ、ま。「三十三―堂」。㊁長さの單位、六尺の稱。

(けん[劍](名) ㊀つるぎ。㊁つるぎをつかふ技、げきけん、「―を學ぶ」。㊂銃の頭に付くる鎗の穗の如きもの。㊃螫(サ)す蟲の尻にあるとげ。**――をうつ**[擊劍] げきけんをまなぶ。

(けん[卷](名) まきもの又は書物の數ある中の順序。まき。くわん。「―の一」。

(けん[見](名) みこみ。かんがへ。みかた。みやう。

(けん[件](名) くだり。こと。かど。「彼の―」。

(けん[險](名) ㊀けはしきこと。あやふき所。けんそ。「―を超ゆ」。(嶮)。㊁むづかしきこと。恐るべきこと。㊂顏面にすごみあること、「―のある顏」。

(けん[縣](名) ㊀あがた。㊁郡の異稱。㊂明治の初年に、朝廷の直轄地の稱、藩の對、「笠松―」。㊃郡及市を以て組織せられたる地方行政區劃の一にして、且地方自治體の最上級たるもの、機關は縣會及縣參事會にして、行政は知事これを掌り監督は內務大臣これを掌る。㊄支那にて、郡若しくは府に屬する行政區劃の稱。

(けん)［鵑］(名)【動】ほとゝぎす。「―を聞く」。

(けん)［腱］(名) 筋肉の兩端の白色部分の稱、強靱にして收縮することなく骨に附着す。

(けん)［健］(名) つよきこと。さかんなること。すこやか。「天行は―」。

(けん)［賢］(名) さかしきこと。かしこきこと。すぐれたること。又、其人。

(けん)［妍］(名) たをやかなること。みめよきこと。

(けん)［堅］(名) ㊀かたきこと。かたきもの。「―を鎧る」。㊁甲冑。「―を被り戈を執る」。

(けん)［謙］(名) へりくだること。

(けん)［驗］(名) ㊀ためし。こゝろみ。㊁しるし。きゝめ。

(けん)［儉］(名) 事を省(はぶ)き用を節すること。自ら戒めてほしいまゝにせざること。つゞまやか。「―以つて德を養ふ」。

(―けん)［軒］(接尾) ㊀家を數ふるにいふ語。「二三―」「百―」。㊁雅號又は屋號などの末尾に用ふる語。

(げん)［弦］(名) ㊀弓づる。つる。「―に應じて斃る」。㊁琴などに張る絲。いと。(絃)。㊂絃を張りたる樂器即ち琴瑟の類。㊃【天】太陰の形が弓狀に見ゆる場合の稱、特に陰曆七八日頃と二十二三日頃との月にいふ。㊄【數】圓(又は他の曲線)の弧の兩端を連ぬる線の稱。又、直角三角形の斜邊の稱。㊅一升入穀枡の上部に架する四角形の鐵の稱、其體積は二百四十立方分なり。

(げん)［原］(名) ㊀のはら。はら。㊁もと。ねもと。みなもと。「左右逢―」。

(げん)［舷］(名) ふなばた。「―を叩いて謡ふ」。

(げん)［言］(名) ㊀ことば。ことのは。㊁句。「我に九―を教ふ」。㊂字。「二部四十余萬―」。㊃詩歌。辭藻。㊄命令。「―を修む」。

(げん)［玄］(名) ㊀赤を含む黑色。黄を含む黑色。くろ。㊁あめ。天上 ㊂もと。極極。㊃微妙にして深遠なること。たへなること。おくふかきこと。又、其道理、「―之又―衆妙之門」。㊄しづか。靜謐。㊅老子莊子の說きし道德。「よく―を談ず」。

(げん)［嚴］(名) きびしきこと。おごそかなること。

(げん)［幻］(名) ㊀まぼろし。㊁てじな。妖術。

(げん)［現］(名) ㊀うつゝ。實在。㊁げんざい。げんぜ。「過―未」。㊂其場にあること。ありあはすること。「―兵僅に三千」。㊃賭事に類したる一種の空相場、當日の相場を標準として互に現金の授受をなすこと。

(げん)［驗］(名) ㊀祈禱又は療治などのしるし。「―が見える」。㊁見え。樣子。「―の惡い子」。(京都の方言)。

(げん)［減］(名) ㊀へること。へらすこと。㊁げんぱふ。「ひきざん」。「加―」。

(げん)［元］(名) ㊀天地の太德。又、天地の正氣。㊁ねもと。はじめ。原始。端初。㊂かうべ。頭首。㊃をさ。首長。㊄王朝の革命。又、君王の即位。㊅曆日。又、年號。「―を改む」。㊆改曆又は年號の第一年。即位又は革命の第一年。

(けん-あい)［險隘］(名) けはしくせまきこと。又、其所。

(けん-あい)［兼愛］(名) 自他親疎の差別なく、すべての人を平等に愛すること。支那古代の學者墨翟はこれを道德上の主義となしたり。

(けん-あい)［眷愛］(名) かはゆがること。なさけをかくること。

(けん-あい)［涓埃］(名) しづくとごみと。轉じて、極めてすくなき物事にいふ語。「未有―答聖朝」。

(けん-あく)［險惡］(名) ㊀道路のさがしく歩み難きこと。㊁性質のねぢけて恐るべきこと。㊂すべて物事のあやうくおそろしきこと。「天候―」。

(げん-あく)［元惡］(名) 惡徒又は反賊のかしら。

(けん-あん)［檢案］(名) 形跡をあらためしらべたゞすこと。

(げん-あん)［原案］(名) 修正案などに對して、會議に上(のぼ)りたるはじめの議案の稱。

(けん-い)［險易］(名) むづかしきとやすきと。けはしきとたひらかなると。

(けん-いう)［縣有］(名) 縣といふ自治體の所有。「―財產」。

(けん-いう)［悁憂］(名) うれふること。

(けん-いち)［見一］(名)【數】珠算にて、二桁(フタケタ)以上の割算などの稱。

(けん-いん)［牽引］(名) ひきだすこと。ひきゆくこと。ひきよすること。

(けん-いん)［見印］(名) 見認印(ミトメイン)。

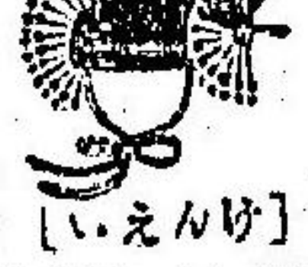
(けん-いん)［檢印］(名) 檢査の證として捺(オ)す印。

(げん-いん)［原因］(名) 物事のよりもとづく所。もと。おこり。結果の對。

(げん-うん)［眩暈］(名) めのくらむこと。めまひ。

(けん-うん)［卷雲］(名)【地】毛髮狀・羽毛狀又は平行纖維狀をなして、高く天空にかゝる雲、主として雪片より成るといふ。

(けん-えい)［卷纓］(名) 冠の纓の一種、內に卷きたるもの。くるんえい。まきえい。


［けんえい］

(けん-えい)［獻詠］(名) 宮中又は神社などに詩歌を奉ること。

(げん-えい)［幻影］(名) ㊀はかなきかげ。まぼろしのあと。㊁思想又は感覺の錯誤によりて、見あやまりたる實際ならぬ現象。

(けん-えう)［權要］(名) 權力ある樞要の位地。又、其位地にあるもの。

(けん-えう)［險要］(名) 地勢のさがしくして要害なること。又、其地。

(げん-えう)［眩耀］(名) ひかりかゞやくこと。

(けん-えき)［檢疫］(名) 傳染病の流行を豫防するため、船舶又は汽車の出入發着に際し、其乘客等に檢診又は消毒等を行ふこと。――ゐゐん［檢疫委員］(名) 府縣知事又は警視總監の指揮監督の下に、檢疫の事務を扱(アツカ)ふ委員。

(げん-えき)［現役］(名) 常備兵役の一種、現に所屬の部隊に編入せられて軍務に服役し、戰時には所屬の豫備後備より先に出征を命ぜらるゝもの、兵卒・下士・准士官・將校おの〳〵其年限を異にす、兵卒の年限は、陸軍にては三年とし海軍は四年とす。

(けん-えつ)［檢閱］(名) ㊀しらべけみすること。あらため。㊁陸軍又は海軍にて、實地に就き軍紀・教育・勤務・保育・作戰準備其他諸般の軍事上の事項をしらべけみすること。

(げん-おん)［原音］(名)【理】三味線など絃の中央を彈ずるとき、全絃を一區として振動して發する音を其絃の原音といふ、即ち發音體の發し得る最低の音、音叉の上部を胡弓の絃にてすりて出だす音をもてこれを測る。

(けん-か)［縣下］(名) 縣の支配の下。

(けん-が)［懸河］(名) はや瀨の河。

(けん-が)［犬牙］(名) ㊀犬のきば。㊁くひちがひ。いりちがひ。

(げん-か)［絃歌］(名) 鳴物を彈(ヒ)き歌を謠(ウタ)ふこと。

(げん-か)［現價］(名) 現在のねだん。時のさうば。

(げん-か)［原價］(名) しいれのねだん。もとね。(元價)。

(げん-か)［玄關］(名) 「げんくわん」の訛。

(げん-か)［減價］(名) ねさげ。ねびき。

(けん-かい)［硯海］(名) 硯の水のたゝふ所。すゞりのうみ。

(けん-かい)［見解］(名) 意味のとりかた。意見のたてかた。みやう。みどころ。

(けん-かい)［狷介］(名) みさをを守りて孤立せること。志堅くして他と和合せざること。「―不屈」。

(けん-がい)［懸崖］(名) きりぎし。がけ。絶壁。――さっしゆ［懸崖撒手］(名) (懸崖に手をはなして落つる義)勇猛心を奮ひ起し思ひきってなすことにたとへいふ。殊に、禪家などにて、疑團に鎖(ト)ざされ進退きはまる場合に於ける奮進にたとへいふ。

(げん-かい)［嚴戒］(名) きびしくいましむること。げんぢゆうに用心すること。

(げん-かい)［限界］(名) さかひ。きまり。かぎり。

(けん-かう)［軒昂］(名) 奮ひおこること。高くあがること。「意氣―」。

(けん-かう)［堅硬］(名) かたきこと。

(けん-かう)［權衡］(名) ㊀秤(ハカリ)の錘(オモリ)と竿(サヲ)と。㊁つりあひ。

(けん-かう)［乾綱］(名) 天子又は國家ののり。

(けん-かう)［健康］(名) すこやか。ぢやうぶ。無病。達者。――しんだん［健康診斷］(名) 無病なるか然らざるかの診斷。

(けん-がう)［健剛］(名) 勢つよく活動してたゆまざること。すこやかにして屈せざること。

(けん-がう)［堅剛］(名) かたきこと。こはきこと。

(げん-かう)［言行］(名) 言(コト)と行(オコナヒ)と。――いっち［言行一致］(名) 言と行と相應じて、自分の行にあらはし得ざる事柄は放言せざること。

(げん-かう)［原稿］(名) したがき。草稿。――し［原稿紙］(名) 原稿をかくための用紙。――れう［原稿料］(名) 述作したる原稿の代價。

(げん-かう)［現行］(名) 現に行ふこと。又、現に行はるゝこと。――はふ［現行法］(名) 現に行はれて效力を有する法律。――はん［現行犯］(名)【法】現に行ひ又は現に行ひ終りたる際に發覺せる犯罪、犯人として一人若しくは數人に追呼せらるゝもの、兇器賊物等を携帶し又は身體被服に顯著なる犯罪の痕跡ありて、犯罪者と思料すべきもの、家宅內の犯罪檢證のため又は犯罪人と思料すべきものを逮捕するため、戶主より其處分を求めたるもの等は、またこれに准ぜらるゝものとす。

(けん-かく)［堅確］(名) かたくして動かざること。しっかりしてあること。

(けん-かく)［研覈］(名) くはしくとり調(シラ)ぶること。

(けん-かく)［懸隔］(名) かけへだゝりたること。かけはなれたること。

(けん-かく)［劍客］(名) けんじゆつつかひ。「―」。

(けん-がく)［兼學］(名) 諸學をかね學ぶこと。「八宗―」。

(けん-がく)［研學］(名) 學問をきはめみがくこと。

(げん-かく)［嚴格］(名) おごそかにしてたゞしきこと。

(げん-がく)［減額］(名) 數をへらすこと。たかを少なくすること。

けん-かたばみ［劍酢漿］(名) 紋所の名、かたばみの瓣の間に、けんさきを容れたる模樣を描(カ)きたるもの。

けんが-の-べん［懸河辯］(名) よどみなく流暢にのべたつる辯舌。

(けん-かふ)［堅甲］(名) かたきよろひ。又、かたき甲冑。

(けん-かふ)［肩胛］(名) かりがねはね。かいがね。――こつ［肩胛骨］(名) 前條に同じ。

(げん-かん)［阮咸］(名) (晉の阮咸が造りたるより此の名ありといふ) ㊀月琴の古稱。㊁八角の盤に、長き竿をつけたる絃樂の樂器。

(げん-かん)［嚴寒］(名) きびしきさむさ。

(けん-き)［險危］(名) あやふきこと。

(けん-ぎ)［嫌疑］(名) ㊀疑義又は事情のまぎらはしきこと。㊁或事をなしたるならんと思はるゝこと。うたがひ。うたぐり。

（げん-ぎ）［權義］（名）權利と義務と。

（げん-ぎ）［建議］（名）一の國家機關が同等又は上級の國家機關に對し、若しくは私人又は團體などが官府に對して、或希望を開陳すること。

（げん-ぎ）［權宜］（名）臨機のみはからひ。

（げん-ぎ）［讞議］（名）獄を定むる評定。

（げん-き）［元氣］（名）㊀身體を支持するいきほひ。精神の活動するちから。㊁すべて物事の根本となる氣力、「一國の—」。㊂すこやかなること。勢よきこと。

（げん-き）［衒氣］（名）てらひたかぶる意氣。

（げん-き）［驗氣］（名）病氣の癒（イ）えて、治療又は服藥などの兆あること。

（げん-き）［原器］（名）同種類のもの、標準として、他をこれにならはしむる器、「度量衡の—」。

（げん-ぎ）［原義］（名）根本の意義。

（げん-ぎ）［絃妓］（名）げいしや。げいぎ。

（げん-ぎ-あん）［建議案］（名）建議の案文又は議案。

（げん-きう）［研究］（名）きはめみがきて深く其道にすゝむこと、あきらめ究むること、「學問の—」。

（げん-ぎう）［牽牛］（名）ひこぼし。「—織女」。——せい［牽牛星］（名）前條に同じ。——くわ［牽牛花］（名）【植】「あさがほ」の一名。

（げん-ぎ-しや）［嫌疑者］（名）うたがひのかゝれる人。

（げん-ぎふ）［玄及］（名）【植】「さねかづら」の一名。

（げん-きふ）［減給］（名）月給又は給與の額を減ずること。

（げん-きやう）［牽強］（名）理にあはぬを強（シ）ひて理にあふやうにいひ紛（マギ）らはすこと、こじつけ。

（げん-きやう）［現況］（名）現在のありさま。

（げん-ぎやう）［現形］（名）㊀形を現はすこと、げぎやう。㊁現在のかたち。

（げん-きやく）［減却］（名）へること。又、へらすこと。

（げん-きよ）［檢擧］（名）犯罪・犯則等の形跡をとりしらべ又は其證據を收集すること。

（げん-きよ）［懸魚］（名）「げぎよ」に同じ。

（げん-ぎよ）［言語］（名）「げんご」に同じ。

（げん-ぎよう）［噞喁］（名）㊀魚の口を水上にあらはすこと、あぎとふこと。㊁口を上方に向くること。

（げん-きよう）［元兇］（名）わるいものゝかしら。拔ちすぐれたるわるもの。

（げん-きよく）［踡跼］（名）體を曲げちゞむること。

（げん-きん）［獻金］（名）金を朝廷又は官府に獻上すること。又、其金。

（げん-きん）［兼勤］（名）二つ以上の職をかねてつとむること。かねやく。げんむ。

（げん-きん）［獻芹］（名）芹を獻上する義、左傳に出づ。君王に忠義を盡すことの謙稱、「—の誠」。

（げん-きん）［嚴禁］（名）嚴重にさしとむること。

（げん-きん）［現金］（名）㊀證書・手形又は債權若しくは目錄などに對して、交換の媒介物たる金錢の稱。㊁實際に差出す金錢。即座に拂ふ代金。㊂かけうりならぬこと。即座に金錢の授受をなすこと。㊃目前の利益。㊄其意に應ぜざれば怒り、其意に應ずれば直ちに喜ぶこと。——きやく［現金客］（名）現金にてものを買ひくるゝ客。——しゆぎ［現金主義］（名）目前の利益又は當座の勘定のみに基きて萬事を處理すること。——すゐたふちやう［現金出納帳］（名）「きんせんすゐたふちやう」（金錢出納帳）に同じ。——てもとありだか［現金手許有高］（名）簿記にて、手許（テモト）に現存する現金の員數、即ち、現金の收入の高と支出の高との差。——とりひき［現金取引］（名）取引

を現金にてなすこと。

げんきん-とりたて［現金取立］（名）㊀現金を取立つること。㊁現金取立郵便の略言。——いうびん［現金取立郵便］（名）送附する郵便物に對する現金取立を、郵便局に委託する手續、委託せんとする者は、委託證及金額取立の證券を郵便局に差出し其受領書を請取り、該委託を受けたる郵便局は、これを取立郵便局に送附し、取立郵便局より現金取立の通知ありたるときは、差出人は其通知書と先に受けたる受領書と取立金送達料とを、委託郵便局に差出して取立金の交附を受く。

（げん-ぐ）［賢愚］（名）賢と愚と。馬鹿と利口と。

（げん-く）［言句］（名）ことば。もんく。

（げん-く）［原句］（名）もとの句。

（げん-くわ）［堅果］（名）【植】堅硬なる果實の稱、例へば栗又はかしの類の果實これなり。

（げん-くわ）［喧嘩］（名）㊀さわがしきこと。かまびすしきこと。㊁あらそひ。いさかひ。たゝかひ。さうどう（諍鬪）。——かひ［喧嘩買］（名）よく他人といさかひを起すこと。又、他人のいさかひなどに立ちいりて、これを引受くること。——ごし［喧嘩腰］（名）けんくわを起さんとの意氣ぐみ。

（げん-くわ）［玄關］（名）げんくわん。

（げん-くわ）［嚴科］（名）きびしき罰。きびしきつみ。

（げん-くわ）［現化］（名）神佛などが世の中に體をあらはし出ること。

（げん-くわい）［縣會］（名）縣の議決機關。縣會議員を以てこれを組織し、縣の歲入出豫算及決算報告、法律命令に定むるもの、外の使用料・手數料・縣稅及夫役、現品の賦課徴收、不動產・積立金穀・財產及營造物、歲入出豫算外の權利義務其他法律命令に

定めたる權限事項等に關して議決するものとす、通常每年一回開設せられ、縣知事これを招集す。——ぎゐん［縣會議員］（名）縣會を組織する議員、縣內の市町村公民にして市町村會議員の選擧權を有し、且其縣內に於て一年以來直接國稅三圓以上を納むるものは、これが選擧權を有し、同上の資格にて直接國稅年額拾圓以上を納むるものは、これが被選擧權を有す、人口七十萬未滿の處は三十人を定員とし、七十萬以上百萬未滿は五萬を加ふる每に一人を增し、百萬以上は七萬を加ふる每に一人を增す。

（げん-ぐわい）［言外］（名）ことばにのべざる所。ことばのほか。「—の意味」。

（げん-くわ-しよくぶつ）［顯花植物］（名）【植】花と稱する生殖機關を有し、果實を結び種子を生ずる高等植物の總稱。

（げん-くわん）［兼官］（名）本官の他に兼ぬる官職。かけづかさ。けんむ。

（げん-くわん）［縣官］（名）㊀縣の行政事務を扱（アツカ）ふ吏員。㊁「けんちやう」に同じ。

（げん-くわん）［權官］（名）權力多き官職。又、其官職にゐる人。

（げん-くわん）［玄關］（名）㊀【佛】玄妙なる道にすゝみ入る端緖。㊁禪寺の客殿に入る門。㊂俗人の家にある正面の入口。——ばる　玄關のさまのみを立派にすること、即ち外觀をかざるにいふ。

（げん-くん）［賢君］（名）かしこききみ。

（げん-ぐん）［懸軍］（名）後方の聯絡なく、遠く進入する軍隊。

（げん-くん）［嚴訓］（名）きびしきいましめ。おごそかなるをしへ。

（げん-くん）［元勳］（名）㊀國家に盡くしたる大功。又、其大功ある人。㊁特に、國家に大功ありて君王のおぼえいとめでたき老年者。

（げん-くん）［嚴君］（名）ちゝぎみ。

（げん-げ）［碎米菜］（名）【植】「れんげさう」の一名。

（げん-げ）［建溪］（名）茶の異稱。

（げん-けい）［賢兄］（代）同輩などに對して用ふる敬稱。

（げん-けい）［現形］（名）㊀形をあらはすこと。㊁現在のかたち。今の形態。

（げん-けい）［減刑］（名）刑罰を減じて輕くすること。次條（二）を見よ。

（げん-けい）［減輕］（名）㊀へらしてかろくすること。等をすくなくすること。㊁【法】刑罰の減輕、法律上のもの五つありて裁判上のもの一つあり、前者は宥恕減輕・自首減輕・未遂犯減輕・從犯減輕・特別減輕にして、後者は酌量減輕なり。

（げん-けい）［嚴刑］（名）きびしき刑罰。おもきつみ。

（げん-けい）［現計］（名）㊀現在のもの、計算。㊁現在に出納（スヰタフ）したる金錢の計算。

（げん-けい）［原形］（名）㊀もとのかたち、以前の狀態。㊁原始のかたち、進化なきほどの狀態。——しつ［原形質］（名）細胞の最も主要なる部分にして、其生活力を主宰するもの、卵白に似たる半流動體の物質より成り、內部に透明なる顆粒あり、其中心に核を有す。

（げん-げう）［檢校］（名）㊀高野山などにて一寺の法事を檢閱する職。㊁昔時、盲人の官名の最上のもの。

（げん-げう）［顯敎］（名）【佛】釋迦牟尼が、機に應じ物に從して明かに遍く衆生に說きあらはしたる敎法の稱、特に、天台宗・淨土宗などの稱、密教の對。

（げん-げき）［劍戟］（名）㊀つるぎとほこと。㊁轉じて、兵器又は戰爭。

（げん-げつ）［弦月］（名）上弦又は下弦の月。ゆみはりづき。

（げん-げふ）［兼業］（名）本業の他にするわざ。

（げん-げふ）［建業］（名）事業のもとゐをたてまうくること。

（げん-げふ）［現業］（名）實際のわざ。實地のしごと。

（げん-げん）［蹇蹇］（名、副）㊀おそきさま又はにぶきさまにいふ語。㊁なやむさま又はまがるさまにいふ語。㊂すなほにしてたゞしきさまにいふ語。㊃おごりたかぶるさまにいふ語。

（げん-げん）［拳拳］（名、副）㊀さゝげもつさまにいふ語。㊁うやうやしきさま又はねんごろなるさまにいふ語、「—服膺す」。

（げん-げん）［涓涓］（名、副）水などの流るゝさまにいふ語。

（げん-げん）［件件］（名）かど〳〵。ことごと。

（げん-げん）［權原］（名）【法】權利を取得したる原由。

（げん-げん）［權限］（名）【法】（い）大權又は法律に依りて委任若しくは附與せられたる物事を處理する能力又は職務の範圍。（ろ）法律の規定により、他人の機關となりて或事務を處理する能力又は事務の範圍、「代理人の—」。——さいばんしよ［權限裁判所］（名）權限爭議を裁判する裁判所。——さうぎ［權限爭議］（名）【法】二個の官府間に、其權限につき意見解釋を異にすること、同一事件を互に自己の權限に屬すと主張するときは積極的權限爭議といひ、互に自己の權限に屬せずと主張するときは消極的權限爭議といふ。

（げん-げん）［建言］（名）官府などに對して、自分の意見を申立つること。——しよ［建言書］（名）建言の旨をしたゝめたる文書。

（げん-げん）［嚴譴］（名）きびしきとがめ。げんちゆうのおかりつけ。

（げん-げん）［顯現］（名）あきらかにあらはるゝこと。又、あらはしめすこと、「神の—」。

(げん-げん[衒言](名) 自慢のことば。てらふことば。

(げん-こ[眷顧](名) なさけをかくること、めぐむこと。「かへりみ。ひいき。(愛顧)」。

(げん-ご[堅固](名) ㊀たしかにして動かざること。「道心―なり」。㊁すこやか。達者。健全。㊂破れがたきこと。拔けがたきこと。「―の城塞」(堅牢)。

(げん-ご[險語](名) むづかしきことば。最もするどき語。「―人膽を破る」。

(げん-こ[拳固](名) ㊀にぎりこぶし。げんこつ。㊁賭博又は車夫などの仲間にて、五圓・五錢・五拾錢等の五の數を冠したる金錢の隱語。

(げん-ご[原語](名) ㊀譯し又は寫し若しくは改めなどしたることばのもとのことば。㊁外國語。

(げん-ご[言語](名) 人類の思想を表はす聲音の結合。ことば。ことのは。 ―がく[言語學](名) 言語の根本・變遷又は規則に關して研究する科學。

(げん-こう[獻貢](名) ㊀みつぎものを奉ること。㊁ものをそなへさゝぐること。

(げん-こう[元后](名) きみ。君王。

(げん-こうし[懸鉤子](名) 【植】「きいちご」の一名。

(げん-こく[建國](名) 國家の基礎をたつること。國を肇つること。「―の三傑」(肇基)。

(げん-こく[現石](名) 田地の實收中より領主に收むる石高の稱。くさだかの對。

(げん-こく[嚴酷](名) 過度にきびしきこと。殘忍なること。

(げん-こく[原告](名) 【法】民事・刑事又は行政訴訟に於て、訴訟を提起し裁判を請求せる當事者。又、特に民事の第一審にて、訴訟を提起し裁判を請求せる當事者。 ―にん[原告人](名) 原告なる人。訴を起しゝ方の人。被告人の對。

(げん-こつ[拳骨](名) げんこ。にぎりこぶし。

げんごらう-ぶな（ゲンゴロー）[源五郎鮒](名) 【動】ふなの變種、近江國琵琶湖に生ず、大きは二尺許、頭小くして、色白く金色を帶び、味美なり。

げんごらう-むし（ゲンゴロー）[源五郎蟲](名) 【動】鞘翅類中龍蝨科に屬する蟲、我國に產する最大なる龍蝨なり、黑褐色にして少しく綠色の光澤を帶び、鞘翅に少しく短毛あり、後肢に一爪を有す、池沼に生息し小魚を捕食す、成蟲後は夜間空中を飛翔す。

(げん-こん[乾坤](名) ㊀方角の名、いぬゐとひつじさると。㊁天地。陰陽。 ―いってき[乾坤一擲](名) 自家の全滅を賭けて事を行ふことにいふ語。

(げん-こん[現今](名) いまのとき。まのあたり。たうざ。(目今、當今)。

(げん-さ[檢査](名) たゞし見ること。とりしらべ。あらため。

卄げん-ざ[驗者](名) 加持祈禱などする人。「―もとむるに」。

(げん-さい[縣債](名) 地方債の一、縣といふ地方自治體が縣會の議決を經て起す公債。

(げん-さい[賢妻](名) かしこきつま。

(げん-さい[賢宰](名) かしこき宰相。

(げん-さい[賢才](名) かしこき才智。又、其才智ある人。

(げん-ざい[健在](名) 無事にくらしてゐること。

卄(げん-さい[幻妻](名) ㊀人の妻をのゝしりていふ語(京阪地方の言)。㊁よたか。ぢごく。(街娼)。

(げん-ざい[顯在](名) あらはれてあること。

(げん-ざい[原罪=Original sin](名) 「アダム」「イブ」の墮落の結果として、其子孫たる人類は、生れながらにして罪惡ありといふこと。

(げん-ざい[現在](名) ㊀まのあたり。目前。㊁【哲】時間上の三區別の一、過去と未來との境界、すこしの延長もなく時間といふ線の一點に過ぎざる

もの。いま。㊂【佛】其人の現に生を此世に受けていきながらふる間。げんせ。㊃【文法】現に行はるゝ動作を表はすもの。㊄虛僞又は夢幻にあらざること。實際。㊅其場にありあはすること。「―の糧食」。 ―ち[現在地](名) 其物若しくは其人の現に存在しゐる土地。 ―ゐん[現在員](名) 現在其處にゐる人數。

(げん-さいばん[原裁判](名) 【法】當の裁判の前の裁判、控訴の裁判にては第一審の裁判をいひ、上告にては控訴の裁判をいふ。

(げん-さう[萱草](名) 【植】「わすれぐさ」に同じ。

(げん-さう[險相](名) するどき顔つき。すごみのある人相。

(げん-さう[喧噪](名) かまびすしきこと。さわがしきこと。

(げん-さう[現想](名) 目擊したる物事に關聯して起るかんがへ。

(げん-ざう[建造](名) たてつくること。かまへこしらふること。 ―ぶつ[建造物](名) 建造したるもの、即ち家屋・倉庫などの稱。

(げん-さう[現象](名) 「げんしやう」に同じ。

(げん-ざう[現像](名) ㊀あらはれたる形像。㊁寫眞機械にかけて玻璃板にとりたる物體の映像を、現像液を注加して現はすこと。 ―えき[現像液](名) 寫眞にて玻璃板にとりたる映像を現出せしむるために用ふる一種の液。(寫眞術の條參照)。

げん-さき[劍先](名) ㊀つるぎのはさき。きっさき。㊁とがりたるもの、さき、はさき。㊂破軍星。(劍先、斗柄)。 ―ぶね[劍先船](名) さきの尖(トガ)りたる船。

(げん-さく[建策](名) はかりごとをたつること

(げん-さく[絃索](名) 琴又は三味線などのいと。

げん-さくわん[檢査官](名) 或事項の檢査をなす官吏。

げん-ざけ[拳酒](名) 拳(ケン)の勝負によりて飮む酒。

(げん-さつ[賢察](名) 人の察することの敬語。「おさっし。

(げん-さつ[檢察](名) ㊀しらべみること。とりしらべ。㊁【法】犯罪犯則等の形跡を搜査し、證憑を收集すること。 ―きよく[檢察局](名) 檢察官が事務を行ふ所、臺灣の覆審法院及地方法院に附置せられ、臺灣總督に直屬す。 ―くわん[檢察官](名) ㊀檢察の事務にあたる官職又は官吏。㊁臺灣の覆審法院及地方法院の檢察局にある官職、司法警察又は刑事の訴追裁判の執行等の事務にあたり、當該法院所管の民事訴訟につき國を代表す。 ―くわんちやう[檢察官長](名) 臺灣の覆審法院及地方法院の檢察局の長、檢察局の事務の指揮監督をなすもの。

(げん-さやく[檢査役](名) ㊀けんさするやくめ。又、其人。㊁相撲(スマフ)の四本柱の所に坐して、勝負の檢査をなすもの。

げん-ざを[間竿](名) 土地の間(ケン)數をはかる竿。

(げん-さん[研鑽](名) 物事の道理をきはめしらぶること。けんきう。

(げん-ざん[險山](名) けはしきやま。

(げん-ざん[建盞](名) 天目の一種、支那の建安の產、形のやゝ違ひたるを胡盞(ウサン)といふ。(茶人の語)。

(げん-ざん[乾山](名) 「けんざんやき」の略言。 ―やき[乾山燒](名) 元祿年間、京都嵯峨の人、緖方乾山(光琳の弟)の創製にかゝる陶器、らくや

きに似たるもの。

(げん-ざん[獻殘](名) 獻上ののこりもの。

(げん-ざん[檢算](名) 締高の再しらべ。

(げん-さんじくわい[縣參事會](名) 縣といふ地方自治體の議決機關、參事會員を以てこれを組織し知事を議長とす、縣會の議決事項、縣會の議決範圍內に於ける財產及營造物の管理、縣費支辨の工事執行の規定、縣に係る訴訟及和解、其他法律命令により其權限に屬する事項等の議決をなし、臨時要急の事件にして縣會招集の暇なき場合に、縣會に代はりてこれを議決し、縣會に提出する議案につき、知事に對して意見を述ぶることを得。 ―ゐん[縣參事會員](名) 縣參事會を組織するもの、縣の知事・高等官及名譽職參事會員六名なり、名譽職參事會員は縣會議員中よりこれを互選す。

(げん-ざん[見參](名) ㊀面會又は拜謁などの敬語。㊁格鬪又は果合(ハタシアヒ)などにいふ敬語。

(げん-し[檢使](名) 事實の見屆をなす使者。

(げん-し[檢屍](名) 變死などの屍の檢查。

(げん-し[犬齒](名) きば。

(げん-し[繭絲](名) ㊀まゆの絲。㊁租稅又は財貨の稱。「以て保障となさんか、以て―となさんか」。

(げん-し[劍士](名) けんじゆつつかひ。劍客。

(げん-じ[檢字](名) 漢字の字書にて、偏傍の疑難なる漢字の所屬を知らするために、總畫によりて索引し得るやうに漢字を排置したるもの。

(げん-じ[謙辭](名) 謙遜していふことば。

(げん-じ[健兒](名) ㊀すこやかなる男。いさましきをのこ。㊁古昔の兵士。こんでい。

(げん-じ[劍璽](名) 草薙劍と八尺瓊勾玉(ヤサカニノマガタマ)と。

(げん-じ[檢事](名) 通常裁判所に置かれたる司

法行政官、刑事の公訴を提起し法律の適用を請求し刑罰の執行を監督し、又、公益の代表者として其職權に屬する事務を行ひ、若しまた民事に關しても必要なりと認むるときは、通知を求め意見を述ぶることを得、裁判所に對し獨立して事務を行ふ。

(げん-し[元子](名) ㊀皇太子の稱。㊁次條に同じ。

(げん-し[原子=Atom](名) ㊀【化】如何なる化學的作用を施すとも、最早分つべからずと假定したる物質の極微なるもの、分子は原子數個より成る、㊁すべて物事組成のもとゝなる單一不可分にして獨立自存なるものゝ稱。もと。ねもと。

(げん-し[嚴師](名) きびしき先生。師を尚(トウト)びていふ稱。

(げん-し[原始](名) ㊀もと。はじめ。(元始)。㊁未だ進化をなさゞること。

(げん-し[元巳](名) 三月三日の稱。上巳。

(げん-し[幻師](名) 魔法つかひ。

(げん-し[言辭](名) ことば。ことばつかひ。(言詞)。

(げん-し[現時](名) 現今の時。

(げん-しう[獻酬](名) 盃のやりとり。

(げん-しう[減收](名) 收入の減(ヘ)ること。

げん-しうち[源氏打](名) 鎧の小札を、一枚を下に一枚を上に、又一枚を下に一枚を上に、順々にくひあはせたること。又、其打方の鎧。

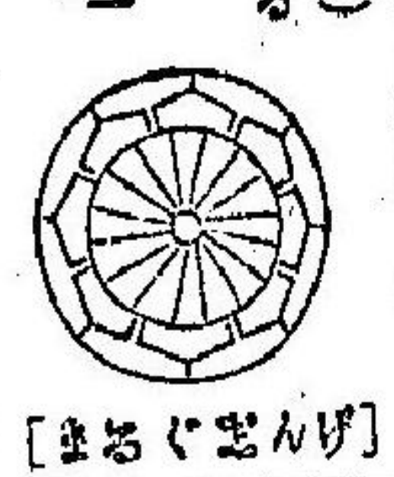
(げん-しか[原子價](名) 【化】元素又は基が水素と化合し又は水素と置換する割合、酸素の一原子は水素二原子と化合するを以て二價元素にして、窒素の一原子は水素三原子と化合するを以て三價元素なり、又、水酸基は水素一原子と化合するを以て一價なり。

(げん-しき[見識](名) ㊀かんがへ。みこみ。意見。㊁主義又は節操。㊂さぐらゐ。 ―ばる

［見識張］（自、ら四） 見識を張る。からいばりす。

(げんじきよく［檢事局］（名） 通常裁判所に附屬し、該裁判所に置かれたる檢事の事務を扱ふ所。

げんじぐるま［源氏車］（名） 紋所の名、車輪の狀を描(エガ)きたるもの。



［げんじぐるま］

(げんしさい［元始祭］（名） 一月三日に行はる、祭事。

(げんしじだい［原始時代］（名）「げんじんじだい」(原人時代)に同じ。

(げんじせい［檢事正］（名） 地方裁判所の檢事局の長、其檢事局の事務の指揮監督を掌り、該地方裁判所管內の檢事を監督するもの。

(げんしせつ［原子說＝Atomism］（名） ㊀【化】物質は原子より成り、又、異なる元素の原子は一定の割合を以て化合すといふ說。㊁【哲】單一不可分にして獨立自存せる多數のものを以て宇宙の原理となす說、これを物質的なりとするを物質的原子說といひ、精神的なりとするを精神的原子說といふ。

(げんじそうちやう［檢事總長］（名） 大審院の檢事局の長、其檢事局の事務の指揮監督を掌り、すべての下級檢事を監督するもの。

(げんじたくぼく［源氏啄木］（名） 啄木絲をもて鎧の表を鐵甲に取を矢筈の貝の口に組むこと。

(げんじちやう［檢事長］（名） 控訴院の檢事局の長、其檢事局の事務の指揮監督を掌り、該控訴院管內の下級檢事を監督するもの。

(げんしつ［原質］（名） もとの性質。

(げんじつ［兼日］（名） ㊀期日より以前の日。㊁二三日か、るべき物事を一日になすこと。

(げんしつ［言質］（名） やくそくのことば、しようこのことば。ことばじち。

(げんじつ［現實］（名） ㊀現在にあらはれてあること。㊁實際の事實又は狀態。理想の對。——かい［現實界］（名）【哲】實際の事實又は狀態のあらはれてある世界、即ち經驗の範圍。——てき［現實的］（名） 現存するさま又は實際なるさまにいふ。——は［現實派＝Realism］（名） 實際の事實又は狀態を立場とし目的として、說を立て又は事を行ふもの。理想派の對。

げんじな［源氏名］（名） 遊女などが營業上本名の外に附したる稱、若紫・紅梅・梅枝の類。

(げんしねつ［原子熱］（名）【化】元素の原子量と其比熱との相乘積、即ち一原子を溫むるに要する熱量の割合、元素に就きて殆ど皆な一定の値を有す。

げんじぶし［源氏節］（名） 一種の俗曲、歌祭文に似たるもの。

げんじまめ［源氏豆］（名） 一種の菓子、豆に砂糖をかけ紅色又は白色にしたるもの。はうらいまめ。

(げんじや［賢者］（名） かしこき人。けんじん。

(げんしや［縣社］（名） 縣より幣を奉る資格の神社、鄕社の上位なるもの。

(げんしやう［勸賞］（名） はげましほむること。又、手柄(テガラ)の褒美(ハウビ)。

(げんしやう［懸賞］（名） 賞をかけて物を募(ツノ)ること。

(げんしやう［兼掌］（名） かねつかさどること。

(げんしやう［肩章］（名） かたにつくるしるし。

(げんしやう［憲章］（名） のり。おきて。

(げんしやう［見性］（名）【佛】諸種の妄惑を照見して、自性の無性なることを覺悟すること、即ち、大悟徹底すること。

(げんしやう［肩牆］（名） 野戰にて、砲手若しくは砲車の掩護のために、土堀にて構築したるもの。

(げんじやう［堅城］（名） 防禦堅き城塞。

(げんじやう［謙讓］（名） へりくだりゆづること。さしでがましからざること。

(げんじやう［獻上］（名） ㊀さしあぐること、たてまつること。㊁「げんじやうはかた」の略言。

(げんじやう［券狀］（名） 手形。又、證文。

(げんしやう［現象］（名） ㊀あらはれたるさま。見ゆるかたち。㊁【哲】吾人に感知せらる、ものゝ形象。もの、吾人の主觀に映ずる相。本體の對。——かい［現象界］（名）【哲】感知の世界。形而下の世界、經驗の世界。

(げんじやう［現狀］（名） 現在のありさま。

(げんじやう［原狀］（名） もとのありさま。以前のかたち。——くわいふく［原狀回復］（名） ㊀もとの狀態にとりもどすこと、或狀態の生ぜざりし以前の如くになすこと。㊁【法】(い)民事訴訟にて、天災其他避くべからざる障害のために、不變期間を懈怠したるために受けたる權利の損害を除卻すること、其申立は障害の止みたる日より、十四日の期間內にこれをなすことを要するものとす。(ろ)民事訴訟にて、確定判決の基本たる事實に不法の點ある場合に、其判決の取消を求むること。

(げんじやうかうい［玄奘縞衣］（名）【動】鶴の異稱。

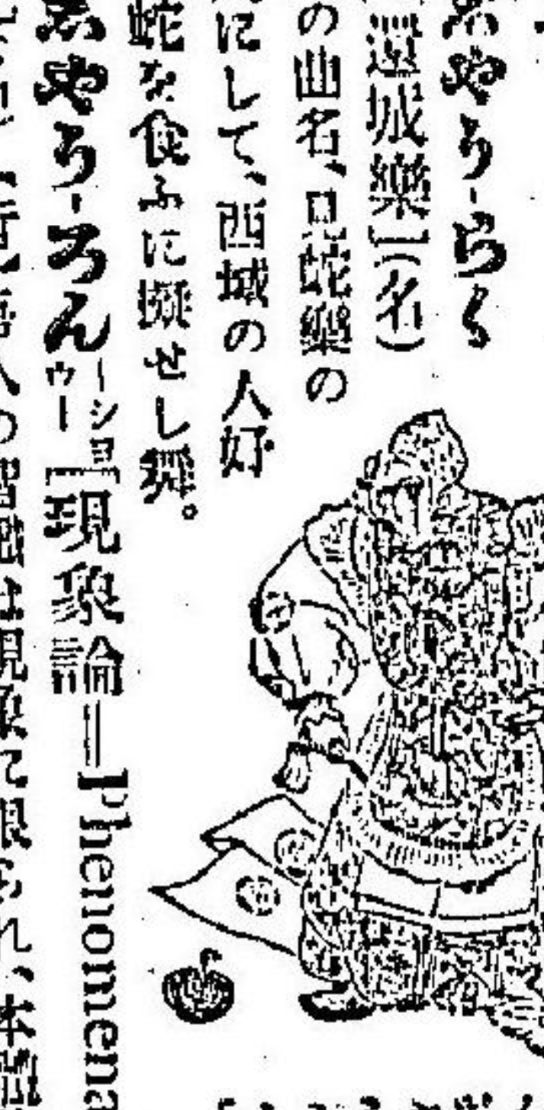
(げんじやうじやうぶつ［見性成佛］（名）【佛】見性して一切諸法の覺者となること。

(げんじやうだう［顯章堂］（名） 古昔、內裏の大極殿の東南にありたる堂の名。

げんじやうのしやうじ［賢聖障子］（名） 內裏の南殿の[illegible]の稱、東西各四間、これに支那の三代より唐までの聖賢、名士の肖像を描きたり

げんじやうはかた［獻上博多］（名） 博多織の上品なるもの、帶などに用ふ。

(げんじやうらく［還城樂］（名） 舞樂の曲名、已蛇樂の轉訛にして、西域の人好みて蛇を食ふに擬せし舞。



［げんじやうらく］

(げんしやうろん［現象論＝Phenomenalism］（名）【哲】吾人の智識は現象に限られ、本體其物の眞相を知る能はずといふ說。又、智識に現はれたる現象は即ち本體にして、智識を離れたる本體は存在せずといふ說。

(げんしやく［劍尺］（名） ものさしの一種、かねざしの一尺二寸を八段とせるもの、佛像・刀劍・門戶等をはかるに用ふ。

げんジヤリ［劍舍利］（名）【鑛】劍先の形になりたる石英の稱、又、かぶとすゐしやう。

(げんしゆ［卷鬚］（名）【植】莖の變形して絲狀をなし、他物に纏(マト)ひて莖の支持をなすもの「ゑんどうの—」。

(げんしゆ［黔首］（名） たみぐさ。人民。

(げんしゆ［元首］（名） 萬民のかしら。君主。

(げんしゆ［玄珠］（名） おくふかきまことの道理。

(げんしゆう［拳銃］（名）「ピストル」に同じ。

(げんじゆう［元戎］（名） ㊀大いなる兵車。「——十乘」。㊁國內の軍隊をすべつかさどるもの、元帥。

(げんしゆく［減縮］（名） へしてすくなくすること。へらしちゞむること。又、へりてすくなくなること。ちゞまりへること。

(げんしゆく［嚴肅］（名） ㊀おごそかなること。きびしきこと。㊁げんじゆうに自らつゝしみ守ること、克己すること、慾情を抑ふること。——しゆぎ［嚴肅主義＝Rigorism］（名）【倫】諸種の慾情を壓伏し諸種の快樂を拒絕し、理性の命令に從ひ己に克(カ)ち行を制するを以て道德の標準となす倫理說。

(げんじゆつ［劍術］（名） 擊劍、劍法。——つかひ［劍術使］（名） 劍術をつかふ人。又、劍術に巧なる人。

(げんじゆつ［幻術］（名） 魔法。妖術。又、てづま。

(げんしゆんもん［建春門］（名） 古昔の內裏の閤門の一、左衞門の陣。

(げんしよ［賢所］（名）「かしこどころ」に同じ。

(げんしよ［券書］（名） てがた。又、しようしよ。

(げんしよ［卷舒］（名） ㊀まくとのぶること。㊁自己の才能を世にあらはすとあらはさゞること。

(げんしよ［原書］（名） ㊀もとの文書、原本。㊁外國の文字を以て記してある文書、飜譯書の對。

(げんしよ［嚴暑］（名） きびしき暑さ。(酷暑)。

(げんしよう［健勝］（名） すこやか。丈夫。健康。

(げんしよう［謙稱］（名） 謙遜のとなへ。へりくだりていふ名目。

(げんしよう［健訟］（名） すこしの物事にても訴訟を提起すること。

げんしよう［檢證］（名） ㊀物事をとりしらべて正確にすること。㊁【法】判事が實地に臨みて證據物件をとりしらべて正確にすること。「——調書」。

(げんしよく［顯職］（名） 貴き官職。高官。

(げんしよく［減食］（名） 食物の量をへらすこと。

(げんしよく［現職］（名） 現任の官職。

(げんしりやう［原子量］（名）【化】或元素の原子と水素の原子との重さの比、酸素の原子量は一五・八八なり、然れども近來に至り、酸素の原子量を一六・〇〇とし、これに對する他の元素の原子の重量を其原子量と稱せり、然るときは水素の原子量は一・〇〇八なり。

げんじゑあはせ［源氏繪合］（名） 源氏物語五十四帖の趣を描(エガ)きたる繪を用ひてなす繪合。

(げんしん［檢眞］（名）【法】民事訴訟にて、私署證書の眞否をとりしらぶること。

(げんしん［檢診］（名） 取調のために診察すること。

(げんしん［賢臣］（名） かしこき臣。

(げんしん［懸針］（名） 筆法の一、竪(タテ)の畫の下端尖りて恰も針を懸るが如きさまにいふ。垂露の對。

(げんしん［權臣］（名） 權力ある臣下。

(げんしん［獻身］（名） 自分の利害を顧ずして力を盡くすこと。

(げんじん［賢人］（名） かしこき人、特に聖人に次ぐ德のある人。

(げんしん［現身］（名） ㊀現在の身、うつしみ。㊁【佛】「おうじん」(應身)に同じ。——ブツ［現身佛］（名）【佛】「おうじんブツ」(應身佛)に同じ。

げんじんじだい［原人時代］（名） 人類いまだ蒙昧にして、事を記す文字なく、生を遂ふ生業なく、たゞ木實などを食ひて棲息せし太古の時代。

(げんじんしやくわい［原人社會］（名） 原人時代の人類社會。

(げんしんどう［原振動］（名）【理】發音體が原音を發するときの振動。

げんす（せしすするすれせよ）［鈐］（他、さ變） ㊀鍵をおろす。㊁個理を捺す。

げんす（せしすするすれせよ）［檢］（他、さ變） とりしらぶ。あらたむ。

げんず（ぜじずずるずれぜよ）［獻］（他、さ變） たてまつる、さしあぐ。

げんず（ぜじずずるずれぜよ）［減］（自、さ變） 少なくなる、へる。

げん-ず（ぜじ・ずる・ずれ・ぜよ）[減](他、さ變) ㊀へらす。へす。はぶく。㊁減算をなす。ひく。

げん-ず（ぜじ・ずる・ずれ・ぜよ）[現](自、さ變) あらはる。

げん-ず（ぜじ・ずる・ずれ・ぜよ）[現](他、さ變) あらはす。

(げん-すう)[間數](名) 間(ケン)の數。

(げん-すう)[軒數](名) 家の數。戸數。

(げん-すう)[件數](名) 事件のかず。

(げん-すう)[現數](名) 現在の數量。

(げん-すけ)(名) のろま。へた。又、かけだしもの等をのゝしりていふ語。(大阪地方の俚語)。

げん-ずまふ（モウ）[拳相撲](名) 一種の遊戲。拳をもて勝負を爭ふと。

(げん-すゐ)[建水](名) みづこぼし。

(げん-すゐ)[減水](名) 水かさの減ると。

(げん-すゐ)[元帥](名) ㊀軍勢の總大將。(大將軍)。㊁元帥府に列する陸海軍大將に賜はる稱號。時により勅を受けて陸海軍の檢閲を行ふ。——ふ[元帥府](名) 天皇陛下の軍事上の最高顧問府。

(げんすゐ-せき)[玄水石](名) 磁石(ジシャク)の異稱。

(げん-せ)[現世](名) 【佛】諸惡の諸行生起せる此世。人の現に生を受けてある世。現在の世。

(げん-せい)[權勢](名) いきほひ。ゐせい。權力。權威。

(げん-せい)[賢聖](名) 賢人と聖人と。又、知識道徳の最もすぐれたる人。

(げん-せい)[建制](名) たてつくると。まうけさだむると。

(げん-せい)[牽制](名) ㊀ひきとゞめて、自由を束縛すると。㊁自由の行動のさまたげをなすと。——うんどう[牽制運動](名) ㊀敵軍をして或方面に向ひて、防禦又は攻擊をなし得ざるやうに仕向くる軍隊の行動。㊁すべて他のものゝ運動の妨害をなすための行動。

(げん-せい)[憲政](名) 憲法に依りて行ふ政治。立憲政治。——たう（トウ）[憲政黨](名) 明治三十一年六月自由黨と進步黨との合同して組織せし政黨の名。又、其同年九月の分裂後、舊自由黨員の標榜せし黨名。——ほんたう（トウ）[憲政本黨](名) 憲政黨の分裂後、舊進步黨員の標榜せる黨名。

(げん-せい)[縣稅](名) 縣内に住する者、縣内に三ヶ月以上滯在する者、縣内に於て土地家屋物件を所有し若しくは使用又は營業所を有する者に對して縣の賦課する租稅。

(げん-せい)[嚴制](名) きびしきおきて。げんぢゅうなるさだめ。

(げん-せい)[現世](名) いまのよ。げんだい。

(げん-せい)[芫菁](名) 【動】「はんめう」に同じ。

(げん-せい)[嚴正](名) 嚴重に正しくすると。きびしくたゞしきと。——ちゅうりつ[嚴正中立](名) きびしく局外中立の態度を守り、彼此の交戰國に對して何等の妨害又は援助をなさゞると。

(げんせい-せつ)[原生說](名) 地球上に於ける幾千萬の生物は、皆な其本源を一にすれど、進化發達を異にせしより、幾千萬年の間に漸々變遷して今日の狀態となりたりといふ說。

(げんせい-どうぶつ)[原生動物](名) 原形質より成る最下等動物、構造極めて簡短、槪ね微小にして肉眼を以て見る能はず。「アミーバ」の類これなり。

(げん-せう)（シヨウ）[顯證](名) 「けんしよう」の訛。

(げん-せう)（シヨウ）[喧擾](名) さわがしきと。そう〴〵しきと。かまびすしきと。

(げん-せう)（シヨウ）[言笑](名) ことばつかひとわらひがほと。又、かたりつ笑ひつすると。「一自若」。

(げん-せう)（シヨウ）[減少](名) ものゝすくなくなると。又、ものをすくなくすると。(減殺、減損、減省)

(げん-せき)[譴責](名) ㊀とがめ責むると。とがめ。㊁官吏の懲戒の一、過去の失策をとがむると。

(げん-せき)[堅石](名) 質堅き石。

(げん-せき)[嚴責](名) きびしくせむると。

(げん-せき)[言責](名) ㊀嘗て證言せし責任。㊁物事に就きて是非を言ふべきせめあると。

(げん-せき)[原籍](名) 最もはじめの籍。本籍。寄留籍の對。——ち[原籍地](名) 其人の本籍ある土地。

(げん-せき)[玄石](名) 玄水石の略言。

(げん-せつ)[建設](名) たてまうくると。かまへつくると。

(げん-せつ)[言說](名) いひとくと。いふと。又、其主意。

(げん-せつ)[原說](名) もとの說。はじめの主意。

(げんせ-てき)[現世的](形) 說く所の主旨の範圍が、おもに現世を限とし、現世を超越したる境に及ばざるさまにいふ。

(げん-せん)[健羨](名) いとうらやましきと。

(げん-せん)[捲線](名) 【理】絕緣線を螺旋狀に捲きたるもの。「コイル」。

(げん-ぜん)[健全](名) ㊀身體のすこやかなると。達者。丈夫。㊁常態を失せずしてよく活動すると。感情に偏せずして精力すこやかなると。「—なる思想」。——がく[健全學](名) 身の養生の學問。衛生學。養生學。

(げん-ぜん)[泫然](名、副) 涙のはら〳〵と流るゝさまにいふ語。

(げん-ぜん)[儼然](名、副) おごそかなるさまにいふ語。

(げん-ぜん)[現然](名) まのあたり。現在。

(げん-そ)[險阻](名) けはしきと。けはしき所。(嶮岨)。

(げん-そ)[元素](名) ㊀もと。ねもと。㊁【化】現今知られ居る方法にては、如何にすとも二つ以上の物質に分つべからざる物質、即ち、酸素・水素・窒素・硫黃などの類、これを金屬元素・非金屬元素の二つに分つ。(原素)。

(げん-そ)[減租](名) 租稅の額をへすと。

(げん-そう)[顯證](名) 明かなると。

(げん-そく)[賢息](代) 他人の息子の敬稱。

(げん-そく)[羈束](名) ㊀拘泥すると。㊁束縛すると。

(げん-そく)[檢束](名) ㊀取締りて自由になさしめざると。㊁つゝしませて放縱ならしめざると。

(げん-ぞく)[眷屬](名) うから。やから。いちもん。

(げん-そく)[原則](名) 數多の現象に共通なる法則。又、普通の場合に適用せらるゝ法則。

(げん-ぞく)[還俗](名) 僧をやめて、俗にかへると。

(げん-そくどう)[減速動](名) 【理】時間の經過するに從ひ、運動の路程の次第に減退し行くと。

(げん-そん)[謙遜](名) へりくだると。卑下すると、ひかへめにすると。(謙退)。

(げん-そん)[減損](名) へると。又、へすと。

(げん-そん)[玄孫](名) ひこの子。やしやご。

(げん-そん)[現存](名) 現在してあると。現にながらへてあると。「一の人物」。

(げん-たい)[兼帶](名) 二つ以上のもの、用を一つのものが兼ぬると。かけもち。

(げん-だい)[倦惰](名) うみおこたると。あきてなまけると。

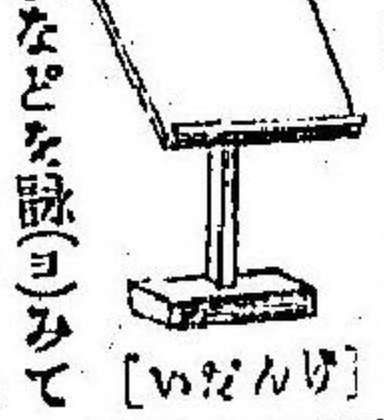
(げん-たい)[獻替](名) 萬事につけて主君によしあしを申上ぐると。

(げん-たい)[倦怠](名) うみおこたると。

(げん-たい)[謙退](名) へりくだると。

(げん-たい)[賢臺](代) 同輩若しくは同輩以上の敬稱。

(げん-だい)[見臺](名) (書見臺の略) 書物を載せて見る具。高さ適應なる一本若しくは一本の支柱をたて、上に斜に板を載するもの、其斜なる板の上に書を載す。(書架、類架)。


[けんだい]

(げん-だい)[兼題](名) (兼日の題の義) 歌會の當日までに、各歌などを詠(ヨ)みて出さしめんがために、數日前に、其題を出しおくと。

(げん-だい)[憲臺](名) 政事の可否又は官吏の正邪に就て君主に言上する職。

(げん-たい)[原態](名) もとのありさま。

(げん-たい)[現態](名) いまのありさま。

(げん-たい)[減退](名) へりまりぞくと。すくなくなると。

(げん-だい)[現代](名) いまのよ。たうだい。げんこん。方今。——しさう（ソウ）[現代思想](名) 現代に於て、最も勢力ある人生觀又は社會觀の傾向。

(げん-たう)（トウ）[見當](名) ㊀めあて。方向。㊁鐵砲の照尺。(前照星)。——ちがひ（チガイ）[見當違](名) ㊀めあてちがひ。㊁やぶにらみ。

(げん-たう)（トウ）[喧鬧](名) さわがしきと。かまびすしきと。

(げん-だう)（ドウ）[權道](名) 手段は正經ならざれど目的は正經に合するを。はかりごと。

(げん-だう)（ドウ）[萱堂](名) 母の稱。

(げん-だう)（ドウ）[縣道](名) 道路の種別の一、各縣を接續し若しくは當該縣廳より縣下の首要地に達する等の道路の稱。

(げん-だう)（ドウ）[劍道](名) げんじゅつ。げきけん。——しゃ[劍道者](名) けんじゅつつかひ。

(げん-たう)（トウ）[現當](名) 【佛】現世と將來と。

(げん-たう-し)（トウ）[遣唐使](名) 古昔、支那の唐朝の頃に日本より遣はし、使者。

(げん-たつ)[嚴達](名) きびしきたっし。

(げん-たん)[健啖](名) たっしやにくふと。多量にくふと。

(げん-だん)[檢斷](名) 理非の裁判。——しよく[檢斷職](名) 鎌倉時代の、檢斷の事にあたりし職名。

(げん-たん)[元旦](名) 「ぐわんたん」に同じ。

(げん-たん)[嚴探](名) きびしくさぐると。

(げん-だん)[嚴談](名) 手ひどく談判すると。

(げん-ち)[檢地](名) 地を測量すると。(方量)。

(げん-ち)[軒輊](名) ㊀あげさげ。あがりさがり。㊁たかひく。優劣。

(げん-ち)[縣治](名) ㊀縣の行政。㊁縣廳の所在地。

(げん-ち)[縣地](名) 縣下。地方。

(げん-ち)[硯池](名) すゞりのうみ。

(げん-ち)[見地](名) みるところ。かんがふるところ。

(げん-ちう)[繭紬](名) 支那より輸入する一種のつむぎ、柞蠶の絲にて織りたるもの。(絹紬、絹綢)。

ケン-チエン[卷織](名) 「ケンチャン」に同じ。

(げん-ちく)[建築](名) 家屋・倉庫などをたてつくると。——がく[建築學](名) 建築に要用なる事項を學理的に研究する科學。——ぶつ[建築物](名) 建築したるもの、即ち家屋・倉庫等の稱。たてもの。

(げん-ちじ)[縣知事](名) 縣の知事。

げん-ちゃ[獻茶](名) 抹茶をたて、神佛に供(ソナ)ふると。

(げん-ちやう)（チョウ）[縣廳](名) 縣知事が其權限に屬する事務を處理する所。縣の治所。

(げん-ちやう)（チョウ）[原腸](名) 卵の胚囊の腔、生育して消化器の大部分となる。

(げん-ぢやう)（ジョウ）[現場](名) 現に其物事のありし場所。げんば。

ケン-チャン[卷織](名) ㊀一種の料理、黑豆のもやしを油にて煎(イ)りたるもの、醬油と鹽とをもて食ふ。支那より傳來せり。㊁一種の料理、野菜など

を油もて煮、それに醬油又は味噌などを入れて汁にしたるもの。――**ぢる**[卷纖汁](名) 前條(二)に同じ。

(げん-ぢゅう)[嚴重](名) いかめしきこと、きびしき「と。

(げん-ぢゅう)[現住](名) ㊀寺の現在の住職。㊁現在の住所。

(げん-ちよ)[顯著](名) いちじるしきこと。あきらか「にあらはるゝを。

(げん-ぢよ)[賢女](名) 賢(かしこ)き女。(賢婦)。

(げん-ちよ)[原著](名) もとの著作。飜譯などの對。――**しや**[原著者](名) 原書を著作したるもの。もとの著作者。

ケン-チン[卷纖](名) 「ケンチャン」に同じ。

げんつき-でっぱう[劍付鐵砲](名) 小銃の先端に劍をつけたるもの。

(げん-つく)[劍突](名) あら〳〵しき小言。

(げん-てい)[獻呈](名) たてまつるを。けんじや「う。

(げん-てい)[懸蹄](名) 「ぐうているゐ」(偶蹄類)の條を見よ。

(げん-てい)[獻替](名) 「けんたい」に同じ。

(げん-てい)[檢定](名) 檢査してよしあしを定むるを。――**しけん**[檢定試驗](名) ㊀けんていのために行ふ試驗。㊁中學校・師範學校・高等女學校の教員又は小學校の教員たる學力資格の有無を檢定するために行ふ試驗、前者は文部大臣これを行ひ、後者は府縣知事これを行ふ。及第者には教員免許狀を下附す。――**れう**[檢定料](名) 檢定をこふための手數料。

(げん-てい)[賢弟](代) 年下の男子に對して用ふ「る敬稱、

(げん-てい)[限定](名) かぎりさだむるを。――**しようにん**[限定承認](名) 【法】相續の承認の一、相續人が相續により得たる財產の限度に於て

のみ、被相續人の債務及遺贈を辨濟すべきことを留保するを。

(げん-てう)[玄鳥](名) 【動】「つばめ」の漢名。

(げん-てき)[涓滴](名) ㊀したゝり。しづく。㊁少しばかりの物事にいふ語。「―の益」。

(げん-てつ)[賢哲](名) 知識深く事理に明かなる人。かしこき人。すぐれたる人。

(げん-てん)[圈點](名) 文章の妙所又は要所の傍側に、目立たしめのために付くる小さき環の點。

(げん-でん)[喧傳](名) かまびすしくいひつたふるを。多人數のつたへいふを。

(げん-でん)[硯田](名) 文士などの生活のたよりとする文を草し字を書くに用ふる硯を、農夫の生活のたよりとして耕作する田にたとへいふ語。

(げん-てん)[原點](名) ㊀運動の始まりたる位置。延長の起りたる箇所。㊁【數】一定點より引きたる直線が、此定點の周圍に回轉するとき、直線に對する定點の稱。

(げんでん-き)[驗電器](名) 【理】物體の發電を驗するに用ふる器械、即ち、金箔驗電器の類。

(げん-ど)[權度](名) はかりとものさしと。又、の「り。きそく。

(げん-ど)[限度](名) かぎり。ほど。

(げん-とう)[健鬪](名) 屈せずにたゝかふを。

(げん-とう)[玄冬](名) 冬の異稱。

(げん-とう)[舷燈](名) ふなばたにともす燈火。

(げん-とう)[減等](名) 等級を減(へ)らし下すを。

(げん-とう)[嚴冬](名) 寒さきびしき冬。

(げん-とう)[幻燈](名) ㊀幻燈器械を用ひ暗室內に於て、小さき繪畫の擴大なる像を障壁又は白幕などに映ぜしむるもの。うつしゑ。かげゑ。㊁げんとうきかい」に同じ。――**きかい**[幻燈器械]

(名) 幻燈の器械、內部を黑く塗りたる箱に伸縮自在なる鏡筒を附け、其先端と箱に接續せる所とに各凸「レンズ」を嵌入して、其間に繪畫の板を入れ、箱の後壁に反射鏡を附くる裝置なり、今其焦點に「ランプ」を置けば、光は鏡筒と箱との接續せる處にある「レンズ」のために集束せられ強く繪畫の板を照し、筒先の「レンズ」により擴大なる倒像を現出せしむ。

(げん-どう)[言動](名) ことばとふるまひと。いふ所と行ふ所と。

(げん-どう)[原動](名) 運動をおこすもと。活動のもと。――**き**[原動機](名) 【理】位置の「エネルギー」又は其他の「エネルギー」を利用して、機械仕事をなさしむる器械、即ち蒸氣機關・電動機等これなり。――**りよく**[原動力](名) ㊀【理】物體又は器械をして運動を起さしむる「エネルギー」の稱、水力・風力・電力等これなり。㊁すべて物事の活動をなさしむる勢力の稱。

(げん-とく)[賢德](名) 賢明なる德。「―有り」。

(げん-とく)[謙德](名) 物事に謙遜する道德。

(げん-とく)[乾德](名) 天子の德。

(げん-とく)[見德](名) とみくじ。――**うり**[見德賣](名) とみくじを賣るを。又、其人。

けんど-ちやうらい[捲土重來](名) 一旦敗れたるものが、更に全力を擧げて進擊し來るを。

けん-どん(名) 上下又は左右に溝ありて、そこに蓋又は戶をはめ得るやうにつくりたるもの。「―の蓋」。

(けん-どん)[絹緞](名) 太く織りたる絹紬。

(けん-どん)[儉飩](名) 「けんどんそば」の略言。――**そば**[儉飩蕎麥](名) そばきりの一種。

(けん-どん)[慳貪](名) ㊀極めてやぶさかなるを。貪慾の心の深きを、物を吝嗇するを。㊁邪見、苛酷

――**もの**[慳貪者](名) 慳貪なる人。「慈悲を知らぬ―が」。

(けん-ない)[縣內](名) 縣の管轄內。

(けん-ない)[權內](名) 權限の範圍內。

(けん-ない)[圈內](名) 範圍の內。「勢力―」。

(けん-なふ)[獻納](名) ものをけんじをさむる「を。

げん-なま[現生](名) 未だ人の手指つかざるなま〳〵しき紙幣、轉じて、現金の異稱。

(けん-なん)[劍難](名) 刃物の災難に遇ふを。殺傷の難にかゝるを。「―の相」。

(けん-なん)[險難](名) けはしきを。(險阻)。

げん-に[現](副) げんざいに。てきめんに。まのあたりに。(目下)。

げん-に[嚴](副) きびしく。げんぢゆうに。

(けん-にん)[兼任](名) 二個以上の職務に兼ねて任ぜらるゝを。「―の相」。

(けん-にん)[堅忍](名) よく堪へ忍ぶを。

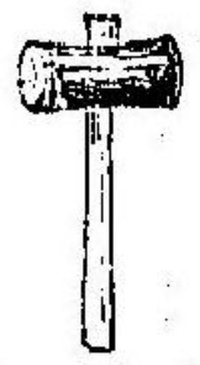
(げん-にん)[現任](名) 現在其職にあるを。又、其「人。

(けん-にん)-じ[建仁寺](名) 建仁寺垣の略言。――**がき**[建仁寺垣](名) 竹を割りて皮を外に平たく並べて結びたる垣、京都の建仁寺に始まりしもの。けんにんぢ。

(けん-ねん)[懸念](名) こゝろがゝり。けねん。

(けん-のう)[權能](名) 權利を主張し行使し得る能力。

げん-のう[源翁](名) (殺生石をくだきたりといふ玄翁法師の名に出づ)石をわるかなづち、鐵にて造り頭太し。


〔げんのう〕

げん-の-しようこ[牻牛兒](名) 【植】牻牛兒科に屬する草、葉は掌狀に分裂し、花は整齊にして淡紅色なり、雄蘂は通常皆な葯を具す、莖葉ともに藥用に供せらる。みこしぐさ。(鬭牛兒)。

(けん-のん)[險難](名) (險難の轉訛)あやふきを。(危險)。――**しやう**[險難性](名) 物事をけんのんがる性質。――**がる**(自、ら四) あやぶむ。危く思ふ。

(けん-ば)[犬馬](名) ㊀いぬとうまと。㊁自分に關する物事の謙稱。「―の勞」「―の齡」。

(げん-ば)[玄蕃](名) ㊀「げんばれう」の略言。㊁玄蕃寮に屬する官名。㊂火災の時などに、水を運ぶ火いなる稱。

げん-ば[現場](名) ㊀其物事のありし場所。㊁め「のまへ」、實地。

(けん-ぱい)[獻盃](名) 盃を人に差すとの敬語。

(けん-ばう)[健忘](名) ㊀記憶力の極めて薄きと。㊁病氣によりてよく物事をわするゝを。さぬけ。――**しやう**[健忘症](名) 健忘の病氣。

(げん-ばう)[言貌](名) ことばと樣子と。

(けん-ぱく)[建白](名) ㊀上に對して自己の意見を陳述するを。建言。㊁建白書の略言。――**しよ**[建白書](名) 建白の主意をしたゝめたる書面。

(けん-ぱく)[堅白](名) ㊀支那戰國時代の公孫龍が說きし一種の論法、其例として、質堅く色白き石ありとせんに、目にて見たるときは、其白きを見て其堅きを知らず、其堅きを知るは手のこれに觸るゝによる、されど其時は其堅きを知るのみ、故に堅と白とは異にして、堅石と白石とは同一のものにあらずと說けり。㊁轉じて、普通人の肯定するを否定し否定するを肯定するを。――**どうい**[堅白同異](名) 堅は白にあらずと說き、異なるを同じとし、同じきを異なりとするを。

(けん-ぱつ)[圈發](名) 漢字の四聲を示す符號、多くは方形の四隅に圈點を記するものを用ひ、□を平聲□を上聲□を去聲□を入聲とす。(點發)。

(けん-ぱつ)[遣發](名) 人をつかはしやるを。

(げん-ばつ)[嚴罰](名) 嚴(きび)しき罰。

(けん-ぱふ)[憲法](名) ㊀おきて。のり。㊁【法】國權の本體及作用を規定する大法、即ち、統治主權の主體・客體及機關・作用の大則を規定するもの。

(けん-ぱふ)[拳法](名) 拳(こぶし)をもて人と格鬪する技術。

(けん-ぱふ)[劍法](名) 劍術。

(げん-ぱふ)[嚴法](名) きびしきおきて。きび「しきはつ、

(げん-ぱふ)[減法](名) 【數】或數より或數をひき去りて其差を計算するを。

げんぱふ-ぞめ[憲法染](名) 一種の染め方、黑茶色に小紋を染むるもの、京都の人吉岡憲法といふもの始めて染め出したりといふ。

‡げんば-れう[玄蕃寮](名) 古昔、治部省の所管に屬し、外國に對する事及僧尼の度牒・佛寺の刑政の事等を掌りしもの。

(けん-ばん)[檢番](名) 藝妓屋のとり締まりする「所。(見番)。

(げん-ぱん)[原版](名) もとの印刷版。

(けん-び)[兼備](名) 兼ね備ふるを。あはせたもつ「を、

(けん-び)[拳匪](名) 支那に於ける頑冥なる一種の匪徒、大いに拳法を尊信す。

(げん-び)[玄微](名) ふかくふかく極めて微妙なる「を、

(げん-び)[原微](名) 發達の度低くして極めて微小なるを。「―藻」「―植物」。

(げん-び)[原被](名) 訴訟の原告と被告と。(兩造)。――**さうはう**[原被雙方](名) 原告と被告との雙方。――**りやうざう**[原被兩造](名) 前條に同じ。

げん-びき[痃癖](名) 「けんぺき」に同じ。

(けん-び-きやう)[顯微鏡 ＝ Microscope]

（名）細微なる物體を擴大して見る具、一個の凸「レンズ」は即ち顯微鏡なれど、普通顯微鏡と稱するは、圓筒の一端に凸「レンズ」あり、これを對物「レンズ」といふ、これに嵌入する圓筒ありて、其端に又凸「レンズ」を備ふ、これを接眼「レンズ」といふ、對物「レンズ」は焦點距離の甚だ短きものなり、但し其球面收差を減少せしめんがため、其形の甚だ小さきものを用ふ、對物「レンズ」の前に物體を置き、第二の圓筒を適宜に出入して接眼「レンズ」より見るなり。むしめがね。

けん-びし［劍菱］（名）㊀紋所の名、菱形の四隅を、劍さきの形に尖（とが）らせたるさまを描（ゑが）きたるもの。㊁攝津國伊丹（いたみ）産の上酒、菰（こも）にけんびしの紋をゑがけるより此名なり。

（**けん-ぴつ**［健筆］（名）達者に字をかくこと。又、達者に文を作ること。

（**げん-ぴつ**［減筆］（名）ふでかずを少なくすること。

（**けん-びやう**（ヒヨウ）［硯屏］（名）硯の邊に立て、塵埃などを防ぐ具、小さきついたての如く造りしもの。

（**けん-ぴよう**［堅氷］（名）あつきこほり。かたきこほり。あつごほり。

艹**けん-び-ゐし**［檢非違使］（名）「けびゐし」に同じ。

（**げん-ぴん**［現品］（名）實際のしなもの。

（**げん-ぴん**［原品］（名）もとのしなもの。

（**けん-ぷ**［絹布］（名）絹おりもの。

（**けん-ぷ**［賢婦］（名）かしこき女。

（**けん-ぶ**［劍舞］（名）刀を持ち詩歌を吟ずるにつれてなす舞。

（**げん-ぶ**［玄武］（名）四神の一、北方のもの、龜の象を圖とす。――**がん**［玄武岩］（名）概ね暗黑色にして緻密なる火山岩、斜長石・輝石・磁鐵鑛及橄欖石などより成る、往々柱狀節理をなして多くの石柱を立てたる壯觀を呈す、但馬國の玄武洞の如きこれなり、石材として種々の用に供せらる。

（**げん-ぷく**［元服］（名）㊀昔時、男子成人して服を改め、髮を理し、冠を加ふるときに行ひし儀式、此時幼名を廢して烏帽子名を付く、公家衆の元服は、髻を短くして紫の緒にて卷き、眉を剃り黛にて高眉を付け、齒を黑む。うひかうぶり。（首服、始冠）。㊁昔時、嫁したる女の眉を剃り齒を染め髮を丸髷などに結びしこと。「―姿の女」。

（**げん-ぷく**［袨服］（名）はれのきもの、麗しき衣。

（**けん-ぶつ**［見物］（名）㊀みせものを觀ること。ものみ。いうらん。「京都―」。（縱覽）。㊁「けんぶつにん」の略言。――**にん**［見物人］（名）けんぶつする人。みて。（看人、觀客）。

（**げん-ぶつ**［現物］（名）㊀現在の品、正物。㊁現金の稱。

（**げん-ぶつ**［元物］（名）果實を生ずる本、例へば利息に對する元金の如し。

（**けん-ぶん**［檢分］（名）立合ひてとりしらぶること、とりしらべ。（見分、檢閱）。

（**けん ぶん**［見聞］（名）見ると聞くこと。みきゝ。けんもん。

（**げん-ぶん**［原文］（名）謄寫又は飜譯若しくは改作などしたるもとの文章。

（**げん-ぶん**［言文］（名）言語と文章と。――**いっち**［言文一致］（名）文字を以て表はす文章の綴字・語法等を、口舌に擧げていふ言語と同一にすること。

（**けん-ぺい**［兼幷］（名）合はせ取ること。

（**けん-ぺい**［憲兵］（名）陸軍大臣（朝鮮にては朝鮮總督）の管轄の下に屬し、行政及司法警察の執行を掌る特種の兵、將校下士及上等兵より成り、各地に配置せらる。――**しれいくわん**［憲兵司令官］（名）憲兵司令部の長官、陸軍少將若しくは大佐を以てこれに充つ、各地の憲兵を統轄し司令部の事務を總理す。――**しれいぶ**［憲兵司令部］（名）全國の憲兵事務を總轄する所。

（**けん-ぺい**［權柄］（名）ゐけん。けんりよく。いきほひ。――**がまし**［―がましき、しく・しけれ］（形、二）權力を誇（ほこ）るやうに見ゆ。――**づく**［權柄付］（名）權柄にまかせて事をなすこと。――**づら**［權柄面］（名）けんぺいがましき顏つき。

（**げん-ぺい**［現兵］（名）其場にありあはす兵士。

（**げん-ぺい**［源平］（名）（源氏と平氏との義にて、其旗色の源氏は白く平氏は赤きより出づ）白と紅と。――**もも**［源平桃］（名）【植】桃の變種、花は重瓣にして、紅白咲（ざ）きわけのもの。

（**けん-ぺき**［痃癖］（名）㊀頸より肩及脊にかけて筋の時々ひきつること。㊁按摩すること、あんま。

（**けん-べつ**［軒別］（名、副）毎戶。いへごと。

（**けん-べん**［軒冕］（名）㊀貴人のかうむる高き冠。㊁轉じて、高き官位。

（**けん-ぺん**［權變］（名）變に應じ事を處置すること。

（**けん-ぽ**［畎畝］（名）㊀田のみぞとあぜと。㊁轉じて、賤しき農民の地位。「―の中より起る」。

（**けん-ぽ**［健步］（名）たつしやにあるくこと。

（**げん-ぽ**［原簿］（名）㊀謄寫又は改作したるもとのちやうめん。㊁簿記の主要帳簿の一、仕譯の口座を設けて、貸借の記入をなすもの。もとちやう。

（**けん-ぽく**［硯北］（名）（硯の北側の義）おそば。おひざもと。（手紙などに用ふ）。「某君の―」。

（**けん-ぼう**［權謀］（名）臨機の策略、又、正直にあらざる策略。（權略）。――**か**［權謀家］（名）よく權謀を行ふ人。（策士）。

（**けん-ぼう**［劍鋒］（名）劍のはさき。

（**げん-ぽう**［減俸］（名）俸給の額を減ずること。

（**げん-ぼう**［元謀］（名）はかりごとの主唱者。

げん-ぽ-なし［玄圃梨］（名）【植】鼠李科に屬する木、樹幹長大に生長す、花は小形にして帶紅色なり、蕚は廣卵形にして三大脈あり、花梗は花後に肥大し食用とすべく、木材は種々の用に供せらる。（枳椇）。

（**けん-ぽん**［絹本］（名）きぬ地。「―のかけ軸」。

（**けん-ぽん**［獻本］（名）書籍を進呈すること。又、其書籍。

（**けん-ぽん**［見本］（名）みほん。

（**げん-ぽん**［元本］（名）「ぐわんぽん」に同じ。

（**げん-ぽん**［原本］（名）㊀もと。ねもと。㊁もとの書物。もとの文書。げんぽん。

（**けん-ま**［研磨］（名）㊀すりみがくこと。㊁けんきう。れんまふ。

（**けん-ま**［肩摩］（名）肩と肩と相觸るゝこと。――**こくげき**［肩摩轂擊］（名）人馬車輛の往復雜遝すること。（轂擊の條を見よ）。

（**げん-まい**［玄米］（名）籾（もみ）を去りて未だ搗（つ）かぬ米。くろごめ。

（**げん-まい**［現米］（名）㊀實際にある米。其場にありあはする米。㊁祿として宛てがふ米。

（**けん-まく**［劍幕］（名）物凄（すご）きかほのさま。あらくしき容貌。

けん-まはし（ワシマ）［拳回］（名）昔時、拳相撲（ケンズマフ）せし時、手にかけたる甲がけの類。

（**げん-まん**（名）（いつはれば拳固を萬回受くるの義）いつはりなきこと、まこと。（東京の小兒の俚語）。

けん-み［檢見］（名）（毛見の轉訛）㊀實際に就きて稻作を檢（しら）べ、年貢（ねんぐ）又は小作米等の高を定むること。又、其人。㊁檢査すること。又、其役。

（**けん-みつ**［顯密］（名）㊀あきらかなるとひそかなると。㊁【佛】顯敎と密敎と。

（**げん-みつ**［嚴密］（名）嚴重にしてこまかき物事をもらさぬこと。

（**けん-む**［兼務］（名）かねつとむること。又、其つとめ。（兼勤）。

（**げん-む**［幻夢］（名）㊀ゆめまぼろし。㊁はかなき形跡。

（**けん-めい**［懸命］（名）いのちがけ。又、力一ぱい。

（**けん-めい**［尊命］（名）尊長などの命令の敬語。

（**けん-めい**［賢明］（名）性質正しくして事理に明かなること。かしこきこと。又、其人。

（**げん-めい**［嚴命］（名）きびしき命令、きびしきおほせ。

（**げん-めい**［嚴明］（名）號令などのきびしくして明かなること。

（**げん-めい**［言明］（名）言語にあらはしのぶること。

（**げん-めう**（ヨウ）［玄妙］（名）幽玄にして精妙なること。おくふかくしてたへなること。又、其道理又は技藝。

（**けん-めん**［硯面］（名）硯の墨をする處。

（**けん-めん**［券面］（名）㊀證券の數額などの記してあるかた。㊁券面額の略言。――**がく**［券面額］（名）券面に記してある數額。「公債の―」。――**だか**［券面高］（名）前條に同じ。

（**げん-めん**［減免］（名）等を減じてゆるすこと。

（**げん-もく**［玄默］（名）ものしづかにしてみだりに言說せざること。おくゆかしく默してゐること。

（**げん-もく**［眩目］（名）まばゆきこと。

艹**けん-もつ**［監物］（名）古昔、中務省に屬して、出納（スヰタフ）を監察し管鑰を掌りしもの。

（**けん-も-ほろろ**（名）（けん及ほろゝは雉子の鳴き聲）取り付く術（すべ）もなきこと。「―の挨拶」。

（**けん-もん**［權門］（名）㊀官位高く權力多き家。㊁轉じて、まひなひ又はいんもつ等の稱にいふ。

（**けん-もん**［見聞］（名）見ると聞くこと。みきゝ。けんぶん。

（**げん-もん**［諺文］（名）「オンムン」に同じ。

（**げん-や**［原野］（名）のはら。はら。

（**けん-やく**［儉約］（名）㊀物事を放縱又は散漫にせざること。つゞまやか。（節省）。㊁費用をつゞまやかにすること。浪費せぬこと。（節儉）。㊂費用のいらぬこと。とくになること。

（**けん-やく**［兼役］（名）役目をかねもつこと。又、かねもつ役目。けんむ。

（**けん-やく**［鍵鑰］（名）㊀ぢやうまへ、かぎ。㊁內に入りこむ要所のまもり。

（**げん-ゆ**［原由］（名）もとづく所。もと。

（**けん-よ**［肩輿］（名）駕籠（かご）。（轎）。

（**けん-よ**［權輿］（名）（支那の衡（はかり）をつくるは權より始め車をつくるは輿よりはじむとの義に出づ）はじめ。はじまり。おこり。

（**けん-らう**（ロウ）［堅牢］（名）堅固にして丈夫なること。かたきこと。

（**げん-らう**（ロウ）［元老］（名）㊀官位年齡又は德望のすぐれて高き功臣。㊁轉じて、其部內にて年久しくつとめ居て功勞あるもの、稱。――**くわいぎ**［元老會議］（名）國家の元老が國事に關し、會合してなす評議。

げん-らう-ゐん（ロウ）［元老院］（名）㊀明治八年四月に設立せられ同廿三年三月に廢止せられたる官府、元老院議官を以てこれを組織し、議長及幹事を置き、法律案の討議又は御諮詢の奉答等の權限ありしもの。㊁共和國などにて上院の稱。――**ぎくわん**［元老院議官］（名）我國の元老院を組織せし議員、時の官位高く名望厚き功臣より採用せられたり。――**ぎゐん**［元老院議員］（名）元老院を組織する議員。

げんり［權利］Right（名）㊀【法】法律の創定保護により人の享受する利益。㊁物事をなし得る資格。自由に物事を處分し得る分限。——**かうゐ**［權利行爲］（名）【法】權利を行使する行爲。又、法律行爲。——**きようつう**［權利共通］【法】共同訴訟にて、數人間に共同の權利ある場合の稱。——**くわいふく**［權利回復］（名）【法】他人のために權利を侵害せられたるものが、裁判所の判決によりて其權利を回復すること。——**くわんけい**［權利關係］（名）【法】權利者が法の力によりて義務者の意思を制限し、義務者が法の力に服從して權利者の意思に從ふ關係。——**こうそく**［權利拘束］（名）【法】訴訟の提起によりて生ずる訴訟上の効力、民事にては訴狀の送達によりて始まり、其終了までは、其訴訟の原由を變更し若しくは妄に取下をなし又は更に他の裁判所にこれを訴ふることを得ざるものなり、刑事にては、檢事の公訴によりて始まり、其終了までは、特定の被告人がなせる特定の犯罪に限られ、又、檢事は妄に取下をなすことを得ざるものなり。——**しち**［權利質］（名）【法】財産權を目的となす質權。——**しや**［權利者］（名）義務者に對して權利を有するもの。又、債權者。——**しゆたい**［權利主體］（名）【法】法律上權利を有する人格あるもの。

(**げんり**［原理］（名）㊀【哲】説明若しくは判斷の根據となる道理。他の眞理の基となる根本の眞理。㊁【倫】正しき行爲の法則、人間動作の根本の規範。㊂すべて物事の基となり根本となり、其秩序發生を規定するもの。

(**げんり**［玄理］（名）おくぶかき道理。

(**げんりつ**［縣立］（名）縣の費用を以て設立維持せらるゝもの。

(**げんりつ**［嚴律］（名）きびしきおきて。きびしき刑罰。

(**げんりやう**［賢良］（名）智明かにして德正しきこと。又、其人。

(**げんりやう**［減量］（名）かさの減（へ）ること。又、かさを減すこと。

(**げんりやく**［權略］（名）はかりごと。權謀。

(**げんりゆうたう**［玄龍湯］（名）古昔の煎藥の名。

(**げんりよ**［賢慮］（名）他人の考案の敬語。おかんがへ。

(**げんりよく**［權力］（名）他人を強制し服從せしむる威力。——**くわんけい**［權力關係］（名）【法】權力者が自己の意思によりて、服從者の意思を強制する關係。主權者と國民との關係の如きこれなり。——**せつ**［權力說］（名）【倫】道德上の規定は權力を有するもの、命令に基くとし、命令を以て是非善惡の究竟的根據となす一派の倫理說。——**だんたい**［權力團體］（名）【法】統一ある人民の團體にして權力の主體たるもの。

(**げんるゐ**［堅壘］（名）防禦又は要害の堅固なるとりで。攻めおとしがたきとりで。

(**げんれい**［縣令］（名）㊀【法】縣知事が、官制上一般の委任若しくは法律命令の特別の委任による職權内に於て、其管轄區域内に發する行政命令。㊁明治十九年以前の縣知事の舊稱。

(**げんれい**［黔黎］（名）たみ。百姓。

(**げんれい**［嚴厲］（名）いときびしきこと。甚だおごそかなること。

(**げんれい**［嚴令］（名）きびしき命令。

(**げんれう**［見料］（名）物を見たる損料又は報酬。

(**げんれう**［原料］（名）製造のたねもの。

(**げんれん**［眷戀］（名）愛着の念に繋（ツナ）がるゝこと。戀（コ）ひ慕（シタ）ふこと。（眷戀）。

(**げんれん**［牽連］（名）つながりつゞくこと。かゝりつらなること。又、つなぎつゞくること。かけつらぬること。

(**げんろ**［言路］（名）下民が官上に對して申出づべきすぢみち。「—を開く」。

(**げんろん**［言論］（名）思想を言說によりて發表すること。いひ論ずること。のぶること。「—の自由」。

(**げんわく**［幻惑］（名）目をまどはしくらますこと。

(**げんわく**［眩惑］（名）見ておどろきまどふこと。

(**げんわんちよくひつ**［懸腕直筆］（名）腕を宙にして物につけず、筆を直く持ちて字を書くこと。

(**げんゐ**［權威］（名）權力の威勢。いきほひ。

(**げんゐ**［健胃］（名）胃を健康にすること。——**ざい**［健胃劑］（名）健胃のために飲用する藥劑。

(**げんをん**［暄溫］（名）あたゝかきこと。

(**げんをんき**［驗溫器］（名）寒暖計に同じ。

こ　ご

こ　喉的破裂音K即ち舌の後部を軟口蓋に接して破裂せしむる音と、母音「オ」との綴音。

ご　「こ」の濁音、凡て「こ」と同じく、たゞ破裂音に聲帶の振動の伴ふを異なりとす。

卄**こ**［鉤］（名）巻きたる簾（スダレ）を掛け止むるかぎ。

こ［子］（名）㊀兩親の間に生れたる人。㊁動物の牝牡又は雌雄の間に生れたるもの。「犬の—」「豚の—」。㊂本より分かれて、別に生（オ）ひたつもの。「竹の—」。㊃幼稚なる人。こども。わらべ。

こ［粉］（名）物の細末。こな。「米の—」「麥の—」。

こ［蠱］（名）【動】「かひこ」の異稱。

こ［海鼠］（名）【動】「なまこ」に同じ。「くし—」。

こ［木］（名）木の轉。「—の葉」。（樹木）。「—」。「かは—」。

こ［籠］（名）竹にて編みたる器の總稱。かご。「ふせ—」。

こ［格］（名）㊀障子の骨。㊁梯子の段。㊂碁又は將棊の盤の縱横の筋。

(**こ**［弧］（名）㊀ゆみ。きのゆみ。「—を張り」。㊁【數】圓周又は他の曲線の一部分。

(**こ**［股］（名）㊀また。またぐら。㊁【數】直角三角形の一邊、其三角形の第二の大角に對したる邊。

(**こ**［戶］（名）㊀ではひりぐち。出入口。㊁とまへ。とびら。㊂いへ。いへかず。「—を算じ」。㊃酒を飲む量。「—大にして酒の甜きを嫌ふ」。

(**こ**［湖］（名）陸地の凹所に多く水の湛（タヽ）へたる處。みづうみ。

(**こ**［古］（名）もと。むかし。いにしへ。「—今」。

(**こ**［賈］（名）あきんど。「農—」。

(**こ**［瞽］（名）めくら。「—者」。

(**こ**［鼓］（名）つゞみ。たいこ。——**をならしてせむ**［鳴鼓攻］其罪をかぞへ立て、攻擊す。

(**こ**［姑］（名）しうとめ。「よく—に事へ」。

(**こ**［孤］（名）㊀兩親のなきひとり子。みなしご。「—を撫ふ」。（孤兒）。㊁援助なきこと。ひとりだち。

(**こ**［故］（名）㊀もと。むかし。㊁ふるきこと。又、ふるき物事。「—を吐き新を納れ」。㊂しきたり。ためし。㊃ふるきちなみ。むかしなじみ。㊄こと。事件。「幽明の—を知る」。㊅ゆゑ。わけ。㊆死にしこと。

こ［是］（代）「これ」に同じ。「—はいかに」「—たび」。

こ—［小］（接頭）㊀或語に冠して、細小なる意を表はす語。「—形」「—山」。㊁或語に冠して、僅少なる意を表はす語。「—高し」。

こ—［濃］（接頭）或語に冠して、色の濃きさまを表はす語。「—紫」。

—こ［子］（接尾）婦人の名の下につくる語。「春—」。「直—」。

—こ［絇］（接尾）縫絲の絲繩（イト）を數ふるにいふ語。「一—」。「二—」「三—」。

—こ［處］（接尾）ところ。ばしよ。「いづ—」。「ど—」。

(**—こ**［箇］（接尾）物の數を數ふるにいふ語。「十—」。「百—」。「三—」。

(**—こ**［戶］（接尾）家數をかぞふるにいふ語。「五十—」。

ご［碁］（名）平盤の目に、黑白の碁石を並べ、圍み闘はせて勝負を決するもの。地を廣く占めたるを勝とす。——**をうつ**　碁を行ふ。——**をかこむ**［圍碁］前條に同じ。

ご［豆油］（名）大豆を水にひたし、石灰を加へて碾（ヒ）きたる液。油畫の繪具などに使用す。「—」。

(**ご**［午］（名）㊀十二支の一。うま。㊁正午。時已に

(**ご**［期］（名）をり。とき。期限。「此の—に及びて」。

(**ご**［伍］（名）㊀支那の古昔、相依り相保つものと定めし五戸の稱。㊁古昔、軍隊編制の最下級、五人を一組としたるもの。㊂くみ。なかま。㊃隊列。行列。

(**ご**［後］（名）のち。あと。「其—」。

(**ご**［五］（數）いつゝ。

卄**ご**［御］（名）御前の略言。婦人の尊稱。「母御の—」。

ご—［御］（接頭）或語に冠して、尊敬の意を表はす語。「—覽」。「—論」。

—ご［御］（接尾）目上の人の稱に添へて呼ぶ語。「母—」。「姉—」。

コークス［Coke］（名）「がいたん」（骸炭）に同じ。

コーヒー［珈琲＝Coffee］（名）珈琲樹の果實の核を焙燒して粉となしたるもの、これに砂糖を加へ熱湯に和して飲む。——**のき**［珈琲樹＝Coffea arabica］（名）【植】茜草科に屬する小灌木、熱帶地方に産す、葉は楕圓狀披針形にして對生す、花は白色にして香氣あり葉腋に生ず、果實は大いさ胡椒の如き漿果なり。

コールタール［Coal-tar］（名）石炭を蒸燒にする際に生ずる半流動體の物質、幾多の化合物を含有し、「アニリン」又は石炭酸等を製する原料に供せられ、又「ブリキ」又は鐵材等に塗りて腐蝕を防ぐ料に供せらる。

コールマネー［Call money］（名）銀行が仲立業者などに低利にて貸す金錢、必用の時には何時にても返濟の請求をなすことを得るもの。

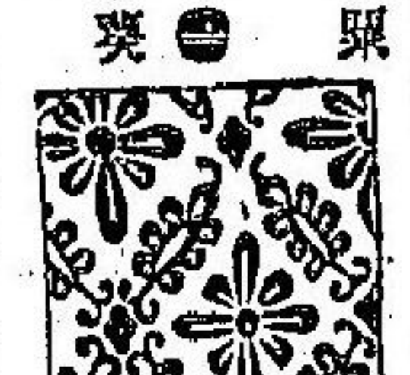
ゴア［臥亞］（名）（「インド」の地 Goa より出づ）昔時、蘭人の創めて[illegible]したる一種の織物。

(**ごあく**［五惡］（名）【佛】五つの惡事、即ち、殺生・偸盜・邪婬・妄語・飲酒の稱。——**しゆ**［五惡趣］（名）【佛】「ごしゆ」（五趣）に同じ。

こあげ［小揚］（名）船に積みたる荷物を陸へ運びあぐること。又、其人。（挑脚夫）。——**にんそく**［小揚人足］（名）雇はれて小揚を業とする人足。

こあは［小粟］（名）【植】粟の一名。

こあふひ［小葵］（名）㊀【植】「ぜにあふひ」の一名。（冬葵子、荊葵）。㊁一種の染模樣。



［こあふひ（二）］

こあみがさ［小編笠］（名）德川時代の初めに行はれしあみがさ、假頭形にて腰高に編（ア）みたるもの、風車賣・鎗持奴など冠れり。

卄**こい**［凍］（名）こゞゆること。

(**こい**［古意］（名）古代のさま。いにしへのふり。

(**こい**［故意］（名）㊀ことさらにたくらむこと。わざとなすこと。㊁ことさらに或行爲をなさんとする意思。

こい［濃］（形）「こき」の音便。

(**こいう**［蠱誘］（名）まどはし誘ふこと。

(こ-いう[固有](名) ㊀もとより有ること。うまれつきて有ること。㊁特別に所持して居ること。──**めいし**[固有名詞](名)【文法】其物に特有の名稱を表はす名詞。普通名詞の對。

(こ-いき[小意氣](名) 稍や意氣なること。

こい-げしやう[濃化粧](名) あつげしやう。

こ-いし[小石](名) 小さき石。いしくれ。(磧、礫)。

ご-いし[碁石](名) 碁を圍むに用ふる小さき扁圓の石、黑と白との二種あり。──**げ**[碁石笥](名) 碁石を入れておく器。──**まめ**[碁石豆](名)【植】くろまめの一種、扁(ヒラ)く黑きもの。

こ-いたじき[小板敷](名) ㊀禁中の殿上にあるいたじき。㊁は、狹き板敷。

こ-いたどり[小虎杖](名)【植】「いぬいたどり」の一名。

こいち(名)【動】一種の魚、口長く鱗粗し、體長大いなるは一尺許に達す。

こ-いち[小一](名) 芝居の舞臺の直下の平土間の一列の稱、

こい-ちや[濃茶](名) ㊀ひきちやの一種、分量を多くして湯に立て、飲むもの。㊁濃(コ)き茶色。㊂男女のあひだの極めて親密なること。「─の仲」。

(こ-いつ[此奴](代)「こやつ」の轉訛。(這奴)。

こ-いぬ[小犬](名) 犬の子。小さき犬。ちんころ。(小狗、矮狗)。

卄**こい-ふ・す**[臥](自、さ四) ころげ臥す。

こ-いへ[小家](名) 小さき家。

コイル[Coil](名)「けんせん」(捲線)に同じ。

(ご-いん[五音](名) ㊀音律にて、宮・商・角・徵・羽の五つの音の稱にして、これが高低を次第したる十二の調子を十二律といふ、宮を基とし起る。㊁五十音圖の各行の五つの音の稱、「─相通の理」。

(こう[后](名) ㊀きみ。㊁きさき。

(こう[公](名) ㊀邪曲なきこと。偏頗なきこと。㊁ひろくおこなはるゝこと。一般。「これ心術の─廉なり」。㊂おほやけなること。平等。㊃ひとりの私有にあらざること。共同。㊄かくさゞること。明白。「これを─言せよ」。㊅官府又は官事。やくば。つとめ。「─より退く」。㊆國家又は社會、世間又は衆人。「─に背き私に死す」。㊇尊長の敬稱。「東照─」。㊈五等爵の第一。㊉大臣の稱。「三─」「菅原道眞─」。

(こう[侯](名) ㊀まと。射的。㊁大小名。㊂五等爵の第二。

(こう[候](名) 時候。氣候。

(こう[功](名) ㊀わざ。まごと。事業。㊁つとめ。やくめ。職務。㊂いさを。はたらき。てがら。㊃成就又は勝利。㊄利益又は有用。㊅武功により金鵄勳章を賜はる等級、一級より七級まであり、皆な規定の年金附屬す。「─一級」「─五級」。

(こう[紅](名) べに。くれなゐ。「─染」。

(こう[汞](名) 水銀。みづかね。

(こう[肱](名) ひぢ。「─を曲げて枕とす」。

(こう[腔](名) 體內の空所。

(こう[貢](名) みつぎすること。みつぎもの。「─を獻ず」。

(こう[公](代) 敬意の對稱。「─等碌々」。

(─こう[口](接尾) ㊀人數を數ふるにいふ語。「一家三─」。㊁道具を數ふるにいふ語。「太刀一─」。

[ごう(名) 馳走(西國の方言)。

[ごう(名) こおき(九州の方言)。

(こう-あん[苟安](名) ㊀一時の安心。しばらくのあんど。「─を偸む」。(偸安)。㊁一寸のがれ。

(こう-あん[公案](名) ㊀公事の案文。訴訟の目安。㊁禪家にて、會下に參する徒に示して、研究推考せしむる問題。

(こう-あん[公安](名) 公共の安寧。──**けいさつ**[公安警察](名) 高等警察に同じ。

(こう-い[公移](名) 官府よりの廻狀。まはしぶみ。

(こう-い[厚意](名) 厚き志。ふかき情。

(こう-いう[公有](名) ㊀公共團體の所有。「─財產」「─地」。㊁朝廷又は政府の所有。

(こう-いう[後憂](名)「こうくわん」(後患)に同じ。

(こう-いう[紅友](名) 酒の異稱。

(こう-いん[後胤](名) 後代の子孫。(後裔)。

(こう-いん[勾引](名) かどはかすこと。かどはかし。

(こう-いん[拘引](名) ㊀とゞめひくこと。とらへひくこと、ひきよすること。㊁【法】豫審判事が、訊問のため人を強制して裁判所に出頭せしむること。──**じやう**[拘引狀](名)【法】豫審判事が人を拘引するために發する令狀、召喚狀を受けて出頭せざるものに發し、又は法律に定めたる場合に發す、四十八時間內は、其人の自由を停止することを得る効あるものとす。

(こう-いんすう[公因數](名)【數】二つ以上の數のいづれもが含有する因數。

卄**こう-うら**[紅裏](名) こうぞめの裏を付けたる衣服。

(こううんゐじゆ[江雲渭樹](名)(杜甫の詩に出づ) 思ひ思はるゝ、親友の間柄にいふ語。

(こう-えい[後裔](名) 血統のすゑ。まそん。(後胤)。

(こう-えき[鴻益](名) おほいなる利益。

(こう-えき[公役](名) おほやけのつとめ又はぶやく。

(こう-えき[公益](名) 社會公共の利益。──**だんたい**[公益團體](名) 社會公共の利益を圖ることを目的としたる團體。

(こう-えふ[紅葉](名) 秋季に變色して赤くなりたる木の葉、葉綠素が分解して遂に紅色となるによる、かへで・うるし・つた・ふき等に多し。

(こう-えん[口演](名) 口づからのぶること。口上をいふこと。

(こう-えん[紅焰](名) ㊀紅色をなすほのほ。㊁【天】太陽の光球の周圍より高く上騰せる美麗なる紅色の雲氣、日蝕皆既の際これを見ることを得、又、分光器を用ふればこれを檢することを得。

(こう-おん[厚恩](名) あつき恩。ふかきめぐみ。

(こう-おん[鴻恩](名) 大いなる恩惠。(大恩)。(洪恩)。

(こう-か[後架](名) 禪家にて、便所の稱。かはや。

(こう-が[公衙](名) やくしよ。やくば。(官衙、官署)。

(こう-か[公暇](名) 一般に賜はる休暇。

(こう-が[姮娥](名) 月の異稱。

(こう-かい[公海](名)【法】何れの國の主權にも屬せず、各國の平等に使用航海の自由を有する海洋、地球上の海洋の最大部分はこれに屬す。領海の對。

(こう-かい[公廨](名) やくば。やくしよ。

(こう-かい[公開](名) 公衆の聽覽又は集會等を許すこと。おほやけにひらくこと。──**じやう**[公開狀](名) 或人にあてたる書狀を私に贈らずして、新聞雜誌などに掲載し公衆に示すもの。

(こう-がい[後害](名) のちのわざはひ。のちのうれひ。

(こう-がい[口蓋](名)【動】口腔の上部の壁。

(こう-かう[公行](名) おほやけに行はるゝこと。

(こう-かう[功効](名) しるし。きゝめ。

(こう-かう[後項](名) ㊀のちの條項。㊁【數】甲の乙に對する比に於て、甲に對する乙の稱。

(こう-がう[口號](名) 口ずさみ。(口占)。

卄**こう-かき**[紺搔](名) こんや。こうや。そめものや。

(こう-かく[口角](名) くちわき。くちさき。──**ほつをとばす**[口角飛沫] 氣激し勢はげしく言論するさまにいふ。

(こう-がく[後學](名) ㊀後進の學者。(後生)。㊁後來の智見。「─のためにも聞かせ下されたし」。

(こう-がく[鴻學](名) 學問に深く達したる人。

(こう-がく[工學](名) 工業に關する事項を學理的に研究する科學。

(こう-がくかう[公學校](名) 臺灣の小學程度の學校。

(こう-がふ[苟合](名) 暫時の一致。姑息なる合同。

(こう-がふ[媾合](名) 交合。房事。

(こう-かん[槓杆](名) ㊀【理】一定點のまはりに廻轉し得る丈夫なる梃、其或點に力を加へて他の或點に於ける抵抗を支ふるもの、其抵抗を支ふる點を支點といひ、力を加ふる點を力點といひ、抵抗の及ぶ點を重點といふ、支點が重點と力點との間なるを第一種とし、重點が支點と力點との間なるを第二種とし、力點が支點と重點との間なるを第三種とす、土方の石などを動かすに用ふる所謂挺子(コテ)は第一種に、藥を細切するに用ふる押切などは第二種に、裁縫用の鋏は第三種に屬す。㊁挺子(コテ)の特稱。

(こう-がん[紅顏](名) 年わかき頃の血色美(ウツク)しき顏、紅色の顏。

(こう-がん[厚顏](名) あつかましきこと。あつかは、鐵面皮。

(こう-き[後騎](名) あとより續く騎兵。

(こう-き[弘毅](名) 度量ひろくして意志つよきこと。

(こう-き[興起](名) ㊀奮ひ興ること。勢盛んになること。「國勢─す」。㊁感じてはげみたつこと。「感奮─す」。

(こう-き[口器](名) 口部にありて食物攝取の機能をなすもの、脣齒舌若しくは嘴等をいふ。

(こう-き[口氣](名) ものいひぶり。

(こう-ぎ[厚誼](名) あつきよしみ。あつきなさけ。

(こう-ぎ[公儀](名) ㊀朝廷又は政府。おほやけ。㊁維新前に、將軍家の稱。

(こう-ぎ[巷議](名) ちまたの議論。世のうはさ。(街談)。

(こう-ぎ[公議](名) ㊀公平なる議論。たゞしきいけん。㊁世上一般の議論。(輿論)。──**しよ**[公議所](名) 維新後、政府の諮詢する事件を討議するために設置せられし機關。──**にん**[公議人](名) 公議所に列席せし職名、各藩より選出せり。

(こう-きう[購求](名) あがなひ求むること。

(こう-き-でん[弘徽殿](名) 古昔、內裏の清涼殿の北にありし御殿、后・女御などの住。こきでん。

(こう-ぎやう[興行](名) 芝居又は相撲などを行ふこと。見世物を行ふこと。──**けん**[興行權](名) 脚本又は樂譜に關する興行をなし得る特權、其著作權中に含有せらるゝもの。

(こう-きゆう[後宮](名) 后妃などの住みたまふ宮殿。おくごてん。又、后妃などの稱。(后宮)。

(こう-きよ[公許](名) おほやけの許可。ゆるし。官許。

(こう-きよ[貢擧](名) 進士の試驗。

(こう-きよ[溝渠](名) ㊀みぞ。㊁へだて。

(こう-きよ[後拒](名) あとぞなへ。しんがり。

(こう-きよ[薨去](名) 貴人の死去にいふ語。(特に三位以上の人にいふ。

(こう-ぎよ[薨御](名) 親王・女院・攝家・大臣の薨去にいふ語。

(こう-ぎよ[控御](名) 馬を奔逸せざるやうにあつかふこと、轉じて、人をあやつりあつかふこと。

(こう-きよう[口供](名) 罪人のくちがき。

(こう-きよう[公共](名) 社會の一般。世間の衆人。──**くみあひ**[公共組合](名) 公共の利益を圖るを目的とする組合。──**じげふ**[公共事業](名) 公共の利益幸福の維持又は增進のためになす事業、例へば、學校・病院又は道路に關

する事業の如きこれなり。——**しん**［公共心］（名）公共の利害に對して同情深き心。公共のために盡さんとする心。——**だんたい**［公共團體］（名）【法】國家に對して公法上の義務を負擔せる團體、郡組合・町村組合・水利組合等の如きこれなり。

（こう-ぎよく）［攻玉］（名）玉をみがくこと。轉じて、智德をみがくこと。

（こう-きん）［拘禁］（名）とらへて留めおくこと。

（こう-きん）［公金］（名）官府又は公共團體の所有に屬する金。

（こう-ぎん）［工銀］（名）てまだい。てま。ちんぎん。

（こう-ぐう）［厚遇］（名）てあつきもてなし。

（こう-くわ）［公課］（名）㊀官府よりのかゝりもの又はぶやく。㊁やくめ。つとめ。

（こう-くわ）［紅花］（名）色の紅なる花。

（こう-くわ）［後禍］（名）のちのわざはひ。

（こう-くわ）［功過］（名）いさをとあやまちと。

（こう-くわい）［後悔］（名）前に行ひし事を自分で後に悔ゆること、前になし、事を自ら殘念がること。

（こう-くわい）［公會］（名）公衆のよりあひ。おほやけの會議。

（こう-ぐわい）［口外］（名）他人に告ぐること。ことばに發すること。「—を禁ず」。

（こう-ぐわい）［構外］（名）かこひのそと。

（こう-くわう）［鴻荒］（名）おほむかし。太古。

（こう-くわん）［後患］（名）後のうれひ。後日の難儀。

（こう-くわん）［公館］（名）おほやけの設立なるやかた。

（こう-くん）［功勳］（名）いさを。てがら。

（こう-くん）［紅裙］（名）（紅色の裳すその義）美人又は妓女の稱。

（こう-ぐん）［後軍］（名）あとぞなへの軍。

（こう-けい）［公卿］（名）くぎやう。くげ。

（こう-けい）［口徑］（名）口のさしわたし。「—二十七珊の大砲」。

（こう-けい）［後繼］（名）あとつぎ。

（こう-けい）［紅閨］（名）美人の閨（ネヤ）。「翠帳—」。

（こう-けい）［肯綮］（名）㊀筋肉の結締せられてある所。すぢのつけね。㊁轉じて、物事の急所。

（こう-けい）［後景］（名）㊀背後の光景。㊁舞臺の後壁などに畫く景色畫。かきわり。

（こう-げい）［虹霓］（名）にじ。

（こう-げい）［工藝］（名）工作に係る藝術、製造に係る技藝。——**さくもつ**［工藝作物］（名）直接吾人の用に供する能はず、必ず製造して後始めて用をなす作物、即ち、藍・麻・煙草などの稱。——**ひん**［工藝品］（名）製造せられたる物品。多少の技術を要して成りたる物品。

（こう-けう）［孔竅］（名）あな。

（こう-げき）［攻擊］（名）㊀攻め擊つこと。攻め付くること。㊁論じなじること。責めたゞすこと。——**すゐらい**［攻擊水雷］（名）我より發進して、敵艦の水線下に破裂せしむる水雷、魚形水雷の如きこれなり。——**ぜんしん**［攻擊前進］（名）防禦の地位にありしものが、敵をうちはらひてすゝむこと。

（こう-げふ）［功業］（名）事業。又、功績。

（こう-げふ）［鴻業］（名）國を開き基を建つるなどの偉業。大いなる事業。

（こう-げふ）［興業］（名）事業をおこすこと、特に、經濟上の事業を起すこと。——**ぎんかう**［興業銀行］（名）日本興業銀行法によりて設置せられたる株式會社、企業の資本を供給することを以て目的とし、國債券・地方債券及社債券・株券を質とする貸付及其（株券を除く）應募の引受・預金及保護預

手形の割引・財團を抵當としたる貸付等を營業とす、其拂込金額の十倍を限り債券を發行することを得、若し又外國に於ける公金の事業に對し、資金の需要ある場合に、主務大臣の認可を得たるときは、規定外の債券を發行することを得。

（こう-げふ）［工業］（名）粗製品に人工を加へこれが形態を變更して、更に有用のものとなす生產業、即ち製造業、昔時のものは規模狹小にして家內的なりしが、近代は機械の發明により規模擴大となり工場的となれり。——**がくかう**［工業學校］（名）實業學校の一、工業に關する學問技術を教授する所。——**じだい**［工業時代］（名）【經】經濟上の時期を五分したるもの、第五、即ち今日の時代にして、分業協力盛んに行はれ信用ます〳〵利用せられ、各種の機械發明せられ大生產法行はる。——**しよいうけん**［工業所有權］（名）【法】工業上に於ける意匠・發明・雛形・商標等に關する所有權、これが保護に關しては各國同盟條約あり。——**ぢやう**［工業場］（名）「こうぢやう」（工場）に同じ。

（こう-けん）［貢獻］（名）㊀貢物（ミツギモノ）を奉ること。㊁力を致すこと。「文壇の—」。

（こう-けん）［後見］（名）㊀昔時、家長が幼年にして、其職務を行ふ能はざる場合に、これが代理となり又はこれを輔助せし職務。㊁【法】禁治產者又は親權を行ふもののなき未成年者を監護教育して、其財產を管理する職務。㊂局外にありてたすくること。うしろみすること。㊃後見人の略言。——**かんとく**［後見監督］（名）㊀後見を監督すること。㊁後見監督人の略言。——**かんとくにん**［後見監督人］（名）【法】後見を監督する人、即ち、後見人の事務を監督し、後見人の缺けたる場合には、其後任者の就任を催し又は親族會議を招集して其選任をなし、後見人と後見を受くる人との利益相反する場合には、後見人を代表し、若し急迫なる場合には、必要の處分をなすもの、最後に親權を行ひたるもの、指定によるものを指定後見監督人といひ、親族會議の選定によるものを選定後見監督人といふ。——**にん**［後見人］（名）【法】禁治產者又は未成年者の後見をなす人、最後に親權を行ひたるもの、指定によるものを指定後見人といひ、法律の規定によるものを法定後見人といひ、親族會議の選定によるものを選定後見人といふ。

（こう-けん）［公權］（名）個人が公法上に於ける權利、例へば選擧權・被選擧權等の如きこれなり。——**はくだつ**［公權剝奪］（名）「はくだつこうけん」に同じ。——**ていし**［公權停止］（名）「ていしこうけん」に同じ。

（こう-げん）［公言］（名）かくさずにいふこと。又、あまねく告ぐること。

（こう-げん）［恒言］（名）つねにいふこと。又、其言。

（こう-げん）［控弦］（名）（弓を控へて弦を引くもの、義）騎射の兵士。

（こう-けん-けん）［恒見圈］（名）【天】常に地平上に見ゆる恒星の所在の範圍、極を中心とし觀測地の緯度に等（ヒト）しき角度を半徑とする圓なり。

（こう-ご）［後顧］（名）あとのきづかひ。のちのけねん。

（こう-ご）［口語］（名）文章上には使用せざる通俗のなまりことば。文語の對。

（こう-こう）［口腔］（名）口內の空所、其門戶は脣にして上は口蓋下は舌なり、左右の壁を頰（ホホ）とす。

（こう-こう）［鴻溝］（名）㊀おほいなるみぞ。㊁へだて。しきり。「劃—」。

（こう-こく）［公告］（名）廣く世上に告ぐること。

（こう-こく）［後刻］（名）ごこく。のちほど。

（こう-こく）［興國］（名）勢のおこりふる國。

（こう-こん）［後昆］（名）のちの世の人。又、子孫。

（こう-さ）［公差］（名）㊀貨幣の實質の品位量目と法定の品位量目との差、我國の品位の公差は、金貨は千分一にして銀貨は千分三、量目は各種割合を異にす。㊁度量衡にて、一定の標準と實際のものとの差異を法律にて認許したる範圍。

（こう-さい）［後妻］（名）のちぞひ。ごさい。（繼室）。

（こう-さい）［口才］（名）口前のよきこと。（辯口）。

（こう-さい）［公裁］（名）おほやけのさばき。裁判。

（こう-さい）［公債］（名）國家又は地方自治體が、收支の適合を圖るため臨時に起す債務の稱、地方自治體のものはこれを地方債といひ、俗に公債といへば國家の債務の特稱とせり、其償還の時期は必ずしも一定せず、豫め償還の時期を定めずして、財政の裕なるとき隨意に償還を行ふものあり、又、豫め償還の年限を定め、其期限に至れば必ずこれを償還するものあり、大藏省證券の如きもまた短期の公債なり、募集の方法は政府が公衆に對して債券の賣出をなし申込をなさしむるものと、銀行をしてこれが請負をなさしめ、更に銀行をして賣出をなさしむるものとあり、應募者の國籍を標準として、內國債と外國債とに區別す。——**しようしよ**［公債證書］（名）公債特に國家の債務に對して發行する證券。

（こう-さう）［紅藻］（名）【植】根莖葉の區別判然せざる柔軟藻類にして、紅色の色素を多く含有するもの、あさくさのり等これに屬す。

（こう-さう）［構想］（名）㊀つくりかまふるかんがへ。㊁「さうざう」（想像）に同じ。

（こう-さう）［鴻爪］（名）（鴻が雪に來るとき、跡のあるべく雪に爪痕をつくれど、北に歸るときは、雪すでに消えて爪痕なき義に出づ）行衞の定かならず又は徑路の不分明なることにいふ語。

（こう-さう）［公葬］（名）國事に斃（タフ）れたる人などの葬式を官府にて營むこと。

（こう-さう）［後裝］（名）銃身又は砲身の底より彈藥を裝塡すること。又、其裝置。「—銃」「—砲」。

（こう-ざう）［後像］（名）【心】刺戟去りたる後其感覺の尙ほ意識中に殘留せるもの。

（こう-ざう）［構造］（名）㊀こしらへつくること。㊁つくりかた。たてかた。かまへかた。——**こく**［構造谷］（名）【地】地殼の褶曲若しくは斷層によりて生じたる谷。——**さんがく**［構造山岳］（名）【地】地殼の褶曲又は斷層によりて生じたる山嶽。——**しき**［構造式］（名）【化】化學符號に原子價を附記して、符號と符號とを連接する分子式、例へば水はH-O-Hなるが如し。

（こう-さく）［告朔］（名）㊀古昔、四季の初めに、大極殿に出御ありて、百官の上る公文を御覽ありしこと。㊁支那の古代に、諸侯が前年末に天子より受けし曆と政令とを廟に納めおき、毎月の初に特羊を廟に供へて其月の曆と政令とを受けしこと。

（こう-さく）［工作］（名）㊀職工のわざ。土木のわざ。㊁つくること。こしらふること。——**せん**［工作船］（名）船內に機械を据（ス）ゑ付け、艦隊に附隨して、軍艦の船體・機關及兵器等の修繕をなす船。——**ぶつ**［工作物］（名）工作したるもの。製造品。

（こう-さん）［恒產］（名）さだまりたる資產。

（こう-し）［小牛］（名）牛の子。小さき牛。（犢）。

（こう-し）［後肢］（名）うしろあし。

(こうし[貢士](名) ㊀諸方より選拔して官府に出す人の稱。㊁維新後、一時諸藩より選拔して朝廷に出し〻人の稱。

(こうし[後嗣](名) よつぎ。又、子孫。

(こうし[公私](名) おほやけとわたくしと。官府と民間と。社會と個人と。

(こうし[公使](名) 外交官の一、外務大臣の監督訓令を受け、條約國に駐在して自國を代表するもの、法令の定むる所により、其國に於ける自國臣民在留者の保護取締をなす職權を有す、特命全權公使・辨理公使及代理公使の區別あり。(欽差大臣)。

(こうし[厚志](名) 厚きこゝろざし。(厚情)。

(こうし[公子](名) 貴族の男子。わかとの。

(こうし[公事](名) ㊀おほやけの事。かみのつとめ。(公用)。㊁公共に關する事柄。

(こうし[工事](名) 工作の仕事。普請(フシン)の作業。

(こうし[後事](名) 將來又は死後の事。「—を託す」。

(こうし[口耳](名) ㊀口と耳と。「—の慾」。㊁聞きたる事を同化して自己の知識となす能なく、其まゝにこれを言說にあぐると。「—の學」。——さんずん[口耳三寸] 學問の同化力少なく知識の淺少なるにいふ。

(こうし[公示](名) おほやけにしめすと、ひろくしめすと。——さいこく[公示催告](名) 【法】權利又は請求の屆出をなさしむるためになす催告、此手續の審理は區裁判所に屬し、多くは官報又は公報に揭載してこれをなす、若し其期間(少なくとも揭載當日より六ヶ月)を過ぎて、當事者これが屆出をなさゞるときは失權となるものとす。又、失踪者に屆出をなさしむるためにも多くは此手續をなす。——そうたつ[公示送達](名) 【法】

訴訟上に於ける書類送達の一法、當事者の現在地知れざるか、若しくは通常の方法による能はざるかのときに行ふものにして、揭示場又は新聞紙などに揭載してこれをなす。

(こうしう[厚酬](名) てあつき報酬(ほうしう)。

(こうしう[拘收](名) とらへをさむると。

(こうしき[公式](名) ㊀おほやけに定まりたる方法。㊁計算の法を表はす式。㊂法令公布の式。

(こうしくわん[公使館](名) 公使が駐在國に於て事務を扱ふ場所、國際法上本國の領地と看做され、駐在國の主權の範圍外なりとす。——しよきくわん[公使館書記官](名) 公使館に附屬し、公使の職務を補助する高等官。

(こうしつ[後室](名) やもめ、未亡人。(主に、身分ある人にいふ)。

(こうしつ[口實](名) いひたつる理。いひぐさ。いひまへ。

(こうしふ[攻習](名) をさめならふと。

(こうしや[厚謝](名) あつく謝禮をいふと。

(こうしや[巧者](名) 事に巧なると。上手(ジヤウズ)。

(こうしや[叩謝](名) 頭をたれて謝すると。

(こうしやう[紅晶](名) 【鑛】紅色の水晶。

(こうしやう[工匠](名) ㊀たくみ。だいく。職人。㊁工作物にあらはれたる意匠。

(こうしやう[厚情](名) 厚きなさけ。ねんごろなる情。

(こうしやう[口上](名) ㊀ことばにていひ傳ふると。㊁興行物にて、其仕組の委細を陳ぶると。——いひ[口上言](名) 口上をいふ人。——かんばん[口上看板](名) 興行物にて其仕組の趣を記して出す看板。

(こうしやう[攻城](名) 城壘をせむると。「—野戰」。——はう[攻城砲](名) 巨大なる一種

の火砲、威力強大にして堡壘兵舍等の堅牢物を破壞し、其他多大の損害を敵兵に與ふるために用ひらる、通常運搬に八頭の馬を用ふ。

(こうしやうがい[公生涯](名) 一生涯の中公共の事に關係して活動したる間の稱。

(こうしやく[公爵](名) 五等爵の第一。

(こうしやく[侯爵](名) 五等爵の第二。

(こうしゆ[公主](名) 支那にて、君王の女の稱。

(こうしゆ[叩首](名) 首を地につけて禮拜すると。いとねんごろに辭儀すると。

(こうしゆ[鉤取](名) ㊀かぎにかけてとると。㊁內にあるもの又は隱したる事實などを引出すと。

(こうしゆ[攻守](名) 攻むると守ると。——どうめい[攻守同盟](名) 二國以上同盟して、其中の一國が同盟外の敵國と開戰する場合に、これを助けて敵國と開戰すると。

(こうしゆ[鴻儒](名) 學問深き人。大學者。(博士、大儒)。

(こうしゆ[口授](名) 口づからさづけつたふると。直接にをしへいふと。くぢゆ。

(こうしゆ[口受](名) 口づからのべいふ所をうけたまはると。

(こうしゆう[公衆](名) 世間の人々。社會の人たち。

(こうしゆつ[口述](名) 口にのぶると。——しけん[口述試驗](名) 口にて問題を述べて、口にて應答をなさしむる試驗。

(こうしゆほうしやう[紅綬褒章](名) 自己の危難を顧ずして人命を救助したるものに、下賜せらるゝ褒章。

(こうしよ[公署](名) ㊀やくば。やくしよ。㊁公吏の事務を扱ふ所。

(こうしよ[苟且](名) まにあはせ。かりそめ。こそく。「—の策」。

(こうしよ[口書](名) くちがき。(口供、供狀)。

(こうしよう[洪鐘](名) 大いなるつりがね。

(こうしよう[公證](名) ㊀表立ちたる證據。㊁【法】國家又は公共團體の機關が、其職權により或事實を證明するためになす行爲又は形跡。

こうしようにん[公證人](名) 人民の囑託により、民事に關する公正證書を作成する公吏、司法大臣に隸屬す。——やくば[公證人役場](名) 公證人が其事務を扱ふ役場。

(こうしよく[公職](名) 官府又は公共團體の職務、おほやけのつとめ。

(こうしよく[紅色](名) くれなゐのいろ。あかいろ。——さう[紅色藻](名) 【植】「こうさう」(紅藻)に同じ。

(こうしよく[詬辱](名) はづかしめ。はぢ。

(こうしん[後身](名) ㊀生まれかはりの身。㊁境遇一變化したる以後の身。

(こうしん[後進](名) ㊀後より進みゆくと。「—の士」。㊁後より進みゆく人。

(こうしん[功臣](名) 國家に功勞ある臣。「明治の—」。

(こうしん[紅唇](名) くれなゐのくちびる。又、べにをつけたるくちびる。

(こうじん[後人](名) のちの人。後世の人。

(こうしんしよ[興信所](名) 取引の便利を圖り、かねて其危險の豫防を目的として、商業者の知らんと欲する他人の財產上の狀態につき、確實なる調査又は報道をなす所。

こうす（せし　す　する　すれ　せよ）[候](自、さ變) さぶらふ。はんべる。

こうす（せし　す　する　すれ　せよ）[候](他、さ變) うかゞふ。みる。

こうず（ぜじ　ず　ずる　ずれ　ぜよ）[薨](自、さ變) 三位以上の人の死去せらるゝにいふ語。

こうず（ぜじ　ず　ずる　ずれ　ぜよ）[困](自、さ變) こまる。困却す。

(こうずゐ[洪水](名) おほみづ。(大水)。

(こうせい[後世](名) 後の世。まつだい。

(こうせい[後生](名) 後に生まるゝ人。後の學ぶ人。

(こうせい[厚情](名) あつきなさけ。

(こうせい[孔性](名) 【理】物質の分子と分子との間に空隙ありといふと。

(こうせい[控制](名) ひきて自由の行動をなさしめざると。ひかへとゞむると。

(こうせい[攻勢](名) 攻めかゝるいきほひ。

(こうせい[厚生](名) 生活の道をゆたかにすると。「—利用の道」。

(こうせい[構成](名) かまへつくると。くみたてこしらふると。

(こうせい[恆星=Fixed star](名) 【天】一の星群の中心となりて其位置を變せざる星、太陽も一の恆星なり。——げつ[恆星月](名) 【天】月が恆星に對し地球を一周する時間、二十七日七時四十三分十一秒餘なり。——し[恆星時](名) 【天】地球が恆星に對し、一回の自轉をなす時間を時の單位として測りたる時間。——しつ[恆星日](名) 【天】一の恆星が南中してより、再び南中するまでの時間。——ねん[恆星年](名) 【天】太陽が一の恆星に對し或方向に見えてより、同一の恆星に對し、同一の方向に再び太陽の見ゆるまでの時間の稱にして、三百六十五日六時九分九秒なりとす。

(こうせい[公正](名) ㊀偏頗又は邪曲なきと。たゞしきと。㊁公認せられてあると。疑惑なきと。——しようしよ[公正證書](名) 【法】人民の囑託に應じて、公證人が作成したる民事上の證書、法律上完全なる證據として、其正本に依りたゞ裁判所の命令のみを得ば、これが執行をなすを得。

(こうせいせいてん[恆惺惺天](名) 心智のつねに明かにしてくらからざると。

(こうせう[哄笑](名) 大いに笑ふと。どっと笑ふと。

(こうせき[口跡](名) ことばづかひ。こわいろ。

(こうせき[功績](名) てがら。いさを。(勳績)。

(こうせきえい[紅石英](名) 【鑛】紅色の石英。

(こうせきど[洪積土](名) 【地】洪水の作用によりて積み重なりたる地層。

(こうぜつ[口舌](名) くちとしたと。轉じて、ことば。ものいひ。「—のあらそひ」。

(こうせん[口錢](名) 賣買のなかだちしたる手數料。

(こうせん[口占](名) くちずさみ。

(こうせん[工錢](名) 作業工事のちんせん。

(こうせん[公選](名) 公衆よりの選擧。

(こうせん[後先](名) あとさき。

(こうせん[攻戰](名) 攻め戰ふと。又、城を攻むると野にて戰ふと。

(こうせん[紅髯](名) ㊀あかきくちひげ。あかひげ。㊁鬚の紅色なるより、西洋人の稱。

(こうぜん[哄然](名、副) 一度にどっと笑ふさまにいふ語。

(こうぜん[公然](名) 世間に知れわたりてあるさま又は秘密にせざるさまにいふ語。おほやけなるさまにいふ語。——のひみつ[公然秘密](名) ㊀秘密にてあるべき物事が、世間にひろくもれ聞えてあると。㊁公然にして疑ふべき所なきやうなれど、其實體は不思議にして知るべからざると。「天地は—なり」。

(こうそ[公訴](名) 檢事が特定の犯罪人に對して、其裁判を裁判所に求むると。

(こうそ[貢租](名) みつぎ。ねんぐ。(租稅)。

(こうそ[後素](名) (論語に出づ)㊀智識をみがく

よりも德性を養ふを本となすと。㊁ゑ。繪畫。

(こう-そ[控訴](名)【法】第一審の判決に對し不服を申立て、直接上級裁判所に、其事實上若しくは法律上の調査を求むると。されど第一審の判決が終局判決なるか、若しくは法律に於て終局判決と見做すべき中間判決なるかの時に限る。區裁判所の判決に對する控訴はこれを地方裁判所に、地方裁判所の第一審判決はこれを控訴院になす。控訴は第一審の論を繼續するものなるが故に、新なる事實を陳述し證據を提出するを得。——きかん[控訴期間](名)【法】控訴をなすを得る一定の期間。民事にては、判決の送達に始まりて一ケ月間とし、刑事にては、判決言渡の日より五日間とす。

(こう-そう[倥傯](名) いそがしきと。「兵馬—」。

(こう-そう[後送](名) 後方へおくると。

(こう-そく[公則](名) おほやけの規定。一般の規則。

(こう-そく[後足](名) あとあし。

(こう-そく[拘束](名) ㊀拘引して束縛すると。㊁自由の行動を制限若しくは停止すると。

こう-ぞめ[紅染](名) べにぞめ。こぞめ。

(こう-そゐん[控訴院](名) 地方裁判所の判決又は決定に對して、控訴又は抗告をなすべき合議制度の裁判所。一又は二以上の民事部と刑事部とに分ち、部長を以てこれを監督せしむ。——ちやう（ヰンチヤウ）[控訴院長](名) 控訴院の長官。勅任判事を以てこれに補す、院內及管內の下級裁判所の事務を監督す、判事としての職務權限は他と異ならず。

こう-た[小唄](名) 三味線に合はして謠する短き俗歌。はうた。(小歌、小曲)。

(こう-たい[後退](名) あとへさがると。あとしざり。

(こう-だい[後代](名) 後の世。こうせい。

(こう-だい[鴻大](名) いと大なると。(巨大)。

(こう-たう（ウ-ト）[浩蕩](名) ひろ〴〵としてさゝはりなきと。

(こう-たう（ウ-ト）[勾當](名) ㊀つかさどると。㊁第一に位する內侍。㊂昔時、關白家にて、雜務を執りし者。㊃盲官宗にて、事務を執る人。㊄官人の官名。

(こう-たう（ウ-ト）[公盜](名) 官吏又は公吏などの、地位を利用して私利を圖るものをのゝしりていふ語。

(こう-だう（ウ-ド）[公道](名) ㊀おほやけの道理。たゞしきみち。㊁公共のものの通行する道路。

(こう-だう（ウ-ド）[哄堂](名) 一座どっと笑ふと。

(こう-だく[肯諾](名) うべなふと。うけひくと。

(こう-たつ[口達](名) ことばにての言渡。

(こう-たつ[公達](名) 政府よりの示達。くだつ。

(こう-だつ[寇奪](名) あだをなし財物をかすめとると。

(こう-だつ[攻奪](名) 攻めて奪ふと。

こう-たひ（タイ-ウ）[小謠](名) 謠曲の文句中の主要の部分を抽(ヌ)きて一曲となせるもの。

(こう-たん[口端](名) くちの端。くちさき。

(こう-だん[口談](名) 口づからの物語。はなし。

(こう-だん[後段](名) 後のきり。後のだん。中段又は前段の對。

(こう-ち[拘置](名) とらへおくと。とめおくと。

こう-ぢ[小路](名) (「こみち」の音便)幅の狹き路。(巷術、狹巷)。

こう-ち[碁打](名) 碁を打つと。又、其人。

(こう-ちう[鈕釦](名) こはぜ。「ボタン」。

こう-ちぎ[小袿](名) 昔時の婦人の禮服。小袖に似る、濶袖にて裾あり、上にうちかけて着しもの。

(こう-ちや[紅茶](名) 一種の茶、煎汁の紅色を帶ぶるもの。(茶の條參照)。

(こう-ぢやう（ヂヨウ）[工場](名) 工作をなす場所。職工のまごとば。(工業場)。——ざいだん[工場財團](名)【法】一個又は數個の工場に屬する土地・建物・機械・器具其他一切の物件の全部若しくは一部を以て、抵當權の目的のために設定したる財團、所有權保存の登記によりてこれをなす、法律上これを不動產と見做し、所有權及抵當權以外の物權又は賃借の目的となすを得ず、且一の財團に屬するものは、他の財團に屬するを得ざるものとす。

(こう-ちゆう[口中](名) 口のなか。

(こう-ぢよ[控除](名) さしひくと。とりのぞくと。

(こう-ぢよ[工女](名) 細工(サイク)物などを造るを業とする女。工場に雇はれて仕事をする女。

(こう-ちん[口陳](名) 口上にて事情をのぶると。

(こう-ぢん[紅塵](名) ㊀繁華なる地に起る塵埃。㊁轉じて、巷街の喧しきと。世間の煩しきと。俗界。

(こう-ぢん[後陣](名) 後方の陣隊。あとぞなへ。

(こう-ぢん[後塵](名) 人又は馬の走りて、後方にたつ塵(チリ)。——をはいす[拜後塵] あとにつきゆくにいふ。

こう-で[小腕](名) ㊀小さき腕。かよわき腕。㊁力量少なきと。わざまへの未熟なると。

(こう-てい[公聽](名) おほやけの耳に入ると。

(こう-てい[公廷](名) 裁判廷。しらす。公判廷。

(こう-てい[工程](名) ㊀しごとのほど。わざのはかどり。(功程)。㊁【理】「こうりつ」(工率)に同じ。

(こう-てい[後提](名)【論】三段論法にて、第二次の命題、即ち、前提と斷案との媒となるもの、一に小前提といふ。

(こう-てい[公定](名) おほやけに定むると。一般にきまるさだめ。——さうば[公定相場](名) 取引所にて取引賣買したる相場。

(こう-てい[肯定](名) 然りとなすと。ゆるすと。——めいだい[肯定命題]=Affirmative proposition](名)【論】主辭と賓辭との一致を許容する命題、例へば「烏は黑し」「鯨は動物なり」の如き命題これなり。

(こう-でい[拘泥](名) かゝはりなづむと。

(こう-てう（テウ-ヨウ）[候鳥](名)【動】季節に從ひて住處を變じ、夏は北方に去りて產卵し又は南に歸る習性ある鳥、つる・つばめ等これなり。わたりどり。

(こう-てう（チ-ヨウ）[紅潮](名) ㊀朝日などにうつりて紅に見ゆる海波。㊁美人などが、はぢらひて顏をあかくすると。

(こう-てう（チ-ヨウ）[後凋](名) 多くのものより後れてしぼむと。轉じて、衆に從はずしてみさををを守ると。

(こう-てん[公轉](名)【天】遊星が太陽を中心として回轉すると。

(こう-てん[後天](名) ㊀此世に生れ出でゝ、後に身に享受したると、負傷のために一種の不具となり、又は境遇のために一種の習慣をなしたる等は、即ち後天にして、研究して知識を長じ、修養して品性を高むるもまた後天なり、先天の對。㊁經驗の結果。——てき[後天的](形) 物事の後天に成りたるにいふ語。

(こう-でん[功田](名) 古昔、功勞者に賜はりし田地。

(こう-でん[公田](名) ㊀おほやけの所有に屬する田。㊁支那の井田にて、中央の田の稱、其周圍の田を受けし八家のものが、かはる〴〵これを耕して其收穫を租稅となしたりといふ。

(こう-と[鴻圖](名) 大いなる謀計。

(こう-ど[公度](名)【數】二つ或は二つ以上の量が、皆な或一つの量を恰も若干含むとき、其或一つの量の稱。

(こう-ど[后土](名) 地をまもるかみ。くにつかみ。

(こう-とう[叩頭](名) 「こうしゆ」(叩首)に同じ。

(こう-とう[口頭](名) 口さき。口上。——けいやく[口頭契約](名)【法】口頭によりてなす契約。特別の規定なき限りには、法律上書面契約と効力異ならず。——しけん[口頭試驗](名) 「こうじゆつしけん」(口述試驗)に同じ。——すゐもん[口頭推問](名) 口頭にて或問題を授け、これをふかくたづねとふと。——べんろん[口頭辯論](名)【法】法廷に於て訴訟當事者が、口頭により其申立又は陳述をなすと。——ゐにん[口頭委任](名)【法】口頭にて委任契約をなすと。

(こう-とう[倥侗](名) うつけ。ぼんやり。

こう-とう-しき[恒等式](名)【數】式中の文字に如何なる值を與ふとも、相等しきもの恆に成立する等式、例へば$(x+1)^2=x^2+2x+1$の如し。

(こう-とく[公德](名) 社會公共に對する德義。

(こう-とく[功德](名) 功と德と。

(こう-どく[購讀](名) 書籍などを買ひて讀むと。——しや[購讀者](名) 購讀する人。

(こう-とん[紅暾](名) 光の紅なる朝日。

(こう-ない[構內](名) かこひのうち。

(こう-なう（ナウ-ノウ）[後腦](名)【生】腦髓の一部分、延髓の上背面にありて大腦の下に位するもの、縱線によりて左右に區分せられ、表面には數多の襞(ヒダ)ありて横走す、即ち全身の運動を主宰する所。(小腦)。

(こう-なん[後難](名) 後のわざはひ。將來の難儀。(後患)。

(こう-にん[後任](名) 前任者にかはりて其任務に就くと。又、其人。

(こう-にん[公認](名) 國家・社會又は公共團體が、是認してあると。

(こう-にん[侯人](名) 古昔、門跡家に使はれし人の稱。

(こう-ねつ[口熱](名) 口中の邪熱。

(こう-ねつ[紅熱](名) ものゝ熱して紅色となると。

(こう-ねん[後年](名) ゆくすゑ。又、晩年。

(こう-のう[功能](名) きゝめ。しるし。(効驗)。

(こう-ば[工場](名) 「こうぢやう」に同じ。

(こう-ば[詬罵](名) のゝしりはづかしむると。

(こう-はい[後輩](名) 後に生れ又は後より進む人。

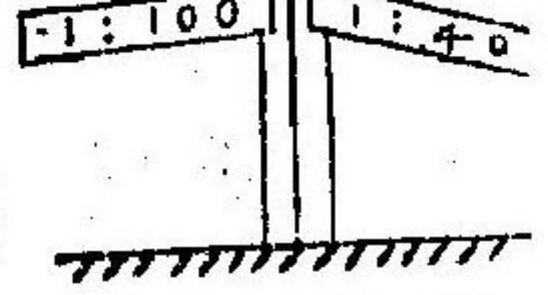
(こう-はい[後背](名) うしろ。せな。

(こう-はい[興敗](名) おこるとやぶるゝと。

(こう-はい[興廢](名) おこるとすたると。(興亡)。

(こう-ばい[紅梅](名) ㊀【植】梅の一種、花冠紅色なり。㊁「こうばいいろ」の略言。——いろ[紅梅色](名) 濃(コ)き桃色若しくは赤に紫を帶びたる色。——やき[紅梅燒](名) 饂飩(ウドン)粉と米の粉とに、砂糖を混(マ)ぜ梅花の形に燒きたる菓子。

(こう-ばい[勾配](名) ㊀傾斜の度。「山の—」。㊁氣轉。身のこなし。「—がぬるい」。——へう（ヒ-ヨウ）[勾配標](名) 鐵道線路の側にたてたる線路の勾配を示す標、汽車の運轉手これによりて速力の加減をなす。



[こうばいへう]

(こう-ばい[公賣](名) 公衆に競賣すると。競賣に附すると。——しよぶん[公賣處分](名) 官府が稅金滯納者の家產などを、強制して公賣に附し其滯納を補ふと。

(こう-ばい[購買](名) あがなひかふと。かひとると。——くみあひ（ア-イ）[購買組合](名) 產業

又は生計に必要なる材料物品を購買して、これを組合員に分配するために設立したる組合。――**りよく**［購買力］（名）物品をあがなひかふ財力。

(こうばい-すう［公倍數］（名）【數】數個の數（又は整式）にて割り切るゝ數（又は整式）の、此等の數（又は整式）に對する稱。二つ以上の數の何れにても割り切るゝ數。

(こう-はう（ホー）［公報］（名）㊀官府よりあまねく國民に發表する報告。㊁地方官などの發する官報の如き文書の稱。㊂官吏より官府への報告。私報の對。

(こう-はう（ホー）［後報］（名）のちのしらせ。

(こう-はう（ホー）［後方］（名）のちのかた。うしろのかは。――**きんむ**［後方勤務］（名）㊀後方に於けるつとめ。㊁出征軍隊の給養又は補充に關する事務。

(こう-ばう（ボー）［紅帽］（名）㊀あかき色の帽子。㊁近衛師團の兵なるしるしとしてかぶる紅色のはちまきある軍帽。――**たい**［紅帽隊］（名）兵士の紅帽をかぶりてある軍隊。又、近衛師團に屬する軍隊。

(こうはう-けい（ケー）［孔方兄］（名）錢の異稱、中に方形の孔あるよりいふ。

(こうはう-せき（セキ）［紅寶石＝Ruby］（名）紅色の鋼玉石。紅玉石。

(こう-はく［厚薄］（名）厚きと薄きと。「ー何れか」。

(こう-はく［紅白］（名）赤きと白きと。

(こう-はく［侯伯］（名）諸侯。大名。

(こう-ばつ［攻伐］（名）攻め伐（ウ）つと。

(こう-はふ（ホー）［公法］（名）【法】權力關係を規定したる法、例へば憲法・行政法・刑法・刑事訴訟法等の如きは、大體上これに屬す。私法の對。――**じん**［公法人］（名）【法】公法の規定により法人格を與へられたる權利の主體、例へば自治體の如きこれなり。私法人の對。

(こう-はん［後半］（名）あとの半分。前半の對。

(こう-はん［公判］（名）【法】裁判手續の一、刑事被告人を法廷に呼出して、口頭を以て審理する裁判、公開を原則とす。豫審の對。――**てい**［公判廷］（名）公判の開始せられてある法廷。

(こう-ひ［口碑］（名）いひつたへ。「ーに遺る」。

(こう-ひ［公費］（名）官府又は公共團體の費用。

(こう-び［後備］（名）㊀後のそなへ。㊁「こうびえき」の略言。――**えき**［後備役］（名）兵役の一、豫備役を經過したるものゝ服するもの、其期間は十年なりとす、これを經過すれば國民兵役となる。――**ぐん**［後備軍］（名）㊀後ぞなへの軍隊。ごづめ。㊁後備役にある兵士を以て組織したる軍隊。

(こう-ひやう（ヒョー）［公評］（名）㊀世上一般の評判。㊁偏頗なき正しき批評。「ー敵にあり」。

(こう-びん［後便］（名）またのたより。次回の便。

(こう-ふ［公布］（名）㊀一般に觸（フ）れ示すと。（布告）。㊁【法】法律命令をあまねく國民に通知すると、我國現今の制にては、官報に掲載するを公式とし、これによりて拘束力を生ず。

(こう-ふ［工夫］（名）㊀土木工事などに從事する役夫。㊁「くふう」に同じ。

(こう-ぶ［後部］（名）うしろの方。

(こう-ぶ［公武］（名）公家と武家と。朝廷と將軍家と。――**がったい**［公武合體］（名）德川幕府の末年に、公武の一致を圖りて國事を處理せんといひし一派の議論。

(こう-ふう［恆風］（名）【地】恆に一定の方面に吹く風、即ち、貿易風又は反對貿易風若しくは高緯度地方に於ける西風の如きこれなり。

(こうぶ-きやう（キョー）［工部卿］（名）工部省の長官。

(こう-ふく［興復］（名）衰頽したる事を恢復すると、再興すると。

(こう-ふく［口腹］（名）くちとはらと。又、いふ所と思ふ所と。

(こうぶ-しやう（ショー）［工部省］（名）明治の初年に土木工事・鑛山・製鐵・燈臺・鐵道・電信等に關係する事を掌りし中央官廳、十八年十二月之を廢せらる。

(こう-ふん［紅粉］（名）化粧に用ふるべにおしろい。「ーを扮飾す」。

(こう-ふん［口吻］（名）㊀口さき。くちばし。「ーを挾む」。㊁くちぶり。いひやう。「ーを學ぶ」。

(こう-ふん［公憤］（名）公共の事に關してのいきどほり。社會衆人のいきどほり。

(こう-ふん［興奮］（名）㊀總じて心氣の奮起すると、感じて精神の勢だつと。㊁刺戟（シゲキ）によりて神經の動作を起すと。――**ざい**［興奮劑］（名）興奮せしむる成分を含める藥劑。

(こう-ぶん［公文］（名）官府が職務權限上より發する文書。――**しき**［公文式］（名）法律・勅令・閣令・省令等に關する親署・制定・公布其他の要用の方式。――**しよ**［公文書］（名）官府の權限職務の執行上作成したる文書。

(こう-ぶんぼ［公分母］（名）【數】等（ヒト）しき分母を有する多くの分數に對して、其分母の稱。

(こう-へい［公平］（名）平等不偏なると。偏頗無きと。たゞしきと。

(こう-へい［工兵］（名）城壘橋梁の築造架設其他軍事上の土木建築の事にあたる軍隊の稱。又、其軍隊に屬する兵士。――**くわいぎ**［工兵會議］（名）工兵の技術其他の事項に關して陸軍大臣の諮詢に應じ、且工兵の改良進歩に就きて審査立案をなす機關、工兵の佐官を以てこれを組織す。

(こう-べい［貢米］（名）みつぎ奉る米。

(こう-へう（ヒョー）［公表］（名）おもてむきに發表すると、世間に披露すると。

(こう-へう-るゐ（ヒョールイ）［喉鰾類］（名）【動】硬骨類中の一目、腹部の鰭（ヒレ）は胸部の鰭の後方に位し、鰾（エフ）は食道と連なるもの、こひ・ふな等これに屬す。

(こう-へん［口邊］（名）口のはし。口のほとり。

(こう-へん［公邊］（名）㊀おほやけ。官府。㊁おほやけざた。おもてむき。

(こう-へん［後編］（名）のちの卷。前編の對。

(こう-ほ［候補］（名）㊀或官職の缺位に補せらるゝをまつと、或官職に補せらるべきもの。㊁或地位身分を得んと望むと、或地位身分を得べき資格あると。又、其人。――**しや**［候補者］（名）候補となる人。候補を望む人。「代議士のー」。――**せい**［候補生］（名）或一定の修業を完了して、或官職若しくは地位に登用せらるゝ生徒。「士官ー」。

(こう-ほう［口俸］（名）糊口しえらるゝ俸給額。

(こう-ぼく［厚朴］（名）支那より渡來せる一種の藥、朴樹の皮にて製し、苦（ニガ）く辛（カラ）きもの。

こうぼふ-むぎ（ボー）［弘法麥］（名）【植】莎草科に屬する草、地下莖を有し、葉長く莖も長し、花は赤褐色にして、花序は小穗狀をなし花柱は三裂す、藥用に供せらる。いぬむぎ。

こうまう-の-がく（モー）［孔孟學］（名）支那の孔子及孟子の說き示したる學問、即ち儒學の稱。

(こう-みやう（ミョー）［功名］（名）「こうめい」に同じ。

(こう-みん［公民］（名）㊀國家に係屬し、獨立して生活を營む自由民。奴隸又は私民の對。㊁【法】市町村を構成する住民中公民權を有するものゝ稱、其資格は帝國臣民にして公權を有し、且一戸を構へ治產の禁を受けざる滿二十五歲以上の男子にして、二年以上其市町村の住民となり其市町村の負擔を分任し、其市町村内にて地租若しくは直接國稅二圓以上を納むるものとす。――**けん**［公民權］（名）【法】公民が公民たる地位によりて有する權利、即ち、其市町村の議員選擧に參與し、其市町村の名譽職に選擧せらるゝ權利。

(こう-む［公務］（名）國家又は公共團體の事務又は職務。おほやけのつとめ。

こう-め［小梅］（名）【植】（い）「しなのうめ」の一名。（ろ）「にはうめ」の一名。

(こう-めい［功名］（名）功をたて名をあぐると。功高く名あらはるゝと。

(こう-めい［公明］（名）偏頗又は私意なきと。邪曲又は陰蔽なきと。わたくしなきと。

(こう-もう［鴻濛］（名）物事の渾沌として不分明なると。太古のありさま。

(こう-もう［紅毛］（名）外國人の稱、其毛の赤きより呼べり。

(こう-もう［鴻毛］（名）（おほとりの毛の義）極めて輕き物事にたとへいふ語。「義は泰山、死はー」。

こう-や［紺屋］（名）こんや。染物屋。

(こう-やく［後約］（名）のちのやくそく。

(こう-やく［口約］（名）くちやくそく。

(こうやく-すう［公約數］（名）【數】二つ以上の數に通じたる約數。

(こう-よ［公餘］（名）官務のひま。

(こう-よう［公用］（名）㊀おほやけの用事。おほやけのつとめ。（公事）。㊁國家又は公共團體の需要。――**ざいさん**［公用財產］（名）【法】官廳の建物敷地などの如く、公用に供する國有の財產。――**せいげん**［公用制限］（名）【法】國家が公用のために、特定物に對する所有權を制限する行政處分。されど所有權は消滅するものにあらずして、行政處分の解除とともに復用するものとす、例へば公用の工事のために、一時隣接地を占有使用するが如し。――**ちようしう**［公用徵收］（名）【法】國家が公用のために、特定物に對する所有權を強制して徵收する行政處分、土地の公用徵收に就ては、土地徵收法による。――**にん**［公用人］（名）昔時、大小名の家に事（ツカ）へて、公用を辨ぜし人。

(こう-よう［功用］（名）用ひて功あると。はたらき、きゝめ。

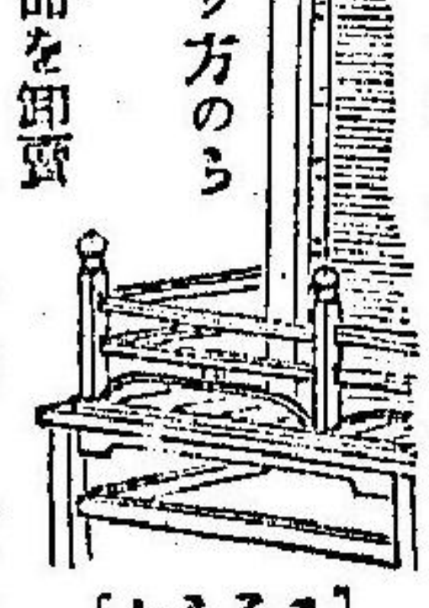
(こう-らい［後來］（名）このゝち。ゆくすゑ。將來。

(こう-らう（ロー）［功勞］（名）ほねをり。はたらき。

†**こうらう-でん**（ロー）［後涼殿］（名）古昔、淸涼殿の西にありし御殿。こうりやうでん。

(こう-らく［後樂］（名）（天下の樂にゝおくれて樂しむ義）國家國民の事に關して心をつくし前途を考ふると、「先憂ー」。

(こう-らん［句欄］（名）折れ曲がりたる造り方のらんかん。



［こうらん］

こう-り［小賣］（名）物品を卸賣（オロシウリ）の許（モト）より買ひ入れ、これを少しづゝ分けて賣ると。卸賣の對。「菓子ー營業」。（零賣）。

こうり［梱］（名）細にてくゝりたる荷物。包裝したる貨物。こり。

(こう-り［公理］（名）㊀證明を要せず又は證明すると能はず、凡ての論證の根據となる理。㊁他の物事を說明する根據にして且證明を要せざる理。

(こう-り［公吏］（名）國家の事務を扱（アツカ）ふ人に

して官吏にあらざるもの、執達吏・公證人乃至自治體の吏員等の類これなり。

(こう-り[功利](名) ㊀功名と利慾と。又、功績あり利益あること。㊁【倫】利益。幸福。——けう[功利教=Utilitarianism](名)【倫】一派の倫理說、其中に自身の利益幸福を道德の標準となすものと、他人の利益幸福を道德の標準となすものと、社會の最大多數者の最大幸福を道德の標準となすものとあれど、普通には最後のものをさしていふ。——せつ[功利說](名)【倫】前條に同じ。

(こう-りう[拘留](名) ㊀とらへてとめおくこと。㊁【法】刑事被告人を監獄に拘禁すること。又、違警罪の犯者を、一日以上十日以下の刑期間、定役に服せしめずして留置すること。——じやう[拘留狀](名)【法】豫審判事が刑事被告人を拘留するために發する令狀、通常被告人を訊問せし後にあらざればこれを發することを得ざれど、被告人逃亡したる場合には、直ちに發するものにして、釋放なき以上は、判決執行に至るまで被告人の自由を拘束する効あるものとす。——しよ[拘留所](名) 拘留に處せられたる違警罪犯者を拘置する所。

(こう-りつ[公立](名) 國家又は公共團體の設立維持にかゝること。又、其物。

(こう-りつ[工率=Power](名)【理】器械が單位時間になす仕事。

(こう-りやう[公領](名) 公の領地。官の所有地。私領の對。

(こう-りやう[餱糧](名) ひやうらう。ほしひ。

(こう-りやう[口糧](名) 兵士の糧食。

(こう-りやう-でん[後涼殿](名) 「こうらうでん」に同じ。

(こう-りやく[攻略](名) せめとること。せめうばふこと。

(こう-りよく[公力](名) 個人又は團體を強制し服從せしむる國家又は社會の權力。

こう・る[梱](他、ら四) 綱をかけて荷造をなす。

(こう-るゐ[紅淚](名) 血の淚。又、美人の淚。

(こう-れい[恆例](名) つねの例式。きまりの行事。(常例、定例)。

(こう-れん[後聯](名) 漢詩の律の第五第六の句、多くは對語を以て聯合するもの。

(こう-ろ[攻路](名) 攻め行く路すぢ。

(こう-ろ[紅爐](名) 炭火のさかんにおこりてあるゐろり。「—上一點雪」。

(こう-ろ[鴻臚](名) 外國の來賓との應接。又、其職名。——くわん[鴻臚館](名) 古昔、外國の來賓を接待するため京都に設けられし館。

(こう-ろう[紅樓](名) 財產家のむすめの住居。又、妓女などの住居にもいふ。

〔こうろ-へ・る(自、は下二) ㊀年功を積みて其物事に熟練す。㊁成熟して、盛熟し若しくは長大となる。「こうろへた猿」。

(こう-ろん[口論](名) ことばあらそひ。くちあらそひ。さうろん。

(こう-ろん[公論](名) ㊀偏頗なき公平なる論。㊁世上一般の議論。

(こう-わ[媾和](名) 「かうわ」(講和)に同じ。

(こう-ゐ[攻圍](名) 城塞をとりまき攻むること。

(こう-ゑん[公園](名) 社會公衆の遊步するために設けたる庭園。(遊園、附園)。——ち[公園地](名) 前條に同じ。

(こう-ゑん[後援](名) 後詰のたすけ。——たい[後援隊](名) 後詰に來れる軍隊。

(ご-うん[五蘊](名)【佛】色・受・想・行・識の五つの稱、一切の有爲法を此に攝しあつむといふ。ごをん、

こえ[肥](名) ㊀土地に使用して、地味を肥やし生產力をゆたかにするもの。こやし。ひれう。㊁糞又は尿(イバリ)の特稱。

—ごえ[越](接尾) こゆる路。峠路。「伊賀—」。

(ご-えい[御影](名) 最も尊敬すべき人の畫像又は寫眞などの敬稱。

こ-えだ[小枝](名) 小さき枝。さえだ。(條、條枝)。

こえ-たご[肥桶](名) 肥を運ぶ桶。

こえ-つち[肥土](名) 地味肥えて生產力ゆたかなる土壤。

こえ-つぼ[肥壺](名) 大小便を受くる壺。(糞坑、廁池)。

こえ-とり[肥取](名) 廁(カハヤ)の兩便をくみとりて掃除する人。(淨人)。

ごえふ-の-まつ[五葉松](名)【植】松杉科に屬する木、葉細く短く、木理密にして樹皮鱗の如くならず、毬果は長楕圓狀をなす、觀賞用として栽培せらる、いつはのまつ。(五剌、五鬣松)。

こえ-まつ[肥松](名) 松樹のやに多き處。

〔こえ・る[肥](自) 「こゆ」の訛。

コエンドロ[胡荽=Coriandrum sativum](名)【植】繖形科に屬する草、葉は鋸齒を有し、花は五瓣にして淡色なり。こにし。

こ-および[小指](名) 「こゆび」の古稱。

こ-おろし[子墮](名) 藥を用ひて胎內の子をおろすこと。(墮胎)。——ぐすり[子墮藥](名) 墮胎に用ふる藥品。

(こ-おん[古音](名) 古昔の字音又は國音。

(ご-おん[吳音](名) 漢字の字音の一、漢音の條を見よ。

(ご-おん[五音](名) 「ごいん」に同じ。

(こ-か[古歌](名) 古き歌、古人の歌。

(こ-か[胡笳](名) 支那の胡人の吹く、一種の笛、蘆の葉をまきてつくりたるものにて、悲哀の音を發すといふ。

(こ-か[古柯](名) ㊀ふるきえだ。㊁【植】「こかのき」に同じ。

(こ-が[古雅](名) 古代の風ありて風雅なること。又、ふるびて雅致多きこと。

(こ-が[個我](名) 差別上の自我、個人としての自我。

〔こが(名) 籠又は桶の方言。(桶)。

(ご-か[梧下](名) 「きか」(机下)に同じ。

(ご-か[五加](名)【植】「うこぎ」の一名。

(こ-かい[湖海](名) ㊀湖と海と。㊁世の風塵を餘所(ヨソ)にしたる所。㊂度量の大なること。意氣の豪なること。「—の士」。

(ご-かい[五戒](名)【佛】偸盜・邪婬・妄語・殺生・飲酒の五つの惡行の戒。

ご-かい[沙蠶](名)【動】環蟲類に屬する蠕形動物、形狀は蚯蚓に類し細長にして赤色を帶ぶ、淺海の泥中に棲息す、魚を釣る餌(エサ)に供せらる。ゐむし。ごけ。

(ご-かい[誤解](名) 理會をあやまること。意味をとりちがふること。げしちがへ。おもひちがへ。

(ご-かい-だう[五街道](名) 昔時、江戶を起點としたる五つの街道、即ち、東海道・中山道(木曾街道)・日光街道・甲州街道・奧州街道の稱。

コカイン[Cocaine](名)【化】「コカ」と稱する植物の葉の中に含有せる「アルカロイド」、斜狀の結晶をなし、熱湯又は「アルコホル」等に溶解す、局部の痲痺を惹(ヒ)き起す性あるを以て、醫師が小手術を行ふに使用せらる。

(こ-かう[枯槁](名) ㊀活氣絕ゆること。かるゝこと。㊁やせおとろふること。「形容—」。

(こ-かう[孤高](名) ひとりはなれて高きこと。

(こ-かう[鼓行](名) 軍隊などがつゞみをうちならし勢をつけて行くこと。

(こ-がう[呼號](名) 呼びさけぶこと。

(ご-かう[五更](名) ㊀一夜を五つに分ちとる時刻の總稱、「かう」(更)の條を見よ。㊁昔時の時の名、今の午前四時。

(ご-かう[御幸](名) 主上のみゆき。

(ご-かう[五港](名) 我國最初の開港場たりし橫濱・神戶・長崎・新潟・函館の稱。

こ-がうし[小格子](名) ㊀小さき格子(カウシ)。㊁吉原にて、格低き女郞屋の稱。

こ-がき[小垣](名) ちいさかき。

こ-がき[小蠣](名)【動】「いそがき」の一名。

〔こ-がき[小餓鬼](名) こどもを賤めていふ語。

(こ-かく[古格](名) むかしの格式。古來のかた。

(こ-かく[顧客](名) 得意の客。おとくい。

(こ-かく[孤客](名) ひとりたび。又、其人。

〔こ-かく[小角](名) 昔時、芝居にて、錢百六十文の隱語。

(こ-がく[古學](名) ㊀古代の事を研究する學問。㊁明及宋などの儒者の性理說に反對して起りたる我國の儒學、專ら古文に就きて研究し孔孟の眞意を發揮せんとせしものにて、伊藤仁齋・山鹿素行・荻生徂徠等の主張せしもの、總稱、特に伊藤仁齋の主張を指していふ。㊂國學にて、本居宣長の學派の稱。

(こ-がく[古樂](名) 古代の音樂。

〔こ-かく[小角](名) へぎの角盆。

〔ご-かく[語格](名) ことばづかひの規則。

(ご-かく[五角](名) 五角形の略言。——けい[五角形](名) 五邊の直線形。五邊形。

(ご-かく[五覺](名)【佛】五つの覺(サトリ)、即ち衆生覺・聲聞覺・菩薩覺・三乘覺・佛覺の稱。

(ご-かく[互角](名) 互に力量優劣無きこと。(互格)。

(ご-がく[五嶽](名) 支那にある五つの大山、即ち泰山(東嶽)・衡山(南嶽)・華山(西嶽)・恆山(北嶽)・嵩山(中央)の總稱、上代にはこれを祀(マツ)りたり。(五岳)。

(ご-がく[語學](名) ㊀言語の發達及變化等に就きて研究する學。㊁言語・文章の性質・用法等を研究する學問。文法。文法學。㊂外國語の俗稱。——しや[語學者](名) 語學をなさむる人。又、語學に長(タ)けたる人。

こ-がく・る[木隱](自、ら下二) 木のかげに隱る。

こ-がくれ[木隱](名) 木のかげに隱るゝこと。

こ-かげ[木陰](名) 樹木のかげ。(樹陰)。

こ-がし[焦](名) ㊀こがすこと。㊁穀類を炒(イ)り碾(ヒ)きて製したる粉。㊂香煎の一名。

〔—ごかし(接尾) かこつけて自己の利を營(イトナ)むこと。「おための—」。

こ-がしら[小頭](名) 一群の中の一部の長たる位地にあるもの。「相撲の—」。

こ-かす[粉屑](名) 穀類などの粉になりたる物。

〔こか・す[轉](他、さ四) ㊀押し遣(ヤ)る。たふす。㊁ひそかに物の位置を轉ず。「品物を—」。

こが・す[焦](他、さ四) ㊀火にて燒き黑む。㊁焚物(タキモノ)をもて燻(クス)ぶ。㊂心を苦しめなやます。「思ひを—」。

こ-かぜ[小風](名) そよ吹く風。なよかぜ。(微風)。

(ご-かせん[五歌仙](名) 平安朝にて、和歌に秀でし五人、即ち大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城をいひ、又、赤染衛門・和泉式部・紫式部・馬內侍・伊勢大輔をもいふ。

こ-がた[小形](名) 形の小さきこと。又、其物。大形の對。

こ-がたな[小刀](名) 小さき刀。「ナイフ」。(削刀、鍛刀)。

(こ-かつ[枯渇](名) ㊀からびかわくこと。㊁乏(ボト)しくなること。「詩想—」。

｛こ-がつを[小鰹](名) 【動】「うづわがつを」の一名。

こ-がね[黄金](名) ㊀わうごん。きん。㊁金貨。㊂「こがねいろ」の略言。——いろ[黄金色](名) こがねの如き黄色。やまぶきいろ。(大貝)。——ぐさ[黄金草](名) 【植】菊の異稱。(金草)。——むし[黄金蟲](名) 【動】(い)鞘翅類中金龜子科に屬する蟲、體色は金光ある綠色にして、花蕊を吸收して害をなす、幼蟲は白色にして、俗に蠐螬(ジサム)といひ、田圃にありて植物の根を害す。(金牛兒、金龜子)。(ろ)「あぶらむし」の一名。——めぬき[黄金目貫](名) 【植】聚菊の異稱、花の形刀の目貫に似たるより名づく。

ご-か-の-あもう[吳下阿蒙](名) (吳の魯肅が呂蒙に「卿非復吳下阿蒙」といひし言に出づ)以前にかはらぬ暗愚のもの。

ご-か-の-き[古柯木](名) 【植】古柯科に屬する木、冬も落葉せず、夏花を開き、秋實を結ぶ、實より鹼を採る。(天竺桂)。

ご-か-の-こゑ[五個聲](名) 次條に同じ。

ご-か-の-しらべ[五個調](名) 琴にて五とほりのしらべ方、即ち搔手(カイテ)・片垂(カタタリ)・水宇瓶(スヰウビヤウ)・蒼海波(サウカイハ)・雁鳴(ガンメイ)の稱。

こ-がはせ[小爲替](名) ㊀郵便爲替にて、五圓以下のもの、稱、爲替料三錢なり。㊁「こがわせしようしよ」の略言。——しようしよ[小爲替證書](名) 小爲替の證書、該小爲替取扱の郵便局より差出人に交附するもの、受取人は何處の郵便局にても、これと引換に現金を受取ることを得。

こ-がひ[蠶飼](名) かひこを養ふこと。(養蠶)。

こ-がひ[子養](名) ㊀子を養ふこと。㊁こどものときよりやしなひ育つること。「—の小僧」。(子飼)。

こ-がひ[小買](名) 一時に多量の買入をなさずして、少々づゝの買入をなすこと、大買の對。(零買)。

こ-がひ[小貝](名) 漢字の偏の名、財・貯などの字の左方の貝の字の稱。おほがひの對。

こ-がひな[小腕](名) 小さきかひな。こうで。

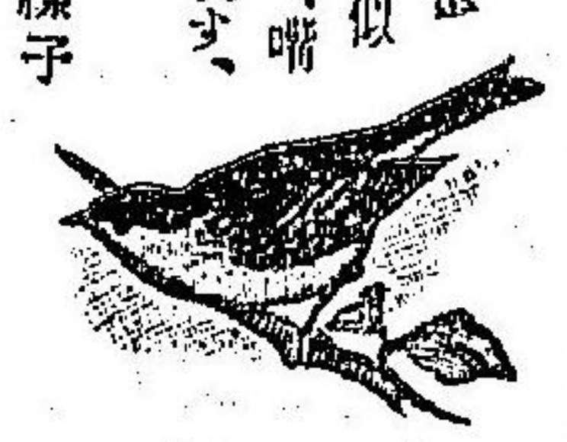
こ-がへり[子轉](名) 出產に臨み、胎内の子の位置を顚倒して、頭部の自然に下方に向ふこと。

ご-か-ぼう[五加棒](名) 一種の菓子、おこし米にて圓柱體に製したるもの。(糰家贅)。

廿こ-がみ(名) (「このかみ」(小腹)の略言)またはら。

こ-がも[小鴨](名) 【動】かもの一種、小形なり、背部灰黑色にして赤茶色の斑條あり、腹部は白褐色にして暗黑色の斑點あり。

こ-がら[小雀](名) 【動】燕雀類に屬する鳥、形はやまがらに似て、背腹共に白く翅尾共に黑し、嘴小さくして鋭く、木實及蟲を食す、美聲を發して鳴く。



[こがら]

こ-がら[子柄](名) 子供の樣子(ヤウス)又は顏だち。

こ-がらし[木枯](名) 季秋より初冬にかけて吹く風。(凩、颪)。

こ-がらす[小烏](名) ㊀小さき烏。㊁平家重代の名劍の名。

こ-が-らふ[古柯蠟](名) 古柯木より採りたる「蠟」。

廿こ-がら-め[小雀](名) 【動】「こがら」の古名。

こが・る[焦](自、ら下二) ㊀焼けて黑くなる。㊁いたく心に望みおもふ。㊂深く戀ひ慕ふ。

こがれ-じに[焦死](名) 深く戀ひ慕ひ、ために病を發して死ぬること。

｛こがれる[焦](自) 「こがる」の訛。

(ご-かん[冱寒](名) はげしき寒さ。

(ご-かん[五感](名) 視・聽・嗅・味・觸の五つの感覺。

(こ-き[古稀](名) (杜甫の詩の人生七十古來稀の句に出づ)七十歲の稱。

こ-き[國忌](名) (「こくき」の略言) ㊀天皇・皇后等の御忌日。㊁國喪。

(こ-き[古器](名) 古代の器物、古物。

(こ-き[古記](名) 古き記錄、舊記。

(こ-ぎ[狐疑](名) (狐は疑ひぶかき獸なりとの義に出づ)疑ひためらふこと、まよひてきまらぬこと。

(こ-ぎ[古義](名) ㊀むかしの意義又は解釋。㊁【佛】眞言宗にて、空海の所說を全然遵奉するもの。「新義の對」。

(こ-ぎ[古儀](名) 古昔の儀式。

(ご-き[碁器](名) 碁石をいるる器。

(ご-き[誤記](名) かきあやまり、かきそこなひ。

(ご-き[五氣](名) 溫・涼・寒・燥・濕の稱。

(ご-き[五畿](名) 畿内五國、即ち山城・大和・河内・和泉・攝津の稱。ごきない。

(ご-き[語氣](名) ものいひぶり、ことばのいきほひ。

(ご-き[御器](名) 椀の稱。(合器)。

廿ご-き-いた[胡鬼板](名) 「はごいた」の古稱。

(こ-きう[故舊](名) ふるきなじみ、むかしよりのしりあひ。(舊知)。

(こ-きう[狐裘](名) 狐の腋下にある白毛にてつくりたるかはごろも、古昔、支那にてこれを珍重せり。

こき-おろし[扱落](名) こきおろすこと。

こき-おろ・す[扱落](他、さ四) ㊀むしりておとす。こきておろす。㊁ひどく人を貶む。

こ-ぎく[小菊](名) ㊀花の細かき菊。㊁一種の紙、多く鼻紙に用ふるもの。

｛こき-こき(名、副) ㊀固きもの丶動くさまにいふ語。㊁物をすり洗ふさまにいふ語。

廿コキシ[鞬吉支](名) (百濟の語)三韓の王の稱。

廿こき-し[幾許](副) そこばく。いくら。

こき-たけ[扱竹](名) 稻を扱(コ)ぐ具、竹をもて作る。

廿こき-た・し(形、二) 多し。

廿こき-た・む[潛回](他、ま四) 漕ぎめぐる。

廿こき-た・る[扱垂](自、ら下二) たれさがる。たる。

｛こき-つかひ[扱使](名) こきつかふこと。

｛こき-つか・ふ[扱使](他、は四) むごきあひしらひをなして使ふ。あらく〳〵しく追ひつかふ。

こ-ぎって[小切手](名) 一種の手形、銀行に對して繼續したる信用を有するもの若しくは銀行に當座預金あるものが、其銀行を支拂人として振出したる一覽拂のものにして、必ず振出人・支拂人・受取人の三者を具有せざるべからず(尤も振出人は自己を受取人となすことを得)、所持人は其日附より一週間内にこれを呈示して、支拂を求めざるべからざるものとす、此手形も裏書によりて轉傳することを得。——ちやう[小切手帳](名) 小切手を綴(ツヅ)り合はしたる帖、銀行より當座預金者に交付するもの。

(ご-きない[五畿内](名) 五畿に同じ。　「の、

｛こき-び[小氣味](名) 「こきみ」に同じ。

(こ-きふ[呼吸](名) ㊀息(イキ)の出入。㊁【動】動物の生活作用を營むため、呼吸器によりて外氣と血液との間に絶えず行はるゝ瓦斯の交換、即ち、體内の可燃物質の酸化によりて生ずる炭酸を排出して酸素を攝取するを、空氣中に棲息するものは、氣中に於てこれを行ふを得れど、水中に棲息するものは、直接に空氣に觸れざるが故に、水中に溶解せる酸素を取り、又、其中にて炭酸を排出するなり。㊂【植】植物が動物の如く、體内の炭酸を排出して外部の酸素を攝取すること、萌芽せんとする種子又は開放せんとする花蕾の如きは、其作用最も盛んなりとす。㊃つりあひ。かねあひ。はずみ。ぐあひ。——うんどう[呼吸運動](名) 【生】肺臟が内部の空氣を交換するために、絶えず行ふ一種の伸縮。——き[呼吸器](名) 呼吸の作用を營む器官の稱にして、即ち、高等動物の肺臟・魚類の鰓又は蜘蛛類の肺囊・昆蟲類の氣管若しくは下等動物の皮膚等これなり。

(こ-きぶつ[古器物](名) 「こき」(古器)に同じ。

こき-ま・ず[扱雜](他、さ下二) かきまぜあはす。

こき-まぜ[扱雜](名) こきまずること。｛——る[扱雜](他、ら下二) 「こきまず」の訛。

こ-きみ[小氣味](名) きもち、きみ。

｛こき-もとゆひ[扱元結](名) 「もとゆひ」に同じ。

(こ-きやう[故鄉](名) ふるさと、きやうり。故山、故國。(鄉國、家鄉)。

(ご-きやう[五經](名) 儒學にて聖人の述作として最も尊重する五つの經書、即ち易・書・詩・春秋・禮記の稱。

(ご-きやう[五境](名) 【佛】五つの境涯、即ち色・聲・香・味・觸の稱。

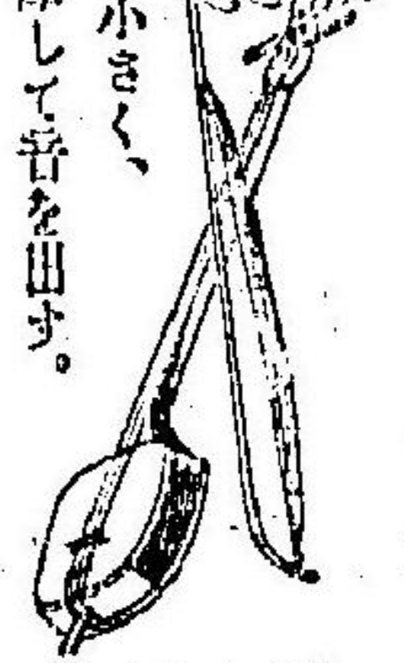
(ご-ぎやう[五行](名) ㊀支那古來の學說にて、天地の間に循環流行して停息せざる木・火・土・金・水の五つの元氣の稱、これによりて萬物組成せらるといふ、木は育成の德をつかさどり、方位にては東にあたり四時にては春にあたる、火は變化の德をつかさどり、方位にては南にあたり四時にては夏にあたる、土は生出の德をつかさどり、中央の方位にあたり四季の主たり、金は刑禁の德をつかさどり、方位にては西にあたり四時にては秋にあたる、水は任養の德をつかさどり、方位にては北にあたり四時にては冬にあたるとせり、又、木より火を、火より土を、土より金を、金より水を、水より木を生ずるを相生といひ、木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木に剋つを相剋といふ、陰陽家などにてはこれを男女の性に配し、相生のもの相合すれば和合して幸福あり、相剋のもの相對すれば不和にして災難來るといへり。㊁【佛】五つの修行、即ち布施・持戒・忍辱・精進・止觀の稱。

(ご-ぎやう[御形](名) 【植】「おぎやう」に同じ。——よもぎ[御形蓬](名) 【植】前條に同じ。

(こ-きやく[沽却](名) 賣り果たすこと、賣却。

(ご-ぎやく[五逆](名) 五つの罪惡又は刑罰、佛道にては、父を殺すと・母を殺すと・佛身より血を出だすと・阿羅漢を殺すと・和合の僧を破るとの稱にして、其一を犯すとも必ず無間地獄に落つといへり、普通にては、君を殺すと・父を殺すと・母を殺すと・祖父を殺すと・祖母を殺すとの稱にして、何れも極刑に行はるゝものとせり。

(こ-きゆう[胡弓](名) もと西洋より渡來せし一種の樂器、形は三味線に似て小さく、小弓の弦にて其絃を摩して音を出す。(鼓弓、提琴)。



[こきゆう]

（こ-きよ）［故墟］（名）ふるき城あと。

（こ-ぎよ）［枯魚］（名）ほしうを。ひもの。

（こ-きよく）［古曲］（名）古代の音曲。

こ-ぎり（名、副）㊀かぎり。きり。たけ。「これ一出きぬ」。㊁固きもの、觸れ合ふさまにいふ語。「頭を一ぶつつける」。

廿**こ-ぎ-る**［扱入］（他、ら下二）ひきてしごき入る。こきおとしている。

こ-ぎ-る［小切］（他、ら四）㊀小部に分く。小さく切る。㊁ねぎる。

こ-ぎれ［小切］（名）㊀物の小さき切れはし。特に、反物の切れはし。㊁芝居にて、衣裝に附屬する襟卷・腰卷・しごき等の稱。

（こ-きん）［胡琴］（名）淸樂に用ふる一種の樂器、もと胡國より傳はりしものといふ。

（こ-きん）［古金］（名）昔時通用せし貨幣。——**ぎん**［古金銀］（名）前條に同じ。

（ご-きん）［五金］（名）金・銀・銅・鐵・錫の稱。

こきん-びな［古今雛］（名）雛人形の小さきもの。

（こ-きんらん）［古金襴］（名）古代の金襴。

（こく）［穀］（名）常食に供する穀物、即ち、米・麥・豆・粟・稷・黍等の稱。たなつもの。

（こく）［石］（名）㊀斗の十倍の量。（斛）。㊁日本形の船舶の積量にて、十立方尺の稱。「千一船」。

（こく）［刻］（名）㊀てうこく。きざみ。ほり。㊁漏刻の水の漏れ落つる壺の內の箭にきざみてある目盛、其一刻は一時間の四分の一を表はす。㊂一晝夜の百分の一の稱、一日を十二時とし、晝夜の長短によりて違あれども、平均一時は八刻三分の一にあたる、春分及秋分は晝夜各五十刻、冬至は晝四十刻夜六十刻にして、夏至は晝六十刻夜四十刻なり。㊃十二時に十二支を配したる一時の三分の一の稱。「巳の上一」「申の下一」。

（こく）［酷］（名）嚴に過ぐること。又、むごきこと。「一なる取扱」。

（こく）［殼］（名）昆蟲などの外皮。から。

こ・く［扱］（他、か四）㊀かきおとす。むしる。㊁物の間に挾み又は物の間を通して引く。「飴を一」。

こ・く［放］（他、か四）はなつ。發す。「屁を一」。

こ・ぐ［漕］（他、か四）㊀櫓にて船をこぎ進む。「船を一」。（擢、榜）。㊁居睡して體をぶらつかす。

（ごく）［獄］（名）㊀囚人などを其自由を束縛してとめおく所。ごくや。「一に下す」。㊁うつたへ。訴訟。

（ごく）［穀］（名）穀物。「一つぶし」。

（ご-く）［御供］（名）御供物の略言。

（ご-く）［五苦］（名）【佛】人生の五つの苦、即ち生・老・病・死及愛別の稱。

（ご-く）［語句］（名）ことば。又、ことばのきり。

（ごく）［極］（副）このうへなく。きはめて。もっとも。

（ごく-あく）［極惡］（名）最大なる惡逆。

（こく-あん）［國安］（名）國內の治安。

（こく-い）［刻意］（名）自分の意思をいためくるしむること。自分の慾情をおさへつくること。

（こく-い）［黑衣］（名）㊀黑色のきもの。㊁すみぞめのころも。僧衣。——**のさいしやう**［黑衣宰相］（名）僧侶にして君王を輔佐し大政に參與するものゝ稱。

（ごく-い）［極意］（名）おくのて。奧義。

（こく-いう）［國有］（名）國家の所有。

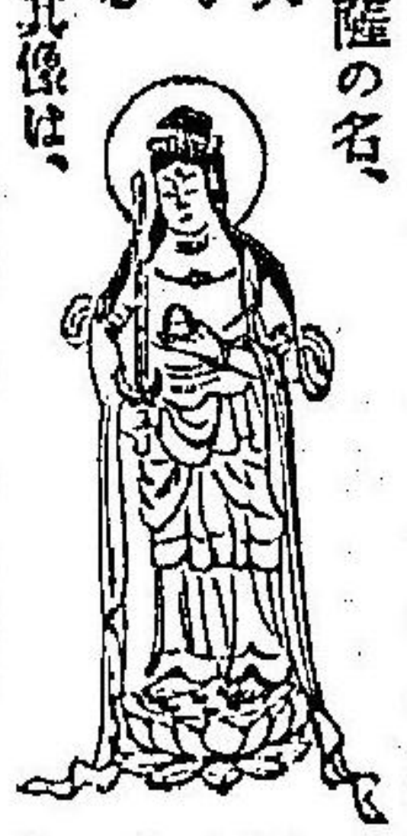
（こく-いん）［刻印］（名）きざみてこしらへたる印。

（ごく-いん）［極印］（名）㊀昔時、通用貨幣の發行所改役目などの證據に、其貨幣に打ち込みし符號。㊁きはめの證據。しるし。

（こく-いん）［黑印］（名）すみつき。

（こく-う）［穀雨］（名）二十四氣の一、春の氣節中の最後なるもの、陽曆四月二十日にあたる。

（こ-くう）［虛空］（名）㊀天地間の空なる所。そら。㊁【佛】無相無色なること。㊂「一を摑んで七顚八倒」。前後の思慮なきこと。うっかりしてあること。氣のつかぬこと。㊃目的なきこと。㊄忌憚なく亂暴を行ふこと。——**かい**［虛空界］（名）【佛】眞如は無形無相にして、一切所作の業を受容するより、眞如の妙理又は眞如の境地の稱。——**ざう**［虛空藏］（名）㊀【佛】菩薩の名、智慧慈悲の廣大無邊なること恰も虛空を藏とせるが如しといふ、其像は、右に劍を持ち左に如意寶珠を持つ。㊁【動】「こめむし」の一名。——**もの**［虛空者］（名）忌憚なく亂暴を行ふもの。


［こくうざう（一）］

（ご-くう）［御供］（名）ごくもつ。ごく。——**しよ**［御供所］（名）社寺に屬して、神佛にさゝぐる供物（クモツ）を調ふる所。（神厨）。——**すゐ**［御供水］（名）神佛に奉る水。

（こく-うん）［國運］（名）一國の運命。（國步）。

（こく-うん）［黑雲］（名）くろくも。

（こく-えい）［黑影］（名）くろきかげ。又、かげぼふし。

（こくえう-せき）［黑耀石］（名）【鑛】玻璃質火山岩の一種、質脆く黑色又は赤褐色にして、介殼狀の斷口を有す、器物又は粧飾品の料に供せらる、上代には、これを用ひて矢の根などをつくりたり。

（こく-えき）［國益］（名）一國の利益。「一を計る」。

（こく-えん）［黑鉛］（名）石墨に同じ。

（こく-えん）［黑烟］（名）黑きけぶり。くろけぶり。

（こく-おん）［國恩］（名）生まれたる國の恩。

（こく-おん）［國音］（名）㊀一國の人の固有の音聲。㊁字音に對して、我國語の音の稱。

（こく-か）［國歌］（名）一國のおほやけの儀式に、奏樂にのせうたふべきものと定められたる歌。

（こく-か）［刻下］（名）このごろ。いま。

（こく-か）［國家］（名）【法】一定の土地に於て統治組織を有する人類の社會。又、統治權の主體。——**がく**［國家學］（名）國家の性質・組織及其發達・變遷等に關して研究する科學。——**きくわん**［國家機關］（名）【法】國家が國土人民を統治するために設けたる機關、內閣・各省大臣・裁判所等すべてこれなり。——**けいざい**［國家經濟］（名）國家の財政。——**けういく**［國家敎育］（名）【敎】國家に於て施行せらるゝすべての敎育の稱。又、國家主義によりて敎育事業を組成し、以て個人の敎育を施すこと。——**しやくわい-しゆぎ**［國家社會主義＝State socialism］（名）【經】國家が、個人放任主義をも取らず國家萬能主義をも取らず、放任を得策とすれば放任し、干涉を得策とすれば干涉し、殊に重きを富の分配に置きて貧弱を保護し、社會の平衡を保持するを以て目的となす主義。——**しゆぎ**［國家主義＝Nationalism］（名）㊀【倫】人生の行爲の目的は、其保屬する國家の福利・安寧を保護・增進するにありといふ主義、其中に個人の福利及意思は絕對に國家の犧牲となして、これに服從せしむべしと極端に論ずるものもあれど、個人が國家の保護の外に於て生存し得ざると同じく、國家も個人なければ成立し得ざるが故に、國家の福利の增進を圖ると同時に、また個人の福利の增進を圖るべしと說くもの多し。㊁【經】國際貿易の政策上、個人を單位とせずして國家を單位とし、國家全般の利害を標準とする主義。——**しゆけん**［國家主權］（名）【法】「しゆけん」（主權）に同じ。——**しゆけんせつ**［國家主權說］（名）【法】主權は國家にありて、君主は其機關なりといふ說。——**ばんのうしゆぎ**［國家萬能主義＝Collectivism］（名）【經】經濟上の事業を個人に放任するは、社會の秩序を亂り、貧富の懸絕をして益〻甚しからしむるものなるが故に、すべて國家に於て經營すべしとの主義。——**れんがふ**［國家聯合］（名）【法】國家と國家とが、共同して政務を施行するために聯合すること。

（こく-が）［國衙］（名）國司のつかさ。

（こく-かい）［國界］（名）くにざかひ。國境。

（こく-かう）［國交］（名）國と國との交際。

（こく-がう）［國號］（名）一國の稱號。王朝のとなへ。

（こく-がく）［國學］（名）㊀我國の國史・國文等を研究する學問。㊁古昔、諸國に設けたりし學校。㊂支那の古代にて、天子の宮城のある地若しくは諸侯の居城ある地に設けてありし學校。國の大學。

（こく-かん）［國漢］（名）國語と漢文と

（ごく-かん）［極寒］（名）極めて寒きこと。（酷寒）。

（こく-き）［國忌］（名）「こき」に同じ。

（こく-き）［國旗］（名）一國の規定の旗じるし、即ち其國を表示する旗、我國にては日丸を章とす。

（こく-き）［國基］（名）くにのもとゐ。

（こく-き）［國器］（名）國家をおさむるほどの大器量、又、其大器量ある人物。

（こく-ぎ）［國儀］（名）國家のおほやけの儀式。

（こく-きう）［黑球］（名）黑色のたま。

（こく-きふ）［哭泣］（名）聲をあげて泣くこと。

（こく-きやう）［國境］（名）くにざかひ。

（こく-ぎやく）［酷虐］（名）くるしめしへたぐること。

（こく-きん）［國禁］（名）國法上の禁制。

（こく-く）［刻苦］（名）いたく心力をつかふこと。身心をくるしめつとむること。「一勉强」。

（こく-くわい）［國會］（名）㊀全國各地の人民より選擧したる各議員が、集まりてなす大會議。㊁民選又は勅選等の議員を以て組織せられたる憲法上の合議制度の機關、帝國議會の如きこれなり。——**ぎゐん**［國會議員］（名）國會を組織する議員、衆議院議員などの如きこれなり。

（こく-ぐわい）［國外］（名）一國の領土の外。

（こく-くわう）［國光］（名）㊀一國の政治・風俗等の狀態。「一を觀る」。㊁くにのひかり。くにのさかえ。くにのいきほひ。

（こく-くわん）［國患］（名）國家のうれひ。くにの患。

（こく-くん）［國君］（名）一國の君主。くにのきみ。（國王）。

（こく-くん）［國訓］（名）我國にて行はるゝ漢字のよみ。

（こく-けう）［國敎］（名）國家が認めて國民の信奉すべき宗敎とし、其敎務を國家の事務の一部として取扱ふもの、我國には國敎の制度なし。

（こく-げき）［轂擊］（名）車のこしきとこしきとが摩（ス）れあふこと。人の雜沓するさまにいふ語。（肩摩の條を見よ）。

（ごく-げつ）［極月］（名）十二月の異稱。しはす。

（こく-けん）［國憲］（名）國家の根本の法規。くにのり。

（こく-けん）［黑圈］（名）黑きけんてん。

(こくけん（コッ）【國權】(名) 國家の權力。——たう【國權黨】(名) ㊀國權を擴張し強盛にせんことを目的として團結したる黨派。㊁嘗て、熊本縣下を本據となし、一種の黨派。

(こくげん【刻限】(名) 定めたるかぎりの時刻。——づけ【刻限附】(名) 急速の取扱を要する文書などに、其取扱の刻限を記すること。

(こくこ（コッ）【國庫】(名) 國家の收入支出をなす源、即ち、國家の資財を集合して統一せる所。又、國家が財產權の主體たる場合の稱。——きん【國庫金】(名) 國庫の所有に屬する金。——さいけん【國庫債券】(名)「こくさいしようけん」(國債證券)に同じ。——しべん【國庫支辨】(名) 國庫より其費用を支出すること。

(こくご【國語】(名) ㊀國民一般に使用する其國の言語。㊁我國固有の言語。——がくかう（ガッコウ）【國語學校】(名) 臺灣總督府の統轄に屬し、我國語を教授する學校。

(ごくごく【極極】(副) きはめて。もっとも。「——わるい」。

(こくさい【國祭】(名) 我國のおほやけの祭日、即ち、四方拜・元始祭・孝明天皇祭・紀元節・神武天皇祭・春季皇靈祭・秋季皇靈祭・天長節・神嘗祭・新嘗祭の稱。

(こくさい【國宰】(名) 大臣。宰相。

(こくさい【國債】(名) 國家の公債。——しようけん【國債證券】(名) 國債を表證するための證券、公債證書の如きこれなり。

(こくさい【國際】(名) 國家と國家との交際又は關係。——かはせ（カワセ）【國際爲替】(名) 外國爲替に同じ。——くわいぎ【國際會議】(名) 國際上の事件に關し、各國の全權委員によりて催(もよほ)さるゝ會議。——くわんれい【國際慣例】(名) 國際上に行はるゝ、從來のならはし。——けいはふ【國際刑法】(名)【法】犯罪に就きて、國家と國家との關係を定むる國際法。——こうあん【國際公安】(名)【法】國家の安寧秩序の關係が、其國人と外國人と又は外國人と外國人との間に存在する場合の稱。——こうはふ【國際公法】(名)【法】國際法の一、國家と國家との權利關係を規定したる法律の稱にして、各國のこれを承認したるもの。——こんいん【國際婚姻】(名)【法】これを行ふ人又は土地が、二國以上に關係したる婚姻の稱。——しはふ【國際私法】(名)【法】國際法の一、二國以上の人民相互間の權利關係を規定したるもの。——だんぱん【國際談判】(名) 國際の事件に關したる談判。——でうやく【國際條約】(名) 條約に同じ。——はさん【國際破產】(名)【法】一の破產が國際上の關係となる場合の稱。——はふ【國際法】(名)【法】國際公法及國際私法の總稱。——はんけん【國際版權】(名)【法】國家と國家との間に、條約を締結して保護する彼我の國民の版權。——ぶんげふ【國際分業】(名)【經】一國民と他國民との間に行はるゝ分業、例へば甲國はおもに農業、乙國はおもに鑛業、丙國はおもに工業に從事する等をいふ、かくて有無相通じて人生の經濟を形成す。——ぼうえき【國際貿易】(名) 一國民と他國民との間に行はるゝ貿易。外國貿易。

(こくざい【國財】(名) ㊀國民の總財產。㊁國家の所有に屬する財貨。(國帑)。

(ごくさいしき【極彩色】(名) 最も精密にしたる彩色、いと見事なる彩色。(大着色)。

(こくさう【國葬】(名) 國家に偉大なる功勞ある人などの葬式を國費をもて行ふこと。

(こくさう【國喪】(名) 國民全體の喪、即ち、主上・皇后・皇太后等の喪の稱。

(こくざう【國造】(名) 上古の國司。くにのみやつこ。

(こくさく【告朔】(名)「こうさく」に同じ。

(こくさん【國產】(名) 其國の產物。又、我國の產物。

(こくし【國師】(名) 古來、天子より智徳高き禪僧に賜はる稱號。

(こくし【黒子】(名) ㊀ほくろ。(黶痣)。㊁ちひさきもの。「彈丸——の地」。

(こくし【國史】(名) 其國の歷史。又、我國の歷史。「國志、國乘」。

(こくし【國司】(名) 古昔、日本六十六國及二島に置かれたる地方官の稱、守・介・掾・目等の職員ありたり。「土佐の——」。

(こくし【國士】(名) 全國中最もすぐれたる人。

(こくじ【國字】(名) ㊀其國の文字。㊁我國にて特に造りたる字、例へば辻、畑などの字をいふ。

(こくじ【告示】(名) 一般に告げしらすること。ふれわたし。(布達)。

(こくじ【國璽】(名) 國家を表章する印、我國のは方二寸九分の金材にして、大日本國璽の五字を篆るしあり、內大臣これを尚藏す、國書・條約批准・勳記等にこれを鈐せらる。

(こくじ【酷似】(名) 極めてよく似てあること。

(こくじ【國事】(名) 直接に國家に關する事柄、特に政事に關していふ。——たんてい【國事探偵】(名) 國事犯に關する罪狀を探偵すること。又、其職務の人。——はん【國事犯】(名)【法】直接に政治上の秩序を害せんとする犯罪、內亂及外患に關する犯罪の如きこれなり。

(ごくし【獄死】(名) 獄中にて死ぬること。

(ごくしう【獄囚】(名) 獄舍にとらはれたる囚人。

(こくしつ【黒漆】(名) ㊀黒色のうるし。又、それにて塗りたるもの。㊁黒色のうるしの如く、光澤ありて深黒なること。

(こくしつ【梏桎】(名) ㊀てかしとあしかしと。㊁自由を束縛すること。又、自由のほだし。

(こくしびやう【黒死病】(名)「ペスト」に同じ。

(ごくしや【獄舍】(名) ひとや。らうや。

(こくしやう【濃漿】(名) 一種の料理、鯉の肉を濃(こ)き味噌汁をもて煮詰めたるもの。

(こくじやう【國情】(名) 一國の情態。くにのありさま。(國狀)。

(ごくじやう【極上】(名) 最もすぐれたること。きはめて上きこと。「——の品」。

(こくしやうがん【黒障眼】(名)「そこひ」の一名。

(こくしゆ【國守】(名) ㊀古昔、國司の長官。くにのかみ。㊁國持の大名。一國の領主。

(こくしゆ【國手】(名) (一國の名手の意) 醫師又は碁打などの名人の稱。

(こくしゆく【穀菽】(名) 米・麥・粟・大豆・小豆等の總稱。

(こくしよ【國書】(名) ㊀君主又は大統領が、其國の名を以て發する文書。㊁國の歷史・文章などの書籍。

(こくしよ【酷暑】(名) きびしき暑さ。

(ごくしよ【極暑】(名) 前條に同じ。

(こくしよく【國色】(名) 國中にならぶもののなき容色。又、絕世の美人。「——無雙」。

(こくしよく【黒色】(名) くろきいろ。——じんしゆ【黒色人種】(名) 世界の人種の三大別の一、皮膚黒色若しくは暗褐色にして、髮黑く鼻平く、頸の中央突出したるを特徵とす。

(こくじよく【國辱】(名) 一國の辱。くにのはぢ。

(こくじん【國人】(名) 國の人民。くにたみ。

(こくじん【黒人】(名) 黒色人種に屬する人。くろんぼう。——しゆ【黒人種】(名)「こくしよくじんしゆ」に同じ。

(ごくしん【極心】(名) 心をこめてものをすること。

こくす（せし、すれ、せよ）【哭】(自、さ變) ㊀大聲をたてゝかなしみ泣(な)く。なきさけぶ。㊁支那にて、死を弔して、なきさけぶ禮を行ふにいふ。

こくす（せし、すれ、せよ）【刻】(他、さ變) きざむ。ほる。

こぐすり【粉藥】(名) 粉末にしたる藥。散藥。

(こくすゐ【國粹】(名) 物質上又は精神上に於ける其國固有の長所、國民の特性・國土の狀態又は歷史等によりて養成せらる。——ほぞん【國粹保存】(名) 時勢如何に變遷すとも、國粹は永くこれを保存すべしといふこと。

(ごくずゐ【極髓】(名) ㊀このうへなきこと。㊁最も中心の所。

ごくすゐのえん【曲水宴】(名)「きよくすゐのえん」に同じ。

(こくぜ【國是】(名) 輿論の認(みと)めて可とする國政の方針。「——を定む」。

(こくせい【國政】(名) 國のまつりごと。

(こくせい【國勢】(名) 國のありさま又はいきほひ。

(こくせい【哭聲】(名) なきさけぶ聲。

(こくせい【國製】(名) 其國の製造。又、我國の製造。

(こくぜい【國稅】(名) 中央政府が其經費を支辨するために、直接に賦課する租稅、地租・所得稅・營業稅・關稅・登錄稅等の類これなり。地方稅の對。——ひん【國稅品】(名) 國稅として上納する物品、沖繩縣・小笠原島・伊豆七島にて行はる。

(ごくせい【極製】(名) 最上の製造、特別の製造。

(こくせう【酷肖】(名) よく似てゐること。

(こくせき【國籍】(名)【法】一國の臣民たる資格分限、又、其取得喪失の公證、國籍を日本に有すといへば、現に日本の臣民たるなり。

(こくせん【黒線】(名) 黒色のすぢ。

こくそ【[illegible]】(名) 蠶(カヒコ)の糞。

(こくそ【告訴】(名)【法】或犯罪の被害者が、犯罪事實を其權限ある官府に申告すること。——にん【告訴人】(名) 告訴せし被害者。

(ごくそう【獄窓】(名) 監獄のまど。轉じて、監獄のうち。

(こくそく【觳觫】(名) 死をおそるゝさまにいふ語。

(こくぞく【國俗】(名) 國の風俗習慣。

(こくぞく【國賊】(名) 國家に仇をなすもの。君を害し世を亂しなどする者。

こぐそく【小具足】(名) ㊀鎧(よろひ)の胴のみを略して、他は皆な着用してあること。㊁とりなは。

(ごくそく【獄則】(名) 監獄內の規則。

(ごくそつ【獄卒】(名) ㊀看守又は押丁の如き、獄囚を取扱ふ地位卑(ひく)きもの。㊁【佛】地獄にて亡者を責むるといふ鬼。㊂(義理人情を知らぬ人をいやしめていふ語。

(こくたい【國體】(名) ㊀國家を其組織特に其主權の存在によりて觀察したる稱、これを君主國體と共和國體との二に別つ。㊁國家の狀體、くにがら。㊂國家の面目。「——を辱しむ」。

(こくだい【國內】(名)「こくない」に同じ。

(ごくたい【玉帶】(名) ごくのおび。

(こくだう【國道】(名) 公道中にて幅員最も廣き定めの道路、即ち東京より伊勢の大廟又は各府縣廳・各師團司令部・各鎭守府等に通ずる道路。

〔ごくだう【獄道】(名) ㊀邪曲なること。惡事を行ふこと。㊁放蕩なること(大阪地方の方言)。㊂「ごくだうもの」の略言。——もの【獄道者】(名) わ

るもの。又、はうたうもの。

とくだか［石高］(名) ㊀米穀の數量。㊁扶持（フチ）―の高。

とくだち［穀斷］(名) 神佛などに祈願して、穀物を斷ちて食はぬこと。

(とくたん)［黑檀］(名)【植】柿樹科に屬する木、熱帶地方に產す、材質緻密にして漆黑色なり、諸種の什具を作るに用ひらる。（烏木。烏樠木）。

(とくたん)［穀旦］(名)（穀は善の義）吉日。良辰。

(とくたん)［黑炭］(名)【鑛】石炭の一種、色純黑にして光輝あり、これを火中に投ずればよく燃え黑煙臭氣を發す、木炭に比すれば三倍の火力を有す、主に燃料に供せらる。

(とくち)［告知］(名) つげしらすること。——**さんか**［告知參加］(名)【法】訴訟の告知を受けて、其訴訟に參加すること。——**ばん**［告知版］(名) 特定の人に告知せんとする事柄を掲示しおくための版、停車場などに旅客使用のために設く。

とぐち［小口］(名) ㊀きりはし。はし。「木の―」。㊁いとぐち。端緒。「亂行の―」。㊂區別。部門。㊃少なき額。多からぬ量。「―の預金」。㊄「こぐちぼり」の略言。——**がき**［小口書］(名) 物の小口に其物の性質などを記すこと。又、其文句。「雜誌の―」。——**ぎり**［小口切］(名) 小口を切ること。又、小口より順次に切ること。——**どり**［小口取］(名) ㊀小口よりものをとること。㊁部門を設け區別をなすこと。——**ぼり**［小口彫］(名) 版木の材の橫斷面に、彫刻を施すこと。又、其彫刻物。——**のはかま**［小口袴］(名) くゝりを入れたる大口の袴。

とぐちたうざ［小口當座］(名)「こぐちたうざよきん」の略言。——**よきん**［小口當座預金］(名) 銀行が一口の金高五圓以下に限りたる特別の當座預金、普通の當座預金より高利を附して、これが引出又は預入は共に通帳を以てす。

(とくちゆう)［國中］(名) 國のうち。國內。

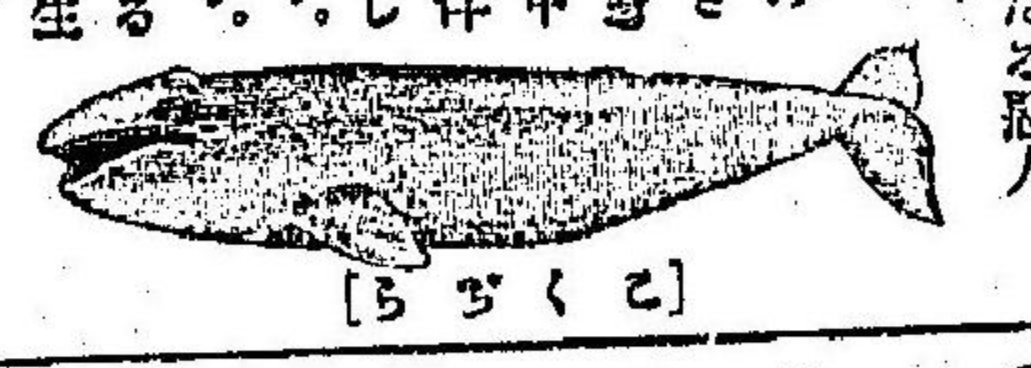
(とくちゆう)［黑丑］(名)【植】「あさがほ」の一名。

(どくちゆう)［獄中］(名) 獄屋の中。

(どくぢゆうあくにん)［極重惡人］(名) 世のつねならぬ惡人。最も重き罪を犯（ヲカ）したる惡人。

(とくちよ)［國儲］(名) 諸侯の世子。又、君主の後繼者。

とくぢら［小鯨］(名)【動】くぢらの一種、形狀はせみくぢらに似、稍や小さくして圓長なり、頭小く背鰭なし、全身淡黑色にして淡灰色の斑文あり、口中の鬚白し、通常は溫順なれど、稚兒を伴ふときは強暴なり、皮肉共に佳良にして、殊に鬚は工藝上貴重なる材料なり。



［こくぢら］

とくづけ［刻附］(名) こくげんづけ。

(どくつぶし)［穀潰］(名)（徒食するもの、義）無能無益にして、徒（イタヅラ）に生活する人をのゝしりていふ語。（穀費）。

(とくてい)［國定］(名) 國家の制定。國法の規定。——**けうくわしよ**［國定教科書］(名) 文部省などが、特に編纂規定したる學校の教科書。——**ぜいりつ**［國定稅率］(名) 國法の規定したる輸出入貨物に賦課する稅率。

(どくてい)［獄丁］(名) 獄卒。

(とくてう)［國朝］(名) わがくに。わがてうてい。

(とくてん)［國典］(名) ㊀國の儀式又は事例。㊁我國文にて我國の事を記したるもの。邦書。

(とくてん)［黑點］(名) 黑色の點。くろぼし。

(とくてん)［黑甜］(名) ひるね。午睡。

(とくと)［國都］(名) 一國の首都。

(とくど)［國土］(名) ㊀【法】統治權の客體の一、國家の領有に屬する土地、即ち統治權の行はるゝ境域。㊁ふるさと。故國。

(とくど)［國帑］(名) 國庫の貨財。

(とくど)［黑奴］(名) 黑人を卑（イヤ）しめていふ語。

(とくど)［黑土］(名) ㊀黑色の土。㊁耕土の一、百分中二十以上の腐植物を含有し、鬆輕にして淡黑色なる土壤、地味上肥沃なるものとす。

(とくどう)［黑頭］(名) 髮くろき頭、轉じて、年わかき人。——**こう**［黑頭公］(名) 筆の稱。

(とくない)［國內］(名) くにのうち。國中。——**こうあん**［國內公安］(名)【法】國內の安寧秩序に關するすべての場合の稱。

(どくない)［獄內］(名) 監獄のうち。

(どくない)［極內］(名) 極めて秘密なること。

(とくないしやう)［黑內障］(名)「そこひ」の一名。

(とくなん)［國難］(名) 一國の危難。國家のわざはひ。

(とくにく)［黑肉］(名) 黑色の印肉。

(どくねち)［極熱］(名) 非常にあつきこと。

(とくねつ)［酷熱］(名) 前條に同じ。

(どくねつ)［極熱］(名) 前條に同じ。

‡**どくのおび**［玉帶］(名) 束帶の時袍を束ぬる帶、革にて製し飾るに玉石を以てす。

とくは［木鍬］(名) 全體を木材にてつくりたる鍬。（木鏟）。

(とくはう)［國寶］(名) ㊀くにのたから。㊁全國の社寺の寶物中、特に歷史の徵證となり若しくは美術の模範となるべき物件にして、內務大臣が古社寺保存會に諮詢して、保存すべき資格ありと認定したるもの。

(とくばう)［國防］(名) 國家が外敵に對して、設備せる防禦。くにのふせぎ。

(とくはく)［酷薄］(名) 殘酷にしてなさけ心なきこと。邪見。（刻薄）。

(とくはく)［告白］(名) つげかたること。あからさまにいふこと。

(とくはく)［黑白］(名)「こくびやく」に同じ。

(とくはつ)［告發］(名)【法】犯罪の被害者外のものが、其犯罪事實を權限ある官府に申告すること。

(とくはふ)［國法］(名) ㊀一國家に於けるすべての法規、國家が直接に制定せし法規。くにのおきて。㊁【法】國家の編制及各部の組織權限を定めたる法規。——**がく**［國法學］(名) 國家の編制を解剖し、各部の組織權限を研究する學。

(とくばん)［黑版］(名) 黑く塗りて白墨を以てこれに物事をかくための版、多くは學校の教室等にて教授用に掛け用ふ。

(とくひ)［國費］(名) 國庫支辨に屬する費用。

‡**とくび**［袵］(名) 衣服の襟（エリ）。おほくびの對。

とくび［小首］(名) 首を傾くるときに首の稱にいふ語。——**をかたむく** 首をかたむく。轉じて、思案するにいふ。

(どくひ)［極秘］(名) 極めての秘密。

(どくび)［極微］(名) ㊀極めて微なること、最も小なること。㊁最も其道のおくふかき義理。

(とくひやう)［酷評］(名) 過度にからき批評。手ひどき批評。

(とくびやく)［黑白］(名) ㊀黑色と白色と。㊁正と邪と。善と惡と。

(とくひん)［國賓］(名) 國家の賓客として、官府より特別なる優待をなす外來の貴賓。

(どくひん)［極品］(名) 極上の品。

(どくひん)［極貧］(名) 甚しき貧乏。

(とくぶ)［國府］(名) ㊀古昔、國ごとに置かれたる國司の官衙。府中。（國衙）。㊁「こくぶタバコ」の略言。——**タバコ**［國府烟草］(名) 大隅國國府地方より出す烟草、香氣ありて佳良なり。

(とくふう)［國風］(名) ㊀國中の風俗。㊁國中のはやりうた。

(とくふう)［谷風］(名) ㊀東の風。㊁【地】晝間山腹の溫度昇るにより、溪谷より吹き上ぐる風。

(とくふく)［克復］(名) 以前の狀態にかへること。又、以前の狀態にとりもどすこと。「平和―」。

(とくふく)［克服］(名) 敵にかちて服從せさすること。

(とくぶつ)［穀物］(名)「こくもつ」に同じ。

(とくぶん)［國文］(名) 國語を以て綴りたる文章の總稱。特に我國語にて綴（ツヅ）りたる文章。——**がく**［國文學］(名) 我國文の解釋組織又は使用等に就きて研究する學。

とくぶんじ［國分寺］(名) 天平十三年勅命を以て諸國に必ず建立せしめられし寺院、僧をおきて其國內の僧尼を監督せしめられたり。

(とくへい)［國柄］(名) 國土人民を支配する權力。國の政權。「―を握る」。（國秉）。

(とくへいしや)［國幣社］(名) 官幣社・別格官幣社に亞（ツ）ぐ格の神社。大社・中社・小社あり。

(とくべつ)［告別］(名) わかれをつぐること。いとまごひをすること。

(とくほ)［國步］(名) 一國のいきほひ又は運命。「―艱難」。

(とくぼ)［國母］(名)「こくも」に同じ。

(とくぼたん)［黑牡丹］(名) ㊀【植】紫黑色の牡丹の稱。㊁【動】牛の異名。

(とくほん)［國本］(名) 一國のねもと。くにのもとゐ。「農は―なり」。

(とくほん)［刻本］(名) 彫刻したる版木を印刷したる書物。版本。

とぐま［黑熊］(名)【動】熊の一種、小形なり、毛は黑褐色にして尾短し、雜食す。

‡**とくみ**［寄肉］(名) こぶ又はいぼ等の總稱。

(とくみん)［國民］(名) ㊀【法】統治權の客體の一、一定の統治權の下に服從關係を有する人類。（蒼生）。㊁同一の國籍を有する人民。同一の種族に屬する人民。——**ぎむ**［國民義務］(名) 國民一般の負擔すべき公法上の義務、納稅義務・兵役義務等これなり。——**ぐん**［國民軍］(名) 國民兵を以て編制したる軍隊。——**けいざい**［國民經濟］(名)【經】國民として共同生活を營む經濟的活動。——**けういく**［國民教育］(名)【教】國民に國民たる本分を知らしむるを目的とする教育。——**けふくわい**［國民協會］(名) 明治二十五年、西鄕從道・品川彌二郎等の主唱にかゝる政治的團體、始めは倶樂部組織なりしが、後に政黨となり、明治三十二年に解黨したり。——**しゆぎ**［國民主義＝Nationalism］(名) 異なる民族を排斥して同一の民族を以て國家を組織すといふ主義。又、自國民と同一なる民族を合して、自國の權力關係の下に置かんとする主義。——**せいしん**［國民精神＝Nationality］(名) 國家のために盡くす國民の氣風、國家の保護發達を圖る國民の精神。——**せき**［國民籍］(名)【法】國籍に同じ。——**へい**［國民兵］(名) ㊀國民兵役に服する國民の、召集せられて國民軍に編入せられたるもの。㊁國民兵役の略言。——**へいえき**［國民兵役］(名) 兵役の一、第一國民兵役と第二國民兵役とに分つ、第一國民兵役は後備兵役及補充兵役を終へたるものこれに服し、第二國民兵役は、常備兵役・後備兵役若しくは第一國民兵役にあらざる滿十七歲以上滿四十歲以下の日本帝國男子の悉く服するもの、

事變に際し、從備兵役にあるもの盡く召集せられ、尚ほ兵員を要する場合には召集せらる。

(こく-む[國務](名) 國家の政務。――だいじん[國務大臣](名) 內閣を組織する最高官府、國家の政務に關し、天皇を輔弼し、法律・勅令其他國務に關する詔勅に副署して其責を明かにす、たとひ自己の意見に反すとも、其官職にある間は、副署を拒むことを得ざるものとす。　「地方の方言)。

{こく-めい[克明](名) まめやか。まつてい。(東京

(こく-めい[國名](名) ㊀くにのとなへ。㊁くに　「語。
の名稱。

‡こく-も[國母](名) 皇太后又は皇后を申し奉る

こく-もち[黑餅](名) 紋所の名、正圓の中に模樣(モヤウ)のなきもの、中古の武士が、矢口の祭事の黑餅を象(カタド)りて始めたりといふ。――つけ[黑餅附](名) こくもちを付けたる着物。

(こく-もつ[穀物](名) こくるゐ。

こく-もり[石盛](名) 穀の出來高により、其田畝の位地を定め年貢(ネング)の石數を定むること。

(ごく-もん[獄門](名) ㊀獄屋の門。㊁昔時の刑罰、斬罪に處したる首を、獄屋の門の邊の木に懸けて曝(サラ)しゝこと。さらしくび。梟首。(斬首、梟獄)。――くび[獄門首](名) 獄門に處せられたる首、さらしくび。――だい[獄門臺](名) さらし首を載せし臺。

ごく-や[獄屋](名) らうや。ひとや。

(こく-よう[國用](名) 國事の費用。

こくら[小倉](名) 「こくらおり」の略言。――おり[小倉織](名) 一種の織物、經は木綿にして地多(ガツ)緯の如く厚く織る、帶地又は袴地となす、もと豐前國小倉より出しゝが故に此名あり。――だち[小倉裁](名) 小倉織にて製造したるもの。

(こく-らう[國老](名) 大名(ダイミヤウ)の家老。

{こぐら-か・る(ル・レ・レ)(自、ら四) 亂(ミダ)れてからまる。こんぐらかる。こんがらかる。もつる。

(ごく-らく[極樂](名) ㊀【佛】西方十萬億の佛土を經過したる處にありて、阿彌陀佛の居所といふ世界、寶華を以て世界となし、諸事具足圓滿にして安樂ならずといふことなし、佛果を得たる亡者こゝに往生すといふ。㊁安樂にして何等の心配なき境遇。
――じやうど(ジヤウド)[極樂淨土](名) 前條に同じ。
――せかい[極樂世界](名) 前條に同じ。

(こく-らん[國亂](名) 一國のみだれ。國內のさうどう。(內亂)。　「暴稱。

(こく-り[酷吏](名) ㊀殘酷なる官吏。㊁獄吏の

(こく-り[國利](名) 國家の利益。「―民福」。

{こくり(名、副) 「こつくり」に同じ。「―〱居睡る」。

(ごく-り[獄吏](名) 監獄の官吏。罪囚を扱ふ官吏。

(こくりつ-ぎんかう(ギンカウ)[國立銀行](名) 明治五年以後に不換紙幣引揚のため、政府の特別なる保護によりて各地に設立せられし銀行、明治廿九年以來、營業滿期と共に次第に私立銀行に變じ、明治三十二年に至り全く消滅せり。　「くもつ。

(こく-るゐ[穀類](名) 米・麥など穀のたぐひ。こ

こ-ぐれ[木暮](名) 木陰(コカゲ)の暗き所。(木暗、樹陰)。　「びしきこと。

(こく-れつ[酷烈](名) 極めてはげしきこと。いとき

(こく-ろん[國論](名) 一國全般の議論。

(こ-くわ[狐瓜](名) 【植】「ゆふがほ」の一名。

(こ-くわ[瓠果](名) 【植】うり・きうり等胡蘆科に屬する植物の果實。

(ご-くわ[五果](名) 李(スモモ)・杏(アンズ)・棗(ナツメ)・桃・栗の稱。又、柑(カウジ)・橘(タチバナ)・栗・柿(カキ)・梨をもいふ。

(こく-わう(ワウ)[國王](名) ㊀國の元首の王と號するもの。(國君)。㊁民族の長にして、政權を握りてあるもの。「蠻族の―」。

(ご-くわう(クワウ)[後光](名) 佛の體より發射すといふ想像の光輝、佛像の肩上に金色の輪などを附けたるは、これをうつせるなり。(圓光)。　「燈)に同じ。

(こくわう-とう(トウ)[弧光燈](名) 「こことう」(弧

(ご-ぐわつ[五月](名) 一年の第五番目の月の稱。陰曆五月の異名をさつきといふ。(皐月)。{――ささげ[五月豇](名) 【植】「いんげんまめ」の一名。
――せつく[五月節句](名) 五節句の一、五月五日の稱にして、[illegible]て男子を祝ふ節句とす。(端午)。――にんぎやう(ギヤウ)[五月人形](名) 五月節句に、幼(ヲサナ)き男子の祝ひにかざる武者(ムシヤ)人形。――のぼり[五月幟](名) 五月節句に幼き男子の祝ひにたつる幟。

(ご-くわん[五官](名) 人身の五つの機關、卽ち眼(視官)・耳(聽官)・口(味官)・鼻(嗅官)・皮膚(觸官)の稱。

(こく-ゐ[國威](名) 國の威光。「―を輝かす」。

(こく-ゑん[國遠](名) 遠國に謫(ナガ)さるゝこと。

(こ-くん[古訓](名) 古代のよみ方。　「隊。

(こ-ぐん[孤軍](名) 味方少なき軍隊。援兵なき軍

(ご-くん[五葷](名) 一種の臭氣ある五つの蔬菜、佛家にては、大蒜・小蒜・興渠・慈葱・茖葱をいひ、道家にては韮・薤・蒜・芸薹・胡荽をいひ、錬形家にては、小蒜・大蒜・韮・芸薹・胡荽などをいふ。

こけ[苔](名) ㊀【植】蘚苔門に屬する隱花植物の總稱、莖葉の區別判然せず、古木・濕地又は石などに叢生す、微細の葉を着くるものあり、又は全體扁平なるものあり。㊁隱居又は世捨人などにいふ語。「―の庵」「―の衣」。㊂死にて葬(ハウム)られしこと。「―とな　「る」。

{こけ(名) きのこ。(美濃・尾張地方の方言)。

{こけ[鱗](名) うろこ。「魚の―」。

こけ[虛假](名) おろかもの。ばか。(白痴、愚蠢)。

こげ[焦](名) こげたること。焦げたるもの。

ご-け[後家](名) ㊀夫を失(ウシナ)ひて後、猶ほ貞操を守りゐる寡婦。ごけさん。やもめ。(寡婦)。㊁二つそろひてあるべきものゝ中、一つ失(ウ)せて殘りたる方の稱。

(ご-け[五家](名) 眞宗の五つの重立ちたる寺、卽ち、東本願寺・西本願寺・佛光寺・錦織寺・專修寺の稱。

ご-け[碁笥](名) 碁石を入るゝ圓き器。(棊笥)。

(こ-けい[估計](名) ㊀ねうち。㊁みつもり。

(こ-けい[固形](名) 一定の形を有すること。――たい[固形體](名) 固體に同じ。

(ご-けい[五刑](名) ㊀支那の五種の刑罰、卽ち、墨(スミ)・劓(ハナキリ)・剕(アシキリ)・宮(勢を割くこと)・大辟(クビキリ)の稱。㊁支那の上代に於ける五つの罪惡、卽ち、親を害すること・官にありて時の命にたがふこと・不孝なることをなすこと・官吏にして其職を盡くさゞること・謀叛ならざることの稱。㊂昔時の五種の刑罰、卽ち、笞・杖・徒(ヅ)・流(ル)・死の稱。

(ご-けい[互惠](名) 相互の間に、特別の優待又は恩典を交換的に享有すること。――ぢやうやく(デウヤク)[互惠條約](名) 互惠の目的を以て締結せられた　「る條約。

(ご-けい[御禊](名) 「みそぎ」の敬稱。

(こ-けい[吾兄](代) 同輩などを親しみて呼ぶ代名詞。「―の手蹟」。　「せう」(三笑)に同じ。

こけい-の-さんせう(セウ)[虎溪三笑](名) 「さん

(ご-けう(ケウ)[五教](名) ㊀「ごじやう」(五常)に同じ。㊁【佛】華嚴の五つの教、卽ち小乘教・大乘始教・大乘終教・一乘頓教・不思議乘圓教の稱。

{こけ-おどし[虛假威](名) たゞおろかなるものを威(オド)すに足るほどの、至てあさはかなる手段。

こげ-くさ・し(シ・キ・ケレ)[焦臭](形、一) 火に焦(コ)げたるにほひあり。物のやくるにほひあり。

こけ-ごろも[苔衣](名) 世すて人などの着るみすぼらしき衣服。(羅衣)。　「苔(コケ)に似る。

こけ-しのぶ[苔忍](名) 【植】しのぶの一種、形

こげ-ちや[焦茶](名) 濃(コ)き茶色。

(こ-けつ[固結](名) 固く結ぼるゝこと。かたまること。

(こ-けつ[虎穴](名) ㊀とらの棲(スミ)か。㊁極めて危險なる地。――に いらずば こじを えず「不入虎穴不得虎兒」 危險の地を踏まずば功名を成す能はざるにいふ。

(ご-け-にん[御家人](名) 德川時代の將軍家直參の士分。家人。

こけ-の-いほり(イホリ)[苔庵](名) わびずまひのいほり。

こけ-の-した[苔下](名) くさばのかげ。はかの　「なるもの。
した。

ごけ-ぶん[御家分](名) 御家相應の取扱を受く

こけ-むしろ[苔席](名) 苔(コケ)の生(ハ)えたる地をむしろにたとへいふ語。

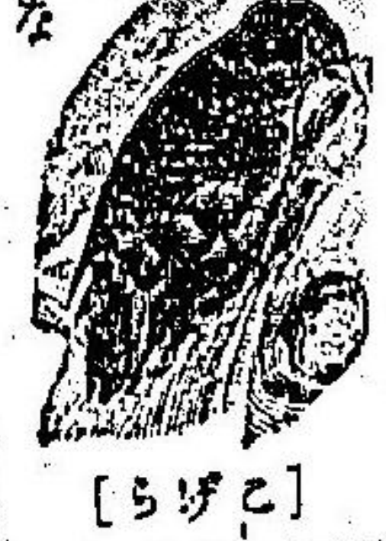
こげ-めし[焦飯](名) 焦(コ)げたる飯。(鍋焦飯)。

こけ-もゝ[苔桃](名) 【植】石南(シヤク)科に屬する小灌木、高山に生ず、葉は小楕圓形にして花は淡紅色なり、果實は圓く紫黑にして食すべし。(越橘)。

こけ-ら[柿](名) ㊀材木を削りたる片。こつぱ。㊁材木(多くは檜又は槇)を薄く剝(ハ)ぎたるもの、もとに板屋根などを葺(フ)くに用ふ、そぎいた。――ぶき[柿葺](名) こけらにて屋根を葺くこと。又、其葺きたる屋根。

{こけ-ら[苔](名) 【植】「こけ」に同じ。

{こけ-ら[鱗](名) 【植】「こけ」に同じ。



[こげら]

こ-げら[小啄木](名) 【動】きつゝきの一種、雀大にして保護鳥の一なり、頭部は茶褐色、頸腹は白色、背・羽・尾に黑白の横紋ありて腹部は白色なり、多く山林に棲息す。　「る。

{こ・げる(ゲ・ゲ・ゲル・ゲル・ゲレ・ゲヨ)[轉](自、か下一) たふる。ころ

{こ・げる(ケ・ケ・ケル・ケル・ケレ・ケヨ)[痩](自、か下一) やす。ほそる。「頰が―」。

{こ・げる(ゲ・ゲ・ゲル・ゲル・ゲレ・ゲヨ)[焦](自、か下一) 火に燒けて黑くなる。こがる。

(こ-けん[孤劍](名) 只身劍を携へて行くこと。

(こ-けん[沽券](名) ㊀地所の所有權を證する手形。うりけんじやう。㊁うりねの記してある書付。㊂ねうち。品位。「―が下がる」。

(こ-げん[古言](名) ㊀古代に使用せられし言語。㊁古人のいひしことば。

(こ-げん[古諺](名) 古代のことわざ。

(ご-けん[御見](名) (御見參の略言) 面會の敬語。――もじ[御見文字](名) (「もじ」は接尾語)前條に同じ。

(ご-げん[語原](名) 或言語の成り立ちたるもと。

(こ-こ[呱呱](名、副) 乳兒の泣く聲。「―乳を求む」。

こ-こ[此處](代) 自身より最近の場所を示す代名詞。このところ。(茲、是)。

(こ-こ[個個](名、副) ひとつ〱。おの〱。

(こ-ご[古語](名) 「こげん」(古言)に同じ。

(ご-こ[五鈷](名) とつこの一種、兩端の五つに割れたるもの。

(ご-こ[五古](名) 五言の古詩。

⌒ごこ「五胡」（名）支那の漢・晉の頃、北方より內地に移住せし五種の異族、即ち、匈奴・羯・鮮卑・氐・羌の稱。

⌒ごご「午後」（名）㊀正午より日沒までの間。ひるすぎ。㊁正午より夜半までの時間。

〜ごご（名）めし（關東の方言）。

⌒ここう「糊口」（名）㊀（粥を食ふの義）からく生を送ること。㊁くちすぎ。よすぎ。

⌒ここう「股肱」（名）（もゝとひぢとの義）最もたよりにする臣下又は目下。「—の士」。

⌒ここう「虎口」（名）（虎の口の義）非常に危難なる所又場合。「—をまぬかる」。

⌒ここう「戶口」（名）戶數と人口と。

⌒ごこう-ごみん「五公五民」（名）田畝の全收穫の五分を官に納めて貢租とし、殘餘の五分を農民の所得となすこと。

こごえ-じに「凍死」（名）寒氣のために、こゞえて死ぬること。

こごえる「凍」（自）「こゞゆ」の訛。

ここ-かしこ「此處彼處」（代）このところかのところ。方々。

⌒こ-こく「故國」（名）㊀ふるさと。こきやう。㊁ふるきくに。むかしからのくに。

⌒ご-こく「五穀」（名）㊀五つのたなつもの、即ち、米・麥・粟・黍・豆の稱。㊁穀類の總稱。

⌒ご-こく「後刻」（名）のちほど。のちがた。

こ-ごし「小腰」（名）少し腰を曲（マゲ）げたるさまにいふ語。

十こごし（しくしくしき　しけれ）（形、二）おほやうなり。おほらかなり。「こゞしうなまめいたるすぢをえなんみせぬ」。

十こごし（しくしくしき　しけれ）「險」（形、二）けはし。

ごこ-じふろくこく「五胡十六國」（名）支那の西晉の末に內地に五胡の建設せし國、即ち、前趙・後趙・前秦・後秦・西秦・前燕・後燕・南燕・北燕・前涼・後涼・南涼・西涼・北涼・夏・蜀の稱。

こ-ごしよ「小御所」（名）足利時代に、將軍の參內せるとき、裝束を改めて休息するため、宮中に設けたる所。ごんごしよ。

ごこ-しよ「五鈷杵」（名）「こんがうしよ」（金剛杵）に同じ。

十ここだ「幾許」（副）澤山。多く。そこばく。こゝばく。

——く「幾許」（副）前條に同じ。

ここ-ち「心地」（名）㊀こゝろもち。氣分。㊁なさけ。あはれみ。「—なう」。

こ-ごと「小言」（名）㊀いひ聞かする理屈。しかり戒しむることば。㊁獨てつぶやくこと。ひとりごと。

こ-ごと「每戶」（名）けんぺつ。かどなみ。㊂かげぐち。わるくち。

ここ-に「此、是」（副）㊀この所に。この場に。㊁この折に。この時に。

——おいて「於是」（接）㊀この時に當りて。この所にありて。㊁其理に由りて。此わけ故に。

ここぬ-か「九日」（名）「ここのか」に同じ。

ここの「九」（數）ここのつ。——か「九日」（名）㊀月の第九番目の日。ここぬか。㊁ここのつの日數。——かさね「九重」（名）天子の住みたまふ所。ここのへ。——そぢ「九十」（數）十を九つ加へたる數。くじふ。——つ「九」（名）昔時の時刻の名、今の十二時。——つ「九箇」（數）十より一を減じたる數。三の三倍。く。——つどき「九時」（名）正午又は夜半、即ち今の十二時。

ここの-へ「九重」（名）㊀九つのかさなり。㊁（支那にて天子の位置を九天にたとへいふより名づく）禁中の別稱。——ざ「九重座」（名）兜の「はちまんざ」の異稱。——びと「九重人」（名）

おほみやびと。殿上人。

十ここば「幾許」（副）「ここだ」に同じ。——く「幾許」（副）「ここだく」に同じ。

⌒ここ-べつべつ「個個別別」（名、副）ものものに別れ別れになるさまにいふ語。

〜こご・む（まみむむめめ）「踞」（自、ま四）腰をかゞむ。かゞむ。

〜こご・む（めめむむるむれめよ）「踞」（他、ま下二）かゞましむ。

こ-ごめ「粉米、小米」（名）搗（ツ）く時碎けたる米の細末。（米屑）。——うつぎ「粉米空木」（名）【植】薔薇科に屬する木、葉は單葉にして互生し、花は恰も粉米の如く白色小形にして十箇乃至十二箇の雄蕊を有す。（珍珠花）。——ざくら「粉米櫻」（名）【植】薔薇科に屬する木、叢生す、葉は狹披針形、花瓣は五個ありて白色なり、雄蕊は花瓣より短し、觀賞用として栽培せらる。（笑靨花）。——ばな「粉米花」（名）【植】「こゞめざくら」の一名（京阪地方及四國の方言）。——ゆき「粉米雪」（名）こゞめの如くちらちら降る小片の雪。

〜こごめる「踞」（他）「こゞむ」の訛。

ここ-もと「此許」（代）このところ。ここ。（爰許、此元）。

こ-ごもり「子籠」（名）子の胎內にとまること。にんしん。くわいにん。——ざけ「子籠鮭」（名）鹽ひきの鮭の腹の中に、其子を鹽漬にしたるものを入れたるもの。いれこざけ。

こご・ゆ（えええゆゆるゆれえよ）「凍」（自、や下二）寒氣のために、肢體感覺を失ふ。

十ここら「許多」（名、副）あまた。きよた。（多々）。

ここら「此邊」（代）この邊。この近所。

こごり「凝」（名）こゞること。又、こゞりたるもの。——どうふ「凝豆腐」（名）「こほりどうふ」の一名。

こご・る（らりるるれれ）「凝」（自、ら四）こはりて固くなる。こる。「油が—」。

こころ「心」（名）㊀智情意の全範圍、即ち靈魂。㊁おもひ。こゝろばせ。おもんばかり。かんがへ。㊂たましひ。しやうね。㊃なさけ。じひ。「—なの人々や」。㊄ことわけ。いみ。——にいる　氣にあふ。こゝろにかなふ。——にかゝる　忘れられず。心配になる。——にこむ　心に忘れず。——にとむ　心におぼえおく。記憶す。——にのる　心にかなふ。——をおく　氣をつかふ。心配す。——をくむ　他の心の程をすゐりやうす。おしはかる。——をとる　きげんをとる。——をやる　きをはらす。——をわく　千々に心をくばる。

こころ-あしげ「心惡氣」（名）㊀心ざまのよからぬさまにいふ語。㊁きもち快からぬさまにいふ語。

こころ-あたり「心當」（名）㊀心におしはかること。おしはかり。㊁おしはかりたる目當。

こころ-あて「心當」（名）㊀前條に同じ。㊁こゝろだのみ。

こころ-ありげ「心有氣」（名）何等かのおもひ又はわけのあるらしきこと。

こころ-いき「心意氣」（名）㊀きだて。こゝろばへ。こゝろばせ。㊁發するおもひ。思ひ慕ふ心の中。

こころ-いそぎ「心急」（名）こゝろぜき。

こころ-いぢ「心意地」（名）がうぢやう。いぢ。

こころ-いっぱい「心一杯」（名、副）思ふまゝ。思ふさま。

十こころ-いられ「心苛」（名）心のいら立つこと。こゝろぜき。

こころ-いれ「心入」（名）氣を付くること。注意。

こころ・う（えええうるうるれえよ）「心得」（他、あ下二）㊀會得（エトク）す。理解す。㊁覺悟す。用意す。㊂修學す。まなぶ。

㊃承諾す。ひきうく。

こころ-うつり「心移」（名）心がはり。

こころ-え「心得」（名）こゝろうること。こゝろうる物事。——がほ「心得顏」（名）こゝろうるさま。こゝろうるふり。——ちがひ「心得違」（名）㊀思ひちがひ。考へちがひ。（誤解、誤認）。㊁條理にたがひたる行爲。〜——る「心得」（他）「こゝろう」の訛。

こころ-おき「心置」（名）こゝろづかひ。

十こころ-おきて「心掟」（名）心のおきて。心のさだめ。

こころ-おち「心落」（名）てぬかり。しくじり。

こころ-おとり「心劣」（名）心ざまのおとりてあること。

こころ-おひ「心生」（名）心のまゝに生ひ出づること。

こころ-おぼえ「心覺」（名）㊀心に覺えてゐること。（記憶）。㊁きおくのためしとなすもの。

こころ-がかり「心掛」（名）心にかゝること。こゝろづかひ。きがかり。あんばい。（懸念、疑慮）。

こころ-がく（けけくくるくれけよ）「心掛」（他、か下二）常に心を付く。常に心にとゞむ。

こころ-がけ「心掛」（名）心がくること。〜——る（他）「こゝろがく」の訛。

こころ-がはり「心變」（名）㊀心のくるふこと。發狂。㊁心のかはること。おもひの他へ移ること。「—の男の身」。（變心）。

こころ-がへ「心替」（名）自分の心を人の心と取替ふること。

こころ-がまへ「心構」（名）心に待ち受くること。こゝろぐみ。ようい。かくご。

こころ-から「心自」（副）心より起りて。

こころ-がら「心柄」（名）㊀心のさま。こゝろだて。こゝろがけ。㊁自業自得。

こころ-くばり「心配」（名）あんばい。

こころ-ぐみ「心組」（名）かねて思ひ居ること。こゝろがまへ。（心算）。

こころ-ぐらべ「心競」（名）いきばり。いきぢ。

こころ-ぐるし（しくしくしき　しけれ）「心苦」（形、二）氣遣はし。あんばいなり。轉じて、氣毒なり。「—くはあれど見ざらましかばくちをしからまし」。

こころ-ざし「志」（名）㊀心の向ふこと。思ひ立つこと。㊁心に一定したる目的。又、心に樹立する信念。㊂おもひこみ。ぞんねん。㊃自分のこゝろの程を表して、物を贈り又は事を行ふこと。「折角の—」。

こころ-ざ・す（さしすすせせ）「志」（自、さ四）（心指すの義）㊀心向ふ。思ひ立つ。めざす。㊁十自分のこゝろの程を表して、贈り與へ又は行ひ爲す。「人のあからさまにこしの國へまかりけるにぬさ—とて」。

こころ-ざはり「心障」（名）心にかゝること。氣にさはること。こゝろがかり。きざはり。

こころ-ざま「心樣」（名）心のありさま。心底。（心狀）。

こころ-さむ・し（しくしくしき　しけれ）「心寒」（形、一）ぞっとす。おそろしがる。

こころ-さわぎ「心騷」（名）むなさわぎ。

こ-ごろし「子殺」（名）我子を殺すこと。

こころ-しづかに「心靜」（副）あわてずに。おちつきて。

十こころ-しらひ（名）こゝろづかひ。こゝろがまへ。

こころ-しり「心知」（名）互に心の底（ソコ）を知りあひてゐること。

十こころ・す（せしすするすれせよ）「心」（自、さ變）㊀心をとゞむ。氣を付く。㊁心地になる。おもひになる。

こころ-ぞへ「心添」（名）こゝろづけ。忠告。

十こころ-たがひ「心違」（名）心と違ふおこなひ。「—とはいひながら、猶めづらしうみまらぬ人の

柳ありきまなりや。

こころ-だくみ「心企」(名) 心中のかんがへ。たくみ。

こころ-だ・つ「心立」(自、た四) 思ひたつ。くはだつ。

こころ-だて「心立」(名) 心ばへ。氣だて。(資性、氣性)

こころ-だのみ「心頼」(名) 心の中にて、たのみに思ひ居ること。又、其相手。

こころ-だましひ「心魂」(名) こんぢやう。たましひ。

こころ-だより「心便」(名) 心の中にて、たよりに思ひ居ること。又、其相手。

こころ-づかひ「心遣」(名) 心をいろいろにはたらかすこと。氣をさまざまにくばること。きんぱい。けねん。きづかひ。(心勞、心痛)

†こころ-づ-から「心自」(副) 自己の心よりして。

こころ-づき「心付」(名) こころづくこと。

こころ-づ・く「心付」(自、か四) 心にとまる。氣が付く。

こころ-づ・く「心付」(他、か下二) ❶人に注意す。告げ知らす。❷思ひやる。くみとる。

こころ-づくし「心盡」(名) 心を盡くして其ためを計ること。又、其ためにいろいろと氣を揉(モ)むこと。「——も机となり。」

こころ-づけ「心付」(名) 心づくること。こころざし。——る(他)「こころづく」の訛。

こころ-づよ・し「心強」(形、二) ❶人情乏しつれなし。❷懸念少なし。心たしかなり。(氣丈夫)

こころ-どけ「心解」(名) 心の和ぎとくること。

†こころ-どり「心取」(名) きげんをとること。

こころ-なが「心長」(名) 氣のゆるやかなること。あせらざること。きなが。——し「心長」(形、二) 氣長にてあり。

†こころ-な・ぐ「心和」(自、か四) 心やはらぐ。

†こころ-なぐさ「心慰」(名) きなぐさみ。きさんじ。きばらし。

こころ-なげ「心無氣」(名) 何等の感じもなく見ゆること。

こころ-な・し「心無」(形、二) ❶なさけ心なし。つれなし。❷思慮なし。うつけなり。❸無邪氣なり。をさなし。

こころ-ならず「不心」(副) ❶本意にあらずして。心ともなくして。❷心も心ならずして。不安心にて。(非意)。——も「不心」(副) 心ならずも。

†こころ-ならひ「心慣」(名) 心に染みこみしならはし。心の癖。

こころ-にくげ「心憎氣」(名) こゝろにくきさま。

こころ-にく・し「心憎」(形、二) ❶想像深く思はる。心置きせらる。❷奥ゆかしく思はる。❸心に憎く思はる。

こころ-ね「心根」(名) ❶こゝろのそこ。心底。❷せい根。根性。

†こころ-の-いづみ「心泉」(名) 心に浮び出づること、渓隔なるをいふ語。

こころ-の-いろ「心色」(名) 心のさま。

こころ-の-おに「心鬼」(名) ❶あらぬ心配して、われとわが心をくるしむること。❷慚愧のこゝろ。

こころ-の-くも「心雲」(名) 心のまよひ。煩惱。

†こころ-の-こま「心駒」(名) 煩惱のために心の狂ふを、駒の狂ふにたとへいふ語。

こころ-のこり「心殘」(名) ❶何となく遺憾に思はるること。ざんねん。❷戀慕し離きこと。みれん。

こころ-の-すぢ「心筋」(名) おもひのおもむき。

こころ-の-そこ「心底」(名) こゝろのおもひ。こゝろね。

こころ-の-たけ「心丈」(名) おもひのかぎり。

こころ-の-ちり「心塵」(名) ぼんなう。私慾。

こころ-の-つき「心月」(名) さとり開けて智見明かなるを、月にたとへいふ語。

こころ-の-とも「心友」(名) ❶よく心を知りあふ友。❷心を慰むるたよりとなるもの。

こころ-の-まま「心儘」(名、副) おもふまゝ。おもひのまゝ。

こころ-の-みづ「心水」(名) 心の清濁を水にたとへいふ語。

こころ-の-やみ「心闇」(名) 思ひみだれて理非の判斷つかぬを、闇にたとへいふ語。

†こころ-ば「心葉」(名) ❶古昔、大嘗會などに、冠の巾子の前に插し造花の飾。主上のは銀にてつくれる櫻のかざし、臣下のは鍍金(メッキ)にて山吹、梅など位階の高下によりて種類を異にせり。❷古昔、贈物に添へし飾。絲にて花紅葉などの形を結び又は種々の美しきものをかざりたり。

こころ-ばかり「心許」(名、副) たゞ僅かに心の程を表したるばかりのさまにいふ語。

†こころ-ばしり「心走」(名) こゝろさわぎ。

こころ-ばせ「意」(名) (心馳の義) 心の趣(オモム)き向ふ所。おもひ込む所。おもひいり。†——びと「意人」(名) 心ある人。なさけある人。

こころ-はづか・し「心羞」(形、二) はづらはし。うらはづかし。きまりわるし。

こころ-ばへ「意」(名) ❶心のおもむき。心のさま。❷おもむき。ありさま。「庭の——も面白く」。

†こころ-ば・む「心」(自、ま四) 心あり。おもひあり。なさけあり。

こころ-ばらし「心晴」(名) きばらし。なぐさみ。❷無念ばらし。

こころ-ぶか・し「心深」(形、二) なさけぶかし。思ひぶかし。

こころ-ぶと「心太」(名) 〔植〕ところてんの異稱。

こころ-ぼそ「心細」(名) 心ぼそきこと。——し「心細」(形、二) たのみ少なし。ものさびし。

こころ-まうけ「心設」(名) こゝろがまへ。用意。

こころ-まかせ「心任」(名) 思ひのまゝ。隨意。

こころ-まち「心待」(名) かねて心中に待ち居ること。こゝろがまへ。

こころ-まどひ「心惑」(名) 心にまどふこと。

こころ-まよひ「心迷」(名) 心にまよふこと。

こころ-み「試」(名) ❶こゝろみること。ためすこと。❷開題に賭(カ)けずしてすること。(碁將棋の語)

†こころ-みえ「心見」(名) 心のほどの外面にあらはるること。

こころ-みじか「心短」(名) きみじか。せつかち。——し「心短」(形、二) 心短にてあり。

こころ-み・る「試」(他、ま上一) 實際を知らんとて試験す。實地に就きてためし見る。ためす。

こころ-・む「試」(他、ま上二) 前條に同じ。

こころ-むけ「心向」(名) おもひをかくること。

こころ-もち「心持」(名) 心に感ずる工合。こゝち。きもち。

{こころ-もち「心持」(副) すこし。やゝ。「——長い」。

こころ-もと-なが・る「心許無」(自、ら四) こゝろもとなく思ふ。

こころ-もと-な・し「心許無」(形、二) ❶待ち居て、心も心ならず。まちどほし。❷覺束なし。きづかはし。

こころ-やす・し「心安」(形、二) ❶安心なり。きづかひなし。❷懇意なり。したし。

こころ-やす-だて「心安立」(名) 親しきに慣(ナ)れて、遠慮なきこと。(狂馴)

こころ-やすめ「心休」(名) 氣やすめ。「慰」

こころ-やり「心遣」(名) おもひを晴らすこと。(遣悶)

†こころ-や・る「心遣」(自、ら四) おもひを晴らす。こゝろをなぐさむ。

こころ-ゆかし「心懷」(形、二) そゞろにゆかしく思はる。

こころ-ゆ・く「心行」(自、か四) ❶おもひ晴る。きが晴る。❷心をとられて恍惚とす。ほる。

こころ-ゆるび「心弛」(名) 心のおこたり。心のゆるみ。

{こころ-よし「心好」(名) 惡意なけれど、才氣に乏しき人の稱。「ぶきよう」。又、其人。

こころ-よ・し「快」(形、二) (心好しの義) ❶こゝろ嬉し。心うれし。きもちよし。❷病氣よし。やまひゆ。❸はっきりしてあり。あいまいならず。❹勢よし。勢はやし。

こころ-よせ「心寄」(名) ❶ひいき。あいこ。❷心を寄せかたむくこと。

こころ-わすれ「心忘」(名) 氣づかずに居ること。

こころ-をか・し「心可笑」(形、二) 心中にをかしく思ふ。

こ-ごゑ「小聲」(名) 小さき聲。調子の低き聲。(低聲)

こ-こん「古今」(名) いにしへと今と。——どくぽ「古今獨步」(名) 其人に比ぶべきもの古今になきこと。

ご-こん「語根」(名) 【文法】(い)言語を分解して、もはや分つこと能はざるに至れる部分の稱。(ろ)用言の語尾に對して、その變化せざる部分の稱。例へば「つよし」といふ語の「つよ」の類をいふ。「し」は語尾にて變化す。

ご-ごん「五言」(名) 一句が五つの言より成りたつこと。又、其もの。——こし「五言古詩」(名) 五言の句より成れる古詩。——りつ「五言律」(名) 五言八句より成れる律詩。——ぜっく「五言絶句」(名) 五言四句より成れる詩。——はいりつ「五言排律」(名) 五言の句より成れる排律。

こ-さ「濃」(名) こき度合。

(こ-さ)「胡砂」(名) えびすの土砂。又、支那北方の砂漠。

(こ-ざ)「胡坐」(名) あぐら。

(こ-ざ)「孤坐」(名) ひとりすわりてゐること。

(ご-さ)「誤差」(名) ❶たがひ。ちがひ。❷〔數〕或數と其近似數との差。又、或量とこれを觀測して得たる量との差。

(ご-ざ)「御座」(名) ❶座の敬稱。❷おはします。

ご-ざ「蓙」(名) 藺(ヰ)の莖を編(ア)みてつくりたるむしろ。(茣蓙、茣席)

(こ-さい)「巨細」(名) ❶大と小と。粗(ア)きと細かきと。❷いちぶしじゅう。ことこまか。

(こ-さい)「瓠犀」(名) (ひさごのさねの義) ならびよく色白く美しき齒の稱。

こ-さい「小才」(名) 少しの才智。ちよっとしたはたらき。

(ご-さい)「後妻」(名) のちぞひの妻。ごうさい。

(ご-さい)「五彩」(名) 五色。

(ご-さい)「五菜」(名) 韭(ニラ)・薤(ラッキヤウ)・葵・藿・葱(ネギ)の稱。

(ご-さい)「御祭」(名) 土用の半過より、十七日の間吹く東北の風。

(ご-ざい)「五罪」(名) 「ごけい」(五刑)に同じ。

こ-ざいかく「小才覺」(名) 少しの才智。ちよっとしたはたらき。

ござい-ぶし［語齋節］（名）浄瑠璃の一派。明暦年中、岡島語齋より始まる。

{**ござい-ま-す**［御座在］（自、さ變）「ござります」に同じ。

(**こ-ざう**［故造］（名）ことさらに拵(コシラ)へたること。たくみてなすこと。「有心—」。

(**ご-ざう**［五葬］（名）土葬・火葬・水葬・野葬・林葬の稱。

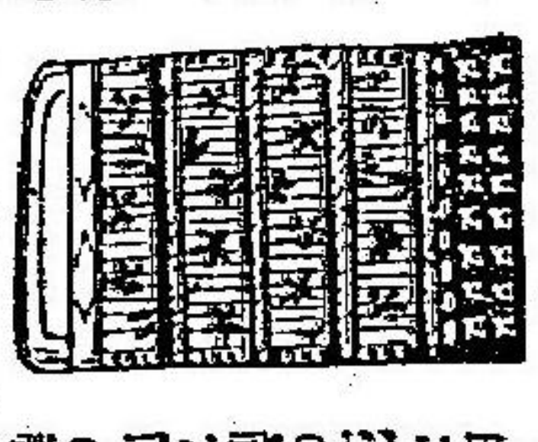
(**ご-ざう**［五臟］（名）漢法にて、腹中にある肺臟・心臟・脾臟・肝臟・腎臟の稱。——**ろくぷ**［五臟六腑］（名）五臟と六腑と。轉じて、腹の中又は心の中。（六腑の條を見よ）。

こ-ざか-し（しけれしけれ）［小聰］（形、二）❶利口ぶる。利口めかす。❷わるがしこし。小才あり。（巧黠）。

こ-ざかな［小肴］（名）小さき魚類。

こ-さく［小作］（名）他人の土地を借り、小作料を拂ひて耕作又は牧畜などすること。——**にん**［小作人］（名）小作を業とする者。小作の農夫。（賃耕人）。——**れう**［小作料］（名）【法】他人の土地を耕作又は牧畜の目的を以て使用する報酬として、地主に支拂ふ地代、即ち、永小作といふ借地の方法による借地料。

こ-ざくら［小櫻］（名）【植】櫻の一種、花の形細かく色淡し。——**をどし**［小櫻縅］（名）小櫻革にて縅(ヲド)したる鎧。又、白絲に紅の絲を混じたるものにて縅したる鎧。——**がは**［小櫻革］（名）藍染の地に櫻の花を白く小さく染め出したる革。



［こざくらをどし］

{**ござ-ござ**（名、副）細かきものゝ入りまじりたるさまにいふ詞。

こざ-こざ（名、副）前條に同じ。

こ-さつ［小札］（名）（小さき札の義）もと通用せし十錢・二十錢又は五十錢等の紙幣の稱。

(**こ-さつ**［故殺］（名）【法】一時感情の激發によりて殺意を生じ、深思熟慮せずに、これを斷行して人を殺すこと。謀殺の對。

(**こ-さつ**［古刹］（名）ふるき寺院。ふるでら。

(**ご-さつ**［誤殺］（名）【法】或人を殺さんとして、誤りて他人を殺すこと。

コサック［哥薩克＝Cossack］（名）「ロシア」國の諸部に住する一種の民族、騎馬に堪能なり、「ロシア」國にては、其中より徵集して騎兵を組織す。——**きへい**［哥薩克騎兵］（名）「コサック」人を以て編制せられたる「ロシア」國の騎兵、馬上にて槍を使用す。

{**こ-ざっぱり**（名）稍やさっぱりしたるさまにいふ詞。「—した姿」。

こ-ざつま［小薩摩］（名）「こざつまぶし」の略言。——**ぶし**［小薩摩節］（名）一種の俗曲、大薩摩節より分派したるもの。

こざと-へん［阜偏］（名）漢字の偏の名、阿・降等の左方にある阝の字の稱、字書にては阜部に屬す。

こ-ざね［小札］（名）「さね」（札）の條を見よ。——**くさずり**［小札草摺］（名）悉くこざねをもて綴ひたるくさずり。

ござ-の-ま［御座間］（名）貴人の居室。

ござ-ぶね［御座船］（名）貴人の召さるゝ船。

ござ-むしろ［蓙莚］（名）「ござ」（蓙）に同じ。

こ-ざむらひ［小侍］（名）❶ちひさき體のさむらひ。❷諸家に奉公する身分卑(ヒク)しきさむらひ。——**どころ**［小侍所］（名）小侍の詰所。

こ-ざめ［小雨］（名）細かき雨。（微雨）。

こ-ざら［小皿］（名）小さきさら。てしほ。

{**ござり-ま-す**［御座在］（自、さ變）「ござる」に「ます」を添へたる語。「ござる」の敬語。

こ-ざる［小猿］（名）小さき猿。又、猿の子。

こ-ざる［小笊］（名）小さき笊。

ご-ざ-る（ら、り、る）［御座在］（自、ら四）❶おいでなさる。❷あります。❸{わるくなる。損ず。❹{あいぼれる。❺{戀慕に陥る。戀におもひを發す。

(**こ-さん**［古參］（名）古くより仕へてあること。以前より其職にあること。

(**こ-ざん**［故山］（名）ふるさと。古郷。（家山、故園）。

(**ご-ざん**［五山］（名）❶京都五山及鎌倉五山の稱。❷我國の五つの尼寺、即ち「景愛寺・護念寺・檀林寺・恩林寺・通玄寺の稱。❸印度の祇園精舍・竹林精舍・大林精舍・誓多林精舍・那蘭陀寺の稱。❹支那の徑山寺・育王寺・天童寺・靈隱寺・淨慈寺の稱。

(**ご-さん**［誤算］（名）あやまりの計算。さんようのちがひ。

(**ご-さん**［午餐］（名）ひるめし。ひるはん。——**くわい**［午餐會］（名）衆客を招待して、午餐を供すること。

{**ござん-す**［御座在］（自、さ變）「ございます」の訛。

(**ごさん-ちく**［五三竹］（名）【植】竹の一種、根に近づくに從ひ、節極めて短かく、時としては三五相連れる故に此の名あり。（齒竹、佛面竹）。

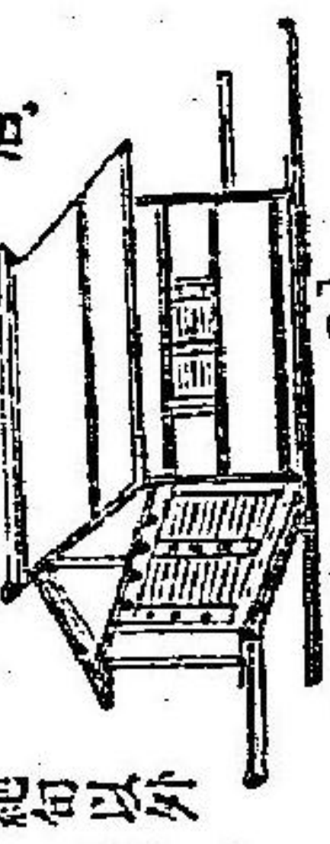
ござん-なれ「こそあるなれ」の約言、にてあるよな。

ごさん-の-きり［五三桐］（名）紋所の名、桐の花と葉とを三つとりあはせて描(カ)きたるもの、中の花は五つ左右の花は各々三つづゝなり。

こし［腰］（名）❶人體の脊柱の下部にして骨盤の上部なる所、即ち、中央の屈曲すべき部所、腰部。❷頭に近き山の部分。❸すべて物の全體を人身に比して、其腰部にあたる所の稱。❹衣服などの腰部にあたる部分。❺押しとほす意氣又は堪へたふる精力。「—が弱い」「—が強い」。❻和歌の第三句の五文字。❼{いきほひ。てうし。「—を折る」。——**がひくい** 他人によくへりくだるにいふ。——**をおす** 後より腰をつく。後より助く。そゝのかす。——**をかがむ** 體を曲げ屈す。——**をかく** 尻を物の上にのせて、足を垂る。——**をつく** こしを折りて倒る。又、挫(クジ)け弱る。——**をぬかす** 腰のつがひをはづして起つ能はず。又、大いに驚きて爲す能はず。——**をのばす** 曲れる身體をのばす。又、休息す。やすむ。——**ををる** こしをかがむ。又、屈服す。へつらふ。

こし［廂］（名）建築物の正面なる段階。かきなり。

こし［輿］（名）❶人を乘せて昇(カ)き行く乘物。昔時は貴賤尊卑によりて、其形狀製作を異にせり。いたごし・あじろごし・あげごし・さげごし等種類多し。（轎、駕）。❷一本の長柄にて昇く棺。



［(一)しこ］

(**こ-し**［古詩］（名）❶漢詩にて律及絶句以外の古體の詩。❷漢詩の一體、平仄に拘(カヽ)はらざるものにして、五言又は七言若しくは長短句あり、其押韻の一韻到底なるものは、第一第二句は韻をふみ、第三句は韻をふまず、それ以後の句は、一句づゝ間をおきて韻をふむを法とす、又、其押韻の一韻到底ならざるものは、韻を換へて韻をふむは勿論なれど、其法種々にして概說し難し、別に柏梁體と稱するものあり、七言にして毎句に韻をふむ、杜甫の飲中八仙歌の如きこれなり。

(**こ-し**［古史］（名）古代の歴史。古代史。

十**こ-し**［胡荽］（名）【植】「コエンドロ」の一名。

(**こ-し**［虎視］（名）虎の如く鋭(スルド)き眼にてみまはすこと。又、他を併合せんとの雄志を抱き、ひそかに狀勢を觀てあること。「—眈々」。

(**こ-し**［顧視］（名）かへりみること。ふりむきみること。

(**こ-し**［古址］（名）❶古昔ありし建築物のどだい石。❷古昔に或建築物のありし場所。

こ・し（けれしけれ）［濃］（形、二）❶色調かろず。色深し。❷水分少なし。濃厚なり。❸味きつし。❹[illegible]し。あつし。

—**こし**［腰］（接尾）刀を數ふるにいふ語。「一—の太刀」。

十**こ-じ**［巾子］（名）冠の頂上に高く突き出て、髻(モトドリ)を挿入する部分。

こ-じ［几子］（名）腰を掛くる具、長方形にして四足なるもの。

(**こ-じ**［古時］（名）いにしへ。むかし。

(**こ-じ**［古事］（名）❶古代にありたる事。以前より傳へられてある事。❷傳はり來れる物事に關する因縁。「—來歴」（故事）。

(**こ-じ**［怙恃］（名）❶たのみ。たより。❷父と母と。

(**こ-じ**［居士］（名）❶學問ありて仕官せざる人。財貨多くして道義高き人。❷【佛】男子の法名の下に附くる稱號。又、俗人にして佛門に歸依する男子の稱號。

(**こ-じ**［固辭］（名）固く辭退すること。

(**こ-じ**［孤兒］（名）親にはなれたる幼兒。みなしご。

(**ご-し**［互市］（名）交易。貿易。

(**ご-し**［五子］（名）支那の五人の大學者。即ち、老子・莊子・荀子・揚子・文仲子の稱。

(**ご-し**［五師］（名）僧侶の職名。

(**ご-し**［五指］（名）五本の指、即ち拇指・食指・中指・無名指・小指の稱。

—**こし**［越］（接尾）物を越してするにいふ語。「垣根—」「屏—」。

(**ご-し**［吾子］（代）同輩の敬稱。きみ。こなた。

(**ご-じ**［五時］（名）❶一時より第五番目にあたる時間、昔時の七つさがり。❷【佛】五時教の略言。

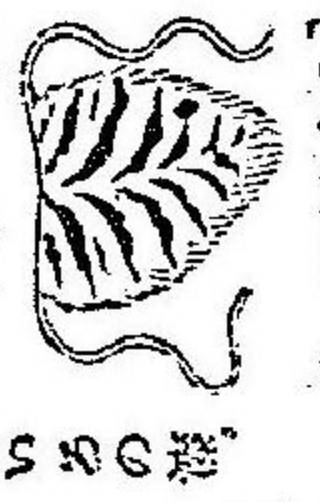
(**ご-じ**［午時］（名）ひるどき。しやうご。

(**ご-じ**［五事］（名）❶儒學にて五つの重んずべき事柄、即ち貌・言・視・聽・思の稱。❷兵法にて五つの重んずべき事柄、即ち道・天・地・將・法の稱。

(**ご-じ**［語次］（名）言葉ついで。はなしついで。

こし-あげ［腰揚］（名）着物の腰部のぬひあげ。

こし-あて［腰當］（名）❶形は敷皮の如く、毛皮にてつくり紐(ヒモ)をつけ、うしろ腰にあて、結ぶもの。ひつしき。（皮腰袋）。❷すべて腰部にのせあてて帯ぶるものの稱。



［(一)てあしこ］

十**こし-あぶら**［金漆］（名）こがねいろの漆。

こし-アン［漉餡］（名）擂(ス)りつぶしたる餡を、すゐなうにて漉(コ)したるもの。

こし-いた［腰板］（名）❶袴腰につくる板。❷壁、障子又は垣根などの下部にある板。

こし-いたみ［腰痛］（名）腰に疼痛を感ずる疾病。「えうつう」。

こし-いれ［輿入］（名）❶嫁(ヨメ)の輿を婿(ムコ)の家に擔(カツ)ぎ込むこと。❷よめいり。（おもに、貴人にいふ）。

(**ご-しう**［五臭］（名）五つの臭氣、即ち羶・焦・香・腥・朽の稱。

{**こし-うけ**［竹公瓦］（名）魚を捕ふる具、竹にてつくる。（東京近在の方言）。

こ-じうと［小舅］（名）夫(ヲツト)の兄弟。（伯叔）。「又、其人。

こ-じうとめ［小姑］（名）夫の姉妹。

こし-おくり［輿送］（名）嫁入に輿を送りゆくこと。

こし-おし[腰推](名) 後方より力を添ふること。そばよりそゝのかすこと。又、其人。あとおし。

こし-おび[腰帶](名) ㊀帶の稱。㊁婦人の帶の下に纏(マト)ふ細き紐(ヒモ)の特稱。(腰纏)。

こし-かき[輿舁](名) 輿を舁(カ)く人。(駕輿丁)。

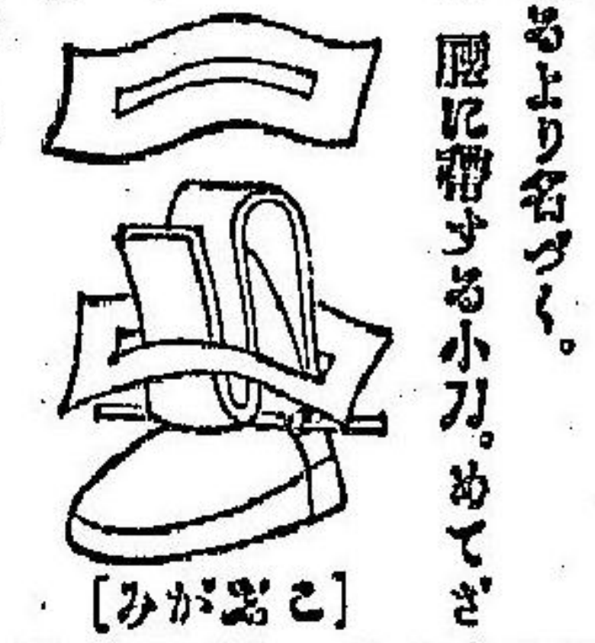
こし-かけ[腰掛](名) ㊀腰を掛くる臺。(腰架)。㊁事件の到來を待つため、假に其處に身をおくこと。糊口を得るために、暫く其職に從事すること。——**しごと**[腰掛仕事](名) 腰掛にする仕事。——**じり**[腰掛尻](名) 暫時其處に身をおき若しくは其職に就き、熱心忠實に事を扱ふ考なきこと。——**だい**[腰掛臺](名) こしをかくる臺。——**ぢやや**[腰掛茶屋](名) 暫時腰を掛けて休む茶屋。

こし-かた[來方](名) 過去の時。きしかた。既往。

卄**こじ-がた**[巾子形](名) 門の閾の中央の地上に挿入せる杙(クヒ)、雙方のとびらをきゝへ止むるもの、冠のこじの形に似たるより名づく。

こし-がたな[腰刀](名) 腰に帶する小刀。めてざし。わきざし。(佩刀)。

卄**こじ-がみ**[巾子紙](名) 冠の纓を前方にをりかへして挾みとむる紙。


[こじがみ]

(**こ-しき**[古式](名) むかしのかた。いにしへのしかた。

こしき[轂](名) 車輪の中央にありて、軸(ジク)其中を貫き幅(ヤ)其外に集まるもの。

こしき[甑](名) 飯を蒸し炊(カシ)ぐ具、古代は瓦にて製し、形圓く底に細き穴ありたり、現今は木にて製し、底に竹の簀(ス)を敷く。せいろう。——**ぬの**[甑布](名) 甑にて物を蒸すとき、蒸籠(セイロウ)の底に敷く布。(炊布)。卄——**わら**[甑藁](名) 古昔、今日の甑を用ふるが如く甑の底に敷きし藁の稱。

こ-じき[乞食](名) 食を人に乞ひて生活するもの。こつじき。こもかぶり。(乞兒、乞丐)。——**ごや**[乞食小屋](名) 乞食の雨露を凌ぐために、つくりたる小屋、多くは竹などを柱としむしろなどにてかこふ。——**しばゐ**[乞食芝居](名) 下等なる芝居。——**ばうず**[乞食坊主](名) ㊀こじきをあざけりていふ語。㊁坊主頭の俗人をあざけりていふ語。又、僧侶をあざけりていふ語。

(**ご-しき**[五識](名)【佛】五根によつて五境を生ずる心識の稱。

(**ご-しき**[五色](名) ㊀青・黃・赤・白・黑の五つの色。㊁五とほりの色。又、種々の色。——**あげ**[五色揚](名) さまざまのものを材料としたるあげもの。——**さうめん**[五色索麵](名) 五色にそめわけたる索麵、伊豫國の名產。——**なます**[五色鱠](名) 一種の料理、大根・人參など色の異なりたるものをとりまぜてこしらへたる鱠。

こしきり-ばんてん[腰切半纏](名) 腰までとゞかぬはんてん、賤業者などの着用するもの。

こし-ぎんちやく[腰巾着](名) ㊀腰に附くる巾着。㊁常に其人の傍につき添ひゐるもの。

卄**こじ-く**[乞食](自,か四) こじきをなす。

こし-くだけ[腰碎](名) 相撲(スマフ)などにて、腰座亂れて敵の突擊を支ふる能はざること。

こし-ぐるま[腰車](名) 柔術などにて、自分の腰にかけて敵の體を浮かし、これを振り倒すこと。

(**ご-じ-くわ**[午時花](名)【植】梧桐科に屬する草、高さ二三尺、葉は懸鉤子に似て互生す、初秋の頃、葉間に五瓣朱色の花を開く、其花午時に開き午夜に萎(シボ)むより此名あり。(夜落金錢)。

こし-け[腰氣](名) 子宮病の總名。たいげ。

(**ご-じけう**[五時教](名)【佛】釋迦牟尼の一代の間に說きし教法を、華嚴時(ケゴンジ)・阿含時(アゴンジ)・方等時(ハウドウジ)・般若時(ハンニヤジ)・法華涅槃時(ホッケネハンジ)の五時代に分けていふ稱。

卄**こし-げし**[木繁](形,二) 木繁く生じてあり。

⌒**こじ-ける**[拗](自,か下二) 拗くゆがむ。ねぢける。こじれる。

こし-こし(名,副) 物を磨(ス)るときに發する音又は物を磨るさまにいふ語。

こし-こばた[腰小旗](名) 腰に帶して標(シルシ)となす小旗。

こし-ごろも[腰衣](名) 僧侶の腰に纏(マト)ふ短くして黑き衣。

こし-さげ[腰提](名) 腰に提(サ)げて持つもの、煙草入の類。

こし-ざし[腰挿](名) ㊀腰に挿(サ)して携帶するもの、やたての類。㊁卄かづけものとして賜はりし卷絹。——**チヤウチン**[腰挿提燈](名) 腰に挿し得るやうに、柄をつけてある提燈。

こし-しやうじ[腰障子](名) 腰板のある紙障子。

こし-ぞひ[輿添](名) 輿に隨伴してゆくこと。又、其人。(轎副)。

こ-じだ(名)【植】裏白(ウラジロ)科に屬する羊齒植物、形は裏白に似て短小なり。

こ-じた[小舌](名) 舌根腫(ハ)れて、更に舌のごときものを生ずる一種の病。

こし-だい[輿臺](名) 輿を地上に置くとき、其轅(ナガエ)を支ふる机の如き臺。

こし-だか[腰高](名) ㊀腰の高き椀。たかつきの類。㊁腰の高きこと。——**まんぢゆう**[腰高饅頭](名) たけ高くつくりたる饅頭。

こし-ぢ[越路](名) 北陸道の古稱。

ご-しちにち[五七日](名) 人の死にて三十五日目の稱。

(**ご-しぢやう**[互市場](名) 互市をゆるされたる場所。

(**こ-しつ**[固執](名) 自分の意見などを、かたく執りて移らざること。

(**こ-しつ**[痼疾](名) 久しく癒(イ)えざる疾病。ぢびやう。(癇性病)。

(**こ-じつ**[故實](名) 法令・儀式などの古昔の事例。——**か**[故實家](名) 故實に通じたる人。

こし-つき[腰付](名) 腰のさま。

こじ-つく(他,か下二) 非理をいひまぎらはして、道理のあるごとくにす。牽強す。

こじ-つけ(名) こじつくること。(牽強)。⌒——**る**(他)「こじつく」の訛。

⌒**こしつ-ぼね**[腰骨](名)「こしぼね」の訛。

(**ごじつ-ぽ-ひやく-ぽ**[五十步百步](名)〔孟子の語に出づ〕彼此の差異懸隔なきにいふ語。

こ-じとみ[小蔀](名) 殿上六間にありて、主上殿上を御覽ぜらるゝ所。

卄**こし-なづ-む**[腰滯](自,ま四) 水中などを步行するに、腰を自由に運ぶを能はず。「あさしぬはら、—」。

こし-なげ[腰投](名) 柔術などにて、敵の體を自分の腰にかけて投ぐること。

こし-なは[腰繩](名) 輕罪の囚人などの腰に繩をかくること。又、其繩。

こし-ぬけ[腰拔](名) ㊀ゐざり。(躄)。㊁臆病なること。意氣地なきこと。又、其人。「—武士」。

こし-の-くに[越國](名) こしぢ。

こし-の-もの[腰物](名) 腰に帶したる刀劍。(帶刀)。

卄**こし-のりぞめ**[輿乘初](名) 古昔、正月の初めに、輿に乘りそめしこと。

こ-しば[小柴](名) 小さき柴。——**がき**[小柴垣](名) 小柴を以てつくりたる垣。

卄**こし-ばせ**[腰支](名) こしぼそ。(細腰)。

こし-ばり[腰張](名) 襖(フスマ)・壁(カベ)などの下部に紙を張ること。

こし-びやうぶ[腰屏風](名) 丈低き屏風、すべて三尺位の高さのもの。(矮屏風)。

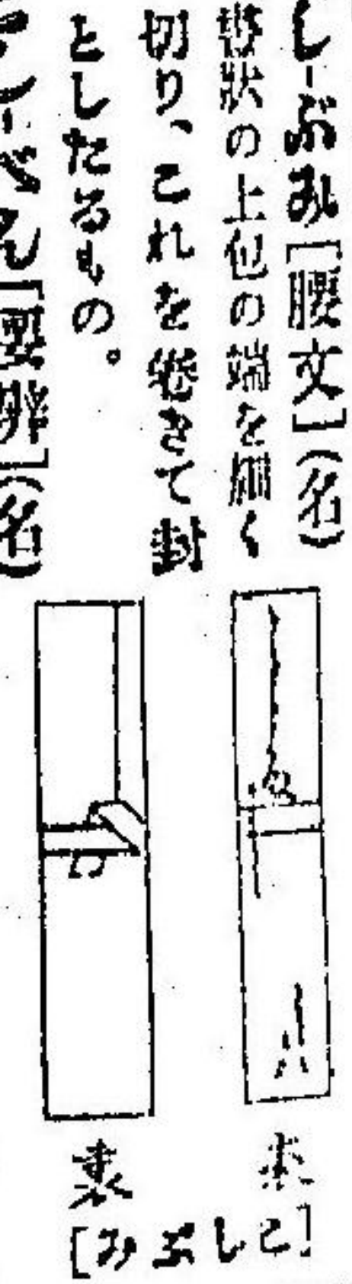
(**ごじふ-おん**[五十音](名) 片假名の「ア・イ・ウ・エ・オ」、「カ・キ・ク・ケ・コ」、「サ・シ・ス・セ・ソ」、「タ・チ・ツ・テ・ト」、「ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ」、「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」、「マ・ミ・ム・メ・モ」、「ヤ・イ・ユ・エ・ヨ」、「ラ・リ・ル・レ・ロ」、「ワ・ヰ・ウ・ヱ・ヲ」の稱。——**づ**[五十音圖](名) 片假名を聲音の分類によりて配列したるもの、即ち、「ア・イ・ウ・エ・オ」の母音を第一の行におき、カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワの順にて各行を配列す、印度悉曇音の配列法に倣へるものなりといふ。

(**ごじふ-から**[五十雀](名)【動】燕雀類に屬する鳥、禁止鳥の一なり、體軀小にして嘴は細くして尖(トガ)る、秋來り冬去る。

卄**こし-ぶくろ**[腰袋](名) 腰にかくる巾着の類。

(**ごじふさん-つぎ**[五十三驛](名) 昔時、江戶日本橋より京都三條大橋に至る間にありし五十三個の宿驛、即ち品川(東京府)、川崎・神奈川・程ケ谷・戶塚・藤澤・平塚・大磯・小田原・箱根(以上神奈川縣)、三島・沼津・原・吉原・蒲原・由井・興津・江尻・府中・丸子・岡部・藤枝・島田・金谷・日坂・掛川・袋井・見付・濱松・舞阪・新井・白須賀(以上靜岡縣)、二川・吉田・御油・赤阪・藤川・岡崎・池鯉鮒・鳴海・宮(以上愛知縣)、桑名・四日市・石藥師・庄野・龜山・關・阪下(以上三重縣)、土山・水口・石部・草津・大津(以上滋賀縣)をいふ。

こし-ぶみ[腰文](名) 書狀の上包の端を細く切り、これを卷きて封としたるもの。



[こしぶみ]

⌒**こし-べん**[腰辨](名) ㊀「こしべんたう」の略言。㊁腰に辨當をさぐること。又、其辨當。——**たう**[腰辨當](名) ㊀腰に辨當をさぐること。又、其辨當。㊁腰辨當にて通ふもの、(義)諸官廳に出勤する小官吏などの稱。

こ-じほ[小潮](名)【地】上弦又は下弦のときの潮汐、上弦又は下弦のときは、太陰は太陽を去ること直角の位置にあるを以て、兩者の地球に對する引力相反して作用するが故に、潮汐の高さ最も低し。

こ-じはう[小四方](名) さんばうの一種、脚の四面に孔あるもの。

こし-ぼそ[腰細](名) ㊀腰の細やかなること。㊁【動】「おがばち」の一名。(畿內の方言)。——**の**[腰細](枕)「すがる」に冠らする詞。「—、すがるをとめの、そのかほの」。

こし-ぼね[腰骨](名) ㊀腰部の骨。㊁押しとほす意氣、又、堪へ忍ぶ精力。

こ-じま[小島](名) 小なる島。(嶼)。

こし-まき[腰卷](名) ㊀腰より足に掛けて纏(マト)ふ布。ゆもじ。けだし。㊁土藏の外部の礎の上部に、一層土を多くせる部分。㊂兜のしころと鉢と相接觸せる部分。

卄**こ-じみ**(名) いりあひの鐘。

こし-みの[腰蓑](名) 腰に纏(マト)ふ短き蓑。

こし-むかへ[輿迎](名) 輿入の輿を迎ふること。

卄**こし-も**[腰裳](名) 古の衣服の一。又、其人。こしむくりの對。

こし-もと[腰元](名) ㊀腰の邊。㊁貴人の傍に仕

ふる侍女、（侍妾）。

(ご-しや[瞽者](名) めしひ。めくら。（盲人）。

(こ-しや[古社](名) ふるき神社。

(ご-しや[誤寫](名) 寫し誤ること。うつしちがへ。

(ご-しや[五舍](名) 古昔、禁中にありし昭陽舍（セウヤウシヤ）・淑景舍（シゲイシヤ）・飛香舍（ヒギヤウシヤ）・凝花舍（ギヨウクワシヤ）・襲芳舍（シハウシヤ）の稱。

(ご-しや[五車](名) （五つの車につむ程ある義、莊子に出づ）書籍の多きをいふ語。「一の書」。

こ-しやう[小姓](名) 貴人の傍近くに給仕する少年。（扈從、近侍者）。

(こ-しやう[胡床](名) あぐら。こしかけ。しやうぎ。

(こ-しやう[故障](名) ㊀さゝはり。さしつかへ。じやま。㊁[法]刑事又は民事の闕席判決を受けたる原告又は被告が、其闕席判決をなしゝ裁判所になす不服の申立。

(こ-じやう[古城](名) ふるき城。

(こ-じやう[孤城](名) ㊀ひろ〲したる場所に、たゞ一つ見ゆる城。「一片一萬仞山」。㊁敵軍に包圍せられて援軍なき城。たゞ一つ孤立せる城。

(ご-しやう[五障](名) [佛]女人は一には梵天王・二には帝釋天・三には魔王・四には轉輪聖王・五には佛身となるを得ずといふこと。

(ご-しやう[後生](名) ㊀[佛]のちのよ。來世。㊁[佛]來世の安樂。極樂の往生。㊂人に折りいって哀願するときにいふ語。

(ご-じやう[五情](名) 五つの情、即ち喜・樂・欲・怒・哀をもいひ、又、喜・怒・哀・樂・欲をもいふ。

(ご-じやう[五常](名) ㊀人の守るべき五つの道、即ち、父子の間には親、君臣の間には義、夫婦の間には別、長幼の間には序、朋友の間には信あること。㊁仁・義・禮・智・信の五德の稱。㊂[佛]五戒の稱。

(ご-じやう[互讓](名) 互にゆづりあふこと。

ご-しやう-ぎ[碁將棊](名) 碁と將棋と。

こ-しやう-きかん[故障期間](名) [法]故障の申立が有効なる期間、即ち、民事にては十四日間、刑事にては三日間なり。

ご-しやう-ぎらひ[後生嫌](名) 後生頼を嫌ふこと。佛法を嫌ふこと。

こ-しやう-ぐみ[小姓組](名) 徳川幕府が、殿中に設けし近習の兵隊。

こ-しやう-じ[小障子](名) 小さき障子。

ご-しやう-だのみ[後生頼](名) 佛に歸依して極樂の往生を願ふこと。佛法を信ずること。

こ-しやう-にん[小商人](名) 資本少く商賣小さき商人。こあきんど。

ご-しやう-ねがひ[後生願](名) 後生頼に同じ。

(ご-しやう-らく[五常樂](名) 雅樂の曲名。

(こ-じやう-らくじつ[孤城落日](名) 勢せまりて、陥落に近きさまにたとへいふ語。

こ-じやうらふ[小上﨟](名) 古昔、大臣・納言・參議等の女の、女官となりしものゝ稱。

(こ-しやく[小癪](名) ㊀未熟なるに、さかしらだちたること。「一な奴」。㊁かんしやく。「一に障る」。

(ご-しやく[五爵](名) 五等爵に同じ。

(ご-しやく[語釋](名) 言葉の意義の解釋。

(ご-しやく[五尺](名) 短き身長にいふ語。「一短身」。

〔ご-しや-ごしや(名、副) 「ごちやごちや」に同じ。

(こ-しやじ[古社寺](名) ふるき神社とふるき寺院と。——ほぞんくわい[古社寺保存會](名) 内務大臣の監督に屬し、古社寺の建造物又は寶物の歷史の徵證・特殊の由緒（ユヰショ）又は製作の優美等に就きて、内務大臣の諮詢に應じ、又、其保護の資格の有無等に關して、意見を上申する機關。

(こ-しゆ[古酒](名) 去年釀造せる酒。

(こ-しゆ[戸主](名) ㊀一家の主人。あるじ。㊁[法]戸主權の主體たるもの、即ち、一家の首位を占め家族を統轄するもの、家族扶養の義務を負ふ。

(こ-しゆ[固守](名) 固（カタ）く守ること。

(こ-しゆ[古主](名) むかし仕へし主人。（舊主）。

こし-ゆ[腰湯](名) 腰より下部を沐浴すること。（坐浴）。

(ご-しゆ[御酒](名) 酒の敬語。

(ご-しゆ[五趣](名) [佛]善惡の業因によりて、到着する五つの所、即ち、天・人・地獄・畜生・餓鬼の稱。

(ご-しゆいん[御朱印](名) 將軍の朱印。又、其朱印を捺（オ）したる書類又は券札。——ち[御朱印地](名) 徳川時代に、將軍の朱印を捺したる券を下附したる社寺への寄附地、租税を免ぜられたれど、又、賣買を禁ぜられたり。——ぶね[御朱印船](名) 昔時、公許のあるしとして朱印のある鑑札を所有し、海外の貿易を行ひし船。豐臣時代に始まりて、徳川時代の初期まで行はれたり。

(こ-しゆう[扈從](名) 貴人のそばに侍ること。又、其人。

(こ-しゆ-けん[戸主權](名) [法]戸主が其家族に對して有する私法上の權利。家督相續又は廢絶家の再興若しくは一家の新立等によりてこれを取得し、死亡・婚姻・離婚・隱居又は國籍の喪失若しくは廢家等によりて喪失す。

(こ-しゆごだい[小守護代](名) 鎌倉時代に、守護又は地頭の代理となりて事を行ひし役名。

(ご-しゆ-せん[五銖錢](名) 漢の武帝の鑄造せし銅錢の稱。

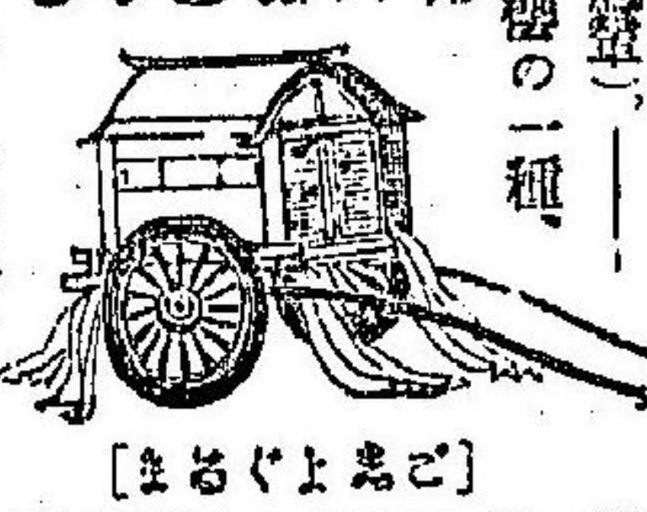
(ご-しゆ-でん[御守殿](名) ㊀徳川時代に、三位以上の諸侯に嫁したる將軍の娘の稱。又、其人の居所の稱。㊁御守殿に仕へし女中の髮の結方。

こし-ゆひ[腰結](名) 昔時、袴著（ハカマギ）などのときに、腰の紐（ヒモ）を結ぶ役をなしゝもの。

(ご-しゆゆ[吳茱萸](名) [植]「かははじかみ」の漢名。

(こ-しよ[古書](名) 古き文書。古き書籍。

(ご-しよ[御所](名) ㊀禁裏。㊁後世僭して、將軍家又は大臣家などの稱。——がき[御所柿](名) [植]柿の一種、實の形扁（ヘン）くして、もとに大和國葛上郡五所村より出づ。「やまとがき」。（互勢柿、紅柿、方柿）。——かづき[御所被衣](名) 古昔、京都の内裏の婦人が用ひし一種の被衣。——ぎたひ[御所鍛](名) 「きくさく」の一名。——ぐるま[御所車](名) 古昔、貴人の用ひし牛車、上に屋形あるもの。（輦車、鳳輦）。——ざくら[御所櫻](名) [植]櫻の一種、花は大形重瓣にして五蕚殘り開く。——ざむらひ[御所侍](名) 古昔、仙洞又は攝家などに仕へし侍。——ぞめ[御所染](名) ごしよぢらしの類の染模樣。——ぢらし[御所散](名) ちらし模樣の名。「一千筋」。


[ごしよぐるま]

(こ-しよう[古松](名) 年を經たる松。老松。

(こ-しよう[誇稱](名) ㊀ほこりていふこと。㊁ぎやうさんにいふこと。「誇張」。

(こ-しよく[古色](名) 年を經たる風致又は色。

(ご-しよく[誤植](名) 活字のうゑあやまり。

‡ご-しよ-どころ[御書所](名) 古昔、皇室の御藏書を保管せし役所。——のあづかり[御書所預](名) 御書所の長官。

ごしよ-はちまん[五所八幡](名) 全國中最も名たゝる五箇所の八幡宮、即ち、筑前國大分宮・肥前國千栗宮・肥後國藤崎宮・薩摩國新田宮・大隅國正八幡宮の稱。

こし-よろひ[腰鎧](名) 「くさずり」の一名。（腰甲）。

こしら-ふ[拵](他、は下二) ㊀‡とりなして整む。取繕ひてよきやうにす。㊁造りかまふ。たて設く。つくる。「城を一」。㊂製作す。調達す。㊃かざる。よそほふ。㊄いつはる。あざむく。㊅かたどる。まねす。

こしら-へ[拵](名) こしらふること、こしらへたるさま。「好みの一」。——ごと[拵事](名) 虛構せる事實。いつはり。（虛揑、揑造）。——ぶみ[拵書](名) にせぶみ。にせてがみ。——もの[拵物](名) 眞物に摸擬して製作したるにせもの。

‡——る[拵](他) 「こしらふ」の訛。

こ-じり[小後](名) 物事の最端。「一をとる」。

こ-じり[鐺](名) ㊀たるきの端。㊁刀劍のさやの末端。——とがめ[鐺咎](名) 昔時、武士が途中にて行きあふとき、帶したる刀の鐺と鐺とのさはりたるを無禮として爭論をなしゝこと、轉じて、わづかの物事に就きて咎立をなすこと。

こじ-る[抉](他、ら四) ㊀くじる。ゑぐる。㊁ねぢる。もぢる。

〔こじれ-る[拗](自、ら下一) 曲がる。ねぢく。

‡ご-しろ[子代](名) 古代に、皇后の御子なき時、其御名を一群の民に負（オ）はしめて、後代の紀念とせられしこと。又、其人民。

‡こし-ゐる[腰居](名) こしぬけ。ゐざり。（躄）。

(こ-じゐん[孤兒院](名) 不幸なる孤兒を收容して、これを養育することを目的とする所。

こし-をれ[腰折](名) ㊀年老いて腰の折れかゞまりたること。「一の翁」。㊁歌の上句と下句との意の相あはぬこと。「一歌」。㊂詩歌文章の拙惡なること。㊃「こしをれうた」又は「こしをれぶみ」の略言。㊄〔ぜんかごの小なるもの。（肥前の方言）。——うた[腰折歌](名) ㊀歌の上句と下句との意の相あはぬ歌。又、拙惡なる歌。㊁自分の作歌の謙稱。——ぶみ[腰折文](名) ㊀拙惡なる文章。㊁自分の文章の謙稱。

(こ-じん[古人](名) 古の人。むかしのひと。「人」。

(こ-じん[故人](名) ㊀古き朋友。舊友。㊁死にし人。

(こ-じん[胡人](名) ㊀えびすの人。㊁外國人をいやしめていふ語。

(こ-じん[個人](名) 國家又は社會等に對して、個々別々の人の稱。一個人。——きげふ[個人企業](名) [經]一人にして法律上又は經濟上の一切の責任を負ひて、生産に從事すること。——けいざい[個人經濟](名) 一個人に關する經濟。國家經濟などの對。——しゆぎ[個人主義＝Individualism](名) ㊀[倫]個人の獨立自由を重んじ、自家を基礎として一切の行動を規定せんとする主義。㊁[政]國家又は社會に關係なく、たゞ個性を發達せしむることを以て、教育の目的となす主義。㊂[經]個人放任主義に同じ。——せいど[個人制度](名) 個人を法律上の權利義務の主體となす制度、方今文明諸國の制度は概ねこれなり。家族制度の對。——てき[個人的](形) 言論又は行爲などに「個人を主とするにいふ語。——はうにんしゆぎ[個人放任主義](名) [經]經濟上、個人隨意の行動は最も有効なるが故に、國家はなるべく其自由に放任して、行動を容易ならしむ

べしといふ主義、北極端なるものに至りては、港灣道路の經營乃至貨幣の鑄造等をも、個人の手に委ぬべしと說けり。

（**ご‐しん**［五辛］（名） 五つの辛味ある蔬菜、即ち、韮(ニラ)・薤(ラッキヤウ)・葱・蒜(ニンニク)・薑(ハジカミ)の稱。

（**ご‐しん**［護身］（名） 身のまもり。身の防禦。

（**ご‐じん**［吾人］（名） われらの社會、人類。

（**ご‐じん**［吾人］（代） われ〳〵。われら。（我儕、我等）。

（**ご‐しんさい**［御親祭］（名） 天子が御自身に、神をまつりたまふこと。又、其祭典。

ご‐しんざう［御新造］（名） 人の妻の敬稱。

⌒**ご‐しんさん**［御新樣］（名） 中等社會の人の妻の敬稱。（東京の方言）。

⌒**こ‐じんじやう**［小尋常］（名） ❶てごろ。❷稍や殊勝なること。

（**ご‐しんたう**［護身刀］（名） 身のまもりに持つ刀。まもりがたな。

こ‐しんでん［小寢殿］（名） 小さなるつくりの寢殿。

⌒**ご‐しんとう**［御神燈］（名） 神燈の敬稱、特に、藝人などの家の入口に、吊(ル)しある神燈。

（**ご‐しんとう**［五親等］（名）【法】親等の一、或人と其人又は其人の配偶者より、五世を隔てたる親族關係、例へば或人と其曾祖父母の祖父母若しくは其曾孫の孫との關係、又は其人と配偶者の曾祖父母の祖父母若しくは其曾孫の孫との關係等これなり。

（**ご‐しんぷ**［護身符］（名） 身のまもりにする神佛のお札。

‡**こす**［簾］（名） みす。すだれ。

こ・す（さしすすせせ）［漉］（他、さ四） 細かき隙(スキ)間を潜(クグ)らしめ、滓(カス)を留めて漏洩せしむ。「酒を―」。（濾）。

こ・す（さしすすせせ）［越］（自、さ四） ❶上を過ぎ行く、とほる、「山を―」。❷上に及ぶ、「水股を―」。❸まさる、すぐる。「才學人に―」。（超）。❹經過す。ふ。「年を―」。❺行く、去る、來る。「まかり―」。「引き―」。

こ・す（せしすするすれせよ）［鼓］（他、さ變） ❶うちならす、かきならす。❷うごかす。ふるふ。おこす、「勇を―」。

‡**こ・ず**（ぢぢづづるづれぢよ）［掘］（他、さ上二） 植物を根附のまゝ引き拔く。

ご‐す［呉須］（名） ❶支那の呉須燒の陶器、普通又は赤畫等あり。❷「コバルト」の細末を、水に溶解せしめて、陶器の青き模樣を畫(エ)がくに用ふる繪具。

ご・ずる（ぜじずずるずれぜよ）［期］（自、さ變） 「きす」に同じ。

（**こ‐すう**［箇數］（名） ものゝかず。かず。

（**こ‐すう**［戸數］（名） 家の數。やかず。――**わり**［戸數割］（名）【法】地方稅の一、現在の各戸に賦課して徵收するもの、同一家族といへども、住家を別にすれば各別に賦課し、又、一家の内に同居するものといへど、各別の生活をなせば各別に賦課す。

（**ご‐すう**［語數］（名） 言語の數。

こ‐すき［杴］（名） 木にて造れる鋤。

こ‐すぎ［小杉］（名） ❶小さき杉の木。❷すぎはらがみの小判のもの。

⌒**こす・し**（くしきけれ）［狡］（形、二） ❶狡猾なり。わるがしこし。❷吝嗇なり。けちなり。

こ‐すすき［小薄］（名）【植】「いとすゝき」に同じ。

ご‐すで［呉須手］（名） 呉須の陶器。

こ‐ずみ［粉炭］（名） 炭の細末となりたるもの。

こ‐ずみ［濃墨］（名） 濃く磨(ス)りたる墨汁。

こ‐すみれ［小菫］（名）【植】すみれの一種、葉は殆ど尖頭にして葉柄は翼を有せず、距は花瓣と同長なるか少なくとも萼片と同長なり。

コスメチック［Cosmetic］（名） 脂肪を原料とし香料を加へて製造したる化粧品、頭髮又は口髭などに塗(ヌ)るに用ふるもの。

‡**こすり**［錯子］（名） やすりの類。

こすり［擦］（名） こすること。――**つ・く**（けけくくるくれけよ）［擦付］（他、か下二） ❶力を入れてこする。❷押しつけてなすりつく。

こす・る（らりるるれれ）［擦］（他、ら四） ❶押し付けて磨擦す。「玉を―」。（摩）。❷遠まはしにあてゝいふ。

こす・れる（れれるるれれよ）［擦］（自、ら下二） すれあふ。

⌒**こすれる**［擦］（自） 「こする」の訛。

（**こ‐すゐ**［湖水］（名） みづうみ。

（**こ‐すゐ**［鼓吹］（名） ❶太鼓を叩き笛を吹くこと、轉じて、音樂を奏すること。❷勢をつくること、おこしたつること。❸意見を公表すること、議論を主張すること。

（**ご‐すゐ**［午睡］（名） ひるね。午眠。

（**ご‐すゐ**［五衰］（名） 天人も臨終にはまぬかれぬといふ五とほりのおとろへの稱、即ち、身光不現・華鬘萎・雨腋汗流・體使臭穢・不樂本座をいふ。

こずゑ［梢］（名） （木末の義）木の枝の末。木のさき。「―に宿る露」。（杪、標）。――**のあき**［梢秋］（名） 陰曆九月の異稱。

ごすん‐くぎ［五寸釘］（名） 曲尺二寸五分許の釘の稱。

（**ご‐ぜ**［後世］（名） 後の世。（後生）。

⌒**ご‐ぜ**［瞽女］（名） （「めくらごぜ」の略言）三味線など彈(ヒ)きて錢を乞ふ盲目の女。

‡―**ご‐ぜ**［御前］（接尾） 古昔、婦人の名の下に添へし語。「姫―」。

（**こ‐せい**［顧省］（名） みづからわが身を顧ると。

（**こ‐せい**［個性］（名） ❶個體の性質。❷個々の人の特有の性質。

こ‐ぜい［小勢］（名） 少なき人數。こにんず。

（**ご‐せい**［語勢］（名） ことばのいきほひ。

（**ご‐せい**［語聲］（名） はなしをするこゑ、はなしごゑ。

（**ご‐せい**［五星］（名） 五つの星、即ち、歲星(木星)・熒惑(火星)・太白(金星)・辰星(水星)・塡星(土星)の稱。

（**ご‐せい**［五聲］（名） 「ごおん」（五音）に同じ。

（**ご‐せい**［五聖］（名） 支那古代の五人の聖人、即ち、黃帝・堯・舜・禹・湯の稱、一說に、黃帝を除き神農を加へてもいふ。

（**ご‐せい**［五牲］（名） 五つのいけにへ、即ち、麋・鹿・麏・狼・兎の稱。

（**ご‐せい**［悟性］（名）【心】直觀によりて理解し、又は其理解を綜合する意識の作用。

（**ご‐せい**［互生］（名）【植】葉がたがひちがひに生ずること。對生の對。

（**こせい‐しんりがく**［個性心理學］（名） 天才又は罪囚等、一般より差別ありとせらるゝ、個性の心理を研究する學。

（**こせい‐ぶつ**［古生物］（名） 現代の地層の形成以前に生殖せし生物、即ち、「マンモス」の如きもの。

（**こ‐せう**［胡椒］（名）【植】胡椒科に屬する小木本、多く熱帶地方に產し、癒合せる葯室を有す、果實は形圓く、色赤黑く、皮の中に固(カタ)き核あり、其中の仁を採りて藥種又は食用とす。

（**こ‐せう**［湖沼］（名） みづうみとぬまと。

（**こ‐せき**［古跡］（名） むかし物事のありし跡。舊跡。（古迹、古蹟）。

（**こ‐せき**［古昔］（名） いにしへ。むかし。（古時）。

（**こ‐せき**［戸籍］（名） ❶戸數又は人別を詳(ツマビラカ)しく記載せる帳簿。❷家族・親族及國籍の上に於ける各人の身分事項に就きての公證。又、一戸每に作りて各人の家族關係に屬する事項を登錄公證したる記錄。――**ぼ**［戸籍簿］（名） 各人の家族關係に屬する事項を登錄公證したる記錄の帳簿、正本は戸籍役場に備へ、副本は其地の地方裁判所に保存す。――**やくば**［戸籍役場］（名） 戸籍吏が其事務を行ふ所。――**り**［戸籍吏］（名） 戸籍に關する行政事務を扱ふ吏員、通常市町村長を以てこれに充て、東京・京都・大阪の三市は、特に區長を以てこれに充つ。

（**ご‐せき**［五石］（名） 五つの藥石、即ち、石膽・丹砂・雄黃・礬石・磁石の稱。

ご‐せく［五節供］（名） 「ごせっく」の略言。

⌒**こせ‐こせ**（名、副） 度量の甚大ならぬさまにいふ語。

‡**ごせ‐しや**［後世者］（名） 佛に祈りて、後世を營むこと。念佛を唱へて極樂往生を願ふこと。又、其人。「念佛の堅固なるを侍らねば、人々も皆の―にこそと」。

‡**ご‐せち**［五節］（名） 古昔、陰曆十一月豐明(トヨノアカリ)の節會などに行はれし女樂の稱、四人の舞姬にてこれを舞ひ、五たび袖をあぐるにより此名あり。

‡**ごせち‐ゑ**［五節會］（名） 五つのせちゑ、即ち、元日・白馬・踏歌・端午・豐明の稱。

（**ご‐ぜつ**［五絕］（名） ❶死せしむべき五つの原因、即ち、縊・溺・壓・凍・驚の稱。❷漢詩にて、五言絕句の稱。

⌒**こせつ・く**（かきくくけけ）（自、か四） こせ〳〵す。

（**ご‐せっく**［五節句］（名） 明治維新後まで行はれし五つの節句、即ち正月七日(人日)・三月三日(上巳)・五月五日(端午)・七月七日(七夕)・九月九日(重陽)の稱、明治六年一月に廢せらる。

（**ご‐せっけ**［五攝家］（名） 古昔、攝政・關白に補せらるべき五家、即ち、近衞・九條・二條・一條・鷹司の稱。

⌒**ごぜ‐の‐ばう**［瞽女坊］（名） 「ごぜ」の一名。

ご‐ぜめ［後攻］（名） 「ごづめ」（後詰）に同じ。

こ‐ぜりあひ［小競合］（名） ❶小さき戰爭。こいくさ。❷うちわもめ。

（**こ‐せん**［古錢］（名） 古昔通用したる錢。

（**こ‐せん**［姑洗］（名） ❶十二律の一。❷陰曆三月の異稱。

（**ご‐せん**［互選］（名） 特定の人々が、其範圍内の人につきて行ふ選擧。

（**ご‐せん**［午前］（名） ❶朝より正午までの間。❷夜半より正午までの間。

（**ご‐ぜん**［御前］（名） ❶貴人の座前又は面前の敬稱。❷貴人の前驅、又、其もの。❸特に陛下の御坐前又は御面前の敬稱。――**かう**［御前講］（名） 貴人の御前に於て、書物などの講釋をなすこと。――**くわいぎ**［御前會議］（名） 陛下の御前にて、國家の大事に關し、元老・大臣などがなす會議。

（**ご‐ぜん**［御膳］（名） ❶膳の敬稱。❷朝・晝・夕の食事。「―をたべる」。――**かご**［御膳籠］（名） 竹にて目を粗く小判形に編みたる笊、てんびんぼうにて擔ぐ。――**じやうとう**［御膳上等］（名） 品等の最もすぐれたるにいふ語。――**だな**［御膳棚］（名） ❶四十八棚の一、棚の數總計七枚あるもの。❷臺所にある棚、膳の類をのせおくもの。

（**ご‐ぜん**［御前］（代） 貴人の敬稱。

―**ご‐ぜん**［御前］（接尾） 古昔、婦人の名の下に添へし語。「巴―」。

（**ご‐せんざ**［御遷坐］（名） 神社の修繕又は新築等に就きて、神體の所在をかふること。せんぐう。――**しき**［御遷坐式］（名） 御遷坐に就きて擧行する儀式。

（**こせん‐ぢやう**［古戰場］（名） 古昔、戰爭ありし場所。

ごせん‐ひら［五泉平］（名） 越後國五泉町より出づる精好織の下品なるもの。

こそ（助） ❶多くの中より一事をとり出で、さし定めていふ意を表はす語。「これ―よけれ」。❷希求の意をあらはす語。「こよひの月夜、あきらけく―」。

こぞ[去年](名) きよねん。さくねん。(舊年)。

こ-ゾウ[小僧](名) ㊀年少の僧。㊁商店などにて使役する小童。㊂少壯者を卑(イヤシ)み呼ぶ語。

(こ-そく[姑息](名) 一時のまにあはせ。かりそめの安心。いっすんのがれ。

こそ・ぐ（げげぐぐるれげよ）[刮](他、か下二) こすりけづる。けづりおとす。

(こ-ぞく[古俗](名) むかしのならはし。

(ご-そく[五則](名) 五つの準則、即ち、規(ブンマハシ)・矩(サシガネ)・權(ハカリ)・衡(ハカリザヲ)・繩(スミナハ)の稱。

(ご-そくさい[御息災](名) ㊀息災の敬稱。㊁物に緻雜ならず質朴なるをいふ語。「一の田舍者」。

〔こそぐったい(形) 「こそはゆし」に同じ。

こそぐ・る（らりるるれれ）[擽](他、ら四) 皮膚の或部分を刺戟して、一種の感覺を起さしむ。くすぐる。(抓癢)。

〔こそげる[刮](他) 「こそぐ」の訛。

〔こそ-こそ(名、副) ㊀竊かに音のするさまにいふ語。㊁ないしょで事をなすさまにいふ語。――どろぼう（ヴーボ）(名) ささいのぬすみをなすもの。小ぬすびと。

〔ごそ-ごそ(名、副) 剛(コハ)く粗(アラ)きもの、相觸れて發する音。

こぞって[擧](副) 「こぞりて」に同じ。

こ-そで[小袖](名) ㊀袿の大袖なるに對して、常の衣の稱。袖の小さき衣。㊁絹の綿入。(段絹衣)。㊂鎧(ヨロヒ)の袖。――まく[小袖幕](名) 昔時、花見などのとき、小袖を脫(ヌ)ぎこれを紐(ヒモ)に連ねかけて、幕とせしものゝ稱。

こそばゆ・し（くしきけれ）(形、一) くすぐらるゝ、如き感あるにいふ。

こ-ぞめ[濃染](名) 濃く染めたる色。

‡こぞめ-ぐさ[濃染草](名) 【植】萩の異稱。

‡こぞめ-づき[木染月](名) 陰曆八月の異稱。

こぞりて[擧](副) ことごとく。のこらず。みな。

こぞり-は[小反刃](名) 小さきなぎなた。

こぞ-る（らりるるれれ）[擧](自、ら四) ことごとくそろふ。殘らずあつまる。

こぞ・る（らりるるれれ）[擧](他、ら四) ことごとくそろへあつむ。殘らずかりだす。

(こ-そん[孤村](名) かけはなれて隣村なき邑里。はなれむら。

(こ-たい[固體](名) 一定の體形及體積を有する物體、通常溫度に於ける金石の如き是れなり。液體及氣體の對。

(こ-たい[古體](名) ㊀いにしへのさま。ふるきかたち。㊁漢詩にて、律及絶句以外の諸體の稱。

(こ-たい[個體](名) 個々にわかれてあるもの。ひとつ／＼になりて存在するもの。

(こ-だい[誇大](名) ㊀實際よりも仰山なること。おほぎやうなること。㊁ほこること。たかぶること。

(こ-だい[古代](名) ㊀いにしへ。むかし。㊁ふるめかしきこと。ふるくさきこと。㊂現時の地殼構成以前の世界。

(ご-たい[五體](名) ㊀筋・脈・肉・骨・毛皮の稱。又、頭と兩手と兩足との稱。㊁全身の總稱。㊂書體にて、篆・隷・眞・行・草の稱。

(ご-たい[五帶](名) 【地】熱帶と南北半球の兩溫帶及兩寒帶との稱。

(ご-だい[五大](名) 【佛】五塵より生ずる地・水・火・風・空の五つの種性の稱、其一切にあまねきが故に大と名づく。

(ご-だい[五代](名) 支那の唐朝の後を承(ウ)けし五王朝、即ち、後梁・後唐・後晉・後漢・後周の稱。

こだい-さらさ[古代更紗](名) ㊀古く南蠻より渡來せる更紗。㊁古代に模擬せる布。

(ご-だい-しう[五大洲](名) 地球上の五つの大陸、即ち「アジア」・「アフリカ」・「ヨーロッパ」及南北「アメリカ」の稱。

〔ご-たいそう[御大層](名) 仰山(ギヤウサン)なること。

(ご-たい-そん[五大尊](名) 【佛】不動・降三世・軍吒利夜叉・大威德・金剛夜叉の稱。

(ご-だい-だう（ウド）[五大堂](名) 五大尊を安置せる堂。

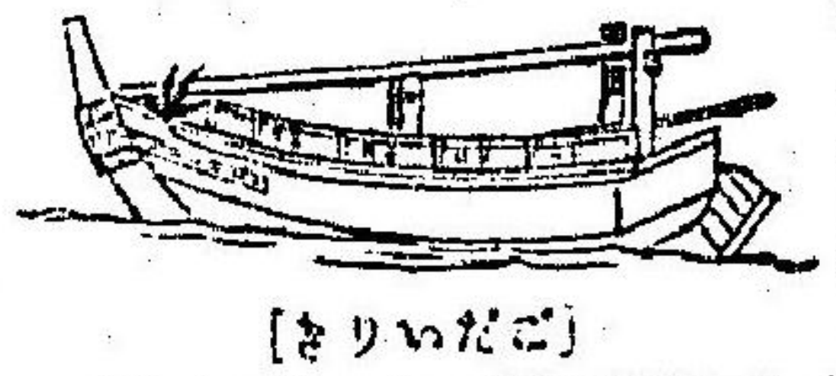
(こ-たい-てき-はっせい[個體的發生](名) 個體が卵子より發生して次第に生育すること。系統的發生の對。

ご-だい-の-みうら[御體御卜](名) 古昔、神祇官に於て、六月十日に行はれし御卜、天皇の御身體に御つゝしみあらん事をうらなひ奏したり。

(ご-だい-みやうわう（ウヨーミ）[五大明王](名) 【佛】「ごだいそん」(五大尊)に同じ。

(こ-だい-もやう（ウーヨ）[古代模樣](名) 古代に行はれたる模樣。古風の模樣。

(ご-だい-りき[五大力](名) [illegible]より稍や小さき荷船、內海の沿岸に用ふ。



［ごだいりき］

(こ-たう（ウート）[孤島](名) 陸地よりかけはなれたる小島。

(こ-たう（ウート）[古刀](名) ㊀ふるき刀劍。㊁慶長以前の作にかゝる刀劍の特稱。

(こ-たう（ウート）[胡桃](名) 【植】「くるみ」の稱。(羌桃)。

(こ-だう（ウード）[古道](名) ㊀古代の交通路。㊁古代の方法。㊂古代の學問又は道義「一を明かにす」。

‡こ-だう（ウード）[小道](名) 小さきみち。こみち。

(ご-だう（ウード）[悟道](名) 道の眞理を悟(サト)ること。

(ご-だう（ウード）[五道](名) 【佛】五惡趣に同じ。

こ-だう-ぐ（ウード）[小道具](名) ㊀小さき道具。㊁刀劍の附屬品、即ち鍔などの稱。「―屋」。㊂芝居にて、俳優の衣裝に附屬する煙草入・櫛・簪などの稱。――かた[小道具方](名) 芝居の小道具を扱ふ人。

ごたう-くぢら（ウート）[五島鯨](名) 【動】游水類中いるか科に屬する哺乳動物、體色黑くして長さ二丈餘に達す、我國にては肥前國五島邊に多く產するより此名あり。

ごたう-するめ（ウート）[五島鯣](名) 肥前國五島邊より出だすするめの稱。

〔こ-たか(名) 【動】「いなご」の一名。(關東の方言)。

こ-たか-がり[小鷹狩](名) 秋の鷹狩の稱。冬のおほたかゞりの對。

こ-だか・し（くしきけれ）[木高](形、二) 稍長し。樹長し。

こ-だか・し（くしきけれ）[小高](形、二) すこし高し。

こだか-だんし[小鷹檀紙](名) 判小さき檀紙。

〔ご-たく[御託](名) くど／＼しくいふこと。又、傲慢なる言をならぶること。

〔ごた-くさ(名、副) ㊀紛紜又は錯雜あるさまにいふ語。㊁混合又は雜沓(ザツタフ)せるさまにいふ語。

こ-だくみ[木匠](名) 木材を以て家屋を建築し又は器具をつくることを職とするもの。大工。(木工、工匠、番匠)。‡――の-かみ[木匠頭](名) こだくみのつかさの長官。‡――の-つかさ[木匠寮](名) 古昔、官內省の被管に屬し、營繕の事を掌りし寮。

〔ごた-ごた(名、副) 「ごたくさ」に同じ。

こ-だし[小出](名) 多くあるものゝ中より、便利のため少許を出し置くこと。又、其物。「―の金」。

こ-だち[木立](名) たちき。はやし。「夏―」。

こ-だち[小太刀](名) ㊀小さき刀。㊁小さき刀を使ふこと。「―の名人」。

‡こ-たち[御達](名) 婦人たち。(役達)。

こ-たつ[火燵](名) 上に櫓(ヤグラ)を置き、蒲團をかけて足などを暖むる小さきいろり。(豆燵、火閤)。――やぐら[火燵櫓](名) 火燵の上に置きて、蒲團をかくる櫓。(爐架、爐棚)。

(ご-だつ[誤脫](名) 文句のあやまりとぬけこと。

〔ごた-つき(名) ごたつくこと。もめ。こんざつ。

〔ごた-つ・く（かきくくけけ）(自、か四) ごたごたす。

こ-たて[小楯](名) 假に設けたる楯。「壁を―にとり」。

こ-たに(名) 一種の料理、さま／＼のものを混交して煮たるもの。ごったに。(骨董煮)。

こ-たね[子種](名) 子となるべき元子。子を產すべきもと。

こ-たば[小束](名) 小さきたば。(小把)。

こ-タバコ[粉煙草](名) 刻煙草の細かくなりて粉となりたるもの。

〔ごた-ぼこ(名) さま／＼のものをとり入るゝ箱。

〔ごた-は・る（らりるるれれ）(自、ら四) ㊀さしさはる。さゝはる。㊁かゝはる。かゝづらふ。㊂何事もなさでいひたて、故障す。

こ-たび[此度](名) このたび。こんど。(這般、今般)。

こ-だひ（イーヒ）[小鯛](名) 小さき鯛。

こた・ふ（ウコト）[答](自、は下二) ㊀他の言に對して返へし言ふ。いらふ。(對)。㊁報ず。むくゆ。㊂應ず。「行歌相―」。㊃反響す。ひゞく。㊄感ず。とほる。さく。

〔こた・ふ（ウコト）[堪](自、は下二) ㊀こらふ。たふ。㊁たもつ。もつ。

(ご-たぶん[御多分](名) ㊀數量多きことの敬稱。「―の頂戴物」。㊁多數者の言ひ又は行ふ方、又、其方につきしたがふこと。‡――れん[御多分連](名) 自家の意見なく、たゞ多數者につきしたがふやから。

こたへ（エコタ）[答](名) ㊀いらへ。返辭。返答。㊁問題の解決。㊂きゝめ。きゝし。㊃ひゞき。反響。

こたへ（エコタ）[堪](名) こらへ。たもち。

こたへる(自) 「こたふ」の訛。

こ-だま[木靈](名) ㊀樹木の靈。㊁やまびこ。「―に響く」。

こ-だま[小玉](名) 「こだまぎん」の略言。――ぎん[小玉銀](名) まめいた。まめぎん。(碎銀、子粒銀)。

〔ごた-まぜ(名) 混合すること。いりまじり。

‡こた・る（れれるるれれよ）[傾](自、ら下二) かたむく。

‡こた・る（らりるるれれ）[木垂](自、ら四) 木老いて枝垂れ下がる。

(ご-だん[後談](名) 後の物語。のちのはなし。

(ご-だん[後段](名) をはりの段。又、のちの段。

こ-ダンナ[小旦那](名) わかダンナ。大旦那の對。

こ-ち[東風](名) 東方の風。ひがしかぜ。(條風)。

こち[鯒](名) 【動】硬鰭類中こち科に屬する魚、形ははうぼうに似て扁(ヒラ)く、口大く尾尖りて鱗細し、背部は黑色なり、我國沿岸多少の產あれども殊に東海に多し。(牛尾魚、鮖、鮖、鮲)。

(こ-ち[故智](名) 古人の智てなし、策略。

こ-ち[此方](代) このかた。こちら。こなた。

(ご-ち[五地](名) 五つの土地、即ち、山林・川澤・丘陵・原濕・墳衍の稱。

(ご-ち[五智](名) 【佛】法界體性智・大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智の五種の智識。――によらい[五智如來](名) 五智ある如來、異說多けれど、多くは大日・阿閦・寶性・彌陀・釋迦をいふ。

(ご-ぢ[護持](名) ㊀まもりたもつこと。㊁祈禱。

とぞ「去年」(名) きよねん。さくねん。(舊年)。

とーゾウ「小僧」(名) ㊀年少の僧。㊁商店などにて使役する小童。㊂少壯者を卑(イヤ)しみ呼ぶ語。

(とーそく「姑息」(名) 一時のまにあはせ。かりそめの安心。いっすんのがれ。

とそ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）「刮」(他、か下二) こすりけづる。けづりおとす。

(とーぞく「古俗」(名) むかしのならはし。

(とーそく「五則」(名) 五つの準則、即ち、規・矩・準・衡・繩の稱。

(ごーそくさい「御息災」(名) ㊀息災の敬稱。㊁物に緻密ならず質朴なるをいふ語。「ーの田舍者」。

〔とそぐったい (形) 「こそはゆし」に同じ。

とそぐ・る（らりるるれれ）「擽」(他、ら四) 皮膚の或部分を刺戟して、一種の感覺を起さしむ。くすぐる。(抓擽)。

〔とそげる「刮」(他) 「こそぐ」の訛。

〔とそーとそ (名、副) ㊀靜かに音のするさまにいふ語。㊁ない〱で事をなすさまにいふ語。 ——どろばう (名) ささいのぬすみをなすもの。小ぬすびと。

〔ごそーごそ (名、副) 硬(コハ)く粗(アラ)きもの、相觸れて發する音。

とぞって「擧」(副) 「こぞりて」に同じ。

とーそで「小袖」(名) ㊀袿の大袖なるに對して、常の衣の稱。袖の小さき衣。㊁絹の綿入。(綾絹衣)。㊂鎧(ヨロヒ)の袖。 ——まく「小袖幕」(名) 昔時、花見などのとき、小袖を脫(ヌ)ぎこれを紐(ヒモ)に連ねかけて、幕とせしものゝ稱。

とそはゆ・し（くしきけれ）(形、二) くすぐらるゝ如き感あるにいふ。

とーぞめ「濃染」(名) 濃く染めたる色。

十とぞめ・ぐさ「濃染草」(名) 【植】萩の異稱。

十とぞめ・づき「木染月」(名) 陰曆八月の異稱。

とぞりて「擧」(副) ことごとく。のこらず。みな。

とぞりーは「小反刃」(名) 小さきなぎなた。

とぞーる（らりるるれれ）「擧」(自、ら四) ことごとくそろふ。殘らずあつまる。

とぞ・る（らりるるれれ）「擧」(他、ら四) ことごとくそろへあつむ。殘らずかりだす。

(とーそん「孤村」(名) かけはなれて隣村なき邑里。「はなれむら」。

(とーたい「固體」(名) 一定の體形及體積を有する物體、通常溫度に於ける金石の如き是れなり。液體及氣體の對。

(とーたい「古體」(名) ㊀いにしへのさま。ふるきかたち。㊁漢詩にて、律及絶句以外の諸體の稱。

(とーたい「個體」(名) 個々にわかれてあるもの。ひとつ〱になりて存在するもの。

(とーだい「誇大」(名) ㊀實際よりも仰山なること。おほぎやうなること。㊁ほこること。たかぶること。

(とーだい「古代」(名) ㊀いにしへ。むかし。㊁ふるめかしきこと。ふるくさきこと。㊂現時の地殼構成以前の世界。

(ごーたい「五體」(名) ㊀筋・脈・肉・骨・毛皮の稱。又、頭と兩手と兩足との稱。㊁全身の總稱。㊂書體にて、篆・隸・眞・行・草の稱。

(ごーたい「五帶」(名) 【地】熱帶と南北半球の兩溫帶及兩寒帶との稱。

(ごーだい「五大」(名) 【佛】五塵より生ずる地・水・火・風・空の五つの種性の稱、其一切處にあまねきが故に大と名づく。

(ごーだい「五代」(名) 支那の唐朝の後を承(ウ)けし五王朝、即ち、後梁・後唐・後晉・後漢・後周の稱。

とだい・さらさ「古代更紗」(名) ㊀古く南蠻より渡來せる更紗。㊁古代更紗に模擬せる布。

(ごだい・しう「五大洲」(名) 地球上の五つの大陸、即ち「アジア」・「アフリカ」・「ヨーロッパ」及南北「アメリカ」の稱。

〔ごーたいそう「御大層」(名) 仰山(ギャウサン)なること。

(ごーだいそん「五大尊」(名) 【佛】不動・降三世・軍吒利夜叉・大威德・金剛夜叉の稱。

(ごだい・だう「五大堂」(名) 五大尊を安置せる堂。

(とたいてきーはっせい「個體的發生」(名) 個體が卵子より發生して次第に生育すること。系統的發生の對。

ごだいーのーみうら「御體御占」(名) 古昔、神祇官に於て、六月十日に行はれし御占、天皇の御身體に御つゝしみあらん事をうらなひ奏したり。

(ごーだいみやうわう「五大明王」(名) 【佛】「ごだいそん」(五大尊)に同じ。

(とだいーもやう「古代模樣」(名) 古代に行はれたる模樣。古風の模樣。

(ごだいーりき「五大力」(名) 帆船より稍や小さき荷船、内海の沿岸に用ふ。

(とーたう「孤島」(名) 陸地よりかけはなれたる小島。

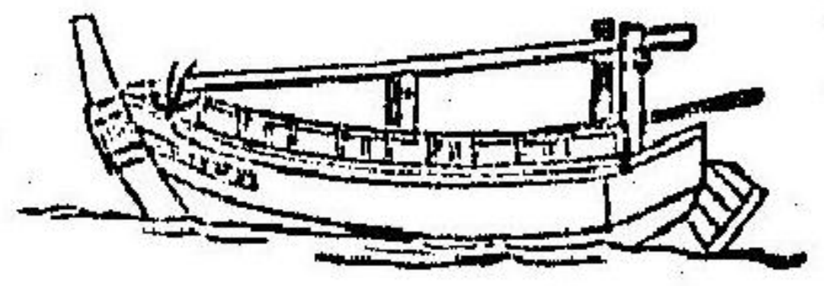
(とーたう「古刀」(名) ㊀ふるき刀劍。㊁慶長以前の作にかゝる刀劍の特稱。

(とーたう「胡桃」(名) 【植】「くるみ」の稱。(羌桃)。

(とーだう「古道」(名) ㊀古代の交通路。㊁古代の學問又は道義、「ーを明かにす」。㊂古代の方法。

十とーだう「小道」(名) 小さきみち。こみち。

(ごーだう「悟道」(名) 道を覺(サト)ること。



「ごだいりき」

(ごーだう「五道」(名) 【佛】五惡趣に同じ。

とーだうぐ「小道具」(名) ㊀小さき道具。㊁芝居にて、俳優の衣裝に附屬する煙草入・櫛・簪などの稱。「ー屋」。㊂刀劍の附屬品、即ち鍔などの稱。 ——かた「小道具方」(名) 芝居の小道具を扱ふ人。

どだうーくぢら「五島鯨」(名) 【動】游水類中いるか科に屬する哺乳動物、體色黑くして長さ二丈餘に達す、我國にては肥前國五島邊に多く游するより此名あり。

どだうーするめ「五島鯣」(名) 肥前國五島邊より出だすするめの稱。

〔とーたか (名) 【動】「いなご」の一名。(關東の方言)。

とーたかがり「小鷹狩」(名) 秋の鷹狩の稱。冬のおほたかゞりの對。

とーだか・し（くしきけれ）「木高」(形、二) 稍長し。樹長し。

とーだか・し（くしきけれ）「小高」(形、二) すこし高し。

とだか・だんし「小鷹檀紙」(名) 判小さき檀紙。

〔ごーたく「御託」(名) くど〱しくいふこと。又、傲慢なる言をならぶること。

〔ごたーくさ (名、副) ㊀紛紜又は錯雜あるさまにいふ語。㊁混合又は雜沓(ザッタフ)せるさまにいふ語。

とーだくみ「木匠」(名) 木材を以て家屋を建築し又は器具をつくるを職とするもの、大工。(木工、工匠、番匠)。 十——のーかみ「木匠頭」(名) こだくみのつかさの長官。 十——のーつかさ「木匠寮」(名) 古昔、宮内省の被管に屬し、營繕の事を察りし寮。

〔ごたーごた (名、副) 「ごたくさ」に同じ。

とーだし「小出」(名) 多くあるものゝ中より、便利のため少許を出し置くこと。又、其物、「ーの金」。

とーだち「木立」(名) たちき。はやし。「夏ー」。

とーだち「小太刀」(名) ㊀小さき刀。㊁小さき刀を使ふこと。「ーの名人」。

十とーたち「御達」(名) 婦人たち。(役達)。

とーたつ「火燵」(名) 上に櫓(ヤグ)を置き、蒲團をかけて足などを溫むる小さきゐろり。(瓦爐、火閣)。 ——やぐら「火燵櫓」(名) 火燵の上に置きて、蒲團をかくる櫓。(爐架、爐棚)。

(ごーだつ「誤脫」(名) 文句のあやまりとぬけと。

〔ごたーつき (名) ごたつくこと。もめ。こんざつ。

〔ごたーつ・く（かきくくけけ）(自、か四) ごた〱す。

とーだて「小楯」(名) 假に設けたる楯。「壁をーにとり」。

ごたーに (名) 一種の料理、さま〲のものを混交して煮たるもの。ごったに。(骨董羹)。

とーだね「子種」(名) 子となるべき元子。子を産すべきもと。

とーたば「小束」(名) 小さきたば。(小把)。

とーダバコ「粉煙草」(名) 刻煙草の細かくなりて粉となりたるもの。

〔ごたーぼこ (名) さま〲のものをとり入るゝ箱。

〔とだは・る（らりるるれれ）(自、ら四) ㊀さしさはる。さゝはる。かゝはる。かゝづらふ。㊁何事もなきをいひたて、故障す。

とーたび「此度」(名) このたび。こんど。(這般、今般)。

とーだひ「小鯛」(名) 小さな鯛。

とた・ふ（へへふふるふれへよ）「答」(自、は下二) ㊀他の言に對して返へし言ふ。いらふ。(對)。㊁報ず。むくゆ。㊂應ず。「行歌相ー」。㊃反響す。ひゞく。㊄感ず。とほる。きく。

〔とた・ふ（へへふふるふれへよ）「堪」(自、は下二) ㊀こらふ。忍のぶ。たふ。㊁たもつ。もつ。

(ごーたぶん「御多分」(名) ㊀數量多きとの敬稱。「ーの頂戴物」。㊁多數者の言ひ又は行ふ方。又、其方につきしたがふこと。 ——れん「御多分連」(名) 自家の意見なく、たゞ多數者につきしたがふやから。

とーたへ「答」(名) ㊀いらへ。返辭。返答。㊁きゝめ。しるし。㊂ひゞき。反響。㊃問題の解決。

とたへ「堪」(名) こらへ。たもち。

〔とたへ・る (自) 「こたふ」の訛。

とーだま「木靈」(名) ㊀樹木の靈。㊁やまびこ。「ーに響く」。

とーだま「小玉」(名) 「こだまぎん」の略言。 ——ぎん「小玉銀」(名) まめいた。まめぎん。(碎銀、子粒銀)。

〔とたーまぜ (名) 混合すること。いりまじり。

十とた・る（れれるるるれれよ）「傾」(自、ら下二) かたむく。

十とた・る（らりるるれれ）「木垂」(自、ら四) 木老いて枝垂れ下がる。

(ごーだん「後談」(名) 後の物語。のちのはなし。

(ごーだん「後段」(名) をはりの段。又、のちの段。

とーダンナ「小旦那」(名) わかダンナ。大旦那の對。

とーち「東風」(名) 東方の風。ひがしかぜ。(條風)。

とーち「鯒」(名) 【動】硬鰭類中こち科に屬する魚、形はほうぼうに似て扁(ヒラ)く、口大く尾尖りて鱗細し、背部は鼠色なり、我國沿岸多少の產あれども殊に東海に多し。(牛尾魚、鮲、鯒、鰍)。

とーち「此方」(代) このかた。こちら。こなた。

(ごーち「五地」(名) 五つの土地、即ち、山林・川澤・丘陵・原隰・墳衍の稱。

(ごーち「五智」(名) 【佛】法界體性智・大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智の五種の智識。 ——によらい「五智如來」(名) 五智ある如來、異說多けれど、多くは大日・阿閦・寶生・彌陀・釋迦をいふ。

(ごーぢ「護持」(名) ㊀まもりたもつこと。㊁祈禱。

(と-ちく[粥竹](名) 竹の笛。「からたけの—の聲も、きかせなん」。

(ご-ちく[五畜](名) 五個の家畜、即ち、雞・羊・牛・馬・豕の稱。

〔ご-ち-ご-ち(名、副) 物のからびて凝固したるさまにいふ語。「—した餅」。

十とち-どち(代) あちらこちら、方々。「—の花の盛り」。

〔ご-ち-ご-ち(名、副) 「こちこち」の意を強めていふ語。「なり」。「—き田舍人」。

廿とち-どち-し(しく しき しけれ)(形、二) 無骨なり。さすぐ

(ご-ちそう[御馳走](名) 饗應の敬稱。——せいりやく[御馳走政略](名) 人を饗應し機嫌をとりて、自分の要求を承諾せさすること。

(ご-ぢソウ[護持僧](名) 貴人のために、常に祈禱をなす僧。

十とち-た-し(くしきけれ)[言痛](形、二) ㊀煩はし。うるさし。㊁かしまし。やかまし。

廿とち-づ(でづづるづれでよ)[言出](自、た下二) 言語に出していふ。

〔とち-さ[此方人](代) われ〳〵。——ら「此方人等」(代) われ〳〵ども。

とち-の-ひと[此方人](代) 妻の夫を呼ぶ稱。

廿と-ぢもく[小除目](名) 古昔、大臣の官位を陞敍する臨時の除目、大臣以外の官の陞敍は、春若しくは秋なれど、大臣には定期なかりき。

と-ちや[粉茶](名) 茶の細粉となりたるもの。

〔と-ちや[古茶](名) 去年採りたる茶。新茶の對。

〔と-ちや[此方] こなたは、われは。

〔と-ちやう[誇張](名) 實際より仰山(ギヤウサン)らしくすること。

〔と-ちやう[戸長](名) 町村の長又は町村の事務を取扱ふ人で(里正)。——やくば[戸長役場](名) 戸長の事務を取扱ふ所。

(ご-ちやう[伍長](名) 五人を一組とせるものゝ頭。くみがしら。

(ご-ぢやう[御諚](名) 貴人の命令。おほせ。みことば。「—には候へども」(御令)。

(こ-ちやく[固着](名) ㊀かたくつくこと。かたまりつくこと。つきて離れざること。㊁其土地にとゞまりゐること。移動せざること。

十ご-ちやくこ[御着袴](名) 天皇又は東宮の袴をつけ給ふこと。

〔こちや-こちや(名、副) 細きもの、群れ集まりて、混雜するさまにいふ語。

十ごちや-ごちや(名、副) 前條の意を稍や強めていふ語。

十ごちやつ-く(かきくくけけ)(自、か四) ごちや〳〵す。

(こ-ちゆう[孤注](名) 財貨を盡くして搏奕に賭すること。轉じて、全力を擧げて、運否天賦の危險なる事を試むるとにいふ語。

(こ-ちゆう[孤忠](名) 他に同情者なき忠義。

(こ-ちゆう[個中](名) ㊀此範圍の中。このうち。㊁禪家などにて、世俗の事業に對し、參禪求道などの範圍の義にいふ語。「—の消息」。

(こ-ちゆう[古注](名) 古代の註釋。

(ご-ちゆう[五蟲](名) 五種の動物、鱗蟲・羽蟲・毛蟲・介蟲・裸蟲の稱にして、鱗蟲の長は蛟龍、羽蟲の長は鳳凰、毛蟲の長は麒麟、介蟲の長は神龜、裸蟲の長は聖人なりといひ傳へたり。

(ご-ぢゆう[後住](名) 後の住持。前住の對。

(ご-ぢゆういん[五中陰](名) 【佛】人死にたれど、未だ未來に生ぜずして、即・往・生・苦・惡の五つのもの、定まらざる間の稱。

ごぢゆう-の-タフ[五重塔](名) 屋根を五重につくり重ねたる塔。

(ご-ぢよく[五濁](名) 【佛】五つの汚濁、即ち劫・

見・命・煩惱・衆生の稱。——あくせ[五濁惡世](名) 【佛】五濁ある惡しき世。末世。

こ-ぢよらう[小女郎](名) 小さき女子。(元祿頃の語)。

とち-ら[此方](代) このはう。こち。

(ご-ぢん[後陣](名) 後方に備へたる陣。後殿。

(ご-ぢん[五塵](名) 【佛】五大を生ずる五つのもの、即ち、色・聲・香・味・觸の稱。

(こつ[骨](名) ㊀動物の體質中にある堅き部分の稱にして、全身の支柱となりて體形を成すと同時に、內部の柔軟なる器官を保護するもの、硬骨と軟骨とありて、硬骨は質最も堅牢にして中に多量の石灰質を含み、軟骨は有機質より成り、柔軟にして彈力あり。ほね。㊁火葬して、後に殘りたるほね。㊂〜ぐあひ。てうし。「—が旨い」。「—を覺ゆ」。

(こつ[笏](名) ㊀貴卿のもつ笏。しやく。㊁特に、禪僧などの手にする如意の如きもの。

(こつ[忽](名) 絲の十分一、即ち一の十萬分一。

(ご-づ[牛頭](名) 【佛】地獄の獄卒の一、體は人の如く頭は牛の如きもの。

こつ-あげ[骨揚](名) 火葬に附したる死者の殘骨を拾(ヒロ)ひ採りて、これを桶に納むること。こつひろひ。

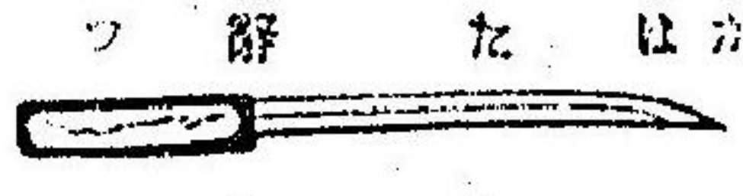
(こつ-えん[忽焉](名、副) ㊀たちまちかはるさまにいふ語。㊁うちすてゝとりあはぬさまにいふ語。

こ-づか[小柄](名) 脇差のさやに插へたる小刀。(把刀)。

(こつ-がい[乞丐](名) こじき。

(こつ-がい[乞骸](名) (「乞骸骨」の義)辭職すること、退隱すること。

(こつ-かう[骨鯁](名) 忠直にしてへつらはざること。


[こづか]

(ご-づ-かう[牛頭香](名) 「ごづせんだん(牛頭栴檀)」に同じ。

(こっ-かく[骨格](名) ㊀高等動物の體格を組織する種々の骨片(人類のは約二百個)、其中軸となれるものを脊柱といひ、上に頭骨を戴き胸部の左右に肋骨あり、肢骨は支軸となりて脊柱に連結す。ほねぐみ。(骨骼)。㊁からだの樣子。

こ-づかひ[小使](名) 小事に使役する者もへ。

こ-づかひ[小遣](名) 「こづかひぜに」の略言。——ぜに[小遣錢](名) 小買物其他雜費に宛つべき金錢。(小買錢)。——せん[小遣錢](名) 前條に同じ。——ちやう[小遣帳](名) 仕拂ひたる小遣錢の條目を記しおく帳簿。——どり[小遣取](名) 生活費の大部を得んとにはあらず、たゞ小遣錢を得んために、或職業に就くこと。

こつ-がら[骨柄](名) ㊀はねぐみ。骨格。㊁からだのやうす。人品。

こづき-えび[小衝蝦](名) 皮を剝(ム)き茹(ユ)でゝ乾したる小さき蝦。

コック[Cook](名) 料理人。料理番。

十こ-づ-く(かきくくけけ)[小衝](他、か四) ㊀わづかなる刺衝を與ふ。㊁押へて搖(ユ)る。㊂少しく又はをり〳〵毆擊を加ふ。㊃細かくつき碎(クダ)く。

こっくり[狐狗狸](名) 神秘の作用をなすといふ一種の裝置、三本の手頃の竹をあつめて其中央を括(クク)り、これを鼎足に擴(ヒロ)げて上に盆をのせ、數人其周圍に坐して、其盆を輕くおさへて祈願などすれば、盆自らうごき出す、其うごき方によりて、物事をトすべしといふ。

〔こっくり(名、副) ㊀色などに丁度頃合なるさまにいふ語。㊁急に動作をはじめ又は狀態の變ずるさまにいふ語。「—死んだ」。——こっくり(名、副)

ゆるぎうごくさまにいふ語。「—居眠る」。——わうじやう(名) 急の死去。

こ-づくり[小作](名) つくりの小さなること。

廿こ-づく-る(らりるるれれ)[木造](他、ら四) 材木を採伐す。

こ-づけ[小付](名) ㊀重荷の上に、更に添へ付くる小荷物。㊁負擔ある上に添ふる負擔。

(こっ-けい[滑稽](名) ㊀口前巧にして、よく諧謔なる言說をなすこと。「—多智」。㊁ざれごと。だうけ。おどけ。㊂【心】不釣合又は不一致なる言行又は狀態が、吾人をして優秀なりとの自覺を生ぜしめて、一種の快感を起さしむること。——か[滑稽家](名) 滑稽の才にとめる人。よくおどけをなす人。——ぐわ[滑稽畫](名) おどけゑ。とばゑ。——せうせつ[滑稽小說](名) 滑稽の快感を生ぜしむるを主としたる小說。——てき[滑稽的](形) 滑稽なるにいふ語。

(こつ-こつ[砣砣](名、副) ㊀つとめつゞくるさまにいふ語。㊁倦からざるさまにいふ語。

〔こつ-とつ(名、副) 固き物の觸れ合ふ音。「—音がする」。

十ごつ-ごつ(名、副) おだやかならざるさまにいふ語。

(こつ-ざ[兀坐](名) ぼんやりして坐すること。

(こっ-さう[骨相](名) こつがら。ほねぐみ。——がく[骨相學＝Phrenology](名) 人の頭蓋骨を相して、其性質又は運命をトする學。

(こっ-し[骨子](名) ㊀ほね。㊁要點。主眼。

(ごつ-し[杌子](名) こしかけだい。こしかけ。

(こつ-じき[乞食](名) ものもらひ。こじき。(非人)。——ばうず[乞食坊主](名) 「こじきばうず」に同じ。

(こっ-しよ[忽諸](名) ㊀にはか。急速。㊁ないがしろ。おろそか。

(こつ-ずゐ[骨髓](名) ㊀骨と髓と。又、骨の中心。

㊁心の底。心中。「うらみ—に徹す」。㊂要點。主眼。「文章の—」。

(こっ-せつ[骨節](名) 骨骼の關節。ほねのつがひ。「ほねぶし」。

(こつ-ぜん[忽然](名、副) ㊀にはか。たちまち。㊁はからず。意外。

(ご-づ-せんだん[牛頭栴檀](名) (南天竺の摩羅邪山隣して牛頭山といふ、多く栴檀を生ず、故に此名ありといふ)熱帶地方より產出する一種の香料、香氣麝香に似る。

こっ-そり(名、副) 靜かなるさま又は他に知らせざるさまにいふ語。

十ごっ-た(名) ㊀物事の入りまじりてあること。こんざつ。㊁もめ。かっとう。——かへ-す(さしすすせせ)(自、さ四) ㊀いと入りまじる。㊁甚しき雜沓を生ず。——に(名) 「ごたに」に同じ。——ばこ(名) がらくたを入るゝ箱。

(こつ-だう[骨堂](名) 火葬して殘りたる骨を納むる堂。

こ-づた-ふ(はひふふへへ)[木傳](自、は四) 木より木に傳ふ。「—鳥」。

(こっ-たん[骨炭](名) 一に獸炭ともいふ、骨の如き動物性の物質を炭化せしめたるもの、液中に存在する物質の臭氣又は色素を吸收するに適當す。

十こっ-ち[此方](代) こちら。このはう。

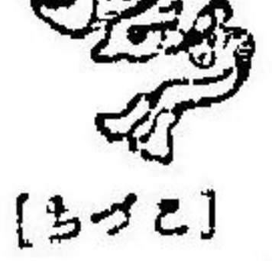
(こっ-ち[忽地](副) たちまち。にはかに。

こ-づち[小槌](名) ㊀小さき槌。㊁うちでのこづち。

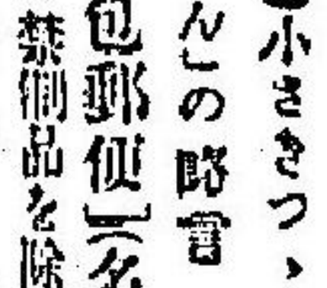
十ごっ-ちや(名) いりまじり。もめ。——まぜ(名) ごたまぜ。

(こっ-ちやう[骨張](名) 最上。第一。「馬鹿の—」。

こ-づつ[小筒](名) 小さき火砲。せうぢゆう。


[こづち]

こつゞみ[小鼓](名) 小さきつゞみ。左肩にのせて打つもの。


[こつゞみ]

こづつみ[小包](名) ❶小さきつゝみ。❷「こづゝみいうびん」の略言。

こづつみいうびん[小包郵便](名) 一種の郵便。書狀及郵便の禁制品を除く外、概して品物に制限なく郵便物を包裝して發送するを得。——ぶつ[小包郵便物](名) 小包郵便によりて發送する物品。其容積は長さ・厚さ及幅は曲尺二尺以内を限とし、其厚さ及幅の五寸以内のものは長さ三尺を限とし、重量は一貫五百匁を限とし、價格表記の金額は千圓を限とす、其目の多少と里數の遠近によりて料金を異にす。

亠こってり[濃](名、副) 濃厚なるさまにいふ語。「——した汁」。——づくり[濃粧](名) 紅粉をこってりつけて粧(ヨソホ)ふこと。あつげしやう。

(ごづてんわう[牛頭天王](名) 【佛】祇園精舍の主護神。

(こつとう[兀頭](名) はげあたま。

(こっとう[骨董](名) 種々雜多の道具。ごたくしたる古道具。(古董)。——しやう[骨董商](名) 骨董品を賣る商人。だうぐや。——てん[骨董店](名) 骨董品を賣る店。だうぐや。(骨董舖)。——はん[骨董飯](名) ごもくめし。——ほ[骨董舖](名) 骨董店に同じ。

(こつとつ[榾柮](名) ほだ。そだ。たきぎ。

(こつにく[骨肉](名) ❶骨と肉と。❷血統を同じうせる親子兄弟。

廿こづの[小角](名) 角の先の中にある小さき骨。

亠こっぱ[木端](名) ❶斧の類にて切りすてたる木の屑。こけら。(木片)。❷取るに足らぬもの。「——火」「——名」。

(こっぱい[骨牌](名) 「カルタ」。

亠こっぱい(名) こざかしきこと。こなまいき。「——な事をいふな」(東京の方言)。

(こつぱふ[骨法](名) ❶ほねぐみ。❷禮儀作法のすぢみち。❸藝術の主眼なる點。

(こつばん[骨盤](名) 【生】下肢を支(サヽ)ふる腰部の骨と脊柱の下部と癒合して成りたる骨。腹部の下底にあり、臟器を盛る。

こつひろひ[骨拾](名) 「こつあげ」(骨揚)に同じ。

こつぶ[小粒](名) ❶粒の小さきもの。「——の山椒」。❷昔時の貨幣の二朱又は一朱の稱。

コップ[鉢](名) (オランダ語Kop) 玻璃製の盃又は水飲などの稱。

こつぼ[子壺](名) 子宮の異稱。

こづま[小褄](名) 少しく褄をからぐる場合などにいふ褄の稱。「——をからぐ」。

(こつまく[骨膜](名) 骨をつゝみたる膜。

廿こづみ[木積](名) 木屑の寄り集まること。「堀江より朝しほみちによる——」。

こづむ[偏](自、ま四) かたよる。よる。

ごづめ[後詰](名) 後に控(ヒカ)へ居る軍勢。又、あとがりとなる軍隊。(後陣)。

(ごづめづ[牛頭馬頭](名) 【佛】地獄にゐる獄卒、牛頭・馬頭の各條を見よ。

亠こづら[小面](名) 面をいやしめていふ語。「——がにくい」。

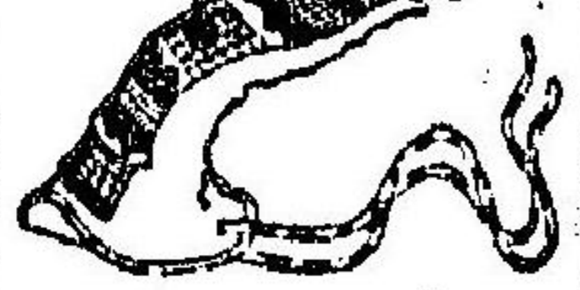
亠こつり(名、副) 堅きもの、相觸るゝさまにいふ語。

(こつをけ[骨桶](名) 死人の骨を入るゝ桶。

(こつん(名) 固き物を打ち當てたるさまにいふ語。

こて[鏝](名) ❶泥又は漆喰(シックヒ)などを塗る用具。❷鐵にて扁(ヒラ)く熨し柄を附けたるもの。(烙鐵)。❸「やきごて」の略言。

こて[籠手](名) ❶弓を射るとき、左の臂(ヒヂ)にかくるもの。ゆごて。❷鎧(ヨロヒ)の附屬具、兩腕に掛くる甲。(臂鎧、射)。❸擊劍などにて、手指より肘(ヒヂ)のあたりにまで穿(ウガ)ちはむる具、布に綿をつゝみて手の形につくる。❹擊劍などにて、手首と肘(ヒヂ)との間を打つこと。


[こて(二)]

ごて[後手](名) ❶敵より攻め掛けられ、此方は防ぐ方となること。敵のために先を制せらるゝこと。先手の對。❷ごづめ。後陣。

こてい[小體](名) 生活などの質素なるさま。

(こてい[戸庭](名) 家の出入口と庭と。轉じて、家の内。

(こてい[古體](名) 「こたい」に同じ。

(こてい[固定](名) 一所にさだまりてあること。うつらざること。うごかざること。——くわっしや[固定滑車](名) 滑車の條を見よ。——しほん[固定資本](名) 【經】資本の區別の一、漸次消耗すれど、一回にして消費せられず、幾回も同一の生産に使用せらるゝもの、稱、即ち、土地・家屋・器具・機械・牛馬等の類。流動資本の對。

(ごてい[五帝](名) 支那上代の五人の聖君、即ち少昊・顓頊・帝嚳・堯・舜の稱なりといひ、又、伏羲・神農・黄帝・堯・舜の稱ともいふ。

(ごてい[五鼎](名) ❶五つのかなへ。❷牛・羊・豕・魚・麋の五つの食膳。轉じて、ぜいたくなる食事。——にくらはずばごていににられん[不食五鼎烹五鼎] 功名を成し榮華を享(ウ)くる能はずば、氣儘自由の事を行ひ、罪を得て死なんとの意にいふ。

亠ごてい[御亭](名) 「ごていしゆ」の略言。——しゆ[御亭主](名) 家の主又は他人の夫の稱。——

こていた[鏝板](名) 壁(カベ)などに鏝をもて泥などを塗(ヌ)り付くるときに、其塗るものを盛る小さき板。

(ごてう[語調](名) ことばの調子。

(ごでう[五條](名) ❶五とほりの箇條。「——の御誓文」。❷五布(ノ)にて製したる袈裟。

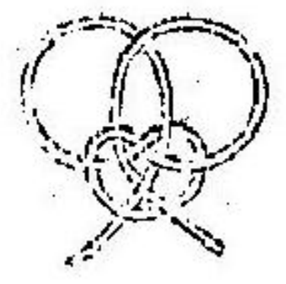
(ごてうし[五調子](名) 音樂にて五つの調子、即ち、宮・商・角・徵・羽の稱、更にこれを其高低によりて十二に細別す。十二律の條を見よ。

廿こてうはい[小朝拜](名) 古昔、清涼殿の東庭にて、元日に殿上人の拜賀したる儀式。朝拜の無き年に行はれたり。朝拜の對。

亠こてこて(名、副) こってり。又、澤山。

亠ごてつく(自、か四) ごたつく。

(こてふ[胡蝶](名) ❶【動】鱗翅類に屬する昆蟲、觸角は棍棒狀にして、翅は靜く物に止まるときはこれを上方に合して垂直となす、種類甚だ多ければ、多くは美麗なり。❷雅樂の名、背に羽を負(オ)ひて蝶の形をなし、額(ヒタヒ)に山吹の造花の飾をつけたる童子の舞ふもの。——のゆめ[胡蝶夢](名) (莊子が夢に胡蝶となりたりといふ寓言に出づ)夢又ははかなき物事にいふ語。又、物と我との差別なき境涯にいふ語。——むすび[胡蝶結](名) 紐などの結方、胡蝶の翅を擴(ヒロ)げたるさまに結ぶもの。


[こてふむすび]

(こてん[古典](名) ❶古昔の儀式又は法式。むかしののり。❷古昔の事を記したる書籍。古書。

(こてん[古點](名) 昔時の訓點。「——の論語」。

(ごてん[語典](名) 語をあつめて、これが解釋をなしたるもの。辭書。

(ごてん[午天](名) ひるどき。

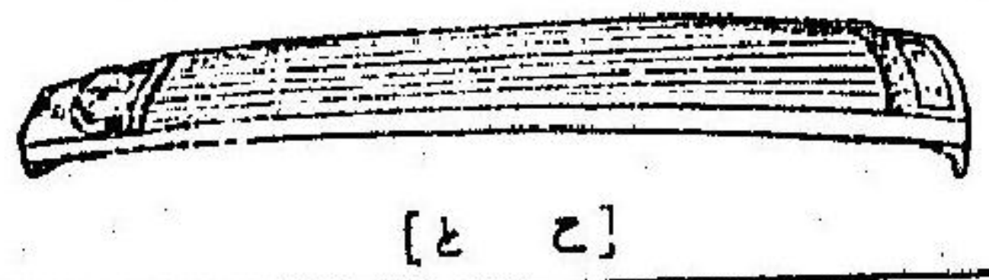
(ごてん[御殿](名) 貴人の住む家の敬稱。——い[御殿醫](名) 昔時、大名などの御殿に勤め醫藥の事を掌りし醫者。——ぢよちゆう[御殿女中](名) 宮中又は大名の奥向に奉仕せる女中。

(ごでん[誤傳](名) あやまりのいひつたへ。まちがひのとりざた。

こと[事](名) ❶ありさま。わざ。❷人生に現出する種々の狀態。物の對。❸わけ。ゆゑ。❹つとめ。ようむ。❺異變。騷亂。「四方——なし」。——ともせず 其物事を心にかけず眼中におかず。——

こと[言](名) ことば。(辭、語、詞)。——をはむ[食言] ちかひにそむく。いひし事をたがふ。

こと[琴](名) 一種の樂器、長き桐の板を張り合はせて中を空にし、上面に絃を張り、彈じて鳴らすもの。種類多し。


[こと]

こと[異](名) 變はりてあること。常ならざること。ちがふこと。「——なる御氣色」。

(こと[糊塗](名) はっきりと處置せざること。又、ごまかしておくこと。

(こと[古渡](名) こわたり。

こと——[異](接頭) 或語に冠して、ことなる意を表する語。「——國」。

——ごと[如](接尾) ごとく。やう。

亠——ごと[共](接尾) それも共に。それぐるみ。「皮——かじる」。

——ごと[毎](接尾) ごとに。つねに。

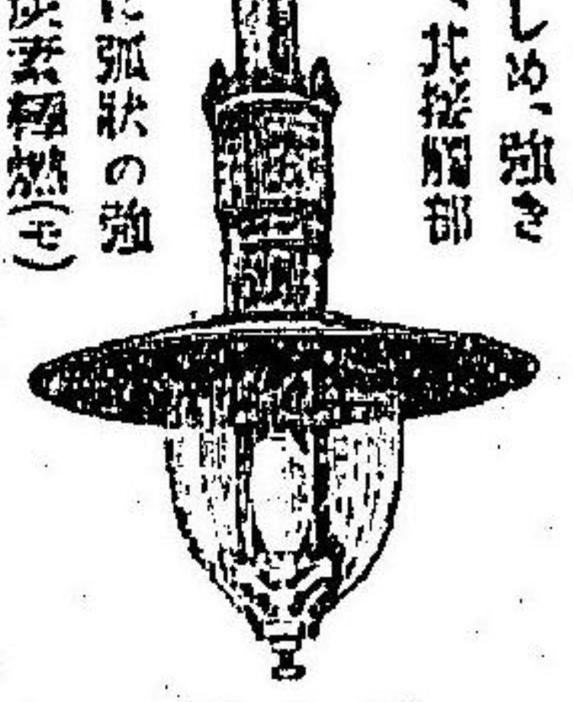
廿ことあげ[言擧](名) 特別に取り立てゝいふこと。

こといと[琴絲](名) 琴に張りて彈ずる絃、三味線の絃の如く生絲にてつくる。

廿こといみ[言忌](名) 忌みていはざること。

ことう[孤燈](名) 暗中にたゞ一つ見ゆる燈火。

(ことう[弧燈=Arc lamp](名) 電燈の一、二本の炭素棒を對向せしめたる裝置のものにして、初め其炭素棒を相接觸せしめ、強き電流を通ずるときは、其接觸部紅熱して光を放つ、然るとき其兩端を少しく離せば、其中間に弧狀の強き光を生ず、されど炭素燃燒(モ)えて兩端の間隔漸次離開するを以て、自動的に常に一定の距離を保たしむる裝置を附す。(弧光燈)。


[ことう]

(こどう[鼓動](名) 心臟の血液循環によりて、胸にこたふるひゞき。「胸の——」。

こどう[小胴](名) 「つゞみ」の異稱。

(こどう[古銅](名) 古代の銅。「——の花瓶」。

(ごとう[御燈](名) みあかし。

(ごとう[梧桐](名) 【植】「あをぎり」に同じ。

廿ことうけ[言承](名) こたへ。へんじ。

(ごとうしん[五等親](名) ❶親子より數へ、親疎に由りて分かちたる五つの階級、一等親は、父母・養父母・子・養子をいひ、二等親は、祖父・祖母・嫡母・繼母・伯父・叔父・姑・兄・弟・姉・妹・夫の父・夫の母・妻・妾・甥・姪・孫をいひ、三等親は、曾祖父・曾祖母・伯婦・叔婦・夫の甥・從父兄弟姉妹・異父兄弟姉妹・夫の祖父・夫の祖母・夫の伯叔姑・繼父・甥の妻をいひ、四等親は、高祖父・高祖母・從祖祖父姑(祖父の兄弟)・從祖伯叔父姑(祖父の兄弟の子)・夫の兄弟姉妹・兄弟の妻妾・再從兄弟姉妹・外祖父・外祖母・舅(母の兄弟)・姨(母の姉妹)・兄弟姉妹の孫・從父兄弟の子・外甥・外姪・曾孫・孫婦をいひ、五等親は、妻妾の父母・姑子(父の

姉妹の子（母の兄弟姉妹の子）・玄孫（曾孫の子）・外孫・婿・女の夫をいふ。㊁前條の第五等にあたるもの。

ごとう-ぼり［後藤彫］（名）彫物の一派、美濃國の人後藤祐乘より始まる。祐乘は足利義政に仕へ、刀劍の金物の作に有名なりし人なり。

ごとう-もの［後藤物］（名）後藤彫の彫刻物。

‡こと-おほ ォ［事多］（名）用事多きこと。

‡こと-かた［異方］（名）變はりたる所。別の所。

‡こと-がま・し しくしき しけれ（形、二）ことばおほし。

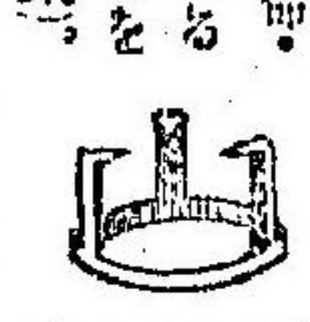
こと-がら［事柄］（名）事のすぢみち。事のありさま。（事態、事由、事故）。

こと-き・る れれるるれれよ［事切］（自、ら下二）㊀命絶ゆ。死ぬ。㊁おちつく。定まる。落着す。

こと-ぎれ［事切］（名）㊀事のやむこと。おさまり。㊁命終はること。死ぬること。

（こ-どく）［孤獨］（名）㊀みなしごとひとりものと。又、ひとりもの。「ゆふよりは子とては有りもせぬ—の婆」。（煢獨）。㊁たすけなきこと。つれなきこと。ひとり。

（ご-とく）［五德］（名）㊀兵家の重んずる五つの德、即ち、智・信・仁・勇・嚴の稱。㊁【佛】比丘の重んずる五つの德、即ち、怖魔・乞士・淨戒・淨命・破惡の稱。㊂三脚又は四脚を付けたる鐵の輪、火の上に置き、釜・鐵瓶などを掛くるもの。かなわ。（火架三脚、鐵架）。



［ごとく（三）］

‡こと-ぐさ［言種］（名）ことのはぐさ。いひぐさ。「朝夕の—に」。

‡こと-くに［異國］（名）㊀ちがひたる國。別の國。㊁外國。外邦。

‡こと-ごころ［異心］（名）ふたごゝろ。あだごゝろ。

〔ごと-ごと〕（名、副）物と物とを打ち合はすが如き

響。「—音がする」。

‡こと-ごと［異事］（名）ほかの事柄。別事。「—に目もうつらず」。

‡こと-ごと［異異］（名、副）べつべつ。まちまち。

〔こと-ごと〕（名、副）「ことごと」に同じ。

こと-ごと［事每］（副）事あるたびに。

こと-ごとく［悉］（副）㊀あるかぎり。のこらず。みな。悉皆。（咸）。㊁くはしく。つまびらかに。

こと-ごと・し しくしき しけれ［事事］（形、二）さも大事らしく、仰山（ギヤウサン）らし。たいさうらし。

こと-この・み［事好］（名）ものずき。

こと-こまか［事細］（名）委（クハ）しきこと、詳かなること。仔細。

こと-こまやか［事細］（名）前條に同じ。

‡こと-こ・む めむむるむれめよ［言籠］（自、ま下二）くちこもる。くごもる。

ご-どころ［碁所］（名）㊀德川時代に、代々圍碁の技藝を以て仕へし家。㊁集まりて圍碁する所。

‡こと-さへ・ぐ エグサ ［言喧］（枕）（「ことばさへぐ」の義）「カラ」「クダラ」など外國の名に冠らする詞。其國語の聞き分け難きよりいふ。

こと-さま［異樣］（名）違ひたるさま。ことなるやうす。

‡こと-さまし［事醒］（名）興の醒むること。

こと-さら［殊更］（副）㊀故意に。心ありて、わざと。㊁とりわけ。別して。—に［殊更］（副）前條に同じ。‡—・ぶ ぶるびぶれびよ［殊更］（自、は上二）殊更にするやうに見ゆ。

こと-し［琴師］（名）琴をつくり又は直す人。

こと-し［今年］（名）此年。こんねん。（今歲、今茲）。—おひ イオ［今年生］（名）今年おひ出でたるもの。—ごめ［今年米］（名）今年とりいれたる米。しんまい。—だけ［今年竹］（名）今

年芽を出して育ちたる竹。—でき［今年出來］（名）今年出來たるもの。又、其もの。

‡こと-じ［小刀自］（名）古昔、酒造司にありし酒甕の一。

ご・とし くしき［如］（助動）㊀物事を比べて同一なるさまの意を表はす語。「花の—」（若）。㊁取りわけて擧げいふ意を表はす語。「其文のごときはまた少しく貶す」。

こと-しり［事知］（名）よく物事を知りたること、又、其人。

こと-すくな［言少］（名）言葉すくなきこと。

こと-ずくな［事少］（名）用事すくなきこと。

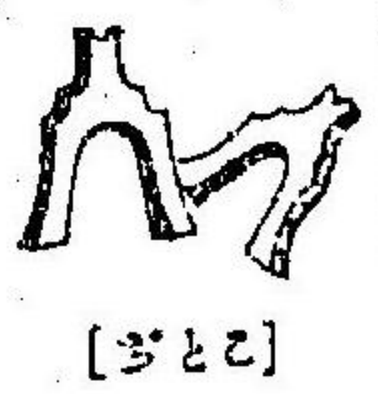
‡こと-そ・ぐ がぎぐぐげげ［事殺］（他、か四）事をはぶく。

‡こと-だ・つ たちつつてて［事立］（自、た四）常と變れる事をなす。「正月なれば—」。

‡こと-だ・つ てつつるつれてよ［事立］（自、た下二）前條に同じ。

こと-だま［言靈］（名）古來、我國の言語を尊びていふ語、皇國の言語に靈あり、雅正なる音聲を連ねて靈妙なる運用をなすとの意なり。—のさきはふくに サキハ-ホ［言靈幸國］（名）我國の異稱。

こと-ぢ［柱］（名）琴の絃の下に挿（サ）してこれを支（サヽ）ふるに用ふるもの。琴柱。（徽）。‡—ぼり［柱棒］（名）「さすまた」の異稱。—にかはして ことを す［膠柱鼓瑟］活動の出來ざるやうにして、用をなさしめんとすると、即ち、物事を活用するを知らざるにたとへいふ。



［ことぢ］

ことづ・く けけくくるくれけよ［託］（自、か下二）㊀かこつく。ことよす。㊁人に賴みていひやる。傳言す。

〔ごと-つ・く〕かきくくけけ（自、か四）ごとごとす。

こと-づけ［託］（名）㊀かこつけ。㊁ことばのと

りつぎ。傳言。（寄語、囑言）。

こと-づて［言傳］（名）㊀人のいふ語によりて傳へ聞くこと。傳聞。傳說。㊁ことばのとりつぎ。ことづけ。でんごん。傳言。寄語。

‡こと-づま［琴爪］（名）「ことづめ」に同じ。

こと-づめ［琴爪］（名）琴を彈（ヒ）くときに、指のさきに嵌（ハ）むる具、象牙などをもて爪の形に造りたるもの。（義甲、搊甲）。

‡こと-と［事］（副）其事をとりたてゝ。ことさらに。もっぱら。

‡こと-どころ［異所］（名）ほかの所。よそ。

こと-とひ イ ト［言問］（名）㊀物をいひかくること。はなし。かたらひ。㊁尋ね問ふこと。たづね。とひ。

こと-と・ふ［言問］（自、は四）㊀ものをいふ。はなす。㊁たづぬ。とふ。

‡こと-ども・り［言吃］（名）言語を滑（ナメ）らかに發し得ざること。又、其人。どもり。

こと-な・し くしきけれ［事無］（形、二）㊀容易なり。たやすし。㊁つゝがなし。無事なり。㊂異變なし。おだやかなり。

‡こと-なしぐさ［言無草］（名）【植】「しのぶ」の一名。

‡こと-なし・ぶ ぶるびぶれびよ［事無］（自、は上二）事の無きさまをす。

こと-な・り らりりるれれ［異］（自、ら變）㊀同一ならず。おなじからず。ちがふ。㊁よそなり。ほかなり。㊂すぐれたり。ぬきいでたり。㊃くすし。めづらし。㊄あやし。うたがはし。

‡こと-ならば（接）成るたけならば。なるべくは。

こと-に［殊］（副）㊀とりわけて。別段に。別して。㊁其上に。なほ。

—ごとに［每］（接尾）或語に添へて、「いづれも」「いつも」「たびに」「一つ一つに」等の意を表はす語。

「春—咲く花」「人に逢ふ—いふ」。

こと-に・す せしすするすれせよ［異］（他、さ變）㊀區別す。わかつ。㊁たがふ。ちがふ。㊂特別のとりあつかひをなす。ことなる待遇をなす。

〔こと-に-よる-と〕［依事］（副）㊀ともすれば。やゝもすれば。㊁あるひは。おそらくは。

‡こ-どねり［小舍人］（名）古昔、藏人所の所屬にして中少將などの具せし舍人の稱。

こと-の-は［言葉］（名）㊀ことば。㊁詩又は歌。‡—かぜ［言葉風］（名）歌の風體。‡—ぐさ［言葉草］（名）いふべきたね。いひぐさ。ことぐさ。言葉種。

こ-とのばら［小殿原］（名）祝儀（シウギ）に用ふるごまめの稱。

こと-の-ほか［殊外］（副）思ひのほか。案外。意外。

こと-の-を［琴緒］（名）琴に張る絃。いと。

‡こと-は リ（接）同じくは。なるべくは。ことならば。

こと-ば［言葉］（名）㊀「げんご」（言語）に同じ。㊁文字を以て言語を記したるもの。（詞、辭）。㊂いひぶり。いひやう。くちまへ。—をつかふ　やくそくす。ちぎる。

ことば-あらそひ イアラ ソ［言葉爭］（名）いひあひ。こうろん。

ことば-がき［詞書］（名）㊀文詞を書くこと。又、書きたる文辭。「繪卷物の—」。㊁歌の小序。はしがき。

ことば-がたき［言葉敵］（名）はなしあひて。はなしとぎ。

ことば-かへし エシ カ［言葉返］（名）くちへんたふ。

‡こと-ばかり［事計］（名）事のはからひ。（商議）。

ことば-じち［言葉質］（名）人の言葉を證據に取ること。又、證據に取りたる言葉。「—を取る」。（言質）。

こと-はじめ［事始］（名）㊀昔時、正月の儀式終りて、二月八日に其年にする事をはじめしこと。㊁すべ

て事の着手にいふ語。

ことば-じり［言葉尻］（名）㊀ことばの末の方。（語尾）。㊁他人のいひそこなひの節。「—を捕る」。

ことば-ずくな［言葉少］（名）多くおしやべらざること、多言せざること。

ことば-たがへ ガエ［言葉違］（名）㊀いさかひ。いひあらそひ。㊁言葉の前後相矛盾（ムジユン）せること。又、約束したる言にたがふこと。

ことば-たたかひ カイ［言葉戰］（名）こうろん。いさかひ。

ことば-づかひ カイ［言葉遣］（名）言葉をつかふさま。又、言葉をつかふ方法。（言法）。

ことば-づめ［言葉詰］（名）りくつづめ。

ことば-とがめ［言葉咎］（名）ことばあやまりをとりて咎立（トガメダテ）をなすこと。（言葉責）。

‡こと-はな［異花］（名）ほかの花。仇し花。

ことば-の-いづみ［言葉泉］（名）ことばの數無盡なることを、泉の限りなく湧（ワ）くにたとへいふ語。

ことば-の-うみ［言葉海］（名）ことばの廣く多きことを、海の廣く海水の多きにたとへいふ語。

ことば-の-その［言葉園］（名）ことばの數多きことを、園の草木の多きにたとへいふ語。

ことば-の-ちり［言葉塵］（名）ことばの數多きことを、塵の數多きにたとへいふ語。

ことば-の-はな［言葉花］（名）㊀和歌の美稱。㊁文句の美稱。

ことば-の-はやし［言葉林］（名）ことばの數多きことを、林中の草木の多きにたとへいふ語。

‡こと-はら［異腹］（名）はらがはり。

‡こと-はらから［異兄弟］（名）はらがはり又はたねがはりの兄弟。

こと-ひ イ コト［特牛］（名）「ことひうし」の略言。—

うし[特牛](名) 強健なる牡牛。頭の大きなる牛。——うし‐の‐[特牛](枕)「みやけ」に冠らする詞。

†ことひき‐ぐさ[琴彈草](名)（松風を琴の音にたとへし故事に出づ）【植】松の異稱。

†こと‐びと[異人](名) ほかのひと。他人。餘人。

ことぶき[壽](名) ❶ことぶくこと。ことほぎ。いはひ。よろこび。❷命の長きこと。ちやうめい（長壽）。❸よはひ。とし。いのち。——をちぢむ 死ぬるにいふ。又、殺すにいふ。

ことぶ‐く[壽く](他,か四)「ことほぐ」に同じ。

こと‐ぶれ[事觸](名) ❶「かしまのことぶれ」（鹿島事觸）に同じ。❷すべて事を觸れ行くこと。又、其人。

（こと‐べい[五斗米](名)（陶淵明の故事に出づ）わづかの食祿又は俸給。

†こと‐ほがひ[言祝](名)「ことほぎ」の延言。

こと‐ほぎ[言祝](名) ことほぐこと。いはひ。よろこび。「初春の御—」（壽）。

こと‐ほ‐ぐ[言祝ぐ](他,か四) 言葉にて祝ふ。賀す。ことぶく。いはふ（壽）。

†こと‐み[事見](名) ものみ。いうらん。

†こと‐む‐く[言向く](他,か下二) ❶我方へ向かしむ。從はしむ。❷討ち平ぐ。たひらぐ。

†こと‐むすび[言結](名) くちやくそく。

こ‐ども[子供](名) ❶人々。人達。❷わらべ。わらんべ。❸遊廓などにて、藝娼妓などの稱。——だまし[子供騙](名) ❶子供をすかすこと。子供をあざむくこと。❷手段又は處置の甚だ淺薄なるをあざけりていふ語。

こと‐も‐おろか[言愚](副) いふまでもなく。

†こと‐もの[異物](名) 異なる物。別物。

†こと‐やう[異樣](名) 變はりたる體。ことざま。

こと‐ゆ‐く[事行く](自,か四) 事とゝのひ行く。埒(らち)があく。折合付く。

†こと‐よさし[事寄さし](名) ことよさすこと。

†こと‐よさ‐す[事寄さす](他,さ四) 委任す。命令す。まかす。いひつく。（任事。命令）。

こと‐よ‐す[言寄す](自,さ下二) ❶かこつく。（事寄。托言）。❷いひよる。

こと‐よせ[言寄](名) ことよすること。——づま[言寄妻](名) おもひを掛けていひ寄る婦人。

こと‐よ‐る[言寄る](自,ら四) いひよる。

こ‐とり[小鳥](名) 形の小さき鳥の總稱。すゞめ、ひばり等の類。

†こと‐り[部領](名)（事執の義）❶一部局の長。一群のかしら。「くらつの—」❷古昔、春宮の舍人の御門の局を藏むるもの。もくてう。木鳥。——づかひ[部領使](名) 上古、防人(さきもり)の役を指揮するもの。又は七月相撲を行はるゝとき、國々の力士を召すがために、派遣せられし使者。夕がほの花をかざしたりといふ。

ことり‐とまらず[小鳥不棲](名)【植】(い)ありどほしの一名。(ろ)たらのきの一名。

こ‐とり‐ばば[子取婆](名) とりあげばゞ（產婆）。

（こと‐わざ[事業](名) じげふ。業わざ。

（こと‐わざ[異業](名) ほかのわざ。

こと‐わざ[諺](名) 古來のいひならはし。世間にいひ傳ふることば。通俗の訓戒。

こと‐わり[理](名) ❶すぢ。みち。道理。「おのづからなる—を見よ」❷わけ。よし。理由。「—いうて下さんせ」。

こと‐わり[斷](名) ❶かねて告げ置くこと。豫めいひ置くこと。❷承知せぬこと。謝絶すること。❸わびをいふこと。あやまること。

こと‐わ‐る[理る](他,ら四) 是非を判斷す。事理を辨別す。わかつ。（判。辨別）。

こと‐わ‐る[斷る](他,ら四) ❶かねて告げ置く。豫め知らす。❷承知せず。謝絶す。（辭退。固辭）。❸あやまる。わぶ。

こと‐をさめ[事納](名) ❶十二月八日に、其年の雜事を終ふること。❷物事の末をさめ。

こ‐な[小名](名) 村內又は町內の字(あざ)。

こな[粉](名)「こ」に同じ。「—屋」。

こな[此方](代) あなた。（元祿頃の語）。

†こ‐な[子奈](名)（子等の古言）男子の女子を親みて呼びし語。

（ご‐なう[御惱](名) 病氣の敬稱。おなやみ。——け[御惱氣](名) 前條に同じ。

こな‐がき[餘](名) 一種の料理。殊に米の粉を混ぜて煮たるもの。（糝）。

（こ‐なから[二合半](名)（小半の義）❶二合五勺。❷こなからざけの略言。——ざけ[二合半酒](名) ❶二合五勺の酒。❷些少なる酒。

こ‐なぎ[小水葱](名) 水葱の小さきもの。

（こな‐ごな[粉粉](名) 極めて細かく碎(くだ)けたるさまにいふ語。「—になる」

こな‐とみぢん[粉小微塵](名) こなごな。

（こなさん[此方樣](代) 男より女を若しくは女より男を親しみて呼ぶ語。おまへさん。

こ‐なし[小梨](名)【植】こりんごの一名。

こなし(名) ❶細かく碎(くだ)くこと。❷消化せしむること。❸ふりまはし。あつかひ。

こな‐す[熟す](他,さ四) ❶細かに碎く。粉にす。末になし」❶食物を消化す。❷自由に運用す。「役ひ—」

†こ‐なすび[小茄子](名)【植】いぬほほづきの古名。

†こ‐なた[水田](名) よく開墾したる水の深き田。——づくる[水田作る](自,ら四) 二年間開墾して漸く良田となす。

こなた[此方](代) ❶このかたの約言。❷身に最も近きものにいふ代名詞。そなた又はかなたの對。❸われ。おのれ。——かなた[此方彼方](代) ❶あちらこちら。方々。❷われもかれも。——ざま[此方樣](名) 此方のむき。こちらむき。——さま[此方樣](代) 他人の家に赴き、其家を指して尊びいふ語。

こ‐なつめ[小棗](名)【植】なつめの一種。果實は圓くして味酸く、秋の頃、熟して赤くなる。（酸棗）。

（こなひだ[此間](名)「このあひだ」の略言。——ぢゆう[此間中](名) 此間のうち。

†こ‐なみ[前妻](名) 以前の妻。せんさい。うはなりの對。

こな‐みぢん[粉微塵](名) 極めて細かく碎(くだ)けたること。こなごな。

こな‐や[粉屋](名) 米麥等の粉を賣る人又は店。

こ‐なら[小楢](名)【植】ならの一名。

こな‐る[熟る](自,ら下二) ❶碎(くだ)けて粉になる。細かになる。❷食物消化す。❸運用自在なり。

こなれ(名) こなること。——る(自)「こなる」の訛。

（ご‐なん[五男](名) ❶五人の男子。❷五人目の男子。

（ご‐なん[御難](名) 災難の敬稱。「松蕈谷の—」——のもち[御難餅](名) 法華宗にて、九月十二日に開祖日蓮上人の像に供する餅。日蓮上人が龍口の刑場にひかるゝ途中、老婆が餅を供せし故事に出づといふ。

‡コニオル[王妃](名)（百濟の語）三韓の王后。

‡コニキシ[國王](名)（百濟の語）三韓の王。

†こにし[胡荽](名)【植】「コエンドロ」の古名。

‡コニセシ[王子](名)（百濟の語）三韓の太子。

こ‐にだ[小荷駄](名) 馬に付くる荷物（輜重）。——うま[小荷駄馬](名) 荷物をのせ行く馬。

（ご‐にち[後日](名) 後の日。

こ‐には[小庭](名) ❶小さき庭。❷古昔、內裏清涼殿の殿上の南庭の稱。

こ‐にもつ[小荷物](名) 少量の荷物。手廻の荷物。

こにやく[蒟蒻](名)【植】「こんにやく」の古名。

ご‐にん‐ぐみ[五人組](名) ❶五人より成りたる組。❷古昔、行政上の便宜より、五戶を一組とし、これに特定の責務をおはしめしもの。一稱。

こ‐ぬか[小糠](名) 米のかす。ぬか。——あめ[小糠雨](名) 細かき雨。ぬかあめ。——さんがふ[小糠三合](名)（小糠三合もつならば入聟すなとの俗諺に出づ）聟養子の身分にいふ語。「—の身」

こ‐ぬけ[小脫](名) 芝居の鬘(かつら)の一種。

こ‐ぬすびと[小盜人](名) ちよっとした物をぬすむ盜賊。こそこそ泥棒。（窃盜。草賊。小賊）。

こ‐ぬすみ[小盜](名) 少し許(ばか)りのものを盜むこと。

‡こ‐ぬれ[木末](名) 木のうれ。こずゑ。

こね‐かへ‐す[捏返す](他,さ四) こねてうらがへす。又、勢よくこねる。

こ‐ねこ[小猫](名) 猫の子。又、小さき猫。

こね‐どり[捏取](名) 餅を搗(つ)くとき、杵を持つ人の傍にありて、餅を捏(こ)ね返すこと。又、其人。

こ‐ねまき[小寢卷](名) 小さきねまき。即ち、かいまきの類。

こねり‐がき[木練柿](名) 枝つきの儘熟したる「柿の實」（方柿）。

（こ‐ねる[捏ねる](他,な下二) ❶米麥の粉などに、水を混じてまぜかへす。❷冷評す。又、難題をいひかく。

（ご‐ねる(自,な下二) 死ぬ。「親爺どのが—」

（ご‐ねん[頑念](名) 役者をかもふこと。頑固。

（ご‐ねん[御念](名) 他人の心遣の敬稱。おこゝろづかひ。ごねんばい。

この[此](代)（「こ」といふ代名詞に弖爾波の「の」の結はりたる語）身に最も近き物事を指し示す代名詞。その又はかの等の對。（是。斯）。——あひだ[此間](名) ❶ちかごろ。このごろ。❷さきだつて。さきごろ。——うへ‐なし[此上無](形,一) これにまさる物事なし。もつともよし。

‡この‐かうべ[兄部](名) 力役をする者の長。

この‐かた[以來](名) 其時より後。それ以後。

この‐かた[此方](代) こなた。

‡この‐かみ[兄](名)（子の上の義）❶第一の兄又姉にも通じていふ。長子。❷自分より年長じたる人。としうへ。❸氏(うぢ)の上。

この‐かみ[小腹](名) ほそはら。こがみ。ほかみ。

この‐きみ[此君](名)（晉の王子猷が竹を愛して「何可一日無此君耶」といひし言に出づ）【植】竹の異稱。

この‐くれ[此暮](名) 今年の歲末。せつき。

‡この‐くれ[木暮](名) 木の茂(しげ)りて下の暗きこと。又、其處。——やみ[木暮闇](枕)「卯月」に冠らする詞。

‡この‐こ[子之子](名) 孫の一名。

この‐ごろ[此頃](名) ちかごろ。このほど。（頃日）。

こ-の-くれ[木下](名) 木の下。樹下。――かげ[木下影](名) こかげ。――やみ[木下闇](名) 木葉繁くして其下の暗きこと。又、其處。

このしろ[鰶](名)【動】喉鰾類中このしろ科に屬する魚、體は側扁にして腹底は鋸狀をなす、背部は蒼青色にして蒼黑色の點數行に並列す、腹部は稍や白色なり、體長大いなるは一尺許あり、我國東海より西海に至る迄の內灣に多し、其當歲なるをこはだといふ。(鰶)。

†この-しろ[利息](名) 賃金のりそく。

〔この-ぢゆう[此中](名) このあひだぢゆう。

このてがしは[兒手柏](名)【植】松杉科に屬する木、葉は鱗片狀にして恰も掌(タナゴコロ)を立てたるが如く、對生して常綠なり、花は單性にして雌雄同株なり、木材は種々の用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる。(側柏)。

こ-の-ね[木根](名) 木の根。

こ-の-は[木葉](名) ㊀木の葉。㊁おちば。(落葉)。――いし[木葉石](名) 木の葉の形の面に印したる石。又、木の葉の化石。――かき[木葉搔](名)「こまざらひ」の一名。(竹把)。――がくれ[木葉隱](名) 木の葉の陰にかくるゝこと。木の葉の下にうづまること。――がへり[木葉返](名)【動】「えつさい」の小さきもの、雛。――がれひ[木葉鰈](名) ㊀【動】軟鰭類中ひらめ科に屬する魚、體色淵灰にして、全身に褐色なる微細の斑點散布せり。㊁二寸位の小さきひらめを重ねて乾したるもの。さゝのはがれひ。(笹葉鰈)。――ごろも[木葉衣](名) 木の葉を編みて造りたる衣服、仙人などの着せるものといふ。――ざる[木葉猿](名) 陋(イヤ)しき猿。――しぐれ[木葉時雨](名) 木の葉の飛び散るを、時雨(シグレ)にたとへいふ語。――せんべい[木葉煎餅](名) 落葉の形に擬したる煎餅。――づく[木葉角鴟](名)【動】みみづくの一種、晝間は樹林に隱れ、夜間出て、食を求む、眼圓くして大いなり。(鴟鵂)。――てんぐ[木葉天狗](名) 小さき天狗。――とりづき[木葉取月](名) 陰曆四月の異稱。――むしや[木葉武者](名) 弱き武者。

こ-の-はう(ホウ)[此方](代) 下賤に對して用ふる自稱の代名詞。

こ-の-はな[木花](名) ㊀梅の花。「なにはづにさくや―ふゆごもり」。㊁櫻の花。

この-ほど[此程](名) ちかごろ。このごろ。(近時)。

こ-の-ま[木間](名) 木のあひだ。樹間。「―の月」。

このま・し(しく、しき、しけれ)[好](形、二) 好むべし。すきさなり。――げ[好氣](名) すきらしく見ゆること。

この-まゝ[此儘](名) 現在のまゝ。

このまろ-どの[木丸殿](名)「きのまろどの」に同じ。

こ-の-み[木實](名) 樹木に生(ナ)る果實。きのみ。くだもの。(果實、樹果)。

このみ[好](名) ㊀すくこと。好むこと。㊁望みてなす注文。「―に由る」。㊂はやり。流行。――ごころ[好心](名) ものずきの心。又、色ごのみ心。

†こ-の-みち[木道](名) 材木の區別。――の-たくみ[木道匠](名) こだくみ。大工。

†このみ-どり[木實鳥](名)【動】猿の異稱。

この・む(ま、み、む、め、め)[好](他、ま四) ㊀欲しく思ふ。得んと望む。㊁たしむ。たしなむ。㊂愛す。めづ。㊃望みて注文をなす。

こ-の-め[木芽](名) きのめ。†――づき[木芽月](名) 陰曆二月の異稱。

†このも[此面](代) こなた。こちら。――かのも[此面彼面](代) こなたかなた。あちらこちら。

†このも・し(しく、しき、しけれ)[好](形、二) このまし。†――げ[好氣](名) このましげ。

†こ-の-もと[木下](名) きのもと。(樹下)。

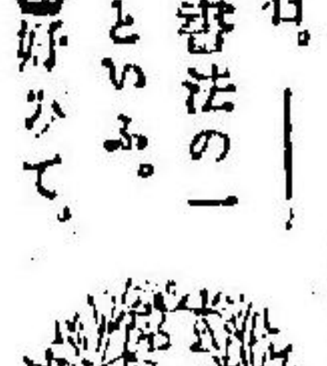
こ-の-よ[此世](名) 現に生きてある今の世。げんぜ。「―からなる地獄の責」。(現世)。

†こ-の-よら[此夜](名) こんや。こよひ。今宵。

このり[兒鷂](名)【動】はしたかの雄の稱。(雀鷂)。

こ-の-わた[海鼠腸](名) なまこの腸を鹽辛にしたるもの、尾張國より多く出す。

このゑ[近衛](名) ㊀「このゑふ」の略言。㊁「このゑだん」又は「このゑへい」の略言。――だん[近衛師團](名) 皇宮守護の常備兵師團、又、其師團に附屬する軍隊。――のみかど[近衛御門](名) 陽明門の一名。――ふ[近衛府](名) 古昔、皇居に近く居て警衛せし武官のつかさ。――へい[近衛兵](名) 近衛師團に附屬する兵士、他の師團附屬の兵士と區別するために、赤きはちまきの帽子をかぶる。――ぼたん[近衛牡丹](名) 紋所の名。――りう[近衛流](名) 書法の一派、近衛信基に始まれりといふ。


〔このゑぼたん〕

このんで[好](副) ㊀好みて。たしなみて。㊁おほく。よく。「―買ふ」。

こ-ば[小端](名) はし。「材木の―」。

(こ-ば[胡馬](名) 北方のえびすの馬。「―嘶北風」。

〔こ-ば[木羽](名) こけら。(奧州の方言)。

(ご-は[五派](名)【佛】禪宗の五つの流派、即ち、臨濟・雲門・曹洞・潙仰・法眼の稱。

(ご-は[五覇](名) 支那の春秋時代の五人の覇者、即ち、齊の桓公・晉の文公・秦の穆公・宋の襄王・楚の莊王の稱。

ご-ば[後場](名) 取引所にて、午後に立つ相場。

(こ-ばい[故買](名)【法】贓品なることを知りて、これを買ふこと。けいずかひ。――はん[故買犯](名)【法】故買をなしたる犯罪。

〔こは-いけん(コワ)[強意見](名) 嚴重なる意見。てひどき意見。

(ご-ばいし[五倍子](名)「ふし」の一名。(附子)。

†こは-いひ(コワイイ)[強飯](名) こはめし。赤飯。(硬飯)。

(こ-ばう(ボウ)[顧望](名) ㊀あとをふりむきて見ること。又、方々を見まはすこと。㊁かれこれと考へわたりて、決行せざること。

(ご-はう(ホウ)[午砲](名) 正午をしらする大砲の音。

(ご-はう(ホウ)[誤報](名) あやまりの報知。

(ご-ばう(ボウ)[御坊](名) 僧又は寺を敬ひて呼ぶ語。

ご-ばう(ボウ)[牛蒡](名)【植】菊科に屬する草、葉は芋に似て厚くして皺あり、頭狀花は悉く管狀の完全花より成りて冠毛を有す、高さ二三尺、根の長さ二三尺ありて色黑し、山中に自生するもあれど、多くは菜園に培殖せられ、葉柄及根は食用に供せらる。――じり[牛蒡尻](名) 猫などの短き尾。(便溺牛)。――ぬき[牛蒡拔](名) 一氣に拔くこと。又、多くの中より擇び拔くこと。

こ-ばかま[小袴](名) ㊀古昔、衣袍(ハウ)の下に用ひし袴、さしぬきに似たるもの。㊁後世、半袴の一名。㊂細き線(スヂ)を取りたる襠のある半袴。

〔こは-がる(ら、り、る、れ)[恐](自、ら四) 恐しく思ふ。おそる。

(こ-はく[買舶](名) あきんどぶね。

(こ-はく[琥珀](名) ㊀【鑛】前世界の松脂などの地中に埋沒して、其性を變じたるもの、往々炭層中に出づ、概ね黃色を帶び蠟蠋の如き色をなす、摩擦すれば能く電氣を生ず、「パイプ」又は簪の珠などの料に用ひらる。㊁「こはくおり」の略言。「―の帶」。――おり[琥珀織](名) 一種の絹織物、なゝこに似たる目ありて、羽織地又は帶地などにす。――たう(トウ)[琥珀糖](名) 一種の菓子、煮とらかしたる寒天に、砂糖を加へて固(カタ)めたるもの。

こ-はげ(コワ)[恐氣](名) ㊀おそろしがる心地。㊁おそろしげなるさま。――だつ(た、ち、つ、て、て)[恐氣立](自、た四) おそろしくなる。

こは-ごは(コワゴワ)[恐恐](名、副) おそれながらものするさまにいふ語。(懷々)。――し(しく、しき、しけれ)[恐恐](形、二) ㊀おそるゝさまなり。㊁おそろし。あらくし。「―き顏」。

ご-は-ごは(ゴワゴワ)[強強](名、副) ㊀かたくこはきさまにいふ語。㊁紙類又は反物などの地のしなやかならざるさまにいふ語。――し(しく、しき、しけれ)[強強](形、二) かたくこはきさまなり。

こ-はさ(コワ)[恐](名) おそろしきこと。おそろしき度合。

こ-はさ(コワ)[強](名) こはきこと。こはき度合。

こは-し(コワ)[毀](名) こはすこと。「―にかゝる」。

こは・し(しく、しき、しけれ)[恐](形、一) 恐るべし。おそろし。

こは・し(しく、しき、しけれ)[強](形、二) ㊀かたし。(硬)。㊁つよし。(剛)。

こは-じとみ[小半蔀](名)「はじとみ」に同じ。

こ-はしり[小走](名) ㊀稍や急ぎ行くこと。㊁昔時、武家の婦人に事へて雜用を辨ぜし少女。

こは・す(さ、し、す、せ、せ)[毀](他、さ四) やぶる。くだく。こぼつ。くづす。

こ-はぜ[鞐](名)(小挾の轉) 帙・足袋・脚半などの掛け合はす端に付けたる爪の如きもの、これをこはぜかけにかけて合はせ閉づ、角・眞鍮・象牙などをもて造る。(牙籤、桃牙、骨板)。――かけ[鞐掛](名) ㊀こはぜを掛けて合はせ閉づる仕立。㊁こはぜを掛くるために、他の一片に裝置しあるもの。

こ-はだ[木肌](名) 木の皮。(樸)。

こ-はだ[小鰭](名)【動】「このしろ」の幼期。(江鰶)。

こ-ばた[小旗](名) ㊀小さき旗。㊁さしこばた。

〔ご-は-つ・く(か、き、く、け、け)[強付](自、か四) ごはごはす。「衣服が―」。

こ-ばな[小鼻](名) 鼻のさきの左右即ち孔の上の小高き所。――どり[小鼻鳥](名)【動】「うづら」の異稱。

†こはな-がゆ[小花粥](名) 古昔、八朔に食ひし黑燒の雀(スズメ)をまぜたる粥。

〔こは-ば・る(ら、り、る、れ)[強張](自、ら四) 強くなる。かたくなる。「舌が―」。(強直)。

†こは-ひ(コワイ)[硬飯](名)「こはいひ」の略言。

(ご-はふ(ホウ)[語法](名) 言語を組成する法規。

(ご-はふ(ホウ)[護法](名)「ごほふ」に同じ。

〔ご-ばまめ[五葉豆](名)【植】「かんくひまめ」の一名。

こばみ-しようしよ[拒證書](名) 拒絕(キヨゼツ)證書ともいふ、手形所持人が其引受拒絕又は支拂拒絕(不渡)の場合に、必要なる行爲をなしたるとの證明に、公證人若しくは執達吏をして作成せしむる要式の文書、引受拒絕の場合には引受拒絕證書といひ、支拂拒絕の場合には支拂拒絕證書といふ。

こば・む(ま、み、む、め、め)[拒](他、ま四) ㊀支へ止む。支へ防ぐ。はゞむ。㊁應ぜず。ひきうけず。

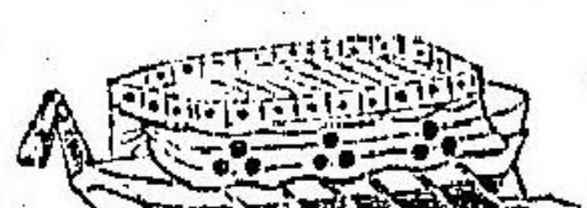
こは-めし(コワ)[強飯](名) 蒸籠(セイロウ)にて蒸したる糯米、多くは小豆(アヅキ)を混じ、赤く染めて祝賀など

に用ふ。おこは。（赤飯、强飯）。

〔こは‐もて〕コハ［恐持］（名）相手の恐しく思ひて、心ならずも優待すること。

こは‐もの コハ［强者］（名）つよきもの。もさ。

こ‐ばや［小早］（名）㊀少しく早きこと。稍や急ぐこと。「―に送る」。㊁急行に用ふる小舟。小さきはやふね。（飛艇）。―――し［しくしきしけれ］［小早］（形、二）稍や早し、少しく急ぐ。


【こばや（二）】

＋こ‐ばら［木原］（名）樹木の生えたる野原。

こ‐ばら［小腹］（名）またはら。このかみ。―――がたつ 稍やいかりの心生ず。

＋こ‐はり［小張］（名）白き布の狩衣。はくちやう。

こ‐はる［小春］（名）陰暦十月の異稱。―――びより［小春日和］（名）小春の頃の暖かきひより。

こは・る コワル［れれるるるれれよ］［毀］（自、ら下二）砕（クダ）けやぶる。くづる。やぶる。（壞）。

こは・る コワル［らりるるれれ］［强］（自、ら四）強くなる。かたくなる。

コバルト［Cobalt］（名）【鑛】色澤銀に近くして微（カス）しく赤色を帶びたる金屬、鐵に比して稍や重く且硬（カタ）く稍や融解し易し、產量少なく價不廉なるを以て、廣く諸般の需用に供する能はず、酸化物は「ガラス」及陶磁器の着色顏料に供せらる。

こは・れ コワレ［毀］（名）㊀こはるゝこと。㊁こはれたるもの、又、こはれたるかけら。（壞）。―――もの［毀物］（名）㊀こはれたるもの。㊁こわれ易き物品。

―――る（自）「こはる」の訛。

〔こ‐はん〕［枯礬］（名）「やきみやうばん」の一名。

〔こ‐はん〕［孤帆］（名）たゞ一片の帆。

こ‐ばん［小判］（名）㊀昔時の金貨、薄くして楕圓形をなし、其一枚は一兩に相當せり、大判の對。㊁判（ハン）の小さきもの。「―の紙」。

こ‐ばん［小鷭］（名）【動】涉禽類に屬する鳥、嘴長く端部は黃色にして根部に軟毛を被る、背部赤黑色にして腹部白し、脚は赤色にして長く趾は自在なり、水邊に棲息し小魚などを食ふ。（紅冠水鷄、田鷄）。

こ‐ばん［小番］（名）㊀こもべ。㊁こばんしゆう。

〔ご‐はん〕［午飯］（名）ひるめし、ひるげ、晝飯。

〔ご‐はん〕［御飯］（名）飯又は食事の敬稱。

〔ご‐はん〕［誤判］（名）あやまりの判斷。

ご‐ばん［碁盤］（名）㊀碁を圍むに用ふる盤、方形にして多くは下に四足を付け、表面に縱横各十九の罫線を直角に交はるやうに引きたるもの、其縱横の罫線の交はりあふ箇所に、碁石を打つ。（枰、棊局）。㊁碁盤の表面の目の如くに、方形を正しくならべたるさまの模樣の稱。「―じま」。

こばん‐いたゞき［小判頂］（名）【動】「こばんざめ」に同じ。

こばん‐がた［小判形］（名）小判の形即ち楕圓形。

こ‐はんぎん［小半斤］（名）半斤の二分の一即ち四半斤の稱。

こばん‐ざめ［小判鮫］（名）【動】硬鰭類中こばんざめ科に屬する魚、體は長くして紡錘形をなし、鱗は細小なり、背鰭の棘部は變じて吸盤をなす、背部は褐色にして腹部は暗色なり、吸盤を以て他の強壯なる大魚の腹部に附着し、勞せずして遠方に遊す、時に往々小船の底に吸ひつき、船などをとゞむることありといふ。おやかし。こばんいたゞき。

ごばん‐じま［碁盤縞］（名）織物の縞が碁盤の目の如くに、方形の模樣を正しく連ねたるさまをなすもの。

こばん‐しゆう［小番衆］（名）武家の近侍。

〔こはん‐せき〕［虎斑石］（名）近江國高島地方より出づる一種の石、質黑くして白斑あり、硯などを造る料に供せらる。

こ‐はんとき［小半時］（名）昔時、一時の四分一即ち、今時の三十分。

こばん‐なり［小判形］（名）小判がた。

＋こひ コヒ［瘇］（名）膝より下の脹（ハ）るゝ疾。こひずね。

こひ コヒ［鵠］（名）【動】「くゞひ」の一名。

〔こ‐ひ〕［喉痺］（名）喉（ノド）の腫（ハ）れふさがる病。

〔こ‐ひ〕［古碑］（名）古き石碑。

こひ コヒ［戀］（名）物を慕ふること。あこがれ思ふこと。れんぼ。れんあい。戀慕。愛戀。―――はくせもの 戀のために心錯亂して、あらぬ振舞をなすにいふ。―――はしあんのほか 戀は分別以外にして、身分境遇等には關係せぬにいふ。

こひ コヒ［鯉］（名）【動】喉鰾類中こひ科に屬する魚、體は側扁にして強壯なり、鱗太し、口の前端に觸鬚二對あり、背部蒼黑色にして腹部淡黃色、體長大いなるは三尺餘に達す、河川又は湖沼等に產す、頭より尾に至る一條の鱗の三十六ありといふより、一に六々魚と稱す。

こ‐び［媚］（名）こぶること。こぶるさま。「―を呈す」。

〔ご‐び〕［語尾］（名）㊀ことばのいひをはり。㊁【文法】一つの語の末、即ち其語の語根・語幹以下の稱、「あがる」「かへす」「ながし」等の「る」「す」「し」これなり。

〔ご‐びう〕［誤謬］（名）あやまり。まちがひ。

＋こひ‐うら コイ［戀占］（名）戀につきてのうらなひ。

こひ‐か コイ［戀歌］（名）戀の心を詠じたる和歌。

〔こ‐ひ‐か〕［虎皮下］（名）㊉虎の皮の敷物のもとの義、書簡文にて、學者又は軍人等の宛名の下に附する語、即ち、御手許の義。

こ‐びき［木挽］（名）材木を鋸（ノコギリ）にて挽（ヒ）くこと。又、其業の人。（拉鋸人）。

こひ‐ぐさ コイ［戀草］（名）㊀こひの情を、草の茂げるさまにたとへいふ語。㊁心の異稱。

こひ‐ぐち コイ［鯉口］（名）㊀刀の鞘（サヤ）口と鐔（ツバ）と相合ふ所。㊁一種の服、つゝそでの如くに仕立てたる袷にして、水仕事などするとき、着物の穢（ヨゴ）るゝを防ぐために着るもの。―――をきる 直に拔刀の出來るやうに、鯉口をすこしくゆるめておく。

こ‐ひげ［小髭］（名）㊀すこしく生ひたる髭。㊁【植】燈心草科に屬する草、水田に生ず、莖は細長くして通常葉は存在せず、雄蕊は六個あり、莖を以て席を織る。

こひ‐こく コイ（名）一種の料理、鯉の肉を煮たる味噌汁、即ち、鯉の肉のこくしやう。

こひ‐ごころ コイ［戀心］（名）こひしく思ふ心。又、「いろけ」。

こひ‐ごろも コイ［戀衣］（名）戀する人の衣服。

こ‐ひざ［小膝］（名）（「こ」は接頭語）膝を進め又は膝を打つときなどに膝にいふ語。「―を進む」。

＋こひ‐ざめ コイ［戀醒］（名）戀ふる心のうすらぐこと。

こひ・し コイシ［しくしきしけれ］［戀］（形、二）したふ心切なり。またはし。なつかし。

こひ‐しらず コイ［戀不知］（名）未だ戀愛の情を解せざること。又、むくつけくして戀情の少なきこと。

こ‐びたひ［小額］（名）（「こ」は接頭語）額の稱。「―に皺が出る」。

＋こひぢ コヒヂ［泥］（名）（泥（ヒヂ）の義かといふ）「どろ」に同じ。

こひ‐ぢ コイヂ［戀路］（名）こひしたふ情のむき。こひのみち。―――のやみ［戀路闇］（名）こひしたふ情に惱（ナヤ）みて、物事のあやめもわかぬさまにいふ語。「―に踏み迷ふ」。

こび‐ちや［媚茶］（名）黑色を帶びたる濃き茶色。

〔こ‐ひつ〕［古筆］（名）古人の書きたる書。―――み［古筆見］（名）古筆の眞僞を鑑定する人。

こ‐ひっさき‐もとゆひ コヒキ［小引裂元結］（名）昔時、奥女中の用ひし引裂元結の小さきもの。

こ‐ひつじ［小羊］（名）羊の子。又、小さき羊。

〔こびっちよ〕（名）身體の小さきものを罵りていふ語。

こ‐びと［小人］（名）㊀古昔、武家にて、走りつかひをなしゝ卑賤のものゝ稱。こばしり。こもの。（白徒）。㊁たけ甚だひくき人。矮人。一寸法師。（侏儒）。―――がは［小人革］（名）昔時、革足袋などにつくりし革。肌柔（ハダヤハ）かにしてきめ細かし。―――ぐみ［小人組］（名）德川時代に、將軍家に附屬して卑賤の役をつとめし一階級。―――じま［小人島］（名）身體の甚だ小さき人の住みてゐるといふ想像上の島。―――めつけ［小人目付］（名）昔時、御徒目付の下に屬せし役目。

こひ‐にようばう コイニヨウボウ［戀女房］（名）戀ひしたひて娶（メト）りたる妻。

こひ‐ねがはくは コイネガワクワ［希］（副）願ひ望むには。ねがふことには。ねがはくは。なにとぞ。どうぞ。「―聽許を得ん」。

こひ‐ねが・ふ コイネガウ［はひふふへへ］［希］（他、は四）望み願ふ。ねがひのぞむ。こひもとむ。（冀、請、望）。

こひ‐の‐かたき コイ［戀讐］（名）戀の成功せざるうらみ、又、自分の戀ふる人が、身を許して從ひし相手の稱。

こひ‐の‐たきのぼり コイ［鯉瀧登］（名）鯉が龍門の瀧をさかのぼりて龍となるといふこと。轉じて、人の立身出世するをにいふ語。

こひ‐の‐つじうら コイ［戀辻占］（名）戀に關する種々の文句を記したる辻占。

こひ‐の‐ふち コイ［戀淵］（名）戀ふる情の深きを淵にたとへいふ語。

＋こひ‐の・む コイ［まみむむめめ］［請祈］（他、ま四）乞ひ祈る。「こひのみて、あが待つ時に」。

こひ‐の‐やっこ コイ［戀奴］（名）戀ふる情に支配せらるゝ、樣を奴に比していふ語。

こひ‐の‐やまひ コイ［戀病］（名）こひやみ。

こひ‐びと コイ［戀人］（名）㊀思ひ戀ふる人。意中の人。情人。㊁いろ。

ご‐び‐へんくわ［語尾變化］（名）【文法】動詞及形容詞等が、其意を數種にいひ分かち又は他語に接續するために、其語尾を變化すること。

こ‐ひやう コヒヨウ［小兵］（名）㊀弓勢の弱きこと。㊁身體の矮小なること。からだの小さきこと。

ご‐ひゃく‐ラカン［五百羅漢］（名）【佛】佛滅後遺教結集のとき、來會せし弟子衆の總稱。

こひ‐やみ コイ［戀病］（名）戀情の烈（ハゲ）しきより起る病氣。こひわづらひ。こひのやまひ。（相思病）。

コヒラー［Coherer］（名）【理】細き硝子管に細かき金屬の粉を入れ、其兩端に電極を附したるもの、「マルコニ」式無線電信機の主要部にして、金屬粉の電氣の抵抗高けれど、電波達するときは抵抗著しく減ずる性を利用したるなり。

〔こびり‐つ・く〕［かきくくけけ］（自、か四）しっかりつきて離れず。かたまりつく。

こ‐ひる［小蒜］（名）【植】「ひる」に同じ。

〔こび・る〕［媚］（自）「こぶ」の訛。

こひ‐わた・る コイ［らりるるれれ］［戀亙］（自、ら四）戀ひ慕ひて年月を經（フ）。

こひ‐わづらひ コイワヅライ［戀煩］（名）こひのやまひ。こひやみ。

こびん〔小鬢〕（名）鬢の端。

こふ（コウ）〔鵠〕（名）【動】「くゞひ」に同じ。

こふ（コウ）〔鸛〕（名）【動】游禽類に屬する鳥、嘴は長くして全部角質なり、趾間の根基に小膜を張り、後趾よく發達せり、毛色白く、眼の周圍の面部は羽毛生ぜずして裸出す。こふのとり。

コフ（コウ）〔劫〕（名）（梵語 Kalpa 劫簸（コフハ）の略）【佛】（い）一時期。（ろ）極めて長き時間。「セッナ」の對。——をふ　永き年月を經、年功を積む。

こふ（コウ）〔劫〕（名）圍碁にて、互に取らんと爭ふ一つの石が、互に一手間を措かざれば取り得られぬもの、故に他方に於て敵を脅（オビヤカ）す石を打ち、敵これを防ぐ間に、其石を奪（ウバ）ひとる。

艹こふ〔國府〕（名）「こくふ」に同じ。

こふ（コウ）〔乞〕（他、は四）㊀ねがふ。のぞむ。（請）。㊁もとむ。もらふ。（丐）。

こふ（コウ）〔戀〕（他、は上二）したひ思ふ。こひしく思ふ。なつかしく思ふ。しのぶ。

こぶ〔瘤〕（名）㊀病氣によりて、筋肉むすぼれ皮膚堆（ウヅタカ）くあらはれたるもの。㊁皮膚を烈しく打たれて、筋肉の一時脹（ハ）れ起りたるもの。㊂すべて物の表面に小高く現はれ出でたるもの「木の—」。㊃厄介物又は子供。「—つき」。

こぶ〔昆布〕（名）【植】「こんぶ」に同じ。

（こぶ〔鼓舞〕（名）㊀鼓を打ちならして舞を演ぜしむること。㊁はげましいさましむること。いきほひづかするること。ふるひおこすこと。「士氣を—す」。

こぶ〔媚〕（自、は上二）㊀氣におもねるやうにす、機嫌をとる。へつらふ。おもねる。㊁やさしき姿をなす。なまめきたるさまをなす。㊂容子をかざる。しやれる。

ごふ（ゴウ）〔業〕（名）㊀【佛】因を緣によりて果となさしむる善惡の作行、例へば、或植物の種は因、これを蒔きたる地は緣、生えたる其植物は果にして、斯かる事情に到達せしめし耕作は業なり。㊁自分自ら作りし罪惡の應報。——をにやす　ごふはらに思ふ。

（ごふ〔護符〕（名）「ごふう」に同じ。

ごぶ〔五分〕（名）㊀一寸の二分一。㊁藁の長さを五分位に切りたるもの。㊂「ごぶごぶ」に同じ。

（ごふいん（ゴウ）〔業因〕（名）【佛】現世又は來世に於ける一切事相の因。

（こふう〔古風〕（名）むかしの風、又、いにしへの姿、「—な人」。

（ごふう〔護符〕（名）神佛の加護の威力こもるといふ符、多くは紙に呪文などを書きたるものにして、災難又は病氣等の禁厭（マジナヒ）に、これを壁間に貼（ハ）り又は肌身につけ若しくは飲みなどす。（神符）。

（ごふうじふう〔五風十雨〕（名）（五日に一たび風吹きて十日に一たび雨ふる義）風雨の極めて順當なること。

こぶかし〔木深〕（形、二）木立茂げし。「山のけしき木ぶかく世ははなれて」。

ごぶがり〔五分刈〕（名）長さ五分ぐらゐに髮を刈ること。

ごぶぎり〔五分切〕（名）長さ五分ぐらゐに物を切ること。

（こふく〔鼓腹〕（名）（腹をつゞみうつ義）食物に滿足して、いと氣樂に身を休ますさまにいふ語。はらつゞみ。「—撃壤」。

（こふく〔胡服〕（名）えびすの人の着る衣服。

こぶく〔子福〕（名）子供の多くあること。——しや〔子福者〕（名）子供を數多く持ちてゐる人。

（ごふく〔吳服〕（名）㊀「クレはとり」に同じ。㊁織物の總稱、きれるゐ、反物。——ざし〔吳服差〕（名）「ごふくぢやく」に同じ。——ぢやく〔吳服尺〕（名）布帛を測るに用ふるものさし、一尺は曲尺の一尺二寸五分に相當す。くぢらざし。（布帛尺、裁縫尺）。——だな〔吳服店〕（名）ごふくや。——だな〔吳服棚〕（名）四十八棚の一、一間の床を、殘らず一樣なる違方の袋戸にしたるもの。——てん〔吳服店〕（名）ごふくや。——みせ〔吳服店〕（名）ごふくや。——もの〔吳服物〕（名）きれるゐ、織物、反物。

ごぶぐし〔五分櫛〕（名）厚さ五分許ある櫛。

艹こふくべ〔小瓠〕（名）【植】枇杷の古名。

ごふくや〔吳服屋〕（名）吳服を賣る家又は人。（吳服商）。——もの〔吳服屋者〕（名）吳服屋にゐる人、吳服屋に勤むる人。

こぶくろ〔子袋〕（名）婦人の腹中にある子のやどる所卽ち子宮。

ゴフくわ（ゴウ）〔劫火〕（名）【佛】器世間を燒き盡くして灰燼となすといふ大火。

（ごふくわ（ゴウ）〔業果〕（名）【佛】ごふのむくい。

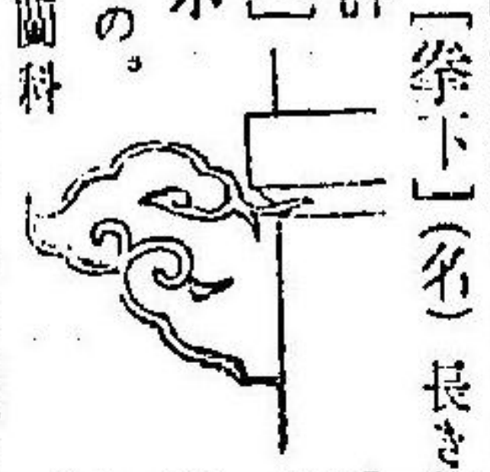
（ごふくわ（ゴウ）〔業火〕（名）【佛】烈（ハゲ）しき憤怒を火にたとへいふ語。

〔こぶこぶ〔瘤瘤〕（名）おほく並び出でたる瘤。——だつ〔瘤瘤起〕（自、た四）瘤數多く現はる。「—だつた松の根」。

〔ごぶごぶ〔五分五分〕（名）雙方一樣なること。互に可否又は優劣なきこと。

〔ごふざらし（ゴウ）〔業曝〕（名）前世の應報により、現時に恥辱を蒙ること。又、其もの。

こぶし〔拳〕（名）指を五本共に掌の中へ屈めて、握（ニギ）り固めたるもの。にぎりこぶし。げんこつ。艹——うち〔拳打〕（名）拳にて他を撃つ技藝、拳法の類。——あがり〔拳上〕（名）長き物を持つに、其先端下りて手許高きこと。——がため〔拳固〕（名）㊀にぎりこぶし、げんこつ。㊁犬追物のとき、初めに酒を飲むこと。——さがり〔拳下〕（名）長き物を持つに、其先端上がりて手許下がること。——ばな〔拳端〕（名）神社の屋根の貫（ヌキ）の小口をひき木の如くにしたるもの。



［こぶしばな］

こぶし〔辛夷〕（名）【植】木蘭科に屬する木、山野に生ず、夏より蕾を生じ、秋を經て、葉は落ち蕾のみ殘り毛被を存す、春の末、葉の出づる前に、白色大形の花を開く、觀賞用として栽培せらる。（木筆、杞柳）。艹——はじかみ（名）【植】「こぶし」の古名。

こブシン〔小普請〕（名）徳川時代に、小普請の人足を旗本の非役者に課せしこと。——きん〔小普請金〕（名）徳川時代に、小普請の代はりに、扶持高百石に付き、一兩二分宛の率を以て旗本に出金せさせしこと。——ぐみ〔小普請組〕（名）徳川時代に、旗本の非役のもの、編入せられし組。

（ごぶおん〔五分心〕（名）幅の五分ある「ランプ」の心。

こぶだい〔瘤鯛〕（名）【動】硬鰭類中こぶだい科に屬する魚、體は稍圓形にして鱗は稍や小なり、頭上に瘤狀の突起あり。

（ごふたう（ゴウトウ）〔劫盜〕（名）おひはぎ。おひおとし。

（こブツ〔古佛〕（名）古代の佛像。

（こぶつ〔古物〕（名）ふるき物、又、むかしの品。

（ごブツ〔後佛〕（名）【佛】未來に色身を現出すといふ佛。

（ごぶつ〔五物〕（名）一對ありて、互にそろはざれば、其用をなさゞるもの、稱。

（ごふつう（ゴウ）〔業通〕（名）魔性の通力、「妖術、魔術の—に」。

〔こぶつき〔瘤附〕（名）㊀娶（メト）りたる婦人の以前より已に妊娠してあること、又、其婦人。㊁厄介者又は子供の附き居ること、又其もの。

〔ごふつくばり（ゴウ）〔業突張〕（名）ごふざらし。「死に掛かりて、死にもせぬ—」。

ごぶづけ〔五分漬〕（名）みのぼし大根を五分切にし、三杯酢にて漬けたるもの。

（こぶつしやう〔古物商〕（名）古物のあきなひ。又、其あきなひを業とする人。

こふづる（コウ）〔鸛鶴〕（名）【動】「こふ」（鸛）に同じ。

こぶなぐさ〔藎草〕（名）【植】禾本科に屬する草、葉は竹に似て、花は穗狀花序に排列す、煎じて染液を採る。かいな。

こぶね〔小船〕（名）小さき船。（扁舟、輕舟、艇）。

こふのとり〔鸛鳥〕（名）【動】「こふ」（鸛）に同じ。

（ごふはう（ゴウホウ）〔業報〕（名）【佛】作行に應じて來たるむくい。業のむくい。

〔ごふはら（ゴウ）〔業腹〕（名）いかりに堪へぬこと、「—な奴」。

（ごふびやう（ゴウビヤウ）〔業病〕（名）業のむくいに生じたりといふ難病、「人をいぢめた報いで此—」。

（ごふふう（ゴウ）〔業風〕（名）【佛】（い）業因の轉々して、業報のうつり行くさまを、風にたとへいふ語。（ろ）地獄にありて、極めて猛烈なりといふ暴風。

（ごふま（ゴウ）〔業魔〕（名）一切の惡業が、智慧を失はしむるを、魔にたとへいふ語。

こぶまき〔昆布卷〕（名）「こんぶまき」の略言。

こぶみ〔小文〕（名）半切紙にしたためたる書簡。

こぶやうじ〔瘤楊子〕（名）皮を削（ケヅ）らざる材を用ひて作り、皮を其まゝつけおく楊子。

（ごふやく（ゴウ）〔業厄〕（名）業によりて受くる災難。

ごぶやなぎ〔瘤柳〕（名）【植】楊柳科に屬する木、幹に瘤の如きものを生ず、葉粗（アラ）く花少なし、材白ければ楊子又は柳行李を製する料とす。（檉柳）。

こぶら（名）【動】「さゞご」の一名、（肥前唐津の方言）。

艹こふらく（コウ）〔戀〕（動）「戀ふる」の延言。

こぶり〔小降〕（名）雨又は雪などの少しく降ること。「—になる」。（小雨）。

こぶり〔小振〕（名）普通より稍や小形なること。「おほぶり」の對。

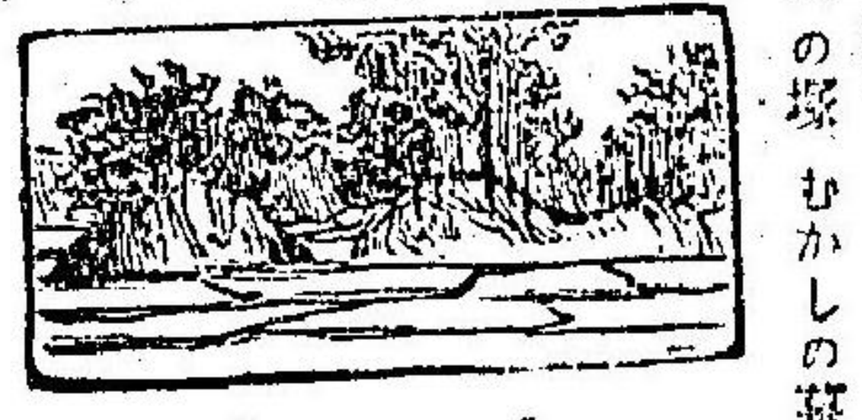
こぶり〔子振〕（名）子供の容貌。「—がよい」。

（ごふりき（ゴウ）〔業力〕（名）【佛】過去・現世・未來に於ける因緣を知りて、業を起さする力。

（ごふりやく（ゴウ）〔劫掠〕（名）おびやかしかすむること。

こぶろ〔小風呂〕（名）小さき風呂。

（こふん〔古墳〕（名）㊀いにしへの塚、むかしの墓。㊁上代の墳墓、其構造現今のものと大いに異なり、土窖をつくりて、中に土偶・器具、其他裝飾品等を藏めあり。「—發見」。



［こふん（二）］

（こふん〔孤憤〕（名）自分獨り世を憤（イキドホ）ること。他に同憫者なき自分一己の憤慨。

（こぶん〔古文〕（名）㊀古代の文章。㊁古代の文字。「—孝經」。

こぶん〔子分〕（名）㊀假に子と定めて、實子の如く取りあつかふもの。㊁親方の部下。てした。てか。「親分—の間柄」。

（ごふん〔胡粉〕（名）介殼を燒きて製したる白粉、顏料に供せらる。（白堊）。

（ごぶん〔誤聞〕（名）きゝまちがひ。きゝあやまり。

（こぶんじ〔古文辭〕（名）古代の文辭。——がく〔古文辭學〕（名）宋又は明の儒學がおもに性理を說くに反對して、明又は我國に起りたる儒學、

古文辭の眞正なる解釋によりて、經書に述べたる所の意義を解し、以て儒學の眞理を知らんとするものゝ稱。我國にては荻生徂徠の一派これなり。

〔と‐へい〔雇聘〕(名) やとひ入るゝを。やとひ用ふるを。「―して顧問とす」。

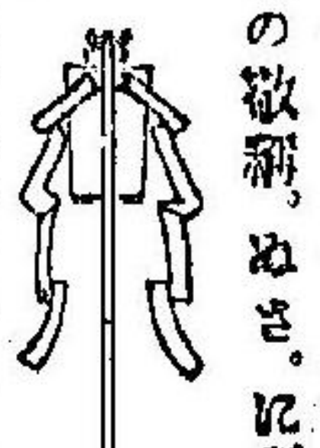
〔と‐へい〔雇兵〕(名) 賃錢を給してやとひ使ふ兵士。

〔と‐へい〔胡兵〕(名) えびすの兵士。

〔と‐へい〔語弊〕(名) 語の上のきず。語の不完全なる點。

〔ご‐へい〔御幣〕(名) 幣束の敬稱。ぬさ。にぎて。

――かつぎ〔御幣擔〕(名) 不吉を忌み緣起を氣に懸くる性質、又、其人。(迷信、過信)。――もち〔御幣持〕(名) つき從ひて其人に諛(へつら)ふ者。たいこもち。まつ共や。


〔いへご〕

〔と‐へう〔虎豹〕(名) とらとへうと。轉じて、猛烈なるもの又は暴惡なるものゝ稱。

〔と‐べう〔古廟〕(名) 古くなりたるみたまや又は神社。

〔と‐へき〔古癖〕(名) 古代の器物などを好むくせ。

〔と‐べつ〔戸別〕(名、副) いへごと。軒別。

〔ご‐べつ〔語別〕(名) 【文法】言語の品詞上の區別。

〔とべりつ・く (自、か四) こびりつく。

〔と‐べん〔顧眄〕(名) ふりかへりて見ること。

〔ご‐へん〔御邊〕(代) 同輩に用ふる對稱の代名詞。そこもと。貴殿。(足下)。

〔と‐ぼく〔古木〕(名) 年數を經たる立木。おいき。「老樹。」

〔と‐ぼく〔枯木〕(名) 枯れたる立木。かれき。――はなひらく〔枯木華開〕 否運又は苦境におちいりてありしものが、再び幸福に際會するにいふ。

‡とぼ‐とぼ (名、副) 鳴り響く音。「風音高くて、神―なる」。「舟端を―と打ちたゝく音」。

‡とぼ・し〔しく しき しけれ〕(形、二) 「こひし」の古言。「いかばかり―き妹ぞ」。

とぼし〔零〕(名) ㊀こぼすこと。㊁水こぼし。

とぼ・す〔零〕(他、さ四) 洩(も)らす。溢(こぼ)れしむ。

とぼ・す (自、さ四) 愚痴をいふ。なげきわぶ。

とぼ・つ〔毀〕(他、た四) 破り損ず。こはす。やぶる。くづす。「家を―」。(破壞)。

〔と‐ぼね〔小骨〕(名) ㊀小さき骨。㊁骨の稱。「―がをれる」。

〔ご‐ぼふ〔護法〕(名) ㊀ものゝけ又は病氣等を調伏して、其人を保護すること。「山伏の御坊の、―によりて」。㊁教法を保護すること。又、其神。

‡とぼめか・す (自、さ四) こぼめくやうにす。

‡とぼめ・く (自、か四) こぼ〲と音す。「さうじなども、たゝめかし―こそ」。

とほり〔氷〕(名) ㊀水の氷點以下の寒氣に逢ひて凝結したるもの。又、すべて液體の寒氣のために凝結したるものゝ稱。(氷)。㊁かさねの色目、表裏共に白なるもの。――いし〔氷石〕(名) 【鑛】水晶の一名。其結晶したるさまのつらゝに似たるより此名あり。――いちご〔氷苺〕(名) けづりたる氷に、いちごの「シャリベツ」を加へたるもの。――おろし〔氷卸〕(名) 氷砂糖を細末となしたるもの。ざらめ。(粉霰)。――かけ〔氷掛〕(名) 金米糖に氷蜜を掛けたるもの。銅盤を火上に置き種に氷蜜をたらし掛け、數度かきまぜて製す。――きんとき〔氷金時〕(名) けづりたる氷に、煮たる赤小豆を混じたるもの。――こんにやく〔氷蒟蒻〕(名) 寒氣にさらして凍(こほ)らせたる蒟蒻。(氷蒟蒻)。――ざたう〔氷砂糖〕(名) 白砂糖を煮て、玉子の白身を入れ灰汁(あく)を去り、青竹の割りたる中に入れて、凝結せしめたるもの。「石蜜、水晶糖」。――しらたま〔氷白玉〕(名) けづりたる氷に、白玉團子を入れ砂糖を加へたるもの。――しるこ〔氷汁粉〕(名) けづりたる氷と汁粉とをまぜたるもの。――すべり〔氷滑〕(名) 氷の上をすべり行く遊戲。――すゐ〔氷水〕(名) 氷に水をまぜて飲料となしたるもの。こほりみづ。――どうふ〔氷豆腐〕(名) 寒中に凍(こほ)らしたる豆腐。こゞりどうふ。――ぶだう〔氷葡萄〕(名) けづりたる氷に、葡萄酒を加へたるもの。――みかん〔氷蜜柑〕(名) けづりたる氷に、蜜柑水を加へたるもの。――みつ〔氷蜜〕(名) 氷卸に玉子の白身を加へて煮つめたるもの。――みづ〔氷水〕(名) ㊀「こほりすゐ」に同じ。㊁非常に冷却したる水。――もち〔氷餅〕(名) ㊀寒中に凍らしめたる餅。㊁かき餅の異稱。(中國地方の方言)。――や〔氷屋〕(名) 夏日、氷水其外けづりたる氷をもとゝしたる諸種の飲料をあきなふ家又は人。――ラムネ(名) けづりたる氷に「ラムネ」を加へたる飲料。――レモン(名) けづりたる氷に「レモン」水を加へたるもの。

とほり〔郡〕(名) 一國を小分したる一部の土地、町・村・里・鄕などを包括す。ぐん。「山城國愛宕―」。――のつかさ〔郡司〕(名) 大領・少領・主政・主帳をすべていふ稱。ぐんじ。――ぶぎやう〔郡奉行〕(名) 代官の頭にして郡の庶務をすべつかさどりし武家の役名。

とほ・る〔凍〕(自、ら四) 寒氣に逢ひて凝結す。「水が―」。(氷結)。

とぼ・る〔零〕(自、ら下二) 洩(も)れ出づ。溢(あふ)れ散る。「水―」。「涙―」。(溢)。

‡とぼ・る〔毀〕(自、ら下二) 毀損す。やぶる。こはる。

とぼれ〔零〕(名) こぼるゝこと。こぼれたるもの。「―を拾ふ」。(溢)。――ざいはひ〔零幸〕(名) 豫想せざる幸福。意外のさいはひ。(僥倖)。――る〔零〕(自) 「こぼる」の訛。

とほろぎ〔蟋蟀〕(名) 【動】直翅類中蟋蟀科に屬する蟲。全體褐色にして尾端に二個の突起あり。常に日光を忌み陰所に棲息して鳴く。古名きりぎりす。うたきりぎりす。

〔と‐ほん〔虎賁〕(名) 勇力を以て人に卓ふるもの。つはもの。

〔と‐ほん〔古本〕(名) ㊀ふるびたる書物。ふるほん。

と‐ほん〔小本〕(名) 小さき書物。大本の對。

㊁古代の書籍。「―大學」。

〔ご‐ほん (名) 嗽(せ)をする音。

〔こ‐ぼんなう〔子煩惱〕(名) 小兒をいたく愛するを。

こ‐ま〔駒〕(名) (小馬の義) ㊀馬の子。又小さき馬。㊁馬の總稱。㊂將棊の盤上につかふもの。多くは小さき木片にてつくる、これにそれ〲の名を書るしありて、種類によりはたらきを異にす。しやうぎのこま。(棋子、棋馬)。㊃三味線の胴の表面に、絃を支ふるもの。㊄物の間に挿(はさ)み入るゝ小さき木。

こ‐ま〔獨樂〕(名) (「こまつぶり」の略言) 子供の玩具。小さく圓くして扁(ひら)き材に軸を貫き、其軸に緣を纏(まと)ひ、投げ飛ばして廻はすもの。

こ‐ま〔木間〕(名) 木と木との間。このま。

こ‐ま〔小間〕(名) ㊀ひま。すきま。あひま。㊁ちひさき室。せまき間。㊂土地を貸して、一月に一圓の貸料を得べき區域の稱。(東京語)。

コマ〔狛〕(名) 「コマいぬ」の略言。

こ‐ま―〔小間、細〕(接頭) 或語に冠らせて細かき又は手輕なる意を表はす語。「―物」。「―使」。

ゴマ〔護摩〕(名) 【佛】(梵語 Homa、焚燒又は火祭の義) 密敎にて、諸惡を燒き亡ぼすといふ意にて、火を焚(た)きて佛に祈ること。

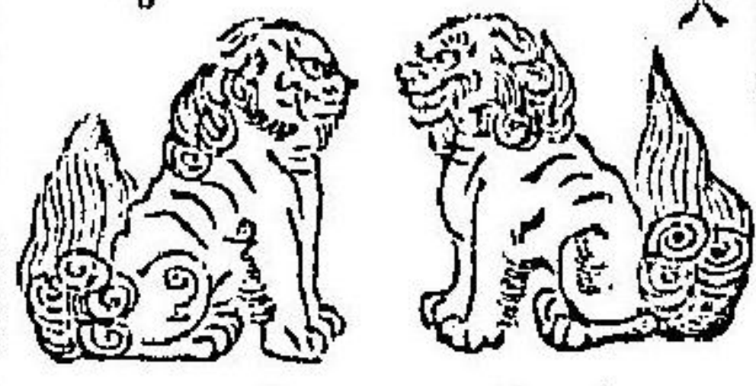
ご‐ま〔胡麻〕(名) ㊀【植】胡麻科に屬する草、葉は長楕圓形又は卵形にして、花は葉腋に一個又は數個づゝ生じ、花冠は白色にして紫紅色若しくは黃色の暈あり、果實の粒子(つぶ)に白・黑・赤の三種ありて、共に多量の油を含み、食用とし又は油を搾る。㊁「ごまずり」の略言。――あへ〔胡麻韲〕(名) 一種の料理、胡麻の粒子(つぶ)をすり碎(くだ)き、これに或材料のものを入れてまぶしたるもの。――を・する ごますりをなす。へつらふ。

〔と‐まい〔古米〕(名) 收穫してより年を重ねたる米。ふるごめ。(陳倉米)。

ごまい‐かぶと〔五枚兜〕(名) 兜のしころを五枚に造りたるもの。

ごまい‐ざさ〔五枚笹〕(名) ㊀【植】竹の一種、丈低くして叢生し、一莖に五枚づゝの葉あり。おかめざさ。㊁紋所の名。五枚の笹の葉を描(ゑが)きたるもの。

コマ‐いぬ〔狛犬〕(名) (高麗(こま)犬の義) 古昔、高麗より渡來せし犬、形は狼に似て羊を獵(か)るに用ひたりといふ。後世、其形を木又は石などにてつくり、玉座の御帳又は神社の前などに置く。


〔こまいぬ〕

〔と‐まう〔虛妄〕(名) ㊀實際にあらざるを。眞相にあらざるを。㊁たばかり。いつはり。

‡コマ‐うど〔高麗人〕(名) 高麗の國の人。(狛人)。

とまか〔細〕(名) こまかきを。

コマ‐がく〔高麗樂〕(名) 高麗より傳來の雅樂。

とまか・し〔しく しき しけれ〕〔細〕(形、二) ㊀ちひさし。ほそし。㊁よく行きわたれり。綿密なり。㊂ねんごろなり。しんせつなり。㊃くだ〲し。わづらはし。

〔ごまかし〔誤魔化〕(名) ㊀欺きて術中に陷るゝを。㊁目前を體よくつくろひまぎらかすこと。(瞞着)。

〔ごまか・す〔誤魔化〕(他、さ四) ごまかしをなす。あざむく。まぎらす。

とま‐かた〔駒方〕(名) うまかた。

とま‐がね〔細金〕(名) 小粒の金銀貨幣。

‡とま‐がへ・る (自、ら四) 老いて又若がへる。

ごま‐がら〔胡麻幹〕(名) 胡麻の莖。

ゴマ‐ぎ〔護摩木〕(名) ㊀「ゴマ」に焚(た)く木。㊁【植】「ぬるで」の一名。

〔と‐まく〔鼓膜〕(名) 【生】耳の奧にある薄き膜、音響の振動を受けて、これを神經に達するもの。

と‐まくら〔木枕〕(名) 木製の枕。

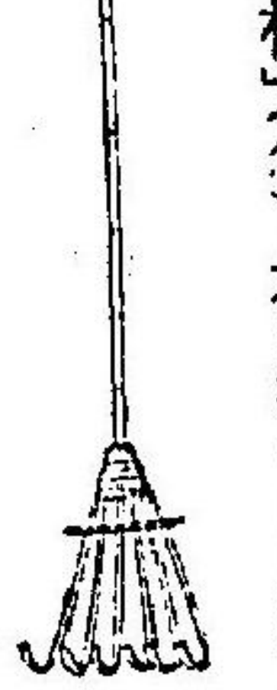
と‐まくら〔小枕〕(名) ㊀木の枕。㊁頭を受くるため、木枕の上にのする袋。㊂婦人の髮のかもじの根に用ふる木。

‡と‐まけ〔細分〕(名) こまかきもの。

とま‐げた〔駒下駄〕(名) 一つの材にて、臺も齒も刳(く)りて造りたる下駄。だうま。

とま‐ごま〔細細〕(名、副) ㊀細かきさまにいふ語。㊁くはしきさまにいふ語。――・し〔しく しき しけれ〕〔細細〕(形、二) ㊀いとちひさし。又、いとくはし。㊁わづらはし。くだ〲し。

とま‐ざらひ〔細杷〕(名) 木の葉などを掻(か)き集むるさらひ。齒細かし。このはかき。(木杷、枚杷)。


〔こまざらひ〕

〔とま‐ざらへ〔細杷〕(名) 前條の訛。

〔こまし（形）「こまかし」の訛。

ごま-しほ[胡麻鹽]（名）㊀胡麻の種子を炒（イ）りて、これに燒鹽を加へたるもの。㊁白と黑と相交りてゐる毛。—あたま[胡麻鹽頭]（名）髮の黑白相交りたる頭。—かづら[胡麻鹽鬘]（名）胡麻鹽頭のかづら。

〔こましやくれ（名）こざかしく利口めきたる言動をなすこと。

〔こましやく・れる（れれれるるれれよ）（自、ら下一）こましやくれてあり。

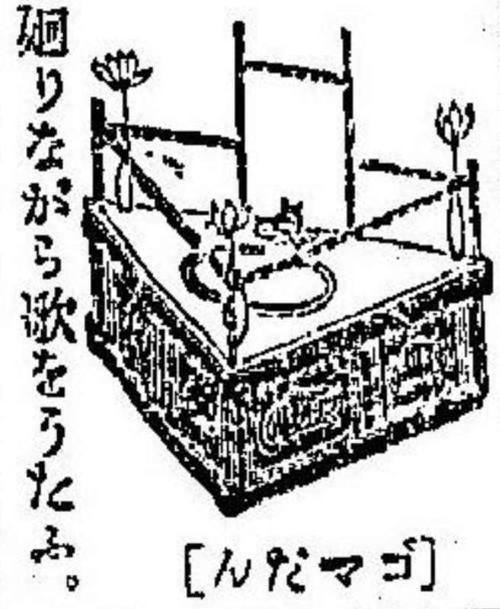
〔ごま-すり[胡麻擂]（名）おもねること。へつらふこと。又、其人。

こ-また[小股]（名）㊀狹く股をひろぐること。「—で歩く」。㊁股の稱。「—をかゝふ」。

ゴマ-だう ダウ[護摩堂]（名）寺院に附屬し、護摩を焚（タ）く場所に定めある殿堂。

ごま-だけ[胡麻竹]（名）幹に黑斑のある竹。

ゴマ-だん[護摩壇]（名）護摩を焚（タ）く壇。


［ゴマだん］

こまち-をどり[小町踊]（名）盆のをどり、十二三以下の小女襷（タスキ）をかけ太鼓を打ち、輪にならびて廻りながら歌をうたふ。

こ-まつ[小松]（名）ちひさき松。わかき松。矮松。

こま-づかひ カイ[小間使]（名）主人の傍近く置きて小用に使ふ下女。

‡こま-つくり（名）獨樂（コマ）の古名。こまつぶり。

〔こまつ-な[小松菜]（名）武藏國小松川地方より出だすつまみなの成長したるもの。（東京の方語）。

こま-つなぎ[駒繋]（名）【植】荳科に屬する小木、羽狀複葉を有し花は紫紅色なり、觀賞用として栽培せらる。（馬棘、金剛草）。

こまつ-ばら[小松原]（名）小松の生えたる野原。

‡こま-つぶり（名）獨樂（コマ）の古名。

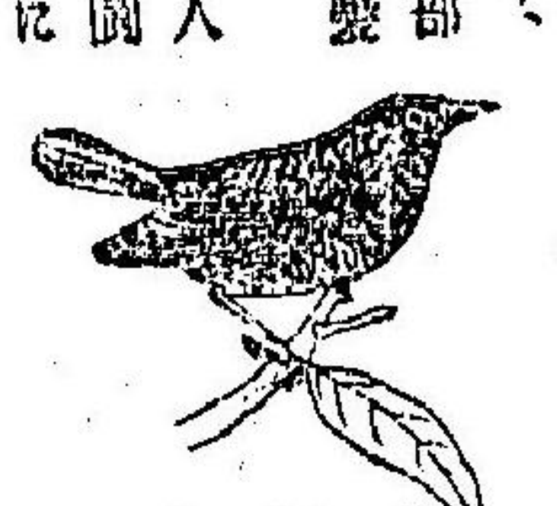
こ-まつり[木祭]（名）樵夫などが、木を採伐するに山の神を祭ること。

‡コマ-つるぎ[狛劍]（名）柄長くして頭に環ある「劍」。

‡コマ-つるぎ[狛劍]（枕）「わ」に冠らする詞、「—わさみがはら」。

ごま-どうふ[胡麻豆腐]（名）一種の料理、胡麻の白き種子を擂（ス）りつぶして葛粉を入れ、火にかけ煉（ネ）りて、豆腐の如くにこしらへたるもの。

こま-どり[駒鳥]（名）【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形は雀より大きく、嘴短くして尖る、腹白く、背部頭部共に樺色なり、鳴く聲愛らし。（知更雀）。


［こまどり］

こま-どり[小間取]（名）人數を二組に分けて、技藝を闘はする時など、右に一人左に一人と、順を追ひて入違に組み合はすること。

こま-ど・る（らりるるれれ）[小間取]（他、ら四）人數を小間取に配（クバ）る。

コマ-にしき[高麗錦]（名）古昔、高麗より渡來せし錦繝。

こまぬ・く（かきくくけけ）[拱]（自、か四）㊀腕組をなす。てをくむ。たむだく。㊁何事をも爲さずして居る。「深宮の中に—」。

こま-の-あがき[駒足掻]（名）㊀駒のあがくこと。㊁光陰の經過。

ごま-の-あぶら[胡麻油]（名）胡麻の種子より搾（シボ）り取りたる油、黑胡麻より採りたるものは揚物などに用ひ、白胡麻より採りたるものはしらしぼりと稱し、婦人の髮に付く。

ごまの-はひ ハイ[胡麻灰]（名）道中にて旅人の體を裝（ヨソホ）ひて、旅人を欺（アザム）き盜賊をはたらく者。

〔こ-まはり リ[小廻]（名）㊀すこしくまはること。㊁身のこなし。「—が利く」。

こまひ イ-マ[桒]（名）㊀たるきの端にありて軒に貫く木。こまひぬき。㊁壁の下地にわたす竹。—ぬき[桒貫]（名）たるきの端にある木。

‡こま-ひき[駒牽]（名）㊀古昔、八月に諸國の牧場より馬を京都へ獻ぜしを。㊁古昔、四月廿八日武德殿に出御ありて、五月に行はるべき騎射の手入などを御覽ありしこと。—ぐさ[駒牽草]（名）【植】「すみれ」の一名。（董菜）。—ぜに[駒牽錢]（名）錢の一種、人が駒を牽きて行く圖を現はしたるもの、古昔これを呪咀（マジ）などに用ひたりといふ。

コマ-ぶえ[高麗笛]（名）高麗樂に用ふる笛、歌口の他に、孔六つ若しくは三つあるもの。（[illegible]）。

ゴマ-ふだ[護摩札]（名）護摩をたき佛に祈りてつくりたるおふだ。

こ-まへ エ-マ[小前]（名）賤民の稱。「—の者」。

こま-まはし ワシ[獨樂廻]（名）獨樂（コマ）を廻してさまざまの曲藝をなす藝人。（獨樂師）。

ごま-みそ[胡麻味噌]（名）煎（イ）りたる胡麻と味噌とを擂（ス）り合はせたるもの。

‡こま-むかへ エ[駒迎]（名）古昔、八月に駒牽の駒を近江國逢坂關まで出迎へしこと。

こま-むすび[小間結]（名）紐など眞結に結び固むること。（細結、固結）。

ごまめ[鱓]（名）すぼしにしたるひしこの稱、蒸又は燒きて食ふ、多くは祝賀の儀式などに用ふ。たつくり。（鯷魚）。

こま-もの[小間物]（名）㊀婦人の化粧品、即ち、櫛・笄・紅脂・白粉などをいふ。「—を賣る」。㊁へど。—みせ[小間物店]（名）㊀小間物を賣る店。㊁へどを吐くこと。—や[小間物屋]（名）㊀小間物を商ふ人又は家。㊁へどを吐くこと。

こま-やか[細]（名）㊀ちひさきこと。ほそきこと。㊁くはしきこと。めんみつなること。㊂色深きこと、又、情厚きこと。（濃）。

ごま-やき[胡麻燒]（名）胡麻を付けて燒くこと、又、其物。

こま-よけ[駒除]（名）馬の奔逸を禦（フセ）ぐため、門前などに設くる低き柵。うまどめ。こまよせ。（梐枑）。

こま-よせ[駒寄]（名）前條に同じ。

こまり-い・る（らりるるれれ）[困入]（自、ら四）非常にこまる。

こまり-き・る（らりるるれれ）[困切]（自、ら四）非常にこまりきる。

こまり-は・つ（てててつつるつれてよ）[困果]（自、た下二）こまる。いたくこまる。

〔こまり-もの[困者]（名）手に合はずして自由にならぬ者。もてあまし者。

こま・る（らりるるれれ）[困]（自、ら四）㊀窮匱になやむ。あつかひにくるしむ。もてあます。㊁なやむ。くるしむ。

こ-み[小身]（名）刀の身のつかの中に入る部分。刀のなかご。刀心。

こみ[込]（名）㊀種々取まじへてあること。「—で五十錢」。㊁さしこむ病氣。さしこみ。

〔ご-み[五味]（名）五つの味、即ち、辛・甘・鹹・酸・苦の稱。

ごみ[芥]（名）ちり。あくた。（塵芥）。

〔こみ-あ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）[込上]（自、か下二）㊀上方へ衝（ツ）き上ぐ。㊁嘔吐を催す。㊂さしこみ起る。

〔こみ-あげる[込上]（自）前條の訛。

こみ-あひ イ-ア[込合]（名）こみあふこと。雜沓。

こみ-あ・ふ ウ-ア（はひふふへへ）[込合]（自、は四）數多の人いり込む。雜沓す。

こみ-い・る（らりるるれれ）[込入]（自、ら四）㊀無理に押し入る。（亂入）。㊁入りまじる。こんざつす。㊂事件こまぐ〜しくなる。

こみ-うま[込馬]（名）あとあざりして進まぬ馬。

‡こ-みか[小甕]（名）ちいさきかめ。

ごみ-かくし[芥隱]（名）小兒の遊戲、互に芥をかくしおきて、尋ねあふたはむれ。

〔ご-みくた（名）ごみ。ちり。塵芥。

（ご-みし[五味子]（名）【植】一種の草、帶綠色なる九瓣の白花を開き赤色の實を結ぶ、藥用とす。

ごみ-ため[芥溜]（名）芥を捨つる所。はきだめ。ちりづか。—の-つる[芥溜鶴]（名）すぐれたる人が、不相應なる低き社會にあるにいふ語。

こ-みち[小道]（名）㊀幅の狹き道。こうぢ。（徑、蹊）。㊁よこみち。わきみち。

こ-みち[小路]（名）六町一里の里程、大道の對。

こ-みぢん[粉微塵]（名）「こなみぢん」に同じ。

‡こ-みづ[濃漿]（名）米を漉たる汁。おもゆ。こんづ。

ごみ-とり[芥取]（名）ちりとり。（塵取）。

こみ-や[込矢]（名）前装銃の附屬具、細長き鐵の棒にして、彈藥を銃身の底に突き入るゝに用ふるもの。こめや。「カルコ」「カルカ」。（棚杖）。

（ご-みやう ミョウ[五明]（名）「インド」國の古代にて、「バラモン」種族の特に研究せし五つの學術の稱にして、佛教もまたこれを因襲せり、即ち聲明（シヤウ）・工巧明（繪畫・彫刻等の類）・醫方明（醫學）・因明・内明これなり。又、これを内外に分け、前述のものを内五明とし、其中の因明・内明を除（ノゾ）きて、呪術・符明を加へたるものを外五明といへり。

‡こ-みら[小韮]（名）【植】「にら」の古名。大韮の對。

‡こ・む（まみむむめめ）（他、ま四）子を生む。

こ・む（まみむむめめ）[込、籠]（自、ま四）㊀入りこむ。こもる。いる。㊁むらがる。群集す。（雜沓）。

こ・む（めめむむるむれめよ）[込、籠]（他、ま下二）㊀押し入る。入れこむ。つむ。いる。「丸を—」。㊁含めもたす。いれつゝむ。㊂そゝぎこむ。集中す。「精神をこめて」。

ゴム[護謨=Gum]（名）㊀或種類の樹木より分泌せる液の乾きて固まりたる脆（モロ）き物質、採取する樹木の異なるに從ひて、其性質を異にすれど、すべて粘着力強く、種々の用に供せらる、「アラビアゴム」は其一なり。㊁一に彈性「ゴム」と稱し、或熱帶植物の樹身より分泌する液を少しづゝ採取して製造したる黑色乃至褐色の塊狀をなす物質、「ゴム」鞜、「ゴム」管其他諸種の具を製する料に供せらる。㊂東「インド」地方等に產する或樹木の分泌液を空氣に曝（サラ）して乾かしたる黑色又は褐色の物質、暖むれば軟（ヤハ）らかくなり、種々の形になすを得、更にこれを精製して諸種の用に供す、齲齒（ムシバ）に塡（ツ）め又は義齒を作るに用ふる「ゴム」と稱するものは即ちこれなり。—いん[護謨印]（名）彈性「ゴム」にて製造したる印、石膏の印型にあて、製造す。—カッパ[護謨合羽]（名）「ゴム」布にて製したる合羽。—ぐし[護謨櫛]（名）彈性「ゴム」に多量の硫黃（イワウ）を吸收せしめたるもの即ち「エボナイト」を細工してつくりたる櫛。—くわん[護謨管]（名）彈性「ゴム」を以て製造したる管、諸種の用に供せらる。—しやう コウ-シ[護謨漿]（名）「アラビアゴム」の溶液、製造其他藥用に供せらる。—だま[護謨玉]（名）彈性「ゴム」にてこしらへたる鞠などの玉。—にんぎやう ギョウ[護謨人形]（名）彈性「ゴム」を以てこしらへたる人形。—ぬの[護謨布]（名）彈性「ゴム」を上面にひきたる布、

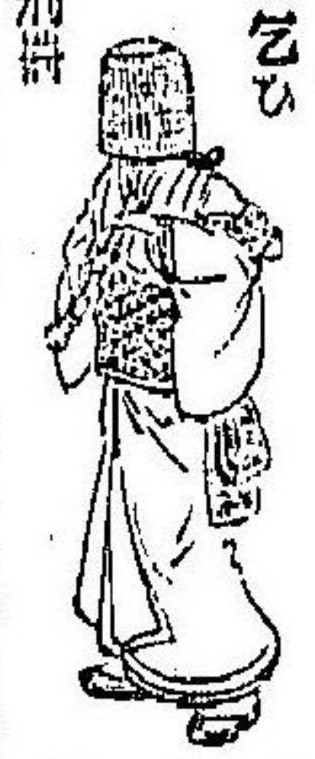
防水用の外套などを製する料。――のり［護謨糊］（名）「アラビアゴム」を溶（ト）かしたる糊、ものを貼（ハ）るに用ふ。――びき［護謨引］（名）表面に護謨を引きたるもの。――まり［護謨毬］（名）彈性「ゴム」にてこしらへたる中の空虚なる毬。――わ［護謨輪］（名）車輪の外周に、彈性「ゴム」を裝置したるもの。

こ-むぎ［小麥］（名）【植】禾本科に屬する直立草本、果實は穎果にして、芒（ノギ）を有するものと有せざるものとあり、重要なる農作物にして、種子は多くは粉となし、饂飩・パン其他醬油・菓子等を製造する料に供せられ、稈（ワラ）は大麥の稈と共に、帽子其他麥稈（ムギワラ）細工等に用ひらる。（䅘）。――こ［小麥粉］（名）小麥の種子を挽きたる粉。（麪）。

こ-むすび［小結］（名）相撲（スマフ）にて關脇の次位。

こ-むすめ［小娘］（名）十四五歳までの少女。をとめ。こをんな。（處女、少女）。

（こむ-ソウ［虛無僧］（名）普化（フケ）宗の僧侶の稱、尺八を吹きて錢を乞ひ諸國を修行す、德川時代に、武士の罪を犯しゝもの、刑罰を逃れんために此群に入り、多く丸ぐけの帶を締（シ）め下駄を履（ハ）き、絹布の小袖を重ね深編笠を冠り、袈裟を掛けて修行したり。ぼろ。ぼろんじ。


［こむソウ］

ごむ-にち［五墓日］（名）家作に吉なる外萬事に凶なりといふ日。

〔こ-むね［小胸］（名）「むね」の稱。「ーの惡い事」。

こむら［腓］（名）膝のうしろの肉の膨（フク）れたる所。ふくらはぎ。（腨腸）。――がへり［腓返］（名）腓の筋肉の俄に結ぼれ縮（チヾ）むこと。（轉筋）。

こ-むら［樾］（名）木の枝の交はり繁りたる所。（木叢）。

こ-むらさき［小紫］（名）【植】馬鞭草科に屬する木、山野に自生す、葉はいぼたに似て、夏時花を開く。

こ-むらさき［濃紫］（名）濃（コ）き紫色。古昔、三位以上の袍などに用ひし色。

こむろ-ぶし［小室節］（名）昔時、吉原に通ふ馬子（マゴ）などの謠（ウタ）ひし小唄。

こ-め（名）【動】「こえび」に同じ。

こ-め［籠目］（名）「こめあり」の略言。

こめ［米］（名）稻の種子、うるしねは炊（カシ）ぎて飯とし、もちごめは蒸して餅とす。

〔―こめ（接尾）ぐるみ。「枝ー折る」。

こめ-あげ［米揚］（名）「こめあげざる」の略言。――ざる［米揚笊］（名）磨（ト）ぎたる米を打ち揚げて、水をきるための笊。（炊箕）。

〔こ-めい［顧命］（名）㊀深く愛しての命令。㊁君王又は貴人の死後の事の依託。

〔こ-めい［古名］（名）昔時の名目。古代の稱呼。

こめ-いち［米市］（名）米相場の立つ市。

こめ-うり［米賣］（名）米をあきなひありく人。

こめ-おり［籠目織］（名）一種の絹織物、籠（カゴ）の目の如くに、細くちゞれて、透（ス）を通るやうに薄くおりたるもの。（縠）。

‡こめ-かし しく しき しけれ（形、二）小兒めきたり。

こめ-かし［米淅］（名）㊀米をとぐこと。㊁「こめかしをけ」の略言。――をけ［米淅桶］（名）米を磨ぐ桶。こめとぎをけ。

こめ-かみ［蟀谷］（名）眼の側部にありて、物を嚼めば筋肉の動く所、即ち顳顬。

‡こめ-く か き く け（自、カ四）子供らしくあり。

こめ-ぐら［米藏］（名）米穀を入れおくための倉庫。よねぐら。（米廩）。

こめ-さうば サウバ［米相場］（名）㊀米穀の相場。㊁米穀の投機的取引。

こめ-ささ［米裂］（名）こゞめ。あらもと。――ざくら［米裂櫻］（名）【植】「こゞめざくら」の一名。

こめ-ざこ［米雜魚］（名）【動】「めだか」の一名。

〔こめ-だはら ダハラ［米俵］（名）米を入るゝ俵。（米苞）。

こめ-つき［米搗］（名）米を搗（ツ）くこと。又、其人。――ばった［米搗蚱蜢］（名）㊀【動】「こめつきむし」の一名。㊁へこ〳〵頭を人に下ぐる人をのゝしりていふ語。――むし［米搗蟲］（名）【動】鞘翅類中頭蟲科に屬する蟲、全身褐色にして尾端細し、其體を押さふれば、頭を振るさま恰も人の米を搗（ツ）くに似たるより名づく、幼蟲は多く砂地に棲息し、時に大小豆の根を切り害をなす。ぬかづきむし。こめふみ。（叩頭蟲、搗碓蟲）。

こめ-つぶ［米粒］（名）米の顆粒。（顆米）。

こめ-とぎ［米磨］（名）「こめかし」に同じ。――をけ［米磨桶］（名）「こめかしをけ」に同じ。

こめ-のむし［米蟲］（名）㊀【動】「こくざうむし」の一名。㊁人間の稱、米食するよりいふ。

こめ-びつ［米櫃］（名）㊀白米を入れ置く櫃。げびつ。かちと。（穀匣）。㊁生計の本となるべきもの。生活費を產出するもの、「田畑がー」。

こめ-ぶくろ［米袋］（名）こめを入るゝ袋。

こめ-ふみ［米踏］（名）㊀田を踏みて米を精（シラ）ぐること。又、其人。㊁【動】「こめふみむし」の略言。――むし［米踏蟲］（名）【動】「こめつきむし」の一名。

こめ-へん［米偏］（名）漢字の偏の名、粳・糯等の字の左旁にある米の字の稱。

こめ-むし［米蟲］（名）【動】「こめのむし」の一名。

こめ-や［込矢］（名）「こみや」に同じ。

こめ-や［米屋］（名）米を賣る人又は家。（米商）。

〔こめ-やなぎ［米柳］（名）【植】「こゞめざくら」の一名（加賀地方の方言）。

‡こ-めらう ラウ［小女郎］（名）こむすめ。

‡こ-めらは ワラ［小女童］（名）こむすめ。

こめる（他）「こむ」の訛。

〔こ-めろ［小女郎］（名）こめらう。こむすめ。

（ご-めん［御免］（名）㊀官職のゆるしをうけたること。㊁役を罷（ヤ）めらるゝこと。やとひを解かるゝこと。㊂容赦の敬語、「ーなされ」。――がは ワガ［御免革］（名）柿色の地に白く唐草などを摺（ス）り出だしたる革、もと貴人の料にして後下民にも許さる、おやうへいがは。――げた［御免下駄］（名）畳付の駒下駄、古昔、禁中にて、雨天の節は特別に履（ハ）くを許されたるもの。

〔ごめん-おやと（名）【動】「こめざこ」の訛。

（ごめん-たい［五面體］（名）【數】五つの平面にて界する立體。

こも［石蓴］（名）【植】眼子菜科に屬する草、海水に生ず、葉は長くして一分內外の幅あり、種子は平滑なり、葉は用ひて席を織り又は蒲團の心とし、又は肥料ともす。

〔こ-も［虛無］（名）「こむソウ」の略言。

こも［菰］（名）【植】「まこも」に同じ。

こも［薦］（名）粗（アラ）く織りたるむしろ、多くは藁を料とす。（蓙、箸）。――かぶり［薦被］（名）㊀薦にて包みたる大きなる酒樽、「ー一本」。㊁こじきの稱、薦をかぶりてゐるより名づく。（薦冠）。

コモ-ガイ［熊川］（名）㊀（朝鮮語にて、熊を「コム」川を「カイ」と云ふより轉じたる語）朝鮮國咸鏡道熊川郡にて製せし茶碗、茶家にて珍重す。㊁口開きて底淺き茶碗。

〔ご-もく［芥］（名）㊀ごみため。㊁ごみ。（塵芥）。

（ご-もく［五目］（名）㊀「ごもくずし」「ごもくめし」又は「ごもくならべ」若しくは「ごもくまめ」の略言。㊁種々なる物の入りまじりたるを。「ーケンチン」。――じやうるり ジョウルリ［五目淨瑠璃］（名）種々雜多の院本中の文句をとりあはせて謠（ウタ）ふもの。――ずし［五目鮨］（名）魚肉又は野菜など種々のものを刻み込みて製したる鮨。――ならべ［五目並］（名）碁盤の目の上に、縱横若しくは斜に、碁石を五目列ね竝ぶる遊戲、敵を防げ己を防ぎ、早く竝びたる方を勝ちとす。――まめ［五目豆］（名）人參・牛蒡・蓮根・慈姑など、共に合はせ煮たる大豆、正月の儀式に用ふるもの。――めし［五目飯］（名）魚肉又は野菜など種々のものを混（マ）ぜて、炊（カシ）ぎたる飯。（骨董飯）。

こも-ごも［交］（副）かはる〴〵。たがひに。

〔こも-ソウ［虛無僧］（名）「こむソウ」の訛。

こも-だたみ［薦疊］（名）薦を床の上に敷きたるもの。

‡こも-だたみ［薦疊］（枕）「へ」に冠らする詞。「ー平群」。

こも-だれ［薦垂］（名）㊀出入口に薦を垂れてあること。㊁出入口に薦を垂れ下げてある乞食小屋、又、むさくるしく賤しき住居。

こ-もち［子持］（名）㊀子を持ちてあること。子を孕（ハラ）みてあること。又、其婦人。㊁大小相竝びてあること。㊂「こもちすぢ」の略言。――いし［子持石］（名）㊀石の中に小さき石のこもりてゐるもの。㊁「はったいいし」の一名。――じま［子持縞］（名）織物の縞柄の子持筋なるもの。――すぢ［子持筋］（名）太き筋と細き筋と竝行したるもの。

こ-もちづき［小望月］（名）陰曆十四日の夜、即ちもちづきの前夜の月。

（ご-もつ［御物］（名）御所の御藏品。

（こも-づつみ［薦包］（名）薦にてつゝむこと、又、薦にてつゝみたるもの。「非の―」。

こも-づの［菰角］（名）まこもの根に出づる芽。

こ-もの［小者］（名）おもべ。めしつかひ。「賢用」。

〔こ-もの［小物］（名）こま〴〵したる附屬物、又其

‡こ-ものなり［小物成］（名）一定の稅の外に課する附加稅。（雜稅）。

こも-ばり［薦張］（名）㊀小屋などの四方をこもにて張ること。又、其小屋。㊁「こもばりしばゐ」の略言。――しばゐ［薦張芝居］（名）こもばりの小屋にて興行する下等芝居。

こも-まくら［菰枕］（名）㊀まこもにてつくりたる枕。㊁‡逍遙のたびね。㊂‡神樂歌の曲名。

‡こも-まくら［菰枕］（枕）「たか」に冠らする詞。「ー高瀨の淀」。

こも-むしろ［菰席］（名）こもにてつくりたる席。

こもり［籠］（名）㊀家內にひきこもりゐること。㊁社寺などにさんろうすること。㊂外に現はれずひそみてあること、もの、內にあること。「ーあり」。

こ-もり［子守］（名）小兒のもりをすること。又、其人。

‡こ-もり［木守］（名）材木の番人。

‡こもり（名）「はたけ」の異稱。

‡こもりく-の［籠口］（枕）「はつせ」「はて」に冠らする詞、「ー初瀨」。

‡こもり-とひ イコ［籠戀］（名）心中にてひそかに戀するを、

こもり-だう ドウ［籠堂］（名）信者の參籠する堂、神社・佛閣に附屬するもの。

こもり・だな［籠棚］（名）四十八棚の一、小鳥などの籠を置く袋戸棚のもの。

‡**こもり・づ**［籠水］（名）ものかげにかくれたる水。――**の**（枕）「まだ」に冠らする詞。「―下の心」。

‡**こもり・づま**［籠妻］（名）かくしづま。

こもり・をんな［子守女］（名）こもりをする小女。

こも・る［籠］（自、ら四）㊀かくる。ひそむ。㊁ふくまる。つゝまる。㊂家内にありて外出せず。㊃城塞に入りて拒ぐ。㊄神社又は佛閣などに、止宿していのる。さんろうす。

こもん［小紋］（名）織物などの地一面に施したる極めて細かき模様。（印小花）。

（**こもん**［顧問］（名）㊀意見を問ふと。諮詢すると。㊁諮詢を受くる人。さうだんにあづかる人。――**くわん**［顧問官］（名）陛下の御諮詢に與かる職。「樞密―」。「宮中―」。

（**こもんじよ**［古文書］（名）古代の文書。ふるき「記錄」。

（**ごもんぜき**［御門跡］（名）（御門の跡の義）㊀法皇の居をトしたまふ寺院。㊁京都御室（ムロ）の仁和寺の稱、仁和寺は宇多天皇御落飾の後建立したまひしものなるよりいふ。みやもんぜき。㊂普通に、眞宗本願寺の敬稱。おゆんもんぜき。

こや［小屋］（名）㊀小さくして粗末なる家。㊁かりたく。假家。㊂芝居又は見世物等を興行する建物。㊃昔時、藩主の藩邸又は城中にありし藩士の住宅の稱。㊄古昔、京都に在りし衞府の人の夜廻の時の詰所。ひたきや。

‡**こや**［蠶屋］（名）養蠶する家。又、養蠶する室。

（**ごや**［後夜］（名）㊀昔時は、夕より夜半までの稱。後世は、夜半より朝までの稱。㊁夜半のつとめ。

（**ごや**［午夜］（名）まよなか。よなか。

こ・やうじ［小楊枝］（名）齒牙の間を穿（ウガ）つに用ふる小さき楊枝、多くはくろもじの木にて造る。つまやうじ。くろもじ。

こや・がけ［小屋掛］（名）假小屋をかけ作ると。又、假小屋。

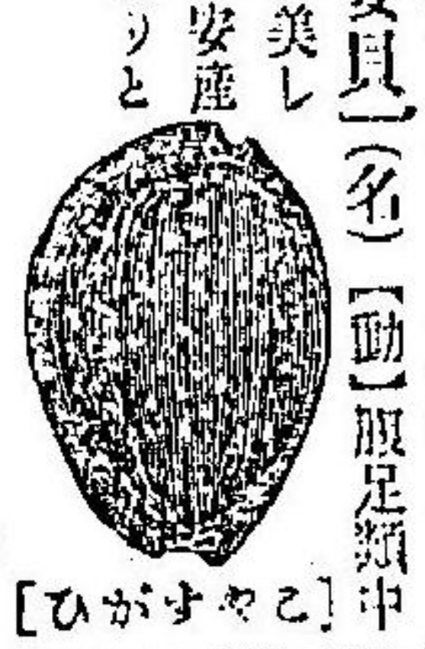
⌐**こ・やかま・し**［小喧］（形、二）くだくだし。やかまし。

こ・やく［子役］（名）㊀子のつとめ。㊁芝居にて、子供をする役。又、其役になる人。

こ・やくにん［小役人］（名）身分卑（ヒク）く俸給少なき官吏。小官吏。

こやし［肥］（名）㊀こやすと。㊁土地の生產力を維持し且增加するために、土壤中に施用するもの、稱。こえ。肥料。

こ・やす［子安］（名）安產せさすると。又、安產すると。――**がひ**［子安貝］（名）【動】腹足類中前鰓類に屬する貝、介殼に美しき斑紋あり、昔時、產婦が安產を祈りてこれを所持したりといふ。


［こやすがひ］

こや・す［肥］（他、さ四）肥ゆるやうにす。

‡**こ・やすみ**［小休］（名）少しく休むと。暫時のいきつぎ。（小憩）。

‡**こやた**（名）古堂の異稱。

⌐**こ・やつ**［此奴］（代）人を賤しめて呼ぶ語。こいつ。（這奴）。

‡**こ・やで**［小枝］（名）こえだ。

こ・やど［小宿］（名）なかやど。「―の嚊」。

こや・ぶ［小屋步］（名）小屋を借りたる料に出す金錢。

こ・やま［小山］（名）小さき山。（邱、丘、岡）。

こ・やみ［小歇］（名）暫時やむと。「雨の―」。

こや・もの［小屋者］（名）かはらもの。非人。穢多。

‡**こや・る**［臥］（自、ら四）臥（フ）す。

こ・ゆ［肥］（自、や下二）㊀體肉增す。ふとる。㊁土地の生產力增加す。膏腴になる。

こ・ゆ［越、超］（自、や下二）㊀物の上を過ぎ行く。「山を―」。㊁上に到る。「深さ腰を―」。㊂ぬけ出づ。まさる。ぬく。㊃經過す。ふ。

‡**こ・ゆ**［凍］（自、や上二）こゞゆ。

‡**こ・ゆ**［蹴］（他、や下二）ける。

‡**こ・ゆ**［臥］（自、や上二）ふす。

こ・ゆひ［小結］（名）侍（サムラヒ）烏帽子にある組紐の「懸緒」。

こ・ゆび［小指］（名）㊀親指よりかぞへて第五にある小さき指。（季指）。㊁妻又は妾などの隱語。

こ・ゆみ［小弓］（名）ちひさき弓。

（**こ・より**［雇傭］（名）㊀やとはれ。やとひ。㊁【法】契約の一、當事者の一方が相手方に對して、勞役に服するとを約し、相手方がこれに對して、報酬を與ふるとを約すると。

こ・よう［小用］（名）㊀聊かなる用事。㊁小便。――**づつ**［小用筒］（名）昔時、德川將軍參內の時、携へしめたる筒形の小便器、此筒を持つものを公人又は朝夕人といへり。あとづゝ。

（**ごよう**［誤用］（名）過（アヤマ）りて用ふると。「藥品の―」。

（**ごよう**［互用］（名）互に交へて用ふると。かはる〴〵用ふると。

（**ごよう**［御用］（名）㊀用事の敬語。㊁朝廷又は政府の用事。㊂捕吏などが、官命を以て犯罪人を捕縛すると。――**がかり**［御用掛］（名）朝廷又は官府の用務を帶びたるもの。――**きき**［御用聞］（名）㊀御得意先などの用を聞きにまはると。又、其人。㊁昔時、町人又は農民などの官命を受けて、犯罪人の探偵捕縛などにあづかりしと。又、其人。――**きしや**［御用記者］（名）御用新聞の記者。――**し**［御用紙］（名）御用新聞に同じ。――

しやうにん［御用商人］（名）認許を得て、宮中又は官廳の用品を納むるを業とする商人。――**しんぶん**［御用新聞］（名）時の政府當局者の機關となりて、其利益となる論說報告等をつとむる新聞。――**せん**［御用船］（名）朝廷又は政府の使用にのみ專ら供せらるゝ船舶。――**たし**［御用達］（名）昔時、大小名などに出入して、其用品を納め又は金錢の調達などを取りはからひし商人。又、御用商人。――**ヂヤウチン**［御用提燈］（名）官府の記章又は記名ある提燈、夜間御用を帶びたるもの、點火携帶するもの。――**ばこ**［御用箱］（名）官府の文書などを納めおく箱。――**もの**［御用物］（名）㊀官府などの用に供する物。㊁いつかは捕縛せらるべき人物。

（**ごよく**［五欲］（名）【佛】五種の欲情、即ち、色・聲・香・味・觸の稱。

⌐**ごよぎ・る**（自、ら四）御ゆるしを乞ふ。ごめんください。（土佐の方言）。

‡**こよし・もの**［凍物］（名）凍てこゞらしたる物。「にこゞり」。

‡**こよ・す**［凍］（他、さ四）こゞらす。

こよ・なし［此上無］（形、二）このうへ無し。最上なり。「こよなき惱み奉りて」。（無超）。

こ・よひ［今宵］（名）今夜。「―ぞ秋の最中なりける」。（今晚）。

‡**こ・よひ**［昨夜］（名）さくや。

こ・よみ［曆］（名）（日讀の義）地球が他の天體との關係によりて生ずる種々の事項其他一切の時令を日を追ひて記載せるもの、我國にてはもと太陰曆を使用したりしが、現今は太陽曆を使用す。れき。――**で**［曆手］（名）高麗燒（陶器）などの縱に細かく模樣あるもの。――**のはかせ**［曆博士］（名）古昔、曆法の事を掌りたる學者。れきはかせ。

⌐**こ・より**［紙縒］（名）「かうより」の訛。

こ・よりあひ［小寄合］（名）小人數の寄合。

‡**こ・ら**［子等］（名）上古、婦人を親しみて呼びし語。いも。

‡**こ・ら**［子良］（名）古昔、伊勢神宮の供物（クモツ）を奉る殿に仕へまつりし少女、「―子」。「―の館」。

⌐**こら**［是］（感）他人を呼びかくるにいふ語。

（**こ・らい**［古來］（副）昔より今に至るまで。むかしから。「―稀なり」。

（**こ・らう**［故老］（名）としより。老人。（長老）。

（**こ・らう**［虎狼］（名）㊀とらとおほかみと。㊁殘酷なるもの。無理非道なるもの。「―の國」。

ごらう・ず［御覽］（他、さ變）（「ごらんず」の音便）覽るの敬語。

ごらう・まる［五郎丸］（名）越中國より產出する麻布の稱地。

（**ご・らく**［娛樂］（名）たのしみ。なぐさみ。

‡**こら・ご**［子良子］（名）「こら」に同じ。

こらしめ［懲］（名）懲りさすと。いましめ。（懲戒）。

こら・す［懲］（他、さ四）懲りて再び爲さゞるやうにす。

こら・す［凝］（他、さ四）㊀こりかたまるやうにす。かたむ。あつむ。㊁心を一途に集注す。

‡**こら・の・たち**［子良館］（名）伊勢神宮のこらの居りし家。

（**こ・らふ**［胡蘿蔔］（名）【植】「にんじん」に同じ。

こら・ふ［堪］（自、は下二）たへ忍ぶ。耐忍す。辛抱す。がまんす。「寒さをこらへて謡す」。

こらへ・じやう［堪情］（名）こらへ忍ぶ意地。にんたいりよく。

⌐**こらへ・る**［堪］（自）「こらふ」の訛。

（**ご・らん**［御覽］（名）見るとの敬語。「其勝負を―あり」。――**・ず**［御覽］（他、さ變）覽るの敬語。みそなはす。

‡**こり**［香］（名）（「かをり」の約）香の異稱。

こり［梱］（名）㊀旅行に物を入るゝ籠。ふぢかづら・はこやなぎ又は竹などを以て編みて作れるもの。（行李、骨柳）。㊁括（クヽ）りたる荷。包裝したる貨物。

（**こ・り**［狐狸］（名）㊀きつねとたぬきと。㊁轉じて、小人又は姦者。

（**こ・り**［垢離］（名）（垢の離るゝ意）神佛を念ずるため、水を浴（ア）びて身體のけがれを去ると。「―を取る」。

こり［凝］（名）かたまると。かたまり。

⌐**ごり**［石伏魚］（名）【動】「いしぶし」の一名。（關西地方の方言）。

（**こ・りう**［古流］（名）㊀古風の流儀。㊁生花の一派、花卉の枝ぶりなどをあまり矯（タ）めぬ方の流。㊂茶道の一派、千利休の古法を其まゝに守るもの。又、其もの。「法華の―」。

こり・かたまり［凝固］（名）こりてかたまると。

こり・かたま・る［凝固］（自、ら四）㊀凝り集まりて固（カタ）くなる。（凝結）。㊁一途に心を集注して、他を顧（カヘリ）みず。（固執）。

（**ご・りき**［五力］（名）【佛】五つの力、即ち、信・念・精進・定・慧の稱。

こ・りこう［小利口］（名）こざかしきと、小才あると。さかりこう。

⌐**こり・こり**［懲懲］（名、副）深く懲りたるさまにいふ語。

⌐**こり・こり**（名、副）堅き物を嚙む音。「―嚙む」。

⌐**こり・ごり**［懲懲］（名、副）「こりこり」に同じ。

⌐**ごり・ごり**（名、副）㊀「こりこり」の意を稍や強めていふ語。㊁力を入れて引き擦（ス）るさまにいふ語。「―こする」。

こりしやう ヨウ［凝性］（名）㊀物事に深く心を注ぐこと。何事につけても熱中する性質。㊁風雅(フウガ)の意匠を好むこと。

卄**こりずまに**（副）以前の事に懲りずに。改めずに猶ほ引續きて。あやうこりーなく。「ー、またもなき名は、たちぬべし」。

卄**こりたき**［香燒］（名）堂の異稱。（齋宮の忌詞）。

（**ごりつ**［股栗］（名）おそれてわなゝく身ぶるひすること。ふるひわなゝくこと。

（**こりつ**［孤立］（名）㊀たすけ無きこと。一本だち。ひとりだち。獨立。「ーして事を爲す」。㊁對立するもののなきこと。其物ばかりにてあること。――**ぎむ**［孤立義務］（名）【法】權利と對立せざる義務、即ち、兵役義務・納税義務の如きこれなり。

こりはつ てつつるてよつれ［懲果］（自、下二）いよいよ懲る。いたく懲る。

（**ごりむちゆう**［五里霧中］（名）（廣さ五里許もあるきりの中の義）心跡はれ又は心亂れて、思案のつかぬ狀態にいふ語。「く開け」。

（**こりや**（感）目下(メシタ)のものを呼びかくる語。「ーよ」。

（**ごりやう** リヤウ［御領］（名）領地の敬稱。

（**ごりやう** リヤウ［御靈］（名）㊀古昔、陰陽寮にて祭りし疫病神の稱。㊁たゝりをなす人の怨念。をんりやう。㊂みたま。

（**こりよ**［顧慮］（名）かへりみておもひはかること。後事を心配すること。「ーして事を行ふ」。

（**こりよ**［胡虜］（名）㊀えびす。蠻民。「何日平ー」。㊁とりことなりたる蠻民。

（**こりよう**［古陵］（名）古きみさゝぎ。「ーあり」。

（**ごりよう**［呉綾］（名）呉の國より渡來したるあや。

ゴリラ［Gorilla］（名）【動】猿猴類に屬する獸、「アフリカ」に產す、身長七尺に達す、全體黑褐色にして面部黑く、性質猛惡にして腕力強大なり。（大猩猩）。

〜**こりる**［懲］（自）「こる」の訛。

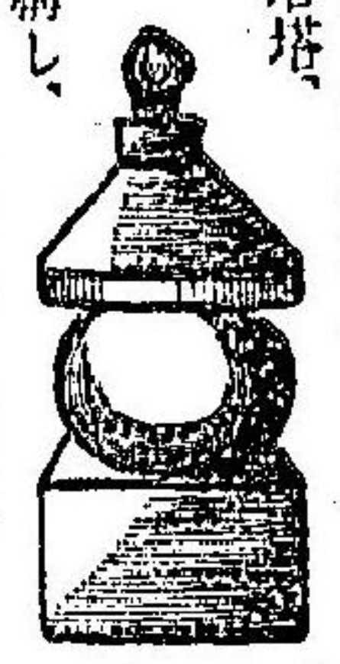
（**コーリン**［火鈴］（名）（字の唐音）手にて振り鳴らす一種の鈴。つりがねの如き形のもの。

こりん［小輪］（名）輪狀の小さきこと。「ーの朝顏」。

（**ごりん**［五倫］（名）人生の最も親しき五つのあひだがら、即ち、君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の稱。

（**ごりん**［五厘］（名）㊀一錢の半額。半錢。㊁寄席の下駄番にて、落語家又は淨瑠璃語などより、一名每に五厘づゝ、歩合を取り立つる人。（東京の方言）。

（**ごりん**［五輪］（名）（い）【佛】地・水・火・風・空の五體の稱。（ろ）「ごりんたふ」の略言。――**くだき**［五輪碎］（名）相撲(スマフ)の手、五輪殘らず碎きつぶすとの義。――**たふ** トウ［五輪塔］（名）【佛】五個の石を積み重ねたる石塔、地・水・火・風・空に象(カタド)れるものにして、最上頂を如意珠形と稱し、次を半月、次を三角、次を圓、次を方と稱す。


［ごりんたふ］

こりんご［小林檎］（名）【植】薔薇科に屬する木、山野に自生す、春に五瓣小形の白花を開く、實は櫻に似て秋熟す。（棠梨）。

こりんたう トウ［小鈴糖］（名）一種の菓子、金平糖に似て中の空虛なるもの。

こる らりるるれれ［凝］（自、ら四）㊀よりかたまる。あつまりよる。凝集す。「油がー」。㊁一心に深く思ひ込む。又、精神を集注す。㊂ふける。すさむ。㊃風雅(フウガ)の意匠をなす。

こる らりるるれれ［伐］（他、ら四）木を伐る。きこる。「薪をー」。（樵）。

こる らりるるれれ［梱］（自、ら四）荷造す。こうる。（括）。

こる りりるるれよ［懲］（自、ら上二）前非を悟(サト)りて再びせざらんと思ふ。失敗を悔(ク)いて深く惱む。「こりて手を出さぬ」。

コルク［Cork］（名）「コロップ」に同じ。

こるめ［孕女］（名）はらみ女。

卄**こるもは**［凝海藻］（名）【植】「ところてん」の古名。

（**こるゐ**［古壘］（名）古昔のとりで。昔時の城壁。

これ［是、此、之、斯］（代）㊀身に最も近き物事に用ふる代名詞。それ又はかれ等の對。「ーを取る」。（之）。㊁此時。いま。「ーからさき」。

これ［是之］（感）㊀漢文にて句調を強むるに用ふる語。「何憚ー有」。㊁人を呼び掛け又は注意を加ふる時などにいふ語。こら。「ーよく聞け」。

（**これい**［古禮］（名）古昔行はれし儀式又は禮法。

（**ごれいや**［御靈屋］（名）おたまや。みたまや。

（**ごれう** リヨウ［御料］（名）㊀飯の敬稱。㊁使用又は供給の敬稱。㊂皇室の御財產又は御料地。㊃むすめ。「嫁ー」。――**ち**［御料地］（名）皇室の御所有に屬する土地。――**にん**［御料人］（名）㊀卄官女の古名。㊁他人の妻の敬稱。（京阪地方の方言）。「ー樣」。（御寮人）。

（**ごれうきよく** リヨウ［御料局］（名）宮內大臣の統轄の下に屬し、皇室世傳の御料及普通に屬する財產會計を掌理する所、全國內須要の地に支廳又は出張所を置く。――**ちやう** チヤウ［御料局長］（名）御料局の長官、局務を總理し局員を監督するもの。

これかれ［是彼］（代）これとあれと。「ーあつまりて、よひより酒のみなどす」。

（**これき**［古曆］（名）古昔に使用せしこよみ。

これこれ［此此］（名）かくかく。うん〳〵。

〔**これしき**［是式］（名）これくらゐ。これほど。こればかり。「ーの事には恐れぬ」。

これによりて［由是］（接）このわけゆゑに。この故に。されば。――**これをみれば**［由是觀之］前條に同じ。

これはこれは ワ ワ（感）物事の意外なるに驚歎していふ語。「ーとばかり花の吉野山」。

これほど［是程］（名）このくらゐ。かくばかり。

コレラ［虎列剌＝Cholera］（名）「コレラ」菌によりて發生する劇烈なる傳染病、腹鳴りて劇(ハゲ)しく吐瀉し、殊に米の汁の如きものを下痢するを常とす、これ「コレラ」菌の毒を吸收したる淋巴液なり。――**きん**［虎列剌菌］（名）「コレラ」の病原となる黴菌、「ドイツ」國人「コッホ」の發見にかゝる、されど此菌は胃中の鹽酸のために撲滅せらるべきものなるが故に、胃の健全なる人は其病害を受けずといふ。

（**これん**［瑚璉］（名）（論語に出づ）支那の古代に黍稷を盛りて宗廟に供へし重器。轉じて、高く拔き出でたる器量又は國政に參與する器量にいふ語。

〜**ごれん**［御簾］（名）貴人の妻。（備前・備後の方言）。

ごれんちゆう［御簾中］（名）㊀公卿の妻の敬稱。㊁すべて貴人の妻の敬稱。

ころ［頃］（名）㊀ころほひ。ぢぶん。「寺しもーは衣更着の」。㊁ほど。又、しほ。

〔**ころ**［轉］（名）㊀「ころばし」の略言。㊁尺八を吹く手、五穴をあけ、一穴及二穴を指にてかはるがはるうちて、吹き鳴らすこと。

（**ころ**［胡盧］（名）㊀ひさご。ふくべ。（壺盧）。㊁笑ひ聲の喉(ノド)に籠(コモ)ること。くつくつと笑ふこと。

〔**ゴロ**［呉絽］（名）「ゴロフクレン」の略言。（呉羅）。

〔**ごろ**（名）「ごろつき」の略言。「羽織ー」。

（**ごろ**［語路］（名）㊀言語又は文句の調子。口調。「ーのよい文」。㊁「ごろあはせ」の略言。――**あはせ** ワセ［語路合］（名）地口の一種、普通に呼びなれたる語の語路にあふやうに、異なる文句をつくること。

――**ごろ**［頃］（接尾）㊀或語に添へて、其時分にの意を表はす語。「冬の中ー」。㊁或語に添へて、以來又はつねにの意を表はす語。「月ー」、「日ー」。

ころあひ イア［頃合］（名）㊀適當なる時機。しほ。㊁適當なる程度。ほど。

（**ころう**［固陋］（名）見聞狹(セマ)くしてかたくななること。舊習を守りて改進を好まぬこと。

〔**ゴロウ**［呉絽］（名）「ゴロ」の轉。

ころがき［轉柿］（名）澁柿の果實の皮を去りて、日に干(ホ)したるもの、色黑くして上に白粉の如きものあり、味甚だ甘し。（胡顏柿、乾柿）。

ころがす さしすすせせ［轉］（他、さ四）ころばす。

ころがる らりるるれれ［轉］（自、ら四）ころぶ。

卄**ころく**（名）鴉などの鳴聲。（古昔のあづま語）。

〜**ころくぞめ**［小六染］（名）一種の染模樣、俳優嵐小六の着物より始まれるものなりといふ。

（**ころくわ**［胡蘆科］（名）【植】一年生の草本にして蔓延なり、合瓣花冠をなし、果實は多肉にして食用に供すべきもの多し、きうり・うり等これに屬す。

〔**ころげる**［轉］（自）「ころがる」の訛。

〜**ころころ**（名、副）㊀ころがり行くさまにいふ語。㊁鈴などの鳴る音。

〜**ごろごろ**（名、副）㊀あちらこちらに轉(コロ)がりゐるさまにいふ語。㊁車輪などの軋(キシ)りて響く音。（轔轔）。㊂雷鳴などのとゞろき響く音。（轟轟）。

ころして［殺手］（名）人又は家畜を殺す人。

ころしも［頃］（接）其をり。其とき。

ころす さしすすせせ［殺］（他、さ四）㊀命を絕つ。死なしむ。（害、戮、屠）。㊁活動をおさへとゞむ。「息をー」。㊂質におきて流す。

〔**ごろた**（名）㊀材木の丸きれはし。㊁「ごろたいし」の略言。――**いし**（名）地面にころがりてある石。

コロタイプ［Collotype］（名）一種の寫眞版、殆ど「アートタイプ」と同一なれど、たゞ下塗に水硝子を用ふるが故に、日光に曝(サラ)す要なきを異なりとす。

コロヂオン［Collodion］（名）【化】火綿の一種を「アルコホル」と「エーテル」との混合液に溶解し、通常これに少量の沃化「アンモニウム」を加へたるもの、寫眞術に使用す。

〜**ごろつき**［破落戸］（名）㊀一定の住所も職業もなく、漂泊してゐる惡漢。ならずもの。（無賴漢）。㊁他人の弱點に乘じて、不當の利益を強請する惡漢。

〜**ごろつく** かきくくけけ（自、か四）ごろごろ音す。

〜**ごろつく** かきくくけけ（自、か四）㊀ころがりてあり。㊁さすらふ。さまよふ。㊂ごろつきの行爲をなす。

コロッケ（名）（「フランス」語 Croquette）一種の料理、牛肉をきざみて、蒸したる馬鈴薯・小麥粉等を交へ、これをかためて油にて揚げたるもの。

コロップ（名）（Corkの訛）壜の口に栓(セン)とする櫨屬の樹皮、彈力ありて輕し。――**ぬき**（名）壜の栓の「コロップ」を拔くための具、多くは尖頭ある鐵に螺旋を裝置したるものにして、これを「コロップ」の中に旋入し置きて拔きとる。

コロナ［Corona］（名）白光の條を見よ。

〔**ころね**［轉寐］（名）其まゝ、其處にたふれて假寐すること。「ーして風を引く」。

⌒ころばか·す(さしす/すさせせ)[轉](他、さ四) ころばす。

·ころばし[轉](名) ①ころばすこと。②木石などの重きものを動かすとき、其下に敷く圓き棒の類。

ころば·す(さしす/すさせせ)[轉](他、さ四) ①くるくる廻轉せしめて進(ス)る。ころがす。まろばす。②よこにす。たふす。こかす。③淫賣婦をかふ。

⌒ころばせる[轉](他) 「ころばす」の訛。

⌒ごろはちぢやわん[五郎八茶碗](名) 底の深き粗製の茶碗。

++ころび[嘖](名) ころぶこと。しかり。「稜威の—」。

ころび[轉](名) ①まろぶこと。たふるゝこと。②天主教の禁法、切支丹宗門を改めて佛教の內に入ること。(德川時代の言)。(回心)。③淫賣。——**がき**[轉蠣](名)【動】岩石に附着せずして、海中にころびある牡蠣。なつがき。——**ね**[轉寐](名) かりね。うたゝね。(假寐)。

++ころ·ぶ(ぶばびぶぶべべ)[嘖](他、は四) しかる。せむ。

ころ·ぶ(ぶばびぶぶべべ)[轉](自、は四) ①くるくる返へりて進む。ころがる。まろぶ。②よこになる。たふる。③切支丹宗を改宗す。(德川時代の言)。④淫賣をなす。

ゴロフク[呉絽服](名) 「ゴロフクレン」の略言。

——**レン**[呉絽服連](名) (「オランダ」語、Grofgreinの訛)西洋の毛織物、もと多くは駱駝の毛もて製したりしが、今は羊毛又は麻·綿などを雜(マジ)へて織る。(平郎網)。

++ころ-ぶ·す(さしす/すさせせ)[轉臥](自、さ四) ころびふす。

コロボックル(名) (蕗の下の人の義)「アイヌ」の傳說にて、最も古く我國に住したりといふ人種の名。

ころ-ほひ(イ/オ)[頃](名) ①ころ。とき。②ほど。あは。「此—ならばよからん」。(比)。

⌒ころ-まけ[轉負](名) たやすく負くること。

ころも[衣](名) ①人の身體に着(キ)る物の總稱。きもの。きぬ。②僧の着る衣服。ぢきとつ。(納衣)。③「テンプラ」などの外面につくるもの。——**がへ**(エ/ガ)[更衣](名) ①季節に應じて衣服を更(カ)ふること。②++古昔、四月及十月に、其折々の衣服に着かへしこと。③催馬樂の曲名。——**づつみ**[衣包](名) 衣服をつゝむ巾。ふくさ。ふろしき。(衣幞、帊)。——**で**[衣手](名) 袖。「我—に雪はふりつゝ」。++——**のくび**[衣首](名) えり。小襟。——**のすそ**[衣裾](名) ①裾に當たる衣の部分。「君がため—を、濡らしつゝ」。②裾(キヨ)。——**ばこ**[衣箱](名) 衣類を入れおく箱。——**へん**[衣偏](名) 漢字の偏の名、袍·袖等の字の左にある衤の字、字書にて、衣の部に屬す。

⌒コロリ[虎列拉](名) 「コレラ」の訛。

ころり(名、副) ①突然に倒るゝさまにいふ語。又、倒れ寐るさまにいふ語。「—となる」。②わけもなきさま又は不意なるさまにいふ語。

⌒ごろり(名、副) 前條の意を稍々強めていふ語。

++ころ-ろ·く(かきくくけけ)[嘶咽](自、か四) 咽乾きてころころと鳴る。

コロロフォルム(名)【化】「クロロフォルム」に同じ。

こわ-いろ[聲色](名) ①音聲のさま。こわね。②俳優などのせりふのいひ方の眞似(マ子)。——**をつかふ** こわいろの眞似をなす。

(ご-わう(ワウ/ヲウ)[牛黃](名) 牛の膽に生ずるばふんせき。

(ご-わう(ワウ/ヲウ)[牛王](名) (生土(ウブ)の誤なりとも、頭の字體の變れるなりともいふ)祇園又は八幡若しくは熊野などの神社より出だす牛王寶命又は牛王寶印と記せる護符。——**うり**[牛王賣](名) 古昔、牛王を賣り歩きし人、おもに比丘尼なりき。

(こわう-こんらい(ワウ-ッ/ウ)[古往今來](名、副) 古より今に至るまでの間。

こ-わき[小脇](名) わき。「—に抱く」。

こ-わきざし[小脇差](名) 脇差より小さき刀。あひくち。短刀。(匕首)。

(こ-わく[蠱惑](名) たぶらかし欺くこと。だますこと。「人心を—す」。

こ-わけ[小分](名) ちひさき區分。

こわ-ざし[聲差](名) 聲の樣子。こわいろ。

++こわ-ざま[聲樣](名) こゑのさま。

++こわ-だえ[聲絕](名) 聲のとだゆること。

こわ-だか[聲高](名) 高き聲。「—にいふ」。

こ-わたり[古渡](名) ふるく渡來したる外國の製品。「—唐棧」。

こわ-づかひ(カイ-ッ)[聲遣](名) 口をきくさま。ものいふさま。

++こわ-づくり[聲作](名) せきばらひ。しはぶき。

++こわ-づく·る(らりる/るれれ)[聲作](自、ら四) せきばらひす。しはぶきす。

++こわ-づくろひ(ロイ-ック)(名) 「こわづくり」に同じ。

こ-わっぱ[小童](名) 年齡幼(イトケナ)きもの又は未熟ものなどをいやしめていふ語。——**やらう**(ロウ)[小童野郞](名) 前條に同じ。

こわ-ね[聲音](名) 人の聲のさま。おんせい。おんじやう。

++こわ-ぶり[聲振](名) 歌ふさま。

++こわ-まね[聲眞似](名) 他人の口まね。

こ-わらべ[小童](名) こども。どうじ。

こ-わり[小割](名) ①小さきさわり。②小さく挽(ヒ)き割りたる材木。

++こわ-わざ[聲技](名) 聲音を用ふる技術。

++こ-ゐ[木居](名) 鷹の木にとゞまり居ること。——**どり**[木居鳥](名)【動】鷹の異稱。

(ご-ゐ[五位](名) 「ごゐさぎ」の略言。——**さぎ**

[五位鷺](名)【動】涉禽類に屬する鳥、嘴長くして全體角質なり、背部は蒼黑色、腹部は白色に黃色を帶び、脚は長くして黃色なり、古昔、近衞帝が神泉苑に於て御宴を催したまひしとき、これに五位の位を授けられたればとていふ。(鵁鶄)。

(こ-ゐん[雇員](名) やとひて使用する人。やとひ。

こゑ[聲](名) ①物體の振動より生ずる音波が、聽官に達するによりて起る感覺。おん。おと。ひびき。ね。②人類又は動物の發聲器より出づるおん。おんじやう。③いひふらし。又、ひやうばん。④いきほひ。又、ほまれ。——**をかく** 呼びかく。

(ご-ゑい[護衞](名) そばをかためて守ること。つきそひまもること。又、其人數。——**へい**[護衞兵](名) 護衞のために付けられたる兵士。

こゑ-がかり[聲掛](名) 目上より其ものに對して、特別の思召又は沙汰ありしこと。

こゑ-かけ[聲掛](名) 呼びかくること。

こゑ-がはり(ワリ-ガ/ワリ)[聲變](名) 聲ざしの變(カ)はること。又、其年齡。

こゑ-がら[聲柄](名) 聲の出づるさま。こわざま。こわぶり。こわいろ。こわざし。

こゑ-ごゑ[聲聲](名) 個々の聲。又、人々の言。——**に**[聲聲](副) 一同の聲にて。個々の聲にて。

こゑ-だすけ[聲援](名) ①他のうたふ傍より、聲をそへたすけてうたふこと。②たすくる勢を示して、力をそふること。せいゑん。

(こ-ゑつ[胡越](名) (支那の北にある胡國と南にある越國との義) ①相互の極めて疎遠なること。又、相互に嘗て面識なきこと。②北方と南方と。

(ご-ゑつ[呉越](名) (支那の呉國と越國との義) 相互の仲の極めて惡しきこと。

こゑ-の-あや[聲文](名) 聲の曲折、聲の調子。

++こゑ-の-はかせ[音博士](名) おんはかせ。

⌒こゑ-ばん[聲番](名) 芝居にて、揚幕の邊などに居て、役者の出入に聲をかくる人。

(こ-ゑん[故園](名) ふるさと。こきやう。

(こ-ゑん[古園](名) 設けられてより久しく年を經たる園。

++こ-を[小緒](名) 半臂(ハンピ)の紐。

こ-をけ[小桶](名) 小さき桶。

こ-をとこ[小男](名) ①わかもの。わかうど。②體格の小さき男。

こ-をどり[小躍](名) 喜びて躍ること。(雀躍)。

こをとろ-ことろ[子捕子捕](名) 小兒の遊戲、數人の小兒おのおの前のもの、帶を握(ツカ)みて前後に連(ツラ)なり、その先端のもの親となり殿後のもの子となる、別に一人鬼となりて、親の前より迂回して子を捕(ト)らへんとするを、親のこれを防ぐにつれ、一列のものすべてこれに從ふ、子が若し鬼に捕はるれば、代はりて鬼となる。

こ-をんな[小女](名) ①幼年の女。少女。②幼年の下女。③身體の小なる女。

++こをろ-こをろ(名、副) 潮の漸次に凝(コ)るさまにいひし語。「—にかきなし」。

(こん[鯤](名) (莊子に出づ) 想像上の大魚、大いさ數千里、北溟に居るといへり。

(こん[坤](名) ①易の八卦の一、☷の象なるもの、地又は皇后若しくは柔順にして物を載する德等を表はす。②方角の一、西と南との間。にしみなみ。ひつじさる。

(こん[痕](名) あと。あとかた。形跡。

(こん[魂](名) 精神の靈。たましひ。「—は天に歸す」。

(こん[婚](名) けつこん。えんぐみ。「—を求む」。

(こん[紺](名) 青と紫との合ひたる色。

(こん[今](名) いま。現世。現在。「去來—」。

(こん[根](名) ①【植】植物の莖の下部にして養分を吸收する所、生長の時期によりて一年生·二年生·多年生に區別し、生存の位置によりて、地根·水根·氣根·寄生根に區別す。②【化】電解物の解離して「イオン」となるべきものが、解離せざる分子中に存する間の稱、例へば銅根(Cu)硫酸根(SO_4)の如し。③【數】方程式を滿足せしむる未知數の稱、例へば $3x+7=13$ の方程式に於て、x に2を與ふるときは滿足するが故に、2は此方程式の根なり、又、乘根の略稱。④もと。もとゐ。おこり。⑤物事に堪へ得る氣力。「—氣」。⑥【佛】心の事物に對する作用。六根の元氣。「上—」「下—」。

(—こん[獻](接尾) 宴席にて、杯を他にさす度數を數ふる語。「酒三—」。

(ごん[艮](名) ①易の八卦の一、☶の象なるもの、動靜時を得る德を表はす。②方角の一、北と東との間。ひがしきた。うしとら。

(ごん[權](名) ①そへ。(副)。「—の頭」。②かり。(假)。③臨機。又、方便。④「ごんさい」の略言。

⌒ごん(名) 鐘の音。「—となる鐘」。

(こん-あつ[根壓](名)【植】根より吸收する水の壓力。

(こん-い[袞衣](名) 袞龍の御衣。天子の御衣。

(こん-い[懇意](名) ①ねんごろ。しんせつ。②交情の親密なること。じゆつこん。

こん-いろ[紺色](名) 「こん」(紺)に同じ。

(こん-いん[婚姻](名) ①夫婦となること。えんぐみ。けつこん。②【法】一男一女が夫婦の關係を結ぶ法律行爲、其成立の要件は、男女が一定の年齡に達したること、近親の血族にあらざること、互に配偶者なきこと、當事者及父母の承諾及屆出等にして、其效力は、妻は夫の家に入ること、夫妻同居の義務を負ふこと、互に

扶養の義務を負ふこと、夫は妻の財產を管理し使用收益をなすこと等なり、死亡又は離婚によりて解除せらる。

(こん-えい[昆裔](名) ちつゞき。子孫。

(こん-か[婚嫁](名) えんづき。よめいり。

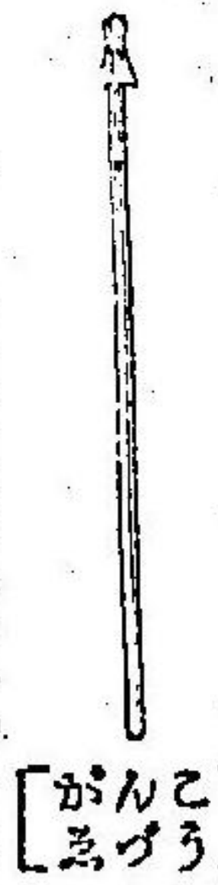
(こん-か[婚家](名)【法】婦人の結婚したる夫の家。

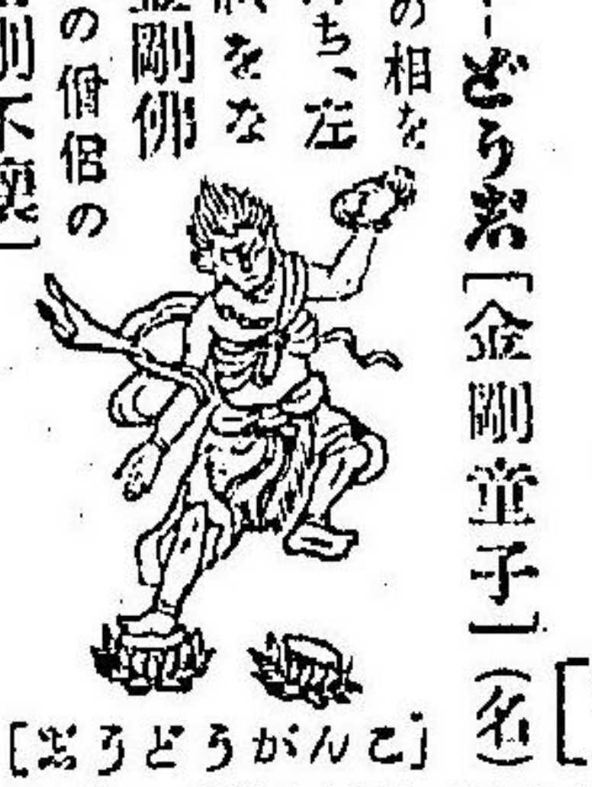
(こん-か[言下](名) 一言のもと。

(こん-かう[混淆](名) 入り雜(マジ)ること。(溷淆)。

(こん-がう[根號](名)【數】冪根を表する符號即ち$\sqrt{\ }$の稱、$\sqrt{a}$はaの平方根にして、$\sqrt[n]{a}$はaの第n乘根なり。

(こん-がう[金剛](名) ㊀【鑛】「こんがうせき」に同じ。㊁【佛】(金剛石は百鍊すれども消せず玉を截(キ)ること泥の如く、方寸にして數十里を照らす、帝釋天の所執にして、よく修羅を滅すといふ義に出づ)堅固にして破れざること。又、无明を照破すること。㊂【佛】「こんがうヤシャ」又は「こんがうざん」の略言。㊃「こんがうざうり」の略言。㊄芝居役者の許に、奉公づとめするもの。——かい[金剛界](名)【佛】菩提の性即ち智德。胎藏界の對。——けつ[金剛橛](名) 護摩壇の四方の柱。——ざうり[金剛草履](名) 藁にてつくりたる草履、形普通のものより大いなり。——ざうわう[金剛藏王](名)【佛】金剛童子に同じ。——さん[金剛鑽](名)【鑛】金剛砂に同じ。——しや[金剛砂](名) ㊀【鑛】ざくろ石の粉末となりたるもの、玉石などをみがくに用ふ。(金剛硝)。㊁相撲(スマフ)にて土俵入のとき、兩手に揉(モ)み込む砂の稱。——しよ[金剛杵](名) 密敎などにて、菩提心の表として用ふる杵、獨股・三股の類。——しん[金剛心](名) 一向專念して移らざる心。信仰極めて堅固なる心。——じん[金剛神](名)【佛】如來の一切の秘密事迹を知り、五百の夜叉と神とを領して、千佛の法を護すといふ二つの神、多くは共に、全身を裸出したゞ腰部に衣裳をまとひ、頭猛悍忍の相をなす、この二神の像を寺門の左右に分ち置く、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といふ。こんがうりきし。にわう。——せき[金剛石=Diamond](名)【鑛】純粹なる炭素の結晶物、天然に現出するものは、多くは細小にして正八面體をなし、又、多くは透明無色なれども、又、青・黃・綠・褐等の色を帶ぶ、硬度最も高く、光澤極めて美なり、光線を屈折する力甚だ強く、暗所にありても幾分か光輝を發す、且產額の稀少なるがため、惟一の寶石として珍重せらる。「ダイヤモンド」。——ち[金剛智](名)【佛】如來の智慧。——ぢやう[金剛錠](名)【鑛】金剛砂の一名。——づゑ[金剛杖](名) 修驗者の持つ杖、白木にして八角なるもの。——どうじ[金剛童子](名)【佛】菩薩の一、忿怒の相を現し左手に三股を持ち、左足を揚(ア)げたる狀をなす。——ブツし[金剛佛子](名)【佛】密敎の僧侶の稱。——ふゑ[金剛不壞](名) 極めて堅固にして破れざること。——ヤシヤ[金剛夜叉](名)【佛】明王の一、北方を守護し、惡魔を降伏す、三面六臂にして弓・箭・刀・輪・鈴・杵を執る。——りう[金剛流](名) 能樂の一派、金剛權守を祖とす。——りき[金剛力](名) 金剛力士の如き力、最も強き力。——りきし[金剛力士](名)【佛】金剛神に同じ。


[こんがうづゑ]


[こんがうどうじ]

艹こん-かき[紺搔](名) こんや。こうや。

こん-かすり[紺飛白](名) 紺地に白きかすりのある模樣。又、其織物。

(こん-かふ[混合](名) ㊀まじりあふこと、又、まぜあはすこと。㊁【數】價の知れたる各原料を混合すべき割合を求むる計算、又、各原料の價及混合の割合を知りて混合物の價を求むる計算。——ひれい[混合比例](名)【數】前條(二)に同じ。——ぶつ[混合物](名) ㊀二つ以上のもの、まじりあひ又は二つ以上のものをまぜあはしたるもの。㊁【化】化學的作用なき二つ以上の物質をまぜあはせたるもの。化合物の對。

こん-がみ[紺紙](名) 紺色の紙。

コンガラ[矜羯羅](名)【佛】(梵語 Kinkara、奴隷の義)不動明王のわきだちの美少年。

⌒こんがらか・る(自、ら四) こぐらかる。

(こん-かん[根幹](名) ㊀ねとみきと。㊁ねもと。

(こん-き[根氣](名) 物事に堪へ忍び得る精力。こん。精根。氣根。

(こん-き[婚期](名) よめいりする年頃。よめいりどき。

(こん-ぎ[婚儀](名) 結婚の儀式。こんれい。

(こん-ぎ[坤儀](名) ㊀大地の異稱。坤輿。㊁皇后の御德行。

(こん-ぎく[紺菊](名)【植】菊科に屬する草、花は紺色舌狀にして頭狀花序をなす、葉は多少卵形にして缺刻あり、觀賞用として栽培せらる。(馬蘭)。

(ごん-ぎやう[勤行](名) つとめ。修行。

(こん-きやく[困却](名) こまること。くるしむこと。

⌒コンキユー(名)「コンキユーバイン」の略言。——バイン[Concubine](名) めかけ。かこひ。

もの。

(こん-きゆう[困窮](名) くるしみせまること。貧乏きはまること。

(こん-きよ[根據](名) ㊀ねもと。もとゐ。㊁はんぢん。ねぢろ。——ち[根據地](名) 根據となす場所。「[illegible]—」。

(こん-ぎようど[混凝土](名)「コンクリート」に同じ。

(こん-ぎり[五寸切](名) 小さき鱧(ハモ)をすぼしにしたるもの、細かく劉(サ)み、膾(ナマス)として食用に供す。

(こん-く[困苦](名) くるしみなやむこと。なやみわづらふこと。くるしみ。なんぎ。

(ごん-く[言句](名) 單純なる短きことば。一きりのことば。ことば。「—も無し」。(文句)。

(こん-ぐ[金鼓](名) ㊀佛家の樂器。ふせがねの類。ひらがね。㊁わにぐち。

(ごん-ぐ[欣求](名) よろこびてねがひ求むること。「—淨土」。——だいはう[欣求大寶](名)【佛】心より欣びて佛法の正道を求むること。

(こん-く-せつ[金口說](名)【佛】佛の說法。

⌒こんぐらか・る(自、ら四) こぐらかる。

こん-くらべ[根比](名) 何れが根氣のまされるかを競ふこと。根氣を比べ合ふこと。

コンクリート[混凝土=Concrete](名)「セメント」と砂とを水に煉(ネ)りて製したる漆喰(シックヒ)に、砂利又は割栗を混じたるもの、これを擣(ツ)きかためて、多量に土木工事に使用す。

(こん-くわ[混和](名) ㊀よくまじりあふこと。又、よくまぜあはすこと。㊁【法】各別の所有者に屬する二個以上のものが、混合融和して一體をなし、其各部分を識別する能はざること、例へば甲者所有の酒を乙者所有の酒の中に入るゝが如きこれなり。

(こん-くわ[混化](名) 混(マ)じりあひて前と異なる別の物となること。混じて一つの化合物となること。

(こん-くわい[今回](名) このたび。こんど。

こん-くわい[吼噦](名) (狐の鳴き聲より出づ)狐釣(キツネツリ)の狂言。

(こん-ぐわい[閫外](名) ㊀しきみの外。又、しきりの外。㊁外國への出征。又、外敵との戰爭。「—の臣」。

(こん-くわう[昏黃](名) くれがた。たそがれ。

(こん-くわん[悃款](名) ねんごろ。まこと。

(こん-くわん[根冠](名)【植】根の先端にある帽子樣のもの、根の柔軟なる細胞の增殖伸長の保護作用をなす。

(こん-ぐわん[悃願](名) ねんごろに願ひ賴むこと。(懇願)。

(ごん-ぐわん[權官](名) 定員外の官。かり。そへ。

(ごん-げ[權化](名) 神佛などが、權(カリ)に姿を化して此世にあらはるゝこと、又、其假に現じたりといふ姿のもの。

(こん-けい[根莖](名)【植】地下莖の一種、地中を橫走せる根狀の莖にして、許多の節を有し、各節より不定根を生ず、竹又は蓮等の地下莖これなり。

(こん-げう[今曉](名) けさ。今朝。

(ごん-げう[權敎](名)【佛】大乘に入る楷梯となる方便の敎、即ち小乘の如きこれなり。

(こん-げつ[今月](名) このつき。たうげつ。

(こん-げん[根元](名) おほもと。ねもと。おほね。こんぽん。(根源)。

(こん-げん[金言](名)「きんげん」に同じ。

(ごん-げん[權現](名) ㊀神佛が衆生濟度のために、化身して權(カリ)に此世に現はるゝこと。又、其現はれたる化身のもの。㊁昔時、神の尊號として用ひられし稱。「東照—」。

(こん-ご[今後](名) このゝち。以後。向後。

(ごん-ご[言語](名) はなし。ことば。げんぎよ。——だうだん[言語道斷] ㊀言語にてのべいふことの出來ぬこと。㊁もっての外のひが事。

(こん-こう[婚媾](名) えんぐみ。又、えんつゞき。

(こん-こつ[跟骨](名) くびすのほね。

(こん-こん(名、副) ㊀咳(セキ)をするさまにいふ語。㊁雨又は雪など降るさまにいふ語。

(こん-こん[渾渾、混混](名、副) ㊀水の盛んに流るゝさま又はにごりて流るゝさまにいふ語。㊁入りまじりたるさま又は分別なきさまにいふ語。

(こん-こん[懇懇](名、副) ねんごろなるさま又はくりかへして說くさまにいふ語。(悃悃)。

⌒こん-こん(名、副) 狐の鳴く聲、轉じて、狐の異稱。——ちき(名) 狐の異稱。

(こん-さい[根菜](名) おもに根を需用とする蔬菜、大根・蕪菁・人蔘等これなり。

(こん-さい[權妻](名) かりの妻。めかけ。てかけ。

(こん-さつ[困殺](名) 甚しくこまること。いと困(クル)しむこと。こまりきること。

(こん-ざつ[混雜](名) ㊀まざりてわけがたきこと。㊁入りくむこと。もめ。かっとう。

(こん-じ[恨事](名) うらめしき事。ざんねんなる事。

(こん-じ[今時](名) いま。いまどき。

(こん-じき[金色](名) こがねいろ。——ヤシヤ[金色夜叉](名) 高利貸の異稱。

(こん-じやう[根性](名) こゝろね。こゝろだて。おやうね。「いぢわる—」。

(こん-じやう[紺青](名)【鑛】ぐんじやうの稍や濃きものにして、細末として繪具とす。(金青)。

(こん-じやう[今生](名) 現世の生涯。この世。——のいとまごひ[今生暇乞](名) 死に

わかれ。死別。

（**ごん-じやう**［言上］（名）　申しあぐること。

（**こん-じゆんくわん-せうすう**［混循環小數］（名）　【數】小數點と循環する部との間に、循環せざる部分ある循環小數。

（**こん-しよく**［袞職］（名）　（詩經の語に出づ）㊀天子の天職、即ち國家を治めたまふ御事。㊁大臣宰相の職、即ち天子を補弼して國家を治むる職。

（**こん-しん**［懇親］（名）　㊀ねんごろ。したしみ。㊁したしみあふこと。交際をあつくすること。——**くわい**［懇親會］（名）　懇親のために催（モヨホ）す會合。

（**こん-じん**［金神］（名）　陰陽家にて祭る神、其ゐる方角に對して物事をなすは不吉なりとして、これを避く、其方角は甲己の歳は午・未・申・酉の方、乙庚の歳は辰巳の方、丙辛の歳は子・丑・寅・卯・午・未の方、丁壬の歳は寅・卯・戌・亥の方、戊癸の歳は子・丑・申・酉の方といふ。——**の-まび**［金神間日］（名）　一年の中、金神の方角に對して物事をなすとも差支なしといふ日、春は丑、夏は申、秋は未、冬は酉をいふ。——**よけ**［金神避］（名）　金神の方角を避けて物事をなすこと。——**むき**［金神向］（名）　方面の不吉なることにいふ語。

こん-ず［婚］（自、さ變）　夫婦の縁を結ぶ。

こん-ず［根］（自、さ變）　ねざす。もとづく。

こんず（名）　「はやず」（早醋）に同じ。

こん-ず［混］（自、さ變）　まじる。まざる。

こん-ず［混］（他、さ變）　まぜあはす。まず。

（**こん-すう**［根數］（名）　【數】根號を有する數の稱。又、乘根の稱。

（**こん-すう**［混數］（名）　【數】「たいぶんすう」（帶分數）に同じ。

（**こん-すゐ**［昏睡］（名）　㊀前後も知らずよく寐込むこと。㊁神氣おとろへ身體つかれて、たゞうつとりとしてねむりてあること。

（**ごん-ずゐ**［跟隨］（名）　後につきゆくこと。

（**ごん-ずゐ**［權萃］（名）　【植】油桐科に屬する木、葉は羽狀複葉にして、數個の小葉より成る、花は淡綠黃色にして圓錐狀に排列す。（野鴉椿）。

（**こん-せい**［懇情］（名）　ねんごろなるなさけ。

（**こん-せい**［懇請］（名）　ねんごろにねがふこと。

（**こん-せい**［今世］（名）　いまのよ。きんせい。

（**こん-せい**［混成］（名）　まぜあはしてつくること。又、まじりあひて出來ること。——**しゆ**［混成酒］（名）　酒精と酒類にあらざるもの（水の如きもの）とを混和するか、又は酒精と酒類とを混和するか、若しくは二種以上の酒を混和するかして作りたる酒類。——**りよだん**［混成旅團］（名）　歩兵一旅團に、適當の砲兵・工兵・騎兵其他各種の兵を加へて編制したる一部隊の稱。

（**こん-せう**［今宵］（名）　次條に同じ。

（**こん-せき**［今夕］（名）　こよひ。こんや。

（**こん-せき**［痕跡］（名）　あと。あとかた。

（**こん-せき**［今昔］（名）　いまとむかしと。——**の-かん**［今昔感］（名）　いまとむかしとを思ひくらべての感慨。「—に堪へず」。

（**ごん-せき**［權跡］（名）　入木道にて、祖たる人に次ぐ人の筆跡。

（**こん-ぜつ**［昏絕］（名）　目くらみていきたゆること。きぜつ。

（**こん-せん**［混戰］（名）　敵味方入り亂れて戰ふこと。

（**こん-せん**［混線］（名）　電信又は電話等の架線と架線と互に相接着して、彼我の電流相混ずること。

（**こん-ぜん**［渾然］（名、副）　㊀分別又は差別なきさまにいふ語。㊁圭角又は缺陷なきさまにいふ語。

（**こん-だい**［今代］（名）　いまのよ。

こん-だて［獻立］（名）　膳部に上（ボ）すべき肴などの次第。

（**こん-たん**［魂膽］（名）　㊀わけがら。㊁たくらみ。

（**こん-だん**［懇談］（名）　ねんごろにはなすこと。

（**こん-ぢ**［根治］（名）　㊀根本からをさめなほすこと。絕えて其物事なきやうにすること。ねだやし。㊁根本からをきまりなほりて、絕えて其物事の再生せざること。——**れうはふ**［根治療法］（名）　病氣の根治するやうになす療治。

（**こん-ぢく**［坤軸］（名）　地軸。

（**こん-ちゆう**［昆蟲］（名）　㊀おほくのむし。すべてのむし。㊁昆蟲類に屬する動物。——**るゐ**［昆蟲類］（名）　【動】節肢動物の一、概ね陸上に棲息す、氣管によりて大氣を呼吸し、頭・胸及腹の三區別判然たり、觸角は一對、頭は三對、脚も三對あり、概ね背上に二對の翅、腹部に二對の有節肢あり、てふ・ばつた・せみ等これに屬す。

‡**こん-づ**［濃漿］（名）　「こみづ」の音便。

（**こん-てい**［昆弟］（名）　あにおとゝ。兄弟。

（**こん-てい**［根底］（名）　ね。ねもと。

こん-でい［健兒］（名）　㊀‡古昔、兵部省の所屬にして、諸國に數百人配置せられし衛士の稱。㊁德川時代に、中間又は足輕の類の稱にもいへり。——**どころ**［健兒所］（名）　健兒の居りし所。——**わらは**［健兒童］（名）　幼年の健兒。

（**こん-でい**［金泥］（名）　金箔を粉にして、膠（ニカハ）の液に溶（ト）かしたるもの。

（**こん-てう**［今朝］（名）　けふの朝。けさ。

〔**ごん-てき**［權的］（名）　ごんさい。

（**こん-でん**［墾田］（名）　新に開墾したる田。

（**こん-てん-ぎ**［渾天儀］（名）　圓球の表面に日月星辰等天體を描（ヱガ）きたるもの、形恰も地球儀の如し、古昔はこれを天體の運行を測量するに用ひたり。

コンデンス-ミルク［Condensed milk］（名）　牛乳を煮つめ、砂糖を加へて甘味をつけたるもの、罐詰として貯へ得べきやうにし、小兒などの飲用に供す。

（**こん-ど**［今度］（名、副）　このたび。今回。

（**こん-どう**［金銅］（名）　黃金を雜ぜたる銅。

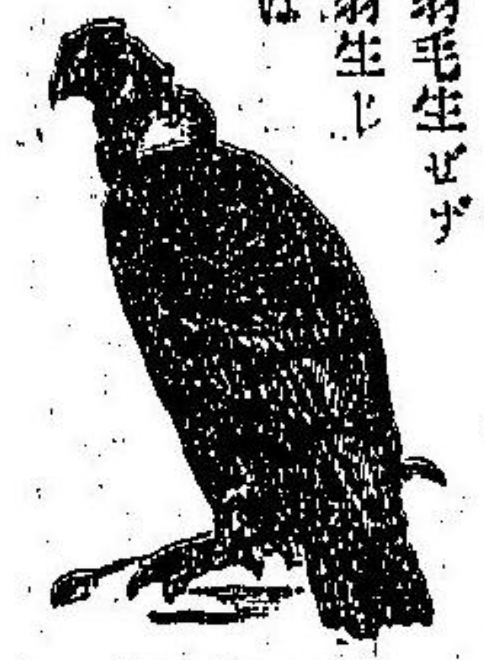
（**こん-どう**［混同］（名）　㊀まじりあひて一つになること。又、まぜあはして一つとなすこと。㊁【法】債權及債務が同一の人に歸したること。

（**こん-とく**［坤德］（名）　皇后の御德を申し奉る語。

（**こん-とく**［懇篤］（名）　ねんごろ。しんせつ。（懇切）。

こん-どさ［紺土佐］（名）　紺色に染めたる厚き紙、土佐國より出だす。

コンドル［Condor］（名）　【動】猛禽類に屬する鳥、鳥類中最大なるものゝ一にして、南「アメリカ」西部の高山に棲む、頭部は羽毛生ぜずして裸出し、頸部に白羽生じて恰も襟卷の如し、他は暗黑色の羽毛なり、性猛烈にして牛馬などを襲ふことあり。


「コンドル」

（**こん-とん**［餛飩］（名）　一種の食品、細かにしたる肉を、麪粉に包みて蒸したるもの。

（**こん-とん**［渾沌］（名）　天地開闢の始めに、物事の判然せざる狀態。又、物事の區別不分明なる狀態。（混沌）。

〔**こんな**　このやうな。「—物」。「—身分」。

（**こん-なん**［困難］（名）　くるしみなやむこと。わづらひくるしむこと。なんぎ。なやみ。くるしみ。

（**こん-にち**［今日］（名）　㊀この日。けふ。（本日）。㊁このごろ。いま。

‡**こんにつた**［今日］　こんにちは。けふは。（狂言などにて、互詞（セリフ）に力を入るゝ場合に用ふる語）。

（**こん-にやく**［蒟蒻］（名）　㊀【植】天南星科に屬する植物、莖は綠色にして大いなる球狀の地下莖を生ず、葉は三分して各部羽狀に深裂し、肉穗花序は延長して大形の佛燄を具す。㊁一種の食品、こんにやくだまを砕きて、蒸して製したるもの。（蒟蒻、鬼芋）。——**だま**［蒟蒻球］　こんにやくの球狀をなす地下莖の稱、用ひてこんにやくを製す。——**ばん**［蒟蒻版］（名）　「かんてんばん」（寒天版）に同じ。

（**こん-ねん**［今年］（名）　この年。ことし。（本年）。

こん-の-すそご［紺末濃］（名）　上部は白く下部を濃き紺色にそめたるもの。

〔**ごん-ばう**［牛蒡］（名）　【植】「ごばう」の訛。

（**こん-ぱく**［魂魄］（名）　精神の靈と體力の靈と。人類の精靈。たましひ。

コンパス［混撥子］（名）　（「オランダ」語Compas）㊀ぶんまはしに似て二叉をなす金屬製の器具、圖引に用ふるもの。㊁一種の測量器械、方位を測るもの。㊂羅針盤。

〔**ごん-ぱち**［權八］（名）　博徒などの居候。（東京の

（**こん-ぱふ**［困乏］（名）　資財乏しきこと。びんぼふ。

こん-ぱる-りう［今春流］（名）　能樂の一派、今春氏信を祖とす。

（**こん-ばん**［今晚］（名）　こよひ。今夜。

（**こん-ばん**［今般］（名、副）　このたび。今度。

コンピラ［金毘羅］（名）　（梵語Kumbhira）天竺の靈鷲山の神、我國にては讚岐國象頭山に祀るを最も有名なりとす。

（**こん-ぶ**［昆布］（名）　【植】褐色藻に屬する海草、體は帶の狀をなし、褐色にして體內に葉綠素を含有す、柔軟なれど強靱なり、往々數十丈に達す、食用に供し、又、祝賀などに用ふ。ひろめ。（海帶）。——**まき**［昆布卷］（名）　一種の料理、燒鮒又は燒きはぜ等を昆布の中にまき入れて、煮たるもの。こぶまき。

〔**ごん-べい**（名）　頭のつむじの役の稱。

（**こん-ぺい**［困斃］（名）　くるしみつかるゝこと。いたみつひゆること。

コンペイトー［金米糖］（名）　（「ポルトガル」語Confeitos）一種の菓子、氷蜜に饂飩粉を加へたるものに、炒（イ）りたる芥子を種に入れて、攪（カ）き回（マ）して製したるもの。氷掛。（毬花）。

（**ごん-べん**［言偏］（名）　漢字の偏の名、論・說などの字の左にある言の字の稱。

〔**ごん-ぼ**［牛蒡］（名）　【植】「ごばう」の訛。（畿內の方言）。

（**こん-ぼう**［棍棒］（名）　㊀てこ。ぼう。㊁普通體操に用ふる一種の器械、手許細く次第に膨大となりて、恰も德利の狀をなす。

〔**ごん-ぼち-ごめ**（名）　「ぼんぼちごめ」の訛。

（**こん-ぽん**［根本］（名）　こんげん。おほね。もと。（根基）。——**てき**［根本的］（形）　根本なるにいふ語。「—改革」。——**げんり**［根本原理］（名）　「きうきやうげんり」（究竟原理）に同じ。

（**こんぽん-か**［混本歌］（名）　和歌の一體、五・七・七の三句より成るもの。

コンマ［Comma］（名）　㊀歐文の句讀に施す點、又、記數の位取に用ふる點、即ち「，」。㊁普通の位地。又、單位。「—以下の人間」。——**バチルス**［Comma bacillus］（名）　「コンマ」の狀をなす微細なる「バチルス」。

（**こん-まう**［懇望］（名）　ひたすら望（ノゾ）むこと。ねんごろに望むこと。（切望）。

(こん-まう)[根毛](名)【植】根の表皮の細胞より出でたる絲狀のもの、根の古びたる處には存せず。

コンミッション[Commission](名) 周旋料。手數料。こうせん。

こん-むらご[濃村濃](名) 色の濃きむらご。

(こん-めい)[懇命](名) 深切なる相談。又深切なる心ぞへ。

(こん-めい)[渾名](名) あだな。

(こん-めい)[昏迷](名) 心迷ひて茫然としてあること。目先くらんで心亂るゝこと。「—した樣」。

(こんもり)(名、副) こもりて暗(クラ)きさまにいふ語。

コンモン-センス[Common sense](名) 常識。

(こん-や)[今夜](名) こよひ。こんばん。今宵。

こん-や[紺屋](名) 染物を職業とする人又は店。こうや。そめものや。

(こん-よ)[坤輿](名)【地載萬物如輿の句より出づ】大地の稱。地球。坤儀。

こん-ゆふ[今夕](名) このゆふべ。今夜。今晩。

(こん-ゆ)[懇諭](名) ねんごろにさとすこと。あつきせ

(こん-やく)[困厄](名) くるしみ。なんぎ。「つゆ。

廿こん-らう[軒廊](名) ㊀廊下。㊁古昔、禁中紫宸殿の東にありて、うらなひの占(ウラ)をなしゝ所。

(こん-らん)[混亂](名) 錯雜して亂れたること。亂れて秩序なきこと。いりみだるゝこと。(混淆)。

(こん-らん)[昏亂](名) 心くらみてみだるゝこと。智慧分別のなくなりて、道理のわからぬこと。

(こん-りう)[根瘤](名) ㊀根に生ずるこぶ。㊁荳又は莢などの根に、「バクテリア」の寄生によりて生ずる小粒狀のもの。

(こん-りふ)[建立](名) 堂・塔などを造り建(タ)つること。

(こん-りよう)[袞龍](名) 「こんりようのぎよい」の略言。——のぎよい[袞龍御衣](名) 古昔、天子の御禮服、色赤く、日・月・星辰・龍・蟲・火などを繡(ヌ)ひたるもの、大禮の時などに用ひ給ひたり。——のそで[袞龍袖](名) 天子の御衣の袖。轉じて、天子の御威德の下。おかげ。「—にかくる」。

(こん-りん)[混林](名) 多種の樹木より成る森林。

(こんりん-ざい)[金輪際](名) ㊀【佛】大地の底下の百六十萬由旬離れたる所、即ち地の最下底。㊁轉じて、物事の根底。

(こんりん-ざい)[金輪際](副) 底の底まで。どこまでも。「—聞かぬ」。

(こん-れい)[婚禮](名) 結婚するときの儀式。

(こん-ろ)[焜爐](名) 座敷などにて物を煮るに用ふる小さき竈、鐵製又は土製にして下部に口あり。

(こん-わ)[懇話](名) うちとけて話しあふこと。ねんごろなるものがたりすること。——くわい[懇話會](名) 懇意の人々のあつまりてなす談話會。

廿こん-ゑ[近衞](名) 「こんゑふ」の略言。——ふ[近衞府](名) 「このゑふ」に同じ。

(こん-ゑん)[渾圓](名) まろきこと。まどか。——きう[渾圓球](名) ㊀まろきたま。㊁地球の稱。

さ　ざ

さ 齒的摩擦音S即ち舌端を硬口蓋の前部に接して摩擦せしむる音と、母音「ア」との綴音。

ざ 「さ」の濁音、凡て「さ」と同じくして、たゞ摩擦音に聲帶の振動の伴ふを異なりとす。

(さ)[差](名) ㊀たがひ。ちがひ。㊁【數】一數より或數を減じたる値。「二數の—」。

(さ)[左](名) ㊀ひだり。㊁書きたる文句のひだりの方。「—の通相違無之候」。

(さ)[佐](名) たすけ。ほさ。「王者の—」。

(さ)[梭](名) 織機の附屬品。をさ。「—を投ず」。

(さ)[紗](名) うすぎぬ。さや。

(さ)[然](副) さやう。しか。「—思ひ給へど」。

さ—(接頭) ㊀或語に冠して、狹き意を表はす語。「—山」。㊁或語に冠して、早き意を表はす語。「—蕨」。㊂或語に冠して五月の意を表はす語。「—蠅」「—月」。㊃名詞又は動詞などに冠する無意味の語。「—牡鹿」。

—さ(接尾) 形容詞に添へて、これを名詞とする語。「歸るわびし—」「寂—」「遠—」「高—」。

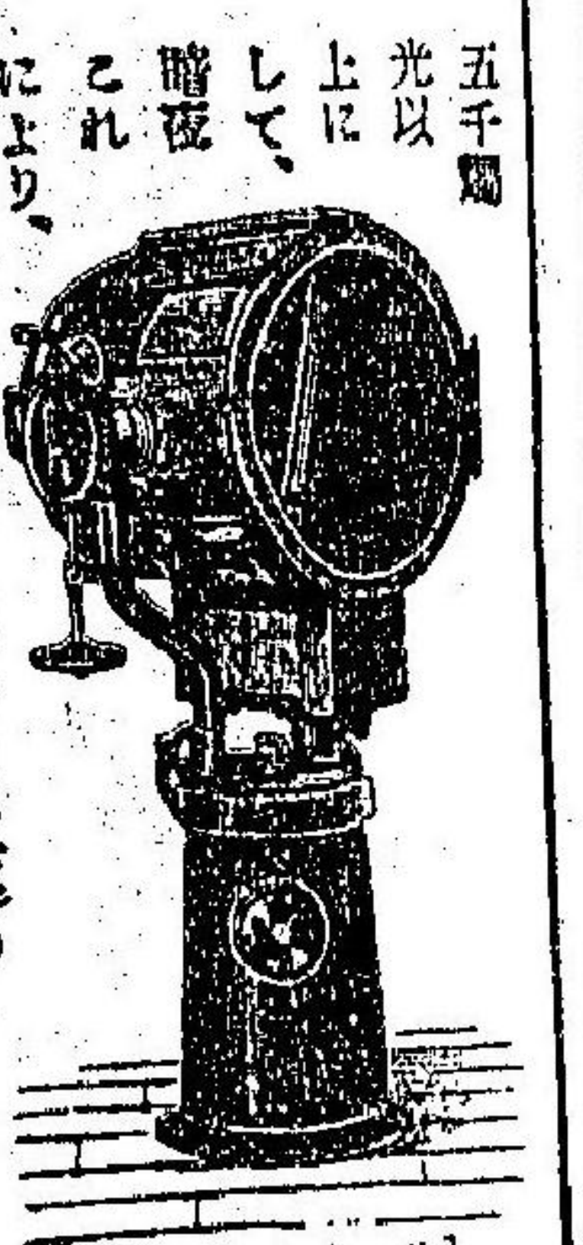
廿—さ(接尾) 或語に添へて、方向を示すに用ふる語。「國—」「歸る—」。(東北地方又は西國地方の方言)。

(さ)(感) ㊀人を誘(イザナ)ひ又は人を詰(ナジ)るときにいふ語。いざ。「—行かう」「—どうぢや」。㊁驚愕して發する聲。「—こまった」。

(ざ)[座](名) ㊀すわるべき場所。ゐどころ。㊁多人數の集會。㊂すべてものをすゑ置く場所の稱。「砲—十有二」。㊃ほしのやどり。星宿。㊄金具の下に添ふる裝飾。㊅德川時代に、官許を得て貨幣を鑄造せし所の稱。「金—」「銀—」「銅—」「七—」。㊆足利時代に、專賣店の稱。「—元」。㊇能樂を演ずる所。又、芝居を演ずる所。㊈坐禪をなすこと。「—を積む」。

(ざ)(接尾) ㊀佛像を數ふる語。「彌陀一—」。㊁里神樂(サトカグラ)の曲を數ふる語。「二十五—」。

サーチ-ライト[Search light](名) 強大なる光線を發射する一種の電燈、太き炭素棒を用ひたる弧光燈にして、器底の反射鏡により、強き平行の光線たらしむる裝置のもの、軍艦用のものは、其光力二萬五千燭光以上にして、暗夜これにより、二海里を隔てゝ明かに小舟を認(ミト)め得、多くは夜間敵艦艇の來襲を警戒するに用ひらる、(探海燈、探照燈)。


[サーチライト]

サーベル[洋劍](名)〔「オランダ」語Zabelの訛〕軍人の佩(オ)ぶる西洋風の刀劍。(洋刀)。——せいりやく[洋劍政略](名) 陸海軍の出身者によりて行はるゝ武斷政略の稱。——ないかく[洋劍內閣](名) 多數者若しくは主腦者が、陸海軍の出身にして且武斷政略を行ふ內閣の稱。

(さあ)(感) 「さ」の延言。

(ざあ-ざあ)(名、副) ㊀物の摩(ス)れ合ひて發する音。㊁雨などの絕間なく降る音。

(さあ-さあ)(感) 「さあ」を強めていふ語。

(さあ-さあ-さあ)(感) 「さあさあ」の意を稍や強めていふ語。

さあや[紗綾](名) 絖(ヌメ)の類のあやおり物。

(さい)(名)【動】「みごひ」に同じ。

(さい)[菜](名) ㊀やさい。あをもの。蔬菜。㊁めぐり。おかず。をへもの。「一汁三—」。(肴)。

(さい)[釆](名) ㊀いろ。いろどり。彩色。㊁あや。もやう。文彩。㊂さいく。かざり。華飾。㊃こと。わざ。事業。「風—」。㊄つかさ。やくめ。官職。「若き手—」。㊅ちぎやうちよ。食邑。㊆ぬさ。幣帛。㊇雙六の附屬具、小形の立方體にして、其六面に一・二・三・四・五・六の數を記し、投げ轉(コロ)がして、上面にあらはれたる數によりて石を行(ナ)る。(賽)。

(さい)[宰](名) ㊀をさとなりて物事をつかさどること。㊁をさとなりて物事をつかさどる人。つかさ。㊂天子の輔佐。さいしやう。㊃家臣の長。からう。しはいにん。㊄料理人。ぢだし方。

(さい)[犀](名)【動】哺乳類中奇蹄類に屬する獸、陸棲動物の中にて大いさ象に亞(ツ)ぎ、皮は皺襞多く極めて堅厚なり、每肢三蹄を具す、「インド」產の一種は、鼻頭に一角を有し、中央「アメリカ」產の一種は、鼻頭の前後に二角を有す。

(さい)[最](名) ㊀最も勝れたること。最も勝れたるもの。第一。「國中の—たり」。㊁かなめ。主要。

(さい)[才](名) ㊀たち。性質。㊁はたらき。能力。㊂たちのすぐれたること。又、はたらきの多きこと。㊃賢人。智者。「天下の—なり」。㊄杓目。又、容積。㊅勺の十分の一。

(さい)[齋](名) ㊀齋居の室。へや。㊁ものいみ。けっさい。

—さい[齋](接尾) 室又は人の雅號などの末尾につくる語。「仁—」「知不足—」。

(さい)[歲](名) とし。又、よはひ。「—月」。

(さい)[妻](名) ㊀つま。にようばう。かない。(室)。㊁【法】法律上正當の婚姻をなしたる女子が、其婚姻の關係存續中に有する身分。

(さい)[債](名) おひめ。かり。「負—」。

(さい)[彩](名) ㊀いろどり。いろ。㊁つや。ひかり。

(さい)[際](名) ㊀あひ。あひだ。㊁をり。とき。㊂きは。ほとり。㊃かぎり。さかひ。

(さい)[塞](名) ㊀とりで。でじろ。(砦)。㊁くにざかひ。邊界。

(さい)(名) 軒などに垂るゝ氷。

(さ-い)[差異](名) たがひ。ちがひ。(差繆)。

—さい[哉](接尾) よはひを數ふるにいふ語。

(ざい)[財](名) ㊀人の寶となす物品、即ち、米穀・金錢・布帛等の稱。㊁【經】「ざいくわ」(財貨)に同じ。

(ざい)[材](名) ㊀もくざい。材木。㊁しろ。原料。㊂使用する器具。㊃使用に堪ふる器量。「將相の—」。㊄うまれつき。性質。㊅はたらき。才能。

(さい)[采](名) 「さいはい」に同じ。「—打振りて」。——をとる 指揮をなす。

(ざい)[在](名) 「ざいがう」の略言。「千住—」。

(ざい)[劑](名) まぜあはせたる調味。まぜあはせたる製藥。やくみ。やくざい。

(ざい—)[在](接頭) 或語に冠して、其中又は其處にある意を表はす語。「—東京」「—英國」。

(—ざい)[劑](接尾) 調合したる藥を數ふる語。「一—の藥」。

(さい-あい)[最愛](名) 最も愛すること。いとかはゆがること。「—の妻」。

(さい-あう)[災殃](名) わざはひ。さいなん。

(ざい-あく)[罪惡](名) ㊀つみ。とが。㊁道德上又は宗教上に於て、非難又は懲罰すべき行爲。

(さい-あん)[再案](名) 修正したる草案。又、かんがへなほしたる考案。

(ざい-あん)[罪案](名) 罪科の始末書。裁判の目安書。(斷案)。

(さい-い)[彩衣](名) いろいろの彩文ある衣。

(さい-いふ)[采邑](名) ちぎやうちよ。食邑。「—を賜ふ」。(領地)。

(さい-う)[細雨](名) こまかきあめ。きりあめ。

(さ-いう)[左右](名) ㊀みぎとひだりと。㊁そば。ちかく。㊂おそばに事ふる人。近臣。㊃たすけ。輔弼。㊄隨意に動かすこと。「君王を—し」。——さうしよう[左右相稱](名) 體を中分して、其左右同形なること。

(ざ-いう)[座右](名) ㊀座のみぎ。㊁そば。かたは

し。「臨んで書を某君の―に題す」。―の-めい[座右銘](名) 常に自分の性行の標準となす訓戒。

(さい-うり[西瓜](名)【植】「すゐくわ」の一名。

(ざい-えい[在營](名) 兵營にあること。

(ざい-えき[在役](名) ㊀使役又は苦役の中にあること。㊁兵役に服してあること。㊂軍艦が特別の任務に服してあること。

(さい-えん[再緣](名) 二度のえんぐみ。

サイエンス[Science](名)「くわがく」(科學)に同じ。

(さい-おう[再應](名、副) ふたゝび。

さいおう-がうま[塞翁馬](名)〔支那の塞上に居りし翁の飼馬、一度にげ亡(ウ)せしが、後他の駿馬をともなひて歸り來ぬ。然るに翁の子、其駿馬より落ちて不具となりしかど、其ため夬役を免ぜられきといふ故事に出づ〕人間の禍福は相循環して定めなしといふこと。「人間萬事―」。

(さい-か[最下](名) もっとも下。もっとも劣れること。もっとも低きこと。

(さい-か[裁可](名) ㊀君主が、臣下の奏議などを許可したまふこと。㊁【法】天皇が自ら意思を決定して表示したまふ行爲、これによりて法律命令生ず、議會にて議決したる法律案も、裁可なくんば法律とならず、通常案文に、御名を署し御璽を鈐せらるゝを其形式とす。

(さい-かい[齋戒](名) 飮食動作を愼(リヨ)にせずして、清淨謹愼を守ること。又、思慮意念を愼(シツ)み、心を專一淸明に守ること。ものいみ。けっさい。

(さい-かい[再開](名) 一旦閉ぢたるものを更に開くこと。

(さい-かい[西海](名) ㊀西方の海。「平家―に沒す」。㊁西海道の略言。―だう[西海道](名) 筑前・筑後・豐前・豐後・肥前・肥後・日向・大隅・薩摩及壹岐・對馬の稱。

(さい-がい[災害](名) 暴風雨・地震・洪水などの自然のわざはひ。又、自家の性行に關係なくして來れるわざはひ。(災禍、災難)。

(さい-がい[際涯](名) きし。又、さは。

(ざい-かい[財界](名) 財物の生産交換行はるゝ範圍。經濟の社會。金融の市場。

(さい-かう[再考](名) 考へなほすこと。再度のかんがへ。

(さい-かう[再校](名) 二度目の校正。

(さい-かう[宰衡](名) 天子の輔弼。さいしやう。

(さい-かう[最高](名) 程度又は位置の最も高きこと。第一なること。―がくふ[最高學府](名) 大學などの稱。―かんだんけい[最高寒暖計](名) 或時間内の最高の溫度を示す寒暖計。―こもんふ[最高顧問府](名) 樞密院又は元帥府などの稱。―ぜん[最高善](名)【倫】「しぜん」(至善)に同じ。

(ざい-がう[在鄕](名) 都會より隔(ヘダ)たりたる田舍の地方。ざい。鄕村。―もの[在鄕者](名) 在鄕の人。ゐなかもの。

(さい-かく[犀角](名) 犀の角、色の黑きは上品にして烏犀角といひ、其尖頭を藥用に供す。

(さい-かく[才覺](名) ㊀はたらき。機轉。㊁くめん。計畫。―もの[才覺者](名) きてんのきく人。又、計畫に巧なる人。

(さい-がく[才學](名) 才智と學問と。

(ざい-がく[在學](名) 或學校に生徒となりてあること。

さいかし[皂莢](名)【植】「さいかち」に同じ。

さいかち[皂莢](名)【植】荳科に屬する木、葉は羽狀複葉にして、花は黃色なり、果實は長さ一尺餘にして、種子は藥用に供せらる。―の-き[皂莢](名)【植】前條に同じ。―むし[皂莢蟲](名)【動】「かぶとむし」の一名。

さい-かへ・る〔らりるるれれ〕[再返](自、ら四) 再び起る。再發す。ぶりかへす。「病が―」。(再廻)。

(さい-かん[再刊](名)「さいはん」(再版)に同じ。

(さい-かん[細奸](名) 度量狹(セマ)くして性質ねぢけたるもの。小人。

(さい-かん[細間](名) まはしもの。しのびのもの。

(さい-かん[歳寒](名) 冬の時節。―の-さんいう[歳寒三友](名) 松と竹と梅との稱。

(ざい-かん[材幹](名) 事を成す技術あること、役に立つ才能あること。

(ざい-かん[在監](名) 監獄に拘留せられてあること。

(さい-き[再記](名) 更に改めてしるすこと。

(さい-き[才器](名) 才智ありて役に立つこと。又、其人。さいぶつ。

(さい-き[債鬼](名) 借金又は掛金を取りに來る人。きやくぎんとり。かけとり。

(さい-き[彩旗](名) いろ〳〵の彩色を施したる旗。

(さい-き[才氣](名) きばたらき。さいち。又、さいのやうす。「―面に現はる」。

(さい-ぎ[猜忌](名) 人をねたみいむこと。そねみ。又、そねみぶかき性質。

(さい-ぎ[猜疑](名) うたがふこと。うたがひの念。

(さい-ぎ[再議](名) 二度の評議。再度の討議。

(ざい-き[材器](名) ㊀つかひみちある道具。㊁役にたつ器量又は人物。

(さい-きう[彩球](名)【天】太陽の光球を圍める高熱によりて赤色をなす氣球、日蝕皆既の初めと終りとに見ゆ。又、強き分光器を用ふるときは、これを見ることを得。

(ざい-きう[罪咎](名) つみ。とが。

(さい-きやう[歳刑](名) 陰陽家にて祭る八將神の一、地を守護する神、此神のある方角に向ひて土地を掘(ホ)るを忌(イ)むといふ。

(さい-きやう[西京](名) 京都市の稱。東京の對。

(ざい-きやう[在京](名) 京地に在ること。

(ざい-きやう[在鄕](名) 自分の鄕里にあること。―ぐんじん[在鄕軍人](名) 豫備役・後備役にある將校・下士卒及歸休兵等の總稱。

(さい-きやうばい[再競賣](名) 一旦競賣に附したれど、其目的を達し得ざりしより、更にあらためて競賣に附すること。

(さい-きよ[裁許](名) 裁決して許可せらるゝこと。

(さい-きよ[再擧](名) 再び事を起すこと。しなほし。やりなほし。「―して敵を擊つ」。

(さい-きん[最近](名) 最も近きこと。

(さい-きん[細瑾](名) 些細なる瑕瑾(カキン)。いさゝかの不行跡。「大行は―を顧みず」。

(さい-きん[再勤](名) 二度のつとめ。

(さい-きん[細菌=Bacteria](名)【植】黴菌の一種、生物界中の最も細微なるものにして、肉眼を以て見るべからず、他物に寄生し養分を吸收してこれを腐敗せしむ、細點狀・螺旋狀・桿狀・絲狀等をなす、すべて塵芥と共に大氣中に飛散し、又、地中・水中にも多く生存す、自體を分裂し又は胞子を生じて、迅速に繁殖す。「バクテリア」。

(ざい-きん[在勤](名) つとめ中。在職。

(さい-く[細工](名) ㊀細かき物の製造。㊁細かきものを製する職人。さいくにん。㊂刃物にてする細かき工事即ち器具などの製作。㊃たくらみ。とりはからひ。―にん[細工人](名) ㊀細工をなする職人。又、細工をなし、職人。㊁たくらみたる人。

―もの[細工物](名) 細工をしたる物。

(さい-くう[齋宮](名) 古代、天子卽位の時每に、伊勢の神宮に奉仕せしめられし未婚の内親王又は女王。いつきのみこ。―れう[齋宮寮](名) さいくうの事をつかさどりしつかさ。

(さい-ぐさ[三枝](名)【植】「さきくさ」の音便。―まつり[三枝祭](名) 大和國率川(イザカハ)神社の祭、此祭には、さきくさの花もて酒樽を飾る故に此名あり。

(さい-くつ[採掘](名) 土を掘(ホ)りて、中にある物を採(ト)ること。特に、鑛物を掘り採ること。―けん[採掘權](名) 一定の鑛區内に於て、或鑛物を採掘する權利、鑛業者の出願を農商務大臣の許可するによりて發生するものとす。

(さい-くわ[災禍](名) わざはひ。さいなん。

(ざい-くわ[財貨](名) ㊀金錢又は貨物等の稱。たから。たからもの。㊁【經】人生の欲望を滿たすに適當なるもの、總稱、これを分つて内界の財貨と外界の財貨との二とす、内界の財貨とは人身の内部に存するものにて、例へば知識・健康又は腕力等これなり、外界の財貨とは、外界に存するものにして、更にこれを分つて自由的財貨と經濟的財貨との二とす、自由的財貨とは、空氣・日光等の如く吾人の隨意に使用し得るものにして、經濟的財貨とは、これを得るには、必ず多少の勞力と報酬とを要するものをいひ、又、分つて、通常の貨物と勤勞と關係卽ち顧客・版權・專賣權の類との三とす。

(ざい-くわ[罪過](名) つみ。あやまち。

(ざい-くわ[罪科](名) しおき。けいばつ。

(さい-くわい[再會](名) 再び會ふこと。二度のであひ。

(さい-くわい[際會](名) 其折に出合ふこと。「風雲に―し」。

(さい-くわい[崔嵬](名) 山などの峙(ソバ)つさまにいふ語。

(さい-ぐわい[塞外](名) ㊀とりでの外。㊁くにざかひの外。

(ざい-くわい[罪魁](名) 犯罪の張本人。

(ざい-ぐわい[在外](名) 外國に在留すること。

(さい-くわう[採鑛](名) 鑛物を採取すること。―やきんがく[採鑛冶金學](名) 採鑛及冶金(ヤキン)に關する事項を學理上より研究する科學。

(ざい-くわん[在官](名) 官職に在ること。

(さい-くん[細君](名) わが妻の稱。誤りて、他人の妻の稱。

(ざい-け[在家](名) ㊀佛徒より、在俗の人即ち出家せぬ人をさしていふ語。㊁在鄕の家。ゐなかや。

(さい-け[濟家](名) 臨濟宗の稱。

(さい-けい[歳計](名) 會計年度中の收入支出の總計算。一年中の計算の締高。―よさん[歳計豫算](名) 歳計を豫め定めおく計算。

(さい-げい[才藝](名) 才と藝と。ちゑとわざと。きてんと[illegible]ごと。「―雙絶」。

(さい-けい-こく[最惠國](名) 國際上、通商等に關して、諸外國中最も利益ある條約を締結せる國。―でうくわん[最惠國條款](名) 最惠國に對する條約の條項。

(さい-けい-れい[最敬禮](名) 最も鄭重なる敬禮、普通には、直立不動の姿勢にて、手を膝下にまで垂(タ)れて、うや〳〵しく磬折すること。

(さい-けう[歳刑](名) 歳刑(サイキヤウ)の訛。

(さい-けつ[採決](名) 議事などにて、議長が議案に對する可否を議場に問ひて決定すること、多數者

の方に決定するを普通とす。

（さい-けつ）［裁決］（名）㊀理非を判斷して申渡すと。さばき。㊁【法】行政官府が、或事項を裁斷する處分。――しよ［裁決書］（名）裁決の主意をしたゝめたる文書。

（さい-げつ）［歳月］（名）としつき。年月。

（さい-けん）［細見］（名）㊀くはしく見ると。㊁くはしく示すと。㊂こまかな意見。

（さい-けん）［債券］（名）債權を證明するための證書。銀行・會社などが社債に對して發行するものにして、一定の要式を具すべきもの。――がく［債券額］（名）債券に記載しある金額。

（さい-けん）［債權］（名）【法】財產權の一、一に人權とも稱す、特定の人に對して或行爲又は不行爲を要請する權利。此權利は債務者に對してのみ効力を有し、一般に對しては効力を有するものにあらず、貸主の權利・雇主の權利等これなり。債務の對。――がく［債權額］（名）金錢を目的とする債權にて、其金錢の額。――しや［債權者］（名）特定の人に對して債權を有する者。――しようしよ［債權證書］（名）債權を證明する證書。金錢の借用證書の如きこれなり。――たんぽ［債權擔保］（名）債權の辨濟を確（タシ）かにするための擔保。

（さい-げん）［際限］（名）をはり。かぎり。はて。

（さい-げん）［再現］（名）㊀再び現はるゝと。又、再び現はすと。㊁【心】一旦經驗したる表象が、再び意識中に現はるゝと。

（ざい-けん）［罪譴］（名）つみ。とがめ。

（ざい-げん）［財源］（名）財の產出する場所又は財を收得し得べき事實。財のもと。「――枯渇す」。

（さい-ご）［最期］（名）㊀いまはのきは。しにぎは。りんじゆう。まつご。㊁しまひ。をはり。つまり。

（さい-ご）［最後］（名）終末。すゑ。（最終）。

（さい-こう）［再興］（名）再び興（オコ）すと。又、再び興るを。

（さい-こく）［催告］（名）㊀うながし告ぐると。㊁【法】或人の行爲又は不行爲を催促すると。――さいばんしよ［催告裁判所］（名）或事件につき公示催告をなしたる區裁判所。――さいむ［催告債務］（名）【法】債務の履行が、債權者の催告を條件となすもの。

（さい-こく）［西國］（名）㊀西方の國。㊁九州地方の一名。「――もの」。㊂西國三十三所の略言。――さんじふさんしよ［西國三十三所］（名）（もと東國の人の京都に上りたる途次に巡禮せしに起る）三十三所に同じ。――じゆんれい［西國巡禮］（名）西國三十三所を順禮すると。又、其人。

（ざい-こく）［在國］（名）國もとに居ると。

（ざい-ごく）［在獄］（名）獄舍にとらはれてゐると。

（ざい-ごふ）［罪業］（名）【佛】（い）罪となるべき作行。（ろ）罪のむくい。

（さい-ごつ-ぺ）［最期屁］（名）㊀鼬（イタチ）などの追窮せられて、苦しき最期に放つ惡臭。㊁轉じて、最後の窮策。

（さい-こん）［再建］（名）二度の建立。

（さい-こん）［菜根］（名）野菜の根。轉じて、麁末なる食物。

（さい-こん）［再婚］（名）夫若しくは妻に對して、夫婦關係の解除せられたるものが、他の男子若しくは女子と婚姻すると。再度目の結婚。

（さい-さ）［歳差］（名）【天】春分點が每年僅かづゝ、退行するによりて、春分の時季が年每に僅かづゝ進むと。春分點は年々弧度五〇・二四秒づゝ退行する故に、二萬五千八百年にして黃道を一周す。

（さい-さい）［細細］（名、副）こまかきさまにいふ語。

（さい-さい）［再再］（名、副）たび〳〵。再三。

（ざい-ざい）［在在］（名）そこ〳〵の在鄕。――しよしよ［在在所所］（名）前條に同じ。

（さい-さう）［才藻］（名）詩歌などを作る思想。又、其思想に富みてあると。

（さい-さう）［洒掃］（名）ふきさうぢ。

（さい-さう-らう）［採桑老］（名）舞樂の曲名。

さい-さき［幸先］（名）さちさき。よきさまへなるし。

（さい-さく）［細作］（名）しのびのもの。間者。（探偵）。

（さい-さく）［再昨］（名）さきをとつひ。

（さい-さん）［再三］（名、副）二度三度。たび〳〵。――さいし［再三再四］（名、副）前條に同じ。

（ざい-さん）［財產］（名）人の所有に屬する金錢上の價格ある有體物又は無體物の稱。普通には、人の所有に屬する金錢上の價格ある動產及不動產の稱。――か［財產家］（名）財產を多く有する人。かねもち。――けい［財產刑］（名）【法】國家が犯罪者より財產をとりたつる刑罰。罰金・科料・沒收の三種あり。――けん［財產權］（名）【法】財產を目的とする私權、即ち金錢を以て評價し得らるゝ私權。分って物權・債權・特權の三種とす。――さしおさへ［財產差押］（名）【法】（い）強制執行の一、債權者が國家の公力によりて、債務者の財產に對し差押をなすと。（ろ）強制徵收の一、一私人の納稅義務を果さゞる場合に、國家又は自治體が、其人の財產に對し差押をなすと。――せいど［財產制度］（名）個人の財產を保護する國家の規定。――ぶんり［財產分離］（名）【法】總財產の中より、或部分を分離すると。特に、財產の中より、相續に係（カヽ）る財產のみを分離すると。――へいきんろん［財產平均論］（名）各人の財產を平均して、貧富の懸隔（カケヘダテ）なからしめんといふ主義。――もくろく［財產目錄］（名）或人に屬する現在の財產の種類及價格を、明細に記載したる目錄。

（さい-し）［祭祀］（名）まつり。さいてん。

（さい-し）［祭粢］（名）神を祭るに供ふる物。くもつ。

（さい-し）［才子］（名）才智のすぐれたる人。さいぶつ。

（さい-し）［才思］（名）よく活動する思想。

（さい-し）［妻子］（名）つまと子と。

（さい-し）［細思］（名）細かきかんがへ。

（さい-し）［祭資］（名）祭事の資金。まつりの費用。

廿（さい-し）［釵子］（名）古昔の婦人の髮かざり。

（さい-じ）［細字］（名）こまかき文字。（蠅頭字）。

（さい-じ）［細事］（名）㊀些細なると。小事。㊁くはしき事。ゐさい。

（さい-じ）［歳次］（名）（支那にて、二十八宿を十二次に分ち、歳星は、一年に一次を周り、十二年にて十二次を一周すとの義より出づ）としまはり。とし。「明治元年――戊辰正月吉日」。

（さい-じ）［歳時］（名）㊀一年中のをり〳〵。「――紀」。㊁とき。時間。「方處を超え――に絕す」。

（さい-じ）［祭事］（名）かみごと。しんじ。まつり。

（さい-じ）［際次］（名）とき。をり。

（さい-じ）［蕞爾］（名）もの、小さくして相手となすに足らぬさまにいふ語。

（ざい-し）［罪死］（名）刑罰を受けて死ぬると。

（ざい-しう）［罪囚］（名）獄舍に繫（ツナ）がれたる罪人。つみびと。めしうど。

（さい-しき）［彩色］（名）いろどり。（着色）。――ずり［彩色摺］（名）彩色したるすりもの。――ゑ［彩色繪］（名）彩色したる繪。

（さい-しき）［齋食］（名）【佛】（い）口舌の嗜欲をとゝのふると。程度を越すほど食事せざると。（ろ）法會の施食。とき。

さい-しく［彩色］（他、カ四）（「さいしき」を活かしたる語）いろどる。ゑどる。

（さい-じつ）［祭日］（名）㊀おほやけの祭典ある定日。（祝日）。㊁神祭にて、死者を祭る當日。

（ざい-しつ）［罪質］（名）犯罪の性質、例へば破廉恥罪又は國事犯といふ如きは、罪質による區別なり。

（さい-しふ）［採集］（名）よりとりて集むると。とりあつむると。「植物の――」。

（さい-しやう）［宰相］（名）㊀君王を輔弼し大政を總理する官。丞相。㊁古昔、參議の一名。

（さい-じやう）［最上］（名）最もうへなると。これに上こすもののなきと。「――品」。

（ざい-しやう）［罪障］（名）【佛】往生のさはりとなる罪業。

（ざい-じやう）［罪狀］（名）罪過の事實又は狀態。

（さい-しゆ）［採取］（名）よりてとると。えらびとると。ひろひとると。

（さい-しゆ）［祭主］（名）㊀伊勢神宮の神官の長。古は大中臣氏を以てこれに任ぜられしが、今は皇族を以て任ぜらる。㊁祭事を行ふ主たるもの。（喪主）。

（さい-しゆ）［祭酒］（名）㊀支那にて、學政を掌りし官。㊁昔時、大學頭の唐名。

（さい-しゆ）［債主］（名）負債主に對して、債權を有する人。

（さい-しゆう）［最終］（名）をはり。しまひ。

（さい-じゆう-けい）［再從兄］（名）年上のいやいとこ。

（さい-じゆう-けいてい）［再從兄弟］（名）いやいとこ。

（さい-じゆう-てい）［再從弟］（名）年下のいやいとこ。

（ざい-しゆく）［在宿］（名）家に居ると。「早野勘平殿は――めさるゝか」（在宅）。

（さい-しゆしゆつ）［再輸出］（名）一旦內國に輸入せられたる貨物を、再び外國へ輸出すると。「――るを」。

（さい-しゆつ）［再出］（名）二度出ると。又、二度出すと。

（さい-しゆつ）［歳出］（名）國家又は公共團體の一會計年度中の支出の總額。歳入の對。

（さい-しゆにふ）［再輸入］（名）一旦外國へ輸出せし貨物を、再び內國に輸入すると。

（さい-しゆん）［才俊］（名）才能のすぐれたると。又、其人。

（さい-しよ）［最初］（名、副）最も初め。はじめて。

（ざい-しよ）［在所］（名）㊀すみか。ありか。㊁ざいがう。ゐなか。㊂くにもと。ふるさと。

（さい-しよう）［濟勝］（名）勝地を跋涉すると。――のぐ［濟勝具］（名）跋涉に適する健脚の稱。

（ざい-しよう）［罪證］（名）犯罪を明かにする證據。

（さい-しよく）［菜食］（名）野菜類を常食とすると。肉食の對。

（さい-しよく）［菜色］（名）（青菜の色の義）食料足らずして衰へたる顏色。「民に――多し」。

（さい-しよく）［彩色］（名）さいしき。いろどり。（裝飾）。

（さい-しよく）［栽植］（名）果樹などを植うると。

（さい-しよく）［才色］（名）才智と容貌と。

（ざい-しよく）［在職］（名）職務を勤めて居ると。（在勤）。

さい-しり（名）象牙にて製（ツク）りたる三味線の撥（バチ）のもとの四角形をなす部分。

（さい-しん）［細辛］（名）【植】馬兜鈴科に屬する草、莖は上昇せず、花は壺狀にして三瓣紫黑色なり、根は藥用に供せらる。

（さい-しん）［再審］（名）㊀一旦審理を經へたるものを再び審理すると。二度のしらべ。㊁【法】裁判所が、已に確定判決となりたる民事訴訟を、取消又は

原狀回復の訴に因りて、更にこれを審判すること。又、已に確定判決となりたる刑事訴訟を、事實誤認の明白なる場合に、檢事又は刑事被告人若しくは其親屬の訴により、更に其事件を審判すること。

(さいしん)[細心](名) ㊀綿密又は謹愼なる心。㊁偏狹又は卑怯なる心。

(さいしん)[再進](名) 再び進むこと。又、再び進むこと。

(さいしん)[最新](名) 最もあたらしきこと。

(さいしん)[采薪](名) たきゞをひろふこと。——のうれひ[采薪憂](名) (孟子に出づ)自分の病氣の謙稱。

(さいじん)[細人](名) 度量のせまきもの。根性のひがみたるもの。小人。

(さいじん)[才人](名) ㊀才子。㊁詩文の達人。

†さいず[祭主](名) 「さいしゆ」に同じ。

さい・す(せし すする すれ せよ)[際](自、さ變) であふ。でくはす。

さい・す(せし すする すれ せよ)[擠](他、さ變) おしひらく。おしのく。おしおとす。

(さいせ)[在世](名) ㊀世に在る間。「—十年」。㊁いきながらふること。存命。「應永頃—」。

(さいせ)[財施](名)【佛】僧侶又は貧者などに、財物をほどこしめぐむこと。

(さいせい)[再生](名) ㊀一旦死にたるもの、助かること。よみがへること。いきかへること。㊁必死の場合をまぬかるゝこと。「—の恩」。㊂【心】「さいげん」(再現)(二)に同じ。

(さいせい)[濟淸](名) 債務などを殘りなく辨濟すること。

(さいせい)[再製](名) こしらへなほし。

(さいせい)[歳星](名) 木星の一名。

(さいせい)[祭政](名) 祭事と政事と。まつりごと。——いっち[祭政一致](名) 上古、天皇が皇祖を尊崇したまふは即ち國家を統御したまふ所以にして、宮殿は神器の正宮と天皇の所在とをかねたりし狀態の稱。

(さいせい)[財政](名)【法】㊀國家又は公共團體が、其生存發達の目的を遂するため、收入を獲得し經費を支出する行爲又は狀態。㊁個人の金融。かねまはり。——か[財政家](名) 財政の事務に巧なる人。——がく[財政學](名) 如何にせば有利なる方法によりて財政を運轉すべきかを研究する科學。——かんとく[財政監督](名) 議會が豫算の査定又は決算の調査其他種々の方法によりて、財政の當否・善惡を監督すること。——ねんど[財政年度](名) 會計年度に同じ。

(さいせう)[再醮](名) 婦人の再び嫁すること。にどのえんづき。再緣。

(さいせう)[最少](名) 最も少なきこと。又、最もわかきこと。

(さいせう)[最小](名) 最も小さきこと。——こうばいすう[最小公倍數](名)【數】公倍數の最小なるもの。——こうぶんぼ[最小公分母](名)【數】公分母の最小なるもの。

(さいせき)[載積](名) のせつむこと。「石炭の—量」。

(さいせき)[在昔](名) むかし。

(さいせき)[罪跡](名) 犯罪のあとかた。

(さいせつ)[歳殺](名) 陰陽家にて祭る八將神の一。此神の居る方角に向ひ、嫁取(ヨメトリ)又は甕はじめなどを忌(イ)むといへり。

(さいせつ)[細說](名) ㊀小人ばらのざんげん。口さがなきもの、とりざた。㊁こまかにとくこと。くはしくとくこと。

(さいせつがん)[碎屑岩](名)【鑛】分子もろくして碎(クダ)け易き岩石、多くは水成岩に屬す。

(さいせふ)[娶妾](名) つまとめかけと。

(さいせん)[再選](名) 再度當選すること。又、再度選擧すること。

(さいせん)[賽錢](名) 神佛に參詣して奉る錢。(香錢)。——ばこ[賽錢函](名) 社寺などにて、賽錢を受くるに設けたる函。

(さいせん)[最前](名) ㊀もっとも前。㊁さきほど。

(さいそ)[再祚](名) 天子の再度の御卽位。(重祚)。

(さいそ)[菜蔬](名) 野菜。

(さいそく)[細則](名) 細かき事柄に關したる規則。

(さいそく)[催促](名) うながすこと。はたること。せつくこと。とくそく。

(さいぞく)[在俗](名) 僧とならずにあること。又、其人。

(さいた)[最多](名) 最も數多きこと。

(さいたい)[娶帶](名) 女房もち。「肉食—」。

(さいだい)[菜代](名) 飯の菜の代金。

(さいだい)[菜臺](名) 飯の菜を盛る臺。

(さいだい)[細大](名) ㊀こまかなると大きなること。㊁いちぶしじゆう。ゐさい。巨細。

(さいだい)[最大](名) 最も大いなること。——こうやくすう[最大公約數](名)【數】公約數の最大なるもの。

(さいたく)[採擇](名) えらびとること。よること。

(さいたく)[在宅](名) 宅にをること。ざいたく。

さいだしほ[齋田鹽](名) 阿波國板野郡齋田地方より出だす鹽。

†さいたづま[苦杖](名) ㊀【植】「いたどり」の古名。㊁春の若草。

†さいだて[戲射](名) 弓を射る遊戲。(小射楯)。

(さいたん)[歳旦](名) 新年第一日。元日。(年頭、歳首)。

(さいだん)[祭壇](名) 祭事を行ふ壇。

(さいだん)[裁斷](名) ㊀たちきること。㊁理非善惡を判(ワ)けさだむること。さばき。

(さいだん)[財團](名)【法】財産の集合體にして法律上人格を付せられ、自ら權利の主體となるもの。社團の對。——はふじん[財團法人](名)【法】前條に同じ。

(さいち)[才智](名) ㊀心の作用。㊁かしこきこと。ちゑ。

(さいち)[采地](名) ちぎやうしよ。りやうち。

(さいちやう)[在廳](名) ㊀古昔、國府に居りし役人。㊁其役所に在勤すること。

(さいちゆう)[細註](名) 細かく說きたる註釋。又、細字にてしたゝめたる註解。

(さいちゆう)[最中](名) 事のたけなはなる時。もなか。まさかり。

(さいちゆう)[在中](名) 其なかに入りてあること。

(さいぢゆう)[在住](名) 其處に住みて居ること。

(さいぢよ)[妻女](名) ㊀妻と娘と。㊁妻。

(さいぢよ)[才女](名) 才智すぐれたる婦人。

さいつおさへつ(副) (さしつ押さへつの略)互に酒の獻酬をなしあふにいふさま。

さいづか[采柄](名) さいはいのつか。——をにぎる さしづをなす。

†さいつころ[先頃](名) 「さきつころ」の音便。

さいづち[木椎](名) 小形の木の槌。ばんしやうづち。さいこづち。(楊槌)。——あたま[木椎頭](名) 後腦のつきいでたる頭。(楊頭)。

†さいつとし[先年](名) 「さきつとし」の音便。

(さいで)[裂帛](名) 布帛のきれはし。(裂將)。

(さいてい)[裁定](名) 當否をわけさばくこと。

(さいてい)[再訂](名) 再度の改訂。

(さいてい)[最低](名) 程度又は位置の最も低きこと。最下。——かんだんけい[最低寒暖計](名) 或時間內の最低の溫度を示す寒暖計。

(さいてい)[在廷](名) ㊀朝廷に出仕してあること。㊁法廷に出頭してあること。

(さいてう)[在朝](名) 朝廷に出仕してあること。

さいでうがき[西條柿](名) 伊豫國西條地方より出す柿の果實。

さいでうまさ[西條柾](名) 「いよまさがみ」の一名。

(さいてん)[祭典](名) 祭事の儀式。まつり。

(さいど)[妻孥](名) 妻と子と。又、家內眷族。

(さいど)[再度](名、副) ふたゝび。兩度。

(さいど)[濟度](名)【佛】衆生の苦惱を濟(スク)ひ、苦海即ち生死煩惱の境を去りて、彼岸即ち成佛得脫の境へ度(ワタ)らすること。

さいとり[才取](名) 賣買を周旋して、口錢を得ること。又、其類の人。(牙保、經紀人)。

さいとりさし(名) (「さいとり」は、刺鳥の音便) さいとり竿をもて、鳥を捕る人。とりさし。

さいとりざを[刺鳥竿](名) 鳥をさすに用ふる竿。竿頭に鳥黐(トリモチ)をつく。(刺捕竿)。

(さいなう)[財囊](名) ㊀金錢を入れおくふくろ。㊁自分の所有の金錢のかぎり。

(さいなふ)[採納](名) とりをさむること。とりあぐること。

さいな・む(まみ む むめ め)[訶、嘖](他、ま四) ㊀しかる。せむ。㊁いぢめる。しへたぐ。(苛、酷)。

(さいなん)[災難](名) わざはひ。なんぎ。災厄。——よけ[災難除](名) 災難をよくるためのお札又は祈禱等の稱。

(さいにち)[齋日](名) 齋戒の日。しやうじんび。

(さいにち)[賽日](名) 藪入に閻魔にまゐる日。

(さいにふ)[歳入](名) 國家又は公共團體の一會計年度內に於ける收入の總額。歳出の對。

(さいにん)[再任](名) 再び其官に任ぜらるゝこと。

(さいにん)[罪人](名) 罪を犯したる人。はんざいにん。つみびと。とがにん。

(さいのう)[才能](名) ㊀智慧のはたらき。心の機轉。㊁智慧のはたらきのすぐれたること。

さいのかはら[賽河原](名)【佛】冥途にて、小兒の亡者の遊び居るといふ所。

さいのめ[采目、賽目](名) ㊀采の面の數字。㊁采程の大きさ。㊂正しき小立方體。

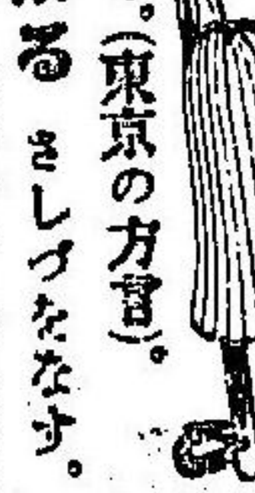
(さいは)[歳破](名) 陰陽家にて祭る八將神の一、此方角に向ひ、移轉又は航海を忌(イ)むといへり。

(さいは)[碎破](名) くだきやぶること。(摧破)。

(さいはい)[儕輩](名) ともがら。なかま。

(さいはい)[再拜](名) ㊀二度くり返して敬禮すること。㊁手紙の終末に用ふる敬語。「頓首—」。

(さいはい)[采配](名) ㊀昔時、大將が士卒を指揮するために持ちし具、厚紙を細く裁(タ)ちてつくり、これに柄をつけたるもの。ざい。(采幣、麾配)。㊁塵はたき。(東京の方言)。——をふる さしづをなす。



[さいはい(一)]

(さいばい)[栽培](名) 植物を栽(ウ)ゑそだつること。

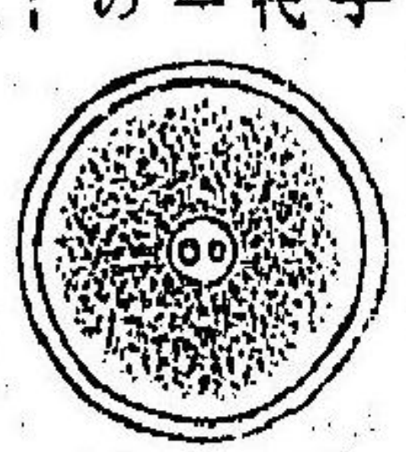
(さいはう)[砦堡](名) とりで。こじろ。

(さいはう)[細報](名) くはしき報知。

(さいはう)[西方](名) 西の方。——じやうど[西方淨土](名)【佛】極樂淨土の稱。此西方にありと傳ふるよりいふ。

(さいはう)[細胞](名) 生物體を組成する微小なるもの、本來は球形にして原形質より成り、外部に細胞膜を有し中に核を有す、營養物質を外界より

攝取し、これを同化して新分子を生じ、消耗したる舊分子に代ふ。斯くて次第に增大して、或一定の度に達すれば、二個以上の新細胞となりて生殖す。——ゑき［細胞液］（名） 細胞中に充滿しある液。——げんけいしつ［細胞原形質］（名） 細胞を形成する原形質。蛋白性にして顆粒狀をなし、炭・酸・水・窒の四元素より成る。——そしき［細胞組織］（名） 其生體が細胞の集合によりて構成せられたると。——まく［細胞膜］（名） 細胞の原形質の表面を被ふ薄膜。


［さいはう］

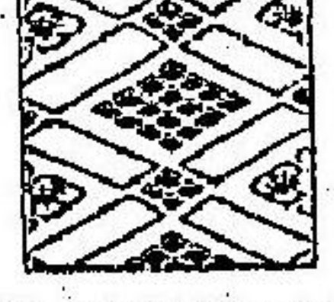
（さい）はう［財寶］（名） たから。たからもの。

さい-ばし［菜箸］（名） 飯の菜をはさみて皿に盛る箸。

†さい-はじ-ける［才彈］（自、か下二） 小利口にして思慮深からず、こましやくれる。

†さい-はて［最果］（名） 最後。

さい-はひ［幸］（名） 「さきはひ」の音便。——たけ［幸茸］（名）【植】靈芝（レイシ）の一名。（玉栞）。——に［幸］（副） 都合よくて。あはせに。「——危險を見る」。——びし［幸菱］（名） 模樣の名。


［さいはひびし］

†さいは-ふ［幸］（自、は四） さきはふ。

†さい-ばら［催馬樂］（名） かぐらうたに類する古代の俗謠、もとは馬を牽（ヒ）く時に謠ひしものといふ。

さい-はらひ［采拂］（名） はたき。

（さい）-はん［再版］（名） 同一の圖書を再度出版すると。

（さい）-はん［再犯］（名） 以前に罪を犯しゝものが、また罪を犯すと。曾て有罪の判決を受けしものが再

び罪を犯すと。——かぢゆう［再犯加重］（名）【法】再犯者に科する刑罰は、等を加へて重くすると。

（さい）-ばん［歲晚］（名） 年のくれ。せっき。（歲暮）。

（さい）-ばん［裁判］（名） ㊀是非曲直のさばき。㊁【法】裁判所が、訴訟を審理し、これを裁斷して法規の適用を定むると。判決・命令・決定等を包含す。——くわん［裁判官］（名） 裁判所を組織し裁判上の事務を取扱ふ官吏。——くわんかつ［裁判管轄］（名）【法】事物・土地又は職務に就き、裁判所が其職權を行使するを許されたる區域。（管轄裁判所の條參照）。——けん［裁判權］（名）【法】裁判を行ふ權限。——しよ［裁判所］（名）【法】裁判と稱する統治權の一作用、又、裁判所が裁判といふ統治權の一作用を行使する國家の機關。又、民事刑事の裁判をなす國家の機關。（法衙）。——せき［裁判籍］（名）【法】土地に關する裁判管轄を、其裁判を受くる人より見ての稱。——てい［裁判廷］（名） 「はふてい」（法廷）に同じ。——ひよう［裁判費用］（名）【法】裁判に關して當然要すべき費用、卽ち證人又は鑑定人等の日當・旅費若しくは印紙・用紙等の費用の如きこれなり。訴訟費用。

（さい）-はん［在判］（名） ㊀公文書に奉行人の名の下に記す語、在官の裁判の義なりといふ。㊁書判（カキハン）又は捺印あると。

（さい）-はん［罪犯］（名） つみ。とが。きようおやう。

（さい）-ばん［在番］（名） 勤番にあると。

（さい）-ひ［歲費］（名） ㊀一年間の入費。㊁貴族院及衆議院議員の一年間に受くる費用。

（さい）-ひ［柴扉］（名） しばのとびら。又、わびしきすまひ。

（さい）-び［細微］（名） こまかきと。ちひさきと。

（さい）-び［歲尾］（名） としのくれ。せっき。

（さい）-ひつ［才筆］（名） 巧妙なる文章。又、巧妙なる文章をかき得る才能。

（さい）-ひやう［細評］（名） くはしき批評。

（さい）-ふ［財布］（名） 金錢を入れて懷中する袋。かねいれ。

（さい）-ふ［在府］（名） 德川時代に、江戸に在勤してあると。

サイフォン［Syphon］（名） ㊀【理】曲がりたる管（クダ）にして、其短脚を液體に入れ、長脚より他の器に液を流出せしむるもの。㊁「サイフォンラムネ」の略言。——ラムネ（名） 口に「サイフォン」の裝置ある罎に入れある「ラムネ」。

（さい）-ふく［祭服］（名） 祭主又は神官などが、祭典のときに著る衣服、白色の布帛にて仕立て、形は袍に似たるもの。（齋服）。

さい-ふぢり［財布尻］（名） 金財布のそこ、轉じて、金錢の出入のかなめ。「——を握る」。

（さい）-ぶつ［才物］（名） 才子。

（さい）-ぶつ［財物］（名） 價格ある物品。たから。たからもの。

（さい）-ぶへうぢゆんじ［西部標準時］（名） 澎湖海峽を通過する東經百二十度線上の時刻、沖繩群島及澎湖の標準時なり。

さい-ふり［采振］（名） ㊀采配をふる人。㊁圍棋にて、碁を握る人。㊂【植】「まてやなぎ」の一名。

（さい）-ぶん［祭文］（名） 祭事に、神靈に告ぐる文。

（さい）-へう［彩票］（名） 富籤の札。とみふだ。

（さい）-べん［才辯］（名） 言廻（イヒマハシ）よき辯。巧なる辯。

（さい）-ほ［菜圃］（名） 蔬菜を植うるはたけ。

（さい）-ほう［裁縫］（名） 布帛を裁（タ）ち縫（ヌ）ふと。又、衣服の仕立。

（さい）-ほつ［再發］（名） 病氣又は惡癖などの再び發すると。

（さい）-ほん［材本］（名） 物をつくる原料。もと。

†さい-まつ（名） 「たいまつ」の訛。

（さい）-まつ［歲末］（名） 年の暮。せいぼ。（歲暮）。

（さい）-まつ［細末］（名） ㊀こまかき物事。㊁こまかき粉。

さい-み［細美］（名） 粗末なる麻布。さよみ。「——の帳」。（貲布、綀）。

（さい）-みつ［細密］（名） こまかきと。めんみつ。ちみつ。

（さい）-みん［細民］（名） こまへ。下民。

（さい）-みんじゆつ［催眠術＝Mesmerism］（名） 人をして意識を或一點に集注せしめ、以て睡眠若しくは喪心の狀態とならしむる術。近時大に流行す、或はこれによりて、時空を超越したる靈の活動を認むべしといへり。

（さい）-む［債務］（名）【法】特定の人に對して、或行爲をなすべき又はなさざるべき義務、卽ち金錢などを借りたる人の辨濟すべき義務の類。債權の對。——がく［債務額］（名） 辨濟すべき金錢の額。——しや［債務者］（名）【法】債權者に對して債務を負（オ）ふもの、卽ち金錢を借りたる者の類。——めいぎ［債務名義］（名）【法】法律上に於て強制執行の基たるべきものと認めらるゝ書面、例へば公正證書又は執行命令等の類これなり。

（さい）-む［財務］（名） 財政上の事務。——ぎやうせい［財務行政］（名） 財務に關する行政、國家の財務行政は大藏大臣これを掌る。——くわん［財務官］（名） 財政上の事務を取扱ふ官吏。

（さい）-めい［在銘］（名） 製作物に其作者の銘のあると。（有銘）。

（さい）-めい［罪名］（名） 犯罪の名稱、例へば官吏侮辱又は毆打創傷等の如きこれなり。

（さい）-めう［在苗］（名） 在所卽ち居る場所の名によりて付けたる苗字、新田郷に居て新田を名のる

の類これなり。

（さい）-めん［西面］（名） 後鳥羽天皇の時に置かれたる院の御所を守護せし武士。

（さい）-もく［細目］（名） こまかき箇條。

（さい）-もく［材木］（名） 建築又は製作等の材料となる木。

さい-もく-や［材木屋］（名） ㊀材木を賣る家。㊁（材木屋の語の略言、高くとまるの謎（ナゾ）なりといふ）倨傲なる人。きどりや。——ふう［材木屋風］（名） 元祿頃に流行せし男子の髮風、頭の背部に細く髷（マゲ）を結びたるもの。

（さい）-もつ［財物］（名） 金錢又は金錢上の價格を有する物品の稱。家財。たからもの。たから。

（さい）-もん［柴門］（名） しばのと。

（さい）-もん［祭文］（名） ㊀「さいぶん」に同じ。㊁「せっきやうさいもん」の略言。——よみ［祭文讀］（名） せっきやうさいもんをいやしげなる節にて謠（ウタ）ふもの。

（さい）-や［在野］（名） 官に仕へずして民間にあると。

（さい）-やう［西洋］（名） 「せいやう」に同じ。

（さい）-やく［採藥］（名） 藥用となる草木を採取すると。

（さい）-やく［災厄］（名） わざはひ。災難。

（さい）-やく［在役］（名） やくづき。在職。在勤。

（さい）-ゆしゆつ［再輸出］（名） 「さいしゆゆつ」に同じ。

（さい）-ゆにふ［再輸入］（名） 「さいしゆにふ」に同じ。

（さい）-よう［採用］（名） 採（ト）りあげ用ふると。

（さい）-よう［財用］（名） 資財と費用と。又、物事に要する費用の支出。

（さい）-よく［財欲］（名）【佛】五欲の一、財物を得んと欲する慾望。

（さい）-らい［再來］（名） 再び此世に生れ出たりといふと。うまれかはり。「空海の——」。

（さい）-らい［在來］（名） ありきたり。

（さい）-らう［宰老］（名） 大小名の家臣の長。からう。

（さい）-らう［豺狼］（名） やまいぬとおほかみと。轉じて、やまいぬや狼の如き心の人、慘酷にして貪吝あくとをしらぬ人。

†さい-らぐ（自、か四） 何となく才ありげに振舞ふ。

（さい）-り［犀利］（名） 堅くしてするどきと。

（さい）-りう［在留］（名） 一時一定の地に留まると。又、外國に留りゐると。——みん［在留民］（名） 外國に在留する我國の臣民。

（さい）-りやう［宰領］（名） ㊀つかさどると。とりまるると。㊁運送の荷物などを監（モ）り行く人。

（さい）-りやく［才略］（名） 才智ありて、よくはかりごとを立つると。

（さい）-りよく［才力］（名） 智慧のはたらき。

（さい）-りよく［財力］（名） 財產上に於ける勢力。又、費用を支出し得る限度。

（さい）-れい［祭禮］（名） かみごと。まつり。

（さい）-れい［罪戾］（名） つみ。とが。

（さい）-れう［材料］（名） 物をつくるたね又はたすけとなるもの。

サイレン［Siren］（名）【理】發音體の振動數を驗するに用ふる一種の器械。

（さい）-ろう［采籠］（名） 籠作（カゴツクリ）の炭とり。

（さい）-わう［齋王］（名） いつきのみこ。

さい-わか［幸若］（名） 舞の一種、桃井直常の後裔にして叡山の稚兒なる幸若麿が、始めて舞ひしもの、能に似て樂器なく扇拍子のみにて謠（ウタ）ひ舞ふ。

さい-わりびき［再割引］（名） 或銀行が、一旦割引したる手形を更に裏書して讓渡をなし、再びこれを割引すると。

(さい-ゐ［在位］(名) 帝王の位にゐたまふ間。御宇。

(さい-ゐん［齋院］(名) 古昔、加茂神宮に仕へられし内親王。いつきのゐん。――し［齋院司］(名) 齋院の事を掌りしつかさ。

(さい-ゑん［菜園］(名) 野菜を植うるはたけ。

(さい-ゑん［才媛］(名) 才多き婦人。又、詩歌などに巧なる女子。

(ざ-いん［坐隱］(名) 世說に出づ碁を圍むこと。

(さう［相］(名) ㊀かたち。すがた。「人の―」。㊁にんさう。「―を觀る」。㊂一切の品類の形狀。かたち。

(さう［箏］(名) 一種の樂器。十三絃を張る、北一より五までを大緒といひ、六より十までを中緒といひ、末の斗(ト)・爲(井)・巾(キン)の三絃を細緒といふ。さうのこと。

(さう［喪］(名) きちゆう。も。「―服」。

(さう［草］(名) ㊀くさ。くさむら。㊁したがき。文案。㊂草書。「―の手」「―かな」。

(さう［操］(名) みさを。

(さう［槽］(名) ㊀かひをけ。馬槽。㊁さかぶね。さかだる。㊂ふね。ため。

(さう［曹］(名) ともがら。くみ。なかま。「吾―」。

(さう［嫂］(名) あによめ。

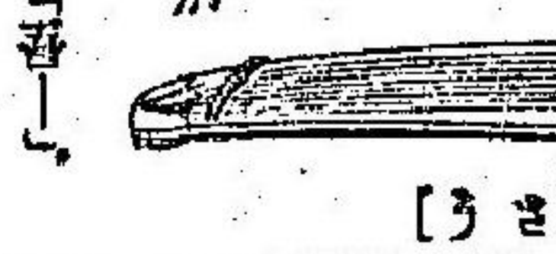
(さう［想］(名) ㊀思想の略言。㊁【佛】吾人の心意に日夜斷ゆることなき妄念。

(さう［壯］(名) ㊀つよきこと。強健。㊁さかんなること。りつぱなること。㊂おほいなること。雄大。㊃三十歳前後。わかざかり。㊄血氣さかんなる者。わかもの。

(さう［雙］(名) つゐ。そろひ。兩方。「―の賀」。

(さう［莊］(名) ㊀「さうゑん」(莊園)の略言。㊁「志やう」に同じ。

(さ-う［左右］(名) ㊀みぎひだり。㊁ありさま。容體。「御―を伺ふ」。㊂おとづれ。たより。「―がない」。


［さう］

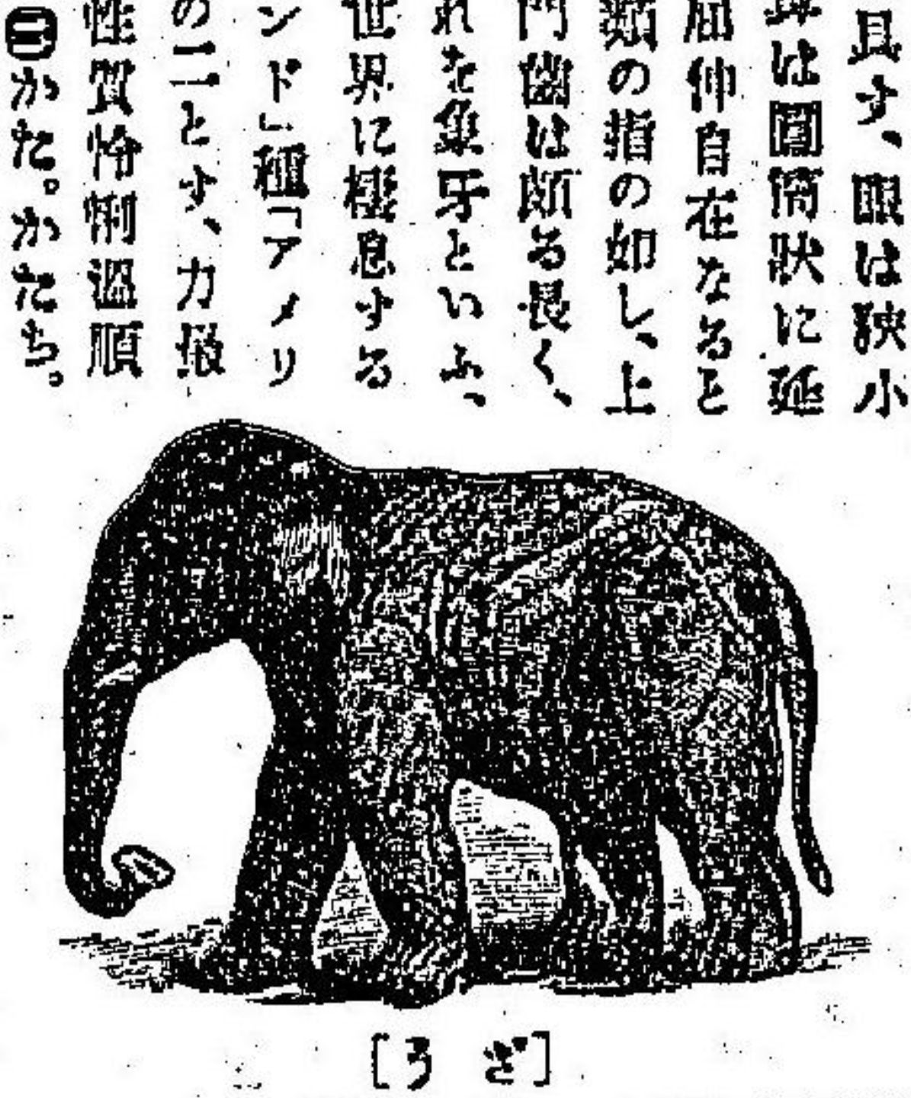
さう［然］(副) (然の延言) 其如く。さか。「―いふ」。

(―さう［艘］(接尾) 船を數ふるにいふ語。「田船千―入船千―」。

(―さう［雙］(接尾) 一對の物を數ふるにいふ語。「屛風一―」。

十―さう［樣］(接尾) 動詞に添へて「さま」の意を表はす語。「嬉し―」「惡し―」。

(ざう［象］(名) ㊀【動】哺乳類中長鼻類に屬する獸、體軀の巨大なると陸棲動物の隨一なり、每肢五趾を具す、眼は狹小なり、鼻は圓筒狀に延長して屈伸自在なると恰も人類の指の如し、上顎の二門齒は斷る長く、俗にこれを象牙といふ、現時の世界に棲息するは、「インド」種「アメリカ」種の二とす、力最も強く性質怜悧溫順なり。㊁かた。かたち。


［ざう］

(ざう［像］(名) ㊀かたち。さま。㊁【理】光の反射又屈折により映(ウツ)る物體の形、實際衝立などに映るものを實像といひ、鏡面などにてたゞ眼にのみ映るものを虛像といふ。㊂神佛・人類又は鳥獸等の形體を模して、描(エガ)き又は造りたるもの。「佛―」。

(ざう［臟］(名) 體內の心・肝・腎・肺・脾などの總稱。

(ざう［贓］(名) 盜竊・詐欺其他不法なる手段によりて、財物を取ること。又、其取りたる財物。「―」。

(ざう［藏］(名) をさめ持つこと。又、其物。「某氏の―」。

(さう-あい［草鞋］(名) わらぢ。わらぐつ。

(さう-あん［草案］(名) 志たがきの文案。(草稿)。

(さう-あん［草庵］(名) 草のいほり。又、いぶせきいほり。(草廬)。

(さう-い［創意］(名) おもひつき。もくろみ。

(さう-い［創痍］(名) ㊀きず。㊁受けたる損害。

(さう-い［造意］(名) くふう。かんがへ。

(さう-いう［爭友］(名) よく忠告する友人。

(さう-えい［造營］(名) 家屋などを營築すること。いとなみつくること。

(さう-えん［蒼鉛］(名) 【化】赤色の光澤を有し美麗に結晶せる金屬、稍々稀(マレ)なるものにして、往々遊離して存在し、或は硫蒼鉛鑛となりて存在す、其合金は融解し易くして模型を作るに用ひられ、化合物は醫藥に用ひらる。

(さう-おう［相應］(名) つりあふこと。相當。

(さう-おん［噪音］(名) 【理】振動が急激に生滅するか若しくは不規則なるかの音。調子にのらぬ音。樂音の對。

(さう-か［喪家］(名) ㊀家を喪ふこと。やどなし。㊁喪(モ)に丁(アタ)れる家。

(さう-か［早歌］(名) 中古、地下(ゲ)の諸物、神樂のは「はやうた」といひてこれと別なりといふ。

(さう-か［唱歌］(名) 「しやうか」に同じ。

(さう-が［爪牙］(名) ㊀つめときば。㊁たのみになる手先。たすけになる部下。「予は王の―なり」。

十ざう-が(名) 「ざうがん」(象眼)の略言。

(さう-かい［草鞋］(名) 「さうあい」に同じ。

(さう-かい［藻海］(名) 【地】太西洋中灣流の通路にて、海草のあまた繁茂せる所。

(さう-かい［掃海］(名) 海中に敷設したる諸種の危險物などを、遍(アマ)く取除きて、航海を安全ならしむること。

(さう-かい［滄海］(名) あをうなばら。あをうみ。(滄溟)。――さうでん［滄海桑田］(名) 滄海變じて桑田となるの義、世の中の甚しきうつりかはりにいふ語。――の-いちぞく［滄海一粟］(名) (あをうみの中の一粒の粟の義) 極めて多大なるものに比して、極めて微小なるものにいふ語。――は［滄海波］(名) 琴を彈(ヒ)く手の一。

(さう-かう［草冠］(名) 「くさかんむり」に同じ。

(さう-かう［霜降］(名) 二十四氣の一、秋季の末にして、陽曆十月二十三日頃にあたる。

(さう-かう［草稿］(名) 志たがき。(原稿、草案)。

(さう-かう［糟糠］(名) かすとぬかと。轉じて、あしき食物。――の-つま［糟糠妻］(名) 貧しき時に娶(メト)りて、苦勞を共にしたる妻。「―は堂より下さず」。

(さう-かう［蒼昊］(名) あめ。そら。

(さう-がう［相好］(名) かほつき。容貌。人相。――をくづす 眞面目なるかほつきを變じて、大いに笑ひ又はよろこぶにいふ。

(さう-かく［贓額］(名) ぬすみ物などのたか。

(さう-かく-るゐ［雙殼類］(名) 【動】蛤(ハマグリ)などの如く、介殼の左右二つある貝の稱。

さう-か-の-いぬ［喪家狗］(名) おちぶれて憔悴したる人を、喪家の狗の食足らず勢なきさまにたとへいふ語。

(さう-か-へいきん［相加平均］(名) 【數】數個の數の和を、其個數にて除したるもの。

さう-がな［草假名］(名) ひらがな。

(さう-かふ［爪甲］(名) つめ。

(さう-かふ［裝甲］(名) ㊀鎧を着て身仕度すること。㊁敵彈を防ぐために、船體に鐵板を施すこと。――じゆんやうかん［裝甲巡洋艦］(名) 巡洋艦の一種、戰鬪艦と共に專ら戰鬪に用ひられ、殊に遠く根據地を離れたる戰鬪に適するもの。

(さう-がん［雙眼］(名) 雙方の眼(マナコ)。(兩眼)。――きやう［雙眼鏡］(名) 【理】短かき望遠鏡を二つ並(ナラ)べたる裝置のものにして、兩眼にて望むに適す、各望遠鏡に、凸「レンズ」を對物「レンズ」とし、凹「レンズ」を接眼「レンズ」とす、長き短く且物體の直立像を見ることを得、近來對物及接眼兩「レンズ」の間に「プリズム」を用ひ、全反射を利用して、長さを更に短くしたるものあり。(兩眼鏡)。

(ざう-がん［象眼］(名) ㊀古昔、布又は紙などに施し、細かき泥畫。㊁今時、銅又は鐵などの面に、模樣を刻(ザ)み込みて、中に金銀などを嵌(ハ)めたるもの。

(さう-き［早起］(名) はやおき。

(さう-き［早歸］(名) はやがへり。

(さう-き［想起］(名) 以前の事をおもひおこすこと。

(さう-ぎ［爭議］(名) ㊀意見又は議論の衝突。あらそひ。㊁異なる意見を主張して議論すること。

(さう-ぎ［葬儀］(名) 死者をはうむる儀式。とむらひの儀式。――や［葬儀屋］(名) 葬儀に要する器具を貸し若しくは賣る人又は家。

(ざう-き［臟器］(名) もろ〳〵の內臟。

(さう-きふ［早急］(名) 「さつきふ」に同じ。

(さう-ぎやう［相形］(名) さうがう。かたち。さま。「嘶き出づる瘦馬の―」。

(さう-きやく［雙脚］(名) 二本の足。雙方の足。

(さう-きゆう［蒼穹］(名) おほぞら。あをぞら。

(さう-きよ［壯擧］(名) 意氣さかんなる擧動。計畫雄大なるふるまひ。

(さう-ぎよ［雙魚］(名) ㊀二ひきのうを。㊁(雙鯉ともいふ、鯉魚の中に手紙の入れありし故事に出づ) てがみ。尺牘。――きゆう［雙魚宮］(名) 【天】十二宮の一、現今は春分點此內にあり。

(さう-ぐ［葬具］(名) 葬式に必要なる道具。――し［葬具師］(名) 葬具をつくることを業とする人。――や［葬具屋］(名) 葬具をつくり又は賣る人。

(さう-く［造句］(名) 句をつゞりつくること。

(さう-ぐう［遭遇］(名) 圖(ハカ)らず出合ふこと。出會すること。――せん［遭遇戰］(名) 彼我の行動中に、相衝突して生ずる戰鬪。

(さう-くつ［巢窟］(名) 匪徒又は盜賊などの根據地。すみか。す。「盜賊の―」。

(さう-くわ［想化］(名) 【哲】「志さうくわ」(思想化)に同じ。

(さう-くわ［造花］(名) 紙又は帛などを切りて、花の形を造ること。又、其つくりたる花。つくりばな。

(ざう-くわ［造化］(名) ㊀天地間に於ける萬物が、生死現滅しつゝ、無窮に變はること。㊁宇宙を經營する神。造物主。(造物者)。――きめう［造化奇妙］(名) 志あはせよきこと。つがふよきこと。――の-さんしん［造化三神］(名) 神道にて、天御中主(アメノミナカヌシ)神・高皇產靈(タカミムスビ)神・神皇產靈(カムミムスビ)神の稱。

(さう-くわい［爽快］(名) さはやかにてこゝろよきこと。意氣さかんにしてたのしきこと。

(さう-くわう［倉皇］(名) あわたゞしきこと。あわつること。(倉卒、蒼黃)。

廿さう-くわん［佐官］(名) 大寶令の第四等の官。さくわん。主典。「異稱」。

(さう-くわん［草冠］(名) 楊弓にて、數二十の

(**さう‐くわん**)ソウ「壯觀」(名) さかんなるみもの。りっぱなるみもの。(大觀)。

(**さう‐くわん**)ソウ「相關」(名) 雙方互に相關係すること。

(**さう‐くわん**)ソウ「雙關」(名) ㊀左右より閉(ト)ざしおはすやうに造りたる扉(トビラ)。㊁漢文の一體、相對する句を立て、骨子とし、以下これに照應參伍して文を行(ヤ)るもの。

(**さう‐げ**)ソウ「象牙」(名) 象の上顎の門齒部ちきは、長く口外に出で、上に向ふ、色白く、諸種の什器に造りて珍重す。

(**さう‐けい**)ソウ「早計」(名) 早まりたるはかた。

(**さう‐けい**)ソウ「造詣」(名) 學問又は技藝に到達又は熟練してゐるほど。「―深遠」。

(**さう‐けい**)ソウ「像型」(名) 鑄造する像のいがた。又、製作する像の模形。

(**さう‐けい**)ソウ「造形」(名) 形體をつくりこしらふること。――**げいじゆつ**「造形藝術」(名) 形ある藝術、即ち、繪畫・雕塑の類。

+**さうけ‐だ・つ**ソウケー[たちつてて]「寒氣立」(自、た四) 「さむけだつ」の轉。

(**さう‐けつ**)ソウ「葬穴」(名) 死人を葬(ハウ)むる穴。

(**さう‐げふ**)ソウギヨウ「創業」(名) 事業をはじむること。基礎をたつること。――**そうくわい**「創業總會」(名) 創業したる會社の第一回拂込ありたるとき、發起人が招集する總會、諸種の報告及取締役・監査役の選擧其他創業の際の必要なる事項を議決するもの。――**ひ**「創業費」(名) 銀行・會社などの創業に要する費用。

(**さう‐けん**)ソウ「想見」(名) おもひみること。おもひやること。

(**さう‐けん**)ソウ「創見」(名) 始めての發見。又、自己の發見。

(**さう‐けん**)ソウ「雙肩」(名) ㊀雙方の肩。㊁自家の負擔。

(**さう‐けん**)ソウ「壯健」(名) すこやか。たっしゃ。ぢやうぶ。

(**さう‐げん**)ソウ「壯言」(名) 意氣さかんなるものがたり又はことば。

(**さう‐げん**)ソウ「草原」(名) くさはら。

+**さう‐げん**ソウ「讒言」(名) 「ざんげん」の音便。

(**さう‐げん**)ソウ「造言」(名) ねなしごと。つくりごと。

(**さう‐こ**)ソウ「倉庫」(名) 貨物を入れおく所。くら。

(**さう‐こ**)ソウ「操觚」(名) 觚は方形の木、支那の古代にはこれに文字を書きたりし筆を執(ト)ること、又、文を作ること。

(**さう‐ご**)ソウ「壯語」(名) 意氣さかんなるものがたり又はことば。

(**さう‐ご**)ソウ「相互」(名) ㊀あひたがひ。おたがひ。㊁かへ〴〵。交換。

(**さう‐ご**)ソウ「造語」(名) つくりたる語(コト)。

(**さう‐こう**)ソウ「艙口」(名) 船中の荷のあげおろしを便にするため、甲板上に設けたる口。

(**さうこ‐えいげふ**)ソウ‐エイギヨウ「倉庫營業」(名) 保管料を受けて他人の寄託貨物を自己所有の倉庫に保管し、倉荷證券を發行し、又、倉庫を賃貸し、又、保管物の轉換其他代金取立・割引・周旋等をなす營業。

(**さうご‐かんおう**)ソウ「相互感應」(名)【理】二つの輪道の一に通ずる電流を或は閉ぢ或は開くとき、其隣間に、他の輪道に電流の通ずること。

(**さう‐こく**)ソウ「相國」(名) 太政大臣の唐名。

(**さう‐こく**)ソウ「相剋」(名) 五行の運行にて、木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木に剋(カ)つといふこと。

さうご‐くみあひソウ‐アイ「相互組合」(名) 相互の利益を圖(ハカ)るために組成したる組合、例へば相互保險・職工組合・同業組合の如きこれなり。

(**さうこ‐くわいしや**)ソウ「倉庫會社」(名) 倉庫營業をなす會社。

(**さうご‐くわいしや**)ソウ「相互會社」(名) 基金十萬圓以上ある相互保險の組合が、其事業を經營するため、規定により官許を得て設立したる會社。

(**さうご‐さよう**)ソウ「相互作用」(名) 相互に作用を及ぼしあふこと。

(**さうこ‐しや**)ソウ「操觚者」(名) 新聞雜誌の記者又は文學者などの稱。

(**さうご‐しゆぎ**)ソウ「相互主義」(名) 甲が乙に利益を與ふれば、乙も甲に利益を與へ、甲が乙に障害を施せば、乙もまた甲に障害を施す等、彼我の間に利害をかへ〴〵にすること。

(**さうご‐ほけん**)ソウ「相互保險」(名) 多數のものが相互組合を組成して相互の保險をなすこと、通常の保險會社と同じく、生命・火災・海上等種々あれど、被保險者はすべて組合員なるが故に、自然に個々の損害に注意し、又、組合員一同にてそれ〴〵の金額を限り責任を有するが故に、一層確實にして、事業上の費用も自ら少額なり。

(**さう‐こん**)ソウ「草根」(名) 草の根。――**ぼくひ**「草根木皮」(名) 漢方醫の用ふる藥劑の稱。

(**さう‐こん**)ソウ「早婚」(名) 年の行かぬ中の結婚。

(**さう‐ごん**)ソウ「莊嚴」(名) たふとくおごそかなること。うるはしくおごそかなること。

(**さう‐ざ**)ソウ「草座」(名) 僧の坐具(ザグ)。蓮座の對。

(**さう‐さ**)ソウ「造作」(名) ㊀てだて。しかた。㊁てま。ひま。「―もない」。㊂もてなし。「御―かけました」。

(**さう‐さい**)ソウ「相殺」(名)【法】二人相互に債權者となり債務者となりたるとき、一定の條件に從ひ、雙方の債權債務を差引して消滅せしむること。

(**さう‐ざい**)ソウ「贓罪」(名) 不法なる手段によりて、財物を取りたる犯罪。

(**さう‐さう**)ソウソウ「草創」(名) ㊀てはじめ。ゐはじめ。(創始、創業)。㊁はじまり。さいしよ。

(**さう‐さう**)ソウソウ「蒼桑」(名) 蒼海桑田の略言。「―の變」。

(**さう‐さう**)ソウソウ「錚錚」(名、副) よくきたひたる鐵などの鳴る聲。轉じて、多くのもの、中にて、器量のすぐれたるさまにいふ語。「鐵中の―たり」。

(**さう‐さう**)ソウソウ「草草」(名、副) ㊀簡略なるさまにいふ語。㊁いそがはしきさまにいふ語。㊂手うすきさまにいふ語。

(**さう‐さう**)ソウソウ「蒼蒼」(名、副) あを〳〵したるさまにいふ語。

(**さう‐さう**)ソウソウ「早早」(副) いそぎて。はや〴〵。

(**さう‐ざう**)ソウゾウ「想像」(名) ㊀おもひやること。おもひかたどること。おしはかること。㊁【心】既知の事實又は觀念を材料として、新事實又は新觀念をつくる心のはたらき。

(**さう‐ざう**)ソウゾウ「創造」(名) はじめ造ること。造り出すこと。つくること。

+**さう‐ざう・し**ソウゾウシ[しく・しく・し・しき・しけれ](形、二) 物さびし。

さう‐ざう・しソウゾウシ[しく・しく・し・しき・しけれ]「騷騷」(形、二) さわがし。やかまし。

(**さう‐さく**)ソウ「創作」(名) はじめつくること。つくること。

(**さう‐さく**)ソウ「造作」(名) ㊀つくること。こしらふること。㊁家のうちに、天井・床間・戸棚其他の建具又は裝飾を造ること、又、其裝飾又は建具。㊂貸家を借りて住まふとき、其中の或裝飾又は建具に對して拂ふ代價。「―のない貸家」。

(**さう‐さつ**)ソウ「相殺」(名) 「さうさい」に同じ。

(**さう‐ざんりよく**)ソウ「造山力」(名)【地】地球の冷えて縮まるにつれ、次第に地殼の表面に褶曲を生ずる收縮力、山岳溪谷はこれによりて生ず。

(**さう‐し**)ソウ「創始」(名) はじめ。はじまり。

(**さう‐し**)ソウ「雙子」(名) ふたご。

(**さう‐し**)ソウ「桑梓」(名) ㊀(詩經に出づ) ふるさと。故郷。㊁文書の版刻。

(**さう‐し**)ソウ「壯士」(名) ㊀意氣さかんなるわかもの、勇壯なる士。㊁近世、定まりたる職業なくして、處々を漂泊し、人の依賴を受けて談判脅迫などを行ふ一種の人物。㊂「さうしばゐ」の略言。

(**さう‐し**)ソウ「相思」(名) 互に思ふこと。あひぼれ。

(**さう‐し**)ソウ「草紙」(名) ㊀さうかう。したがき。㊁物語などの冊子。㊂手習草紙の略言。㊃練習のために使用せらるゝもの。

+**さう‐し**ソウ「障子」(名) 「しやうじ」に同じ。

+**さう‐じ**ソウ「精進」(名) 「しやうじん」に同じ。「―の日のおこなひ」。「―もの」。

(**さう‐じ**)ソウ「相似」(名) 互に相似かよひてあること。

(**さう‐じ**)ソウ「雙兒」(名) ふたご。

+**さう‐じ**ゾウ「曹司」(名) ㊀古昔、禁中又は官省などに於ける官吏又は女官などの用部屋の稱。つぼね。へや。㊁古昔、大學寮にて人を教授したる所、東西の二つありき。㊂部屋住の公達の稱。「御―牛若丸」。

(**さう‐じ**)ゾウ「造次」(名) 僅かの間。つかのま。

+**さうし‐あはせ**ソウシアワセ「草紙合」(名) 古昔行はれし一種の遊戲、互に物語などの冊子の巧拙をたゝかはせて勝負を決せしもの。

(**さう‐しう**)ソウ「早秋」(名) 秋のはじめ。しよしう。

(**さうしう‐さう**)ソウシウ‐ソウ「掃愁帚」(名) (うれひを掃ふたまはゝき)酒の異稱。

さうしう‐ものソウ「相州物」(名) 相州の人五郎正宗の系統をつぎたる人々のきたひつくりたる刀。

(**さうし‐えふ‐しよくぶつ**)ソウシヨウ「雙子葉植物」(名)【植】發生するときに、必ず二枚の子葉を有する植物、あさがほ・そらまめの類これなり。

(**さうし‐えんげき**)ソウ「壯士演劇」(名) 「さうしばゐ」(壯士芝居)に同じ。

さうし‐がみソウ「草紙紙」(名) ㊀てならひざうしの用紙。㊁漉(ス)きがへしの紙。

(**さう‐しき**)ソウ「葬式」(名) さうれい。

(**さう‐しき**)ソウ「相識」(名) しりあひ。ちかづき。しりびと。

さうし‐きりソウ「草紙錐」(名) 紙などを綴(ト)づるに用ふる錐。

(**さうじ‐けい**)ソウ「相似形」(名)【數】相似直線形又は相似多角形の稱。

さうじ‐こばんソウ「草字小判」(名) 文政年間に鑄造せし小判。

さうし‐しばゐソウ「壯士芝居」(名) 舊俳優の系統外なる壯年特に壯士などが、新に組織せし芝居、正劇又は新派など、稱して、當世風の新狂言を演ず。

+**さうし‐ずみ**ゾウ「曹司住」(名) ㊀つぼねにさがりて休み居ること。㊁へやずみ。「―にてあり」。

(**さうじ‐たかくけい**)ソウ「相似多角形」(名)【數】相似直線形に同じ。

(**さうじ‐ためんたい**)ソウ「相似多面體」(名)【數】互に相似にして相似の位置にある面を有し、且對應二面角相等しき二つの多面體の稱。

(**さうじ‐ちよくせんけい**)ソウ「相似直線形」(名)【數】互に等角にして、且其對應邊が互に比例をなす二つの直線形。

(**さう‐しつ**)ソウ「喪失」(名) なくなすこと。うしなふこと。

(**さう‐して**)ソウ「然而」(接) 「然して」の延言。

(**さうじ‐てんぱい**)ソウ「造次顚沛」(名) 暫時の間。つかの間。僅かの間。

さうじ‐の‐ちゆうしんソウ「相似中心」(名)【數】二つの圓の中心を結ぶ直線と共通切線との交點。

又、相似直線形の對應邊を平行するやうに置きたるとき、對應する頂點を連絡する諸線の交點。

さうし-の-ゐち「相似位置」(名)【數】二つの與へられたる直線が、二つの相似形の對應邊なるとき、此相似形の二直線に對する位置。

(さうし-ひ)「相似比」(名)【數】二つの相似形の對應邊の比。

(さうし-びやう)「相思病」(名) こひわづらひ。こひやみ。

†さうし-まち「曹司町」(名) 古昔、禁中に曹司たちの數多あつまりし所。つぼねまち。

†さうし-み「正身」(名)(音の轉訛)當人。本人。「—の御有樣」。

さうし-みせ「草紙店」(名) くさざうしなどを賣る店。

(さうし-やう)「相生」(名) 五行の運行にて、木より火を、火より土を、土より金を、金より水を、水より木を生ずといふこと。

(さうし-やう)「創傷」(名) 身體をきずつけそこなふこと。又、きず。

(さうし-やう)「藏相」(名) 大藏大臣の異稱。

さうし-やくしや「壯士役者」(名) 壯士芝居の役者。又、壯士の役者となりたるもの。

(さうし-ゆ)「喪主」(名) 葬式をいとなむ主人。

(さうし-ゆ)「雙手」(名) 左右の手。

(さうし-ゆ)「操守」(名) 心中にかたくとり守りてかはらざること。みさを。

(さうし-ゆ)「造酒」(名) 酒を醸(カモ)すこと。

(さうし-ゆう)「操縦」(名) 或はひきとめ或ははなちやり、いろいろあやつりて動かすこと。

(さうし-ゆく)「早熟」(名) ㊀早く熟すること。㊁發達早くして、幼年の頃已に成人の風あること。

(さうし-ゆつ)「槍術」(名) 槍を用ふる術。——か「槍術家」(名) 槍術を行ふ人。又、槍術に巧なる人。やりつかひ。

(さうし-ゆん)「早春」(名) 春のはじめ。はつはる。(孟春)。

(さうし-よ)「草書」(名) 漢字の書體の一、行書を更にくづし、字畫の最も略せられたるもの。

(さうし-よ)「藏書」(名) 所藏の書物。(所有書)。

(さうし-よう)「相稱」(名) 相かなふこと。相似たること。「左右—」。

(さうし-よう)「爭訟」(名) あらそひ。うつたへ。

(さうし-よう)「相乘」(名)【數】二個以上の數をかけあはすこと。——ひ「相乘比」(名)【數】同一種類の量が數個あるとき、第一の量と最後の量との比、其値は、第一の量と第二の量との比第二の量と第三の量との比等の相乘に等し。——へいきん「相乘平均」(名)【數】數個の數の連乘積を其個數の乘根に開きたるもの。

(さうし-よく)「裝飾」(名) ㊀かざりつけ。㊁よそほひ。(粧飾)。——ひん「裝飾品」(名) 裝飾に用ふる物品。

(さうしよく-じゆう)「草食獸」(名)【動】もも に草を食ふ哺乳動物、即ち、牛馬などの類。

(さうし-るゐ)「雙翅類」(名)【動】昆蟲類の一、中胸部に膜質の翅一對あり、後胸部の翅は極めて小なる棍棒状をなして飛行の用をなさず、口器は吸(ス)ひ又は舐(ネ)るに適し、中には鍼状をなして刺(サ)すもあり、變態完全にして、幼蟲は概ね翅を有せず、はひ・あぶ・か等これに屬す。

(さうし-ん)「雙親」(名) ふたおや。兩親。ちゝはは。

(さうし-ん)「諍臣」(名) 主君の非道をいさめあらそふ臣下。

(さうし-ん)「早晨」(名) あさはやきこと。

(さうし-ん)「喪心」(名) 平常の意識を喪失すること。きぬけすること。(喪神)。

(さうし-ん)「騷人」(名) 文人又は詩人。風流人。

(さうしんぐう-し)「造神宮使」(名) 內務大臣の監督を受け、造神宮使廳の事務をつかさどるもの。——ちやう「造神宮使廳」(名) 伊勢の神宮の造營又は神寶などの事を取扱ふ官廳。

†さう-す（せしすすれせよ）「請」(他、さ變) 請待す。まちうく。まねく。

さう-す（せしすすれせよ）「草」(他、さ變) 草稿をつくる。

さう-す（せしすすれせよ）「相」(他、さ變) ㊀物事のさまを觀(ミ)て判別す。㊁人相又は家相などを觀(ミ)る。

さう-す（せしすすれせよ）「藏」(他、さ變) をさめもつ。をさめたくはふ。「書を—」。

(さう-せい)「草聖」(名) 草書を最も巧に書く人。

さう-せい「創製」(名) はじめてつくり出すこと。

(さう-せい)「相制」(名) 相互に影響を及ぼすこと。互に制しあふこと。

(さう-せい)「早世」(名) わかじに。はやじに。(夭折、夭死)。

(さう-せい)「蒼生」(名) あをひとぐさ。たみ。人民。「—を奈何せん」。

(さう-せい)「創世」(名) 世界をつくりはじむること。又、世界のできはじめ。

(さう-せい)「雙星」(名) 二つならびて見ゆる星。又、牽牛と織女との稱。

(さう-せう)「騷擾」(名) さわぎ。騷動。

(さう-せつ)「早雪」(名) 早く降(フ)る雪。

(さう-せつ)「霜雪」(名) ㊀霜と雪と。㊁頭髮の白きにいふ語。

(さう-せつ)「草竊」(名) 草野の竊盜、おひはぎ、おひおとし。

(さう-せつ)「創設」(名) はじめまうくること。

(さう-せん)「愴然」(名、副) いたましきさま。又、かなしきさまにいふ語。

(さう-せん)「騷然」(名、副) さわがしきさまにいふ語。

(さう-せん)「蒼然」(名、副) ㊀色のあをくしたるさまにいふ語。㊁夕方のうすぐらき景色にいふ語。「暮色—」。

(さう-せん)「造船」(名) 船舶又は艦艇を建造すること。——がく「造船學」(名) 造船に關する學理・技術を研究する科學。——くわん「造船官」(名) 海軍にて造船の事を掌る高等官。——しよ「造船所」(名) 船舶又は艦艇を建造し、汽機汽罐其他諸種の附屬具を製造し、且其修理又は艤裝等をなす工作場。

(さう-そう)「葬送」(名) 屍を葬(ハウム)るを送ること。とむらひ。

†さう-ぞく「裝束」(名)「しやうぞく」に同じ。

(さう-ぞく)「草賊」(名) ㊀百姓一揆。㊁おひおとし。おひはぎ。

(さう-ぞく)「相續」(名) ㊀つぎつゞくこと。㊁先代の戸主のあとを承けつぐこと。あとつぎ。(繼續、襲[illegible])。㊂【法】前戸主に代はりて、其權利義務を包括してうけつぐこと、家督相續と遺産相續とあり。㊃【哲】現象は無常にして暫くもとゞまらざれど、諸法はつぎつゞきて絶えざること、宇宙は無常と相續とによりて形成せらる。——にん「相續人」(名) 相續をなす人。——ぶん「相續分」(名)【法】遺産相續の數人ありたる場合に於ける割前。

†さう-ぞく（かきくくけけ）「裝束」(自、か四) 裝束をつく。よそほふ。かざる。

(さう-そつ)「草卒」(名) あわたゞしきこと。いそがしきこと。にはかなること。(倉卒)。

†さうぞめ-く（かきくくけけ）(自、か四) 全く無言不動にてあり。

(さう-たい)「霜臺」(名) 彈正臺の唐名。

(さう-たい)「相對」(名) ㊀相むかひてあること。㊁相互に制約をなしあふこと。相互に關係を有すること。㊂其もの以外に存立するものあること。差別界の現象なること。㊃或條件の附隨してあること。又、他と比較しての言なること。——てき「相對的」(形) 相對なるにいふ語。——ぎむ「相對義務」(名)【法】權利と相對立する義務、債務の如きこれなり。

(さう-だい)「壯大」(名) ㊀いかめしく大いなること。りつぱなること。「—なる建築」。㊁わかざかり。

(さう-たう)「相當」(名) ㊀適合すること、あてはまること。㊁つりあふこと。相應してあること。㊂相同じきこと。㊃特に定められてあること。きめてあること。「—金額」。——くわん「相當官」(名) 位階の或官に相當してある官。「少將—」。「大佐—」。

(さう-だう)「草堂」(名) ㊀かやぶきの家。㊁我家の謙稱。

さうだ-がつを(名)【動】硬鰭類中さば科に屬する魚、背部蒼黑色にして後方に雲紋あり、體長一尺許に達す、習性かつをに類し、多く東海に產す。

(さう-たん)「早旦」(名) 早朝。(爽旦)。

(さう-だん)「相談」(名) はなしあひ。ひやうぎ。

(さう-ち)「裝置」(名) しかけ。つくりたて。

さう-ぢ「掃除」(名) ㊀塵芥其他汚物を掃(ハラ)ひ除くこと。㊁「しもさうぢ」の略言。——にん「掃除人」(名) 掃除に從事する人。——や「掃除屋」(名) しもさうぢをする人。こえとり。

(さう-ち)「藏置」(名) 貨物を倉庫などにをさめおくこと。

(さう-ちやう)「曹長」(名) 陸軍下士官の上級、軍曹の上に位するもの。

(さう-ぢゆつ)「蒼朮」(名)【植】菊科に屬する植物、嫩芽に白毛あり、秋の頃、薊(アザミ)に似たる白色の花開く、根は藥用とし濕氣を拂ふに用ふ。をけら。

(さう-ぢよ)「掃除」(名) ㊀「さうぢ」に同じ。㊁害撥をはらひのぞきて、清く安らかにすること。

†さうづ-がは「三途川」(名) さんづがは。

(さう-てい)「裝釘」(名) ㊀よそほひて釘うつこと。かざりてとづること。㊁書籍などの裝飾と綴方と。

(さう-てい)「壯丁」(名) 壯年の一人前の男子。成年以上の血氣さかんなる男子。わかもの。

(さう-てう)「早朝」(名) あさ。早天。

(さう-でう)「雙調」(名) ㊀十二律の一。㊁二つの調子。單調の對。

(さう-てん)「蒼天」(名) ㊀あをぞら。おほぞら。(蒼穹)。㊁上帝。造化。「—に訴ふ」。

(さう-てん)「早天」(名) あけのそら。さうてう。あさ。

(さう-てん)「裝塡」(名) ㊀中へつめこむこと。㊁彈藥を銃砲につめこむこと。

(さう-でん)「相傳」(名) つたへつぐこと。うけつたふること。

(さう-と)「壯圖」(名) さかんなる事業。おほいなるくわだて。

(さう-とう)「雙頭」(名) 頭の二つ並(ナラ)びて附きたるもの。

(さう-とう)「爭鬪」(名) あらそひ。たゝかひ。

(さう-とう)「蒼頭」(名) ㊀(支那の古昔、兵卒の頭巾(ヅキン)は蒼色なりしに出づ)ざふひやう。㊁つかひをとこ。めしつかひ。

(さう-とう)「草頭」(名) くさかんむり。

(さう-とう)「搔頭」(名) ㊀頭をかくこと。㊁かんざし。

(さう-どう)「曹洞」(名)「さうどうしゆう」の略言。——しゆう「曹洞宗」(名) 禪宗の一派、道元禪師の傳へしもの、越前國永平寺及能登國總持寺を本山とす。

(さう)どう（ソウ一）[騷動](名) ㊀事變又は擾亂あること。㊁さわぎて平穩ならざること。㊂あらそひ。たゝかひ。‡――うち[騷動打](名) うはなりうち。

(さう)どく（ソウ一）[瘡毒](名) かさ。ばいどく。

‡さう·どく（ソウ一）（かきくくけけ）(自、か四) さわぎたつ。

(さう)とく（ソウ一）[藏匿](名) かくすこと。かくまふこと。

‡さう·とん（ソウ一）[草墩](名) 古昔の一種の敷きもの。

さう·な（ソウ一）[草名](名) ㊀草書の一名。まなの對。㊁古昔、文書に、我名を草書にて自筆し、花押としたるもの。かきはん。

‡さう·なし（ソウ一）（くしき けれ）[左右無](形、二) すぐになす。ためらはず。「さうなくは人を得貶しめじ」。

‡さう·なし（ソウ一）（くしき けれ）[雙無](形、二) たぐひなし。ならびなし。

(さう)なん（ソウ一）[遭難](名) わざはひにあふこと。危難にであふこと。

‡(さう)に（ソウ一）(副) (「さまに」の音便)やうに。げに。「面白ーある」。

(さう)にん（ソウ一）[相人](名) 相見の人。にんさうみ。

(さう)ねん（ソウ一）[壯年](名) 最も壯(サカ)んなる年頃。又、其年頃の人。(壯齡)。

(さう)ねん（ソウ一）[想念](名) 【心】意識に印象せられたる事物の念、智・情・意に亙(ワタ)り、心的生活の大部は、此種々なる變化離合に外ならず。

‡さう·のこと（ソウ一）[箏琴](名) 箏に同じ。

‡さう·のふえ（ソウ一）[笙笛](名) 笙に同じ。

さう·ば（ソウ一）[相場](名) ㊀市場に於ける貨物と貨幣との交換比例。貨物の時價。㊁物品の賣買に、現物の取引をなさず、專ら時價の差引によりて、相互間の取引をなすこと。㊂具ーなさだめ。月旦。――くわいしよ[相場會所](名) 昔時の取引所。――し[相場師](名) 現物によらず、相場の變動を利用してなす取引を業とする人。(投機者、相庭師)。――づけ[相場附](名) ㊀相場の決定。㊁相場の高下の記錄。――へう（ヒヨウ）[相場表](名) 前條に同じ。

(さう)はう（ソウホウ）[雙方](名) 兩方。――かうゐ（コウヰ）[雙方行爲](名) 【法】當事者雙方の意思表示によりて成立する法律行爲、契約の如きこれなり。

(さう)ばう（ソウボウ）[相貌](名) かほかたち。みめかたち。

(さう)ばう（ソウボウ）[蒼茫](名) 見渡すかぎりの物色定かならずして、ひろびろとしたること。

(さう)ばう（ソウボウ）[想望](名) ㊀其人の德を慕ひ仰ぐこと。㊁もしはかりて其事の到來を待つこと。

(さう)ばう（ソウボウ）[草莽](名) ㊀くさむら。くさはら。㊁民間。在野。――のしん[草莽臣](名) 官に仕へずして野にある人。へいみん。庶人。

(さう)はく（ソウ一）[糟粕](名) ㊀さけのかす。かす。酒滓。㊁淡味なき殘物。精神なき殘跡。「古人の一」。

(さう)はつ（ソウ一）[搔撥](名) かきひらくこと。かきのぞくこと。――るゐ[搔撥類](名) 【動】鳥類の一、脚は強大にして地上を歩むに適し、後趾は前趾よりも高く、翼小にして嘴強く、地を搔撥して食物を求む、きじ・にはとり・やまどり等これに屬す。

(さう)ばん（ソウ一）[雙盤](名) 寺院にて、閻魔の開帳などに打ち鳴らす金屬の盤。

(さう)ばん（ソウ一）[早晚](副) おそかれはやかれ。いつか。

(さう)はん（ソウ一）[藏版](名) 所藏の版。又、其印本。

(さう)はんはうていしき（ソウ一ホウ一）[相反方程式](名)【數】一の方程式の根の逆數を根とする方程式。

‡さう·び（ソウ一）[薔薇](名) 【植】「ばら」に同じ。

(さう)び（ソウ一）[壯美](名) 【哲】尊敬の感情を示す美。純美の對。

(さう)び（ソウ一）[雙美](名) ㊀雙方とも負けず劣らずすぐれてよきもの。㊁二人の美人。

(さう)ひ（ソウ一）[象皮](名) 象の皮。

(さう)びん（ソウ一）[雙鬢](名) 左右の鬢。「一の霜」。

(さう)びん（ソウ一）[蒼旻](名) あをぞら。そら。

(さう)ひん（ソウ一）[贓品](名) 「ざうぶつ」(贓物)に同じ。

(さう)ふ（ソウ一）[壯夫](名) わかもの。壯丁。

(さう)ふ（ソウ一）[傖父](名) ゐなかもの。ゐなかおやぢ。

‡さう·ぶ（ソウ一）[菖蒲](名) ㊀【植】「あやめ」に同じ。㊁かさねの色目、表は靑にして、裏は紅梅なるもの。

(さう)ふ（ソウ一）[臟腑](名) ㊀五臟と六腑との總稱。㊁はらわた。

(さう)ふく（ソウ一）[喪服](名) 喪(モ)の中に着るべき衣服。もふく。

(さう)ぶつ（ソウ一）[贓物](名) うばひとりたる物。ぬすみたる物。不正なる手段によりて得たる物。

(さう)ぶつ（ソウ一）[造物](名) ㊀天地萬物。自然。㊁造物者の略言。――しや[造物者](名) 天地萬物を經營支配する神。造化の神。上帝。天帝。――しゆ[造物主](名) 前條に同じ。

(さう)ふれん（ソウ一）[想夫憐](名) 雅樂の曲の名。(想夫戀)。

(さう)ぶん（ソウ一）[藻文](名) あや。もやう。

(さう)へい（ソウ一）[雙斃](名) 相死。心中。

(さう)へい（ソウ一）[造幣](名) 貨幣の鑄造。――きよく[造幣局](名) 大藏大臣の管理に屬し、おもに貨幣の鑄造をなす所、貨幣の製造又は鑛物の試驗等をもなす。

(さう)へい（ソウ一）[造兵](名) ㊀兵器を製造すること。㊁砲兵工廠の俗稱。(東京の方言)。――くわん[造兵官](名) 兵器製造の事をつかさどる高等官。

(さう)ほう（ソウ一）[藏鋒](名) 書法にて、畫の起頭に筆の尖端をあらはさゞる樣に書くこと、露鋒の對。

(さう)ほん（ソウ一）[草本](名) ㊀【植】草本莖を有する植物。くさだち。㊁したがき。草稿。――けい[草本莖](名) 【植】一年生又は二年生の植物の莖、質柔軟なり。木幹の對。――たい[草本帶](名) 【植】高山植物帶の一、矮生なる植物際に草本羅生し、花色鮮美にして恰も五色の毛氈を敷きたる如き一帶の稱。

(さう)ほん（ソウ一）[藏本](名) 貯藏せる書物。

(さう)ま（ソウ一）[相馬](名) ㊀馬の相を觀ること。㊁紋所の名、杭に馬を繫ぎたる象をゑがけり。㊂「さうまやき」の略言。――やき[相馬燒](名) 磐城國中村(舊相馬藩)より產出する陶器、外見は粗糙にして、多く走馬の模樣を畫けるもの。

(さう)まい（ソウ一）[草昧](名) 世界の狀態又は人世の事物の未だ開けずして不分明なること。「一の時代」。

(さう)まう（ソウモウ）[草莽](名) 「さうばう」に同じ。

さう·み（ソウ一）[相見](名) 人相を見ること。又、其人。にんさうみ。(觀相)。

(さう)みん（ソウ一）[早眠](名) 普通の時刻より早く就寢すること。早くとこにつくこと。

(さう)むけいやく（ソウ一ケイ一）[雙務契約](名) 【法】當事者雙方が義務を負擔する場合の契約、賣買の如く、賣主は物品引渡の義務を生じ、買主は代金支拂の義務を生ずる類これなり。片務契約の對。

(さう)めい（ソウ一）[滄溟](名) あをうなばら。あをうみ。(大洋、洋海)。

(さう)めつ（ソウ一）[剿滅](名) 賊などをみなごろしにすること。

さう·めん（ソウ一）[索麪](名) (「さくめん」の音便)一種の食品、小麥の粉を水と鹽とにて捏(コ)ね、胡麻油にて細く引き延ばし、これを日光に曬(サ)して乾したるもの。茹(ユ)でゝ食す。(線麪)。――ぐさ[索麪草](名) 【植】「ねなしかづら」の一名。(關東の方言)。

(さう)めん（ソウ一）[草綿](名) 【植】「きわた」の一名。

(さう)もく（ソウ一）[草木](名) ㊀草と木と。㊁植物。

さう·もじ（ソウ一）[草文字](名) 草書體の文字。

(さう)もつ（ソウ一）[贓物](名) 「ざうぶつ」に同じ。

(さう)もん（ソウ一）[桑門](名) 僧侶の異稱。よすてびと。「シャモン」。(沙門)。

‡さう·もん·か（ソウ一一）[相聞歌](名) こひのうた。

(さう)やく（ソウ一）[裝藥](名) 彈丸發射の用に供する火藥、これを裝塡するには藥嚢又は藥莢を用ふ。くわやく。がふやく。

(さう)よく（ソウ一）[雙翼](名) ㊀左右のはね。㊁左右の軍。

(さう)ゆ（ソウ一）[桑楡](名) ㊀夕暮の日影。㊁西の方。

(さう)らう（ソウロウ）[滄浪](名) あをあをとしたる波。

㊂人の晚年。

(さう)らう（ソウロウ）[蹌踉](名) 足許のよろよろすること。

(さう)らん（ソウ一）[騷亂](名) 事變起りてさわぎみだるゝこと。さうどう。さわぎ。「土民の一」。

(さう)り（ソウ一）[笊籬](名) 「みそこし」の一名。

(さう)り（ソウ一）[草履](名) 藁又は草などにて編みたるはきもの。(屨)。――かくし[草履匿](名) 小兒の遊戲、交互に草履を匿してこれをさがし出しあふもの。――げた[草履下駄](名) 駒下駄より稍や低き下駄、藁にて編みたる草履を表につけたるもの、今は多く竹皮を編みたるものを用ふ。――とり[草履取](名) 昔時、主人のはきものを持ちて從ひ行きし奴僕。――もち[草履持](名) 前條に同じ。

(さう)りつ（ソウ一）[創立](名) はじめ設くること。成立せしめしこと。開き建(タ)つること。「大學一以來」。――そうくわい[創立總會](名) 創業總會に同じ。

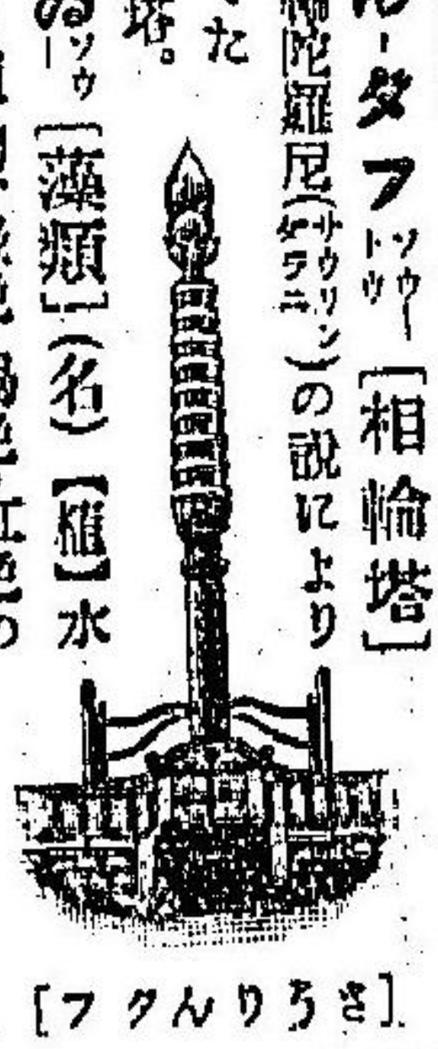
――ひ[創立費](名) 創業費に同じ。

(さう)りん（ソウ一）[倉廩](名) くら。こめぐら。

(さう)りん（ソウ一）[雙輪](名) 前後又は左右に二つの車輪を裝置すること。又、其車輪。――しや[雙輪車](名) 雙輪を裝置せる車。

(さう)りん（ソウ一）[造林](名) 樹木をうゑて林を造ること、天然造林法と人工造林法との二種あり。

さうりん·タフ（ソウ一トウ）[相輪塔](名) 相輪陀羅尼(サウリンダラニ)の說により建(タ)てたる一種の塔。



[さうりんタフ]

(さう)るゐ（ソウ一）[藻類](名) 【植】水中に生ずる植物、綠色・褐色・紅色の三種あり。

(さう)れい（ソウ一）[葬禮](名) 人の死骸を葬(ハフ)ること。「葬式」。

(さう)れい（ソウ一）[壯麗](名) 雄大にしてうつくしきこと。りつぱにしてうるはしきこと。

(さう)れつ（ソウ一）[壯烈](名) 志氣の雄大にして行爲の忠正なること。「鬼神泣ニ一ニ」。

(さう)れん（ソウ一）[操練](名) 兵士軍隊なして戰地の進退操縱に熟せしむるやう練習すること。

(さう)ろ（ソウ一）[草廬](名) くさのいほり。(草庵)。

(さう)ろく（ソウ一）[藏六](名) 頭尾兩手兩足の六つをかくす義【動】龜の異稱。

(さう)ろん（ソウ一）[爭論](名) あらそひ。ぎろん。(諍論)。

(さう)ゐ（ソウ一）[相違](名) 彼是互に異なること。ちがひめ。(差異)。

(さう)ゑん（ソウ一）[莊園](名) ㊀別莊の田園。㊁中古、功臣・權門其他開墾者等の私有に屬せし土地、賦税調所のなかりしもの。しやうゑん。

‡さえ[采](名) 「さい」の訛。

十さえ［才］（名）㊀さい。才智。㊁學問。技藝。「―世し」。―の-おぼえ［才覺］（名）才智又は學藝に秀でたりとの評判。

さえ-かへ-る（らりるるれれ）［冴返］（自、ら四）つよくさゆ。

さえ-ざえ・し（しくしくしきしけれ）［冴冴］（形、二）殊によくさゆ。

十さえ-さえ・し（しくしくしきしけれ）［才才］（形、二）才智あるさまの外貌擧動にあらはれ見ゆ。

さえ-ざえ-て（副）さえたる上に尚ほさえて。いとさえて。「更けにけり、外山の嵐、―」。

十さえ-だ［小枝］（名）こえだ。こずゑ。「ときはなる松の―たわればむすばな」。十―-ぐさ［小枝草］（名）［植］竹の異稱。

十さ-おり［狹織］（名）幅狹（セマ）く織りたる布、後世の織田（サオ）織の類なるべしといふ。「―の帶」。

さか［坂］（名）平坦ならずして彼方高く此方低き路。のぼりくだりする道。（嶝、阪）。

さか［酒］（名）「さけ」の轉。「―樽」。

さか［逆］（名）ぎやく。さかさま。

十さか［冠］（名）とさか。肉冠。

十さか［斛］（名）量の名。「こく」に同じ。

十さか［尺］（名）度の名。「しやく」に同じ。「髮は見はじめ侍りし春は、たけに―ばかりあまりて」。

十さが［性］（名）㊀もちまへ。うまれつき。性質。「人の―」「秋の―」。㊁ならはし。ならひ。習慣。「世の―なれば詮なし」。

さが［祥］（名）㊀あやし。きざし。（徵）。㊁めでたきしるし。よろこびのきざし。（吉徵）。

（さ-が［槎枒］（名）木の枝の縱橫に相交はると。

（さ-が［嵯峨］（名）㊀山の高くしてけはしきと。㊁古代錦の一種。

（さ-か［座下］（名）書簡にて、先方の名宛の下に添へて敬意を表する語。（案下、机下）。

十さか-あぶら［酒膏］（名）にごりざけ。（醪）。

（さ-がい［詐害］（名）㊀いつはりたくらみて、他人の害をなすと。㊁［法］いつはりを以て、他人の財産に損害を及ぼすと。―-かうゐ（ウーヰ）［詐害行爲］（名）［法］詐害の行爲、特に民事にて、債權者に損害を及ぼさんとの目的を以て、自分の財産を隱蔽し又は自分の債務を增すと。

〔さか-いき［月代］（名）「さかやき」の訛。

（さ-かう（ウーコ）［鎖港］（名）港内に他邦の船舶の入るを禁じ、通商を許さゞると。―-じやうい（ジヨウーイ）［鎖港攘夷］（名）德川幕府の末年に、朝野の志士が、幕府の開港を許可せしに反對して唱へし議論。

十さ-かう（ウーコ）［麝香］（名）「じやかう」に同じ。

さかえ［榮］（名）さかゆると。繁榮。榮華。十―-る［榮］（自）「さかゆ」の訛。

さか-おとし［逆落］（名）㊀逆に落すと。㊁懸崖などを下ると。「鵯越の―」。㊂懸崖などの切りそぎたるが如きさまなると。

さか-おひ（イーオ）［逆追］（名）追ひかけ來しものを、反對におひちらすと。

さか-かす［酒粕］（名）酒の醪（モロミ）を搾（シボ）りて、あとに殘りたる粕、酒物などの料とし又は肥料にも用ふ。さけのかす。（醨）。

さか-がめ［酒甕］（名）酒を入るゝ甕（カメ）。（酒瓶）。

十さか-がり［酣］（名）（酒酣（サカカリ）の義）酒に醉ひて狂ひ怒ると。（酒狂、醉狂）。

さかき［榊］（名）㊀ときはぎの總稱。㊁［植］山茶科に屬する常綠木、葉の全邊にして花の兩全なるものと、葉は鋸齒を有し花は果實を生じ若しくは脫落するものとの二種あり、枝葉は多く神に供せらる。（神樹、梁木、賢木、楊桐）。

さか-き［倒木］（名）木理（モク）を逆に用ひたる材。

〔さか-きげん［酒機嫌］（名）酒を飲みて心持好きと。醉ひて精神爽（サワヤカ）なると。（酒興）。

十さか-きさ［酒蟻］（名）酒の上に浮く滓（カス）の如きかび。（浮蟻）。

（さ-かく［座客］（名）座に居る客人。

さか-くさ・し（しくしくしきしけれ）［酒臭］（形、二）㊀酒のにほひあり。㊁酒に醉ひたるにほひあり。

さか-くじ［逆公事］（名）訴へらるべき筈のものが、却て訴ふべき筈のものを相手取りて訴ふると。

さか-ぐら［酒藏］（名）酒を入れ置くくら。酒造家の藏。

さか-け［酒氣］（名）酒の氣。酒の香。

さか-ご［逆兒］（名）逆になりて出產する兒。脚部より先づ出產する兒。逆產の兒。（倒產）。

さか-ごと［酒事］（名）さかもり。酒宴。

さか-ごと［逆事］（名）㊀道理に順ならぬと。ひがごと。「―のまがごと」。㊁順序の逆なると。例へば、子が親に先だちて死ぬるが如き類をいふ。

さか-ども［酒薦］（名）酒樽を包むこも。

さか-さ［逆］（名）「さかさま」に同じ。（倒）。―-はりつけ［逆磔］（名）「さかはりつけ」に同じ。―-まつげ［逆睫］（名）眼球を刺戟するやう逆に生えたるまつげ。さかまつげ。

さか-さま［逆］（名）（逆方の義）ぎやく。さかさ。うらはら。うらうへ。さかしま。反對。顛倒。「―になる」。（倒）。―-ごと［逆事］（名）「さかごと」に同じ。―-ごと［逆語］（名）主意の反對なる語。うらうへなる語。「はてはいはんことのなきにやあらん―ぞある」。十―-の-つみ［逆罪］（名）ひがごとのつみ。あしきつみ。

さか・し（しくしくしきしけれ）［賢］（形、二）㊀すぐれたり。かしこし。㊁つよし。いさまし。たけし。㊂智慧ありげに見ゆ。さかしらなり。―-が・る（らりるるれれ）［賢］（自、ら四）賢きふりをす。りこうぶる。十―-だ・つ（たちつつてて）［賢立］（自、た四）さかしがる。十―-びと［賢人］（名）さかしき人。

さが・し（しくしくしきしけれ）［嶮］（形、二）嶮岨なり。けはし。（險）。

さか-しほ（シーオ）［酒鹽］（名）物を煮（ニ）るとき、味を付くるために酒を加ふると。（酒醬）。

さか-しま［逆］（名）「さかさま」の轉。（倒）。十―-ごと［逆語］（名）忌語などにて、ものをうらうへにいふと。「諷歌―」。

さがし-もの［搜物］（名）たづねさがすもの。

十さかし-ら［賢］（名）もの知りたるふりをなすと。わきまへたるさまに振舞ふと。十―-が・る（らりるるれれ）［賢］（自、ら四）さかしがる。―-ぐち［賢口］（名）利口ぶりたる口前。十―-に［賢］（副）りこうぶりて。かしこだてに。

さ-がしら［座頭］（名）㊀首座の人。上座のもの。㊁芝居其他興行物などの一座の頭。

さか-しろ［酒代］（名）㊀酒を買ふ代金。さかだい。㊁雲助又は車夫などが、定めの賃金外に受くる餘分の金錢。さかて。（酒錢）。

さがし-ゑ［搜畫］（名）畫又は字の中に、或畫をかくし入れて畫（ガエ）きたるもの、これを搜（サガ）しあつるを一種の遊戲とす。

さが-す（さしすすせせ）［搜］（他、さ四）さぐりもとむ。もとむ。たづぬ。

さか-だい［酒代］（名）「さかしろ」に同じ。

さか-だち［逆立］（名）㊀さかだつと。「毛の―」。㊁しやちほこだち。

さか-だ・つ（たちつつてて）［逆立］（自、た四）㊀逆に立つ。（倒豎）。㊁おこり起つ。「―髮」。

さか-だな［酒店］（名）酒を賣る店。さかや。さかみせ。（酒舖）。

さか-だる［酒樽］（名）酒を入れ貯（ハク）ふる樽。

さか-づき［酒杯］（名）（酒坏（サカツキ）の義）㊀酒を盛（モ）りて飲む小さき器。古代は土器なりしが、後世は漆器・陶器又は金屬・玻璃などの製を用ふ。（盃、巵、盞）。㊁「さかづきごと」の略言。「夫婦の―」。―-あらひ（サイーア）［盃洗］（名）「はいせん」の一名。―-ごと［盃事］（名）㊀盃を取り交（カ）はす事。酒杯獻酬の儀式。㊁さかごと。さゝごと。酒宴。㊂親類を張るべき程のいはひ事。

さか-つぼ［酒壺］（名）酒を入るゝ壺。

さか-づら［逆頰］（名）鎧の頰當。―-えびら［逆頰箙］（名）自膩にて箙（エビラ）の弦も箱も巻きたるもの。轉じて、熊の皮にて作りたるを熊のさかづら箙といふ。

さか-て［酒手］（名）さかしろ。

さか-て［逆手］（名）逆に持つと。逆に取ると。「懷劍―に持ち」。―-なげ［逆手投］（名）相撲（スマフ）の手、敵の手を逆に取り、其體を脊負ふが如くにして投（ナ）ぐると。

十さか-とうじ［酒刀自］（名）酒をかもすとをつかさどる人。酒を造る職。（酒杜氏、酒造匠）。

さか-とげ［逆刺］（名）逆に向きたるとげ。

さか-どの［酒殿］（名）㊀酒を醸（カモ）す所。㊁神樂の曲の名。

十さか-どり［坂鳥］（名）朝早く塒（ネグラ）を出て、山を超（コ）ゆる鳥。「―の朝越えまして」。

さか-な［肴］（名）（酒魚（サカナ）の義）㊀すべて酒を飲むときに添へて食ふもの。下物。㊁食料とする魚。うを。―-いち［肴市］（名）「うをいち」に同じ。―-うり［肴賣］（名）魚を賣る人。さかなや。―-かけ［肴懸］（名）乾したる魚などを吊（ツ）りにつらぬきてさす藁づと。べんけい。―-がし［肴河岸］（名）「うをがし」に同じ。―-や［肴屋］（名）肴をあきなふ人又は家。

十さが-な・し（しくしくしきしけれ）［不祥］（形、二）善くなし。わろし。（不良、無善）。

さか-なみ［逆浪］（名）流の上方に向ひて打寄する浪。物にさからひて打寄する浪。さかまくなみ。

十さがな-もの［不祥者］（名）よからぬ者。「いと鬼々しう侍る―」。

〔さか-ねだり（名）逆さまに強請すると。

さか-ねぢ［逆捩］（名）㊀さかさに捩（ネ）ぢると。㊁人の攻擊を受け、却つて彼の缺點を探りて反對に詰（ナジ）ると。「―を食はせる」。

さか-のぼ・る（らりるるれれ）［溯］（自、ら四）（逆上るの義）㊀上流に向ひて上る。流に逆（サカ）ひて上る。㊁逆に進む。㊂既往又は根本にたどり及ぶ。

十さか-のぼ・る（らりるるれれ）［榮昇］（自、ら四）朝日うらゝかに上る。「朝日豐―」。

さか-ば［逆羽］（名）もぢれて逆になりたる羽。

さか-ば［阪刃］（名）薙刀などの刃のそりたる部分。

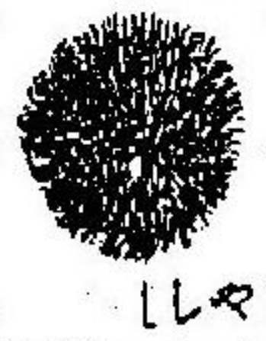
十さか-ばえ［榮映］（名）時に遇（ア）ひて勢榮ゆると。「彌―に、えかれてそ」。

十さか-はぎ［逆剝］（名）獸などを殺して後、皮を尻の方より剝（ハ）ぐと。

さか-ばしら［倒柱］（名）倒木の柱。

さか-ばた［酒旗］（名）㊀酒屋の看板の旗。（帘、酒旆）。㊁「さかばやし」に同じ。

さか・ばやし［酒林］（名） 酒屋にて、杉の葉を束ねて球狀にし、檐先に懸けて看板とするもの、昔時は大いに行はれたり。



［しやばかさ］

さか・ばりつけ［逆磔］（名） 武家時代の極刑、罪囚の身體を逆さまにして行ふはりつけ。

さかひ（イサカ）［界、境］（名） ㊀物と物と相接合する箇所。かぎり。「國の—」。㊁物と物と相分離する箇所。きは。「生死の—」。㊂區別又は制限。「禮を以て—となす」。㊃場所又は範圍。「悠々無爲の—」。

〔**さかひ**（イサカ）（接） 故に。因つて。（京阪地方の方言）。

さか・びたし［酒浸］（名） 酒の中に浸（ヒタ）すこと。

さか・びたり［酒浸］（名） ㊀酒の中に浸（ヒタ）ること。㊁常に酒を飲みてあること。

さかひ・ぢゆう（イサカ）［界重］（名） ㊀香匳盤の重箱、多くは入籠（イレコ）のつくりなるもの、和泉國堺の名産。㊁野菜などをきり溜（タ）めておく箱。きりだめ。

さかひ・め（イサカ）［界目］（名） さかひ。かぎり。きは。わかれめ。

さか・ふ（ウサカ）（ふはひふふへへ）［逆］（自、は四） ㊀したがはず。たがふ。もとる。㊁そむく。はむかふ。㊂常態を失す。秩序に反す。

さか・ふ（ウサカ）（ふはひふふへへ）［界］（他、は四） ㊀區限す。かぎる。さきる。㊁分離す。へだつ。はなす。「みくにを—富士のしぼ山」。

さか・ぶくろ［酒袋］（名） ㊀酒のもろみを入れてしぼる袋。㊁飲酒の量。

さか・ぶね［酒船］（名） 酒をしぼるために、醪（モロミ）を入れたる多くの酒袋を入るゝ槽、底に近き側面に孔ありて、しぼられたる酒これより出づ。（酒槽）。

廿**さか・べ**［酒部］（名） 古昔、造酒司に附屬せし職名、節會のときの酒をあつかふもの。

廿**さか・ほかひ**（カイ—ホ）［酒祝］（名） 酒を薦（スス）めて祝ふこと。

廿**さか・まく**（かきくくけけ）［逆卷］（自、か四） 流に逆（サカ）ひて波卷き上ぐ。水底より波湧きあがる。「—浪」。（洄瀾）。

廿**さか・まくら**［坂枕］（名） 古昔、踐祚・大嘗・新嘗・神今食（ジンコンジキ）などの大禮のときに、神に薦りし枕、床舖にして枕の方高きより名づく。

さか・また（名） 【動】遊水類に屬する哺乳動物、形狀いるかに似る、齒鋭くして、肉及脂肪多し、體長二丈許、背鰭又になりて逆立てるより名づく、我國西南海に多く産す。

さか・まつげ［倒睫］（名） さかさまつげ。

さか・みせ［酒店］（名） さかだな。さかや。

さか・みち［坂路］（名） 坂になりたる路。（阪路、嶮路）。

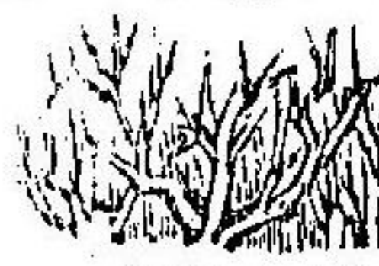
廿**さか・みづき**（名） 酒に醉ひて正體なきこと。

廿**さか・みづく**（かきくくけけ）（自、か四） 酒に醉ひて正體をうしなふ。

さか・むかへ（カエ—ム）［坂迎］（名） ㊀廿古昔、京都の人の、伊勢參宮より歸る人を逢坂山に出迎せしこと。せきむかへ。㊁轉して、旅路より歸る人を出迎すること。

さか・むけ［逆剝］（名） 指頭の皮のあれて逆に剝（ム）くること。さゝくれ。（逆臚）。

さか・もぎ［逆茂木］（名） 鹿の角の如くなりたる荊棘（イバラ）の枝を立て、籬（ヤラ）を結び、敵を防ぐ用とせるもの。もがり。（鹿砦）。



［ぎもかさ］

さか・もり［酒盛］（名） 酒を杯に盛り相獻酬して興ずること。酒食を設け飲食して互に樂しむこと。さかごと。さかづきごと。さゝごと。（酒宴、醼、醵）。

さか・や［酒屋］（名） 酒をつくり又は賣ることを業とする人。又、其家。

さか・やう（ヨウ—カ）［嵯峨樣］（名） 書法の一派、近衞流の末派にして角倉與市に始まる。

廿**さか・やか・す**（さしすすせせ）［榮］（他、か四） さかゆるやうにす。さかえしむ。

〔**さか・やき**［月代］（名） ㊀男子の冠の下の髮を半月形に剃ること。つきしろ。㊁後世、男子が額より頭の中央へかけて、髮を剃（ソ）りしこと、應仁の頃より武士常に冑（カブト）を著けしより起りし風といふ。

廿**さか・やまひ**（イ—ヤマ）［酒病］（名） ㊀酒の醉の日を超（コ）えて解けぬこと。㊁酒の中毒。

さか・ゆ（えええゆゆるゆれえよ）［榮］（自、や下二） 勢盛る。時めく。繁昌す。はゆ。「家—」。

さか・ゆく（かきくくけけ）［榮行］（自、か四） さかえゆく。

さか・よせ［逆寄］（名） 寄せ來る敵に向ひ、却りて此方より攻めかゝること。（逆襲）。

〔**さから**（名） きんちやくきり。（上總地方の方言）。

さから・ひ（イサカ）［逆］（名） さからふこと。

さから・ふ（ウサカラ）（ふはひふふへへ）［逆］（自、は四） さかふ。もとる。たがふ。

さから・ぶ［相良麩］（名） 麩の一種、すだれぶに似て厚し。

さかり［盛］（名） ㊀さかること。さかる時。㊁強壯なる時。壯年。「—の子」。㊂人の多く寄り集まること。

〔**さかり**（名） 畜類などの交尾の慾情。つるび。

さがり［下］（名） ㊀さがること。くだること。㊁物にかゝりて垂るゝこと。㊂まかり出づること。退くこと。㊃値の降ること。やすくなること。㊄勢衰ふること。㊅術劣りゆくこと。㊆時間の過ぐること。「七つ—」。㊇親船のかもじの稱。㊈昔時、穢多又は芝居者などの稱。

廿**さがり**［鋺］（名） つり下げて用ふる口の大きな釜。

さが・りう［嵯峨流］（名） 築山の造方の一派、天龍寺の開祖夢窓國師より創（ハジ）まれるもの。

さがり・くち［下口］（名） ㊀物價などの下がりかけたること。下落の徴候あること。㊁勢衰へ又は術劣りゆく端緒。

さがり・ぐも［下蜘蛛］（名） ㊀【動】蜘蛛の一種、腹大く脚長く、暗灰色にして白斑あり、巣より蜘蛛網を垂下し、小蟲などの觸るゝを縛（シバ）り捕ふ。㊁天井などより蜘網をひきて下りたる蜘蛛。

さがり・ごけ［下苔］（名） 【植】蘚類中地衣科に屬する植物、深山の樅栂などより下垂す、灰白色にして絲狀をなす。（松蘿、女蘿）。

〔**さかり・どき**（名） 畜類などの交尾期。

〔**さかり・に**［盛］（副） さかんに。

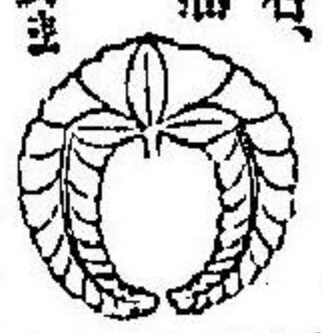
〔**さかり・ば**［盛場］（名） 人の多く寄りあつまる場所。「公園の—」。

廿**さがり・ば**（名） さげがみのさがり。「—いと清らなり」。

廿**さかり・びと**［盛人］（名） わかもの。壯年者。

廿**さがり・ふすべ**［懸疣］（名） 瘤の一種。（垂瘤）。

さがり・ふぢ［下藤］（名） 紋所の名、二房の藤の花を左右に垂れて輪を描（エガ）きたるもの。



［ぢふりがさ］

さか・る（らりるるれれ）［盛］（自、ら四） ㊀勢さきにおこりふるふ。おこる。㊁諸務繁昌す。はんじやうす。㊂時めきさかゆ。㊃流行す。はやる。㊄物事方にたけなはにてあり。

廿**さか・る**（らりるるれれ）［離］（自、ら四） はなる。へだゝる。とほざかる。「天—」。（放）。

〔**さか・る**（らりるるれれ）（自、ら四） 交尾す。つるぶ。つるむ。

さが・る（らりるるれれ）［下］（自、ら四） ㊀上より下へ行く。高きより低きへ行く。くだる。おる。㊁物にかゝりて垂（タ）る。「藤の房が—」。㊂値低くなる。やすくなる。㊃衰頽す。おとろふ。㊄あしくなる。又、へたになる。㊅後へしざる。しりぞく。「後へ—」。㊆退出す。まかる。㊇時過ぐ。

さか・ろ［逆艫］（名） 船の前後進退を自由にするため、船の舳にも艫に向けて櫓を立つること。

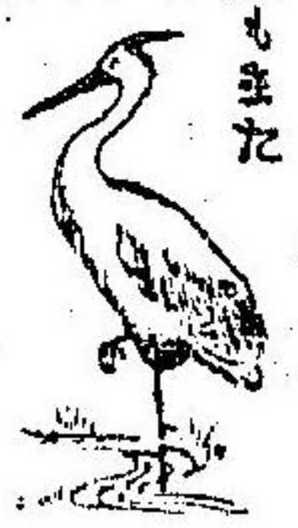
さかん［盛］（名） 「さかり」の音便。 **—に**（副） 勢よく。おほいに。つよく。おほく。

さき［先、前］（名） ㊀前なる部分。まへ。はな。「—になる」。㊁はし。すゑ。端末。「筆の—」。㊂進み行く方。將來。前途。「—のため」。㊃過ぎこし方。役方。過去。㊄あひて。せんぱう。「—の心」。㊅早きこと。さきんずること。㊆急務。「教育より—なるはなし」。㊇さきだち。さきて。さきがけ。 **—を あらそふ**［爭先］ 我劣らじときそひ進む。 **—を おふ** さきばらひをなす。 **—を はらふ** 前條に同じ。

さき［崎］（名） ㊀海中に突き出でたる陸地。みさき。（岬）。㊁突き出でたる山角。（碕）。

廿**さき**［幸］（名） さいはひ。さち。（福）。

さぎ［鷺］（名） 【動】涉禽類に屬する鳥、形鶴に似る、嘴は角質にして長く、頸・脚もまた共に長し、眼の周圍は羽毛なくして裸出するを常とす、水邊に棲息し魚類などを捕食す。（鵁、雪客）。 **—を からす** 理を非に又は非を理にいひまぎらするにいふ。



［ぎさ］

（**さぎ**［詐僞］（名） 眞實にあらざること。いつはり。

（**さぎ**［詐欺］（名） ㊀いつはりたばかること。あざむきだますこと。㊁【法】事實をいつはり又は隱蔽して、他人を錯誤に陷らしめて損害を加ふること。㊂詐欺取財の略言。

さぎ・あし［鷺足］（名） ㊀鷺の歩むが如き歩調、即ち、ぬきあし。㊁たかあし、たけうま。㊂田樂舞の一、たかあしにのりて行ふもの。

さき・おひ（オ—イ）［前追］（名） 貴人の通行などに、路行く人をはらふこと。さきばらひ。（喝道）。

さき・お・ふ（ふはひふふへへ）［前追］（自、は四） さきおひをなす。

さき・がけ［先駈］（名） ㊀最も早く敵中に攻め入ること。（先登）。㊁群に抽（ヌキ）づること。先んずること。「花の—」。（魁）。

さき・がし［先貸］（名） まへがし。

さき・かた［先方］（名） せんぱう。

さき・かた［先肩］（名） 二人して物を舁（カ）く時に、棒の前方を擔（ニナ）ふ者の稱。さきぼう。あとかたの對。

さき・がね［先金］（名） まへせん。前金。

さき・がひ（イ—ガ）［先買］（名） 他人の買はんとするものを先廻りして買ふこと。

さき・がり［先借］（名） まへがり。前借。

廿**さき・く**［幸］（副） さいはひに。

さき・くぐり［先潜］（名） 人より先廻りして、密（ヒソ）かに事をなすこと。

さき・くさ［三枝］（名） （幸（サキ）草の義、三莖の草を瑞祥とせる故事に出づ）【植】（い）一種の草、山百合に似て、一莖三枝に分かる。（福草、萬年松）。（ろ）「ひのき」の一名。 **—の**［三枝］（枕） 「みつ」に冠らする詞。

さぎ・ぐさ［鷺草］（名） 【植】玄參科に屬する草、枝は平臥し、葉は倒卵形又は箆形をなし、花は白色又は帶紫色を呈す、頸は平滑なり、觀賞用として栽培せらる。さぎごけ。さぎさう。（鷄腸菜）。

廿**さき・くさな**［蕣莧］（名） 【植】「みのは」に同じ。

さぎ・ごけ［鷺苔］（名） 【植】「さぎぐさ」の一名。

さき・ごろ［先頃］（名） 現在に近き過去の時。せん

だって。さきだって。このあひだ。さきつごろ。過日。

さきざきり（ーッ）［鷺草］（名）【植】「さぎくさ」の一名。

さきさがり［先下］（名）先頭の下方に傾きたること。「編笠を—にかづき」。

さきざき［先先］（名）㊀過ぎ去りし方。後方。過去。「—の例」。㊁進み行く方向。將來。前途。

さきし（くしき　けれ）［幸］（形、一）さいはひなり。やすらかなり。へいあんなり。ぶなんなり。

（**さぎし**）［詐欺師］（名）巧に人を詐欺して、財物をかたりとる人。

さきしやう（ヨウ　ーシ）［前生］（名）ぜんせ。ぜんしやう。「そのふはし、けふは此世」。

（**さぎしゆざい**）［詐欺取財］（名）【法】詐欺を以て、他人の財物又は證書類などをうばひとること。

さきすさぶ（ばびぶぶべべ）［咲進］（自、は四）さきみだる。

さきぞなへ（ナエ　ーゾ）［先備］（名）先頭に立つ軍隊又は艦隊。さきて。せんぽう。せんぢん。せんえい。（先手、先陣、前陣）。

さきだち［先立］（名）さきにたつこと。又、其人。

さきだつ（たちつつてて）［先立］（自、た四）㊀前に立つ。前に行く。㊁はじめとなる。第一となる。「—ものは金」。㊂首唱す。となふ。はじむ。「人に—」。（先行）。

さきだつ（てててつつるつれてよ）［先立］（他、た下二）さきだたしむ。

さきだって［先立］（名）さきごろ。さきつころ。せんだって。（先達）。

（**さきだてる**）［先立］（他）「さきだつ」の訛。

廿**さきたま**［幸魂］（名）さきみたま。

廿**さきちやう**（ヨウ　ーギ）［左義長］（名）古昔、正月十五日に行はれし禁裡の儀式、淸涼殿の庭に靑竹を立て、これを燒きて行はれたり。（爆竹）。

廿**さきつころ**［先頃］（名）（さきの頃の義）さきごろ。さいつごろ。（往日）。

廿**さきつとし**［先年］（名）（さきの年の義）さいつとし。（往年、前年）。

廿**さきつひ**［先日］（名）（さきの日の義）このあひだ。せんじつ。くわじつ。

さきて［先手］（名）さきぞなへ。前衞。先陣。先鋒。

さきどり［先取］（名）他人より先に取ること。——**とくけん**（ーツ　ト）［先取特權］（名）【法】債務者の財產又は權利に就きて、他の債權者を排して自分最初にこれを取得する特權。

廿**さきなむ**（まみむむめめ）［呵］（他、ま四）叱責す。さいなむ。さかなる。いさふ。

さきども［先供］（名）さきにたつとも人。

さきに［先］（副）まへかたに。以前に。（曩、嚮）。

さきのこり［咲殘］（名）後(オク)れてさける花。

さきのこる（らりるるれれ）［咲殘］（自、ら四）㊀後(オク)れて咲く。㊁咲きて久しく散らずにあり。㊂殘りて咲かずにあり。

さきのまりさし［鷺尻刺］（名）【植】（い）「ゐ」の一名。

さきのよ［先世］（名）㊀吾人の此世に生まれ出づる前の世。ぜんせ。㊁吾人の此世を去りて行く世。ごしやう。

さきのり［先乘］（名）行列のさきに立つ騎馬。（前驅）。

さきばおり［割羽織］（名）帶刀に便なるため背の中程の下を縱にさきたる羽織。ぶっさきばおり。

（**さぎはさん**）［詐欺破產］（名）【法】破產の宣告を受けたる債務者が、支拂停止又は破產宣告の前後を問はず、履行する意なき義務又は履行すること能はざることを知りたる義務を負擔し、又、債權者に損害を被らしむる意志を以て、貸方財產の全部若しくは一部を藏匿し轉匿し又は脫漏し、又は借方現物を過度に掲げ又は商業帳簿を毀滅し藏匿し又は僞造變造したること。

さきばしり［先走］（名）㊀さきばしること。又、其人。㊁肴又は蔬菜などの普通の期節より前に出づること。はしり。

さきばしる（らりるるれれ）［先走］（自、ら四）㊀他よりさきに走り出づ。㊁さし出て事をなす。

廿**さきはひ**（イ　ーワ）［幸］（名）「さいはひ」の原音。

廿**さきはふ**（ウ　ーワ）（はひふふへへ）［幸］（自、は四）（幸延(サキハフ)の義）幸運に逢ふ。よき仕合にてあり。さかゆ。「言靈の—國」。

廿**さきはふ**（へへふふるふれへよ）［幸］（他、は下二）幸を與ふ。

さきばらひ（イ　ーパ）［先拂］（名）㊀昔時、貴人外出の時に、前方の行人を追ひはらひしこと。みちむさへ。（喝道、警蹕）。㊁荷物又は信書を發送するに、其賃錢又は郵稅を到著先にて支拂はすること。「—の郵便」。

さきぶと［先太］（名）端末のふときこと。又、其物。

さきぶれ［先觸］（名）其事のある前より、豫(アラカジ)め觸れ知らすること。まへぶろう。（豫報）。

さきぼう［先棒］（名）さきかた。あとぼうの對。

さきほど［先程］（名）いまがた。せんこく。

さきぼそ［先細］（名）端末の細きこと。又、其物。

（**さきみず**）［先不見］（名）前後の思慮なく行ふこと。

廿**さきみたま**［幸魂］（名）人に幸を與ふる神のみたま。さきたま。荒魂の對。

さきみだる（れれるるるれれよ）［咲亂］（自、ら下二）盛んに咲きほころぶ。今をさかりと咲く。（爛漫）。

（**さきみだれる**）［咲亂］（自）前條の訛。

廿**さきもり**［防人］（名）（崎守の義）上古、筑紫の崎々を守りし海防兵、初は遠江以東の兵を以てこれに宛(ア)て、三年を一期として太宰府に駐屯せしむ、壹岐及對馬島のものは、島守(サキモリ)と記せり。

廿**さきやう**（キヤウ　ヨウ）［左京］（名）昔時、京都の朱雀大路より東の方の稱。うきやうの對。——**しき**［左京職］（名）古昔、左京の戶籍・租稅・訴訟等を掌りし官名。ひだりのみさとのつかさ。右京職の對。

（**さぎやうへんかく**）（ーギヤウ　ーヨウ）［佐行變格］（名）【文法】不規則動詞の一、語尾の「せ・し・す・する・すれ・せよ」と活用するものにして、す（爲）・おはす（坐）の二語に限れども、す（爲）が諸種の名詞及漢語と複合して、一動詞となれるもの多し。

（**さきよう**）［座興］（名）㊀一座の興に入るべき藝術又は遊戲。㊁一時のたはむれ。ちよっとのざれごと。

（**さきよく**）［叉棘］（名）【動】うに等の外面にある一種の棘、端に二三の肢ありて專ら全面の掃除をなし、或は食物を口に送る用をなす。

廿**さきら**（名）（「ら」は助辭）㊀辯舌あること。才氣あること。「—をみがく人」。「くち—をとぎて答へんとす」。㊁もの、はし。「ロ—」。（端）。

廿**さぎり**［狹霧］（名）（「さ」は接頭語）「きり」に同じ。

さきわく（けけくくるくれけよ）［咲分］（自、か下二）さきわけに咲く。

さきわけ［咲分］（名）一株の中に、種々の色の花雜(マジ)り咲くこと。又、其花の咲く草木。（爛斑）。——**もも**［咲分桃］（名）「げんぺいもも」に同じ。

さきわける［咲分］（自）「さきわく」の訛。

さきをつひ（イ　ーッ）［一昨昨日］（名）さきをとひ。

さきをとし［一昨昨年］（名）一昨年の前年。

さきをとひ（イ　ート）［一昨昨日］（名）一昨日の前日。

（**さきん**）［砂金］（名）「しやきん」に同じ。

さきんずる（ぜじずずるずれぜよ）［先］（自、さ變）（「先にす」の音便）他人より先に行く。他人より先になす。さきだつ。「—れば人を制し、後るれば人に制せらる」。

（**さく**）［柵］（名）㊀ませがき。ませ。㊁やらい。らち。㊂こおろ。とりで。㊃たな。棚架。

（**さく**）［昨］（名）きのふ。さくおつ。ぜんおつ。

（**さく**）［朔］（名）㊀月の第一日。ついたち。㊁支那の古代、天子季冬に來歲十二ケ月の曆及政令を諸侯に頒布せしこと。㊂北方。きた。「—風」。——**をうく**［奉朔］天子より頒布する曆と政令とを受くる義にして、諸侯又は屬國などが、天子の命令を遵奉してよく服從するにいふ。

（**さく**）［策］（名）㊀ふだ。簡札。㊁かきもの。文書。㊂とひ。問題。㊃命令書。又、辭令書。㊄はかりごと。謀略。㊅めとぎ。數譜。「—をかぞへ」。㊆くじ。又、かずとり。㊇むち。又、つゑ。「—を執る」。

（**さく**）［作］（名）㊀製作すること。又、製作物。㊁耕作すること。又、耕作物。㊂できばえ。こしらへかた。

（**さく**）［蒴］（名）【植】植物の種子を包(ツツ)める殼、あさがほの實の類。

さく（かきくくけけ）［咲］（自、か四）花の蕾(ツボミ)開く。ひらく。

さく（けけくくるくれけよ）［避］（他、か下二）㊀のがる。はぬやうに路を轉ず。受けぬやうに身を轉ず。よく。㊁まぬかる。㊂忌む。憚る。「さけて言はず」。㊃關係せず。あづからず。

さく（けけくくるくれけよ）［裂］（自、か下二）切れて分かる。破れ離る。

さく（かきくくけけ）［裂］（他、か四）やぶり離す。切り分く。ひきやぶる。（劈、剖）。

廿**さく**（けけくくるくれけよ）［離］（他、か下二）はなす。「天の原ふりさけ見ればかすがなる」。（放）。

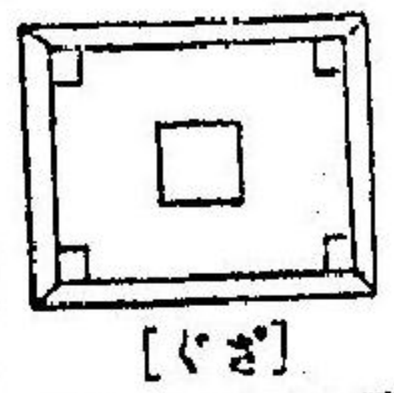
さぐ（げげぐぐるぐれげよ）［下］（他、か下二）㊀おろす。くだす。㊁物にかけて垂らす。㊂低くす。「價格を—」。㊃去ざうす。ひかす。去りぞく。

さぐ（げげぐぐるぐれげよ）［提］（他、か下二）手に持ち携(サゲ)ふ。

（**ざぐ**）［座具］（名）㊀座する時に敷く物。㊁僧侶の六物の一、勤(ツト)をするときに座下に敷く物にして、織物にてつくる。

（**さくい**）［作意］（名）㊀故(コト)さらに作り設けたる考。㊁製作の意匠。

（**さくいん**）［索引］（名）㊀さがし出すこと。ひき出すこと。㊁字書辭書其他諸種の圖書にて、其中の字又は辭若しくは事項をさがし出だすための案內。みだし。


［ざぐ］

（**さくか**）［作歌］（名）和歌をつくること。又、其和歌。

（**さくか**）［昨夏］（名）去年のなつ。

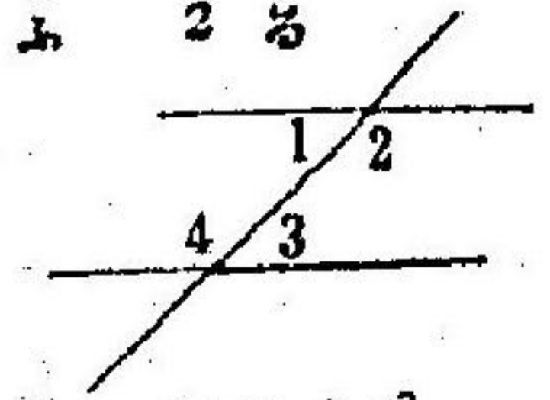
（**さくか**）［作家］（名）詩歌・小說・繪畫・彫刻其他すべて美術の製作者の稱。

（**さくかい**）［鑿開］（名）㊀きりひらくこと。㊁道路を開くこと。

（**さくかう**）（コウ）［錯行］（名）㊀すぢかひに行くこと。㊁かはるがはる行(ユ)くこと。又、たがひに交叉すること。

（**さくかく**）［錯覺］（名）錯誤ある知覺。

（**さくかく**）［錯角］（名）【數】一つの直線が二つの直線と交はるときに生ずる內角の中、初めの直線の反對側に於て相對する角、例へば下圖にて1と3及2と4とこれなり。



［さくかく］

（**さくがく**）［錯愕］（名）あわてふためくこと。おどろくこと。

（**さくかん**）［策簡］（名）㊀ふだ。㊁かきもの。

（**さくき**）［數奇］（名）不運のつゞくこと。

（さくさう（サッ）【索求】（名）たづねもとむること。

（さくきよ（サッ）【索居】（名）親しきものと分離して居ること。「離群―」。

（さくきよ（サッ）【削去】（名）けづりさること。

（さくきよく（サッ）【作曲】（名）詩歌を音樂にのぼせうたふやうに曲を作ること。又、其作りたる曲。

（さくくう（サッ）【鑿空】（名）㊀道をひらくこと。又、あなをあくること。㊁ありもせぬ理由をかんがへこしらふること。

廿さくくむ（むまみむむめめ）【裂】（他、ま四）さくむ。

（さくくわ（サッ）【蒴果】（名）【植】ゆり又はあやめ等の果實の如く、數個の子房相合して成れる果實の稱、熟すれば裂開す。

（さくくわ（サッ）【錯過】（名）あやまち。あくじり。

（さくくわく（サッ）【策畫】（名）はかりごとをたつること。手段をめぐらすこと。

さくけ【作毛】（名）稻の穗のみのり。

（さくげう（ヨウ-ギ）【昨曉】（名）きのふのあさ。

（さくげふ（ヨウ-ギ）【作業】（名）「さげふ」に同じ。

（さくげん【削減】（名）けづりへらすこと「政費―」。

（さくげん【策源】（名）戰地にある軍隊がすべての需用を仰ぐ背後の地點。――ち【策源地】（名）軍源と定められたる場所。

（さくご【錯誤】（名）あやまり。まちがひ。「擬律の―」。

（さくこん（サッ）【昨今】（名）きのふけふ。このごろ。

（さくさい【昨歲】（名）きよねん。こぞ。

（さくさく【嘖嘖】（名、副）㊀口々にいひたつるさまにいふ語。㊁爭ひいふさまにいふ語。

（さくさく【鑿鑿】（名、副）㊀言のよく適中するさまにいふ語。㊁鮮明なるさまにいふ語。

廿さくさく（名、副）最も愉快にたやすく嚙(カ)み又はさざみ得らるゝさまにいふ語。

廿さくさく（名、副）㊀前條に同じ。㊁固きものなどの多く集まるさまにいふ語。「金を―持つ」。

（さくざつ【錯雜】（名）入りまじること。みだれまじること。

廿さくさめ（名）さうとめ。

（さくさん【柞蠶】（名）【動】蠶の一種、黄褐色にして白色を帶ぶ、柞の葉を食し、褐色の繭を造る。

（さくさん【醋酸】（名）【化】刺戟性の香氣ある無色の液體にして酸性の弱き一鹽基酸、醋の主成分をなすもの、酒類を空氣中に放置するとき醱酵によりて生ず、近來多くは木材を乾溜して生ずる液より製す。――えん【醋酸鉛】（名）【化】酸化鉛を稀醋酸に溶解し蒸發して得たるもの、鉛糖に同じ。

（さくし【策士】（名）はかりごとに富みたる人。よく手段を案出する人。謀士。

さくし（くしき、けれ）（形、二）㊀こはれやすし。さけやすし。もろし。（脆）。㊁さがるなり。ささくなり。

（さくじ【作事】（名）家の建築。工事。普請。――かた【作事方】（名）德川時代に、公の普請を請負し人。――ぶぎやう（ヨウ-ギ）【作事奉行】（名）作事を監督する奉行。

廿さぐじ【三狐神】（名）農家にて祭る田の神。

（さくしう【昨秋】（名）去年のあき。

（さくじつ【昨日】（名）けふの前日。きのふ。

（さくじつ【朔日】（名）ついたち。

（さくしや【作者】（名）㊀詩歌・文章又は書物などをつくる人。（著作家、著述家）。㊁狂言作者の俗稱。

（さくじゆつ【作述】（名）作り述(ノ)ぶること。述作。

（さくしゆん【昨春】（名）去年のはる。

（さくしよ【策書】（名）㊀辭令書又は命令書。㊁文書又は記錄。

廿さくじり【抉】（名）さくじること。こましやくれ。

廿さくじる（らりるるれれ）【抉】（自、ら四）差出てゝなす。こざかしく振舞ふ。「いとさくじりおよすげたる人」。

（さくせい【作成】（名）つくりなすこと。こしらふること。――ち【作成地】（名）或ものをつくりなしたる場所。「證書の―」。

（さくせう（ヨウ-シ）【昨宵】（名）さくや。ゆふべ。

（さくせき【昨夕】（名）きのふのゆふ。ゆふべ。

（さくせつ【錯節】（名）いりまじりたる節、轉じて、混雜せる事件。

（さくせん【策線】（名）軍隊が作戰目標に達する線路。

（さくせん【作戰】（名）軍隊が敵に對して行ふ方法又は動作。――けいくわく【作戰計畫】（名）作戰に關する謀策。――ち【作戰地】（名）敵に對して作戰する地域。――もくへう（コウ-ヒ）【作戰目標】（名）作戰上軍隊が到達すべき目標(メジルシ)。

（さくぜん【索然】（名、副）興味なきさまにいふ語。（無味）。

（さくそう【錯綜】（名）くみあはすこと。交ふること。又、入りまじること。

（さくぢよ【削除】（名）㊀けづりのぞくこと。㊁とりけすこと。

（さくづ【作圖】（名）圖をつくること。圖をひくこと。――だい【作圖題】（名）【數】要する所の圖を作る幾何學的方法を求むる題。

（さくつう【鑿通】（名）ひらきとほすこと。又、うがちつらぬくこと。

（さくてう（コウ-サ）【昨朝】（名）きのふの朝。（昨晨）。

（さくとう【昨冬】（名）去年の冬。

（さくとく【作得】（名）田畝の收穫の中より納租したる後の得分。（收穫、所得）。

さくなげ【石楠花】（名）【植】「しやくなげ」に同じ。

廿さくなだり（名）谷川の水の激(ハゲ)しく落ち來るさまにいふ語。「―に落ちたぎつ」。

廿さくなんさ【石楠草】（名）【植】「しやくなげ」の古稱。

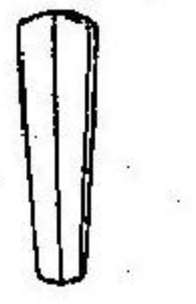
（さくにん【作人】（名）㊀製作したる人。㊁耕作する人。

（さくねん【昨年】（名）今年の前年。こぞ。きよねん。去年。

さくば【作場】（名）耕作する所。田畠。

（さくばう（ウ-ホ）【朔望】（名）朔即ち陰曆の一日と望即ち十五日と。――げつ【朔望月】（名）【天】太陰月に同じ。

廿さくはうし（ウ-ホ）【笏拍子】（名）神樂の節を擊つ具、笏を中央より切斷したるものにして、二枚相叩(タタ)きて音を發す。はうし。しやくびやうし。



〔さくはうし〕

（さくばく【索寞】（名）さびしきこと。

廿さくはち【尺八】（名）「しやくはち」に同じ。「大ひちりき、―のふえなどの」。

（さくはつ【炸發】（名）火藥の發火すること。

（さくばん【昨晚】（名）きのふのくれ。さくゆふ。昨夜。（昨夕）。

（さくひこんぜ【昨非今是】（名）（きのふは非にしてけふは是なる義）境遇の一轉又は性行の一變して、心の安慰を得たること。

（さくびやう（ヨウ-ヒ）【作病】（名）いつはりの病氣。けびやう。

（さくひん【作品】（名）製作したるしな。

（さくふう【朔風】（名）きたかぜ。北風。（寒風）。

（さくぶん【作文】（名）文章を作ること。又、作りたる文章。

（さくへい【朔幣】（名）ぬさの一種。

（さくべい【索餅】（名）麥粉と米の粉とを煉(ネ)り、繩の如くねぢりたるもの、古昔、陰曆七月七日に、瘧よけのまじなひとて、內膳司より禁中に奉れり。むぎなは。

（さくへいもん【朔平門】（名）古昔、內裏の外廓十二門の一、北方にあり。

（さくぼ【醋母】（名）【化】醋酸(サクサン)の醱酵する際に生ずる一種の黴菌。

（さくぼう【策謀】（名）はかりごと。

（さくほく【朔北】（名）きた。北方。

（さくまう（ウ-モ）【作毛】（名）稻の穗(ホ)のみのり。さくけ。

廿さくむ（むまみむむめめ）【裂】（他、ま四）踏み分く。ふみつく。

（さくめい【策命】（名）命令書。辭令書。御沙汰書。――し【策命使】（名）策命を奉じて行く使者。

（さくもつ【作物】（名）田畠に植ゑ作る物の總稱。

廿さくもづき（名）陰曆五月の異稱。

さくもの【作物】（名）㊀「さくもつ」に同じ。㊁こしらへ作りたる物品。

（さくもん【柵門】（名）柵の入口の門。又、城塞の門。

（さくや【昨夜】（名）よべ。さくゆふ。（昨晚）。

（さくやく【炸藥】（名）砲彈の內部に裝塡して、彈體を破壞せしむる發火藥。――しつ【炸藥室】（名）砲彈の炸藥を裝塡する所。

（さくゆふ（ユウ）【昨夕】（名）きのふのゆふべ。さくせき。

さくら【櫻】（名）㊀【植】薔薇科に屬する木、花は五瓣淡紅色にして最も美麗なり、變種多けれど何れもやまざくらを原種とす、我國の名花にして觀賞用として珍重せられ、又、材木は版木其他彫刻等に供せらる。㊁紋所の名、櫻花を正面に觀たるさまを描(エガ)きたるもの。

さくらあめ【櫻雨】（名）櫻の咲く頃にふる雨。

さくらいり【櫻煎】（名）一種の料理、蛸(タコ)を五分許に切り、たれみそにて煮たるもの。さくらに。

さくらいろ【櫻色】（名）㊀櫻の花の如き色。うすくれなゐ。淡紅色。㊁廿「さくらがさね」に同じ。

廿さくらがさね【櫻襲】（名）かさねの色目、表は白にして、裏は濃き蘇芳(スハウ)色なるもの。

さくらかのこ【櫻鹿子】（名）櫻色のしぼり。元祿頃流行せしもの。

さくらがひ（イ-ガ）【櫻貝】（名）【動】辨鰓類中同柱類に屬する軟體動物、介殼は白色又は淡紅色にして美麗なり、造花等を製するに用ふ。

さくらがゆ【櫻粥】（名）「あづきがゆ」の一名。

さくらがり【櫻狩】（名）櫻花をたづね歩きて、遊び暮らすこと。「―雨は降り來ぬ」。

さくらぎ【櫻木】（名）【植】「さくら」に同じ。「花は―人は武士」。

さくらぎん【櫻銀】（名）德川時代の銀貨の一、櫻の刻印を打ちたるもの。

（さくらく【錯落】（名）㊀入りまじはること。㊁まばらに散らばること。㊂杯の一種。「金―」。

廿さくらぐさ【櫻草】（名）【植】「さくらさう」に同じ。

さくらさう（ウ-ソ）【櫻草】（名）【植】櫻草科に屬する草、山野に生ず、葉は卵狀心形をなし、花莖は長くして、頂端に繖狀の花序を生ず、花は紅紫色又は白色にして、其樣櫻花に似たるより此名あり、觀賞用として栽培せらる。（[illegible]）。

さくらずみ【佐倉炭】（名）下總國佐倉地方より出だす炭、くぬぎを蒸燒にして製したるもの。いけだずみ。（櫟炭）。

さくらだ【櫻田】（名）櫻の多く咲きたる所。

さくらだひ（イ-タ）【櫻鯛】（名）㊀櫻の花の咲く頃に捕ふる赤鯛。㊁安藝・周防の近海にて捕る鯛。